生田春月全集

第四巻

相寄る魂（前）

新潮社

目次

相寄る魂

前編

相寄る魂（前編）

不幸なる青年の物語

この書の執筆中にみまかり給へる祖母上の靈前にさゝぐ

第一巻

二つの湖水

底なき鏡の
池水(いけみづ)に
影いと暗き水柳(みづやなぎ)
その柳には風が泣く。
いざや夢見ん二人(ふたり)して。

ポオル・ヴェルレエン
永井荷風氏譯

一

生きとし生ける人の胸に
限りも知れぬ寂しさが、
雲のごとくに湧くときは、
離れ離れし人も相寄る。
寂しき心、この心
痛み傷つき、相寄れば、
冬枯の野も花咲かん、
花は心のまことのみ。

日本地圖を開いて、裏日本の國々の上に目を注いだ人々は、そこに二つの湖水の連結してゐるのを見出すであらう。その湖水は外側の方を中海と呼び、內側の方を宍道湖と呼んで、一は伯耆と出雲の二つの國によつて圍まれ、一は出雲の國の中央に橫はつてゐる。中海は圓周十六里、地藏岬に於て盡きる出雲の長島と、その內側に美保の關と相對して一帶の海峽を形造つてゐる境の港に於て盡きる伯耆の夜見ヶ濱とに抱擁せられて、そこに弧形の碧水を湛へて、湖水と云ふより寧ろ大きな入海と呼ぶべきで、その西方の宍道湖と相連結するところに松江の市街を控へ、それより東に馬潟・揖屋、荒島、安來などの小港を連ねて、東南に米子の市街を控へ、その間を小蒸汽船が絶えず往復し、それはまた境・美保の關の方にも往復して、湖中の夜見ヶ濱寄りに橫はつてゐる大根島、牡丹の名所として知られてゐる

孤島をも訪れるのである。

夜見ヶ濱はその幅一里、延長五里に及んで、深く外洋に突出して、宛かも天の橋立を出來るだけ壯大にし、豪放にした景色を呈する一個の細長い半島で、そのかみ數多の群島を連ねてゐたのが、日野川の沙壤に埋められて出來たもので、北に日本海の怒濤を受けて、遙かに隱岐の島の青螺に對し、南に中海の穩波を隔てて、出雲の岸をのぞみ、更にその背後に遠く中國山脈の蜿蜒たる山骨を望むべく、その起點に位する米子の市街とその尖端なる境の港とは、未だ鐵道の敷設せられなかつた時分には、一條の河流と、一條の往還とを以て連結せられてゐたのである。そしてその往還の兩側に波のやうに起伏し、木の葉のやうに相寄つてゐるものは、或ひは砂丘、或ひは甘藷畠、綿畠、桑畠、或ひは小村落、或ひは小河流、いづれを見ても松、ただ松、見渡す限りの松林で、その松林の中を歩いて行けば、いかに蒸し暑い夏の日でも、寒いぐらゐの涼しさで、濱風は高い松の梢から梢に吹き亙り、宛かもその曲りくねつた幹を傳うて下りて來るかのやうに、その颯々たる響が、凄じく鳴つてゐる外洋の音と入り亂れて、或る時は耳元近く爽かに、或る時は遠く微かに、或ひは急に或ひは緩かに、しかもこの海と松との合奏が、晝より夜へ夜より晝へと縫目もなしに吹き貫くところには、五六本の松の樹に橫木をわたして風防けをして踞つてゐる農家までも風に搖れてゐるやうに思はれ、砂地に生え出した雜草のむれは、內側の方へと身を傾けて、その一葉一葉が餘りに烈しい感動に壓倒せられた心臟のやうにわなわなと顫へてゐる。

木の間に見える外洋は、恐ろしいほど靑く、紺碧の面を延べて、波が高い、高く捲き上つて白い波がしらを蛇の鎌首のやうに擡げたと思ふと、いきなり崩れ立つて、颯つと深く身を潛める、また新しい波が盛り上つて來る、その間を白帆が一つ辷つて行く、弓形をなした濱のその對岸となつてゐる淀江、御來屋の港の方へ辷つて行く、その帆影がいつか視野を沒したかと思ふと、彼方水平線上に、丁度大小二つの藍玉をころがしたやうな隱岐の島と、御來屋の方

の岬との中間に一條の煙があがつて、それがいつしか一つの黒點となり、黒點は擴大して、つひに一隻の汽船の姿と、敦賀舞鶴の方から境へ入つて來て、更に下の關を經て大阪に至る日本海航路の汽船の姿となつて現はれるのである。そしてその淀江、御來屋の眞上には、これ等凡てのものに君臨せんとするかのやうに、いかにも休火山らしい一つの高山が靜かに聳立つてゐる。それは伯耆富士の名を以て呼ばれてゐる大山、松江の大橋の上から眺めるとき、その山容が美觀の絶頂を示すの故を以て、出雲の人々が敢て出雲富士と呼ぶ大山の秀峰で、形は全く富士山とおなじで、頂上からのなだらかな線は左右にすつとさばかれてゐる。その頂きにはどんな夏の盛りでも雪が殘つてゐて、白く輝いて、青味を帶びた谷の間に宛かも瀑布が懸つてゐるやうである。そしてこの土地全體がその裾野であつた、何處へ行つてもこの山の見えないところはない、そしてこの山の見える限りの土地の人々の心は、この山によつて結び付けられてゐるのだ、それはこの土地の脊髓をなしてゐるのである。百姓達はこの山にかかる雲の模樣を見て明日の天候を占ひ、その降り積んだ雪の工合によつて、來む年の收穫を卜するのである。また、小學校の訓導はこの山を指してその教へ子たちを勵まし、彼等の小さな頭にはその度びに華々しい空想の火花が閃くのである。謂はばこの山はこの土地全體の魂なのである。

　松林が、横へは殆んど無限に連つてゐるやうに思はれるけれども、縱にはさまでの深さを取つてゐない松林が盡きると、そこには白沙だけが殘つて、やがて海と相接するところの、ほんのちよつと盛り上つた傾斜にも、何處となくがつしりした、漁夫の體格を想はせるやうな磯草が思ふさま生え出してゐたりする濱邊には、そこここにあだかも蟹のやうに網小屋が散らばつてゐて、殆んど砂に埋もれんばかりの傾いた藁葺きのその下には、投げやりに吊し連ねた赤黒い網の影が見え、海藻などの附着したその網からは強い潮の香りが漂うてくる。中には砂にめり込ませて、小舟が引き上げてある、小舟の上に網を擴げて乾してあるところもある。かうした網小屋の暫く杜絶えた廣い砂濱に、午

近い日影が沁み入つてゐて、キラキラと白砂をきらめかしてゐる。海にも日の光りが一面に鮮かにあたつて、昨日の荒れで透明になつた沖一杯の空氣がそよそよと吹く風に搖られて、快活な光と水との世界をつくつてゐる。水際には海草だの、板ぎれだの、炭の屑だのが打上げられて、濱邊には漁夫の影はなかつたが、一本の磯馴松の下に一つの白い校旗がびらびらと飜つてゐる。その渚には丁度貝殼をばら撒いたやうに、小學校の生徒が三百人餘り、もう列を解かれて遊び戲れてゐる。子供たちは好き氣儘に縺れ合つて、おとなしい方の子供たちは四五人も一團りになつてせつせと砂を掘つて池をこしらへたり、また、いろんなものを集め廻つたりしてゐるが、いたづらな方の子供たちは相撲を取つたり、駈けつくらをしたり、また、昨夜の怒りがまだ十分には鎭まり切つてゐないといふやうに、沖の方から一きは大きく層をつくつてうねつて來て、ざぶりと砂の上廣く嘗めまはす波の白い舌を追つたり逃げたりして、海をからかふのがいかにも面白くて堪らぬやうである。その幾つとも知れぬ目まぐるしいぐらゐ飛び廻つてゐる小さな足の集りの中に、とりわけ美しい、白い蝶のやうに可愛らしい女の兒の足が動いてゐる。その幅の狹い甲高な二つの敏捷な足は、友達よりも深く遠淺の波打際に踏出して、瑪瑙のやうな恰好のいい爪を有つた指と丸つこい踵とで砂をしつかり踏みしめて、時々兩手で膝のあたりまでからげ上げてゐる着物までも濡らしに來る波が、急に氣變りしたやうに出しぬけに颯つと引いて行く途端に、その砂がずるずると十本の指の間に崩れて、がくりと足がさらはれさうになるその折りのこそばゆいやうな感覺が氣持がよくて堪らないやうに、肩のあたりをゆすぶつて、晴々した聲で笑つてゐると、おづおづと渚へ出ては、まるで波が蛇ででもあるかのやうに、波が來る度びに、キヤツキヤツと言つて怖けて飛び退いてゐた女の兒の一人が、その背後から、

「敏子さん、危いわ、まあそんな事をして！」と呼びかけた。するとその女の兒は上氣して花のやうに眞紅になつてゐるその美しい顏をくるりと此方へ振り向けて、

「大丈夫よ、こんな波ぐらゐ！」と言つて、わざと足をばちやばちやさせると、波が面喰つたやうに泡を吹いて、飛沫が八方に飛び散つた。
「危い、危い！」と叫んで、一人の教師が渚へ走つて來た。「そんな遠くへ行つちやいかん！　今日は波が荒いのだから！」と言つて。波にずるずる引きずられて行くやうに、遠淺の海の股のあたりまで波の來るところまで出てゐる一人を呼び返した。その男の兒は驚いたやうに色の黒い四角な顔を振り向けた拍子に、又もひよろひよろとして、今少しで倒れさうになつたのを、踊るやうな身體つきで、片足でひよいと踏みこたへて、間の惡さうな、ずるい笑ひを浮べながら、渚へ引上げて來た。
「小山ッ！　またいかんぢやないか、おまへがそんな事をするから皆が眞似をするのだ、波に持つて行かれたらどうする？　見ろ、昨夜の暴風雨のあとだから、あんなに波がまだ荒いぢやないか、昨夜は難船があつたんだぞ！」と脊の高い、痩せぎすの神經質らしいその先生は、顳顬に靑い筋を浮かせて、かの少年を叱り飛ばした。
「先生、難船は何處にありましたか？」
「大きな船ですか、相良先生？」
口々にこんなに囀りながら、そこらにゐた小さな生徒たちは先生のまはりを取卷いた。そこにはいつか二人の先生が立つてゐた。
「大きな帆前船だ」と言つて、相良先生はそこにゐたずんぐりした毬栗頭の石田先生の顏を促すやうに、また差し示すやうに見た。話し好きな石田先生は生徒たちの顏をずつと見廻して、尤もらしく頷いて、
「加露の方から境へ入つて來る船だつたのだが、左様、丁度この沖あたりでひどい波をかぶつて帆檣は折られるし、船は傾くし、餘つ程危いところだつたのだが、幸ひ來かかつた大阪商船會社の汽船に助けられて、境へ曳いて行つて

貰つたといふことだ。それは大した事はなくてよかつたが、この先きの大篠津方面の漁夫の舟で一隻沈んだのがあるといふことで、二人乘つてゐた漁夫のうち、一人は助かつたが、一人の年の若い方が溺れ死んだといふことだ。まことに氣の毒な話だ」

子供たちは急にひつそりとなつて、言ひ合せたやうに沖の方を眺めて、難破船の影を眼で探したり、また何か渚にその難破の名殘りでもありはしないかと云つたやうに、好奇の眼を輝かせたりした。

昨夜はかなりひどい嵐であつた。明日の遠足を樂しみに待ち構へてゐた生徒一同は、頻りに母を困らせたり姉を困らせたりして、ぐづりながら、心配しながら寢床へ入つたのであつたが、朝起きて見ると、空は拭つたやうに晴れ渡つて、雨はそれほど甚くはなく、路はそんなに惡くもなつてゐなかつたので、やつと安心して登校したのであつた。學校では少し遲くなつて出發した。

學校ではよくこの濱灘へ遠足をした。夜見ヶ濱一帶の地はかう呼ばれてゐるのである。その日生徒が毎日より早く學校へ行くと、もう澤山集つてゐて、學校の前の何々神社の境内や石段の上などでわいわい騷いでゐる。そのうち先生たちも出て來て、校庭で整列して、愈々出發の命が下る。校旗を先頭に掲げて、小さな子供たちは、めいめい萠黄の辨當袋を背中に斜に負うて、樂しげに町を練り出す。沿道では家毎に人が出て見てゐる。自分の家の兒を見出すと、聲を掛けたり、急いで菓子を持たせたりする。豪家の兒は自分の家の前にさしかかると。「ここが僕の家だよ」と友達に威張る。貧乏人の兒は、家の前を反對の方を向いて知らぬ顏して通る、若し親や家人が呼びかけでもしようものなら、泣き出したいやうな顏になつて、極めて冷淡な曖昧な返事をして、一刻も早く通り過ぎようと焦るのである。

野へ出ると風が吹いて、秋の草木や土の匂ひがして、路傍には小さな花が群がつて、恐ろしさうに此方を覗いてゐる。橋を渡ると水は涸れてゐる。誰れやらが帽子を落したと言つて騷ぐ。「押すな、押すな」と言つて、身體全體で後

へ押し戻す、また押し返す、わッと鬨の聲を擧げる。百姓が呆れたやうに此方を見てゐる。甘藷や大根などを掘り出しては生で嚙じる。畑を踏み荒して、百姓に呶鳴られることもある。遠慮會釋もなく稲の穂を手でこき落しながら行く。この遠足の當日こそ、百姓に取つては厄日である。かうして小躍りしながら行くうちに、松の樹がだんだん多くなると、「やア、松林だ」と一人が頓狂な聲で叫び立てる。女の兒は近くの方から一本一本松の樹を數へ立てて喜んでゐる。松林を越えて、海が目前に展開するのを見ると、彼等の喜びは絶頂に達する。そしてもう先生たちも砂濱に彼等を解放するの外はなくなつてしまふ。

然るに、かうした樂しい群れとはかけ離れて、純一は一本の松の樹の根もとにひとり寂しさうに凭れかかつて、ぼんやり皆の遊んだり笑つたりしてゐる樣子を眺めてゐた。これが彼のいつもの癖であつた。小山だとか乘本だとかいふ惡戯ッ子が無理やりに連れに來るやうな事さへなければ、いつも片隅へ引込んで、とりとめのない空想に耽つたり、或ひは仲善しの中野信太郎と一緒に子供の雜誌などを見ながら靜かな話をしてゐるのであつたが、今日はその中野は用事があると云つて來なかつたので、彼はとりわけ寂しく心細い氣持であつた。それに純一は此頃父が長いこと大阪へ行つて歸つて來ないで、母や姉ばかりの家庭の中に、何だか心配な事でも起つてゐるらしい落着きのない不安な動搖を何となく感じてゐるので、その心細さは一層であつた。彼の憂鬱さうな靑白い細そりした顏には、何となく暗い影がさして、秀でた眉には寂しい色が漂つてゐた、けれどもその眉の下の濕んだやうな黑目勝ちの眼は、いつも驚いたやうに大きく見開かれてゐながらも、そのままやつぱり夜の續きの夢を見てゐるやうに見えた、彼の全體の樣子の中には、子供らしい無遠慮な晴れやかさは見出されなかつた。

先生たちが懷中時計を取出して、暫く談し合つて松林の中へ急いで入つて行くと、「集まれッ！」と軍曹上りの體操の先生が、大きな聲を張り上げて呼んだ。と、毬栗やお下げの小さな頭が、濱から

渚から、松蔭から、松林の中の少し小高くなつたところに、自分たちの受持先生のまはりに集つて來た。純一も一番後から駈けつけると、先生は彼等を整列させて、人員を調べて、それがすむと、フロックコオトを着た嚴めしい髯を生やした校長先生がつかつかと前へ出て、

「皆さん、もうお午になつたからお辨當を食べてもよろしい、めいめい好きな處へ行つて食べてよろしいが、餘り遠方に行かないように」と言つた。そして先生たちは大きな根上り松の下にかたまるし、生徒たちもそのあたりの砂の上に胡坐を組んだり、松の樹に凭れたりして、さも待ち構へてゐたやうに、大急ぎで辨當を開けた。

純一も自分たちの組の者の多い處へ行つて、背の包みの結び目を解かうとしたが、なかなか解けなかつた。焦々しながら、やつとの事で解いて、はづした包を一振り振ると、それはこの土地で普通用ゐる胴卷のやうな辨當包なので卵を呑んだ蛇のやうに空にのたうつたと思ふと、中の辨當行李がくくつてなかつたので、落ちたはずみに、ぱツくり砂の上で二つに開いてしまつた。折角大好きな海老だの高野豆腐だの刻烏賊だのが入つてゐたのに、それが皆砂と一緒になつてしまひ、握飯はころころと轉げて砂まみれになつてしまつた。

「やア、龍田が辨當をこぼした、旨い事こぼしたぞ!」と、かの色の黒い四角な顏をした小山といふ少年が笑つた。皆が此方向いて笑つた。小山はいきなり駈け寄つて來て、

「砂團子だ、砂團子だ、砂團子は要りませんか!」と叫んで、その砂まみれの握飯を指でヒョイと轉がしたので、皆はまたどつと笑つた。純一はぼんやりしたやうに、そこに立つてゐた。

彼の背後の方で辨當を遣つてゐた女生徒たちも面白さうに此方へ振返つて、中にはわざわざ及び腰になつて此方を見てゐるものもあつた。するとその中から、一人の女の兒がいきなり立つて、此方へやつて來て、

「笑ふ奴はみんな意地惡よ、心配しなくたつていいわ、あたしの辨當を半分わけてあげるから。あたしのには御馳走

があるのよ、さア、その辨當行李をお出しなさいな」と言つて、純一がおづおづと默つて拾つて差出した辨當行李の砂の着いてゐない蓋の方に手際よくおかずを挾んで入れかけた。

「やア、夫婦ごつこを始めたぞ！」とかの小山が叫んだ。そして、

「今蒲鉾を入れます」とか、「次ぎには椎茸を入れます」とか、一々叫び立てるので、まはりの子供たちは益々笑はずにはゐられなかつた。

「どうしたのだ？　どうしたのだ？　騒がしいぢやないか！」と石田先生は言つて、向うの根上りの松の下からこちらの方へやつて來たが、それを見ると、

「何だ、辯當を落したのか、失策つたな、だが心配するな」と言つて、その受持の女生徒に向つて、

「敏子さん、なかなか御馳走が豐富ですね、どうも有難う、握飯の方は先生のをわけてやります」と言つた。敏子は默つてお辭儀をして、すまして自分の場所へ歸つて行つた。

先生のかうした處置と敏子の親切とで心持の動亂を恢復した純一は、ぼんやり敏子の後を見送つて、思はずその女の兒は何處の子であらうかと考へた。

「さあ、おまへ此方へ一緒にお出で」と石田先生に言はれて、きまり惡さうにもぢもぢしながら、その後について先生たちの處へ行くと、そこにゐた受持の相良先生が、石田先生に禮を言つて、彼を自分の方へ呼んでその辨當をわけてくれた。

純一は先生たちの後に小さくなつて辨當を食べたが、然し、かの女の兒のわけてくれたおかずだけはむざむざ食べる氣になれなかつた、食べてしまふのが惜しかつたのである。彼は「笑ふ奴は意地惡よ」と言つて自分を見た女の兒の涼しい切長の眼を忘れ得なかつた。それは何だか不思議な光を有つてゐた、眼を合せた瞬間、彼は生れて初めて何

とも言はれない甘い戰慄が身體中に閃き渡るのを覺えた、彼はぢつと見た、謂はばその中に自分の運命の磁石でも据ゑられてゐたかのやうに。そして漠然とではあるが、一生忘れえない運命的な愛護を受けたのだと感じた。彼は自分でもわからない漠然とした豫感を本能的に感じたのであつた。

その日、彼は到るところで彼女の姿を探した。そして彼女はまた實際到るところで見付けられた。彼女は常に女生徒たちの中で目立つて見えた、丁度雜草の中に一もとの白い花が咲いてゐるやうに。彼女はいつでも遊びの中心になつてゐた、その聲は金のやうに爽かに響き、その言葉は奇妙にも出雲の人の美しいアクセントを帶びてゐたし、その身なりにもその樣子にも、何處となく他の生徒と違つた氣の利いたところと、人なみ立ち勝つた才氣とが見えてゐた。然し彼女の方では、別に純一に注意する樣子は見えなかつた。

純一は何遍も何遍も心で、「笑ふ奴は意地惡よ」と言つた時の女の兒の聲と身振りとを思ひ出して、何處の子であらうと思ひつづけた。

二

純一の家は米子の町にあつた、けれども彼の父母はその町の人ではなかつた。その町から二里半ほど北の方に當る、日本海に面した小さな淀江の町の人であつた。彼の父は二十幾歳の時妻を娶つてから幾何もなくして、この町へ出て來て、南といふ造酒屋をしてゐる親戚の支店を開いた。そして間もなく長女の梅子と續いて純一とが生れたのである。純一の出來た時分には、商賣は隨分繁昌して、彼の父は同じ町内の一層大きな家に引越して、丁度南の家で造酒屋を廢めて質屋をすることになつたので、その道具をそつくり讓り受けて、自分で造酒屋を始めて、出雲地方にまで澤山の支店を出したりして、手廣く商賣をするやうになつてゐた。

純一は七つの歳まで祖母の手で育てられた。祖母は純一の母親と折合ひが惡くて、ひとりで灘町といふ處に支店を出してゐたのである。それは彼の生れた家が同じ市街でも殆んど東の果てにあるのに、殆んど西の果ての中海沿ひにある町で、その間は十何町もあるのだけれど、純一が四歳の時、手代の一雄といふのに手を引かれて、小さな足に紅い緒の草履を結び付けて貰つて、よちよちと歩いて來たと、祖母は後にいつも彼に話して聞かせた。祖母は多くの祖母と同じやうに、或ひは寧ろそれ以上に、彼を目の玉のやうに可愛がつて、あらん限り甘やかして育てた。祖母は夜よく純一の父の家へ話しに行つては一時頃になつて歸つて來る時、純一が泣いてゐはしまいかと氣が氣でなく、立町邊りまで歸つて來ると、果して子供の泣聲がするので、大急ぎに急いで歸つて見ると、いくらすかしても泣き止まないので、女中が持て餘してゐるところだつた、こんな事も度々あつたと話した。女中にはおかねといふ親戚の娘がゐた事もあるし、おたかといふのもゐたが、後にはその給金をも惜しんで、女中も廢め髮も自分で結ふ位にしたので、その忙しさは目の廻る程であつた。かうして儲けた尠からぬ金は、兎角、純一の父の資金や、税務署に納める税金の不足額の足し前になる事の方が多かつた。

純一は綺麗な、そしておとなしい兒であつたので、人に可愛がられた。祖母の商賣は單に酒を賣るばかりでなく、いろいろな肴をこしらへて、手輕に酒を飲ませたので、その持前の程のよさ、愛想のよさと、酒肴の旨さとが評判になつて、いろいろな人が酒を飲みに來た。それ等は多くは單に濱と呼ばれる夜見ヶ濱の村々から米子の町に野菜などを賣りに出たり、買物に出たりする人々であつたが、いづれも純一を可愛がつた。が、殊に彼を愛したのは後藤倉庫の仲仕頭であつた庄造さんと呼ぶ人の善い大男で、自分の家に同じ年頃の子供もあつたのに、純一に菓子だとか、綺麗な繪本だとかを買つてくれたり、肩車に乘せて賑かな處へ連れて行つてくれたりした。或る時妙なものを見せてくれた、子供は一面にきらきらと輝く廣い不思議なものを見た。それは海であつた。庄造さんはいつも、

「坊ちやん、えらくならんぢやいけんぜ」と口癖のやうに言ふのであつたが、今一人、濱から出て來る人で、庄造さんとは反對に猿のやうな顏をした小男で、出て來る度びにその時々の果物などを持つて來てくれた、その村の名を取つて福吉村と呼ばれてゐた人はまた、

「この兒はえらいものになるぜ、眼が異つとる」と言つた。祖母はそれが嬉しくてならないのであつた。濱の女たちも彼を可愛がつた。濱の女たちは朝早く負籠に一杯野菜物を入れて町へ出て來て、それを必要なものに換へて午後に歸つて行く。濱の女は荒つぽい、酒も飮めば唄もうたふ。中にはそんな事が面白くて、立派な家の「内儀さん」で、わざわざ町へ出て來ては、純一の祖母の家で騷いで歸るやうな物好きなのも尠くはなかつた。それ等が皆、

「美え兒、美え兒!」と言つて、純一を膝に抱き上げたり、頰ずりをしたり、無理に酒を飮ませたりするのであつた。祖母にはそれがまた何よりも誇りなのであつた。

純一は內氣な兒であつた。餘り外へ出て遊ぶやうな事もなかつた。每日々々、屛風の繪を見たり自分で繪を畫いたり、父は獨りで將棊を弄つたりしてゐた。屛風には豐國や國貞の美人畫や、梶原源太景季が箙に梅の花を挿して奮戰してゐる圖や、熊谷直實が敦盛を呼び返す圖などを貼りつけてあつた。或時、彼はそれを見て一つの武者繪を畫いた。祖母は大變巧いと言つて譽めて、庄造さんに見せると、非常に喜んで、

「家の寶にします」と言つて持つて歸つた。それが彼の才能の最初の顯れであつた。

家の裏に家主の家があつて、子供が澤山ゐた。或時、稻荷さんの祭か何かで、子供連が澤山集つて、太鼓を叩いたりなどして騷いだ。祖母は孫の可愛さの餘り、其處へ純一を連れて行つて、皆に菓子を分けて遣つて、この兒をよく遊ばせてくれと、中でも大きな方の兒に賴んで歸つたが、いくら經つてもどうしたものか純一の聲がしないので、不審に思つてまた行つて見ると、彼は部屋の隅の方に引込んで、つまらなさうに皆の騷いでゐるのを見てゐた。その

事はそれから長い間一つ話になつてゐた。
「おまへは本當に祖父さん似だ、祖父さんも然げだつた」と言つて、祖母は過ぎ去つた昔を思ひ返すやうな眼付をしながら、純一の見たことのない祖父の事をなつかしさうに語り聞かすのであつた。純一はずつと後になつて祖父の生涯を思ひ浮べて、深い悲哀と瞑想とに沈むのであつたが、その時分からして何とも知れぬ同感を祖父に感じてゐた。
「おまへの祖父さんは本當に善え人だつた、あんまり人間が善すぎたから若死しなされた、清太も人間が善て末が案じられる……」と、祖母は何かと云ふと口癖のやうに、さも心配らしくかう言つて、純一の父のことを案じたが、その後でも定つて、「おまへも祖父さんや清太の血を引いとるから何だか心配でならん……」としみじみ言つた。
純一の祖父は純吉といつた。夭死をした人で、三十幾歲で死んでしまつた。彼には弟と妹とがあつて、いづれもまだ達者であつたが、何故か彼とは性情がまるつきり違つてゐる、だから長生してゐるのだと祖母は言つた。純吉は商賣を嫌つた、死ぬ前の年まで戸長を勤めてゐて、每日戸長役場に出勤してゐた。寡默な人で、なるべく簡單に用を辨ずる方法に腐心した。書き物は速くて綺麗でその上丁寧であつた。家へ歸ると直ぐ奥の一間へ閉ぢ籠つてしまひ、妻と口きくことも數へるほどしかなかつた。大抵妻がいろいろの世間話を後から後からと興に乘つて話すのを、「ふむ、ふむ」と頷いて、にこやかな微笑を湛へながら聞いてゐるばかりで、たまに、「然げなこともあるかナ」とさも感嘆するやうに言ふ位なものであつた。そして閑暇さへあれば何かの書物を開いてゐるか、筆を執つて何か書いてゐるかした。彼はかなりの資金を受け繼いだのだが、いろいろな人の受判の尻ぬぐひをしたり、ほんの二三日の間と事もなげに持ちかけられる時借りに借り倒されたりしては、少しづつそれを減して行つた。その度びに泣いて妻にあやまつた。けれども一番ひどくこたへたのはいつも人にそのかされて、柄にもない山氣を出した時であつた。自分の弱點に乘じて來る他人に對して、きつぱりと斷ることの出來ない氣の弱さの上に、玆では飛んでもない思ひ切つた大膽さがつ

いて働いた。一つの失敗を償はうとして、また更により大きい失敗を重ねた。然し、それとても凡て受身のものに外ならなかつた。

同じ町に鬼權、熊新と普通一緒に呼ばれる相棒の山師があつた。權藏の方は町の者であつたが、裏町の貧乏人の兒で、傘張りの下職などをしてゐたのが、田地の賣買の仲人だとか、一種の三百代言のやうなことを始めて、何時しか表通りに家を有つやうになつてゐた。新吉の方は他國の渡り者で、自分では松江の士族だと言つてゐたが、恐らく穢多かも知れないと思はれてゐた。それ程彼の容貌は濁つた不愉快な感じを與へたのである。彼等がいつそんなにも懇意になつたものか誰れも知らなかつた。町の人々が氣が付いた時には、彼等は切つても切れぬ兄弟分となつてゐた。そして始終二人で何事かを企ててゐた。戸長役場へ頻々と出入してゐるうち、戸長である純吉にうまく取入つて、その碁敵となつてしまつた。圍碁は純吉の一番の弱點であつた。勝つた時は子供のやうに喜んだ、負けると口惜しがつて自分が勝つまでは相手を放さなかつた。彼は自分でもその弱點に氣付いて、なるべく自制するやうにしてゐたが、二人の者と親しくなつてからは、我知らず溺れることが多かつた。妻のおよしは氣が氣でなかつた。親戚の者なども、「あの二人は油斷のならぬ連中だから、餘り相手になさらぬが宜えぜ」と言つて、よく注意するのであつたけれど、純吉は二人の顔を見るといやな顔をする事が出來なかつた。それに二人が世間に評判が惡いだけそれだけ彼等が氣の毒なやうな氣がした。二人は繁々と純吉の家へ出入りするやうになつた、妻のおよしは勿論いい顔をしなかつたのだけれど。

或日、さうした圍碁が純吉の勝利に終つた時、傍らから純吉に絶えず助言してゐた新吉が、

「時に、戸長さん、坊領村にえらい安い材木が出たげな」といふ仰山な言ひ出しで、自分達の手で買へるものなら買ひたいのだが、あひにくその融通が付かないで殘念だと云ふやうな事をそれとなく話すと、その後から權藏が膝を乘

り出して、

「いつそ戸長さんがお買ひになつちやどけなもんでせう、わし等の分際ぢや及びもつかん話だが、戸長さんの身分から言や、小指一本動かす手間も要りますまいに、それにこげな事は復とありやしませんで……」などと、その持前のねちねちした調子で水を向けた。から言はれて見ると純吉も惡い氣持はしなかつた。人に立てられると、ひどく感激して、隨分損と知れた事でも平氣で遣る性質だし、またから迄言はれて厭やといふ事は出來なかつた。つい誰れにも相談もしないで、また水臭、やうな氣がして證文も取らないで、早速百圓といふ、その頃ではかなりの大金を渡して萬事を二人に委任した。

「米子の三好(富豪)で今度普請するげな、一つ高く賣り付けて儲けませうや、うんと儲かつたら、戸長さん、一つ奢つて下さんせえな」と言つて二人は歸つて行つた。

一ヶ月餘り待つた。材木は來さうにもない。その上、二人の者は其後ふッつりと顏出しもしない。或日、途中で偶然糴藏に出逢つた時、

「材木はまだ來んがどげした事かな」と訊くと、彼はいつもの眼をむき出してゐるやうに見える白眼を毛蟲のやうな眉のところまで吊り上げながら、

「へえ、材木？　何の材木で……」と言ふ。

「それ、先月、新吉さんのゐるところで金を渡したぢやないか」

「わしは知りません、そげな金を受取つた覺えはない、まあ、新吉さんに訊いて見ればわかりませう、今日は忙しいもんで、いづれまた……」と言つたなり、さつさと行つてしまつた。純吉は呆れてその後を見送つてゐたが、信じてゐた事が深かつただけに、その寂しい氣持は一層であつた。さすがに自分ひとりの胸に藏めかねて、

「惡い事をしてな……」とまるで自分の方で罪を犯しでもしたやうに自ら責めながら、その夜の寢物語に妻のおよしに一部始終を打明けたのであつた。然し、彼は例の氣象で諦めをつけてゐた、他の場合同樣、「高がそれ位の金！」と言つて、甘んじて泣寢入りしてしまはうと思つてゐたのであるが、およしからその事情を訴へられた親類が承知しないで、お上へ訴へ出た。お調べになつた。ところが先方は毛頭その覺えがないときつぱり言ひ張つて。あるならその證據の受取證文を見せて貰ひたいと高飛車に出たが、勿論證文もなく、その證人に立つ者もないのだ。何だの彼だのと長いことと引つぱられた上、訴訟はたうとう原告側の敗訴に歸した。さて、かうなると、純吉は言ひ懸りと云ふやうな罪科で以て、日暮ケ岡の仕置場で三百の笞刑に處せられ、烈しい鞭を頂戴した上で、お構ひなしといふ事になつた。それは恐ろしい尻叩きの刑で、靑竹を束にしたよくしなふ鞭がぴしぴしと鳴る。用捨もない刑吏どもは息をはずませて叩く。臀部は赤兒の紫斑見たやうに、だんだん靑く、紫に腫れ上る、その腫れ上つたところに血が滲み出して、しまひには魚の切身見たやうになつて來る。純吉は蟲のやうにへたばつた儘、殆んど死んだやうになつて、片息で唸つてゐたといふ。それを見たおよしは、その時あの二人を殺してやらうかと思つたと、その話をする毎に、口惜しさうに泣いた。一體に氣の小さな人の事とて、是れを氣に病んで、役場はそれつきり退いて、一年許りして死んでしまつた。總領の淸太郎が十六七の時であつた。それからといふもの、淸太郎はあいつの親父はお尻を叩かれたんだとか、騙りの兒だとかいつて、子供達に言ひ囃されて、辛い思ひをしなければならなかつた。

鬼權と能新とに取つてはそれは何でもない事であつた。それからも彼等は刑法の網をくゞつて、仕たい三昧な事をした。そして立派な「旦那」になりすました。蔭ではろくな事は言はなかつた町の者も、その前では丁寧に頭を下げた。さうかうするうち、戸長役場は堂々たる町役場に變つた。

純吉が死んでから數年してからである、今でも町の故老は正月餅を搗く時には屹度思ひ出す、恰も新曆に改めた年

の、丁度師走の大晦日の夜、町は一夜のうちに殆んど全燒してしまつた。その地方に亙つて比類のない大火で、纔かに燒け殘つたのは、お寺と、川向の一區劃だけであつた。その時、淸太郎は最うその町にはゐなかつたし、およしは川向の妹の家にゐた。出火の原因はつひに分らないでしまつた。失火だとも言ひ、或ひは放火だとも言ふ。烟が見えたと思ふと、もう火は町中に擴がつてゐた。何しろ大風の夜で、飛火また飛火、人々は身を以て逃れた。まだ喞筒とては一臺もない、わづかに不完全な雲龍水が二三挺あるきりの時分とて、どうする事も出來なかつた。人々は疊や蒲團を被いで右往左往に逃げ廻る。逃路を失つた人や牛馬の叫喚のすさまじさ、折角の正月の支度も跡もなく、目も當てられぬ慘狀であつたが、その火事で、新吉は燒け死んだし、權藏は大火傷をして、三日三晩呻き通して死んだのである。

「お祖父さんの思ひが通つたのだ」とおよしは恐ろしさうに聲をひそめて言つた。それからまた、

「おまへはその年に生れただ、おまへは火事兒だ」と、およしは孫の純一に度々言つた。この火事兒の身體には右の腕に痣があつた。それは純一の母がお產のために淀江の實家に歸つてゐたからである。同じく火事兒である純一の從兄弟の次郎にも頸のところに大きくそれがあつた。そして純一は右腕の痣を見る度びに、恐ろしい火事のことや、祖父の笞刑のことやを想ひ出して、

「何といふ可哀さうな祖父さんだらう!」と考へるのであつた。

三

大阪に一月餘りも滯在してゐた純一の父の淸太郎は電報に驚いて歸つて來た。夜おそく俥が店の前でとまると、姉娘の梅子を相手に、店の洋燈の下で純一の着物を縫つてゐた妻のおしまは、

「お父さんがお歸りになつた」と言つて、梅子にも手傳はせて、車夫の手からいろんな荷物を受取つて、奥座敷の床の間に並べて、そこの床柱にぐたりと靠れかかるやうにして坐りこんだ良人の方を見て、
「どげだつたな、大阪の方は？」と恐ろしい事でも訊くやうに小聲で訊いたが、急にびつくりしたやうに、
「何處か加減が惡いのではねえかね、えらい顏色が惡いが……」と訊いた。
清太郎はそれに答へないで、
「酒をもつて來てくれ」といひつけた。おしまは早くいろんな事を聞いたり話したりしたいので、自分は立上らないで、梅子を呼んで、急いで酒の仕度をするようにといひつけて、
「留守は困つてな、酒がいたんだり、晉が酒を持ち出したり、税務署の検査がやかましかつたり、西尾の方からえらい金の催促をして來たり、いろいろ面倒な事だつた」と度々の手紙や電報で清太郎ももう十分知りきつてゐるやうな事をくどくどと並べたてた。清太郎の妻の長つたらしい苦情が始まる時には、その瘦せた顏の眉間に縱の皺を深く刻んだまま默り込むのが癖である。いつまでたつても何の返事もないので、おしまは、
「大阪の方では何をしてだつたか知らんが、此間も廣田の浩さんが見えて、清太さんも相場なんかに手を出したりしちや見込みはないなんて言つてござつた……」
「そげな事は宜え、いたんだといふのはどの桶だ？」
「二番桶が惡い臭ひがついて、此間も廣田の浩さんにも見て貰つただが、どうも惡くなるらしいと言つてござつたで、直ぐ電報を打つたわけだが……」
「藏の者は別に變つた事はないか？」
「晉が新太や市藏やを惡遊びに誘つて、共謀になつて酒を盜み出してなあ、一昨日も裏の味淋の二合瓶の箱を開けて

見たら一本も無かつたで、びつくりしてよく調べて見ると、それに詰め込んぢや懷に入れて持つて出よつたらしい……今夜も二人で外へ出たきりまだ歸つて來ん……」

おしまがなほ言ひ續けようとした時に、臺所の方から酒の仕度をして、大きい膳を重さうに運んで來た梅子が、うつかり浮足をして、膳の上のものを引つくり返した。

「何だつてそげに引つくり返したりするのだ!」と險しい顏をして母親が思はず叱りつけると、淸太郎は陰氣な聲で荒々しく、

「何で叱るだ、子供を叱らんでも宜え、我が爲りや宜えに」と叫んだ。

梅子は兩親のこの險惡な物言ひに胸を冷やして、暫くはうつむいて膳の上を直してゐたが、たうとうしくしくと泣き出して、前垂を顏一杯に押し當てた。隣の部屋で早くから寢てゐた純一は、さつき俥屋が聲をかけた時分から目が覺めて、父の歸宅と知ると、何だかそれが樂しみで、直ぐにも寢卷一つで飛ひ出して行つて、土產物をと言ひたいのは山々であるが、此頃子供心にも、父親の身の上が何かから喜ばしくないものの中に包まれてゐる事が、母や姉のふだんの話から感じられてゐるので、蒲團の中で耳を澄ましながらもぢもぢしてゐた。すると何だか不穩になつて、しくしくと泣く姉の聲が聞えたので、堪らなくなつて、もう行かない事に定めてしまつた。

「そげに泣かんでも宜え」とおしまが言つた時に、淸太郎は、

「兎に角藏へ行つて見て來る」と言つて、妻に「明石屋」といふ自分の家の屋號を入れた提灯をつけさせて、それを提げて裏へ出て行つた。その足音が消えると、純一はおづおづと蒲團の中から這ひ出して奧座敷へ行つて見た。姉はもう泣いてはゐなかつた。前垂の端しを爪繰りながら、純一の出て來るのを見て笑ひさへもした。母親は、

「風邪をひくから、そげな風して出ちやいけん」と叱りつけた。

けれども純一は生返事しながら、摺足で床の間の方へ行つて、そこにある手提鞄の方を頻りに見つめた。

「お土産なんかないわ……」と梅子は言つて、いきなりその手提鞄の口に手をかけると、鍵がかけてないと見えて直ぐ開いた。中には堂島の相場新聞や、手帳や、いろんな書類の束らしいものやがあるばかりで、純一が手紙で頼んでやつた書物も雜誌も見えなかつた。失望が純一の心を寂しくした。

「僕の頼んだものは大きい鞄の中にあるのだよ」と自分を慰めるやうに純一は言つて、相場の新聞を引き出してそれを開いて見た。

「純ちやん、もうおやすみよ、風邪を引くから」と梅子が言つた。

「うん」と純一は生返事しながら、いきなり三足で部屋を飛び出して、次の間の蒲團の中へもぐり込んだが、何だか急にどうした譯か父の事が氣にかかり出した。酒藏の中でどんなにしてゐるか見たい氣もして來た、それでまたもぐもぐと起き上り、丁度母親も梅子も店の方で何かしてゐるので、そつと裏口へ出た。

いつも大きな五尺の桶や、酒樽や、また、音が大きな掌でおいしいひねり餅をこしらへてくれる蒸米などの乾し場に使はれる、かなり廣い中庭のむかうに、酒藏は暗く陰鬱に聳えてゐた。純一はこはごはその入口まで行つて見た。大きな二枚戸が半分ほど開け放しになつてゐて、眞暗な藏の中から、醗酵する强烈な酒の香氣が彼の鼻を衝いた。そつと入口にある釜場の中に入ると、そこにもう一つの閾があつて、そこの戸も開いてゐたので、その奥の方を覗き込んで見ると、かなり奥深い藏のずつと向うの端の方に、提灯の灯が動いて、上に昇る光が高い天井に大きな黄色い輪を畫いて、それが途方もない隅から隅へと飛び動いてゐる。薄ぼんやりと幽靈のやうに浮んだ父の影は、ずらりと並んだ大きな酒桶の横腹がまるで一列の板塀のやうに見える上に、奇怪な像に曲りくねつたり、伸び縮んだりしてゐる。こつこつと指の骨のところで桶を叩いて、その音を聽いて見ては、暫く考へてゐるやうにぢつと動かぬ時には、藏ぢ

ゆうがまるで地中の坑道ででもあるやうで、純一は思はず息を殺した。やがて踏臺にでも乘つたらしく、提灯が天井の火影と一緒になる位ゐ高くなつて、桶の上の端しのところに、父の痩せた顏の半面が、丁度お寺の佛像のやうに、提灯の黄色く見える面に刻まれたやうに浮んだ。

「しまつた!」といふ叫びがその口から出た。

この聲がどんなに悲痛な叫びであつたかといふ事は、酒造家でなければ、恐らく理解し得ないであらう。一つの桶がわるくなれば、その損害は決して僅少のものではない、その上酒が腐敗するといふ事は、酒屋にとつて緣起の惡い事である。殊に漸く商業に破綻を來しかけてゐる今日の淸太郎にとつては一層の打擊であり、不吉な事件でもあつたが、なほその上に、また、酒造そのものに特別の情熱をもつてゐて、萬事杜氏まかせにしないで、酒の成熟を自分の子供の成長よりも(彼は實際、子供に對しては、多くの場合無頓着であつた)心にかけて、自らその手腕を誇つてゐる彼としては、一層苦い失望を値する事であつた。大阪で「サケイタム、ハヤカヘレ」といふ電報を受取つた時には、まだ空だのみがあつたが、今かうして自分のふだんから、鋭敏を誇つてゐる特別な酒に對する感覺の、明かに告げてゐるこの絕望は、彼にとつて、來るべき惡運の前兆のやうにさへ思はれたのである。

酒ほど微妙なものはない。またこれほど恐ろしい力をもつてゐるものも餘り多くはない。それは一種特別の液體である。沈んだ心をも浮き立たせ、穩かな心をも荒立たせ、或る場合には、人の一生の運命をも司るほどの力をもつてゐるこの液體は、血のやうに生きてゐる、血のやうに魂をもつてゐる。從つて、その怒りを恐れ、不淨を忌んで、酒藏には女を入らせないのが普通である。酒造家は仕込みに吟味に吟味を重ねる。水は勿論最も大切であるが、麴の工合から、桶の木の質やその大きさまで、その味ひに影響を來たすので、小さな桶で育つた酒は大きな桶のものほどの力がないとさへ言はれる。最も鋭敏な神經組織もこれより鋭くはない。蜜柑の皮の一片れでも一本の桶を腐らせること

が出來るのだ。けれども、この場合には、さうした惡戯や不注意があつたとは思はれないし、仕込みの方法に何の手落ちもあつたとは考へられなかつた。彼の店には約三通りの酒があつた。そのうち「白露」と銘打つた酒は、彼の自慢の極上酒で、殊に出雲地方に多くの顧客を有つてゐた。この二番桶がその「白露」であつた。彼は深い溜息をついた。

「有明のオ、ともす行燈は、菜種なアり……」と鼻唄をうたひながら、音と新太とが夜遊びから歸つて來た。

「やア、びつくりした、坊ちやんがこげな處へ來とるぜ、どげしなさつた……」と此方を透すやうにして、音は持前の胴間聲で言つて、上機嫌で純一の傍へ寄つて來た。その後から年の若い新太も千鳥足で續いて入つて來た。

「旦那だぜ」と新太は小聲で言つた。

淸太郎が釜場の方へ出て來た。提灯の光にぼんやり彼の旅裝そのままきちんとした姿が照らし出された。

「これは旦那、いつお歸りで……」と音はその長い身體を曲げた。

「音造！　二番桶が惡くなつてな」と、心持ち提灯を音の顏の方へ持上げながら、淸太郎はかすれた聲で言つた。

「へえ、本當に、どげした譯か惡くなりましてな……そげんだもんで、內儀さんと相談して電報を打ちましたやうなわけで……萬事、旦那の御指圖だもんで、わし等にはわかりませんもんで……」と音は俄かに心配らしい聲振りを作つて、その大きな手で傍に立つてゐる純一の頭を撫でた。

「わしが留守だつたんだから、もつと氣を付けてくれるとよかつただに……」と淸太郎は誰れに言ふともなく呟いて、手に持つてゐる提灯をふッと吹き消して藏の外へ出たが、一寸立止つて、

「純一、純一！」と呼んだ。純一は音の大きな手を振り拂つてばたばたと父の方へ走つて行つた。

その翌日、廣田の浩藏が淀江の方から出て來た。いつものやうに大きな聲で入口から、

「清太さん、歸つたな」と、店頭で帳簿や手紙を調べてゐた、清太郎に聲をかけた。清太郎はやや蒼ざめた陰氣な顔を擧げて、
「アア、浩藏さんか」と調子外れの聲で、その從弟でまた妹婿になつてゐる浩藏を迎へた。
二人が奥の間へ通つてから、いつものやうに酒肴の膳がはこばれた。
「酒が惡くなつたてな、此間來た時、わしも一寸見たが、どげにかならんもんかな」
「いや、もう諦めた、燒酎にでもするより外はない」
「燒酎にしてもなア……」同じく酒造家である浩藏は、清太郎の受けた打擊が底の底まで分つてゐるのだ。
「うん、この酒はなかなか宜え」と浩藏は初めて受けた杯をぐつと乾して、清太郎に返しながら、
「よくある事だ、まあ一本でよかつた」
「桶の方は諦められるが、それよりも、今度の稅金がまた一苦勞だわい……」
「その事よ、今日もわしはその事でこれから松江へ行つて來るが、掛金もなかなか集まらんでな……時に、大阪はどげだつたな、いつ迄たつても歸らんから心配しとつただ、うまい事があつたかナ」と浩藏はにやりとした。
銚子を持つて來たおしまが、
「えらい長逗留で……」と愛想笑ひをして、一寸良人の顏色を窺つた。
「松江の方もなかなか骨が折れるからな……」
「いや、汝のやうに人の思はくばかり考へてをつちや埒があかん、何でもぴしぴしと遣る事ちや、此間も馬潟の金田の奴と一喧嘩してやつた、あんまり分らん事をぬかすので、業が煮えて業が煮えて、汝は犬か畜生かと言つてやつたら、大將眞赤になりやがつて、今にも摑みかかりさうな勢ひだつたが、それでも結局は此方の言ひ通りよ、世間は萬

事此儘で行かにや負けだ！」と得意らしくからからと笑つて、客の聲に店の方へ出て行くおしまを見送つた。怒つた時の顔はまるで鬼だと親戚間でさへ惡口されてゐる彼の角張つた赭ら顔には、もうかなり酒が廻つて、一層ふてぶてしく活氣付いてゐた。醉へば醉ふほど蒼くなる性の清太郎は、今日はあんまり醉はなかつた。

「どうも苦しくなると、人間は色んな事を考へるもんでな……」

「また相場か、相場なんかしたつてろくな事はないぜ、汝にやそげな山氣があつて困つたもんだ、今度の大阪行も、わしにはとんと腑に落ちん。此間も灘町へ一寸寄つて見たら、婆さんがえらい心配して、もう神頼みばかりだ、清水さんに詣ろかともつとるつて言つとつたぞ」と、またからからと笑つた。

「そげな事は宜えが」と清太郎は苦り切つて言つて、小聲で「隱して遣れるもんならナ……」

「酒か」と浩藏は眼玉をくるッとさせて、清太郎の顔をぢろりと見て、「なかなか……」

二人は杯を忘れて、話の方に夢中になつた。

店には秋の日ざしが明るく射し込んでゐた。こも包みの酒樽や大小さまざまの瓶詰などが傍らの戸棚と、戸棚の下とに置かれてゐる賣場には、臺の上に、一杯呑みの客のために烏賊や蒟蒻や燒豆腐などの小皿が並べられて、奥まで通つてゐる長い土間には、米俵が積み重ねられてあつたり、五六挺の酒樽が荷造りした儘になつてゐたり、大八車が引き込んであつたりした。

近在の百姓らしい客が出て行つてから暫くすると、硝子戸をあけて、純一が學校から歸つて來た。

「ただ今」と純一は言つた、「中野君が來てゐるんだよ、これから一緒に相良先生の家へ行くの……」

純一の後には色の白い小綺麗な男の兒がにこにこ笑ひながら立つてゐた。

「まあお入り」とおしまは聲をかけて、純一には、「今、奥に廣田の叔父さんが來てだから、お辭儀をしてお出で」と

言つた。

「中野君、入りたまへ、僕一寸奥へ行つて來るから……」

純一が奥の間へ入ると、叔父は、

「純一か、早や學校は引けたのか、次郎が遊びに來てくれと言つとつたぞ。」

純一は敷居を一寸入つたところで、いつものやうな臆病なお辭儀をした。

「今度の日曜に來んか」と叔父が言つた。

「そげか、おまへまでお祖母さんと清水さんへ詣くから……」と叔父は笑つた。純一は苦い顔をしてゐる父の樣子を一寸見て、直ぐ店の方へ來てしまつた。

後から叔父がまだ何か言はうとて呼びとめたが、純一は引き返さなかつた。

四

「これ、純一、そげに駈けつちやいけんぞ……」と祖母は、小犬のやうにちよろちよろと小半丁も先きの方まで駈け抜ける孫を呼びとめた。純一は振向いて、につこりして、

「お祖母さんは遲いなあ！」と言ひながら、そこの石垣のふちに踞つた。それは此頃出來たばかりの、出雲の方に行く新道で、山の下の方を切り開いて、中海沿ひに石垣でたたんだ道である。これまでは出雲の能義郡にある清水寺へ詣るのには、國境の山と山の間を迂回しなければならなかつたのが、この新道が出來てからは、道程が半分ほどになつたのである。

純一は石垣の下をのぞいて見た。海の底は一面に降りかかつてゐる日光のもとに青く透いて、内海の波が小刻みに寄せて來て、石垣にどぶりとぶつかる度びに、その底の海藻もゆらゆらするのであつた。海藻の間には殆んど青い色をして見える小さな魚の群れが、目まぐるしく泳ぎ廻つてゐる。純一は我れを忘れてぢつと見入つてゐると、忽然として、かなり大きな魚の黒い背が彼の眼を掠めた。彼は思はずアッと叫んで、

「あんな大きな魚！　あんな大きな魚！」と言ひながら海底を指差したが、もはやその影は見えずただ海藻があだかも章魚のやうに手足を伸ばしてゐるばかりであつた。

「海に落ちるなよ、危いぞ！」と傍にやつて來た祖母は言つた。純一は默つて、舟蟲が頻りに穴を出たり入つたりして遊んでゐる石垣の傍を離れた。

「此間廣田の叔父だん來た時にお辭儀をしたかえ……」と話好きな祖母は純一に訊いた。

「ああ、學校から歸つて來ると、奥座敷でお父さんと酒を飲んでをつたから、直ぐ行つてお辭儀をすると、今度の日曜に次郎君の處へ遊びに來いて言つたから、お祖母さんと淸水さんへ詣るから行けんと言つたら、おまへまでお願がけかつて笑つてゐたよ……」

「ほう、そげな事言つたか、浩藏は氣が强て、不信心者だからな、だがおまへ、本當におまへも願がけせないけんぞ、家が好え工合になるやうにな……家が惡なると、良え學校へも行けんしな……」と云つて暫く默つてゐたが、それからまた言ひ續けた、「家の淸太も浩藏ほどしつかりしとると心配もせんだが……」

およしは息子夫婦とは離れた暮しをしてはゐたが、息子が支拂金の不足に苦しむ毎に、ある限りの金を渡して融通の足しをしたりして、始終その商賣の模樣を氣にかけてゐた。ふだんから淸太郎の派手な遣り方が心配でならなかつたが、とりわけ此頃、相場でもしてゐたらしい大阪での長逗留と云ひ、二番の桶が惡くなつた事と云ひ、重ね重ねの

不安に、年寄の常として、日頃信心をしてゐる淸水觀世音へと參詣する氣になつたのである。

純一は祖母に連れられて他處へ行くのが嬉しかつた。淀江の親戚にはよく連れられて行つたものであるが、かうした處へ行くのは今日が初めてなので、何だか思ひがけない嬉しい事でもあるやうな氣がして、とりわけ氣が勇み立つてゐた。それで頻りに駈け出して見たくなるのだつた。

海沿ひの新道を離れて、底の小石が曝し出されたやうに乾いてゐる小流れに沿うた、いかにも田舍らしい路へ入ると、右にも左にも黑ずんだ森や山が聳え立つて、櫨の樹などの赤く色づいたのがそれに模樣を置いて、何だか急に山の中へ入つたやうな氣持を起させる。路ばたにちらほら農家の現はれて來たところを少し行つた時、そこのもう柿の實が大分眞赤になりかけてゐる柿の樹の下の小さな地藏堂の蔭から、ひよつこりと負籠を負うた一人の女が出て來た。

「こりやまあ、內儀さんぢやござんせんか、こりやアお珍らしい……」とその女は高い野良聲で呼びかけた。

「おまつさんかえ、これはまあ……此頃はちつとも出て見えんな」

「はア、此頃は秋だもんでね……今日は淸水さんで……まあ自家へちよいと寄らつしやりませ」

おまつの家は通り傍にあつた、當り前の小さな農家で、型ばかりの店には駄菓子や、燐寸や、附木などが並べられて、天井からは草履や草鞋や、煤けた奴凧などが吊してあつた。奧まで一目に見える家の中には誰れもゐなかつた。暖かい表の緣側には可愛らしい三毛猫が一匹日向ぼつこしてゐたが、主婦の姿を見ると、ウウと呻つて、背を丸くして大儀さうに脊伸びをした。おまつは負籠を土間へおろして、

「おぐりんさん、まあお上りなせや」と言つて、座敷へ上つて、座蒲團を出したりお茶をついだり、店の駄菓子を取つて來て純一の手に握らしたりした。

祖母とおまつとの間には、純一にはよくわからない會話が取交され出した。暫く彼はおとなしく祖母の蔭に腰かけ

てゐたが、二人の話はなかなか盡きさうにもないので、たうとう退屈してしまつて、表の縁側へ出て、そこに丸くなつてゐる小猫をからかひ始めた。おまつが大變可愛がつてゐると見えて、人なつッこい猫で、純一の指がさはると直ぐにころりと仰向けになつて、その四つの足の爪を隠しながら、反つて純一をからかふやうに、前足でちよッかいをかけては喉をごろごろ鳴らした。

丁度この時矢張り同じ方から來かかつたお婆さんと女の兒との二人連れがあつた。女の兒は猫が好きと見えて、お婆さんの袖をひかへて、純一の後に寄つて、

「アラ、可愛い猫！」と言つた。彼女の影が猫の上を翳らした。

「まあ、よくぢやれること！　一寸あたしにもさせて頂戴！」

純一が吃驚して顏を上げてその女の兒を見た時、彼は思はずハッとして、急にどぎまぎしてしまつた。それはいつか濱灘への遠足の折り、自分が砂の上に辨當をころがして、「砂團子！　砂團子！」などと囃されて當惑してゐた時「笑ふものは意地悪よ！」と言つて、いろいろとおかずなどを分けてくれたあの女の兒であつた、その後何處の女の兒であらうと思ひながら、その遊んでゐるのをいつも運動場の片隅からなつかしく眺めやつて、自分の事などはもう疾くに忘れてしまつてゐるのであらうかなどと、儚なく思ひながらも、いつも心に一つの望みとなつてゐる女の兒であつた。けれども純一はこの場合、ただその女の兒の眼を見て、赧い顏をして、もぢもぢするより外はなかつた。

「河野のおときさんぢやねえか……」と家の中から純一の祖母が聲をかけた。

「こりやあまあ、明石屋のおよしさん、今日はまた何方へ？」と應じながら、髮を切下げにした品のいいそのお婆さんは家の中に入つて行つた。

「孫を連れて清水さんへ詣るところでな……」

二人の老媼はお互ひに表にゐる孫たちを見た。
「あげな美え孫さんがござつたか？　ありやどげな孫さんかえ？」とおよしが訊いた。
「こりやお俊の子で、小え時から長えこと松江のお俊の實家に行つとつたのが、この春こつちへ戻つて來たぢやが、もう、いたづらで困つとりますわい」
「そげなこたねえ、なかなか美貌ぢや」
「あんたとこの孫さんは清太郎さんの總領さんで……」
「ええ、そげだけん、女の見みたいでおとなし過ぎて困ります……」
　氣さくなおまつは、また二人に番茶をつぎながら、
「おぐりんさん、お孃ちやんを明石屋さんへお上げなせえ、一つわしがお世話をして、あの二人さんを夫婦にいたしませうわえ……」と言つて、鐵漿のはげた汚ない口で笑つた時には、二人のお婆さんも笑はずにゐられなかつた。
　表の方では二人ともう親しくなつて、兩方から猫の毛を撫でながら、學校の話をしてゐた。
　やがて二人の老媼と二人の孫とはおまつの家を出た。それから少し行くと道はだんだん上りになつて、兩側に高い樹が茂り出して、すつかり山路になつてしまふ。二人の年寄はいい話相手を得て、すつかり興に乘つてしまつた。
　おときの話では、今日の清水詣では、嫁のお俊がこの春から肋膜をわづらつて、寢たり起きたり。一向はかばかしくないので、その病氣全快の願がけに參詣するのであつた。
　二人ともこれまで清水觀世音に何十度願がけをした事であらう。從つて二人はいろいろな思出を有つてゐた。
「およしさん、清水さんも此頃はえらい參りやすうなりましたわいな、此間までは、もう夜明けから家を出て、山の間をえらいこと難儀して通つたことぢやつたが……」

「そげそげ……長え山路ではえらい恐い目をしたことだつた。一度なんかは、たしか追剝らしい者に出遭つて、連れと二人で命からがら逃げたもんだつた……」と言つておよしは四邊を見廻した。丁度一行は道の兩側に物凄いほど高い樹が生ひ茂つて、折々の木の葉のざわめき迄が脅かすやうなこの街道の一番物騷なところにさしかかつてゐた。

「たしかあの先きの樹の枝にな……」

二人の子供たちは目をみはつて、その高みから差し出た大きな枝を見詰めた。その枝は丁度刺股のやうに空にかかつてゐた。

「ふツと見ると、あの枝に大きな男がをつて、此方を睨んでをつただ、吃驚してわし等が駈け出すと、何だか大きな聲で呼ぶやうだつた。まだ夜明け前で、人つ子一人通るぢやなし、一時はどげしよかと思つたことだ……」

「ほう、そげな事もありましたかいな……何でもこの向うの安來から上る道と一緒になる辻のところぢや女が一人殺されたといふ話ぢやつた……」

お婆さんの前を歩いてゐる孫たちは、二人とも息を殺して、はつきりとわからぬ恐怖のために、互ひに靠れ合ふやうに肩を並べて、その手はいつかしつかりと握られてゐた。

山門の朱塗が見えると、二人は聲を擧げて石段を下りて行つた。そして祖母さん達を待つ間、二人は周圍の高い石垣の苔を指で掘つたり、小さな秋草の花を摘んだりした。山門を出て、また石段を下りると、廣い場處があつて、その片傍には茶店が並んでゐたり、庫裡があつたり、また、碑文を刻んだ石碑や、四角な堂やがあつた。正面には高い石垣が城壁のやうに築かれて、その眞中には、かなり急な廣い石磴があつた。

「危いから氣を付けるだぞ」と二人の年寄が同時に言ふと、

「大丈夫……」

「ちつとも危かないわ、おばあさんの方は大丈夫？」と女の兒は言つて、きやツきやツと言ひながら、栗鼠のやうに駈け上つた。その眞似は純一にも出來なかつた。

「これは京の淸水さんに似せて建てたもんだげな、見れ、大きな御本堂ぢやねえか……」と石磴を上つた爲め少し息切れをさせて、およしは孫たちに言つた。

此の地方隨一の大伽藍で、しかも千年の星霜を經てゐると云はれる本堂の結構は莊嚴を極め、山內幽邃、そぞろに年寄たちをして渇仰の念を起させるばかりでなく、子供たちの心にも一種言ひ難い威厭を與へるのであつた。

一通り參詣がすむと、三重の塔を見たり、方々の堂を廻つたりしてから、皆は石磴を下りて、そこの茶店に立寄つた。二人のお婆さんは孫たちにお菓子や柿などを取寄せて、自分たちはお互ひに行ける口なので、酒を取寄せて杯をさしつさされつした。

「純ちやん、此方へいらつしやい」

親しくなつてからは、女の兒は何かにつけて純一を引き廻した。

「お酒なんか飮んでるおばあさんの處にゐない方がいいわ」

二人はお菓子を持つて緣側に出て、いろんな話をしながら食べてゐたが、女の兒は不意に純一の肩をつかまへて立上らせて、

「さあ、あたしと脊くらべよ、もつと此方へいらつしやい」

「敏子さんより僕の方がきつと低いよ」と純一は言つて、敏子の腕の中から離れて、ぴつたりと對ひ合つて立つて、敏子が自分の額から此方へと伸ばして來る掌を嬉しい氣持で受けた。

「まあ、剛い毛だわ！」と伸ばした手の序に純一の頭をぐるりと撫でて、敏子は少し意地惡にはやした。

「ま、あげな事しとるぞ」とおよしが面白さうに笑つた。二人とももう大分酒が廻つて、氣が浮々してゐるらしかつた。口數の少い敏子の祖母まで、

「ほんに子供は恥かし氣もなくあげな事をしよる……」と言つた。

「餘計な事をいふ祖母さんだわ」と敏子は言つて、純一の熱くなつてゐる耳たぶを引張つて笑つた。純一は一層照れて傍見をしてしまつた。

歸りにはもう日が傾いてゐた。米子の町へ入つてから、敏子たちに別れると、急に足が痛くなつて、祖母にすがるやうにして歩きながら、純一の心の中には敏子に對する崇拜に近いあこがれが波のやうに寄せたり亂れたりするのであつた。

「うちのおばあさんと敏子さんのおばあさんとがあんな友達だつたのは不思議だ、そして僕と敏子さんとが直ぐ友達になつたのはもつと不思議だ」と彼は自分に言つた。

あのやうに長い間何處の女の兒であらうと思つてゐた彼女に、不意に知り合ひになつたばかりでなく、手を引き合つたり、話し合つたり、脊くらべまでしたりした奇遇を考へると、彼は驚かずにはゐられなかつた。とりわけ自分が敏子の氣に入つてゐて、弟のやうに愛されることを考へると、漠然とした幸福の感に浸されるのであつた。

五

ああ、少年の春よ！　その時こそは、彼の心もその頰と共に生々と燃え立つて、大自然の豐富な贈物を、惜しげもなく手づかみにして、しかも自らそれがいかばかりの浪費であるかも悟らないのである。ああ、少年の春よ！　再び還らないその瞬間の初春にこそ、その生涯を求めに求めてつひに得ない爽かな喜び、たぐひなき幸福を、運命は一時

に彼の手に投げ與へるのであるが、それがいかに貴重な贈物であるかも悟らないで、半ば嚙み棄て、半ばむしり取つて、路傍に投げ棄てて敢て悔いる心もない。一度び遠ざかつては千里萬里、雲の彼方に空しく沒し去つてまた恢復の途なき時、ひたすらに前へ前へと喘いでゐた心も、今や漸く疲れ初めて、事既に非なるを悟り、ここに初めて幼い日の事を思ひ返して、嘆息これを久しうするも最早還すべき由もない。あはれなる彼よ！　その長い一生の最後の目的として死に値するそのものが、既にその少年の日の曙に殘りなく與へられてゐるとは、いかに不思議なる自然の法則であらう！

それがいかに寂しい少年であつたとは云へ、純一もまた幸福であつた。そして自由であつた、この二三年の間のいろいろの不運續きに傾きかかつた家運挽回のために、東奔西走してゐる父の焦慮によつて、すつかり落着きを失つてしまつた家の中にゐるのが嫌やで、彼はよく外へ出て歩いた。さういふ時にはいつでも中野信太郎がその仲間であつた。

信太郎は純一より一つ年上の十五で、その早熟は驚くべきものがあつた。彼は神童とさへも言はれてゐた。色の白い小綺麗な生れで、萬事ひかへ目な純一とは違つて、非常に才走つてゐて、何事にも大人じみた考へ方をした。彼はまだ小學生である純一とは違つて、去年から講習に行つて、もう直ぐ、准教員の資格を得る位になつてゐた。彼の家はかなりの糸屋で、彼はその家の離緣された先妻の兒で、今の母とは生さぬ仲であつた。彼の父は町内でも評判の女癖の惡い老人で、從つてその家庭には何處かだらしのないところがあつた。純一が遊びに行くと、その親爺さんが、純さんはおとなしいから、今に見れ、年上の女衆にえらいこと甞め廻されるぜと言つて、靑白いのつぺりしたその歳とも思はれぬ若さの顏でにやにやするのであつた。白粉をこてこて塗りたくつた若い女中がゐて、女中らしくもなく横柄で親爺さんに媚びた目を送り、内儀さんとはいつもごたごた言ひ合つてゐた。この女は親爺のラヴァだぜ、君と、信

太郎がその女の面前で純一に言つて、おれの親爺にも困つたものさと顔をしかめた時には、純一は返事に困つたものであつた。

純一が「戀」といふものがどう云ふものであるか何にも知らなかつた時に、もう信太郎は十分にその方面の事に通じて、隨分驚くべき知識さへ有つてゐた。その外、何事にも信太郎は一廉の知識と見解とを有つてゐた。それは十五の早熟な少年の獨自なものではなかつたけれども、純一に取つては一つの權威であり、指導ともなつた。歌を作ることとか、詩を作ることとか、自然を愛するといふこととか、さうした趣味の生活の方にも、信太郎によつて彼の目覺めが齎された。

「信太郎君、ゐますか？」と或日純一が店のところで聲をかけると、信太郎はいつものやうに歌集を持つて出て來て、「あ、純一君か」と言つて、店にすわつてゐる親爺のにやけた顔をちらと見て外へ出て來た。二人が好んで出て行くのは、町はづれの田圃路であつた。その田圃の眞中には、俗に摺鉢山と呼ばれる小さな岩山が一つ、こちんと海中の孤島のやうに立つてゐて、その嶮しい傾斜面の茨などの生え茂つた中には、秋だと野葡萄が紫の實や黑い實をつけてゐるのであるが、今は春なので野菫が白い花や薄紫の花をのぞかせてゐた。ややなだらかな表の方から上つつて行くと、丁度花車の上にでも上るやうな氣持を起させるのであつた。二人とも二年位前までは、小山などの餓鬼大將にいや應なく引張り出されて、よくこの上で打たれたり降參させられたりして憤慨し反抗したものであつた。

「君、記憶してゐるか、ここで僕等が小山等にどんな屈辱を受けたか！　だがあんな事はみんな愚だ！」

信太郎は路の方からその岩山を見遣つて、唾棄するやうに純一に言つた。

西大谷といふ村の方へ行くと、いつか山地に入る。そこには笹の葉の蔭を分けて、山淸水がちよろちよろと流れてゐる中に、小さな親指ほどの赤い蟹が頻りに這ひ廻つてゐた。

「僕はねえ君、こゝへ來る度びに、厭やな俗界の事をすつかり忘れて、本當に淸淨な氣持になる……」

「こゝは本當に靜かでいい處だ！」と純一も言つて、爽かな淸水の中で朽葉のやうに沈んだり、その折れ曲つた足で突然石の上に這ひ上つたりする蟹をやさしい目で見遣つた。彼には信太郎の言葉からも、その靜かな自然からも、こころよく調和した美しさが素直に感受されたのであつた。

「だが、僕等はまだ若いんだ、前途遼遠なりだ、今から閑寂を愛すべきではない、もつと偉大な物を求める、もつと僕等を鼓舞する物を求める。それには空に聳える大山がある、大山を見てゐると僕は一種悲壯な積極的な昻奮を感ずる。僕の感慨を笑はないでくれたまへ！」

二人は山の方から野を橫ぎつて、川端に出た。こゝからは、東の方にかの大山がその雪を頂いた秀峰を鮮かに仰がしめた。

「おお、山よ！」と信太郎は叫んだ。彼の白い頰には既に靑春の情熱が見えた。

「大山は僕等の未來を祝福する、且つ僕等に人生の意義を啓示する、君はさう思はぬか！」

純一は默つて頷いた。彼には信太郎のやうに言ふべき言葉が直ぐには口に浮ばぬのであつた。けれども山に對する彼の崇敬は信太郎に遜らなかつた。

「僕等はよろしく自由且つ奔放でありたい、鳳晶子が既に歌つてゐるぢやないか……（やは肌のあつき血汐にふれも見でさびしからずや道を說く君……）」

信太郎はやや反身になつて、その目を閉ぢて、晶子の歌集『みだれ髮』を持つてゐるその手を強く振りながら、感情によつて節づけた顫音で誦しつづけた。

「（道を云はず後を思はず名を問はずこゝに戀ひ戀ふ君と我と見る……）」

二度まで彼はこの歌を繰返した。それには彼自身の抑へ難い心の苦悶が詫せられてゐることが純一には感ぜられた。
「戀は苦しい……戀は罪だ……」
純一は友の激越な、そして沈痛なこの獨語に引き入れられて、何だか胸が痛むやうで、思はず問はずにはゐられなかつた。
「どうして戀が罪なんだらうね？」
「それは君、罪さ！」と信太郎は言ひ棄てて、少し離れたところへ行つて菫の花を摘んだ。
この川は新川と云つて、兩岸の蘆や草の間を押し開いて、下流になるほどだんだん緩く幅廣くなつて町へ流れ込み、町を横ぎつて中海へ注ぐのであるが、ここら上流の方は殆んど水草でその表面を飾られて、僅かばかりの水面には、水馬が舞つてゐたり、影のやうな蟲が飛んでゐたり、目高が飛白のやうにその間を掠めてゐた。水の匂ひがそのあたりにほのかに漂つて、路傍からの草の葉がその葉先きを並べて遠く靜かに浸つてゐた。ここには一帶に菫の花が多かつた、山の方のとは色も濃く、輪も大きく、その莖の葉も豐かであつた。その間にはやはり十分に水分を含んだ土筆が瑞々しくその肌觸のいい可笑しな小坊主頭を擡げてゐた。
「どうしても僕には君に戀人がないとは考へられない、敢て戀人でなくとも、君の胸にも女性の影が投げられてゐる筈だ」と信太郎はその川端を歩きながら呟いた、「君にも確かにあこがれがある、さうしてそこに罪がある！」
「そんなものではないけれども……」
「でも、それがあこがれさ、誰の胸にも忘れられない面影があるものさ！」
純一は敏子の名が唇のさきまで出て來た。けれどもそれが容易には言はれなかつた。
「小さいとき、僕が淸水さんにお祖母さんとお詣りした時に、矢張りお祖母さんと一緒にお詣りに來た女の兒があつ

てね……」と純一はおづおづ話し出した。
「ウン……さうして？……」と信太郎は振向いて、後から來る純一の顏をいつくしむやうに見た。
「その女の兒が僕を弟のやうに親しくしてくれたので、いつもその女の兒を思ひ出す……」
「その女の兒つて？　誰れかね？　町の女の兒かね？」
純一は口籠つて答へなかつた。
「少しも恥かしいことはない、眞面目な事だからね、淸子さんか、芳子さんか……」
「いいや、靜子さんの友達なのだ」
「ほう、ぢや……敏子さんだらう？」
純一の顏は少し赧くなつた。
「敏子さんだけれど……何でもないんだ、本當に何でもないんだ……」
「敏子さんなら僕も大好きだ、君が敏子さんを好くのは不思議ぢやない。あの娘はなかなか活潑で美しいからね。彼女は丁度櫻の花のやうだ、彼女とは反對に靜子さんは丁度月見草の花のやうで、ぢつと見てゐると僕の心は堪らなく惹き付けられる。あの二人はそれぞれ違つてゐるが、共に愛すべき少女だと思ふ……」信太郎は靜子のことを言つた時には、その胸が燃えるやうになつてゐるらしかつた。
「靜子さんは本當におとなしくて美しいね！」
「さう！　……まづ女性として理想的なものだと僕は思つてゐる、もつとも敏子さんもさうだがね……」
いつの間にか二人は餘程下流に來て、町近いところにゐた。大分廣くなつた河幅の向う岸には、製粉會社の水車がその齒のところを箱の間から少し見せて廻つてゐた。河の流れは半丁ほど彼方で少し彎曲を描いて、そのあたりの岸

は少し小高くなつてゐた。丁度そこに二人の中學生が踞つてゐて、その一人は釣竿をぢつと見詰めながら、何か口の中で歌つてゐた。一人はその後で畫架を立て、對岸の景色を寫してゐた。

「あれは元雄君だ、なかなか熱心にやつてるなア……」と信太郎は言つた、「釣してゐるのはよく見かける生意氣な中學生だ、何といふ奴だらう？」

「あれは西尾の別宅の子だ。」

「さうか、それでは西尾の妾の子だな、ひどく威張つてゐるぢやないか」

「ああ、何だか高慢だ」と純一は言つた。彼は父の手紙を持つてこの頃西尾の別宅へ行つた時に彼を見かけたことがあつた。純一はその大きな玄關に腰かけて返事を待つてゐる自分を、外から歸つて來た彼からぢろりと見られた時に受けた侮辱の感じは今も忘れられないのである。然るに父の淸太郎から、西尾の家のものに出會つた時はいつでも丁寧に挨拶せないけんぞと言ひ付けられてゐる事を考へると、一層屈辱の感じがこの場合彼の心を壓迫した。

「僕はここから歸らうかしら？」と純一は呟いた。

「どうして？　いいぢやないか、なぜ歸ると言ふのだ？」と信太郎は訊いた。

「でも、西尾のものには逢ひたくないんだ！」

「彼が金持の伜だつたところで何も恐れることはない、よしんば僕の親父が彼の父から大金を借りてゐたとて僕は僕だ、反つて昻然としてゐてやる！」と信太郎は純一の父が西尾の家から金を借りてゐる事を知つてゐるので、一層純一の心を引立てる爲めにきつぱり言ひ放つた。

「金が何だ！」

二人が傍らへ行つた時に、元雄が畫架から目を擧げて、

「やア、中野君か、今日來ないと思つたら龍田君と散歩してたのか」と何處か身弱な青白い面にやさしい微笑を湛へて言つた。相良先生の弟であるこの人の顔には、その顳顬のあたりに先生と同じ神經質のところがあつたが、また先生よりも柔和な性格が、その恰好のいい、いかにも丸い柔みを見せた鼻翼によつて示されてゐた。信太郎に對しては、何處か年下の者に對する同情と、信太郎の才氣を認めてゐるやうな處があつた。

「紹介しよう、西尾君」と元雄は釣をしてゐる友人を呼んだ。

西尾は一寸振返つて、二人の少年を見た、二人が自分よりも明かに年下で、しかも小學生に過ぎない事を見ると、彼は直ぐ取るにも足らぬと思つたらしく、ひどく氣乘りのしない態度で、

「僕は西尾宏です」と言つた。

「僕は中野信太郎です」と中野は氣張つて高い調子で言つた。純一は何とも言はなかつた。元雄が、

「龍田純一君です」と言ふと、

「龍田君には會つた事がある、いつか家の玄關にゐた……」

さう言ひ棄てて、西尾は川の方に向いてしまつた。純一の心は丁度雨雲からの翳りでも受けたかのやうに暗くなつた。屈辱の感が彼の身體中にさつと閃いた。彼は俯向いた。

「西尾君は釣と來ると一生懸命だからね……君のやうな性格の男が、よく呑氣な釣なんぞ出來るね？」

「釣でもしなきや、こんな下らない周圍の中にゐちやあね、堪らなく退屈だ！」と川の方に向いた儘言つた、その語氣には飽くまで驕兒の無遠慮があつた。

「退屈だなどといふ言葉は僕等の辭典には無い、理想と退屈とは相容れん二要素だ！」と信太郎が敵對的に言つた。

「理想か！」と鼻先きで言ひながら、西尾はひよいと釣竿を上げて見た。それには何も獲物はなかつた。

二人の樣子を見てゐた元雄は、
「さあ、ぼつぼつ歸らうか……」と言つて、畫架を片付けながら、「西尾君、今日僕の家へ寄らないか」
「いやだ！」
「いやならよし……」と元雄は言つて、二人とともにその畫架を提げて歩き出した。
二丁位向うの方に、高い松の樹の數本がこんもりと見えるところに、神社の千木が見えて、その周圍の二三軒の藁屋のはしの田圃に近く、瀟洒な瓦屋根の家が野の方にその座敷を向けて、白い障子が麥生の青い上にはつきりと見えてゐた。それが相良先生の家であつた。中野はここまで來ると、先生の妹の靜子の姿をその家の方に探すかのやうに見續けながら歩いた。丁度その時、神社の蔭から二人の少女が連れ立つて出て來て、そこに架つてゐる橋を渡つて、向う岸の町の方へ行つてしまつた。
「あれが靜子さんと敏子さんだ！　何處へ行つたのだらう？」と信太郎が小聲で純一に言つた。
「今日は何でも敏子さんと一緒に、お花の先生の家へ行くとか靜子は言つてゐたやうです」と元雄が言つた。信太郎の失望が純一にも傳はつて來た。

六

相良先生は單にありふれた一小學教員ではなかつた。先生の父は神主であつたので、先生もその家を繼いで神主となる筈であつたが、その當時は專ら教鞭を執つてゐた。國文學に興味を有つて、いろいろと古典をも渉獵してゐたし、また新しい文學の風潮にも觸れてゐた。國學院の講習を受ける爲めに上京してゐた時に、その社友となつてゐる××社の歌の會に出たり、その席で知つた若手の新派歌人や新體詩人やを訪問したりした事もあつて、自分も東京で歌人

として立ちたい野心に燃えてゐたが、一家の事情からそれを斷念しなければならなかつた。弟の元雄が小學時代から畫才をあらはして、その方に凝り固つてしまつたのを、止めるどころか大に激勵して、行く行くは上京させ、美術學校に入れてやりたいものだといつも言つてゐるその心持には、せめて弟だけでも世の中へ出したいといふ、かうした犧牲者のやさしい同情があつた。また先生が自分の敎へ子達にも、文學に對する愛好心を鼓吹し、歌や詩を作らせたりするのも、それがせめてもの慰めだつたのである。それ等の敎へ子の中で逸早く詩才を先生に認められたのは中野信太郎であつた。

先生の弟の元雄は兄に似て矢張り文學を解し、詩も歌も作つたが、彼の興味は專ら繪の方に向いてゐた。中學の學課よりも、畫架に向ふことの方が熱心であつた。先生の家に出入りしてゐるうちに、純一や信太郎はいつかこの年上の中學生と親友になつた。とりわけ純一は強い刺戟を受けて、自分も畫筆をとつて見たいと思つて、水彩畫の繪具を買ひ込んだ程である。いつも書物を澤山買ふので（尤も大抵祖母の家へねだりに行く事の方が多かつたが）母親から叱られてゐた彼は、その繪具の早く買ひたさに、無斷で店の賣溜めを持ち出した。今ではもう新しい酒の仕込みさへも出來ないぐらゐ逼迫してゐる家の事情は、時々彼の心を暗くするのであつたが、詩や歌や繪のことを思ふと、直ぐに心を引立てることが出來た。

歌の會が初めて相良先生の家で開かれたのは、春の末、丁度躑躅の花が先生の庭にちらほら咲き初める頃であつた。これまでにも歌の會らしい小集は度々催されたが、今度はずつと大掛りで、信太郎と純一とで書いた招待狀は二十通にも近かつた。その中には相良先生の同僚の石田錦海先生もあつた、中海の雅稱を取つてその俳號としてゐる此の先生は、歌も作つたが俳句をその本領としてゐた。また、中學の英語の敎師で、此間東京から赴任して來たばかりの人や、元雄を愛してゐる同じ中學の圖畫の先生や、舊派歌人としてかなり知られてゐる某神社の神主や、その他四五人

の中學生なども交つて、その中にはかの西尾宏も交つてゐた。あんな男だからこんな會には來ないかも知れんがと言ひながら、その葉書は元雄が自身で認めたのであつた。兎に角この地方の文學愛好者は殆んど網羅されたのである。中には三四人の女の名もあつた。それは大抵先生の妹の友人で、その一人である河野敏子の名を純一が書いた時には、胸が躍らずにはゐられなかつた。

純一と信太郎とは時間よりは少し早目に先生の家へ出かけた。川端の道をずつと歩いて行くと、松と神祉とが見え、野の方に向いてゐる先生の書齋の障子は明け放されて、暖かい緣側に腰かけてゐる二人の少女の姿が見えた。

「今日の會はなかなか有意義らしいね！」と信太郎は純一を顧みて言つた。

道から一段高くなつた神祉の境內に入ると、松葉が散り零れた中に、白い花瓣が點々と交つてゐた。遲咲の八重櫻はもう咲き古びて、半ば葉櫻になつてゐた。この地方では横屋と呼ばれる神主の住家である先生の家は、境內續きの横側にあつた。玄關の間が元雄の書齋で、障子は一枚しか動かないやうになつてゐた。けれども普通の來客は大抵この玄關よりも、横手にあるいかにも農家らしい（實際、先生の家では裏手の田を作つてゐた）入口から出入りした。

二人は元雄の書齋に通つて、いつものやうに話をしたり雜誌を見たりしながら、集つて來る人を待つた。三疊の狹い間は澤山の雜誌や書物にその半ばを埋められて、壁には名畫の寫眞版の額や雜誌の口繪の三色版や、彼自身の水彩畫などが無雜作に揭げられて、片隅には畫架や畫枠がごたごたと置かれてあつた。

「みんな遲いやうだね」と元雄は言つて、机の上の寫生帖を出して、「どうもうまく行かなくてね……」と、信太郎の手に渡した。二人が開いて見て行くと、その中に靜子や敏子らしい横顏の素描があつた。

「早く東京へ行き度い、田舍ではどうも……」と元雄は嘆息するやうに言つた。

「實際、こんな田舍では羽翼を伸ばす事は出來ませんね、僕も子供相手に何時迄も白墨を持つてゐる氣はしません」

と最近に半歳の講習をすまして、年はまだ十五であつたが、既に准教員を勤めて、尋常二年級を教へてゐる信太郎は、さも同感に堪へぬやうに言つた。

「東京にさへ行けば、美術學校には入らなくとも、うんと上達するんだがなア……」

純一は二人の話には入らずに、頻りに寫生帖を繰つて見てゐた。

「中學の先生方がお出でになつたことよ……」と靜子が入つて來て、信太郎の背後から兄に言つた。信太郎は急に身體を眞直にした。

「みんな此方へ來ないか！」と書齋の方から相良先生が呼んだ。

座蒲團を敷き並べた先生の書齋には、石田先生がすわり込んで、何やら短冊を手に取つて頻りに考へ込んでゐた。

「先生、發句ですか？」と信太郎が聲をかけた。

「やア、中野君か」と石田先生は言つて、年若い同僚――ついこの間まで生徒だつた信太郎の方に人の好い目を擧げた。

中學の先生たちが座に着くと、皆は持つて來た歌稿を硯箱の蓋の上に置いた。信太郎がその歌を順々に書き寫して、相良先生に渡した。今日の課題は『髮』と『ゆく春』とで、それが紙に書いて正面の柱に貼られてあつた。

やがて二人の友人と連れ立つて西尾宏が來た。

「やア、來たか、君は來ないだらうと思つてゐた」と信太郎の上座にゐる元雄が喜んで迎へて、「此方へ來たまへ」と言つた。西尾はつかつかとやつて來て、元雄の上座にすわつた。

「ウン、僕は歌人なんていふ柄ではないがね……」

「どうして？ 君は歌だつて旨いものさ、行くとして可ならざるなき才人だもの……」

「今日は西尾君の作に接する光榮を有するわけですね」と信太郎は相良先生の方を向いて言つた。

「西尾君、よく來てくれました、どうぞ十分詩才を奮つて下さい」と相良先生が言つた時、信太郎の顔がぴくりとしたやうに純一には見えた。

今日西尾が來ない事をひたすら願つてゐた純一は、元雄や先生から喜んで迎へられる西尾のいかにも自信のあるらしい態度に、自分よりすぐれたものに對する尊敬の念が浮んだが、それだけ彼から受ける一種の壓迫の感は一層強かつた。

靜子や敏子やまだ歌の作れない女の兒などが席に着いてから、皆は課題に向つて、部屋は一時間あまり靜かに經過した。時々紙の音が微かにしたり、隣同士の低い囁き聲がした。信太郎は二三度も純一の耳のところで、大膽に歌ひたまへと勵ました。

西尾宏が一番早く筆を擱いた。

「もう君は出來たのか？」と元雄が訊いた。

「ウン、どうせ出鱈目さ！」と事もなげに宏は言つた。

會の中頃に來た舊派歌人の神主は、少女たちの次ぎの入口のところにすわつてゐたが、

「驚きましたな、新派和歌を作られる方は自由で、早くお出來になつて結構ですな！」と言つてからからと笑つた。

「西尾君は天才だからね！」と西尾の崇拜者でもあるらしい中學生の一人がその友に小聲で言つた。

「早いことにかけてはさうかも知れん」と信太郎はまた小聲で純一に言つた。

皆がその詠を終つてから、靜子と敏子とが立上つて、兩端から集めに廻つた。敏子が硯箱の蓋を持つて自分の前に來た時、純一はこれ迄ちよいちよい遠くから見かけるだけだつた敏子が一座に加はつた時から既に感じてゐた事だが、

今更にこれが以前の敏子かと思つた。かの石段を駈け上つたり、自分の頭を撫でたりしてくれたその女の兒が、今や一人の娘となつて、自分と同じやうに歌を作るのだと考へると嬉しかつたが、然しその物腰のしとやかさ、取り澄ました美しさには、近より難い思ひをした。けれども敏子が、

「龍出さん、出來まして？」と言つて、まだ詠草を讀み返してゐる自分の顏を見た時、ぴつたりと合つたその眼には、やはり自分がいとしまれてゐるやうな閃きが感じられた。けれど宏が自分の前に來た彼女に、

「敏子さん、待つてゐましたよ」とさも親しさうに言ひかけた時、純一のほのかな喜びは、突然蔽はれてしまつた。彼には西尾がそんなにも敏子に親しげな言葉をかけるわけがわからなかつた。

「西尾君は敏子さんを知つてゐたのかね？」と相良先生が訊いた。

「よく知つてゐるのですよ。僕と松江で同じ町に育つた、謂はば幼馴染といふわけです」と宏は言つた。

「成程、さうだつたね、敏子さんは松江のお母さんの實家で大きくなられたのだつたからね……」

信太郎が相良先生の傍らの机に行つて、皆の詠草を淸書する間、雜談が方々に始まつた。

敏子と西尾とが松江で同じ町に育つた事、幼馴染であるといふ事が、これまでに經驗のない新しい不安と寂しさとを純一の心に起させた。

元雄と宏とは二人の中學の先生を相手に盛んに談をしてゐた。宏は小寺といふ英語の敎師に向つて、得意らしく、

「先生、僕も愈々近々に上京するつもりですが、どうでせう、學校は早稻田にしたものでせうか、慶應にしたものでせうか？」と訊いた。

「君は勿論文科でせうが、文科ならば矢張り早稻田でせうね！」と小寺敎諭は早稻田といふ言葉に力を入れて、「これから文壇に出ようといふには、どうしても大きな團體の力に依らなきや損ですよ。早稻田は坪內先生の沙翁の講義は

天下一品ですし、それに島村先生も英國から歸朝されて、『早稻田文學』を再興して新機運を皷吹せられるしするから、どうしても早稻田の方が君の將來に取つて有利ですよ」

「さうでせうか？」と宏はつまらない事を訊くものだと云つたやうに言つた。

「いづれにせよ、君のやうな才人の前途は實に華かなものでせう……非才僕の如き一介の英語教師は碌々として老い込むのみの運命に過ぎない人間です……」

「僕がそんなに才人でせうか？」と宏は苦笑して、「僕は先生の仰しやるやうに文壇に出ようと望んでゐるんぢやないのです。東京へ出るのは單に生き甲斐のある生活をしたい爲めです。それには文學が最も僕の個性に適すると信ずるのです！」と宏はその少し後へ引込んでゐる顋を前へ突き出すやうにして言つた。彼の淺黒く引き緊つて、爽かな閃きを放つ顏には、靑年らしい昂奮の色が浮んでゐた。

皆の前には靜子や敏子によつて、お茶や茶菓子がはこばれた。その指圖をしてゐた相良先生の細君は、今日は髮も結ひ立ての丸髷で、着物もいいのに着替へて、薄化粧をしてゐた。そこにゐる人達と何か話しては、ちらちらと向うにゐる相良先生を見やる眼からは、こんな人達の中で立ち勝つてゐる良人に對するいとしげな愛情がやさしく迸られるのであつた。

信太郎が淸書した宿題と卽題との二つの詠草の紙が、お茶を飮んだりお菓子を食べたりしてゐる人々の手から手へ廻つて行つた。それによつて秀歌を選んでは採點の紙に皆は筆を走らせた。

「さア、誰が一等でせうかな、我々舊派歌人はとても望みが無いですな」と神主の歌人が磊落に言つた。「私は今日少し所用があつて、甚だ失禮ですが、これで退散させて貰ひます、採點の結果はいづれ後日の樂しみと致しませう」と言つて、殘りのお茶を大きな口でぐッと一飮みにして、席を滑り、座蒲團を二つに折つて一禮して出て行つた。

相良先生がやや寂しみを帶びた、はつきりした聲で、信太郎によつて採點數の書き入れられた詠草を讀みはじめた。最初に宿題の『若草』の詠草が讀まれた。二點しかなかつたり、また一點もなかつたりすると、その歌が自分のであると皆に知られないやうに澄ましてゐたが、かなり高點であると自分で名乘り出て喜ぶ。中學生などは大きな聲で、

「僕の歌だッ！」と嬉しさうに叫んだりした。

「多分これが最高點でせう」と相良先生が讀み上げた歌は、皆の口々から、

「全く秀逸です、誰のお作ですか？」

「ほんとに誰方のお歌？」などといふ囁きを惹き起した。けれど誰れも名乘つて出るものがない。

「これは誰れの歌かしら？」と相良先生も信太郎に言つた。信太郎は向うの席を見遣つて、そこに俯向いてきまり惡さうにしてゐる純一の方へ聲をかけた。

「龍田君、君の作だらう？　ねえ？」

「ええ」と小さく頷いて、純一は一同の視線に戸迷つたやうに羞らつた。

「その歌には僕も感心したんだ！」と西尾宏が大きな聲で言つて、純一の顏を眞面から見た。

殘りの數百は殆んど問題にならなかつた。信太郎が自分の座席にかへつて來て、純一を見返つて、

「君のは實際よかつたよ、僕は嬉しかつた！」と感情を籠めて言ふと、

「その人はなかなか隅に置けないね、まさに少年の天才といふべきだ、もつとも僕が宿題を持つて來れば、君が最高點になれたかどうかは疑問だよ！」と言つて、宏は樂しさうに笑つた。これまで西尾の態度にも言葉にも反感を持ち續けてゐた信太郎も、この活達な言ひ方にはつい惹き付けられたと見えて、

「君はなかなか隅に置けない自信家ですね！」と言つて、その柔和な白い顏で笑つた。これまで西尾宏からいろんな

壓迫を感じてゐた純一もまた、この時丁度雲が破れて靑空を見せるやうに、思ひがけない近さで彼の心の親しさを見出した。純一は傲岸な西尾宏がこんな賢さで自分を認めようとは思はなかつたので、終りに附け加へた宏の自己賞讃をも輕く受け容れた。

「僕の最高點なのはまぐれ當りです」と純一は西尾に答へて言つた。

向うの方で少女たちが耳を澄まして聽いてゐるやうであつた。とりわけ敏子が熱心に此方を注意してゐることが純一に感じられた。純一は苦しい程の嬉しさを身體中に感じて、照れかくしに困つた。

即題の『髮』では西尾宏の著想の大膽な歌が、『ゆく春』では信太郎の技巧の圓熟した歌がそれぞれにいい點を占めた。會が終つてから、居殘つた石田先生が湯呑や座蒲團などの片付けをする敏子や靜子に、

「靜子さんも敏子さんも、もつと乙女ごころといふものを大膽に歌はぬから駄目だ。もつともまだ何も知らぬ子供に過ぎんのだから無理もない話だ」と言ふと、

「まあいやな先生！ ねえ、敏子さん、あんな事を言つて！」

「さうよ、あたしたちは西尾さん見たやうに、あんな髮の歌はとても出來つこはありませんわ。そしてあたしあんな歌は好きでないわ！ あたしは龍田さんの若草のやうなのを作りたいのよ！」と敏子が言つた。

信太郎と並んで、緣側にしやがんで、庭を見てゐた純一は、どきどきとわななくやうな心でこの言葉を聞いた。

七

歌の會がすんでから一月ほど經つた。相良先生の家のまはりの樹立には、靑葉が深い影をつくり、麥が丈高く伸び上つて、家がその包圍の中で低く小さくなつてしまつたやうに見えた。先生の家では農事の方が忙しくなつて、神主

である先生のお父さんが先きに立つて、家内中が一日中、田畑で働いたり、納屋で仕事をしたりした。とりわけ先生の奥樣は朝早くから夜晩くまで、襟をかけづめであつた。けれども先生の弟の元雄だけは、こんな忙しい中でも殆んど手傳ひらしい事もせず、學校から歸つて來ると寫生に出かけたり、書齋に閉ぢ籠つたりした。

純一は友達がないために寂しかつた。たつた一人の親しい友達である中野信太郎が、此頃はもういかにも教員らしくなつて、忙しい忙しいと嬉しい事のやうに言ひ續けて、以前のやうに繁々と往來が出來なくなつたので、彼は自然と元雄の書齋を訪れて行くことが多かつた。二人の話は信太郎のゐる時と違つて、しんみりした寂しいもので、あまり笑ひ聲も立てなかつた。二人とも靜かな沈んだ方なので、氣の利いた冗談なんかは一つも交(かは)されない代り、心と心の觸れ合ふ時にのみ生ずる感激の聲音(こわね)で、互ひの希望と惱みとを話し合つた。

「龍田君、君はさきざきの事をどう考へてゐますか？」と元雄は時どき純一に問ふことがあつた。さういふ問ひに對して、純一ははつきりした答へは出來なかつたが、問はれる度びに、元雄の語氣や表情から鼓吹(インスパイア)される何物かを感じないわけには行かなかつた。

東京へ行くといふ事が、元雄をはじめこの仲間の情熱の對象となつてゐた。

「西尾君が上京する時に、僕も上京を敢行しようと思つてゐます」と元雄が深く決心したやうな樣子で言つた時には、純一は自分も東京へ行き度いと思はずにはゐられなかつた。純一にはまだ上京して文學者にならうと云ふ望みがはつきりと胸に形造られてゐるのではなかつたが、信太郎からいつも、

「僕も行く行くは上京したいと思つてゐるが、君も上京しないか！　君はきつと上京する事によつて、君の天分を發揮するだらう、君は是非文學者として立たねばならぬ人だ！」と激勵されてゐるので、上京といふ事がいつか彼にも振り切れない夢想となつたのである。

相良先生の家へ來る度びに、純一は敏子が來てゐはしまいかと思つて、途中で胸に手を當てて見ることもあつた。顏を合せることが嬉しくもあり、恐ろしくもある期待からであつた。敏子は先生の奥樣に裁縫を敎はりに來てゐたので、茶の間の方から華かな笑ひ聲を聞くことはあつても、彼女が元雄の書齋に來ることはなかつた。けれども、たうとう落合はねばならぬ日が來た。それは先生の家の親戚に婚禮があつて、先生夫婦をはじめ、その親達や、靜子までも、その婚筵に出かけて、家には元雄がひとり留守居をしてゐる時であつた。

「靜子さんもお出でになつたのでせうか？」と純一と元雄とが話をしてゐるところへ、外からささやかに訪ねる敏子の聲が聞えた。

「君、敏子さんが……」と純一が胸をどきりとさせながら言つた。

「さう、敏子さん？」と言つて、元雄は立つて、一枚しか開かない玄關の障子を半ばあけて、顏を出して、

「敏子さん、靜子は行きましたよ、行くとか行かぬとかごたごた言つてゐましたがね……まあ上つてお話ししませんか。龍田君も來てゐますから……」

純一には何か聽き取れない聲がして、敏子が狹い入口から入つて來た。純一の眼には、セルの單衣の上に結ばれてゐる紅い帶の小さなお太鼓が、丁度眞紅な虞美人草の花のやうに映つた。たつた一輪の美しい花を青葉ばかりの中に見出した時のやうな、悲しいほどの美しさを感じて、純一は眼を伏せた。彼女は飛び離れた美人ではなかつた、色も白いといふ程ではなかつた、けれども皮膚のこまかな、ほんのりと乳色をした澄んだ感じのする顏色で、その唇の色は目立つて紅く、それがいくらか險があると言へるほど冴えた眼の色と相俟つて、情熱的な美しさをつくつてゐた。

「歌會の時から、まだ一度もお目にかかりませんでしたね」と敏子は純一にお辭儀をした時に言つた、「私はいつも參つてゐるのですけれど、靜子さんの方でばかりゐましたから……」

純一は何か言ひたい事が胸に一杯であつたが、どうしたものか一言も言はれないで、ただ含羞んで、ただ頷くばかりであつた。若し元雄がゐなかつたなら、彼はどんなにか彼女といろいろな事を話したい望みに燃えながらも、次第に氣まりの惡い沈默の苦痛に陷らなければならなかつたであらう。

「敏子さんと龍田君とはまだ一度も親しくお話しなすつたことがないのでしたか、龍田君はこんなシャイな性格ですからね。けれど親しくなると、君もなかなかよく話しする方ですね」と元雄が純一の方を見て言つた。

「ほんたうですわ、龍田さんは昔からこのやうな無口なはにかみやさんでしたわ。でも、小さい時、私とよく話をした事がありますわね」と敏子がはつきりと何かを思ひ出したやうに微笑んで言つた。彼女の顏には今日は何だか憂鬱な沈んだ色があつたけれど、その眼は純潔な少女でなくては見出すことの出來ない冴えた淸らかさに輝いてゐた。

「あの時はほんとに樂しかつたと思ひます」と純一がお祖母さんたちに連れられて淸水へ詣でた幼い時代の彼女と自分との姿を想ひ浮べて、匂み切れぬ嬉しさに微笑みながら言つた。

「君たちはいつそんなに知合ひだつたのです、龍田君はちつとも僕にそんな話はしなかつた!」と元雄は笑ふ眼で純一を見た。けれどもその眼は時どき敏子の方に、さも氣の毒さうな同情の眼つきを投げた。そしてその度びに敏子が强ひて微笑むやうなのを純一はちらと看てとつた。

三人は親しい靜かな會話の紐をゆるやかに編んで行つた。

「敏子さんは西尾君とその後お會ひになりましたか?」と元雄が訊ねた。

「いいえ」と敏子が言つた。「あの後一度も逢ひません、それに私はあの方とは少しも親しくはないのですもの」

「幼馴染だと西尾君が言つてましたが、あの男をよく御存じぢやないのですか?」

「存じてはゐますけれど……私はあの方には虐められましたもの、あまり好きではありません。あの方はあんな家の

お方だからでせう、その時分から隨分と自分がえらいと思つてゐるやうで、私たちにまで我儘に何かと命令するやうに仰しやいましたから、私は逃げてばかりゐました。惡い方ぢやありませんけれど……」

「あの男なら正にさうでせう、あの男はこの頃では女性侮蔑を主張してゐるのですよ。あの男に取つては、女性は單に玩弄物としての存在に過ぎないと言つてゐますよ。」と元雄は聲を擧げて笑つた。

「あの方の兄さんも同じやうな人です。あそこの家は皆の氣風がさうらしいやうですわ。私はあそこのやうな家は嫌ひです」

「あの男のお母さんも妾でもしようと言ふんだから、そこには道德的に何かを缺いでゐるかも知れませんよ、親父は成金だしね……然し、彼の天分はそんな背景の爲めに反つて豐富に惠まれてゐるかも知れませんよ」

「さうです、西尾君には最初は僕も中野君に劣らず反感を有つたものですが、歌會の時から僕はあの人のいいところを感じました。この間父の用で西尾の別宅へ僕が行つた時、西尾君が出て來て、僕を書齋に呼んで非常に親しく話してくれたので、もつと深くあの人が分りました。なかなかえらいところがあると思ひます！」と純一が言ふと、元雄は驚いたやうな眼で純一を見て、

「君は誰れからでもいいところを認める美點を有つてゐる人だ！」と呟くやうに言つた。

純一と敏子とが相良先生の家を出た時はもう黃昏の頃であつた。純一の後から、敏子は何かの風呂敷包みをもつて、二人は川沿ひ路とは反對の裏道を、田圃に沿うて步きながら、話はいつか今日の先生の親戚の婚禮のことに向つた。

「靜子さんは今日の御婚禮には行かないと言つてゐたのですよ。けども、さういふわけにも行かないでせうからね……」と敏子が何も知らない純一に話しかけた、「あなたは元雄さんから、私の今度の事を何もお聞きになつてゐませんの？」「いいえ、何も聞きませんよ」と純一が言つた、「どんな事があつたのです、話してよければ聞かせて下さい」

「あなたには私、言つてもいいわ。今日御婚禮のある家では、私の家とそれは隨分ごたごたしたのよ、私の事について……」

「あなたの事について？」

「あなたにはこんな事はまだ分らないわね」と敏子は溜息するやうに言つた、「あの家にはも少しの事で私が定りさうだつたのです。けれど、一寸いろんな面倒な事があつて私の方は駄目になり、急に角屋の千代子さんがお定りになつたのです。私の家は此頃だんだん身上が惡くなつて、向うの家で言ふだけの事が私の家では出來なかつたのです……」敏子は純一にといふよりも自分自身に言ふやうな言ひ方で話し續けた、「こんな事をあなたに話すのは變ですけれど、でも「私はあなたを小さい時から好きでしたから、そして……いつもあなたとしんみり話をしたいと思つてゐましたから、今すつかり私の事をお話ししますわ。でも、笑はないで下さいね」敏子の聲にも言葉にも、思ひがけない陰氣な物悲しさうな樣子が一杯になつて來た、「私はほんたうに負け嫌ひですから、隨分口惜しいのよ、今度の家へ私はちつとも嫁き度いつて云ふのぢやないのですけれど、あんなに迄定つてゐたのに、御支度が出來ないなんていふ事で、こんな恥しい目に遭ふのですもの……私よりも私のお祖母さんやお母さんがどんなに辛いか知れませんわ、お父さんが生きてゐたらこんなに迄辛い目には遭はなかつたでせうけども……女つてもの、ほんとにつまりませんわ、どんなに自分がよくても、御支度が出來ないと人から馬鹿にされるばかりですもの、外の事では私、誰れにも負けないつもりよ……でも、御支度はさう出來ませんもの……」敏子の聲はおろおろと顫へて、涙になりさうな程思ひ詰めながらも、その性分の勝氣さで堪へてゐるところに、自分でもはつきり氣付かない烈しい反抗心が燃えてゐた。

純一には敏子の話は十分には理解の出來ない問題であつたので、どう返事していいか分らなかつたけれど、その口惜しさ、悲しさには、自分の今の心に鬱勃してゐる同じ口惜しさ、悲しさを見出して、敏子にも劣らぬ憤りが湧き起

つて來て、

「ほんたうにさうです、僕だつて此頃は隨分辛いのです、僕の家も今惡くなつて行くので、色々他人から言はれる事が一々僕の胸を刺すのです」と純一は息の迫つた聲で言つた。同情の心持が彼には全身の顫へとなつて制し切れなくなつた。けれど彼は敏子の身の上について言ふことは出來なかつた。「僕は父から西尾の家へ何か借金の用事で行かされる度びに身體中が顫へるのです、女の人はもつと切ないでせう……」と純一は終りの一句は殆んど口の中で言つた。

「靜子さんは隨分私に同情して慰めて下さるんですけども、でも、あの家とは御親戚ですもの、そんなにはこの事をお話しいたしません、それに私はちつともあの家へ嫁き度いのぢやないのです、あの家の當人はさういい出來ぢやありませんわね、龍田さん」と寂しげに敏子は笑つて言つた。

純一にもその先生の親戚の家の息子といふのが、今自分と一緒に歩いてゐる美しい敏子の良人として相當してゐるとは思へないし、またさう思ひたくもなかつた。

「あなたはそんな家へ行かない方がどんなによかつたでせう」

「ええ、ええ、私は何處へもお嫁になんか行きたくはないのよ、ですから私、いつもお祖母さんやお母さんにさう言つては叱られてゐますわ。でも、私はね、いろんなうるさい事が嫌やですから、出來る事ならずつと遠くの誰れも訪ねて來ない深い山の中で、丁度昔のお坊さまが佛樣に仕へたやうにひとり靜かに行ひすまして、歌を作るか繪をかくかして、誰れにも知られず、誰れにも汚されないで、淸らかな一生を送りたいのよ。それが私の性分に適ふのよ。さうは思ひませんか、龍田さん」

「僕もさういふ事が出來るならしたいと思ひます。僕には商賣なんか出來ないのです、家の酒屋の商賣も好きぢやないのです。人にお辭儀をしたり、お金の催促に行つたり、借金の詫びに行つたりする事が堪らないほど嫌やですから

ね。それで、淀江の叔父が僕によくお前は商賣人には向かん、親父よりもつと商賣には駄目だから、いつその事××寺へ願つて小僧になれと言ふのです。いつそさうなつてもいいと思ひます……」

「まあ、あなたをそんなに言ふなんて？　あなたはそんな事をしてはいけません。でもね、冗談ですけれど、私はあなたとお友達になつて、たつた二人で誰れも來ない處へ行つてしまひたいわね」敏子はかう言つて、急に晴れやかになつて、「お寺と言へば淸水さんへ詣つた時、私は隨分お轉婆だつたでせう？　石段を驅け上つた時、あなたに私の眞似は出來なかつた事ね、あの路でお祖母さん達から恐い話を聞いた事を覺えてゐますか？」

「よく思ひ出します」と純一は短かく答へたきり、後は何も言はなかつた。默つて歩いて行く二人の足音が靜かな闇の中に、言葉には言へぬ親しさを感じさせた。左手の田圃にはもう蛙が鳴いてゐたが、右手には小さな溝を隔てて、町家の裏口がずつと續いてゐて、中には高い板塀もあり、低い生垣の中に茶園などもあつて、稀に臺所を見せてゐる裏口からは、洋燈のあかりが黄色く洩れて來て、魚の燒かれる匂ひがほのかに漂つてゐた。あの家の裏口ではまだ取り入れぬ襁褓の布れがぼうと浮んでゐるのが見えた。人通りは少しもなかつた。遠くの野の向うには、そこに住む人人の灯りがちらちらと瞬いてゐた。いつか二人はすつかり肩の並ぶやうに歩いてゐた。その肩は既に純一の方が少しく高くなつて、それとは反對に、敏子の肩には處女の美しい線が柔かに丸みをもつて流れてゐた。敏子の美しさには純一の思ひもかけぬ不思議なものがあつた。彼女の微かな呼吸が時どき純一の耳もと近くした。

　やがて二人のわかれ路に來ると、互ひに默つて立止つた、そして二人ともまだ何だか言ひ足りないやうな心持で、思はずぼんやりと立つてゐたが、ふと恥しくなつたやうに、

「私あなたにまたお手紙を上げますわ」と敏子は小さな聲で言つて、「さやうなら……」と小走りに明るい表通りの灯影の方へ行つてしまつた。

八

少女(をとめ)はかたる、
われは君をば救はんと、
世の迷へる人よ、悩める人よ、
われに來れと。
その美しき夢、美しき心、
君がのぞみのたふとさは
ただ見る身にもうれしくて、
われも讃(たた)へん、をとめ心を。

敏子がどうして手紙をくれると言つたのか、純一にはその心持がよくわからなかつた。事によつたら自分の耳の聞きあやまりではなかつたらうかと彼は思つた。敏子と連れ立つて話しながら歸つた事さへ、純一には奇(あや)しい空想の所産のやうに思はれる程なので、手紙が實際自分の目の前に來る迄は、それは信じられない事實であつた。殊にこれ迄女の友達から手紙を貰ふなどと云ふ經驗のない純一は、それを貰つてもいいものであらうかと、虞(おそ)れと喜びとの入り混(まじ)つた苦しい期待の中に二三日を過した。もう來ないのだ、あんなには言つても手紙なんかさうくれる筈はないと諦らめようとすると、何とも言へぬ寂しい氣持に襲はれるのであつた。

「お母さん、僕に手紙が來てやしない？」と純一はその日も店の狀差しに重つてゐる澤山の取引上の手紙を探しなが

ら、若しかといふ氣で母親のおしまに訊いて見た。
「おまへに手紙が？　どげな手紙だ？」と店の賣場を片付けてゐたおしまは純一の顏をまじまじと見て言つた、「今朝來た手紙があつたぞ、お父さんの枕もとに行つて見い！」
純一は急いで奧の間へ行つて見た。昨夜遲く出雲の方から歸つた淸太郞はひどく困憊した樣子でまだぐつすり眠つてゐた。その寢顏はまるで大病人のやうに土色をして、喘ぐやうな寢息を立ててゐた。その父の樣子を見ると、純一は見まい見まいとしてゐる暗い影に突き合せられたやうに、胸が塞がるやうな氣がした。家族の者には商賣上の事は少しも話さないで、自分一人で苦しんでゐる父を見ると、純一の心は父に詫び度いと思ふ感情で一杯になるのであつた。彼はこの氣の毒な父の運命のよくなる事を祈りたいと思つた。
父の枕もとには大阪から送つて來る相場新聞と、釀造新報との間に、二通の手紙があつた。その一つを見ると、それは彼の名あてであつた。彼はそれを抱へて急いで裏の中庭へ逃げ出した。酒藏の前では晉と新太とが鼻唄をうたひながら樽を洗つてゐた。彼は中庭の片隅の棗の樹の下へ行つて、その幹にもたれて手紙の封を切つた。
「純一さま、此間はほんたうに失禮しました、以前からあなたとお話しいたしたいと私はいつも思つてゐましたが、たうとうお話しが出來て嬉しうございました。でも、私があまりにおしやべりをいたしたものですから、あなたは屹度びつくりなすつたでせう、御免なさいね。どうしたものか、私はあなたには何もかもお話しいたしたくなるのです。あの時にお話ししましたことは、ほんたうに何でもないことなのです、今なんかもうちつともあのことなんか考へてゐやしません、ですから心配しないで下さいね。私の事よりもあの時あなたから伺つた、あなたの御家のことが案じられてゐます、町の評判であなたの御家のことはよく存じてゐます、隨分心配な噂も聞いてゐますから、あなたがどんなにおつらいかお察しいたします。あなたのやうな優しい方がいろいろな苦勞をなさるのを見ると、私はほんたう

に世の中がつくづく憎いと思ひます。若し私にお金がうんとあつたらいろいろ善い事もし、勉強する人の學費を出したり、不幸な人を助けてあげたいと思ひますわ。けど、女では仕方がありませんわね、私は自分が男であつたらといつも思ひますのよ。でも、若しお金持の家からお嫁に來てくれと言つてくるやうな事でもあつたら、私は少しぐらゐ辛くつてもその家へ行つて、自分の自由になる時が來たらどんどんみんなに上げてしまひたいのよ。でもこんな事は夢かも知れませんわ。寂しい時にはいつでも私にお手紙を下さい、私はいつもあなたの事を心配してをりますもの」

純一はこの手紙を幾度びも繰返して讀んだ。讀み返す度びに、彼の心には敏子に對するなつかしさ、慕はしさの慕つて來るのが感じられた。この感情の中には、宛かも弟が姉に愛されるやうな氣持と、年上の友達から慰められるやうな氣持とが加はつてゐた。信太郎や元雄から受ける友情や、また肉身の父母から受ける愛情などよりも、もつと彼の心の奥底にまで徹するやうな力強いものがあつた。

「僕はこれからどんな事があつても、少しも恐れない。どんな輕蔑を受けても、どんな苦しい事に出逢つても、僕は堪へ忍ぶことが出來る。いくら年上だと云つても、女の人でさへあんなにしつかりしてゐるのに、男の僕が意氣地なしでは恥しいことだ。僕は僕の家がどうならうとも、自分で自分の運命を拓り開いて行くんだ！」彼はかう自分の心に言ひ聽かせながら、敏子への返事を書きに家へ入つて行つた。

父のところには來客があつた。

「西尾の家から來た人？」と純一が姉の梅子に訊いた。梅子は茶托を拭いてゐたが、その眼には妙に鋭い光を含ませて、下唇を嚙むやうにしてゐた。

「あア、西尾の家から來た人よ、大分ひどい話をしてゐるわ、お父さんがかはいさうだわ……」

純一が耳を澄ますと、奥の間には低い客の聲がして、父の咳拂ひが暫くして續いた。この咳拂ひは父がひどく當惑

した時などに、いつも間を取る爲めにするものなので、純一には今西尾からの使ひと話し合つてゐる事柄が、父に取つて餘程の難題であることがわかつた。これ迄にも西尾からの使ひは幾度となく來たのであるが、今日はとりわけ不吉な豫感を純一の胸に與へるのであつた。二三日前の夜、母のおしまが何か大切なものの入つた函とか家族の晴着とかを大風呂敷に包んで、祖母の家へ持つて行つた時、

「事によつたら西尾から差押へが來るかも知れんから……」と梅子に言つてゐた事が純一の頭にはつきりと想ひ出された。

純一は何とも自分では制御の出來ない憤りに燃えて來た。何物にか自分自身を投げ付けたいやうな昂奮に驅られて、二階の段梯子を一氣に駈け上つて、自分の机の前にすわると、直ぐ筆を執つて敏子への手紙を書き始めた。

「敏子さん、お手紙有難うございました。先日は私こそ失禮をいたしました。あの時はいろいろ親切に言つて下すつて有難う。私もあなたにはいつか一度お話しを致し度いと思つてゐましたが、いい折りがなかつたのです。あんなに急にお話が出來たばかりか、あなたの御心配まで打明けて下すつた事をうれしく思ひます。お別れする時にお手紙を下さるやうに仰しやいましたが、何だか耳の聞きあやまりではないかと思はれて、本當に出來ない位でしたが、お手紙を手にした時はどんなに嬉しかつたでせう。これ迄一度もこんなお手紙を頂いたことがないので、何度も繰返して讀んで、何とも言へない慰めを得ました。私には姉はありますけれど、それ程私と話をいたしません、姉は始終母と一緒に家の事ばかりしてゐまして、私の心の寂しさや物足りなさは餘り知つてくれませんので、お手紙を讀むと、親身の姉よりももつと親しい姉さまのやうな氣がいたしました。

寂しい時にはいつでもお手紙を下さいと言つて下すつたので、直ぐ今こんな手紙を差上げたくなりました。實は今私の家へは西尾からの使ひが來て、奥の間で父と話をしてゐるのです。話の樣子はよくわかりませんが、何だか今度

こそいやな事が起るやうな氣が私にはするのです。私の家ももう今度こそは愈々駄目のやうです。それで私はもうとても中學へは入れないやうです。中野君は自分と同じやうに講習へ行つて、小學教員にならないかと勸めますけれど、私には高い教壇に立つてしやべつたりする事は出來さうにもありません。父は私の身の上の事は一向構つてはくれないのですけれど、また强ひて私を自分の思ひ通りにしようともしないやうですから、私は自分で自分の前途を開拓して行きたいと思ひます。元雄君や西尾君はもう直ぐ東京へ行くさうですし、中野君も來年あたりは上京すると言つてゐます。友達が皆上京して、自分ひとり後に取殘されてしまふやうな氣がして寂しくてなりません。中野君は頻りに僕にも、自分が上京する時には一緒に行かないか、上京しさへすれば君はえらくなれる人だと言ふのです。僕も何だかそんな氣がします。外の事には何にも役立ちさうには思はれませんが、文學の方に行けばえらくなれるやうな氣がします。そして僕がえらくなれたら、どんなにいい事が澤山出來るでせう。自分の筆でもつて、どうかして弱い人たちや、苦しんでゐる人たちを救つてやつたり、慰めてやつたり出來たなら、どんなに幸福でせうか。

けれども父があのやうに苦しんでゐるのを見ますと、中學へ行くことも、東京へ出ることも皆放擲して、父と一緒に苦しみ、一緒に働きたいといふ氣もします。母の話では、或ひは近いうちに西尾から差押處分があるかも知れないといふ事で、若しさうなればこれ迄にもまして、どんなにか苦しい目、恥しい目に遭はなければならないでせう。けれど僕も男子です、どんなに笑はれても辱しめられても、それは何でもありません。僕はどうしてもえらくなつて見せます、えらくなつて、そんな人たちを見返してやりたいと思ひます。

この間お逢ひした翌日、灘町の祖母の家へまゐりましたら、丁度來合せた人と祖母とが、あなたのお家の事や、今度の事やを話してをりました。祖母はあなたの事を大變しつかりした子だと言つて賞めてゐました。祖母はいい人です、僕は家の人の誰れよりも祖母がなつかしくてなりません。丁度あなたが松江の方で大きくなられたやうに、僕は

祖母の家で育てられたのですから、僕は誰れよりも祖母が好きです。では、今日はこれで筆を擱きます」
純一が手紙を持つて下におりた時には、西尾の使ひの者はもう歸つてゐた。奥の間には父と母との話聲がひそひそしてゐた。
「誰れにやる手紙？」と梅子が寄つて來て手紙を取つて見ようとした。
「いやだ、いやだ！」と純一は惡い事でも見付けられたやうに、狼狽して一散におもてへ出てしまつた。町角のポストのところへ行つて、手紙を投げ入れたが、何だか不安なやうな氣がして、そこを立去りかねてゐると、後からポンと肩を叩いて、
「坊ちやん、何しておゐでだ？」と新太の聲がした。純一が振返つて見ると、今理髪店へ行つて來たと見えて、角刈頭のもみあげをひどく短かく剃り上げた新太が、にやにやと笑つてそこに立つてゐた。
「西尾から來ましたな？」
「ウン」と純一がひどく侮辱されたもののやうに生返事をすると、
「坊ちやんのお父さんも今度はなかなか辛からうぜ。西尾は評判の因業な家だから、あそこで金を借りたが最後、家はつぶれるにきまつとると云ふからな。俺も音造もこのうちに暇を取つて、稻田屋の方へ行く約束が出來とるんだが、旦那の顔を見ると、どうも言ひにくくつてな……音造が俺が言つてやるつていふから宜えやうなものの……」と新太は呟くやうに言つた。新太が行つてしまつてから、純一はもう家へ歸る氣がしなくなつて、暫く四つ角にぼんやり立つてゐた。彼は誰れも彼れもが父や自分を見棄てて行くやうな氣がして、急に心細い滅入るやうな氣持になつた。彼はとぼとぼと祖母の家の方へ歩き出した。
灘町の少し手前の岩倉町に敏子の家はあつた。海産物の問屋であつたが、附近に競爭者が出來たり、主人がなくな

つて總領息子がまだ年若であつたりする爲めに、その店は古風で、構への大きいだけに、一層寂れた感じを與へた。
純一はこの店が敏子の家であるといふことを祖母に聞いてからは、その店の前を通る毎によく注意して見た。奥深い店の店さきには、昆布や乾烏賊や鰹節などが澤山の箱の中に堆くなつてゐて、海産物らしい匂ひが通りの方にまで漂つてゐた。いつ通つて見ても、敏子がその店にすわつてゐるといふ事はなかつた。店番には大抵敏子の祖母がすわつてゐた。最初純一がこの店の前で一寸立止つて覗き込んだ時に、その老媼さんがふつと顔をあげて、何だか見覺えでもあるらしく愛想よく笑つたので、純一はあわててお辭儀をして、眞赤になつて駈け出してしまつたものである。
「今日は敏子さんがあの店にゐるといいな」と純一はとりわけすがりたいやうな、慰められたいやうな心持で、その店の前まで來ると、いきなり後からばたばたと走つて來た女の兒が、
「おばさん、海苔を頂戴！」と言つて店の中へ駈け込んだ。純一が見ると、今日はおばあさんではなく、色の蒼白い、すらりとした三十五六の束ね髮の病身らしい女の人が立上つて、海苔の箱の方へ行つた。
「これが敏子さんのお母さんだ、やつぱり病氣なんだな」と純一は痛ましい氣持がして、見るともなく、歩きながら見ると、女の人はそのほつそりした透き通るやうな白い手で、眞黒な海苔の幾帖かを取り出して紙に包んだ。その横顔は敏子のそれを想はせて、高い鼻が刻まれたやうに浮いて、病氣のために頰のこけたところに、淒いやうな美しさがあつた。
「何といふ美しいお母さんだらう！」と純一は心の中で思ひながら通り過ぎた。さつき自分の入れた手紙が、あのお母さんのほつそりした手で敏子に渡されるであらうと思ふと、純一には涙ぐましいやうな、不思議な嬉しい心持がした。
お祖母さんの家には珍らしく誰れも來てゐなかつた。

「おばあさん、何處にゐるの？」と純一が寂しさうに呼ぶと、やがて便所からおばあさんが、
「純一か、どげした？」と言つて出て來た。そしてぢやぶぢやぶと手を洗ひながら、「何か叱られでもしたか？」
「そんな事ぢやない」と答へながら、純一はその幼い時に遊び廻つた思出の深い小さな店にあがつて行つた。子供の時と同じやうに、祖母は茶簞笥から菓子を取出して純一にやつた。純一も長い間の習慣で、祖母の家に行くと、まるで生れた家に歸つて來たやうなくつろいだ氣持になつて、すつかり小さい子供の昔にかへつて、甘つたれるやうな事を言つた。
「おばあさん、差押つてほんたうに恐ろしいね……」と純一は菓子を食べながら言つた。
「アア、差押へかえ、そりや嫌やなものだとも、執達吏がやつて來て、家中にあるもので少しでも金目なものには、みんなぺたぺたと封印を貼りつけてしまふのだからな……」
「簞笥も戸棚も？」
「何もかもだ」
「僕の本も？」
「おまへの本まで封印することもあるまい、若し家に置くが心配だつたら、おまへの本も机もおばあさんの家へ持つて來い」
かう言つた祖母の目には涙が光つてゐた。

九

たうとう執達吏が純一の家に來た。

純一が學校から歸つて見ると、店の大戸はまるで夜中のやうに鎖されて、急に盲目になつた人のやうに、家全體が陰鬱になつてゐた。純一は胸がどきりとして、どうしていいかわからなくなつていつそ祖母の家へでも行かうかと思つてゐると、くぐり戸を開けて梅子が顔を出して呼んだ。

「早くおはひり！」

梅子の顔にはあたりを憚るやうな暗い影があつた。純一がくぐり戸を入ると、すぐ後ろをぴたりと閉めた。

「どんなになつてゐるのであらう？」と我家ながらまるで初めての家へでも入り込むやうに、純一が薄暗い四方に眼を遣りながら、おづおづしてゐると、

「心配しなくてもいいのよ」と梅子が囁いた、「直ぐにお父さんが元通りにすると言つてゐるから……」

裏の方は明るかつた。まるで家があべこべに向き返つたやうで、不思議な寂しい氣がした。午後の光は土間へ斜めにさし込んで、その光の中に蠅が樂しさうに飛んでゐるのが見えた。

「僕の本はどうなつたんだらう？」

「おまへの本なんかどうもしやしないよ、お母さんや姉さんの着物は大分押へられたけれど、今にお父さんが取戻してくれるからいい！」と梅子は昂奮した聲で言つた。

大戸は一週間あまりも閉められたままであつた。その間、親戚の者が來て、父と評定したり、父が一日何處かへ出て行つたり、母が淀江の方へ行つたりして、暗い日が幾日も幾日も續いた。晋と新太ももう稻田屋の方へ行つてしまつたので、藏の方もひつそりと死んだやうであつた。

「この先き家はどうなるのだらう？」と思ひながら、純一は勉强も何も手に着かず、學校へも行きたくなかつた。

彼は時々敏子に手紙を書いた。敏子からもやさしい慰めの返事が來た。敏子からのかうした同情がなければ、彼は

病氣になつたかも知れなかつた。

半月あまりもごだごだのあつた末に、一家は町外れの小さな借家に引越して行くことになつた。西尾以外にも、いろいろな處から金を借りてゐたので、債權者の方の協議の結果、家屋敷や酒藏などの不動產全部を提供した上、その不足額は證書の受判をしてゐた二三の親戚の方で支辨する事になり、あとにはおしまやおよしの名義に書替へてあつたもののみが殘つたのである。

越して行つたところは顯町の外れで、裏には汚ない掘割があつて、それが深浦と呼ぶ城山の下の入江に通じてゐて、朝早く中海で漁つた魚を載せて、その町内の漁夫が歸つて來ると、附近の女房たちが笊をもつて堀端の石段のところに集つて、がやがや騷ぎながら、爭つてその魚を買ふのであつた。以前なら自分でそんな買物などをした事のないおしまも、その中に混つて、その魚を買つて來た。純一や梅子はそれをおいしがつて食べた。ただ父親だけは、おしまに、

「おまへが買ひに行くのはやめにせえ！」と苦いやうな顏をして言つたが、彼も、

「何しろ生きが宜えからうまい！」と言つて、それを肴に朝から屈託さうな酒を飲んだ。

清太郎のところへは、鳥取の方で今度あらたに酒造業を始めようとする人から、杜氏に來てくれないかといふ相談があつたし、また同じ町の酒造家からも、彼の酒造の手腕を賞めて、顧問といふやうな名目で招かれたが、彼は二つともことわつて、冬のはじめまで、出雲方面の貸金の取立てに行つたり、大阪の方へ出かけたりして、取りとめのない幾月かを過した。

純一は卒業間近ではあつたが、學校へ行くのが嫌やなので、相良先生や石田先生に幾度となく忠告されたけれど、たうとう學校を退いてしまつた。母親のおしまは心配して、叱つたり宥めたりしたが、父の清太郎は、

「困つた奴だ！」と言ふばかりで、別にその事は何とも言はなかつた。彼は毎日のやうに祖母の家へ行つて、自分の好きな本を讀んだりいろいろ書いたりしてゐた。

「學校が嫌やか、それも無理がない、もう中學校へも行けんだから、家で好きな本を讀んで勉强するが宜え、要る本はおばあさんが買つてやる……」と祖母は不幸な孫をいつもいたはるのであつた。

純一の方がこのやうに落目になつて行つた時、かの好運な西尾宏が上京したといふ事が、久し振りで逢つた元雄の口から傳へられた。

「昨夜、西尾君の上京を停車場へ送つて行きました。意氣揚々として、君も直ぐ來給へと言つて發つて行つたが、その時僕は何だか自分といふものが餘りに腑甲斐ない慘めな人間のやうな氣がして、堪らなく寂しい氣持がしました。本來ならば一緒に行く筈だつたのだが、ただ東京へ行つたところで、後から學費が來なければどうする事も出來ませんからね。僕は身體が弱いから到底苦學するなんて柄でもないし……」と元雄は沈んだ聲で言ひ續けた。「西尾宏君のやうにいい背景をもつてゐて、自分のしたい事の出來るといふのも天分の一つだと思ふ。僕はこの頃つくづくその人の運命が卽ちその人の天分だと考へるやうになりました……」

純一もまた、いかにもその通りだと考へて嘆息した。

「君はこの頃敏子さんとやはり文通してゐますか？」と元雄が突然訊いた。純一は赧くなつて、ただ頷いた。

「では敏子さんに起つた新しい結婚の話を知つてゐますか？　どう考へますか？」

「新しい結婚の話ですつて？」と純一は問ひ返した。この間に來た敏子の手紙に、何か煩悶があるらしく、何の事か自分にはわからないやうな惱ましさうな言葉が繰返されてあつた事を彼は思ひ出した。「僕はあまりそんな事は知りません」

「知らないのですか？　實はね、西尾宏君の兄で、早稲田の商科出の人が、今頻りにあの人を懇望してゐるのです。あのやうな家の人ですから、敏子さんの人格を認めての話ではなく、單にあの人の美貌と家柄とで自分に箔を付けたいのでせう。僕などは敏子さんが直ぐにも拒絶すればいいと思ふけれど、何だかさうではなささうですよ。靜子の話によると、何でもこの前僕の家の親戚があの人を急にことわつた事があつて、そんな意地から事によつたら西尾の家へ嫁きさうだと言つてゐましたよ。いくら金があつたところで、西尾の家は實に嚴い家ですから、敏子さんもあそこへ行けば隨分辛いでせう……僕が敏子さんの兄だつたら止めさせるのですがね……」

純一は敏子がいつかの手紙に、お金があつたらどんないい事でも出來るから、お金のある家へ嫁きたいと書いてゐた事が思ひ當つて、思はずびくりとした。どうかしてそんな考へをやめさせたいと思つた。とりわけ西尾の家へは嫁かせたくなかつた。なぜ敏子が自分にそんな事をちつとも話してくれなかつたのだらうと思ふと、自分がやつぱり子供扱ひされてゐるやうで、恨みたいやうな物寂しい氣がした。

純一は急いで手紙を書きたくなつて、そこそこに元雄と別れて自分の家に歸つて來た。自分の机の前に來て見ると、敏子からの手紙が書物の上に置かれてあつた。夢中で封を切つて見ると、たつた一枚しか書かれてなかつた。

「純一さま、私は急に用事が出來て、松江の母の實家の方へまゐります、この手紙をお讀みになる時分は、もうこちらにはゐないのです。發つ前に一度お目にかかりたかつたのですけども、思ふやうにならぬ私の身の上ですからどうぞ許して下さい。またあちらから手紙をさしあげます。私はいつもあなたの事を忘れません。では、御達者に」

純一はこの手紙を見ると、急に支へ棒でももぎ取られたやうに突つ伏して、痛ましげな聲を放つて泣き出してしまつた。

「もうこちらにはゐないのです……」といふ敏子の別れの言葉が、純一の胸を顫かせるのであつた。たとひ敏子がま

だこちらにゐて、明日發つといふ知らせであつたにしても、純一には敏子に逢ふ機會がどうしてつくられよう。それなのに今はもうゐないのだ。まるで自分の手から流れ去つた美しい花のやうに、彼女の姿は消え去つたのだ。これが永遠の別れなのではあるまいか、彼女は死ぬのではあるまいか、彼は不安と愛慕との心からそんな事まで考へた。けれども、彼女が松江に行くのは今度の西尾からの結婚の話を避けよう爲めではなからうか、彼はかう思ひ返して自分を慰めた。たとひ敏子が金持の家に嫁きたいとは思つてゐても、西尾の家のやうな評判の惡い家の、しかも宏の兄などと結婚しようとは思はれないのである。

純一は今はもう敏子に手紙を書くことも出來ないので、筆を執つて、ノオトブックに幾枚もの長い感傷的な文章を書き綴つた。彼は幾度びも筆を走らせながら泣いた。

純一はその後目立つて元氣がなくなつた。その眼の色はどんよりして、あてどもなく漂つてゐた。食事もあまりすすまなかつたので、母親のおじまが、

「おまへは何處か惡いのだねえか？」と心配さうに訊いた位である。純一は祖母の家へ行くといくらか元氣になつて、それとなく敏子のことを祖母の口から言ひ出させようとするやうに話しかけては、祖母から、

「おまへはよくお時さんの孫の話を聞きたがるが、あの子が餘つ程好きだと見えるな、おばあさんがお嫁に貰つてやらうか……」と言はれて眞赤になつたりした。

此頃父の淸太郎はいつも新しい企てが頭の中に出來上つた時にするやうに、ふつと思ひ出したやうに純一や梅子にやさしい言葉をかけた。或る晩酌の時に、傍らにゐた純一に、

「おまへも今のうちしつかり勉强して中學校の試驗に通るやうにするが宜えぞ！　お父さんが今度こそは屹度受け合つて中學校へ入れてやる！」と言つたことがあり、また、「舟の中か、それとも誰れも來ない處でおれの目論見通り萬

事成功したら、梅子のやつにも嫁入の支度はうんとしてやる！」と言つたりするので、おしまはまたそれが心配でならないと云つたやうな樣子であつた。

ある日、純一が掘割のところに佇んでゐると、向うから見覺えのある大根島の鹿太郎が何か土産物らしい包みと洋傘とを提げて、橋を渡つててくてくと來るのが見えた。家へ來るのだなと純一は思つた。鹿太郎は手代の一雄が大阪へ行つたので、その代りに雇ひ入れた時分から、父がいつも目をかけてやつてゐた男で、算筆も立つし、辯口も達者だし、萬事はきはきして氣が利いてゐるので、しまひには出雲の鯛の浦といふ處へ支店を出させる迄になつた。すると或時、酒が腐つてしまつたから勘定を待つてくれと云つて、瓶詰にした腐つた酒を一瓶送つて來たので、淸太郎が心配して鯛の浦へ出かけて行くと、鹿太郎は生憎その日は土地の料理屋で妓を何人もあげて大盡遊びをしてゐたさうである。利巧なだけに油斷のならぬ男だと、おしまはいつも良人に警戒させるやうに言つてゐた。

純一が家に歸つて見ると、むかうの部屋で父と鹿太郎とがもう酒肴の膳を中にして飮んだり話したりしてゐた。たつた三間しかない家なので、その話聲が耳について純一は何も出來なかつた。

「わしもこれ迄旦那に對しちや隨分すまん事もしとりますが、旦那の苦勞してゐなさるのを見て、後足で砂をかけるやうな、そげな手合ひとは譯が違ひます……」鹿太郎は反齒の唇をぺろりと嘗めて言つた。「わしの出來るだけの事はさせて頂かうと思つとりますよ……わしはこれでなかなか情に厚い男でして……」

「そげだ！　おまへは全く親切な人間だ、そげだもんで、わしもこれ迄おまへばかりは親身に思つて來た、これからも色々おまへの手を貸して貰ひたいと思つとる……」と淸太郎は杯を鹿太郎にさしながら言つた。「今日おまへをわざわざ呼んだのは外でもないが、わしは今度少し思ひ立つた事があつてな、一つその相談に乘つて貰ひたいのだが……」

「それはまたどげな事で？　今度こそ御恩返しに一肌ぬぎませう」と鹿太郎は膝を乘出して訊いた。

「實は……」と清太郎は聲をひそめて「わしもあげな事情ですつかり弱つてしまつたが、されぱと云つて、此儘何もせずにくすぶつてをる譯にも行かんもんでな、杜氏に來てくれといふ話も大分あつたが、今更人の下に使はれる氣にもなれず、何とか一旗擧げるつもりだが……今度は一つ際どい事をやつて見ようと思ふのだ……」

「フン、成程」と鹿太郎け耳を傾けた。

「ここへ來てから、よく裏の掘割へ出て、深浦の方から歸つて來る舟を見たり、あそこに繋いである舟に下りて見たりするのだが、それから考へ付いた事があるのだ」

「フン、それで？」

「これで酒を造るのも並大抵の事ぢやない、一寸油斷をすると惡くなるし、そげな事がなくても稅金ばかり滅法に高くて、なんぼ儲かつても皆納めてしまふやうなもんだから、いつ迄たつても苦しいばつかりだ、そげだもんで、惡い事とは知つとるが、今度一つ舟の中で造つて見ようかと思ふ……」

「え、舟の中で？」と鹿太郎はまじまじと清太郎の顏を見て、「そりやまた、どげな工合に？」

「この裏に直ぐ舟が着くやうになつとるから、夜分にやれば誰れの目にも付かんつもりだ、晝間は沖に出てをれば、當り前の荷船だと思つて嫌疑を受ける氣づかひはないつもりだ、萬一見付けられた時には直ぐ海の中へうつしてしまへばそれきりだ……」

「したが、それだけの事をするには餘つ程大きな船でなくつちや……また、大きな船だと直ぐ人の目に着きますからな、これはなかなか容易な事ぢやございませんぞ」と鹿太郎はいつものくるくるした眼を一層くるくるッとさせて言つた。その語氣には何だか清太郎の突飛な思ひ付を嗤つてでもゐるやうな調子があつた。

「成程、それもさうだ……それに始終沖合ひを往つたり來たりしてゐるのもなかなか大變だらうな……もつと骨の折

れぬ安心な遣り方もありさうなもんだが……」

「わしの考へますには、舟なんかではとても不自由で良え酒は出來ますまい、それよりかわしの家のある大根島は、あげな離れ島で、汽船は日に一二度しか寄りやしませんから、その時さへ用心すりやどげに樂に遣れるか知れません……」

「フン、大根島でな！　成程、そりや名案だ！」と淸太郞は膝を打たんばかりにして喜んだ。「どげして今迄その智惠が浮ばなかつたかな……わしも箍がゆるんだわい」と高聲に笑つた。なほも二人はいろいろと相談するらしかつた。

十

牡丹の花の名所として知られてゐる大根島は中海の少し北寄りにある島で、孤島とは云つても、その中には村が二つ三つもあつて、寺もあり村役場もあり、小學校の校舍もあつた。島の中央にはかなり高い山があつて、その山からは島全體が襞を取つた縁のやうに見下され、夜見ヶ濱寄りにはなほ小大根島と云はれる撮んだやうな小島が、丁度傳馬船が親船に曳かれて水の上にゐるやうに見られるのであつた。

淸太郞が鹿太郞と相談の結果、この大根島に渡つて來たのは、もう北風が日本海から吹き付けて、中海の波さへも白く暴されたやうに捲き返る冬の初めであつた。母のおしまの口添へから、純一は父に隨いて一緒にこの島に來た。彼は父の仕事の手傳ひをしたり、また父の樣子を注意したりするようにといふ母の言ひ付けからばかりでなく、また敏子が急に去つてしまつた後の遣り所のない心と、父を憐れむ心とから、むしろ自分から進んでこの離れ島に來たのであるが、鹿太郞から美しい島としていつも噂に聞かされてゐたその島とは別の島ではないかと思はれる程、彼が上陸した日の大根島は薄暗い冬日の下に荒凉として横はつてゐた。

松江通ひの小蒸汽船から艀に乗り移つて、島の西側にある波入村の入江といふ、この島の港になつてゐる小なさ入江のやうな掘割へ入つて行くと、河岸の方を眺めてゐた父が、

「ア、鹿太郎が彼處にゐる」と純一に敎へた。見ると河岸ぞひにはつきりと見える看板には酒といふ字が大きく讀まれた。それは平家建の藁葺の馬鹿に間口の廣い店であつた、その入口に鹿太郎は立つてゐるのだ。

　親子が鹿太郎の家の方へ上ると、鹿太郎は喜んで迎へて、大きな聲で奥にゐる母親や家内の者を呼んで、艀から荷物を搬ばせた。

「よう、坊ちやんもお出でなしたかい、こげな多なかで坊ちやんの御覽になるものもないでね、春だと牡丹の花がえらい綺麗だが……」と鹿太郎は純一にまで愛想よく話しかけた。鹿太郎の母親も家内の者も、淸太郎に丁寧にお辭儀をしたり、これ迄の禮を言つたりした。

　鹿太郎の世話で、親子がこの島に住んで、その仕事を始める家はもう定められてゐた。それは鹿太郎の店から二三丁奥へ入つた、大きな農家の離れ座敷で、その後にある大きな荒廢した納屋が假りの酒藏であつた。

「こげな處ですが、この納屋があるのでまづ持つて來いといふところでせうな、なかなかこれを借りるのも骨が折れましたよ」と鹿太郎は淸太郎を案内しながら言つた。

　そこは緣側から上れるやうになつてゐる六疊の座敷で、母屋の方へは廣い農庭をひかへてゐるので、家主の家内とは餘り交渉しないでもいいといふ事も鹿太郎は言つた。三度の食事は鹿太郎の母親や女房が持ち搬んでくれる約束であつたが、その日の夕方は、鹿太郎の家で一寸した酒宴などを開いてもてなしを受けた。その時、鹿太郎は上機嫌で、

「今度こそこのわしの力で旦那をもとの明石屋さんに盛り返して見せるぜ」と傍らにゐる女房を見返つて得意さうに言つたり、また、

「いつぞやも旦那に申上げたやうに、名義は何處までもわしの名にしますで、若し萬一の事があれば、なアに、二ケ月や三ケ月ぐらゐ臭い飯を食つたところで何でもありませんや」と言つて、いかにも圖に乘つたやうな押し付けがましい言ひ方をするのに引き替へて、清太郎は何處迄も鹿太郎を賴りにして、彼を立て、彼の心持を迎へるやうな樣子や言葉つきをするので、傍にすわつてゐる純一は、腹立たしいやうな、情ないやうな氣がして、少しでも早くこの座から離れたかつた。彼は酒の上とは云へ鹿太郎の取つて付けたやうな橫柄振りに憤りを覺えると同時に、何處迄も屈從に甘んずるやうな父の樣子が齒がゆくて、もつと自分を高く持する父であつた筈であると思はずにはゐられなかつた。

かなり更けてから、一きは高くなつた海の音に送られるやうにして、酒に醉つてゐる父の後から寓居に歸つて來ると、門のくぐり戸だけは開いてゐたが、母屋の方にはもう火の影一つ見えなかつた。薄白く凍ててゐる農庭を橫ぎつて、離れ座敷の方へ行くと、直ぐ垣のむかうの隣家の方で、コツコツといふ何かを啄くやうな硬い音が耳に入つた。

「何だらう？」と純一が言ふと、ほろ醉ひ機嫌で何か他の事を考へてゐたらしい父の清太郎が、

「あれは隣の厩で馬が板敷を蹄で敲いてゐるのだ」と言ひながら、緣側から上つて燐寸を擦つた。ランプの火をともしてから、直ぐ蒲團を敷いて父は橫になつたが、純一は自分の蒲團を敷いてから直ぐに寢ようとはしないで、掛蒲團を頭からかぶつて、母や祖母や信太郎などに宛てた手紙や葉書を書き始めた。信太郎に送る手紙はかなり長いものであつた。米子の波止場で見送りに來てくれてゐた信太郎に別れた時の氣持から書き始めて、白く暴れた冬の波間に橫はる島へ上陸した時のこと、島の寂れた景色、假寓となつた離れ座敷のことなどを記して、その後に、

「僕は今まるで島流しにでも遭つたやうな氣持がする。この島へ來る迄は、漂泊は僕の求めてゐたところだつたが、來て見るとこれはまた何といふ寂しさだらう。僕はこの儘ここで流人として死んでしまふのではないかとさへ思ふ。

直ぐ耳元には絶間なしに荒々しい海の音が響いて來るし、その間には隣の厩で、馬がコツコツと床板を敲く音がする、時々父は寢苦しさうに深い息を立ててゐる。ああ、なつかしいもの、愛するものは、みんなもう遠方にある！　ああ、美しいもの、慕はしいものは今何處にあるか！　どうしてゐるか！」そしてその最後に、彼は若し敏子の消息がわかつたら知らせてくれるようにと書き足した。また、元雄君や相良先生に逢つたら宜敷くといふ事も書き添へた。

「もう寢るだ！」と寢てゐると思つた父が不意に此方に顏を向けて言つた。「明日からはおまへにもいろいろ手傳つて貰はんといけんからな……」

かう言つた父の調子には、これ迄子供に對して無頓着だつた彼とは思へないやうな、信頼の情が溢れてゐたので、純一は思はず、

「あア」と素直に答へて、冷たい枕に頭をあてた。彼は父と一緒に泣きたいやうな氣になつた。

翌日の朝早く、戸じまりをしない雨戸をあけて、

「明石屋の旦那さん、まだおやすみで……」と言つて鹿太郎の母親が上つて來た。小男の鹿太郎とは反對に大柄な女で、もう大方白くなつた髮を小さく髷に結つて、色の黒い角張つた顏には人の善ささうな笑ひを湛へてゐる。純一が起き出したのを見ると、

「昨夜はようおやすみなしたかえ」と訊きながら、わきに抱へてゐた二つのお櫃をそこへおろした。その大きな方の蓋を取ると、中には笊に一杯盛つたふかし芋がうまさうな湯氣を立てた。婆さんはその下から今度は大きな海老と、百合根の煮たのとを山盛りにした小どんぶりを取出して、純一が顏を洗つてゐるうちに、ちやんとお膳立をして、暖かい飯をよそひながら、頻りにふかし芋を食べるように勸めるので、純一はどちらを食べていいかわからなかつた。

清太郎はまだぐつすりと寢込んでゐた。

「どうせ荷物はまだ來んだし、旦那も今日はゆつくりやすんでをらつしやるが宜えだ……」と婆さんは呟くやうに言つたが、純一に向つて、

「坊ちやん、寂しいぢやろから、飯食はつしやつたらまた遊びにお出でや」と言つて歸つて行つた。

純一はひとり食事をすますと、やつぱり鹿太郎の家のある海岸の方へ出て行つた。曲りくねつた小路の兩側には、大きな門構への農家が並んでゐて、その或る家の前には紅い襷がけの十五六の娘が彳んでゐたが、純一の姿をいかにも不思議さうにいつ迄も見送つてゐた。いくらか勾配になつた路を海岸の方へ下ると、型ばかりの店屋も二三軒見えて、出逢ふ人々は皆純一を物珍らしさうに見ながら、丁寧に會釋をするのであつた。

鹿太郎は耳に筆をはさんだ儘、店の賣場で忙しさうに算盤をはじいてゐたが、純一の姿を見ると、

「お父さんはまだおやすみで？」と訊いた。それから直ぐ家内を呼んで御馳走をして上げろと命じた。すると又もや山のやうなふかし芋が純一の前に持ち出された。

純一が暫く默つてぼんやりしてゐると、鹿太郎はまた氣を利かして、

「坊ちやんに何か本を見せてあげんか」と命ずると、綺麗な細い眉をした色白の女房が、奥座敷の戸棚をごとごと云はせて、挨だらけの二三册の和本を持つて來てくれた。それは『出雲風土記』『日御崎靈驗記』とか云つたやうなものであつた。純一はその時代のついた本をめくつて見てゐたが、やがて言ひ難さうにして、鹿太郎の母親を呼んで、座敷の隅に積んであつた麥酒箱の一つを貸してくれないかとたのんだ。

「何になさります？」とお婆さんは訊いた。

「僕、机にしたいと思つて……」

「机なら鹿の机がござりますから、持つてお行きなはいや」と言つて、奥からいやに細長い平べつたい古机を持出し

て來て、純一が頻りにことわるのも肯かずに、押し付けるやうにして机ごと送り出してしまつた。

その翌日も、その翌々日も、荷物が來なかつたので、淸太郎は寢たり起きたりしてゐた。純一は古机を部屋の隅に据ゑつけて、持つて來た僅かばかりの藏書を飾り立てたり、手帳などを整理したり、その寂しさを歌や文章に書き綴つたりしてゐたが、その滅入り込むやうな退屈さに堪らなくなつては、ともすると外へ出て行つた。雪曇りのどんよりした天氣は、つひに三日目の晩から雪となつて、朝起きて見ると、母屋との間にある庭は犬の足跡一つない雪庭となつて、門から離れ座敷の方へは鹿太郎の母親のあけて行つた足駄の穴が飛んでゐるばかりであつた。けれども純一はその柔かな美しい雪を踏んで門の外へ出て、白い息を吹きながら鹿太郎の家とは反對の奥の方へ歩き出した。一二丁も行くと家がなくなつて、波のやうにうねつた一面の野が展けて、その向うには松林が疎らに連つて、右手の方にはお寺らしいものも雪をいただいてゐた。細い一筋の路の兩側には、霜除けをした大根や人參の畑の上に一杯に雪が積つて、その下から僅かに靑い色が覗いてゐた。小半丁先きの方を見ると、小學校通ひの子供たちが女の兒を交へて十三四人も二團りになつて、眞白な路の上に足跡を押すのが面白さうにいきなり駈け出したり、またそれを追ひ駈けたり、急に振返つて雪玉を投げつけたり、何やら言ひ罵りながら組み付いたと思ふと、二人とも少し傾斜になつた雪の上をころころと轉がつたり、女の兒は足駄の齒に雪がはさまつて二倍にも高くなつたのを、その儘キャツキャツと笑ひ騷ぎながら、よろめきながら兩手で重心を取りながら歩いたりしてゐた。純一はその屈託のなささうな島の子供達の踏み荒した路をついて行きながら、こんな寂しい景色の中でそんなに樂しさうにふざけてゐる子供たちを不思議な氣持で目送してゐると、女の兒の一人がふと振返つて純一の姿を見付けると、頻りに指差しをして他の女の兒に何か言ふと、一同が此方を見返つて囃すやうな笑聲を立てた。純一は急に寒さと孤獨とを覺えて、そこでくるりと向き直つてしまつた。急いで家の門まで來ると、下の方から上つて來た配達夫の老人に出會つた。

「えらい雪ぢやな、この雪に何處へ行きなはつたな？」と老人は顏馴染でもないのに親切に聲を掛けたが、純一が門の中へ入らうとすると、

「あんたは龍田純一さんだろな、手紙が來とりますだ」と言つて左の手に持つてゐる一束の中から一通の西洋封筒に入つた手紙を彼の手に渡した。

「敏子さんの手紙かしら？」と思つて、胸をどきりとさせながら受取つて見ると、それは敏子からではなく、信太郎から來たものであつた。純一が家に歸ると、父は鹿太郎と何かの打合話をひそひそとしてゐた。純一は部屋の隅の自分の机の前で手紙の封を切つた。信太郎はその持前のこまかい綺麗な字で、感嘆標を濫發しながら、何枚も書き連ねてゐた。

「感傷的の詩人純一君よ！

君の詩の如き手紙を僕は寂しい宿直室で讀んだ。そして今更に君と僕との交情が離れ難いものである事、二人の思つてゐるよりも更に更に密接に結ばれてゐる事を痛感せずにはゐられなかつた！　僕は直ぐ筆を執つて、君に送るべき手紙を書き出して見たのだが、餘りに言ふべき事が多くして、何から書いていいかわからず、ただ萬感胸を衝いて、此感汝の禿筆の能く堪ふるところに非ずと囁くを知るのみ、つひに空しく數日を過した罪を深く謝さなければならぬ。どうか惡く思はないでくれたまへ！

今日は日曜だ。僕は今、近來になく落着いた悠々たる心持で、雪ふる音を障子の外に聞きながら、君に送るべく筆を走らせてゐる。外にはもう大分積つてゐる、定めし島もさならむ。寂しい孤島でこの雪の音を聞いたならば、君の多感な胸はいかに顫へるであらうか！　僕は君が流人のやうな心持がすると云つた言葉をまた思ひ出さずにはゐられぬ。然し君よ、人間はみな流人だ！　この人生といふ孤島に流された流人にすぎないではないか！　僕などは、殊に

さうだと思ふ。單調無味なる村夫子の生活！　それは全く無意義な生活だ！　僕は今にして君が敢てその中に入らうとしなかつた賢明に服するものだ。初めこそ僕も隨分抱負もあつた、身を以て幼き教へ子を感化して行きたいと空想した、然しそれには僕の力のまだ足らぬ事を知り、また事毎に美しい夢の裏切られるのを見たのみだ。九時に出勤して、日が暮れて歸る、宅はただ寢る場所に過ぎぬ。家庭は何等疲れたる僕を慰藉してくれない。ああ、唯だ空想に耽りながら眠るのみだ！　愛する少女の面影を胸に抱いて眠るのみだ！　鬼界ケ島の俊寛にどれだけまさるところがあらう！　でも、事業そのものに趣味のある事がせめてもの慰めだ、自分の教へてゐる女兒をストオブの傍らに集めて無邪氣な話に興ずるのも面白く、國語に文の妙味を味ひ、歷史に悲しき人生の徑路を說く時などは實に樂しい。教育そのものは樂しいが、所謂俗務はいやだ！　教育者、圓滿ならんとする、君子振る教育者程いやなものはない！　理窟づめの人間ほどいやなものはない！　所謂同輩との交際は僕敢てしない。徒らに小事に拘泥して、人生に對して何等意義なきものが多いのを悲しむ。そして、僕は彼等の知らぬ世界に悠遊し得る自己を祝福するのである。

なつかしき友純一君よ！

僕は君も知る如く、相良先生の家にも此頃はあまり行かれないが、二三日前一寸寄つて見た。元雄君も相變らず苦しんでゐる。僕の愛する羚羊は美しい面に無心の笑みを浮べてゐる。僕はいつも彼女に自分の心持を打明けようと思ふのだが、然し僕の心にはそれよりも時には強くなる他のアンビションがあるのだ！　女性に取つては戀がその全部であつても、男子に取つては凡ての場合に全部ではあり得ないと僕は思ふ、君はさうは思はぬか？

君は敏子さんの事を常に思つてゐるらしい。僕が僕の羚羊に寄せる眷愛の情よりも、君が君のマドンナに寄せる敬愛の情の一層切なる事を僕は知つた。僕はその純なる心持を尊敬する。實際、彼女はマドンナだ、しかも單に美しく優しいのみでなく、強い烈しい感情を有つたマドンナだ！　然し、彼女の強い烈しい感情が僕は恐ろしいやうな氣も

する、元雄君も矢張り同じやうなことを言つてゐた。
此頃町の噂では、西尾の家から結納を入れるのも近々だといふ、それも大した結納金ださうだから、町の者の騒ぐのも無理はない。僕には敏子さんがあゝいふ成金の家と緣組されようとはまだ信じてゐない。然し、若しそれが事實だとすると、どういふ動機からであるか僕にはわからない。君にはそれがわかつてゐるやうな氣がする。君にもわかつてゐないとするならば、ああ、ただ神のみ知り給ふであらう！　ああ！」

十一

何の前觸れもなく、叔父の浩藏が島にやつて來た。彼は松江に行つた歸りだと言つて、松江市の菓子店の商標のついた羊羹の箱を土産にと純一の手に渡しながら、
「宜えところを見付けたもんだな、保養には持つて來いだ」と呟いて、座敷にあがらうとした。
「今お父さんを呼んで來ます、納屋にゐますから……」
「納屋か、うん、おれも行つて見よう」と氣早やな浩藏は純一に續いて納屋の方へ行つた。
「成程な、そこで大將、大仕事をやつとるんだな」と彼は持前の大きな聲で言つた。
納屋は奥行三間位で、入口は割りに廣いが、戸は少ししかあいてゐなかつた。敷居を跨ぐと、もう普通の納屋のにほひでない、酒藏らしい匂ひが仄かに漂つてゐた。薄暗い空氣の中に幾つかの小振りの酒桶や、酒樽や、釀造用の用器がごちやごちやと並べられてゐた。淸太郎が隅の方で俯向いて、何か頻りに手を動かしてゐる姿が薄ぼんやりと浮んでゐた。
「淸太さん、忙がしさうだな」と浩藏が大きく聲をかけた、「うまく行つとるかな」

「あア」と淸太郎の弱い不用意な返事が聞えた。彼は振返つて、入口の方へ出て來た。そして浩藏を見た顏には、どぎまぎした表情が現はれた。

「よう來てくれた、もう松江へは行つて來たか、景氣はどげな工合だな」

「まづ、惡い方ぢやアない。ところで、汝の仕事はどげなか知らんと心配してな、それに灘町の祖母さんも心配しとつたからやつて來たのだ」

かう言ひながら、もう浩藏は、そこらあたりを步き廻りながら、半切桶の中を覗いて見たり、仕込の加減を見たりして、

「えらい骨が折れたらうな、何分、道具が揃はんし、桶は小いし……然し、よくやつた……名義はやつぱり汝にしたか」

「いんや、わしにせうと思つただが、鹿太郎が自分が名義人になつた方が萬一の時よからうと言ふので、その言ふ通りにさせた」

「署からはもう見に來たか」

「一度來た、こげな不便なところでやられると、わざわざ船で松江から來るのが大變だと言つとつた」と淸太郎は言つて、そのやや蒼い面に寂しい微笑を浮べた。

「そこが此方の附け目なんだもんな……」と浩藏は頸を振上げてからからと笑つた、「時に山本の方の債務だがな、あれは一應話が付けてあるのに、此頃になつてまたごだごだ言つて來たんで、わしが筋道立てて談じ付けといた、當分もう何とも言はんだらう……」

淸太郎は自分の債務のためにかなり手痛い損害も被り、またその上に、後々までも債權者からの苦情を引受けて、

それぞれに處理してくれてゐるこの姊婿に對する感謝の情がその心には一杯であつたが、性分として輕い言葉で禮を述べることは出來なかつた。さうしてそれが彼には心苦しく、益々すまないと思ふのであつた。

「それに、ここにをる純一のことだが」と浩藏は振返つて純一を見て言ひ續けた。「いつまでもこげな處に連れて來とつたところで、大して汝の手傳ひにもなるまい、たかが本を讀んだり、手紙を書いたりしとる位のもんだ……」

純一は叔父の皮肉な言葉にひやりとした。

「そこで一つ相談だが、この純一をわしの方へ寄來してくれんか、わしがこれが汝の子かと人が吃驚するほど埒のあいた人間に仕込んで見せう」

純一は思ひもかけない叔父の發案を聞いて、父がどんなに返事をするかと胸を轟かした。彼には叔父から仕込まれるといふ恐ろしいこの申出を、父がことわつてくれればいいと思はずにゐられなかつた。それ程、彼にはこの叔父が堪らない苦手なのだ。彼の美しい詩歌の世界を微塵にぶち碎く武力を叔父は有つてゐるのだ。

「さア、それもさうだな……」とかなり考へ沈んだ後に弱い調子で濤太郎が言つた。その樣子には彼の立場として、この場合浩藏の申出す事については、善かれ惡かれ何一つかぶりを振る事は出來ない弱點が現はされてゐた。

「どうせいつ迄もかうしとく譯にも行かんし、一つそげな風にして貰はうかな……」

「うん、それが一番宜えのだ」と浩藏は確信を有つた調子で、少し顏に笑ひを浮べて言つた。

「詩を作るより田を作れといふ言葉通り、わしが純一の方針を變へてやる。詩や歌を作るのを一概にわしは惡いとは言はん、人間一代の生計の途さへ汝がしつかりと立ててからなら、なんぼ詩を作らうが歌を作らうがわしは何も言はん、それとも西尾の息子のやうに、親が業慾な事を遣りやがつて、貧乏人の金をしぼり上げて、しこたま財產でも作つとれば、學資金はなんぼでも出るんだから、田舍で勝手な眞似をするなり、東京へ行くなり思ふが儘だ。だがな、

汝は」と浩藏は不憫さうに俯垂れて立つてゐる純一を見遣つて、「こげな佛性で損する事にかけては誰れにも負けを取らぬ親父さんの跡を取るんだから、親父さんとはすつかり違つた人間にならなならん、わしのいつも言ふ事だが、この世の中では人間が惡い者でないと生きて行けん、人間が善え者は自ればかりか人にも迷惑をかけて反つて始末が惡い……」

　純一に言ひ聽かすやうに言つた叔父のこの言葉は、純一はもとよりだが、淸太郎に對してもつとひどい諷喩として、その胸を射貫いた。淸太郎はいかにも氣負けのしたやうな、何と言はれても止むを得ないと諦らめたやうな寂しい微笑をして、

「全く叔父さんの言ふ通りだ……」と滅入り込んだ聲で言つた。純一は二人の相反した生活、二つの相反した世界を、この瞬間、この二人の大人から鮮かに示されたのを知つた。彼は父の生活に對して叔父が考へるやうな考へ方をこれ迄漠然とは感じてゐたのだ。父のやうではならない、父のやうでは益々暗い方へ暗い方へと入つて行くばかりで、人が善いと云つたところで、根本的に考へて見れば、反つて人にいい影響を與へないばかりか、「迷惑をかける」といふ消極的な遣り方で惡を爲すのだといふ處世上の哲理は次第に理解されてゐたのだ。が、この叔父の匕首のやうな言葉ではまだ考へて見たことはなかつた。けれども、叔父の言葉通り、自分自身が叔父のもとに引取られて、そこで働かされる事が自分を生かす所以だとは思はれなかつた。父と殆んど同じやうな善良で感情的な性格の持主で、人から言はれる事には否といふ事の言へない弱さを多分に有つてゐる、そして商業上の交渉の大嫌ひな自分が、性情に全く反した方面へ陶冶されるといふ叔父の宣言は、宛かも嵐の黑雲のやうに彼の心を畏怖せしめるのだ。

「僕は……僕は……」と純一は叔父に不合意の意志を言ひ現はさうとしたのではあつたが、言葉は脣から離れないで、ただ二つの足が小刻みな寒い戰慄を繰返した。

「純一も承知だらうな」と叔父はおどおどとしてゐる甥の樣子を尻目に見ながら、頭から頷いてしまつた。

「この叔父の言ふ通りにすれば宜えんだ、この叔父がこんたを一人前の甲斐性のある男にしてやる」

暫く沈默が續いた。清太郎の心が最も暗く、最も悲しく滅入り込んで行く樣子が純一には感じられた。彼には父がだんだんにその影を薄くして行くやうな、漠然とした恐ろしさ、不安さを感じた。思はず彼はかう言はずにはゐられなかつた。

「お父さん、叔父さんと彼方へ行つたらいいでせう、仕事があるなら僕がやります」

「なアに……」と清太郎は氣が進まないやうに言つた、「今に鹿太郎が來るだらう」と言つて、どうしたのかふらふらッと後の方へ二三歩ふらついて、ハッとしたやうに其處にあつた酒樽で身を支へた。この僅かの間の父の動作も、純一の眼にははつきりと見えた。彼は父がどうかしたのだと思つた。

「どげした?」と矢張り浩藏が心配さうに言つた。

「なアに……」と清太郎はまた氣乘りがしないやうに言つた。

表の方から鹿太郎が、

「えらい暗いな……」と言ひながら入つて來て、見ると、立つてゐる人が廣田の浩藏なので、

「やア、旦那ですか、これはよう來なして下されました」と威勢のいい聲をかけた。

「あア、鹿太郎か、今度はえらい汝の世話になつとるさうだな、何分、こげな事にかけては、汝の世話になるより外ないからな」

「なに、そげな事もありません、ただ明石屋さんに長年いろいろお世話になつとりますから、こげな時こそ一生懸命に働かうと思つとります」

「何分頼むからな、うまく行かせたいもんだから……わしもこげして來たやうな譯だ」と浩藏は温かな調子で言つた。

鹿太郎があとに殘つて、濤太郎と浩藏とは揃つて座敷の方へかへつて行つた。純一は父の言ひ付けで、酒肴の支度に鹿太郎の家に走つて行つた。

泊るようにと勸めたけれども、浩藏はなにまた來ると言つて、その晩の船で歸つて行つた。そして船まで送りに行つた純一に、

「來年匆々叔父さんの方へ來るが宜え、次郎と一緒にやるのも面白いぞ」と言つたり、

「お祖母さんに度々手紙をやれよ、大分寂しげだつたからな」と言つたりした。

困つた事になつた、これは祖母に頼んで見るより外はないなどと考へながら、純一が家へ歸つて見ると、父は蒲團も敷かないで、外套をかぶつて、部屋の隅に肱枕をして折れ曲つて寒さうに寢てゐた。純一が寢てゐるのかと思つて差し覗いて見ると、鈍い眼でぢつと闇を見詰めてゐるのであつた。その樣子は逃げ切れない憂鬱の蟲にその心を蝕まれてゐるかのやうであつた。宛かもすつかり中軸が折れてしまつたやうに、いかにもくつたりと横はつてゐた。

「何處か惡いやうだ」と純一が半ば呟くやうに、父の蒲團を敷いてから抱き起さうとすると、

「いや……」と濤太郎は言つて、默つて暗い顏をして寢卷に着替へながら、「おまへも今夜は早よ寢るが宜え」と低く言つた。

「何だか今日は酒もいやだつた」と彼は投げ出すやうに言つて、枕を引き寄せてから、「叔父さんの言つた事はおまへには良え藥になつたらう、わしがおまへに言ひ度い事を、叔父さんが言つてくれたんだ」

「こげな處に來て、些少ばかりの儲けを考へて見たところでつまらぬ氣もする……」と言つたりした。さうして、やがてむから向きになつて、寢たとも寢ぬともつかず靜かになつてしまつた。

清太郎はこの時分から、時々、何だか疲れたからと言つて、仕事を鹿太郎に頼んで、部屋に歸つて來て、例の肱枕でころがつて寢る事が度々であつた。純一にはそれが不安ではあつたが、父が直ぐよくなつては復た起き上つて納屋の方へ行くので、どうした事であらうと思ふだけであつた。彼は母親や祖母への手紙には父の事を詳しく書いてやつたが、この事だけは別に書かない位であつた。

純一は父がやつぱり何も手傳ひを命じないので、讀書や詩作に飽きると外へ出歩いて、この頃では殆んどこの島ぢゆうを知つた。とりわけ島のまん中の山の上にあがつて、そこから遙かに湖水の彼方、松江の方を眺めるのが何よりの慰めとなつてゐた。彼は彼女の幸福をこの孤島に於て密かに祈るのであつた。或ひは、彼はそれと同時に、金持といふものの專横を憤ることもあつた。ここから見ると、日の沈む方は出雲の國の山の上、日本海の彼方へであつた。一樹の松に身をもたせて、寒い潮風に吹かれながら、冬の特長として磨いたやうな紅さを帶びて、落日のまはりに浮ぶ夕雲を眺める時は、彼はいつかは運命の最後の日に、どんな遠い異鄉の果てからでも、この美しい鄉土に歸つて來て、ここでわが臨終の息を引かう、この土地で死なうと思ふのであつた。時々彼はあたりを見渡して、非常に寂しいと思ふことがあつた、そんな時には彼女の名を海の方に向いて呼んだ。

「斂子さん……斂子さん……」

二度三度からうして呼ぶと、甘い淚が彼の兩眼に漲るのだ。その淚は兩頰を雨の如く流れるのだ。どうして彼女は私の傍にゐないのだらう、どうして彼女は私の名を呼ばぬのであらう。彼は眼の下にある枯れた草むらの彼方に彼女が潛んでゐたらと思つたり、また彼方の松蔭に彼女がわざと隱れてゐてくれたらと思つたりして、自分の描く氣儘な空想を追つて、彼方此方の樹から樹へ步き廻つた。

信太郎からその後二三度便りはあつたが、斂子の事は何も知らせて來なかつた。ただ、元雄から聞いたと言つて、

東京でかの西尾宏が慶應大學に入つたといふ事と、天鵞絨の洋服を買ふからと云つて莫大な金を送らせたといふ話とを傳へて來た。天鵞絨の洋服がどんな贅澤な服裝であるかは勿論純一にもわかるのだつた。彼はその手紙から時々眼を逸らしながら讀んでゐたが、たうとうしまひに揉んでしまつた。

「どうしてこんなに揉み苦茶にしたんだらう？」と呟きながら、またその手紙の皺を延ばす時分には、自分も東京に行かうといふはつきりした決心が彼の心に固まり行く感じがした。

午後から氷雨がしとしとと降り出して、納屋の中など眞暗なので、提灯を早くからともしてゐた。丁度それは師走の二十五日といふ押し詰つた日であつた。その日、純一はこの頃信太郎から、讀んで見たまへ、いいものだ、中には巻を掩うて泣かずにはゐられないものがあると言つて送つて來た鷗外漁史の『水沫集』を薄暗い中で繙いて、『埋木』の第十七章を讀んでゐた。

「世の中に歎あり。いかなる手も、これに觸れむには、優しさ足らざるべく、いかなる胸もこれを究めむには、强さ足らざるべし。これに向ふ人は、言葉はなくて、頭のみ俯かる。この歎をおもひ遣れば、畏きものの前に出でたるやうに、一種の敬おこるべし。ゲザが心いかでかこれに向ひて怨ずることを得む。少女が身に着けたる靑き衣は、その襞ごとに聲をなして『許し玉へ、』といふに似たり。」の數節を涙に濕む眼で讀んでゐた時であつた。そぞろに彼がこれらの文字の背後に、哀れな彼女、金持に嫁がんとする一人の少女を想ひ浮べて、更に哀怨に襲はれたその時であつた。突然ばたばたといふ音が納屋の方でして、續いて何か叫ぶやうな聲を聞いた。何を呼ぶかよくわからなかつた、不穩な叫び、不吉な豫感が雷光のやうに純一の心に閃いて來た。

「何だか……起つたのだ……」と彼は口走るやうに言つて、部屋を駈け出し、納屋の方へ向つた時には、納屋の入口から首を差出して人を呼んでゐる鹿太郎の凄いほど昂奮した小さな顔が飛び出してゐた。彼は純一をその顎で烈しく

招いた。

「旦那がな……急病だから……」と言ひさして、急に消えた。「母屋の人を呼んで來て下さい、早く早く……」と奥の方から鹿太郎の聲が走つて來るやうに聞えた。純一は、「とうどう……やつて來た、やつて來た……」と、反射的に胸の內側で聲がするやうな氣持で母屋の方へ走つて行つた。

母屋の主人は直ぐに醫者へ走り出し、內儀さんは氣付け藥を手に摑んで納屋の方へ駈け付けた。純一が納屋に來て見ると、父がいつも何かやつてゐる場所で、鹿太郎がむきになつて絕えず淸太郎の名を呼びながら、その身體を膝に抱いてゐた。父の顏は影になつて、その鹿太郎に正體なく凭れかかつた頸だけが提灯の鈍い光で黃色く見えるだけであつた。純一は土まみれになつてゐる父の兩足をそつと抱き上げて、自分の膝の上に置いた。その足はまるで何かの枯れた枝のやうであつた。

「わしがここへ入つて來るなり、旦那はばつたりぶつ倒れなすつた……」と極めて低い囁き聲で鹿太郎はおかみさんに話をした、「多分腦だらうと思ふ、旦那にはさういふ持病があつたから……然し本當に心配だ、早く醫者が來てくれれば宜え……」と鹿太郎は繰返した。

母屋の主人から聞いたと言つて、鹿太郎の母親も女房もやつて來た。皆が手を合せて病人を部屋の方へ抱いて行つた。

「氷が何處かにありさうなもんだが……こげな冬の最中だもん……」と言ひながら、鹿太郎の女房が冷たい水を井戸から汲んで來て、早速頭を冷やしたり、藥を飮ましたりした。醫者がかなり遠いところからやつて來た。田舍醫者らしい樣子で、病人の枕もとにすり寄つた時、

「何分、平常から弱つとられたです」と鹿太郎が醫者に囁いた、「どげなあんばいでせうな、大丈夫でせうな」と彼は

繰返した。醫者はしさいらしい樣子で、鹿太郎には答へずに、肋骨の浮いて見える蒼い病人の胸を開いて、首を傾けた。

十二

清太郎の病氣は卒倒の日から重態を續けた。電報に驚いて、米子の方から母のおよしと妻のおしまが來た。次ぎの船で、淀江の浩藏も、なほその外の親戚の者も二三人見舞に來た。醫者は一日のうちに何度も心配さうに診察に來た。

清太郎は卒倒した時からもう物が言へなかつた、ただ時々囈語のやうに何か聲を出すばかりであつた。

「こげな寂しいところで病みつくなんて、可哀相でならん！」とおよしはぼろぼろと涙をこぼしながら幾度も呟いた。おしまも泣いた。

「わしがこの前來た時には、さして元氣でもなかつたが、こげな急の大病するとは思はなかつた！」と浩藏が枕もとで腕組みをしておよしに言つた。「もつともあの時からしてこの病氣の徵候はあつたかして、何だからふらッとしたやうだつた……」

「あの時お父さんは酒樽がなかつたら倒れたかも知れません、叔父さんが歸られたあとで、何だか工合が惡さうに肱枕して寢てゐたから、僕は心配したのです」

「何でその時、おまへは母さんにそれを知らせて來なんだのだ」とおしまが少し詰るやうに純一に言つた。

「直ぐに何でもないとお父さんは言つてましたから……」と氣まり惡さうに純一はうつむいた。

病人は昏々として眠つてゐた。彼はあだかも大浪に弄ばれる小舟のやうに、險しい病熱の海にその身を弄ばれてゐた。難破する時、船中の人々が神や佛に救助の祈り聲を續けるやうに、彼の呻きは聞え、時々差し伸ばして何かを摑

まうとするその手の五本の指が哀れにぶるぶると打顫ふのであつた。おしまは幾晩も寢ないで看病するので、その眼は赤く血走つてゐた。

「おしまさん、今夜はわしが看病をしよう」とおよしが時々起き出して來ておしまを寢かせるやうにしたが、おしまは寢ても寢られないと言つて直ぐに起きて來た。

他の親戚の者はもつと居たいけれども、こんな師走だからと詫びて歸つて行つたが、大晦日の朝、浩藏までも、何分今日は大晦日だから、女子供ばかりぢや埒があかんで、店の用もあら方片付けて來なくちやならん、今日歸つても二日の日には早速來るからと言つて歸つて行つた時には、純一は何とも言へず心細かつた。純一ばかりでなく、歸つて行く浩藏も、二日まで清太郎がこの狀態で生きてゐる事が七分通りは信じかねると言つたやうな、心殘りな顏付きであつた。彼は清太郎の乾いた唇に水を小さな筆で含ませながら、

「清太さん、しつかりしてゐてくれ、二日には來るからな、二日迄辛抱してをれば、汝の病氣は屹度癒る……癒る……」と涙を流しながら言ひ聽かせた。

けれどもその夜十時頃、清太郎は母親と妻子とに圍まれて寂しく死んで行つた。

「何といふ哀れな死にやうだらう、こげな離れ島で……」と妻のおしまが良人の瘦せこけた咽喉でゴツクリといふ無氣味な音が、宛かも一つの機械がその運轉休止を明らかに知らせる如く二度ほど聞えて、さうして長い靜寂に返つた時に、大きな聲で泣き喚きながら繰返した。

「涙をかけるぢやねえ、佛になつた者はもう安樂ぢや……善え者ぢやつたから、極樂淨土へ旅立つたんだ、涙をかけるぢやねえ」と母のおよしは同じく泣きながらもかう言つて、おしまを嗜めた。

「純一、もう一度佛樣のお口にお水をあげるが宜え、善えお父さんぢやつたよ……不仕合せな目にばかつかり遭つた

人ぢやが、こげな人が宜えところへ行かつしやる……」と言つて、祖母は南無阿彌陀佛を繰返した。

鹿太郎の一家は二人の女を助けて、何くれとなく世話をした。翌日は元日なので何でも今夜中にと言つて死人の身體を洗つて、その夜のうちに棺に納めたり、色々の買物をしたりして、すつかり用意が出來た時にはもう東の空が白んで、何處かで鷄が新しい鳴聲で新しい世界に時を知らせてゐた。

純一は元日の朝は、暫く起きてゐたが、頭が重くなつて晝頃から寢てしまつた。けれども身體を休めてゐるばかりで、彼の心はこの數日の間に慌しく起つたこの人生の斷崖の嶮しい截口の凝視、宛かも生木を打ち碎いたやうな運命の無慈悲な打擊に落ち着く時を知らないのであつた。彼は恐れた、死がどのやうに急激に來るものであるかを、また彼は恐れた、死に對しては人間はどんなに無力で無抵抗であるかを。ぢつと靜かに父の一生を考へる時、彼の心は何を感ずるのか自分でも分らない位であつた。ただ彼は思つた、父はその肉體よりもずつとずつと早く、その精神に於て、その魂に於て、既に死んでゐたのではなからうか、否、彼は或る理由によつて身を擧げて滅びたのではなからうか。彼は叔父の浩藏が島に訪ねて來た最初の日の事が心に浮んでならなかつた。宛かも祖父が言ひがかりの罪によつてその肉を烈しい笞に破られた時に滅びたやうに、彼の父も彼自らの生涯が、そして彼のこの島での企てが、いかにもつまらぬ事であると云ふやうに考へた時、その日から死はその黑い翼に父の骸を包んだのではなからうかと思ふのであつた。祖父から父へと糸引くやうに續いてゐる不運な影はつひに何者の頭上に落ちるであらう。血から血へと流れてゐる呪はれたものが、更に孫である自分の胸にも流れてゐないとはどうして言へよう。はつきりとは分らぬながらも、或る運命的なもの、或る免れ難いものが、純一には最も畏るべき畢生の敵として考へられるのであつた。

「自分こそそれと戰ふのだ、そしてそれに打ち勝つのだ！　祖父を滅ぼし、父を滅ぼしたおまへも、この僕を打ち負かす力はないのだ！」と彼は思はず叫んだ。

「僕は叔父の家へは行かない、僕は東京へ行くのだ！　叔父の家で僕の性質に反つた事でいくら苦しんだところで何にもなりはしない、どんなに叔父が親切であつたところで、理解のないやうな親切が何になる！　おれは誰れにも頼らないつもりだ、たとひ東京へ行つて、どんなに困らうとも、たとひ野たれ死をしようとも、我が好む所に從ふところに僕の勝利もあり、幸福もあるのだ！」

二日の朝早く浩藏が來た。彼は船から上つた時に、もう自分から聲をかけた。

「たうとう駄目だつたなア！」

「ええ、あの日の夜息を引取りましてな……」と出迎へに出たおしまが涙を目に押へながら言つた。

「それほどの苦しみもなく、あの通りの樣子で息を引いてしまひました……」とおしまは繰返した。

その日の夕方、遺骸は船に乘せられて故鄕の方へと歸途に就いた。波はかなり荒かつた。

「また近いうちに雪でも降るかな」と船頭と何か話してゐた浩藏がどんよりした灰白色の空を見上げて言つた。

艀から蒸氣に柩が移されてから、鹿太郎は、

「では旦那、これでわしは失禮をします、內儀さんも大內儀さんも御機嫌よろしう……」と言つてお辭儀をして艀の中へ歸つて行つた。小柄な彼の後姿にも物の寂しさが映されてゐた。純一は船の上から、

「さやうなら……」と彼に別れの聲を投げた。人の善い鹿太郎よ、僕の父は君の力で幸福にはならなかつたけれど、君の親切には感謝して死んだに違ひない、どうぞ君は幸福になつてくれ！　彼はかう心の中で鹿太郎に別辭を投げた。

「だんだん遠ざかつて行く島よ！　おまへは私に美しい落日を見せてくれた、また眞白な雲、寂しい山、悲しい人間の死を見せてくれた。おまへは無慈悲ではなかつた、けれどもおまへの胸の上で私は無慈悲な、暗い日を送つた。けれども、私はおまへをどうして忘れることが出來よう、また私はこの島を訪ねることがあるであらう、また來る日ま

で、おまへの屈曲した海岸の一つの岩も、おまへの可愛らしい山の一つの樹も、朽ち砕け失はれないで健かにゐてくれることを祈る！」

　彼は背後に小さくなつて、出雲の陸影にまぎれ込んで行く、暮光の中の大根島に與へるこの長い感情をその心の中で歌つた。

　葬送はかなり賑かに行はれた。清太郎がその後年が失敗續きで、いろいろ人に迷惑をかけたにも拘はらず、その爲人が何處迄も善良で、妙に人に愛せられるところがあつたので、彼の死んだと云ふ事は、知る知らぬに拘はらず、町中の人々の同情を集めた爲めか、正月匆々ではあつたが、小さな家の中が弔ひの客で一杯になつた。廣田の家からは殆んど家內中が來た。親戚の者もすつかり揃つて、何から何まで行屆くので、逆さま事に遭つた母のおよしが、
「こげに宜うして貰はうとは佛も思ひがけない事だらうで、草葉の蔭でどげに喜ぶことやら……」と涙を流した位であつた。野邊送りがすんだ翌日、丁度親戚の顔がすつかり揃つてゐるのを幸ひ、遺つた者達の身の振り方についての親族會議が開かれた。

　廣田の浩藏は平常から親戚中での一番の利け者であつただけに、その時誰れよりも餘計に自分の意見を樹てた。外の親戚は浩藏の言ふ事に殆んど反對が言へないやうであつた。
「わしが思ふには、ここで、嫗さんとおしまさんとが合同して遣つて行かれれば宜えやうなもんだが、これに就いてはおしまさんの方では、合同して嫗さんに迷惑をかけるよりも、自分は梅子と一緒に仕立物をしたり、小體な商ひをしたりして、母子二人で遣つて行きたいと言つてござる……尤も梅子は近々にも嫁づけなくちやならんのだが、こげな工合になつたからは、當分の間はまあ然げな風でよからうかとわしも思ふんぢや。梅子も可哀相だが仕方がない、まあお母さんを助ける事にして貰はなくちやならん。したが、純一はそげな譯には行かん」

浩藏はとりわけ此の事が皆の親戚から贊成されたいといふ樣子で言ひ續けた。

「淸太さんが島にをつた時にも話しといた事だが、して淸太さんももう承知だつたし、無論純一も承知の事だが、まあ親父さんの四十九日が濟んだら、わしの家へ來て、わしの家の次郎と一緒に、わしが男一疋に仕込んで遣らうと思つとるで……」

そこにゐた四五人の親戚は同情するやうな眼で片隅にゐた純一を見た。彼等はこの場合、浩藏の意見に反對する理由も何もなかつた。ただ純一がどんなにか骨が折れようと察してゐるやうであつた。

「こげになりました以上は、純一は叔父さんに仕込んで頂くより外はございませんで……何分お頼みいたしますで……私と梅子とは儉約にして、どうにか遣つて行きますで……」とおしまが低い聲で少し昂奮した調子で皆に言つた。

「それは然げとして、當分の間、純一は祖母さんの家に來とるだ……叔父さんに仕込んで貰ふのも宜えだが、まだそれも急いだ事はねえ、純一もまだ子供だねえか、叔父さんのしつけ嚴いからな……」と祖母のおよしがいつもの物分りのいい砕けた調子で言つた。

「嫗さんにはどうも敵はん、そげに純一を子供だ子供だと甘やかすから、純一が好え氣になつて祖母さんの懷に逃げ込みたがるだ……が、まあ嫗さんも純一の事は此のわしに任してくれると宜え、悪い事にはしないからな、亡くなつた親父のやうに人の善えばかりが能ではないからな」と浩藏が矢張り萬事呑み込み顏でおよしに言つた。

純一は祖母と浩藏との話を聞きながら、これはひとつ、どうしても祖母に頼んで出來るだけ叔父の家に行くのを止めたい、若し止められなければ、出來るだけ延ばしたいといふ事を考へた。母親のおしまも、澤山の親戚も、此の場合彼の味方ではない事が彼にはよくわかつた。

一體、これ迄にも母のおしまは、純一に取つては祖母ほど優しいなつかしい人ではなかつた。彼女はこれ迄自分の

子供を愛撫する事には殆んどその心が向かないやうであつた。それには淸太郎の事業の失敗、店の繁忙などもその原因ではあつたが、とりわけ純一が乳離れした時分から祖母さん子となつて、彼女は祖母ほど彼の面倒を見なかつたといふ事が母子の感情の上に或る溝渠を造つたのであつた。なほその外にどういふものか、おしまとおよしとの間はその最初から圓滑には行かないのであつた。幼いながらも純一には、二人の女の心持の難かしい折合が面白くない事に思はれてゐた。純一が祖母の家で暮してゐた頃、母親の家へ來ると、母親から「歸つて此方の事を祖母さんに言つちやいけんぞ」とうるさい程言ひつけられたものである。それが純一には兎に角厭やな感じを起させたし、母親に對して親しみを失ふやうな心持にもさせた。

「おまへの母さんも惡い者ぢやねえが、どうも氣が狹うて困る、一緒にをると氣骨が折れてくさくさする……」と祖母のおよしはいつも嫁のことをかう言つて、孫がまだ何にも分らない時分から繰返したものである。二人は何處迄も、その性質が相反してゐたので、さしたる衝突もない代りに、何時迄たつてもその間柄はよそよそしかつた、それが人好きな、話好きな洒落な祖母のおよしには、かなりに物足りない寂しさであつたのである。祖母がたつた一人で別居して支店を出す事になつたのは、こんな事からも來てゐた。淸太郎が亡くなつた今では、二人の合同は一層不可能な事であつた、それは浩藏にもその他の親戚にも、もう十分に理解されてゐた。

　祖母のおよしには我子の淸太郎が死んだ爲め、孫の純一が一層可愛くもなり、大切でもあつたが、母親のおしまには、祖母程の純一に對する強い感情は無いやうであつた。おしまが差し當り賴りにして、愛してゐるのは姉の梅子ばかりであると言つてもよかつた。勿論、純一がたつた一人の男の子で、相續人でもあるので粗末に考へるといふ譯ではないのであつたが。

　四人の遺族が二人宛に分れて、寂しく暮す日が來た。純一は時々祖母の使ひで母親の方へ行つた。父が寂しい晩年

を控つた鹽町の小さな家には、母親と姉とが部屋の眞中に大きな裁板を据ゑて、澤山の鏝を差し込んだ火鉢を置いて、兩方から向ひ合ひになつて、せつせと縫つたりくけたりしてゐた。時々店へコップ酒を飲みに來る客があると、おしまが立つて行つた。およしのやうに客扱ひに愛想よく、何事も洒落に受け流すといふ事の出來ないおしまはた、まにそんな客が良人の淸太郎の盛んであつた時の事や、今度の突然の不幸などを話しかけて悔みでも言つてくれると、直ぐに涙ぐんだり氣を傷めたりして陰氣になつて、客が歸ると奥に入つて裁板の前で何時迄も梅子を對手に愚痴をこぼし續けた。

「わたし、お母さんには困るのよ、あんまり悔んで許りゐるから……」と純一が行く度に姉の梅子が小さな聲で囁いた、

廣田の浩藏はその後序さへあれば米子に寄つて、二軒の家を訪ねるのであつたが、おしまの方では直ぐに立上つたがおよしの方に來ると長く話し込んだ。

「四十九日がすまんとて、もう純一をわしの家によこすが宜え」と浩藏は純一を横目に見ながらおよしに言つた。

「彼は汝の家へは行かんと言つとるぞ」とおよしが矢張り純一を見ながらその返事をしたので、純一は困つて俯いた。

「それは可けん、汝が甘やかしてそげな事言はせるだ、純一はそげな事言ふ筈がない、なア純一」

純一は一層困つて、もぢもぢして他の方を見た。

浩藏が歸つた後で、純一は孫らしい哀訴の仕方で、叔父の家へ行く事を祖母さんからきつぱり斷つてくれるやうにと頼んだ。

「そげな譯にも行くまい、祖母さんにもおまへが行き度くない事はよう分るが、そげだとて叔父の言ふ事もまんざら悪い事でもない、叔父はおまへをしつかりした人間にしたいだから、あげに言つてくれるだ、これも皆おまへの身の

爲めを思やこそだ。まあ先きになつて、十日なり二十日なり行つて見れ、あんまり辛かつたらいつでも祖母さんの處へ歸つて來るが宜え。世間にや親父さんが亡くなつて奉公に出て行く子供も澤山あるだから、叔父さんの家へ行く位の辛抱はせにやならん」

「奉公に行くよりも叔父さんの家へ行く方がまだしもましだらうけれど、僕はどうしても叔父さんが考へるやうな人間にはなりたくない、僕は商賣人にも百姓にも向かないから、東京へ行つてえらくなりたい……」

「そげに東京へ行きたいなら、東京には廣田の市郎が行つとるだから、あれに賴んで一緒にやつて貰へるやうに言つても宜えが、どれ位金が要るもんだかな……」と呟いて、祖母のおよしはしみじみと純一の顏を見てまた言ひ續けた、「おまへも祖父さんがよく言つてござつたやうな事をだんだん言ふやうになつた……祖父さんも商賣は嫌やだ嫌やだと一生言つてござつたし、淸太郎も嫌やとは言はなんだが、さつぱり商賣は下手で失敗ばかりして皆に迷惑をかけたもんだから、おまへが商賣に向かんと言ふにも道理がある、したが商賣の外に身を立てる事が何かあるか」

「僕は東京へさへ行けばあると思ふ、中野君がいつもさう言つてゐる」

「そげだ、そげだ、おまへのやうな人間が敎員になると宜えだ、おとなしいもんな。中野の息子もなかなか良え敎員だが、あれは親父さんの子だから女好きだもんな……」と祖母は面白さうに笑つた。

純一は祖母にどんなに說明したところで、これ以上の理解を求めるのは反つて自分が無理なのだと思つて、ただ出來るだけ叔父の家へ行かないやうにと、いろいろと祖母に賴んだ。

十三

純一は敏子が其後どうなつたか、矢張り松江にゐるのであるか、それとも最う此方へ歸つてゐるのであるか、少し

でも彼女の事が聞き度いと思つて、島から歸つて來て、信太郎に會つた時にも、相良先生の家を訪ねて元雄に會つた時にも、それとなく訊ねて見た。けれども彼の聞いた事は、敏子が矢張り松江にゐる事と、西尾の家との婚約が愈々事實となつた事ばかりであつた。元雄や信太郎には東京にゐる宏の事が專らの話題になり、東京に行くといふ事が一番興味のある問題なのであつた。宏からは元雄の方へ上京を勸める手紙が時折り來るといつた。相良先生が弟を上京させる爲めに金策してゐるといふ事も信太郎が話しした。その信太郎が先きに上京するやうになつて、

「純一君、僕は愈々來週上京する事が出來るやうになつたよ、實はね、學校の方もつまらなくなつてゐるところへ、東京にゐる友人から大變好都合な話を聞いたんだ。實はね、その友人の知人が今度大規模の著述をするので、その助手に僕を推薦してくれたのだ。これを好機會として僕は兎に角上京する。一足先きに行つてゐて、君を必ず呼ぶ、その時には萬事を放擲して上京したまへ」と或日やつて來て、感激した調子で言つた時には、純一の胸は信太郎と一緒に上京したいと思ふ心で燃えるやうであつた。けれども彼は、

「後から僕も必ず行く、君がそんなに早く上京する事が出來るやうになつたのは僕も嬉しい」と落着いた言ひ方をした。信太郎の上京が意外に早く定つたので、最も苦しんだのは元雄であつた。

一番最初に上京すると言ひ出した彼が、一番最後になるかも知れない焦慮から、元雄は悶々としてゐた。けれども、兄の苦しい立場を十分に理解してゐる彼は、その性分として、兄に向つては、一言も無理にとは言へないやうであつた。

「兄の事を考へるとね、僕が無鐵砲に上京する事は出來ないのだ。兄が無理解な人間なら反抗的に何でも出來る、然し兄は優しいんだからな、兄は本當によく僕を理解してくれて、どうにかして上京させようと思つて、父に對していろいろ取りなしてくれたり、學資も都合よく行くやうに骨折つてくれつつあるんだからな。その兄の心事に對しても

僕は我意を通す譯には行かん。それに此頃兄はどうも身體が思はしくないのだ……」と元雄は純一に訴へるやうに言つた。

純一は元雄の話を聞いてゐると、元雄の身の上が氣の毒でならなかつた。信太郎が上京した日、二人は停車場まで送つて行つた。停車場には美装した信太郎の父が、信太郎とは腹違ひの弟を二人連れて矢張り見送りに來てゐた。彼は純一や元雄を見ると、

「やア、どうも有難う、たうとう東京へ行くと云うて、かうして出掛けますが、向うへ行つて何をしますことやら……遊びなど覺えると困りますがな……」と、むしろ我が子の才氣を誇るやうな調子で滿足さうに言つた。

驛には、驛夫の中にまじつて、小さい時よく信太郎や純一を虐めた、學校友達の小山虎吉がゐた。ズボンが長くだぶだぶした驛夫服を着て、小さな淺い驛夫帽をかぶつて、靴音高くプラットフォオムを往つたり來たりしてゐたが、信太郎の一行を見ると、その若い血と肉とで赤黑く盛り上つたやうな四角な顏に、驛夫らしい愛想を見せて、

「中野君、必ず成功して歸つて來てくれ給へ、僕らはこの驛で大に鐵道事業の爲めに奮闘するつもりだ、お互ひに勉強しようね」と言つて、皆を笑はせ、自分も笑つた。

歸りに元雄は寂しくて堪らないやうであつた。低い聲で話し續けて、純一に自分の心持を繰返した。

「殘つたのは龍田君と僕ばかりだ、本當に僕の家に遊びに來て下さい、僕は實際寂しいからね……然し、僕とても何時迄もぐづぐづしてゐるわけではない、ただ兄が氣の毒だからかうして延ばしてゐるのだ」と自分で自分を慰めるやうに呟いた。

四十九日がすんで四五日たつと、叔父の家から次郎が叔父の言ひ付けで純一を呼びに來た。

「それぢや、まあ行つて來い、そのうちに祖母さんも行くからな、その時工合が惡かつたら連れて戻つてやる」と祖

母も言つたので、純一はたうとう次郎と一緒に叔父の家に來た。

「おお、よう來た、來んと云ふ法はないからな、祖母さんの傍でいつ迄も子供の氣持でぶらぶらしとつちやいけん、一つ叔父さんのやうに働かなならん」と純一を見た時、叔父は滿足さうに言つた。

叔父の家は同じ酒屋でも、清太郎とは違つて、萬事拔目なく遣つてゐるので、店の樣子から見ても活氣が溢れてゐた。叔父がなかなかの精力家で、何から何までてきぱきとしてゐるので、家族全體が帳場に構へ込んでゐる戸主の顎の動き方一つで機械のやうに運轉してゐた。年老つた父親の甚兵衞も、まるで汚ならしい下男のやうな身なりをして、酒樽に酒を詰めたり、藏へ入つたりして、始終ぶつぶつ口の中で何か呟きながら立働いてゐた。甚兵衞は純一が行つた日は、息子の浩藏から何かの手落を嚴しく叱られてゐたが、どんなに叱られても、甚兵衞は不得要領な顏をして、何か分らぬ事をぶつぶつ言ふばかりであつた。次郎はよく働くので父の氣に入つてゐた。彼は小學校の農業補習科から歸つて來ると、甚兵衞と一緒に藏で働いたり、下男について在方へ華客廻りをしたり、また母親の手傳ひをして、ランプの掃除をしたり、子供の守りをしたりするのであつた。

「純一君が明日からランプの掃除をするんだよ」と次郎が純一を連れて行つて、石油の臭ひで一杯になつた押入をあけて、澤山のランプの取扱ひ方を敎へた。眞黑に煤けたホヤを次郎は器用に拭いて見たが、純一にはそんな事が明日から自分の勤めかと思ふと胸が重くなつた。

その晩、浩藏は純一を次郎と共に晩酌の傍らに呼び付けて、十二の時から谷尾といふ大きな金持の家に奉公に行つて、さんざん苦勞を嘗めた自分の若い時の經驗談を話して聞かせたり、今東京の釀造試驗所に遣つてある長男の市郎の事を引合ひに出して訓戒をしたりした。

「一人前の人間になるには、並大抵の苦勞ぢやねえぞ、だがその苦勞を嫌つとつたんぢや碌な者にはなれん、年をと

つてからえらい難儀をせにやならんからな、二人ともわしの言ふ事をよう身に入れて聽かなならんぞ。わしがこれから言ひ付ける事は純一には辛いかも知らんが、後にはそれが身の爲めになるだ。次第に叔父の有難さが分つて來る」と叔父はしつかりと言つた。

その翌日から純一は叔父の意見で、次郎と一緒に學校の農業補習科へ通ふことになつた。それは半ば百姓家で成立つてゐる此の町と、その附近の村の子弟の爲めに出來てゐるものなので、科目としてはさう難かしいものはなかつたが、實地として生徒に課する畠仕事がなかなか骨の折れることであつた。

純一が通ひ出してから二三日目に、畠仕事の中で生徒には一番骨の折れる肥汲みがあつた。がつしりした身體と逞しい百姓脚を有つた生徒の中に混つて、皆のやうに跣足になつた純一の足は白くて、見るからに弱々しかつた。愈々純一の順番が來て、肥汲桶を持つて學校の便所の處に行つた時には、彼はその臭氣に神經を脅かされて、頭が痛かつた。ほんの少し汲み取つて、あとは相棒に汲んで貰つて、小半丁ある畠まで、先棒になつて歩き出した時には、肩に食ひ込む堅い棒の痛みと、不確かな足許のよろめきとで、時々立止まるので、後棒になつてゐる生徒から「どうしたのだ、龍田君？」と時々聲をかけられた。その様子を見てゐた先生が笑ひながらやつて來て、

「龍田君にはまだ無理だらう、今度だけは誰れか外の者に代らせよう」と言つて、通りがかりの生徒に純一の代りをさせた。けれども畠に行つた時には、外の生徒がするやうに、純一も肥柄杓を持つてかけて行かねばならなかつた。

「先生、龍田はこれ迄こんな事は些つともしつけませんから弱つとります」と取りなすやうに次郎が先生に言つてくれたので、純一は助かつたやうな氣がした。彼は肥柄杓を持つて一二度こはごはかけたばかりで、あとは離れた處で皆のするのを見てゐた。先生も別にそれを咎めなかつた。歸つて來て、次郎が純一の眞似をしながら　その時の事をすつかり父に話したので、家内中が純一に同情したり笑つたりした。けれども浩藏だけは眞面目になつて、

「そげな事も純一には良え薬になるんだぞ」と満足さうに言つた。純一はその夜のうちにでも米子の方に歸りたかつた。早く祖母が來てくれればいいと待ち兼ねるのであつた。けれども祖母はなかなか來なかつた。

同じ町の川向にある親戚の南といふ家へは、次郎が連れて行つた。これ迄にも淀江へ來る毎に次郎と一緒に行つたものであつたが、其家は餘りにきちんとした寂しい家なので、純一はそこに泊るやうな事はなかつた。その家は古風な大きな構へで、ずつと以前に寡婦になつた當主の叔母が、八十近い盲目の姑を看ながら、番頭と小女とを相手に、手堅い質屋を營んでゐるのであつた。

二人が大川を渡つて、直ぐその橋詰にある質屋の看板を見て、暖簾をくぐつて入つて行くと、以前米子から遊びに來た時と、道具一つその置き場所が變らないばかりか、店にゐる番頭も、その次ぎの部屋の上り口に赤銅の大火鉢に向つてすわつてゐる盲目の媼さんも、それ等の道具の一つでもあるかのやうに居場所すら變つてゐなかつた。媼さんは長い習慣となつてゐる觀世縒を始終縒り續けてゐた、そしてそれが更に縒り合されて、質物をくくる紐に用ゐられるのであつた。二人はこれ迄いつ來た時でも、この盲の媼さんの前に呼ばれて、そのこちこちした皺だらけな手で、頭から爪先さまで撫で廻されて、脊丈の伸びた事や肥つた事やを見られるのが習ひになつてゐた。

「今日もまた二人とも撫でられるぜ」と次郎の家で母親が言つて笑つた通り、二人の聲を聞くと、媼さんは、

「ここへ來い、ここへ來い」と呼んだ。次郎はくすくすと笑ひながら純一を前きへ突き出した。

「これは次郎か、純一か」と純一の肩を少し顫へる手付きで握つて媼さんは訊ねた。

「次郎だ、次郎だ」と次郎が傍から言つた。けれども、方々を順々に撫でて行くうちに分つたと見えて、

「次郎だねえ、次郎だともつと丸々しとる、これは純一だ、純一はやつぱり瘦せとるな、身體付きは爭へんもんで、清太郎にそつくりだ、高い、脊が高い」と媼さんは感心したやうに言つた。

臺所から叔母が前垂で手を拭きながら出て來て、
「やれ、二人連れで來たか、純一が來とるて事を聞いたから、そのうち來るだらうと待つとつただ、祖母さんはどげしてござる」と自分の姉であるおよしの機嫌を訊いた。純一から見ると、此の叔母は祖母によく似たところはあつたが、祖母よりはずつと若くて、もつと烈さうであつた。
「おまへもお父さんに早よ死なれてえらい難儀をする事だな。可哀相に。だがまあしつかりした叔父さんがあるから、餘り心配せんでも宜え、叔父さんはおまへのお父さんには隨分迷惑も受けたが、嫌やな顏一つしないでよく遣つてくれる、今度は純一まで引取つて世話するなんてなかなか出來ん事だ、なかなかよう出來た叔父さんだ」と叔母は次郎の父を賞めた。
この家では矢張り淸太郎の負債の受判をしてゐたので、かなりの損害を受けた事を純一は知つてゐた。そんな事を考へると、父が生前やつた事が、ずつと後まで自分に崇るやうな氣がして、父の事を言はれるのが苦しかつた。
次郎はこの家へ先き先きで養子に來るといふ話になつてゐるので、叔母は次郎を我が子のやうに可愛がつてゐた。盲目の媼さんにも次郎は氣に入つてゐた。
ランプの掃除はまだ何でもなかつた、純一が困つたのは子供の守りであつた。叔父の家ではまだ乳を飮んでゐる子供、四つになる子供、七つになる子供、十一になる子供があつて、これが一つの部屋で飛んだり騷いだり、泣いたり笑つたり、大騷動をしてゐる上に、叔父がまた子煩惱で、子供の事となると夢中になるので、一寸でも子供が病氣でもすると、夜半にでも純一は起されて醫者を迎へに行かなければならなかつた。赤ん坊を背中に負つて純一がつまらない顏をして庭にゐたりすると、通りがかりの叔父がわざわざ立止つて、赤ん坊が鼻を背中でつまらせてゐはせぬかと心配さうに覗いて見たり、あやして行つたりするのであつた。それが一層純一にはつまらなかつた。けれども純一

がもつと困つたのは、次郎が風邪を引いたといつて、その代りに下男の曳く車の後押になつて、在方廻りをした時であつた。次郎に敎へられたやうに、

「毎度どうも御贔屓に預りまして有難うございます」とか、「又どうぞ御註文下さい」とか輕く言ふ事が屈辱のやうに感じられて、どうしても言へないので、下男の言ふあとからお辭儀ばかり幾つもした。その日歸つて來た時には非常に疲れてゐたけれども、自分の家ではないので、氣儘に臥るといふ事も純一には出來ない事であつた。

「純一も今日はえらい草臥れた事だらうから、早よ臥るがええぞ」と叔母が乳房を赤ん坊に含ませる爲め、胸を擴げながら純一に言つた。その日は浩藏は松江の方に行つて留守だつたので、純一は幾分氣が樂であつたので、直ぐ臥床に入つた。蒲團を頭から被つた彼は、情ないやうな寂しいやうな感情が胸にこみ上げて來て、いつか涙を枕の上に落してゐた。彼は思はず西尾宏が天鵞絨の洋服を着て、東京の市街を歩くといふ事を思ひ浮べた。まだ見た事のない天鵞絨の洋服が、燕の翼の色のやうに見えたり、また胡蝶の姿のやうに見えたりして、目の前にちらちら躍つて眩しくて仕方がなかつた。また、東京へ行つた信太郎が例の尤もらしい顏付で、滿足さうに机に向つてペンを頻りに動かしてゐる間に、見る間にそれが堆い書籍になつて美しい裝幀の表紙に包まれて幾百册も積上げられた中に、彼が演說口調で何か感激的に叫んでにつこり笑つたと思つた時には、純一は夢現の間にも肥汲み姿の自分を蔑しまずにはゐられなかつた。

その翌日純一の出した手紙を見て、祖母のおよしが二三日して米子からやつて來た。

「純一も大分しつかりして來たぞ、この間も學校で肥汲みの稽古をしたげなし、家の事も大分やれるやうになつた。思つたよりよく遣る、この分で行つたら先づわしの鑑識違ひでもない、一つ祖母さんにも喜んで貰はう」と浩藏はおよしに酒などを出して晝飯を食べる時に言つた。「祖母さんが來たとて甘たれて里心を出しちやいけんぞ」と彼は純

一の方を見て言つた。
　およしは少し笑ひながら、
「そりや結構々々……したが、今日は純一を連れに來ただ」
「そりやどげな譯だ」と浩藏がまじりとして訊いた。
「なに、一寸な、これの友達が東京へ行くので逢ひたいと言つとるから、二三日歸らせて貰はうと思ふだけだ……直ぐまた來させる」
「それなら宜えが、今折角旨く行きかけとるところぢやから、直ぐ寄してくれんと困る。若し純一がわしの遣り方で旨く行かんなら、どうせ見込がないから、前々から言つとる通り、坊主にでもするより外はない、ここの處をよく純一に言つてくれるが宜え」と浩藏はすつかり不機嫌さうに言つた。
「それはよう分つとる、汝の親切もよう分つとる、なに、直きに此方によこさう」とおよしは浩藏の氣に逆はぬやうに言つた。祖母のその樣子には、よく物の分つた年寄の賢さが示されてゐた。
　その夕方、純一は祖母と一緒に汽車に乘つて米子に歸つて來た。そして、その夜直ぐ元雄を訪ねて行くと、元雄は留守で、相良先生が會つてくれた。先生の顏は何だか病氣らしく青白かつた。
「たうとう元雄も上京します」と先生は靜かな調子で言つた。「もつと早く遣り度いと思つたのでしたが、なかなか思ふ通りにはなりませんでした。どうぞ停車場まで送つてやつて下さい」と先生は言つたが、直ぐその後で、
「龍田君も一つ東京へ行かれますか、奮發して行つて見てはどうです、どうにか行けるやうに都合が付かないものですかしら。元雄が彼方へ行つてから、何かいい便宜を見付けるようになるといいですがな……」と物優しく慰めるやうに言つた。先生のその調子には、父のやうな優しい愛情が純一には感ぜられた。

それは丁度信太郎が上京して二ヶ月と經たない頃であつた。今はもう四月の半ばで、櫻の花がちらほらと咲き出してゐた。先生の奥さんや妹の靜子が縫ひ上げた折目正しい着物にセルの袴をきちんと穿いて、新しい籐のバスケットを提げた元雄の姿は、見るからに門出らしい爽かな喜びに美しく見えた。さしてその喜びを面に出さないだけに、元雄の樣子には上品なところがあつた。停車場へ向ふ途中、先生は時々振返つて元雄を見て、嬉しさうに微笑してゐた。

「龍田君、今日は見送つてくれて本當に嬉しい、君も屹度東京に來たまへ」と元雄は靜かに純一に言つた。そして時々後を見返つて、靜子に話しかけた。

「龍田さん、今日は珍らしい人が矢張り兄さんをお見送り下さるのよ、誰れか當てて御覽なさい！」と靜子が愛らしく笑つた。

「龍田君には分らないよ、焦さないで言つてお上げ」と元雄が言つた。その兄妹の問答で、自づと純一にはそれが誰れであるかといふ事が分つた。純一の心は急に新しい春に蘇つたやうな喜びと暖かさとなつかしさとに包まれて燃えて來た。彼は默つて何にも言はなかつた。が、その胸は轟いてゐた。

「ねえ、龍田さん、あの方よ！　敏子さんなのよ！　四五日前松江から歸つて來たのよ……」と靜子が言つた。純一はそれを聞きながら、もう間近に見える停車場の入口の方をぢつと見た。その入口の柱に凭れて、すらりとした姿の若い娘が此方を見てゐた。

十四

元雄が發つてから、相良先生と靜子は停車場から右の方へ、敏子と純一とは左の方へと四人は別れた。プラットフォオムを離れて、誰れかに用事でもあつて呼び懸け度いやうな樣子をして、驛夫の小山が二三十歩前の廣場へ歩いて來

て見送つた。その目は純一と敏子の方に注がれてゐるやうであつた。敏子は直ぐに水色のパラソルを開いて、自分の帶のところまで隱した。

「ほんとに今日はお目にかかれて嬉しかつたこと！　隨分久し振りでしたわね、あなたは一つもお變りにならないわ、わたしはどう？」と敏子が純一に話しかけた、「今日は屹度お目にかかれると思つたのよ、四五日前松江から歸つて來ましたの、歸つて來ると直ぐあなたにお手紙を上げるか、お目にかかりたいと思つたのですけども、何だかごたごたして思ふ通りにならなかつたところへ、元雄さんの御出發を聞いたもんだから、丁度その時あなたもいらつしやるから會へるに違ひないと思ひましたわ！　本當に嬉しかつたわ！」と敏子は言ひ續けた、「あなたはお父さんが御逝くなりになつたのですつてね、わたしは此方へ歸つて來て家の祖母さんに聞きましたの、本當にあなたが可哀相で、わたし泣きましたわ、どんなに辛かつたでせうね……」と敏子は貪るやうに話し續けた。

純一はどんなに言つて返事をしていいか、どんなに自分の心持を話していいか殆んど分らなくなつて、ただ短かい斷れ斷れな返事ばかりをした。けれども彼は今日こそは一番大切な話を二人でしたい、どうにかしてもつと心を打明けたいと思ふのであつた。

「今日はね、純一さん、二人でいろんなお話をしませうね、まださう遲くはないから、これから二人であの城山へ上りませう、ねえ、いいでせう？」と敏子が言ひ出した。純一は何といふいい機會を敏子が自分に與へてくれる事だらうと感謝するやうな心持で、

「ええ、僕はさうしていいのです、遲くなつてもちつとも構ひません」と言つた。

二人は話し續けながら、裏通りを堀端に添うて城山の方へと歩いて行つた。ときどき通行の人が敏子の姿を好奇の眼で見た。敏子にはそれがうるささうであつた。

高い白堊の塀がかなり長く續いてゐる監獄の塀添ひの道について歩いて行くと、やがて城山の上り口に來た。そのあたりには櫻の花の眞盛りに咲いてゐる家があつて、庭のところに鷄が五六羽遊んでゐた。爪先き上りに曲りくねつた路を上つて行くと、時々兩側に小松が群つてゐて、その蔭に薄紫の菫の花が咲いてゐた。大分上つた時分下を見ると、監獄の構內で囚衣を着た一連りの人が何か頻りに働いてゐた。その柿色の姿が春の軟かな空氣に不思議な寂しい情調を漂はせてゐた。

「あんな人達を見ると、わたしは本當に悲しくなるのよ、こんな春の美しいいい日和に、あそこから一歩も外へは出られないといふ事がどんなに苦しい事でせう、あの人達のした事が何であらうと、それだけの苦しみをしなければならぬ程の重い罪にはどうしてもわたしには考へられませんわ、あなたはどう？」と敏子がふつと思ひ付いたやうに言つた、「わたし達はこんなにして樂しい山登りをして、あの人達にすまないやうな氣がするのね！」

純一は敏子の優しい言葉に惹き入れられた。彼は大分敏子との話に馴れて、先刻からぼつぼつ雄辯になりかけてゐるのであつた。

「ええ、僕もさう思ひます。彼處にゐる人達が何で特別に惡い人間でせう。惡い人間は反つて監獄になんか入るやうな下手な事はしないでせう。彼處にゐる人達は皆智慧の足りない爲めに、下手な遣り方で惡い事をしたんです。中には無實の人もあるでせう。本當の惡人は反つて彼處にゐる人達をあんな目に遭はせた動機となつてゐるでせう。僕の祖父が丁度あの人達と同じやうな下手な目に遭ひました。祖母の話ですが、僕の祖父は非常に善人でしたが、鬼權、熊新といふ惡い人間に欺されて大損した上に、言ひ懸りといふ罪で、ひどい事尻を擲たれて、そんな事が原因になつて死んでしまひました……」

「まあ、あなたの祖父さんが……」と敏子は驚いて聲を高くした、「鬼權、熊新ッて本當に惡人らしい名ね、其奴たち

がお尻を擲たれればいいのに……」と敏子が憤慨して言つた。
「兎に角、僕の家の人間はあの人達と同じやうな弱點を有つてゐるのです、さうして僕もその弱點にいつも打克たうとしてゐるのです。人の善いといふ事は、うつかりすると反つて誰れの爲めにも惡いといふ事が僕にははつきり分つたのです」
「そんなに自分の事を心配すると反つていけませんわ、あなたには優しいところと強いところとが丁度いい工合にありますよ」と敏子が氣遣はしさうに慰めて言つた。
「いいえ、さうではないのです、僕にはもう少し西尾宏君のやうな強いところが欲しいのです、今の儘の僕では自滅してしまふかも知れません」
「そんな事があるものですか」と敏子は打消したが、西尾といふ純一の言葉が彼女の胸に大きい波動を喚び起したやうで、彼女は急に口を噤んだ。それは彼女の考へが自分の問題に還つたからであつた。
頂上に達すると、城跡の石垣があつて、その上の廣場には一軒の茶店があつた。二人は其方には行かないで、海に向いた方の少し下りた松蔭の草地に轉つてゐる捨石の上に腰をおろした。
「疲れましたか?」と先刻から敏子が默り込んだので、純一が訊いた。
「いいえ、あなたは?」と敏子が訊き返した。
二人は暫く無言の儘で、右手の夜見ケ濱と左手の出雲の山々との間に薄霞んでゐる眺めの廣い中海を見るともなしにぢつと見てゐた。
「僕は去年の冬から今年の正月まで、あのずつと彼方にある大根島へ父と一緒に行つてゐました。想像とは違つて隨分寂しい荒れた島で、その島の眞中には山があつて、そこから見るといつも夕日が松江の山の方へ靜かに沈んで行き

ました、その夕方の雲をぢつと眺めて、私はどんなに寂しかつたでせう……」と純一は話し出した、けれども彼はそのあとに言ひ足したい、もつと重大な感情を露骨に敏子に言ふことは出來なかつた。その時、彼が誰れの名を呼んだかを敏子に言ふことは、純一には出來なかつた。

「まあ、そんな寂しい島で……わたし、ちつとも知らなかつたわ……わたしはねえ、純一さん、松江にゐてどんなにしてゐたか、あなたには分ること？」と敏子がしみじみと話し出した、「わたしはあなたに手紙を差上げると言つて置きながら一つも上げなかつたでせう、あなたは屹度お怨みになつたでせう。いつもわたしはあなたにすまないと思ひながら、どうしてもお手紙を差上げられなかつたのよ。なぜだか分りますか？」

「わたしはね、松江に行つてそんなに幸福ではなかつたのよ、一日も暢氣な事はなかつたのよ、隨分大きい心配事がわたしにはあつたのよ。わたしの事をあなたは何か聞いてゐるでせう？」と敏子は純一の顏を覗いた。

「わたしは時々苦しくなると、家の人にはこつそりと隱れて湖畔へ行つて、袖師の浦を彼方此方歩きながら、何でわたしはこんなに苦しまなければならないかと、何時も考へましたわ。時々純一さんが傍にゐてくれたらと思ひましたわ、そんな時にはわたしはあなたに何か話しかけるやうに、よく獨り言を言ひましたわ。宍道湖がどんなに美しいかあなたは知らないでせう、まだ一度も行つた事はないから……」と敏子は言つて、思ひ沈んだやうに暫く默つてゐたが、純一も矢張り默つてゐるので、また言ひ續けた、

「宍道湖はね、この中海よりももつと靜かで、美しくて、穩かで、丁度この中海が男の子なら宍道湖は女の子のやうですわ、わたしは松江で何にも幸福ではなかつたのですけれど、あの湖水の傍で生ひ立つたといふ事だけがなつかしいのです。それで松江に行くと、直ぐに湖の方へ出て行きます。あの湖水のことは何から何までわたしは知つてゐるつもりなのよ。とりわけわたしの好きなのは、市街の眞向うの水面に糸筋が一本浮いてゐるやうな細長い島があつて、

それが月のいい秋の夜などに、丁度捨小舟のやうに哀れな姿を浮ばせてゐるのを見ると、どんなに心があこがれるでせう。まるでその捨小舟に乘つて、美しい湖水の底深く何處迄もあこがれて行き度いやうな心持になるのよ。その島は嫁が島といふ名なの、嫁といふ島の名が何といふ悲しい感じでせう……わたしは小さい時によくその島へ行きたい行きたいと言つて泣いて皆を困らせたさうです……その島の片端にはこんもりとした木立があつて、その中に小さな辨天樣の祠があるのです、松江の人はよくその辨天樣へお詣りをします、わたしも松江へ行く度にその辨天樣へお詣りをするのでしたが、今度だけは其處へは行かなかつたのよ、なぜだか分りますか？」

「忙しかつたからでせう」と純一が言つた。

「いいえ、忙しいなんて……そんな事はありません、わたしは一日遊んでばかりゐたのです。行かなかつたのはその島へ渡るのが恐ろしかつたからなの」

「なぜでせう？」

「その島へ渡つたら、もう二度と歸つて來られなくなりはしないかと思つたからなの、屹度そこで死んでしまひ度くなつたらうと思ひますわ、わたしそれを恐れましたの……」から言つていつの間にか敏子は純一の手を弄つてゐた。

「わたしはその湖畔を行つたり來たりして、隨分と今度のわたしの問題を考へました。西尾の友一郎さんが何度となくわたしに下すつたお手紙の事をいろいろと考へて見ましたの。西尾の家はわたしはあんまり好きではないのです、また友一郎さんは東京の學校から歸るたんびに、何だかにやけた樣子をして步き廻りましたから、わたしはかなり反感を有つてゐたのですよ。また町に馴染の藝者があるとかいふ話で、それも隨分いやな氣がしました。けれどもだんだん知合ひになつて見ると、あの方がさう世間で言つてゐる程生意氣な惡い人だとは考へられなくなつたのよ。あの方は自分は隨分世間から惡く言はれるが、自分の立場としては人に善く言はれるやうな事ばかりもしてゐられないし、

また多少遊んだり何かするのも社交上の必要からで、何も好き好んでやつてゐる譯ではないと仰しやるのです。それはあの方にもいけない處はありませうけれど、そんな事を言つて行けば、誰れだつて完全な人は無いでせう。どういふものかあの方はわたしに對して、本當に思ひがけない親切をお見せになるのです、あの方はわたしをどうしても貰ひ度いと仰しやるのです……」と敏子は低い哀感の籠つた聲で話し續けた。純一は敏子の告白が西尾の家の問題となつた頃から、此上もなく苦しくなつた。けれども彼は敏子の心の最も大きい惱みとなつてゐるその問題に、同じ惱みと氣遣はしさとが感じられて、苦しみながらも訊かずにはゐられなかつた。

「西尾の家とわたしの家とは財産の點から言へば隨分と懸隔がありますから、わたしもわたしの家でも初めのうちは隨分お斷りをいたしたのです、けれども西尾の家ではわたしの家が家柄がいい、血筋がいい、そしてわたしが氣に入つたと言つて、いろいろ人を仲に立てて貰ひ度いと仰しやるのです。御支度の事も少しも心配しなくていいから、ただ身體一つで來てさへ貰へればいいからといふ話なのです。わたしとしては御支度が出來ないといふ事は隨分氣の負ける事ですけれども、友一郎さんが自分は支度なんか望んではゐない、自分の氣に入つた人を望んでゐるのだからと仰しやるので、わたしの家でもたうとうその氣になり、わたしもそんなに迄わたしのやうな者を望んで下さるといふ先方の仰しやり方にはお斷りのしやうもなかつたのです、友一郎さんはわたしにお手紙を下すつて、あなたが來てくれなければ僕はいつそ亞米利加へでも行つてしまふとまで仰しやるのですもの。それにわたしならば家へ來て辛抱してくれるだらうと仰しやるのです、どうしてこんな我儘なわたしがそんなにあそこの家の氣に入つたのでせう?」と敏子は寂しく笑つた。彼女は純一の白い指先きを幾度びもいとしげに撫でてゐた。

「それにね、あなたにはこんな事は分るまいけれど、友達は片つぱしから嫁入つて行くし、いつかのやうに御支度が出來ないと言つてひどい目に遭ふ事もあるでせう。それにもつと厭やな事があるの。先刻停車場でじろじろ見てゐた

あの驛夫ね、あれ誰れだか御存じ？」

「あれは小山です、僕たちがよく虐められた小山です」

「さうよ、小山なの、あの厭やな男がどう云ふものか、わたしに時々拙い字で厭やな手紙を寄していけないのですよ家の祖母さんがいつもひどく叱つてやりたいと怒るのですけれど、わたしが止めてゐるのよ、人に知られればわたしの恥ですもの。わたしはあんな男にまで手紙を附けられる程見くびられてゐるかと思ふと隨分口惜しいのですけども、何處迄も知らぬ顔をして取合はないで置かうと思ふのです。けども、いつ迄も家にゐると、女といふものはそんな風に若い男から見くびられるといふ事ですわ、だから女は本當につまりません、何故わたしは女になんか生れて來たでせう、本當に女はつまらないわ、わたしも男だつたらと、それはよく思ふの、わたしは何一つ才能なんか無いんだけれど、でも男だつたらこんなに人に輕蔑されたり何かしなくても濟むでせう。そんな事を考へると死んでしまひたくなるのに無理はないでせう……」

「いろいろと考へた末にわたしは心を定めましたの、わたしは西尾の家へ行く事を承知しましたのよ。するともう町中の評判になつて、わたしと云ふものが金持の金に目がくれて、今度の結婚を承諾したのだと惡口を言ふのでせう。本當にうるさい世の中ね。金持の家に嫁くといふ事はどちらにしろ餘り善い事ではないかも知れませんが、わたしの今度の場合のやうに、友一郎さんからどうしてもわたしでなくてはならぬと、强つて望んで頂いた場合に、わたしが承知したからとてそれが何故惡いのでせう。西尾の家がどんなに評判が惡いからとて、私にはそんな處で苦勞して、少しづつでもその家が評判のいい家になつて行けば私としての誇りはあるのです。友一郎さんもこんなに私を望んで下さる以上は、私が先き先き仕たいと思ふ事を矢張り理解して賛成して下さるに相違ないと思ひますわ。さうすれば私は今どんなに惡く言はれてゐても、先きになつて隨分善い事が出來ますわ。困つてゐる人や苦しんでゐる人には、

いろいろと助けとなつて上げる事が出來るのです。それはちつとも惡い事ではありますまい、私には屹度さう出來るといふ考へがあるのです、その考へが定まつたので承知した譯なのです」と彼女はかなり冷靜にかう言つた。

純一は敏子の心からの打明話に依つて、これ迄敏子に感じてゐた苦痛も寂しさも一つも慰められなかつた。否、反つて失望と嫉妬とが本能的に燃え上つて來た。彼は西尾友一郎がどんなに憎いか知れなかつた。けれども敏子に對しては、今はもう何にも言へないやうな心持であつた。それが一層彼の心の此の人の世に對する深甚な惱みであつた。

「本當に私はあなたの事が氣になるのよ、自分の弟にだつて、こんな親しいなつかしい心持を私は今迄持つた事がありませんわ。私が西尾の家へ嫁つても、どうしてこの氣持が變るものですか、一層私はあなたの事を思ひ出してなつかしくなるでせう。私にはあなたがたつた一人の親しい人なのよ、西尾の家へ行つて若し苦しい事があつたら、その惱みを打明けて聞いて貰ひ度いのは唯だあなた一人なのよ。あなただけはどんなに離れてゐても、私の事には理解があるのですもの、さう言つて間違ひではないでせう。私がそんなに思ふやうに、あなたも私を親しくなつかしく思つてゐて下さる事を私はよく知つてゐますわ、ですから苦しい時はいつでも私に話して下さいね、何でも困る事は打明けて下さいね」と敏子は純一をその胸にかき抱き度いやうな心持をその目に見せて言つた。純一は急に恐ろしいやうな心持に襲はれて來た。彼にはそんな心持が譯が分らなかつた。敏子の心にもまたその恐ろしさが閃いたやうであつた。彼女はそつと純一の手を離して立上つた、そして少し向うへ歩いて行つて、

「元雄さんはたうとう上京が出來て嬉しさうでしたわね」と向うに向いた儘言つた。

「僕一人が殘りました」と純一が言つた。

「本當にあなた一人きりになつたのね、去年の今頃でしたかね、歌會のあつたのは？　もつと先きでしたかしら？つい此間のやうに思ふのに、あの時ゐた人が、もう三人迄東京に行つたのね」と敏子はぐるりと此方に向いて、その

涼しい目で純一を見て、
「純一さん、あなたも近いうちに東京へいらつしやる事にお定めなさいよ、私が勸めるわ、ね、さうしなさいよ、屹度さうしなさいよ！　宏さんに負けちやいけませんよ、しつかりえらくなつて下さいね、あなたは才があるんですもの、屹度えらくなれますわ！」と敏子が何か感動したやうに、勵ますやうに言ひ切つた。その言葉の調子が純一には強く響いた。彼はその瞬間初めて確然と上京の決心が定つたやうな氣がした。
「え、近いうちに僕も行くのです！」とはつきりと純一は言つた。
敏子が餘り遲くなつてはと言つて、一緒に歸らうと言つたけれども、純一はたつた一人でもつと考へたいと言ひ張つて、敏子の言ふ事を諾かなかつた。
「あなたもかなり强情ね！　ではこれで喧嘩でもしたやうにお別れなのね、それもいいわ……またいつかお目にかかれる事よ、近いうちに私があなたを何處かへ呼ぶかも知れませんから、その時は屹度來て下さいね……」と敏子は瞳に曇る涙を耐へるやうな目付で純一の寂しさうな姿を見て、一足先きに山を下りた。水色のパラソルがゆるく木の間に隱れて、だんだんに見えなくなつて行くのを、純一は身動きもせずに見送つてゐたが、それがすつかり見えなくなると、顏をその膝に當てて長い、長い間泣いてゐた。

わが涙、あだなる涙、
この涙たとひ雨とふらすも、
また空の鳥と飛ばすも、
あだなりや、あだなりや、
すべてただ神のまにまに。

第二卷

大都會にて

ああ旅人よ。いかに此の青ざめし景色は、
　青ざめし君が面を眺むらん。
いかに悲しく、溺れたる君が望みは、
　高き梢に嘆くらん。

ポオル・ヴェルレエン
永井荷風氏譯

一

梅雨が霽れると、田舍だと水量の增した河のほとり、夏草の柔かに包んでゐる丘の林、新樹の綠が今にも燃え立ちさうな遠近の山々、その何處にも日光が麗はしく照らして、碧玉の空には春に殘された雲雀の聲が聞える。然るに都會では、乾いて眞白になつた大道路の上に、日光それ自身さへ眩惑してゐるやうな反射を電車軌道に貫いて、運河を往來する小舫のやうな電車の車輪の音が田舍の者には堪らないほど刺すやうに痛く響く。

街路樹の白楊の下、鋪道を步く人々の中に混つて、紺絣の單衣に黑いメリンスの帶をしめて、木綿の袴を穿いた一人の少年が、黑い大きな洋傘を携へて步いて行く。彼は時々立寄つて、書店の入口に山のやうに積まれた新刊の雜誌や書物を眺めたり、また時々立止つて、文房具店の陳列棚に見入つたりした。その樣子には、中學生らしいのんびりした風采もなく、何處か此頃頻りに上京する田舍の家出者を思はせる妙にうろうろしたやうなところがあつた。これが數日前上京して、今日その友人の中野信太郎を芝の神谷町へ訪ねて行く龍田純一であつた。彼はふと思ひ着いたやうに向う側の鋪道に行かうとして、車道を橫ぎりかけた。折りから大きい箱車が近づいて來て、突然彼の前でその箱の尻からパッパッと水を撒き出した。その飛沫が彼の袴の裾にかかつた。彼は狼狽してひよいひよいと飛んで線路を越えた時、反對の方から自動車が警笛を鳴らして、彼の傍を掠めて駈けて行つた。彼はその後を見送つて、暫く街路樹の下に立つてゐたが、洋傘を持ちかへて步き出した。

純一は今朝、瀧の川の方から俥にも乘らず、電車にも乘らず、時々懷から地圖を出して道筋を調べながら（內氣な彼は道をたづねる事さへ直ぐには出來なかつた）、何時間もかかつて、上野から須田町を經て、日本橋へと出て來たのである。

日本橋は開いた程にも大きくは思はなかつた。橋の上から河の方を見ると、沼のやうに靑黒くどろりと湛へた水の上には、きらきらと石油が浮いてゐて、その中を荷足船が動くとも見えず動いてゐた。河岸には赤煉瓦の倉庫が峯のやうに斜面を連ねて、その河に向いた口からは、その下の荷足船へと細い一枚板が渡されて、その上を人足が往つたり來たりする度に、長い板の眞中どころが今にも折れさうに撓んでゐた。ある船の中には、一家族住んでゐるらしく、船底には世帶道具が並んで、艫の方には汚ない子供が遊んでゐた。

橋を越えると、江戸の面影を偲ばせるやうながつしりした土藏造りはだんだんに尠くなつて、彼が田舍で愛讀した小說の版元春陽堂のいかにも老舗らしい土藏造りの店の向側には、歐米の新しい文化を輸入する關門と云はれる丸善の洋館が高く聳えてゐた。日本の過渡時代の混雜はこれ等の高低不揃ひな建物に現はされてゐて、中にも改築や新築中の構ひをした建物の多いことが、「凡てがこれからだ！」といふ大きな叫びを擧げてゐるやうに思はれた。

彼はその數日前初めて東京の地を踏んだ新橋の停車場に、宛かも自分の足跡をなつかしむもののやうに入り込んで、暫く構内の慌しげな旅客の群れを眺めてゐたが、又もや地圖を取出して、信太郎のゐる神谷町への道筋を考へてから芝公園の方に向つた。

神谷町といふ町は直ぐ分つたが、訪ねる細谷愼吾といふ家はなかなかに見付からなくて、たうとう通りがかりの小僧にたづねると、小僧は交番を敎へて、そこで訊きなさいと言つてくれた。彼の服裝をぢろぢろと見廻しながら、交番の巡査は棚から厚い帳簿を取り出して、

「どういふ事をする家かね？　店屋かね？」と訊いた。それで純一が、その家が學者の家であることを告げると、

「あア、さうか、ぢやアあの印刷工場の少し上の門に大きい看板の懸つてゐる家だ、その家だと……」と言つて親切にその家を敎へてくれた。

細谷の家は坂の中途にあつた。新築の二階建で、門のところには成程看板がかかつてゐた。暫く純一は躊躇してゐたが、やがて思ひ切つて門を入つて玄關の鈴を鳴らした。待つてゐると、やがて障子がすつと開いて、その間から藍色の單衣の上に紅い帶をしめた十七八の娘が、そのふつくらとした顏を半分見せて、

「どなた樣で……」と訊いた。

「こちらに中野信太郎君はをられますか？　僕は友人で……」とあとは口の中で消えてしまつた。

「中野さんですか」と娘は言つて、その全身をすつかり現はした。色の白い細面の顏に微笑を浮べて、珍らしさうに純一を見ながら、

「こちらにおゐでですけれど、今はこの下の編輯所で仕事をしてゐらつしやいます、私がお連れいたしませう」と言つて、娘は敷臺のところに出て來た。今迄掃除でもしてゐたらしく、その右の手には紅い襷のやうなものが、くるくるとその指に纏はつてゐた。

非常に脊の高い娘で、その細長い背中には、紅の帶のお太皷が恰好よく結ばれてゐた。黑い髮を三つ組に編んで、頸のところに今にも落ちさうな風に盛つて、その下の方を大きい花模樣のゴム留で留めてゐた。純一は後から步いて行きながら、思ひがけず逢つたこの娘の美しい姿に、東京の華やかな夢を想像することが出來た。

門を出て坂を少し降りたところの片側に、工場らしい建物があつた。純一が先刻も一寸注意した家で、「何々」印刷工場といふ看板が懸つてゐた。

娘は一寸振返つて、純一の來るのを見てから、小さな窓の下に寄つて、

「中野さんを一寸呼んで頂戴、お友達が來てゐますから……」と誰れかに言ひ付けてから、純一の傍に來て、

「今に中野さんが下りて來ますでせう、一寸お待ち遊ばせ」と言つて、純一がお辭儀をした間に行つてしまつた。

「やア龍田君だつたね、屹度さうだらうと思つた、よく來てくれた、直ぐここが分つた？　上京するといふ手紙を見てから、迎へに行かうと思つたんだが、いつ着くのだか君は言つて來なかつたからね……」と二階から駈け下りた信太郎は、いきなり純一の手を握りしめて、なつかしさうに叫んだ。

「本當によく來てくれた、僕は昨夜も君に逢つた夢を見たんだ、夢の通りだつた。まあ上り給へ、上つて僕等の編輯室を見てくれ給へ」とまだ純一が何にも言はないのに、信太郎はすつかり飲み込んで、彼を引つ張るやうにして案内した。

二人が二階に上ると、入口の三疊に一脚のテエブルと椅子とが置かれて、そこが應接室になつてゐた。そしてその部屋の隅には印刷洋紙らしいものが積上げられてゐた。

「一寸ここで待つてゐてくれ給へ、一寸先生にことわつて來るから……」と信太郎は純一に椅子を奬めてから、次ぎの部屋に行つた。信太郎のその樣子には、非常に世馴れた如才のないところと、いかにも先生の氣に入つて、樂しく働いてゐるといふ自信とが、はつきりと見えてゐた。

「僕の郷里の者です、たうとう上京して來ました、いつも僕が上京を勸めてゐたのです。僕の親友です……」と次ぎの部屋で、信太郎が先生に言つてゐる聲が此方の方へ聞えた。その聲の調子には、何處迄も純一を庇ひ込んでゐるのは自分だと云ふ誇りを見せてゐた。それが純一には嬉しくもあり、懷しくもあつた。先生が何か言つてから暫くすると、

「龍田君、此方へ來給へ、先生もゐられるから」と信太郎が呼んだ。

編輯室へ入ると、そこには突當りの南の窓際に先生の大きい書卓がどつしりと据ゑられて、回轉椅子の上に四十年配の美髯を蓄へた、立派な顔立の人が、黑い事務服を着て、此方に向いて煙草を燻らしてゐた。その人の背後には大きな分類棚があつて、ちよいちよい白い紙が差入れられてゐたし、棚の下には澤山の參考書が雜然と積まれて、いか

にも辭書の編纂所らしかつた。中央には圓卓があつて、その上にも原稿や書物がゴタゴタ置かれてゐて、そのまはりに二三脚の椅子が並べられてゐた。信太郎の小さな机は北の方の小窓の下に置かれて、その上には厚い紙の堆積が卦算で壓へ付けられてゐた。信太郎はそこから腰掛を引つ張つて來て、先生の前の圓卓に向つた。

「まあかけ給へ」と純一に椅子をすすめてから、

「龍田純一君です、僕とは違つて大變才人です、文學者志望です」と信太郎が先生に紹介した。

「これは初めて……中野君と大變お親しいさうですね、いつ上京されました？」と先生が靜かな調子で訊ねた。

「四五日前上京しました」と純一が返事をした。

「今何處に君はゐます？」と先生が訊いた。

「瀧の川の從兄のところにゐます……」

「市郎君は瀧の川にゐたのだね、上京してゐるとは聞いてゐたが、瀧の川にゐるとは知らなかつた。君の上京の手紙を見て、實は僕がこの附近に下宿屋を探すつもりでゐたのだ」と信太郎が言つた。

「若し市内へ來られるのだつたら、この附近の下宿屋で中野君と二人でやられるのもいいでせうね」と先生が卷煙草の灰を落しながら言つた。

半時間ほど編輯室で話をしてゐたが、下では文選の歌がして、校正刷が出て來たりして忙しさうなので、次ぎの日曜日に瀧の川に訪ねて來るといふ信太郎の約束を聞いてから、純一はこの家を出た。坂を下りながら彼は美しい娘の聲と、先生に對して忠實な信太郎の樣子とを何といふ事もなく聯想して、羨ましいやうな心持がした。

「信太郎君はもう靜子さんの事は忘れてゐるやうだな！」と彼は思つて、これ迄國から手紙毎に靜子の事を知らせて寄與した事が愚かしく思はれた。

黄昏頃まで芝公園の此處彼處で憩んでから、純一は美しい灯影の街を縫つて、日比谷の方に出た。

「確か此處が日比谷公園だ」と一つの大きな建物が園内に食ひ込んでゐる傍らの門を入つて、兩側に植込のある廣い路を奥へ奥へと進んで行つた。

風がざわざわと樹木をゆすぶつて過ぎる。何だかから身體の何處かに疲勞した昂奮を感じながら、彼は廣場に腕を組んでイんで、物珍らしげに四邊を見廻した。此處彼處の樹の間に靑白いアーク燈が輝いてゐる。疎らな外廓の樹立の彼方には、走り交ふ電車が靑い火花を空に散らす。交叉點のあたりには疳高に呼ぶ新聞賣の聲が響く。

靑い靄でも閉ぢ罩めてゐるやうに、公園は今や夢のやうに夜の靜寂に沈んで、喧騷な都會のどよめきの眞中に、美しい幻想のやうに池には噴水のさらさらといふ音がする。池のほとりのベンチに行つて腰を掛けると、傍らのベンチに憩んでゐた手代風の男は、風呂敷包を大切さうに取上げて、はツくしやんと大袈裟に嚏をして、ひよいと首を縮めながら立去つた。彼は一人になつた。向の方には二三の人影がちらついてゐる。水飲む者があつて、水音が烈しく石を打つ。

暖かいやうな寒いやうな、何だか身に沁みる夜だ。彼は洋傘を突立てて、その上に頸を乘せた。何だか氣迷ひのする心細い氣持になつて、覺えず胴顫ひがした。心の底で何者かが亂舞でもしてゐるやうに、妙に落着かない。けれども彼の心細い氣持は次ぎの瞬間には打消されてゐた。

「宏さんに負けちやいけませんよ、しつかりえらくなつて下さいね、あなたは屹度えらくなれますわ!」と勵ますやうに言つた敏子の言葉を思出すと、彼は彼自身思ひがけない勇氣が心に滿ちるのを感ずるのであつた。

「僕は屹度えらくなつて見せる、勝つて見せる! 僕は僕の遣り方で勝つて見せる! 僕の血管に流れてゐる愚かな敗北者の血は僕を支配することは出來んのだ、僕は僕の意志によつて決して敗北者とはならぬつもりだ。この大都會

の渦巻の中で、僕は拔手を切つて泳いで見せる！」と彼は自分の胸を叩いて叫んだ。

彼は今頃叔父の浩藏が例の氣象でどんなに怒つてゐるか、どんなに罵つてゐるか、また祖母がどんなに困つてゐるかを考へた。祖母は純一を停車場まで送つて來て、

「叔父さんには何處迄もおまへが無斷で家出をしたといふ事にお祖母さんは言つとくから、市郎に逢つてもお祖母さんが承知の上だとは言ふぢやねえぞ、旅費も友達の中野から借りたと言つとくだぞ。東京へ行つたらよう勉强するが宜え、金に困つたら何時でも言つて來るが宜えぞ、お祖母さんは少し位は有つとるから心配はするな……風邪を引かんやうに氣を付けてな……」と列車の窓のところに立つて、幾度も繰返して言つた言葉を思出し、その涙ぐんだ老の眼に湛へてゐた慈愛と分らぬながらの理解とを思出して、

「お祖母さんに對しても、僕がしつかりえらくならなくちや申譯がない、叔父に對しても屹度えらくなつて見せる！」

純一がぢつと考へ込んでゐるところへ、細長い風呂敷包を抱へた一人の見窄らしい女が闇からひよいと顏を出した。

純一がびつくりして見ると、縮れ毛の四十近い女で、妙な臭ひがする。

「あなた、お菓子はどうで御座ります」と嗄れ聲で言ひながら、ベンチの片端にさつさと風呂敷を開いて箱の蓋を取つた。彼が子供の時よく買つて食つた駄菓子がその中にはごちやごちやしてゐた。

「要らない」と素氣なく言つて、純一は一體こんなものをこんな夜こんな處で賣つてもいいのだらうかと思つた。

「どうぞお買ひ下さりませ」と女は押付けがましく言つて立去らない。「いくらでもよう御座りますから、どうぞ買つて下さりませ」

純一はむつとしたが、折角考へ續けてゐる氣分を此上なほ傷つけられたくなかつたので、白銅を一つ投出した。女は紙袋に菓子を入れて渡し、二三度お辭儀してから立去つた。

純一は菓子を一つ頰張つた。いやに甘いサツカリンの惡臭い味に舌がずるずるして胸が惡くなつた、彼は殘りの菓子をベンチの下に投げ棄ててしまつた。

立上つて公園を出ようとすると、向の方から二つの影がもつれ合ひながら近づいて來た。アーク燈の光を背後から受けたその瀟洒な洋服を着けた學生風の男の横顏が、不圖、純一には西尾宏ではないかと思はれた。ひつたりと寄り添つてゐる二人の手と手は握り合はされて、女が甘えるやうに囁いたり、嬌めかしく身を振つたりしてゐたが、純一の傍らに來た時には、さも輕蔑するやうにその女は彼の目の前でぐるりと向うに向いた。宏ではなかつたが、宏もまたこの男と同じやうに、鄉里から莫大の學資を送らせて、美服を纏つて、華かな都會で若い娘と公園の夕闇に快よげな散歩をする、そして美しい詩を作る、そして喝采を得るのであらう、純一は急にかうしてはゐられないやうな氣持になつて、足早に公園を出た。

思ひ切つて電車に乘らうと思つて、五六人の中に混つて、公園傍の停留所に待つてゐたが、なかなか電車が來ないので、あたりを見ると小さなペンキ塗の待合所があつたので入つて行くと、そこにも四五人の人がゐた。電燈が暗くて、狹いところなのにしんとしてゐた。新聞賣が一人腰かけてゐた。純一はその男から夕刊を一枚買つたが、別に面白い事も出てゐない。彼はぼんやりと外を眺めた。凡てのものが、往き交ふ人もイんでゐる人も、薄黒い紗を隔てて見るやうである。彼は上京の汽車の中で、大阪から名古屋まで來て、そこで身體を休めて行かうと言つて下りた商人風の男が、

「お互ひに明日は三百里外の人だぜ」と連れを顧みて笑つたのを思出した。

「ああ、もう自分も三百里外の人だ……懷しいもの愛するものは皆故鄉にゐる……」

哀感に襲はれながら待合所を外に出ると、丁度電車が二臺ほど來たが、どれもかなり滿員だつたので彼は乘る氣が

しなかつた。けれども大方それに乘り込んで行つてしまつたので、停留場には彼と、彼の傍に立つてゐる脊の高い洋服の男との二人きりであつた。先刻からこの男は純一をじろりじろりと見守つてゐたのだ。純一はその男の險しい眼付に、ふと視線が會ふと、非常に氣味惡く感じられて直ぐ眼を逸らした。こんな男とたつた二人で立つてゐるのが餘りに無氣味であつたので、次ぎの停留場まで歩かうかとも思つたが、又思ひ返して、もとの待合所に入つた。新聞賣はもうゐなかつた。人一人ゐないのを結句幸ひに思つて、先刻の新聞を取出して、また拾ひ讀みをしてゐると、突然、

「こらッ！」と呶鳴つて、大きな手がむづと彼の肩を掴んだ。不意を食つて、思はず彼は新聞を取落した。見ると、彼を荒鷲のやうに掴んでゐるのは、先刻の不氣味な男である。眞正面から彼を睨み付ける眼はぎらぎらといやに光つて、迫つた眉の間には一分の隙もないやうな穿鑿の意志が明示されてゐた。呆氣に取られてゐる純一を頭ごなしに取扱ひながら、

「おい、貴樣はダッだらう！」と叫んだ。

「ダッつて何です？」

「白ばッくれるな！」と男はいきなり大きな平手でぴッしやりと純一の頰邊を擲つた。まるで鐵の拳ででもあるかのやうに、その堅い打擊は純一の軟かな頰を碎いたかと思はれた。この理由のない侮辱を受けて、彼の心臟は燃え、全身の血は頭に逆流するやうに思はれた。

「何です、僕を擲つて……失敬ぢやありませんか！」

「失敬？　ぢやおまへがダッでないと言ふんだな、その證據があるか？」

純一は初めてダッの何者であるか、この男がどんな階級に屬する者で、どんな權力を恣まにしてゐる人間であるか

を悟つた。と共に、恥かしさ口惜しさが胸に込み上つて來て、自分の身體を礫のやうに彼の面上に投げ付けたいやうな悲痛な憤りに顫へた。

「僕がダッだと云ふ事が、あなたこそどうして定められるんです？」

「ぢや何故、こんな夜にこんな處で新聞なんか讀んでゐる？」

「何處で新聞を讀まうが僕の勝手です、それが何だと言ふんです？」

「何だと？　一體、貴樣は俺を誰だと思つてゐるのだ？」と洋服男は純一の氣勢に對して、次第に調子を變へながら、

「一體、何の必要があつてこんな處に愚圖々々してゐるのだ？　先刻から見てをれば頻りにうろうろしてゐるが……野郎、もう一仕事したらう？」と言つて、冷たいにやにやした嗤笑を湛へながら、

「兎に角、裸になれ！」と命じた。

「なります、なります、裸にでも何にでもなります！」と純一は對抗するやうに言つて、直ぐに自分の袴を取り、帶を解いた。洋服男は純一を擲つた手で彼の猿股にまで指をかけた。この時純一の感じた事は、この男を殺したいと云ふやうな氣持であつた。けれども彼は、見ろ、見ろ、俺がダッか、俺が泥棒かと靑天白日の身の誇りを以て、自ら進んで赤裸にならうとした。解けた帶の間から洋服男が得たものは、輕い蟇口と一册の手帳ばかりであつた。その手帳をばらばらと開いて見た男の顏には、見込違ひの失望の色が鮮かに浮べられた。

「フン、學生だと言ふんだな、何處の學生だ？」

「まだ學校へは行つてゐません、つい二三日前上京したばかりです。その手帳をもつと見て下さい、さうすれば僕がどんな人間だかわかります！」と純一は彼を憎みながら叫んだ。

「家出でもして來たか？」と洋服男は負けず口を叩きながら、嘲るやうに、

「何處の者だ？　名は何といふのだ？　そして年齡は？」
「僕は鳥取縣西伯郡米子町……龍田純一と云ひます、年は十六歳です、今は府下瀧の川二百五番地木村方です、同鄕の從兄と一緒にゐます、從兄は王子釀造試驗所に通つてゐます、不審なら從兄を呼んで訊いて下さい、廣田市郎と云ひます」と純一ははつきりと投げ付けるやうに答へた。
「フン、手を見せろ！」と彼は命じた。純一がその白い纖い手を出すと、彼は指の一本一本に觸り、一つ一つ爪を調べて見て、
「兎に角、迂散臭い奴だ」
「何處へでも連れて行つて下さい、いくらでも調べて下さい！」
「默つてをれ！」と言つて、その男は自分の手帳に勿體らしく純一の原籍や名前などを認めてから、
「早く歸れ！」と言ひ棄てて、外へ出て行つた。
「馬鹿ッ！」と叫んで、純一はその男の背後からカッと唾を吐いた。洋服男はその氣配に振返つたが、にやりとしただけで引返しては來なかつた。
「屈辱だ！　屈辱だ！　人權蹂躪だ！」と純一は袴を穿きながら叫ばずにはゐられなかつた。彼の眼は血走つてゐた。彼の唇はびくびくと顫へてゐた。
「彼奴が敵だ！　彼奴の背景に蔓る勢力が敵だ！　僕はたとへ牢獄にぶち込まれてもいい、こんな無法な屈辱を受けて忍ぶ事は出來ぬのだ！　僕は戰つてやる、彼等と戰つてやる！　見ろ、今に見ろ！　僕はやるんだ、たとひ全世界が敵になるとも恐れないのだ！」
　純一の心には祖父が浮んだ、父が浮んだ。彼はそれを叱咤するやうに叫んだ。

「弱い者は辱められる、理由もなく壓迫される。そしてつひには滅ぼされる！　僕は滅ぼされはしないぞ、僕は强くなるのだ、勝つてやるのだ！」

二

その夜、從兄の市郎はどうしたのか歸つて來なかつた。純一が心配して十一時近くまで寢ないで待つてゐると、家の主婦さんが笑ひながら部屋へ入つて來て、

「もうお休みなさい、廣田さんは今日は歸つて來ませんよ、こんなに待つてゐては大變ですよ。廣田さんが今迄歸らなけりや、もうお定りですよ」

「何が定りです？」

「あなたには分りませんわね」と主婦さんは矢鱈に笑つて、寢ることを勸めた。

純一は十二時近くまで、市郎の机に向つてゐた。日記を書かうとすると、今朝からの出來事、細谷愼吾の家、美しい娘、從僕のやうに感じられた信太郎の事などが思出されたが、それよりも日比谷公園で刑事に侮辱された事が先づありありと浮んで、憤激の文字が紙上に走り出るのであつた。彼は刄を突き刺すやうな氣持でペンを壓し付けて、インキを撥ねながら書いた。敵といふ字が頻りに列んだ。次ぎには、彼は喃語嬌態の限りを盡して、美人と共に木下蔭に隱れた西尾宏を思はせる學生を罵つた。終りに彼は中野信太郎を呼ぶに奴隷を以てした。

「あの美しい娘の奴隷になつてゐる、あの美しい娘に氣に入らうとして、先生に服從してゐる、卑屈ではあるが、愛すべき男だ」と書いて、その日の日記を終つた。けれども市郎はたうとう歸つて來なかつた。

翌朝、朝飯をすましてから部屋の掃除をしてゐると、ばたばたと市郎が歸つて來て、その大きな身體を机の前にど

つかと据ゑて、机の抽斗の中を搔き廻して、何かを探すやうなので、
「何を探してゐるのです？」と純一が訊くと、市郎はその黄色い大きな顏を振向けて、にやりとして、
「いや……」と言つて、やがて見付け出した上等の紙入から、四五枚の紙幣を出して數へ出したが、當惑したやうな顏をして、
「純一君、君、五圓ほど持つてゐないか、一寸の間僕に貸してくれ」と言つた。
純一は上京した時、市郎に食料として十圓札を渡したが、市郎は五圓だけでいいと言つて殘りを返したので、まるきり金が無いと言つて此の場合斷ることが出來ないのであつた。
「五圓はありませんが……」
「いや、いくらでもいゝから貸してくれ給へ」
純一が自分の蟇口を出して覗かうとすると、市郎は、
「その儘僕に貸してくれ給へ」といきなりその蟇口を横合から取つて、紙幣をすつかり取り出して、銅錢ばかり殘つたのを純一に返した。それでもまだ足りないと見えて、彼は主婦さんに借りに行つた。純一は變な氣がしてその後姿を見送つた。空になつた蟇口を眺めると寂しい氣がした。
向の方で主婦さんの聲がして、簞笥の抽斗を開ける音がしたり、市郎の笑ふ聲がしたりした。どうしたのだらうと思つて純一がそこへ行くと、主婦さんは紙幣を市郎に渡しながら、
「龍田さん馬が來てゐるのですよ」と言つた。
「馬？　何處にですか？」と純一がこんな處へ誰れが馬に乘つて來たのだらう、軍人が來たのであらうかと思つて、
「誰れが乘つて來たのですか？」

「廣田さんが乘つて來たのですよ」
「何處に繫いであります？」
「家の玄關に……」
「馬鹿言つてらア！」と市郎が照れ隱しに二人をきめつけて、玄關に出て行つた。そこには先刻から盲縞の着物を着た人相の惡い男が腕組をして待つてゐたのだ。純一はその男が市郎の手から紙幣を皆受取つて、首からかけた大きな縞の財布に疊み込んで出て行くのを見た。
「暴られましたね」と主婦さんがぼんやり立つてゐる市郎の背中をぽんと叩いて言つた。
「昨夜はよかつたよ」
「あなたはよかつたでせうけれど、龍田さんが隨分遲くまで待つてゐてお氣の毒でしたよ」
　市郎は傍らに立つてゐる純一を振返つて、
「そんなに君待つたの？」
「いや、僕は日記を書いてゐて遲くなつたのです」
「あア、君は日記を書くんだな、こげな事を日記に書いちやいけんぜ」と國言葉を出して市郎は言つた。
「うんと書いておやりなさい、何なら親父さんに言ひ付けておやりなさい」と主婦さんが言つた。
「馬鹿言つてらア、親父が知れば大變なんだぜ、俺を品行方正だと思つてゐるからな」と市郎は可笑しさうに笑つた。
純一も先刻からいろんな事が分つて、市郎の泊り先が大變なところだと感じたので、自分まできまり惡いやうであつた。
　市郎はその父の浩藏とは違つて、俗に懷つ子といふ我儘者で、今の浩藏の言葉によれば、なかなか學業も品行もい

いやうになつてゐるが、隨分の父親泣かせで、十四五の時分から茶屋通ひを覺え、大酒で、女好きで、松江の商業學校を遊興の爲めに退學處分され、倉吉の農學校をも女の事でしくじつたのである。淀江の町では廣田の道樂息子といふ名で廣く通つてゐて、あの親父さんの蓄め込んだ身上も、息子の代になれば三日ももたぬだらうと、蔭口をきいてゐる位である。純一が浩藏の家にゐた時、いつも女中のおつたから市郎の名を聞いた。おつたは市郎の事になると、夢中になつて辯解した。親切でいい男だと、おつたはいつも純一に彼の噂をした。

上京した夜、市郎から國元の事をいろいろと訊かれた序に、つい言葉が滑つて、おつたの事を言ふと、

「あのお多福はまだ俺の事を思つとるかな、彼奴は俺の女房にでもなれるつもりだらうが、誰れがあんなお多福を嫁にするもんか」と鼻で笑つて、純一が傍で聞くのが恥かしいやうな、おつたとの情事を話して、子供が出來ては大變だから、直ぐに歩かせるものだから、おつたがいつも苦情を言つて困つたと、鼻を蠢かして喋つた。市郎が好んで話すそんな話を聞いてゐると、純一はあさましくなつて、頭が痛くなるのであつた。

市郎はごろりと横になつて大欠伸をしながら、昨夜自分がどんなに持てたかを、得々として辯じ立てたあとで、

「俺が今度君を吉原へ連れて行つてやる、綺麗な處だぜ、花魁かぴかぴかする襠裲を着て、何十人もずらりと居並んで、格子の間から長煙管で吸ひ付け煙草をやつて、ねえ旦那、お上りなさいな、ねえ樣子のいい旦那と言つて呼び込むからな」

「樣子のいい旦那、樣子のいい旦那つて君も呼ばれたんですか？」と純一が市郎の平つたい黃色な顏を笑ひながら見て訊くと、市郎は得意さうに、

「ウン、アイ・ラヴ・ユウ、スヰイト・ハアトの旦那つて、俺の袖をつかまへて放さない奴があつたよ。彼奴はなかなか面白さうな奴だつた、一つ今度純一君を連れてあの家へ上つてやらう、そして俺があの女を敵娼にして、君には若

いいい處を選んでやる」

「僕はいやです、そんな處へ行きたくないのです」

「まあそんな事を言ふな、どうせ男は遊び位知らなくちや話せん、俺がどうしても君を元服させてやる」と言ふうちに、市郎はもうぐうぐう寢込んでしまつた。

そんな目に遭つては堪つたものでないと純一は思つた。

信太郎が訪ねて來ると言つた日曜日には、市郎は同じく釀造試驗所に來てゐる國の男と一緒に、横濱へ遊びに行くと言つて出て行つた。純一はもう信太郎が來さうなものだと思つて、家の前に彳んで、待ち心地で四邊を眺めてゐた。あちこちに四五軒づつ、生垣に圍まれた新築の平屋が、日向ぼつこする猫のやうに、明るい夏の日影を受けて、屋根の瓦を光らせてゐた。遠くの方には木立があつて、その上の方の空には、白い夏雲がふうわりと浮んでゐた。小さな丘の上に、その家庭の樂しい生活を想像させてゐる。入口の緣の芝生には、美しい小徑がついてゐて、今しもその小徑に、純白の洋服を着て麥稈帽を頂いた、姉妹らしい二人の女の兒が踞つて遊んでゐる。一匹の洋犬がその傍らに、さも良い友達らしい樣子をして、尾を掉つてゐる。

「あそこにも誰れか文學者が住んでゐるのではなからうか？」と純一は思つた。

東京の北郊に當るこの高臺には、畫家や、文士や、學者が方々に住んでゐて、純一が散歩の度びに、知名の人の名を、門札に見出した事も稀れではなかつた。盛名ある某文士の家を見出した時、純一はその門を叩いて敎へを乞ひ、その知遇にあづかつて文壇に出ようかと、胸を躍らせた。けれども彼は思ひ切つて、そんな事をする氣にはならなかつた。彼にはそれが卑屈のやうにも思はれ、押付けがましく無遠慮にも思はれて、つひには諦めるのであつた。

「どうして來ないのだらう、止めたのかしら」と純一は思つた。信太郎が美しい令孃の家から一時でも遠ざかり度くないやうな氣持で、自分の事など無視してしまつたやうな氣もした。嫉んでゐるといふ程でもなかつたが、色彩のある生活をしてゐる信太郎が幸福に思はれて、自分の事が寂寥に感じられた。

もう來ないのだと思つて、家の方へ引返して、生垣に添うて歩いてゐると、遠くの方から呼ぶ聲がした。

「龍田君！　純一君！」

振返つて見ると、向うの家の生垣の端れの路に、今しも現はれた中野信太郎が、につこり立つてゐた。

「ア、もう君は來ないかと思つてゐた」と純一が言つた。信太郎は近づきながら、

「いや、もつと早く來るつもりだつたが、家の令孃が鎌倉へ行くので新橋まで送つて行つてたのだ。何ね、弟と二人で時々鎌倉の別莊に出かけるのさ」と信太郎は我が事でもあるかのやうに、嬉しさうに言つて、純一の前に立つた。

「長く待つたかね、氣の毒だつたね」

二人は連れ立つて家に入つた。茶の間にゐた主婦さんがぢろりと信太郎を見て、その小綺麗な色の白い顔を見ると、氣に入りでもしたやうにちやほやと持てなした。

「市郎君は？」と信太郎は部屋に入つてから訊いた。

「試驗所の友達と一緒に横濱に遊びに行つた」

「さう、ぢや家の令孃と同じ汽車だつたかしらん」

「いや、大變早く行つたのだ」

二人はいつか話の中に國の訛りを混へながら、それからそれへと盡きる處を知らぬ程、聞いたり聞かれたり、話し續けた。

「時に、君は上京したといふ事をもう元雄君に知らせたかね？」と信太郎が訊いた。
「君へ出した手紙と一緒に上京は知らせて置いたが、何時といふ事は知らさなかつた」
「さう、では今度の日曜日に、二人で一緒に元雄君を訪ねよう。僕も忙しいので、まだ二三度しか訪ねて行かないが、なかなか勉強してゐるやうだ。何でもこの間の手紙では、太平洋畫會の方を廢して、石黒先生の門に入つたさうだ。この秋の展覧會に出したいものだと、なかなかの抱負だ。畫才は先輩にも餘程認められてゐるらしい、成功させたいものだね、相良先生の犠牲に對しても、失敗させたくない……」
純一は相良先生の病身らしい蒼い顔を想ひ浮べた。先生の事を考へると、純一もまた中野信太郎とおなじ同情の念に捜たれるのである。
「西尾宏君はどうしてゐるかしら？」と純一は訊いた。
「西尾宏！」と信太郎は言葉を切つて、その眼玉を奥に引つ込ませるやうにしながら、「彼か、あの男には此間、先生の用事で京橋迄行つた時に、あの銀座のアスファルトの街路樹の下でばつたり出逢つた。僕、最初は、横濱あたりの商舘員か、それとも、そこらの銀行員かと思つて、完ろりと見ると彼さ。ひどく洒落れた夏服を着込んで、白い靴を穿いて、パナマ帽をかぶつて、いやに氣取りながら、同じやうなスタイルで二人連れでやつて來るその一人が彼さ……僕が聲をかけると、さも思出せぬと云つたやうな顔をして、面倒臭さうな調子で、（あア、君は誰れでしたかね？）と云つた調子なので、僕はすつかり感情を害してしまつた。何分えらいのかも知れんが、あの男に逢ふと不快だ」
「僕が逢つたらどうするだらう？」
「君が逢つたら？……僕に對してしたやうな事をもすまい、彼は僕には非常に反感を有つてゐるのだ」と信太郎は苦苦しさうに言つた。

「いや、僕になんかは言葉もかけないだらう。そんな話は國にゐた時から聞いてゐたが、本當に華かにやつてゐるのだね」と純一は言つた。
「さうだ、元雄君の話によると、此頃下條潔といふ子爵の息子と大變親友になつて、何處へ行くにも二人連れださうだ。此間逢つたあの色の白い方が、その下條潔に違ひない。然し下條潔にはあのスタイルも身に著いて見えるが、西尾宏には借着見たやうで、身にそぐはなかつた。あんな輕薄な眞似は厭やだとつくづく思つた……」
「西尾君は何處迄も幸運兒だね」
「僕はさう思はぬよ」と信太郎が言つた、「家の先生ともいつもさう言ふんだが、現代の靑年は實に墮落してゐる、滔滔として物質の滿足を趁うて、精神的生活を全く閑却してゐる。此頃唱へられてゐる自然主義つてものは、君、ありや何だね、人間は皆獸だと言ふぢやないか、中には半獸主義とか唱へて、あらゆる不倫な行ひをするのが人間の眞實だとか言つて、妻を棄てて變な女と共同生活してゐる者もゐる。女の蒲團のにほひを嗅ぐなんて、君、醜惡の極ぢやないか。それが果して人間の眞實だらうか？ 僕は疑ふ、大いに疑ふ。人間にはもつと高い理想がある筈だ、要求がある筈だ、僕は何も舊道德を完全無缺なものだと言ふのぢやないけれど、人間といふものが道德的觀念を缺いでゐて、それですむものだとは僕には決して思へない。彼等は自己の醜惡卑小を以て他を律するのだ、しかもそれが一代の風潮とならうとしてゐる、何といふ罪惡だ！」
信太郎は激越した調子で時代を罵つた。
純一はその信太郎の議論の調子が、國で聞いた時とは何處か少し違つて來て、此間逢つた細谷先生の聲色がはつきり感じられるやうな氣がした。
「西尾宏もその一人さ、到底濟度しがたい徒だ！ 聞けば彼は千人斬とか號して、カフエエやレストオランを片つ端

しから漁つて、女を弄んでゐるさうだ。さうかと思ふと、その下條潔の妹とかいふのを大變ラヴして、盛んに詩を作つてゐるさうだ。その詩が何でも『三田文學』に一二度出たさうだ」

「『三田文學』に？　どんな詩だらう？」と純一が言つた。

「見ないがいい、どんなに旨いところがあらうとも、要するに人格で作つた詩ではないからな、そんな詩は人の子を毒するのみだ！」

「兎に角、西尾君には何かしらすぐれたところ、强いところがあるのは事實だ、讃美するのではないけれども、兎に角僕等には刺戟になる人物だと僕は思ふ」

「そんなに考へて行けば何だつて刺戟になるさ、どんな惡人でも存在していいと云ふ事になる。僕はそんな生ぬるい氣持は厭やだ、此の世の中を濁すものは、片つ端しから排除しなくちやならぬと云ふのが僕の持論だ」と信太郎はなかなか遜らなかつた。

「然し」と純一が言つた、「僕は何だか西尾君に逢つて話をして見たいのだ、僕にはいろんな意味で西尾宏君が興味を惹くのだ」

信太郎は苦笑して言つた。

「强ひて止めはしないが、僕はつまらない事だと思ふ」

信太郎が餘り遲くなつては先生の家に對してすまないと言つて、立上つた時に、次ぎの部屋にゐた主婦さんが入つて來た。

「早やもうお歸りですか、まあいいぢやありませんか、お遠いところからお出でになつたのに……今お夕飯を差上げようと思つてゐましたのに……」と以前は何處かの待合の女中とかだつたといふ主婦さんは口輕く引き留めた。

二人が家を出て、電車に乘る驛の方へと町並の方へ歩いて行く時分には、東京から歸つて來る腰辨の人々が、中にはボオル箱などを大切さうに提げて、てくてくと此方の方へやつて來るのに屢々行き會つた。
「敏子さんはその後どうしてゐる？」と信太郎が振返つて純一に訊いた。
「あア、あれから……」と純一は言つた儘、默つて歩いた。
「西尾の家へすつかり定まつたといふ事と、この秋結婚式が擧げられるといふ事だけは僕も聞いて知つてゐるが、敏子さんの心持は一體どんなのか、君は上京する前に聞きはしなかつたか？」
「逢つて僕は聞いた……」
「さう、逢つたのはよかつた、僕もさうあつてくれればいいと思つてゐた。さうして彼女はどんなに話したかね？」
純一は詳しい事が話したかつたが、かういふところでは話す氣にはならなかつた。またいい折りがあるやうな氣がした。この友達のいつも變らぬやさしい同情に對しては十分感謝しながらも、今長々と彼女との心の交渉を打明けるのが、反つて友達に迷惑をかけるやうな氣持もした。
「別に金持だから嫁くのではない、西尾友一郎といふ男が敏子さんに對して熱烈に求婚したので、その熱烈さ、その強い力に動かされたのだと言つた……」
「勿論、女の立場からはさうでもあらう、けれども單に強い力で求婚されたといふ事だけで彼女が動いたといふ事は、言ひ換へれば、彼女自身の要求、彼女自身の愛なくして結婚するといふ事が、どんなに不幸かといふ事を僕は彼女に一言言つてやりたいのだ。愛する人がありながら、他に嫁いで行くといふ事は誰れに取つても惡い事だ、『金色夜叉』の宮を見給へ、あの宮の悲しい涙を見給へ、貫一の生涯はその爲めに滅びたではないか……」
「いや、僕はそんなには思はない」と純一が急にはつきりした聲で信太郎の咏嘆を遮つた、「それは僕も愛のない結婚

が不幸だといふ事は知つてゐる、君が言ふやうに僕も彼女に一言それを言つてやりたいと思つて彼女に逢つて見たのだけれども、どういふものか僕にはそこ迄彼女に立入つて行くことは出來なかつた……いや、僕はそんな事を言はなくても、彼女は自分でそれをすつかり知つてゐるやうな氣もしたのだ、それでゐながらそんな風になつて行くところに、僕等には解き難い大きい謎がある、この人生といふものの不合理がある、そしてそれこそ僕等の打つ突かつて行かなくちやならぬ堅い扉なのだ」

「さう……」と信太郎が傾聽するやうに言つた。

「君は今僕たちを宮と貫一とに譬へたが、僕が貫一でないやうに敏子さんも宮ではない。宮と貫一との間には戀があつたが、僕と敏子さんとの心に在るものは、戀ではないのだ。かう言ふと君は詭辯だと言ふかも知れないが、僕の本當の心持を理解して見れば君も頷いてくれるだらう。僕たちは非常に親しい、打ちとけた氣持を双方から寄せ合つてゐる、惱みと惱みとを寄せ合つてゐる、ただそれだけだ、これが宮と貫一との戀と同じだとは僕は思はない。敏子さんは僕を弟のやうに思ふといつも言ふが、僕はまた敏子さんを姉のやうに思ふのだ。然し、それは普通のありふれた同情や愛憐だとは思はない、もつともつと本質的な深いもののやうな氣がする。此の心持はまだ漠然としてゐて、手に取るやうに說明は出來ないけれども、何かは知れず、これ迄の二人の心の交渉はずつと生涯の末になつて初めてはつきりとして來るものではなからうかと思ふので、今急にその深いところを掻き廻し度くはないのだ。何かの障害、何かの不幸が次第にその潛んでゐるものを明かに現はして、その面を磨ぎ澄ますやうな氣がする。凡てが生涯の問題だと言ふやうな氣がする。辛いけれども僕はさう思ふより外はない……」

純一も信太郎も妙に默つてしまつて、いつの間にか廣い大通りに出てゐた。驛は橋を渡ると直ぐその下にあつた。

「では、左樣なら」と信太郎が丁度來合せてゐた電車に乘つてその窓から純一に聲をかけた。信太郎の眼にも純一の

眼にも涙ぐましい色が溢れてゐた。

三

暑い日が幾日も續いた。故郷の夏よりもずつと暑さがひどいやうに純一は思つた。市郎は晝間は釀造試驗所へ行つて、この頃特別の講習を受けてゐるので、歸つて來るのはいつも夕方であつた。八疊の部屋は純一が一人で使つてゐるやうなものであつたが、何故か純一は宿の主婦さんと口をきくのが嫌やであつたし、良い書物も有つてはゐなかつたので、上京してから四五日目に行つて見た上野の圖書館に朝早くから入つて、そこで夕方迄飢ゑ渇いた喉に淸水を飲み込むやうに、息も繼がずに讀み耽つた。

代赭色の日蔽ひに照り付けてゐる赤い日影が、刻々に移り動いて、何時の間にかその光が弱くなつたと思ふと、もう頭の上にパツと電燈がともつたので、眼を擧げて見ると周圍には空いてゐる席がここかしこに出來て、彼の隣には先刻の學生の代りに紳士風の人が厚い洋書を借り出してゐた。純一は急に疲れが感じられた、氣分がすつかり沈んで孤獨の意識が今更にはつきりと來て、たよりないやうな中に飽滿の甘さをもつた寂寥が心に一杯になつて來るのであつた。外に出ると、肺の底から糸のやうな溜息が吐かれた。歩くともなく公園の樹立の中を暗い方へと奧深く入つて行くと、不思議に白い廣い道には人影もなく、左右には苔むした石燈籠が麻裃をつけた人達の行列のやうに、堅く鎖された墓所の樓門のあたりに浮んでゐた。

「僕に取つては圖書館が大學だ、西尾宏が慶應で學ぶ事が何であらうとも、僕は此の大きい圖書館の中で、彼よりも熱心に、また彼よりもずつと深く、ずつと廣く、知識の堂奧を究めるのだ。徒らに世に出る事を急いで、いい加減のやり方をしないで、僕は出來るだけの蘊蓄をするのだ」

歩きながら彼はこんなに自分に言つた。その後から止める術もなく、敏子の事を思ひ、祖母の事を思つた。終日の讀書に頭腦は充血して、宛かも何年も地を踏まなかつた人のやうにふらふらする足許で、時々躓きさうになりながら公園を出て、彼は黄昏の街を宿の方へと歸るのであつた。

「此の手紙を讀んで見給へ、親父が君の事を見込がないと言つて來たぜ、序に俺の事まで頭ごなしにやッつけてゐる」とその夜試驗所から歸つて來て、暑いからと言つて赭黒い胸を寛ろげて、麥酒を拔いて、もうコップに三つ四つ呷つた市郎が、にやにやしながら純一に言つた、「尤も、親父も無理はない、仕込む仕込むと言つて威張つてゐたのに見事に逃げてしまはれたんだからな。いい親父だが少し馬鹿さ。俺が金遣ひが荒いと言つていつも苦情を言つて來るが、さうさう木石のやうな堅造で此の東京の生活が遣れるものか。親父だつて若い時には隨分遊んだものさ、遊んだ割に野暮で、實に下手な遊び方をするから女にはちつとも持てない。そこへ行くと此の俺はなかなか持てるんだぜ、何しろケチな遊びをしないから、旦那々々と言つてねだつてばかりゐやがる……」とえらさうに言つて、市郎は純一にも麥酒を飲めとすすめた。

「いや、僕は飲めません」

「君の親父は隨分酒好きで、醉ふといつもツンツテンと口三味線でもつて、いい聲で安來節を歌つて聞かせたものだに、その息子がそんな風では、俺の親父の言草ぢやないが駄目だ、坊主になるのが實際適してるぜ」

純一は厭やな氣がして俯向いた。彼は自分の父親の事を引合ひに出して何か言はれるのが不快でならないのだ。

「まあ、さう屈託するな、一つこれから散歩に出て來よう、今日は飛鳥山の方へ行つて見よう」

純一は斷ることが出來なくて、氣は進まなかつたが、市郎に從いて家を出た。田舍相撲のやうにでつぷりとした市郎は肩を聳かしながら、ぶらりぶらりと先きに立つて歩いて行く。こんな樣子を叔父の浩藏が見たらどんなだらうと

不圖純一は思つた。飛鳥山の下には、このあたり一體が工業地なので、職工相手の安料理屋がここかしこに障子を開け放つて、白い浴衣の醜い女が喋つたり町を見下したりしてゐた。

「一寸ここへ寄つて見よう、僕の知合ひの家だから」と不意に市郎は傍らの格子戸を開けて、その薄暗い電燈の光りにぬぎ散らした女の下駄のある入口を覗いた。

「おい、ゐるかい？　僕だ」市郎は純一を振返つて、「入つていいのだ、構はないのだ」と言つた。純一がうつかりして中に入ると、

「おやまあ旦那、よくいらつしやいました、すつかりお見限りでしたね、何處かにいい所でもあつたんですか？」と中から安つぽい聲がして、障子をあけた女の顏は卵の白い殼のやうに安白粉で一皮つつまれてゐた。純一はハッと思つて、急いで格子の外へ飛び出した。

「誰れ？　あなたのお連れ？　呼びなさいよ、直ぐ逃げ出すなんて緣起が惡いぢやありませんか」と女がしどけない樣子で格子の間に白い手をからませて言つた。

「純一君、純一君！」市郎の呼ぶ聲が聞えるやうであつたけれども、純一は構はずにどんどんと店々の軒下を縫つて走るやうにして家に歸つた。

純一はこの上市郎と一緒に住んでゐると、自分の心持の淸純を無遠慮に泥でなすられるやうな氣がして、堪へ難い不安を感ずるのであつた。市郎はなかなか歸つて來なかつた。ひとり机に向つて彼は中野信太郎に手紙を書いた。先日の禮を言つて、そして信太郎のゐる近所にいい貸間を見付けてくれるやうにと云ふ事を頼んだ。その終りになほ、自分は祖母から當分の間の生活費は送つて貰へるが、長い間祖母に迷惑をかけるのは辛いから、何か自分に出來るやうな事があれば知らせてくれるやうにと頼んでやつた。

信太郎からの返事はその翌日來た。彼は同情に堪へないと云ふ言葉を頻りに繰返して、萬事飲み込んだから心配し給ふな、人間は獨立自尊でなくてはならぬ、純潔でなくてはならぬ、足一歩泥濘に投ずれば、終生その汚點を拭ふ事は出來ないのだと云ふやうな事を書き連ねて、最後に兎に角明後日、相良元雄君の家へ一緒に行つて見よう、僕は赤坂見附で待合はしてゐるから出かけて來給へと書き添へてあつた。

信太郎から知らせて來た日に、純一は少し早目に圖書館を出て、待合せの場所へ行くため電車に乘つた。生れてから未だ時間で待合せをすると云ふ經驗のない純一は、妙にわくわくした氣持で赤坂見附で下りた。信太郎はもう來てゐるかしらと思つて四邊を見廻すと、彼方の橋の上に蟬取竿を持つた四五人の子供達の佇んでゐるところに、一人の書生が此方を見てゐたが、やがて橋を後にして歩いて來た。それが信太郎であつた。

「東京の子供はなかなか可愛いね、何を訊いてもはきはきと賢い返事をする、田舍の子供とはさすがに違ふ！」

純一の傍らに來た時に微笑しながら信太郎はかう言つた。

「君はまだ東京馴れぬから、場所を間違へはしないかと思つて心配してゐた」

「それは大丈夫だつたが、僕は電車が嫌ひだから……」

二人は電車に乘つて、丁度空いてゐた席があつて、並んで腰を掛けた。信太郎は純一から受取つた手紙の事を話したり、またいろいろ訊ねたりして、「是非市内へ引越して來給へ、市内の方がどんなに好都合か知れないよ」と繰返した。その後に先生の令嬢が昨日別莊から歸つて來たといふことを話す事をも忘れなかつた。

青山の原が見え出してから二つ目の停留場で、信太郎が此處で下りるのだと言つた。電車を下りてから右の方に稍や細い通りを入つて、もう一度左に入つて四五丁行つた處の、割合ひに靜かな家並の間の狹い路次を入つた突當りの二階家の前に來た。その玄關には『日本美術協會』といふ看板が懸つてゐた。

案内を乞うてから信太郎は小聲で、
「この家はいろんな石版畫を田舍の小學校などへ賣り付けてゐるのだ、なかなか儲けはあるらしい」と囁いた。
老婢が出て來たので、元雄の在宅を訊いて見ると、
「おゐでにはなりますが……」と言つてにやにや笑つた。
「來客ですか？」と信太郎が愛想よく訊いた。
「一寸女のお友達が來ておゐでになりますが……」と老婢は餘計な事まで言つてから取次に行つた。
二階から下りて來る足音がして元雄が現れた。黑い艶々した髮を長髮にして、新しい紺絣を着たすらりとしたその姿を見た時に、純一は何だか國にゐた時分よりも元雄が美男に見えるやうな氣がした。元雄は少しどぎまぎしたやうな中にも、顏に喜色を湛へて迎へた。
「龍田君、よく上京されましたね、お手紙を頂いてから、今日か明日かとお訪ね下さるのを待つてゐました。これですつかり東京で揃つたわけですね」と階段を上りながら元雄は言つた。
六疊の元雄の部屋の半ば開いた障子のむかうに、派手な藍色の絞りの浴衣を着た女の半身がなまめかしく仄見えてゐた。
「石黑先生のところのモデルの方が今日偶然訪ねて來てくれたところです」と元雄は氣恥かしさうに辯解した。
二人が部屋に入ると、その女は横ずわりをして、元雄の机に靠れて、その上にある繪具の圓筒を指で弄んでゐたが、直ぐに振返つて入つて來た人を見ようともせず、その素振りすら變へなかつた。その傍らには彼女が持つて來たらしい果物籠があつて、もはや大半食べ散らされた水蜜桃の皮などが皿に一杯になつてゐた。
「二人とも僕の同鄉の親友です」と元雄は言つて、その女に純一と信太郎とを引合した。

「私、藤岡富枝と云ひますわ、つまらぬモデル女ですわ」とその女は言つて無遠慮に二人を見た。圓顏で、睫毛の目立つて長いのが混血兒のやうな感じを與へるところがあつて、取立てて美人ではなかつたが、その身體の發育が十分で、膝などは暑苦しく盛り上つて、宛かも毒草の花でも見るやうな豐潤な印象を與へ、これがモデル女としてその資格を十分に備へてゐるであらうと云ふ事は初對面の純一にも領かれた。

純一に反して信太郎の顏には一種侮蔑の感が洩れてゐた。彼がこんな風の女を好まない事は明かであつた。

元雄の顏には滿足の色が一杯に漂つてゐた。

「兄からも手紙が來て、龍田君が上京したから共々に助け合つて遣つて行くようになどと書いてありました。繪の方だと隨分繪具なぞに金がかかつて自分の力で遣つて行くのは大變ですけれども、文學の方はそれ程困難も少いでせう」と元雄はやさしく言つた。

「僕も今龍田君の爲めにいろいろと考へてゐるところなのです、何だか市内に越して來たいと言ふから、今いい宿を探さうと思つてゐるところです」と信太郎が言つた。

「今何處にゐられるんです？……何なら僕のところへ來ませんか、此の次ぎの部屋が空いてゐるのですよ。下の人はこの棟續きの平屋に住んでゐて、ここは殆んど使つてゐないのです、主人が始終田舍を廻つてゐるので無人で困つてゐるのだから、よかつたら來て見ませんか」

「まあ厭やな、私が來たいと言つてるのに……」と突然富枝が元雄に絡んで行くやうな調子で冗談らしく言つた。元雄は困つたやうに笑つた。何か冷たいものをと言つて元雄が階下へ下りて行つた後は、誰れも默つてしまつて白けてしまつた。女はさも邪魔者でもあるかのやうに、すつかり二人を無視して、いかにも元雄と親しいといふ事を示すつもりでもあると見え、むくむく肥つた血の氣の多い右の腕をニユッと伸ばして机の抽斗を開けて、そこから何かの手

帳を取出してぱらぱらと開いた。先刻からこの女の擧動が癪にさはつてゐると云つたやうに、信太郎は時々純一に目くばせをして冷笑した。
元雄が歸つて來ると、急に女は立上つて、
「私歸るわ、これから直ぐまた先生ところへ行かなくちやならないのよ……」
「まあいいでせう、富枝さん、今にあなたの好きなアイスクリームが來ますよ、一寸待つて下さい」
「今日は駄目なの、また今度……」と言ひ捨てにして、誰にも挨拶もせず、その儘出てしまつた。元雄はどぎまぎしたやうな顏をして、彼女に續いて階段を下りて行つた。そして暫く上つて來なかつた。
「どうだ君、厭やな女ぢやないか、傲慢でしかも放縱だ、まるで息づまらせるやうな肉體を有つてゐる。元雄君はいつからあんな女と知合ひになつたんだらう？　元雄君があんな女を近づけてゐようとは思はなかつた……」と信太郎は言つた。
「別に親しいと云ふわけでもないだらう」と純一は言つた。
元雄が二階に上つて來た時、その頰は美しく紅らんでゐた。いかにも嬉しさうで、いくらかそはそはしてゐた。
「どうも無遠慮でね、あの女は……」と辯解するやうに元雄は言つて、二人の顏色を見た、「僕も此頃は愉快です、兄のお蔭で東京へ來てから、隨分勉强もしてゐますが、なかなかさう短時日で腕を仕上げるといふ譯にも行きませんでね、然し國でやつてゐた時とは違つて、めきめき腕が上るやうで勉强の仕甲斐がありますよ。まあ物を觀る眼だけはいくらか出來て來たつもりです……」
「中野君の話によると、大分認められて來たといふ事ですね」
「なに、そんな事はありません、僕なんかまだ存在も認められてゐないのですよ」かう言ひながらも元雄の顏には自

信の色が閃いてゐた、「まあこつこつ勉強する外はありませんよ、伊太利の文藝復興期時分の畫家なんかは、一人前の畫家になるには修業に三十年もかかると言つてゐるさうですからね……」

老婢が四つのアイスクリームを運んで來た。

元雄はそれを二人の前に分けながら、歸つて行つた女の分は、老婢に下へ持つて行つて食べてもいいと言つた。

「これはまあ勿體ない、どうも御馳走樣でございます」と白髮の生え初めた婆さんは髮の間に汗を滲ませてゐただけに、取り分け嬉しさうにそれを持つて下りて行つた。

「中野君、兄の手紙に一寸靜子の事を書いて來たんだがね」と元雄は匙を下に置きながら、ちらと信太郎の顏を見てまた俯向いて言つた、「靜子ももう何時迄も家にあんな風にして置いておく事も出來ぬから、良緣があつたので約束を取り極めたといふ話で……」

「何處へね？」と信太郎がどきりとしたやうに訊き返した。

「それが君も知つてゐる井上淳治君だ」

「井上君！……さう……」と信太郎は、まざまざと眼にあらはれる感情をぢつと仰へるやうな樣子で、

「井上君なら人物も堅實だし、年頃も丁度いいし、家柄は申し分ないし、大變良緣だ。僕も靜子さんの幸福のために大いに喜ぶ。靜子さんのやうなやさしい少女が人妻となられるといふ事は寂しいけれども、本當にいつ迄もひとりでゐるのはよくない、ぢや先生も安心なすつたわけだ」と言つて、信太郎は純一に眼を送つた。その眼には彼の努力にも拘はらず苦しい氣持が光つてゐた。

「僕もさう思ふんだ、兄は安心したらうと思ふ、僕の事やら妹の事やら何から何までが兄が心配しなくてはならないのだから……僕もいつ迄も兄から仕送りを受けてやつて行くのはすまないので、せめて繪具代だけでも稼ぎ度いもの

だと思つて、實は今適當な事を探してゐるところだ。僕に名さへあればさう骨が折れなくて金の入る仕事はかなりあるんだが、何しろ今の分際ぢやね、仕方がない、何だか今來てゐた富枝さんの話では、此頃流行り出した文房具類の裝飾の燒繪が仕事としては大した收入でもないが、面白いものだと云ふので、少し遣つて見ようかと思ふ……そこらあたりにざらにある金持がほんの一日ポケットマネエを藝術家に提供すればいいのだがな……」と元雄は柱の方を見ながら言つた。純一が見るとその柱には、いつも相良先生の家の柱にかかつてゐた寫眞かけが目に着いた、その中の寫眞は相良先生であるらしくも思はれた。

「龍田君、遠慮しないで、いいと思つたら此處へ來給へ、その代り浪人生活だから自由な代り御馳走が欲しければ外で食べるより外はないけれどね」と元雄が二人の歸るのを玄關まで送つて來て言つた。「さうすれば僕も本當に心強くていい、中野君も二人に一緒に逢へて都合がいいだらう」と元雄が言ふと、

「僕もそれを勸めるね、僕のゐる近所よりこのあたりが靜かでいい、僕の處と來ちや工場同然で、實に勉强は出來ない」

「でも、中野君の家にはなかなか色彩があるぢやないか、例の令孃は變りないかね？」と元雄が言つた。

「令孃！　いや、別に……」と信太郎は氣がさすやうに言つた。

「一度逢ひたいものだね、そのうち訪ねて行くから令孃にお目にかかれるように君からよろしく言つといてくれ」と元雄が言つた。

純一は元雄のその輕い調子にふッと氣が付いて、その顏を見つめた。何かがそこに起つてゐるやうな感じがされた。

「君、元雄君は幸福らしいね」と町を歩きながら純一は信太郎に言つた。

「さうかも知れん、幸福は主觀上の問題だからな。然し、元雄君は少し意志が弱いやうに僕は思ふから、少し心配し

てゐる」と言ひながらも、信太郎は別の事を考へてゐるやうに餘り氣乘りがしない調子であつた。それが靜子の事かそれともかの令孃の事かよくは分らなかつたが、何だか妙に沈鬱に見えた。
「要するに僕等は餘り年が若すぎるんだね、君も僕も……」と突然信太郎が深く感じたやうに言ひ出した。純一は直ぐ二人の年上の女性のことを思つた。
「さう……」
「僕等の時代はまだこれからだ、お互ひに大いに努力しよう！」
それつきり信太郎は何も言はなかつた。
純一も何も言はなかつた。

四

夏よ、足早に我が門をよぎり去れ！
光は我が心に痛し。
硝子の杯に熱湯を充たせる如く、いと脆き頭は狂暴の情火に裂けん。
夏よ、みだらなる女優よ、我れを棄て去れ。さらばはげしき命、狂氣の熱とともに、輕き浴衣と、それよりも輕き心は去らん。かくて、あはれ深き歌を秋風は我が窓の鍵盤に彈かん。秋は甘き涙を傷けるものに注ぐ、すべては疲れ、すべては樂しき眠を求む。
いざ來れ、銀色の秋！
秋が都會に靜かに來た。屋根から屋根へと吹きまくる暴風雨のあとで、急に氣溫が下つて、夜が水のやうに冷たく

なる、物干の間からさし昇る月の光が蒼々とした夜空に小さく高く冴える、狹い庭の萩や八つ手の下蔭に蟲が鳴いて、夜を增す每にその蟲の音が增える。窓に凭れて黃昏れて行く巷の夕轟きをぢつと聞いてゐると、涙ぐましい孤獨の思ひが胸に溢れる。

純一は元雄の厚意で、靑山のこの『日本美術協會』の二階に引越して來てから、三ヶ月の間此處でいろいろの日を過した。市郞と一緒に暮してゐた僅かな間の都會生活は餘りに彼とは性情を異にしてゐたので、はつきりとその誘惑を拒否することが出來た。けれども此處で元雄と一緒に暮してからの、元雄の生活からの種々の餘波はかなりひどい疲勞となつて彼に殘つた。

元雄はたうとう女の方へ行つてしまつた。その女を逃げようとしながら、一步々々引きずられて、たうとうその熱い腕の中に入つて行つてしまつた。純一は引き止められるだけ引き止めて見た。けれども元雄は純一と話をしてゐる間は彼の言葉に從つてゐても、女に逢ふと又もやその胸に歸つて行つた。純一とても富枝が元雄に注いでゐる愛が斷ち難いものである事は認めてゐた。けれども、彼女のその愛の中には、元雄を弱くし、彼の藝術を滅ぼさうとする毒液があつた。元雄自身もそれはよく知つてゐた。それだけ彼の懊惱は大きかつた。

「富枝の手から逃れなければ僕は破滅だ!」と彼はよく嘆息して言つた。

兄に對してすまないと云ふ自責の情と、女の魅惑の甘やかな陶醉とが相鬩いで、惱み苦しんでゐる元雄を傍らに見てゐると、純一の心も同じやうに苦しく惱ましくなるのであつた。

「龍田さんは可愛いわね、どうかすると、私あんたよりも好きだわ!」と富枝は純一と親しくなつてからは、臆面もなくこんな事を言つて、元雄のゐる前で純一の手首を握しりめて見たりした。それが見え透いた女の手管であることがはつきりと純一には分るので、一層惱ましい嫌やな氣持を味はねばならなかつた。

富枝は石黑先生の秋の展覽會に出品する繪が出來上つて、身體が閑になつた頃から、元雄の部屋に入り浸りのやうになつた。

「龍田君にすまないから、そんなに來てはいけない」と元雄が言ふと、女は定まつて機嫌を惡くして、何かつまらぬ事をいつ迄も言つてゐた。

「私が屹度あんたをえらい畫家にして見せるわ、自信があるのよ、私にすつかり來ておしまひなさいよ」と富枝は純一のゐる前で元雄に言つたりした。

二人の關係には、まだ複雜な世の中を知らぬ純一には理解し難い事が多かつた。現に今度元雄が女と一緒に赤城山へ寫生かたがた行つてしまつた事なども、純一に取つては思ひがけない事なのであつた。何かひどく言ひ爭ひをして、富枝がひいひいと泣いて元雄を撲つたり、元雄が困つて取合ふまいとして何時迄も默つてゐたり、餘程その和解は困難であらうと思つてゐたのに、思ひがけなくも、それから間もなく二人は旅へと出て行つたのだ。

「龍田君、僕ね、友人と一緒に一寸赤城迄行つて來ますから宜しく賴みます」と元雄は言つて出かけたのだが、その友人といふのが富枝である事は直ぐ分つた。赤城から富枝の手で書いた繪葉書が純一の處に來た。それには「私の畫家先生と一緒に此處に來ました、山の秋は美の絶頂よ、けれど喧嘩は相變らずです」と書いてあつた。その短い文句の間に女の勝ち誇つた心持が溢れてゐた。その後から元雄の長い手紙が來た。それには富枝と自分との是れ迄の成行きを述べて、彼女の誘惑を幾度びも幾度びも避けて來た自分ではあつたが、いつしか自分も彼女に對して戀を感ずるやうになつて來たこと、彼女と同棲する事が今の自分の境遇からも、また藝術に對する精進努力の上からも、とりわけ兄に對しても、かなりの杞憂と不安とは感じられながらも、彼女なしには生きられぬ自分を見出さねばならなくなつたこと、彼女も自分の藝術家としての完成の爲めには、あらん限りの力を盡すことを誓つてゐるので、此際彼女を救ひ

また自分を救ふ道は、彼女を受け容れて行くより外にない事がはつきりと分つて來たなどと書き連ねてあつて、その最後に、

「僕の事を意志が弱いと笑はないでくれ給へ、これが僕に與へられた運命なのだ、この外にどうも仕樣はないのだ、僕はこの道を勇敢に進んで見ようと思ふ。それは必ずしも破滅への道ではない、反つて建設への道であるかも知れない」と書いてあつた。

けれども、二つの便りを見る時、純一には手に取るやうにこれからの元雄の多難の生活が想像せられて、胸が痛むのであつた。

たつた一人になつてから、純一には詩が溢れるやうに生れ出た。

いざ來れ、銀色の秋!
汝が腕は力なく、ただ柔かにゆるめり、いと熱き夏の抱擁に傷けられしものを、病みて去られたる蒼ざめし夫人の如く、細長き膝に取りて撫でさするべく——

秋の朝、秋の夜、彼は孤獨の中から泉の水の湧くやうに後から後からと流れ出る短詩、長詩、時には口を衝いて出る美しい詩句、悲しい情想を、ノオトに書き付けるのももどかしく、聲を發して誦し續けた。彼自身にもかうした收穫は豫期する事の出來ない喜びであつた。悲しいうちにも、魂の朗かな光が彼の顏に明るく照り輝いてゐた。

彼の詩の根柢には、單にセンティメンタルな咏嘆にとどまらない、愛と憎みとに貫かれた深い人道的な感情が籠つてゐた。それは殆んど當時の自然主義者の平板皮相な思想に累はされないもので、それは彼の性格の奥深いところから來た。若し彼に直接の影響を與へたものがあるとすれば、それは一人の女性の心に外ならなかつた。

不幸なる人の子のため、

戀よ、とこしへにとどまれかし、
なやみに充ちたる生涯にただ、
これのみぞまことの慰めなれ。
されば汝等ただまこともて愛し、
力を合せて人の世の險しき道に上(のぼ)れよ。
しからずば、愛を云ふことなかれ、
愛の名によりて罪を犯すなかれ。

詩稿は次第に厚くなつて行つた。幾度びも誦し、幾度びも書き改めて行くうちに、發表したいと思ふ心持が次第に强くなつて行つた。時の詩壇に華かな詩風を競ふ詩人の名は幾人となく彼の心に浮んで來たが、思ひ切つてその門を叩くにはなほ多少の躊躇があつた。突然自分を見も知らぬ人に賣り付けに行かうとするやうな一種の勇氣は、彼のデリケエトな心には猒はしい粗野であつた。

或日、信太郎が訪ねて來た時、純一は机の上の詩稿を彼に示してその心持を告げると信太郎は、
「それぢや僕の家の先生の知つてゐられる『日本文學』の主幹の林田喜久雄といふ――君も知つてゐるだらう、あの文學士で詩を作つてゐる人さ――あの人の處へ紹介狀を書いて貰つて二人で訪ねて見よう。何でも家(うち)の先生の話では、先生がその林田の父に世話になつた事もあるさうだ、屹度快く紹介してくれるに違ひない、僕が一つ賴んで見よう」と言つて、屹度直ぐにも『日本文學』に純一の詩が載せられる事を受合ふやうに言つたりした。

純一は此頃何か金になる仕事が欲しいと思つてゐた、信太郎は家(うち)の先生に相談したら何かあるかも知れないと言つたが、何かありさうな風にも見えなかつた。元雄と一緖になつてから、家主の日本美術協會で時々面倒な手紙や事務

の手傳ひを賴まれて、そんな事からの幾らかの金は得てゐたが、もつとしつかりした仕事を探して、早く祖母に月々送金を賴まなくてもいいやうになりたいのであつた。自分の詩が林田先生に認められればどんなに幸福であらう、自分から低く出て行かなくてもいい人であつたらどんなによからうと色々に思つて見た。

直ぐ歸京するやうに言つてゐた元雄はなかなか歸つて來なかつた。夕方から降り出した雨が二三日も降り續いて、障子の紙も濕つてゆるむやうな幾日かの後に、突然澄んだ透明な日影が落ちて來て、それと共に俄かに秋は深くなつた。彼は孤獨の中で歌つた――

軒端より雨だれの音、たえ間なく敷石に泣く。闇の中に横はりて、頰杖つきて、面を伏せて、わが目よりもまた音もなく何物か落つ、ああこは何故ぞ？ 秋雨の嘆きに聲もなき嘆きを添ふるは？

我が魂も秋となりしか？――

或る午後、純一はこの頃詩を作る人達の間に持て囃されてゐる上田敏氏の『海潮音』といふ譯詩集を、乏しい金をさいて買ひ求めたのを讀み耽つてゐた。誰もゐない階下に人のおとなふ聲がしたので、書物を措いて下りて行つて見ると、

「やア」と向の方から聲をかけたのは西尾宏であつた。純一も同じやうに言つて、

「さア、お上り下さい、僕一人ですが……」

「相良君は？」

「赤城へ寫生に行つてまだ歸つて來ないのです」

「兎に角、君と話もしたいから少し邪魔するとしよう」

宏はかう言つて、玄關に腰をかけて、踏石の上に艶々した赤靴の編上げた紐を解きながら、

「相良君は一人で行つたわけぢやないでせう？」

「さあ……」と純一は例の考へ深さうな返事をした。

「相良君には何だか艶聞があるとか云ふ話だが……」

純一は別段はつきりするやうな事は避けるやうにして言はなかつた。

二階に上つて純一と向ひ合つてすわつた西尾宏は、直ぐにその瀟洒な洋服のポケットから金口の埃及煙草を二三本つまみ出して、純一にも一本渡してから、内側に向けて燐寸をすつて火をつけた。

「勉强ですか、それは何ですか？」と宏は訊いた。

「上田さんの『海潮音』です」

「なかなかいい詩があるでせう、僕も讀みましたがね、ハイネの『花のをとめ』だとか、ブラウニングの『至上善』だとか、誰の作だつたか知らぬが『わすれなぐさ』といふのなどは僕は好きですよ。上田さんの譯は少し白粉澤山なやうには思ふけれど、色の白きは七難隱すとでも言ひますかね、手に入つたものです」

純一は默つて傾聽した。

「一寸その書物を貸し給へ」と言つて、宏は純一の手から『海潮音』を取つて、ばらばらと頁を繰つて、『至上善』といふ詩をあけて、「天地にこよなき眞、澄みわたる一の信義は、をとめ子の淸きくちづけ」といふ詩句を純一にも見せて、

「君もこの詩は好きだらうと思ふ、僕もこれと全く同じ思想を抱いてゐたから一層好きだつたのです。處女の貞潔はそれ自身德だ、しかもどんな汚れた人間をも救ひ淨めることの出來る唯一の德だと僕は思ふ。そりや貞潔といふものは最も脆いものだ、然し僕はそれが脆いからこそ愈々尊くもあり美しくもあると思ふ。僕は普通女性憎惡家のやうに

思はれてゐるが、それは唯だ髮の長い獸(ベスティ)としての意義しか有たない女性に對しての事で、その靈(たましひ)の奧底では女性崇拜家なのだ。いや、僕が單に生殖の器官に過ぎない平凡な女を蔑視するのは、僕が女性崇拜家だからだ。つまらない卑しい女にかかづらふ每に、理想の女性の姿が愈々益々はつきりして來る。久遠女性は我等を引き上ぐと言つたゲエテの言葉は實に眞だ。君は『ファウスト』を讀んだかね？　まだなら是非讀んで見給へ」

心易すさうにいつか宏の言葉はぞんざいになつてゐた、ぞんざいになると共に、彼の話はその適意の樂器を得た樂人のやうに油が乘つて來た。彼はなかなか座談に巧みであつた。その言葉には鋭い機智の閃きが見られた。純一とは違つて、言ふ事は思ふ事よりも過剩で、話と共に新しい思想が湧くらしかつた。純一はその言葉を傾聽した。

「然し君、飜譯では到底原詩の味ひは分らないよ。羅甸の諺にも『飜譯者は反逆者』といふのがあるが、全く飜譯といふものはどんな名譯でも結局不完全な模寫に過ぎない。特に歐羅巴語と日本語とのやうに全然その語脈を異にしてゐる場合は猶更らの事で、上田さんの譯だつて名譯は名譯だが、隨分原作とは感じの違つたものだと云ふ評判だし、結局自分でしつかり讀めるやうにする外はない」

純一は宏の忠告を素直に受け容れた。

「僕もさう思つてゐたところです、近いうちに何か語學を始めたいと思つてゐます」

「さうし給へ、それがいい。これからの文壇で語學を知らないと馬鹿にされるよ。さう言ふ僕もまだ大して出來る方ぢやないがね、然し僕のやうな怠け者は直覺で讀むから、字引と文法とにたよつてコツコツやる連中よりも反つて眼光紙背に徹するのさ」と言つて、宏はちよつぴり髭を蓄へかけた鼻の下を撫でながら笑つた。

「僕の友人の下條といふ男なんぞは驚いた勉强家だ、語學の天才とでも言はうか、英獨佛は一通り行けて、今では伊太利をやつてゐるやうだが、ファザアが外交官だからその關係もあらうが、何しろ大したものだ。そして實によく讀

む、何でも讀む、讀んで片つ端から感心してゐるのだ。彼の博學な事には、僕はいつも驚かされてしまふ。然し……本を讀みさへすればえらくなれると云ふものぢやない、反つて益々馬鹿になるんだ。下條なんかは倉庫のやうなもので、いろんな知識をその頭にあとからあとから詰込むばかりで、一向その使ひ道を知らない、あんまり可哀相だから僕が時々引出して使つてやるのさ」と言つて宏は微笑した。

「時に、君の例の友人は此頃どうした？　あの男は母親の腹の中からもう一かど鹿爪らしい顏をして飛出して來たやうな顏をしてゐる……」

「中野君ですか？」と純一が苦笑して訊いた。

「その中野さ、相變らす小哲學を振廻してゐるかね？」と皮肉な眼付をした。

「さあ……」と純一は言つて、中野と西尾との間の反感がこんなにはつきりしてゐるのを今更に感じた。

「いつか銀座で君に逢つたと言つてゐました」

「銀座で？　あア、逢つた逢つた」と呵々と笑つた。「何だか丁寧にお辭儀してくれたんだけれど、僕は連れがあつたのでね……あんなに丁寧で利巧な男を見ると僕は可笑しくなる性分でね、何事にも通り一遍の說明を下して、もつともらしい顏をして納つてゐるのを見ると、別に道德的に非難すべき點もないが、それが笑つてやりたくなるんだ。いや、僕はあんな毒にも藥にもならぬやうな男が一番惡いと思ふのだ。人生を退屈にするのはあんな連中だ。地球の滅びる時分に、目をぱちくりぱちくりさせて、得意で飛び廻つてゐるニイチエの末人と云ふ奴は、あんな男の事を言ふのかも知れない」

宏の批評は餘り辛辣すぎて中野信太郎には氣の毒な氣がしたが、純一は宏の意見にも眞理の潜んでゐる事を感じた。

「君はその點ではえらいよ」と宏が言つた、「君はぼんやりだが、小さく纒つてゐないからいい、何處か一寸正體の知

れないやうな薄氣味の惡いところがある。中野のやうにありつたけのものを店頭に並べて大聲で客を呼んでゐるやうな處がない。僕は最初國で逢つた時からその點で君を買つてゐたんだ」

純一が恐縮して默つてゐると、ぢつとその顏を見てゐた西尾宏が、不圖にやりとして、

「君は敏子さんと大變仲が好いんだつてね」と突然に言ひ出した。純一はびくりとして宏の顏を見返した。

「僕の兄の妻になる敏子さんさ、ラヴしたのかね？ 僕の兄が少々嫉いてゐたよ」

「いや……」と純一は眞紅になつた。宏の顏は笑つてゐた。

「ただ親しいだけなんです、小さい時から時々逢つたもんですから、お互ひに氣持がよく分つてゐるんです」

「それぢやもつとロマンティックなんだね。君は詩人だから美しい夢を描いて、ひとりで崇拜してゐるんだらう。そりやいいさ、敏子さんは田舍の女には珍らしい美しい魂を有つた女性だからね。僕だつて小さい時からそれは認めてゐた……君が田舍のダンテで、敏子さんが田舍のベアトリチェか。さう言へば君の顎のあたりは一寸ダンテに似てゐる……」

純一はつけつけと宏に言はれるので、それが嬉しくもあり迷惑でもあつた。敏子の噂を偶然に聞いたのは嬉しかつたが、また別種の悲しみがあつた。宏ならば本當に自分の感情を理解してくれさうに思はれたが、今はまだそれを言ひ出す氣にはなれなかつた。結婚はもうすんだかどうか、それも訊きたかつたが、自分の傷口をもつと擴げるやうな氣がして、純一は話題を轉じようと努めた。

「これは君の詩稿かね？」と宏は厚い原稿紙の一束を手に取上げた。

「餘りいいのはありません、この頃しきりに詩は出來るんですけれども……」

宏は最初の一篇を終りまで讀んでから、

「うん、なかなかいいね。少し寂しすぎるが、かういふ寂しい詩も僕は好きさ。僕は交響樂のやうな華やかな壯大な詩も好きだが、小川のせせらぎのやうな詩も好きだ。これで獨りで居ると矢張り靜かな寂しい詩が讀んで見たくなるんだ」と原稿を措いて宏は言つた。

「僕が今度『三田文學』に出した詩を讀んでくれ給へ、あの短い方のは自信があるんだ」

「讀みたいと思つてゐるんですが……」

「是非讀んでくれ給へ、君は屹度好くだらうと思ふ。下條も大變好いてくれたんだが、尤も彼奴は何にでも感心する男だから、彼奴の言ふ事は當てにならんがね。兎に角、大いにやらう、今の詩壇は到底お話にならんからね、低能で散文が書けないから詩を書くと云つた連中ばかりだからね。」

いつの間にか部屋は暗くなつて、障子にはめた硝子には、日沒後の白い靜かな空色が映じてゐた。電燈がともつて二人の影がはつきりと出た。

「ぢや、また來よう、僕の家は知つてゐますか？」

「いや……」

「では、何か紙を貸し給へ」と言つて、純一の出した紙に自分の宿所を書いて、

「孤獨もいいが、氣が向いたら話すのもいい、僕の家へはいろんな男が集まるよ、中には馬鹿もゐるがね、その中に話しに來給へ」と宏は立上つてから言つて、洋服の膝を延ばして階段を下りた。その後から下りて行く純一は、綺麗に梳られた彼の美しい濃い髮の毛とデリケエトな頸筋とを見ながら、もつと話して見たいといふ心持をはつきりと感じた。階段を下りてから急に思出したやうに宏は振返つて、

「相良君は此頃繪なんか手に著かないんだらうね？」

「ええ、まあ……」と純一は半分言つた。
「どんな女かね、その女は？」と興味あり氣に訊いた。
「モデル女です」
「美人かね？」
「さあ、いい身體の女です」
「幸福だな、相良君は……僕なんか女運が惡いと見えて、これで隨分探してゐるんだが、そんな女には出會はない」
と言つて、急に言葉を變へて、
「では相良君が歸つたら、僕が逢ひ度いと言つてゐたと傳へてくれ給へ」と言つて、靴を穿きながらもなほ色々と話し續けて、宏は歸つて行つた。

五

細谷先生が書いてくれた紹介狀をもつて、純一が信太郎と一緒に文學士の林田先生を湯島の邸宅へ訪ねたのは、宏に逢つてから四五日してからであつた。
「西尾宏が來たつて？」と信太郎は電車の中で純一が宏と逢つた事を話さうとすると、かう言つて意外らしく反問した。純一は信太郎のさうした言葉の調子が、何故かは知らず、自分の心の調子とぴつたり合はないのを感じた。
「大分長いこと話をした、隨分口は惡いやうだけれど、なかなか見識があつて、さう譯もなく傲慢なばかりの性格ではないやうだ」
「君にはさう見えるかね？……」と信太郎はちらと純一の顏を窺ふやうに見て、それきり話頭を轉じた。

「元雄君には困るね、まだ歸つて來ないぢやないか、どうするつもりだらう？　あの女と一緒になるつもりなのかね？」
「どうするつもりか僕にも十分わからないが、今の元雄君に取つてはあの女は無くてならないものだと云ふ事だけは分る……」
「まだ東京に來ていくらにもならないのに、早やもうあんな事になるなんて、先生が聞かれたらどんなに心配される事だらう！　先生に聞かせたくないものだ！」
「さうだね……」と純一はその上元雄の事をそんな人中で話したくなかつた。
細谷先生から聞いたといふ信太郎の話によると、林田先生の家は由緒正しい旗本の家柄で、次男の先生は、今では或る有力な會社の重役を勤めてゐる父の邸宅に、まだ部屋住の身で、その好むところに從つて、音樂や繪畫などに親しんで、月々丸善から買ひ込む書籍だけでも莫大なもので、『日本文學』の編輯も、ほんの樂しみにしてゐるといふ事であつた。
湯島の高臺の上にある堂々たる大きい門構へのくゞり門を二人は入つて行つた。玄關まで綺麗な玉川砂利を敷き詰めてあつて、蘇鐵の植込が枯れた秋草を憐れに見せて蒼々と繁つてゐた。ベルを押すと、暫く經つて、十五六の利巧さうな小間使が出て來て、二人を見るとさも要領を得たやうな樣子で、
「若旦那樣は唯今御在宅でございますが、一寸御待ち下さいませ……」と言つて奥へ引込んだ。何といふ事もなく二人は顏を見合つて頷いた。
やがて小間使に導かれて、二人は玄關からつやつやと拭き込まれた廣い廊下傳ひに歩いて行くと、内庭に向いた硝子戸の外に花卉盆栽の見事な棚や、水甕や、藍色の陶器の腰掛などが風雅に按排せられて、彼方側の日向の軒には寄

い大きな鳥籠が吊してあつて、その中には黃色い鳥が透いて見えた。先生の書齋は土藏を引直して洋風に硝子戸を入れ、それにカアテンなどを引いた、いかにもその人の趣味生活を偲ばせる、靜かな、氣持のいい六疊ほどの部屋であつた。

「さあ、どうぞ此方へ……」と椅子から立つて、すらりとした細面の上品な風采をした先生は貧弱な二人の訪問者を迎へた。先生のその樣子には文學士だぞと云つたやうな風もなく、また先輩だと云ふ衒氣もなく、溫和な、またそれだけ何處か悠長すぎるやうなところが感じられた。

先刻の小間使が美しい珈琲茶碗に波々と香氣の高い紅茶を入れたのを、銀色の盆に捧げて入つて來た。それを二人の前に置いて廻る小間使の姿を見るともなく見ながら、先生は話し續けた。

「では、隨分忙しいのですね、旨く行つてゐるのですね」と先生は細谷愼吾の事業について二つ三つ訊いてから信太郎にかう言つた。「僕の父の會社でなかなか敏腕家だつたさうです、然し細谷氏は餘り潔癖すぎて、少し圭角があるやうですから、どちらかと言ふと澤山の人の中で仕事をする人ではありませんね。今では有力な後援者も出來た事だし、今が氏に取つても一番張合ひのある時代でせう。婦美子さんはもう隨分いい娘さんになられたでせうね、僕が見たのはまだお下げにして紅いリボンを掛けてゐた時分でしたから、もうかれこれ七八年も昔です。以前は僕の妹見たやうに家へよく來て遊んでゐたものです」

「さうです」と信太郎は微笑んで、「婦美子さんは隨分可愛がられてゐられます、何しろ先生が子煩惱な方ですから……」

先生に勸められて二人は紅茶を飮んだ。靜かな沈默の間に匙の音がして、部屋の外まで時々吹いて來て、硝子戸の隙間からカアテンを戰がす秋風が快く部屋に動いた。壁には目立つて大きな金緣の額が垂れてゐた。その繪には中世

紀風な打開かれた窓の薄明の下に、二人の若い戀人同士が止み難い情熱に驅られて、手を取り胸を打ち寄せてゐる涙ぐましい切なさの喘ぎが美しいリズムを波打たせてゐた。女の膝には打開かれた書物が今にも床に音立てて落ちさうであつた。ぢつと見てゐると、自分の心もわなないて來るやうである。

「あの繪は……？」と打仰いで見てゐた純一が覺えず言つた。

「あれですか、あれはロセッテイの有名な『フランチェスカ・ダ・リミニ』です。ダンテの『神曲』から材を取つたものです」と言つて純一の顏を見て、「まだ御存じぢやないですか、それならいい本がありましたよ、一寸お待ちなさい」と氣輕に立つて、純一がすまないやうな氣持で見てゐると、ぎつしり洋書の詰まつてゐる書棚の傍らに、鴇色のカアテンがその手に引かれて現れた堆かい雜書の中から蒼色の小册子を持つて來て、

「上田さんの『詩聖ダンテ』です、これで見ると『神曲』がどんなものであるかはほぼ分ります、詩を作る人に取つては爲めになります」と言ひながら、頁を繰つて、『フランチェスカの悲戀』といふ章を二人の前に開いた。純一の眼にはその美しい一節が鮮かに映つた。

「わが生れし國は大海のほとり、ポオの水は萬河を從へてそこに靜寧を求むとフランチェスカは語り出でぬ。

優しき心をぞ早くも襲ふといふ戀のくせものは、この君をしてわが芳體に憧がれしめぬ。噫ありし世のわが美形、

思はれて思ふは戀の習ひにて、われもまたこの君を慕ふこと見たまふ如く、此處にありても放るまじ。

そも如何にして滅びしを思へば、今もくやしさ燃ゆるばかりぞ。

戀はふたりをひとつの死に導きぬ」

二人が先生の好意のうちに快く二時間ほど送つて、またこの次ぎの來訪の許しをも得て、再び先生と小間使とに送られて辭し去つた時には、外はもう夕暮に近く、暮れるに早い秋の日影は聖堂の森の彼方に落ちてゐた。

家に歸つて來てからも、純一の心には「此處にありても離るまじ。戀はふたりをひとつの死に導きぬ」といふ最後の句が灼き付いたやうに殘つて、海の遠音のやうに鳴り響いた。幾度も幾度も幾度も繰返して、その句の意味を考へる時、悲壯な感動が彼を壓倒して、泣きたい程の顫きを覺えた。自分を詩人にするものが、詩人としての自分の悩みと誇りとが、その句の中に籠つてゐるやうに思はれた。彼の眼の前には哀れなパオロとフランチェスカとの姿が幻のやうに漂つて、長い長い迷路の果てに、自分を待つてゐる名譽の月桂冠がその幻とごつちやになつてしまふのであつた。彼は屢々我知らず心の底から聲に立てた、

「此處にありても離るまじ。戀はふたりをひとつの死に導きぬ」

林田先生の學殖と温情とは純一を導いて、次第に廣い世界へ連れ出した。彼は先生の家を訪ねて、その話を聞く事が何よりも樂しみとなつた。先生の許へ彼が詩稿を持つて行つた時、案じたやうな事もなく、先生の面には直ぐにも讀んでくれさうな表情があつた。事實、先生は直ぐ讀んでくれた。その上にも思ひがけない事には、先生からの長い手紙が來て、すつかり詩稿を讀んだ事、その才能に大きい未來を認めた事を強い言葉で述べて、詳しい批評をした後で、なほ勉强する事、とりわけ外國語を勉强する事を極力勸めてあつた。

元雄が富枝と一緒に家を持つた、と云ふよりも、富枝の家へ引越して行つたのは、二人が山から歸つて來て間もなくであつた。元雄は純一のことをいろいろ下の人に賴んで、また時々來るからと言つて引越して行つた。けれども下で吳れる仕事の報酬と、祖母からの僅かな送金だけでは、純一の生活は勉强などはとても出來ない狀態にあつた。宏や林田先生の忠告に從つて、外國語の勉强をしようと思ふ決心はつけても、少しの餘裕もないので、思ひ切つて學校の規則書を取りに行つて見ることは出來なかつた。金を貸して貰ふだけの人もなく、元雄のやうに女の力を借りると云ふ事も猶更ら無い事であつた。彼はうそ寒い夕方、よく何處かにいい職業がありはしないかと思つて、神田や上野

あたりに澤山軒を並べてゐる門口の廣い家の暖簾をくぐつて、何處かに寫字生の口はありませんかと訊いて廻つた事もある。僕が屹度見付けてやると言つた信太郎の方からはまだ何もいい仕事は知らせて來なかつた。それに信太郎自身細谷先生の仕事が此頃大分厭やになつて來たので、どうしたものかと今身の處置に迷つてゐるが、よし僕が罷めたにしても、あんな散文的な仕事に君を推薦する氣はしないと書いたあとで、ルッソオの言葉を引いたりして、例のむづかしい感想を並べて、都會生活の虚僞と暗面とを罵つたりしてゐた。

或日、枯葉の落ち敷いた上野公園をさまようた時、不圖純一は宏のことを思出した。いつぞや宏が紙切れに書いた住所が谷中の初音町で、この夏自分が圖書館に通つてゐた時、折々通つたこともある町であつた。どんな生活をしてゐるのであらうと、半ば好奇心も感じながら訪ねて行くと、通りから少し入つたところにある門構へのかなり古びた家の離れのやうな處にゐた。

宏は病氣で寢てゐるさうであつたが、やがて庭口からその部屋に通された。來客があつて、それが下條潔と云ふかの子爵の子息であると云ふことが直ぐ分つた。宏は輕い羽二重の夜具をかけて、病氣とは思はれぬやうな晴れやかな顔をして、何か下條と喋つてゐた。外に丸々と肥つた白い服の看護婦がゐて、純一が通ると座蒲團をすすめたり、お茶の用意をしたり、また宏の枕もとにある水藥や散藥の並んだ盆の上を拭いたりした。

「なに、大した病氣ぢや無いのです、もう熱もなくなつたのだが、ひとり者はこんな時どうも不便でね……」

「大した病氣でなくても此の男は寢るのが好きなんです、寢てゐると素敵ないい空想が浮ぶさうで。つまり、それが一つの病氣なんですね」と傍にゐた下條が言つた。

下條はいかにも貴公子然とした瀟洒な青年であつた。よく整つた上品な目鼻立をしてゐたが、眼と眉とのひどくかけ離れてゐるのが、何だか間延びのしたやうな感じを與へた。彼はいかにも幸福さうな顔をして、外國の詩人や文學

者の名前を頻りに持出しながら、囁くやうな聲で後から後からと話をするのだつたが、これと云つて取留めがないので、後になつてはつきりと殘るやうな事は餘り無かつた。けれども彼の話した二三の事が不思議と深い印象を純一に與へた。それは彼が此頃ブランデスの『十九世紀文學主潮』の佛蘭西浪漫派の卷を讀んだと言つて、いろいろ話した中での、認められないで死んだ二三の不幸な詩人のことであつた。その或る者は貧窮の絶望、藝術家の心の孤獨感、燃えるやうな自由と正義との渴望を歌つて、遂ひに亞弗利加の曠野で飢餓と日射病との爲めに死んだ。また或る者はその母と妹とを養ふために、苦しい俗受仕事にその才能を浪費して、最後に救貧院で死んだ。また或る者は瑞西の方から巴里に出て來て、生活の爲めに奔命して、つひに自己のその社會に適しない事を悟つて、憂鬱の極自らその若い生命を一擲した。下條と宏とが面白さうに笑つて話したり聞いたりしてゐた話の中に、純一はあはれな犧牲者の恐ろしい運命を見て胸を壓迫された。

「今日は根岸の叔父の家(うち)へ行かなくちやならんから……」と言つて、下條は看護婦に送られて歸つて行つた。

「あれから直ぐにも訪ねて來てくれるかと思つて待つてゐた」と宏は親しさうに純一の顏を見ながら言つた、「今日はゆつくり話さう、膝を崩し給へ」と言つて、丁度外から入つて來た看護婦の白く肥つた顏を見遣つて、

「すまないが一寸用事に行つて貰ひたいのです」と言つて、手を伸ばして机の抽斗(ひきだし)から紙入を取出して、廣小路の有名な菓子を買つて來るようにと賴んだ。

「ゆつくり遊んで來てもいいんですよ、僕は友達と話をするんだから……」と言つて、宏は高く笑つた。

何故か看護婦は赧い顏をして、そそくさと出て行つた。

「モオパッサンの所謂『脂肪の塊(ブウル・ド・スイフ)』ツて奴さ、惡魔の間では出來るだけ肥つた女が珍重されるさうだ、肉多ければ罪深しだからね」と宏は出て行つた看護婦のあとを見送つて、聞えよがしにかう言つて面白さうに笑つた。

もしみじみ共鳴するのだ。作者は忘れたが、確かから云ふ詩があつた、

わが戀やむはいつならむ
雨よりしげき涙もて
君がたもとを濡らしつつ
いはぬ四年の苦しさを
唯だひと度にうちあけて
あはれと君に泣かむとき

僕の心にも苦しい燃えるやうな感情の嵐がやつて來たんだ、かうして寢てゐながらも、その感情に身を委してゐるのだ。君には或ひは僕の性格は、誤解されてゐたかも知れないが、僕は君とよく似た一面を有つてゐるのだ。實は、僕といふ男は純潔なものを求める心が人一倍切なのだ、僕はナイーヴな理想主義者なのだ。だが僕には妙なシャイネスとプライドとがあつて、人に自分のさうした方面を見られたくないのだ。こんな告白も君だからこそするのだ……それだから皆僕をまるでメフィストフェレス見たやうな皮肉な理智ばつかしの男だとばかり思つてゐる、つまり、實際の僕よりかひどくえらい者に買被つてるのさ。僕はそれ程人間離れのした男ぢやない、實は弱いセンティメンタリストなのだ……」

純一はその宏の言葉が、一々自分の思ふところにぴたりぴたりと合つて行くのを感じて、靜かに聽いた。

「君の敏子さんに對する心持をいつか細かに話してくれないか。敏子さんは僕の兄貴の妻になつた人だけれども、君と敏子さんとの感情は十分僕は尊重したいのだ。いつか詳しく話し給へ。だが、今日は一つ僕のおひめを聽いてくれ

……」から言つて宏の話した事によると、彼は、先刻來てゐた下條の妹の紅絹子といふのに戀してゐるのだつた。「紅絹子さんに就いては僕は直接には殆んど何も知らない。ただ、下條からその性格や、趣味や、教養などを聞かされてゐるばかりだ。然し、僕にはそれだけでいいのだ。僕は丁度中世の修道僧が聖母マリアを崇拜するやうに彼女を崇拜するのだ。實際、僕はまだ二三度ちらと見たばかりだが、その度びに彼女の頭の圓光が僕の胸に輝かしく射し込むやうな氣がした。此頃の僕の詩の靈感はみな彼女から與へられてゐるのだ。彼女の事を思ふと、僕は人知れず泣いて見たいほど悲しい氣持になる、悲しくなると共に僕は自分の有つてゐるあらゆる惡いもの醜いものを、その涙で洗ひ去られ淨化されるやうな思ひがする。僕は隨分汚れた人間だ、隨分下らない女にもかかり合つて來た、白日の光に面を合せられないやうないろんな事もやつて來た。が、それだけ愈々僕は純潔なものに憧れるのだ。純潔といふことは、それ自身何の力をも働かせないで、汚れたものを救ふ事の出來る唯一の德だと僕はしみじみ感じてゐる……からいふ氣持で作つた詩があるのだ」と言つて、宏は靑く靜脈の浮いた手を枕もとの机の上に差し伸ばして、原稿紙に投げ付けるやうな字で書付けた詩稿を取つた。純一がその詩を讀んで、その才氣に感心してゐると、宏は無頓着にまた言ひ出した。

「まづい詩だが、その詩には僕の何物にも換へ難い情感が託せられてゐるのだ。それは丁度夏の初めだつた、下條を訪ねて行つて、いつもの例で彼の書齋へ庭から廻つて行つた。家を繞つてゐる廣い庭園には、美しい芝生もあり、溫室もあり、花畑もあつて、鮮かな外光の中に凡ての物影がくつきりと捺されてゐた。丁度その花畑のはづれに、思ひがけなく、白い單衣に紅い帶をしめた紅絹子さんが白い手を差伸ばして、深い葉の間に籠つてゐる眞紅に熟れた草苺を摘んでゐたんだ。僕はそれを見ると、何といふ事もなく、一歩も進めなくなつて、そこに立止まつてしまつた。すると彼女は片方の掌に葉のついた苺を二つ三つ載せたまま此方へ歩いて來て、(兄でございますか、散歩にと言つて出

かけましたが、今に歸つて參りますから、暫くこちらででもお待ち遊ばせ）と言つて、僕を傍らの高見にある園亭の中へ導いて行つた。そして圓卓の左右に置かれた籐の小椅子に差向ひに掛けて、はつきりした聲でいろいろと舞踏の話をした。僕は下條から彼女が舞踏に巧みな事を聞いてゐたので、そんな話もして見ると、はつきりした聲で音樂の話や繪の話をしてくれた。西班牙舞踏を或る舞踏會で踊つて、澤山の花束と喝采とを贏ち得た事もある彼女は――ああ、美しい彼女が、小鳥のやうな彼女が、ほんのりと上氣した薔薇色の身體に白い霞のやうな舞踏服を着け、エキゾティックな紅い帽子をかぶり、情熱的な西班牙の一少婦になつて、奔放な踊を踊るのだ！――彼女はまたロシアン・バレエについてもなかなかしつかりした話をした。ニジンスキイやパブロヷの舞踊と紅葉館あたりの日本舞踊とを比較したり、また歌劇がもつと一般的になればよろしいのになどと言つた。それからビゼエの『カルメン』の話が出ると、メリメエの『カルメン』を僕にもお讀みになりましてと訊くから、讀んだと答へると、あなたはカルメンの性格についてどうお考へになりますかと訊いた、僕がどう答へたかはまあ省略するとせう。そんな話をしながら、長い睫毛の下の凊らかな眼を僕の視線の正面に置いて、少しも惡びれず愛らしく話し續ける、純潔な中に聰明な閃きがあつて、これ迄の日本の女のやうな無表情な泥人形式ではなく、上品でチャアミングなのだ。ぢつとその顏を見てゐると、僕の眼にはボッティチェリの聖母マリアの面影が髣髴と浮んだ。ボッティチェリの女性はロマンティックでやや憂鬱だ、紅絹子さんにもさう云ふところがある。常にピアノの鍵盤を珠のやうに走るそのほつそりとした長い指の感じもボッティチェリの女性の纖細な指だ。だんだん話してゐるうちに、僕に對する心持が打ち展いて、ちらちらと僕を見るその眼には、朝露のやうに陽に輝めく愛情が湧いて來るやうであつた……僕が……」

ここ迄流暢に話し續けて來た宏は、しみじみと聞いてゐる純一の樣子に不圖氣が付いて、

「然し君、これはみんな空想だよ、みんな僕の詩さ！」と言つて、彼は純一の氣持を遮つた。

「みんな戀するものの情痴の夢さ！　時によつては彼女を青白い月光の中に妖精女王（フエアリイ・クイン）のやうに夢みる事すらもある……僕はまだ彼女と話した事は一度もないんだ、二三度默禮を受けた事がある限りなんだ、それだから益々尊いのだ、この點で僕もやつぱり君の仲間だよ。……しかも、こんな空想には今菓子を買ひに遣つたああした『肪脂の塊（ブウル・ド・スイフ）』が一番の刺戟劑なのさ。あんな丸藥を一服々々用すると、僕の空想はひどく盛んになつて、しかもこんな美しい淨らかな夢を描くのさ。」と投げ出すやうに言ひ放つて、純一の氣持をそこに置き去りにした。さうしてそれが面白くて堪らないやうな人の惡い笑ひ方をした。

純一はその年よりもずつと老けて、もう二十三四にも見える宏の淺黒い苦み走つた顏を眺めて、これ迄感じなかつた美をその何處か不規則な顏相の間に見出した。

「然し、空想だと云つても、それだけ人を魅することが出來れば、自然主義者の空想排斥論なんぞもう問題ではない」

「君もさう思ふかね」と宏は滿足さうに言つて、「藝術家を新聞記者に引下げようと云ふのが彼等の主張ぢやないか。瓦斯を臺所に引いたと言つては小說を書き、下宿屋の女中がどうとかしたと言つては書く。だからいつかも洪水のあつた時なんぞ、翌月の雜誌に洪水の小說が三つも四つもずらりと並んで、まるで洪水案內よろしくさ。一體、あつた事をその儘常識的な見方でひよろひよろとだらしなく書くより外能がないなんて智惠のない話さ。それで創作と呼んでゐるから笑はせる。何處に創造（クリエーション）があるのだと訊いてやりたい。尤も、事實その儘でも、單なる常識にとどまらないで、深く微細な心理にまで掘り下げて行つてあればまた格別だが、そんなものはてんで見かけない。要するに今の自然主義文學なんてものは低能兒文學さ！」

純一もいつかすつかり打ちとけた話し方で、夜まで藝術上の議論に話し耽つた。

六

西尾宏との交遊は多種多様な刺戟と興味とを伴つて、純一の生活を或る文學的集團の中に導いて行つた。純一に取つては信太郎との交遊は徐々に過去に屬しつゝあつた。信太郎に逢つてその千遍一律な議論や感想を聞くことは、昔の友達に對する惰性的な親しみからであつた。然るに、信太郎は厭やがつてゐた細谷先生の仕事がその年の暮に一段落着いて、年末年始の例になつてゐる先生の溫泉地への旅行に、信太郎も誘ひを受けたと云ふのに、彼は或る日純一を訪ねて來て、一先づ國へ歸つて來ると言つて、二三日經つて純一が見送る暇もなく、新橋からの葉書一枚で歸つて行つてしまつた。國から來た長い手紙の中で、彼は田園は神によつて造られ、都會は人間によつて造らると云ふ詩人の句を引いて、頻りに都會の厭ふべき事を說いたが、彼がなぜそんなに急に歸國しなければならなかつたか、その理由は一向分らなかつた。けれどもその抽象的文句の中に挾つた一つの具體的事實、先生の愛孃が近々或る實業家へ嫁すると云ふ話だと云ふ一句が純一の眼を惹かずにはゐなかつた。彼は信太郎が非常に氣の毒な人に思はれた、けれどもなぜ信太郎がその事をはつきり書かないのか不思議であつた。

「歸つて來て見れば、敏子さんも靜子さんも最早や昔の少女ではない、さあらむとは知りつゝも、依然たる舊山河に對する時、今更に人生匆忙の感に堪へない、あの優しかりし彼女達が、今は相見る機會も無い人妻となつてゐる事が今更に寂しい……」と信太郎はなほその終りに書き添へてゐた。

純一は林田先生の紹介で或る書肆の編輯部に入つて、その校正係りになつた。報酬は大した事は無かつたが、その仕事の性質が、純一には苦しくはあつてもさまで厭やな事ではなかつたので、朝八時頃から夕方四時頃まで、編輯室の片隅で默々として働いてから、夜は神田の外國語學校の專修科に通つて、そこで專ら佛蘭西語を學んだ。

希望のある日々が充實したいそしみの中に靜かに早く流れて行つた。彼の憧憬も夢も惱みも寂しさも、凡てのものが、壺にでも入れて傍に置かれたかのやうに、彼は心を潛めてひとへに、自分を築き上げる爲めの修養に沒頭した。時とすると、彼はその靜けさを破られて、心の底からの颶風に凡てを搔き亂されてしまふ事もあつた。彼は山巓を咫尺の間に望みながら、羊腸たる山腹を迂回して行かねばならぬ登山者のやうに、焦慮の餘り手から辭書も讀本もはふり出してしまふのであつた。また時とすると、まるで何かに憑かれたやうに、夜遲くまで烈しい勢ひで原稿紙に何か書き續ける事もあつた、けれども翌朝起き出してその原稿を讀み返すと、彼は深い溜息を吐いて、それをいきなり引裂いてしまふのであつた。さうした歲月の間に、純一もいつか少年期から青年期へと入つて行つた。

純一は西尾宏の友人をいつしか自分の友人として見出してゐた。

誰れよりも早く純一に親しさうにして、最初に純一の下宿に訪ねて來てくれたのは江添忠治であつた。彼はもうかなりの年配であつた。彼自身は二十九だと言つてゐたが、實際は三十四五、いや、もつと行つてゐるかも知れなかつた。西尾宏はいつも江添大人と云ふ尊稱的綽名をもつて呼んでゐた。江添がどんな人物で、どんな經歷を經た男であるかと云ふ事は、江添自身の自己紹介で雜作なく分つた。その言ふところに依れば、茨城縣の生れだと云ふ彼は、士族の一人息子で、しかも早くから父に別れて勝氣な母親の手一つで育てられた、その母親が彼の二十四五の時、死際に彼を枕もとに呼び寄せて、

「これ忠治や、おまへもいつ迄もこれと云ふ仕事もせんで、ぶらぶらしてゐても先祖に對して申譯がない、此の母がなくなつたあとが案じられる、どうぞ氣を變へて、これからはしつかり遣つてくれるやうに……」としみじみ意見をして、それ迄女の手一つで稼ぎ蓄めてゐた二千圓の金を彼の手に渡して、「これをおまへに讓つてやるからこれで身を立ててくれ」と言つて死んで行つた。

小説家志望の忠治は母親を葬ると直ぐ、この金を手にして上京し、先づ日頃からその作品に親しんでゐた某大家を郊外の家に訪ねて、自分の抱負を語りその示教を乞うた處、その大家は先づ何よりも小説には題材が大切で、題材の時異に加ふるに描寫の周到が伴はなくてはならぬと言つて、體驗の重んずべき事を力說した。そして小說でも書かうと云ふものは、人生のあらゆる方面に通じなくてはならない、女も知らなければならない、酒も飲めなくてはならないなどと、小說道の修業法を具體的に話し聞かせた時には、江沶忠治はいかにも尤もな說だと感じ入つてしまつた。その時彼が思ひ付いたのは溫泉地めぐりである。溫泉地はこれ迄全く閑却されてもゐたし、隨分面白い題材が轉がつてゐるに違ひない、悠々溫泉にひたりながら、溫泉地氣分によつて詩囊を肥すのが何よりだと思つた。幸ひ二千圓の現金を有つてゐるので、直ちに信州の別所溫泉に向つた、そこには田舍藝者が彼を金のある靑年と看て取つてちやほやと持てなしたので、二重にも三重にも彼は幸福を感じた。彼のノオトはそれ等の女の身の上話などで一杯になつた。かうして甲信地方から遠く東北に迄も湯泉旅館を泊り步いてゐるうちに、ノオトの數は百册にも及んだが、ノオトの數の增えるに從つて懷中の金は減つてしまひ、彼が東京に舞ひ戻つた時は囊中あますところ僅かに十數圓に過ぎなかつた。けれども彼は失望しなかつた。時宛かも自然主義勃興時であつたので、彼はかのノオトに控へた題材に據つて百枚ばかりの作品を仕上げて、それを携へて例の某大家の門を敲いた。然るに當時日の出の勢ひで會つたその大家は彼の事はすつかり忘れてしまつたと見えて、通り一遍の崇拜者に對するやうになかなか逢つてはくれなかつた。幾度びも通つてやうやう面會して原稿を見せると、大家は二三十枚ばらばらと繰つて見て、ところどころ拾ひ讀みをして、

「材料はなかなか特色があるらしいが、どうも隨所に小主觀が顏を出して冷靜な觀照を妨げてゐるやうだ……まあ兎に角置いて行き給へ、そのうちに讀んで見るから……」と言つたきりで、それからその得意の描寫論を彼の退屈する程言ひ聞かせた。原稿はそれきりになつた。半年程たつて彼が貰ひに行くと、お氣の毒だが今一寸見付からないから

後からお返しするとの事であつた。けれども江添忠治は、

「なに構ひません、僕はいくらでも材料は持つてゐますから……」と言つて歸つて來た。その後彼は三四百枚の長篇小說を書いて、大學教授を辭して小說家になつた某大家のところへ、その人の關係してゐる新聞に載せてくれるようにと懇願した手紙を附して送りつけた。その後暫くして件の大家のもとに訪ねて行くと、今日は多忙だからと言つて逢つてはくれなかつたが、一週間程して長い手紙を附して送り返して來た。その手紙には詳しく作品の批評をした後でまだ年の若い貴君がこれだけの努力をした事は感心に堪へないと賞めて、新聞の方には一寸難しいが、短篇小說ならば或ひは何處かの雜誌に紹介してもいいと書いてあつた。けれどもその大家はその後間もなく病氣になつて湘南地方へ轉地したので、その方もそれきりになつてしまつた。江添はまた幾度かさうした努力を繰返したけれど、いつも運惡く何かの故障に出會つた。けれども彼の熱心は毫も衰へなかつた、彼は始終ノオトを繰つては何か書いてゐた。

その後彼は千束町情調に自分の小說の題材を得ようとした。そこに浸るには多くの金は要らなかつたので、二三年の間に、彼の言葉に依れば、彼等賣笑婦の生活は悉く究め盡したさうである。彼は友人に逢ふと自分の材料の特異と豐富とをいつも誇つてゐた。そして、相手が感心して聞いてゐると、

「何なら一つ分けて上げませう、僕は澤山あります」と惜しみ惜しみ言ふのであつた。けれどもこれ等の探究は不幸にして彼に一つの痼疾を齎した、彼は時候の變り目などによく苦しがつて寢込んだ、そして思出したやうに賣藥を飮んだり、注射をしたりした。

二千圓を使ひ果してから、彼は初めのうちはいろいろな編纂物などの下受仕事をして、漸く下宿料を稼いでゐたが、道樂の味が身に沁んでしまつた彼は、金が入ると下宿料は後廻しにして遊びに遣ひ果すのが常であつた。此頃ではもうその仕事さへも怠け勝になつて、友人の下宿から下宿へ渡り歩いて、出來るだけ働かず出來るだけ遊べる方法を講

じ、大變困つてゐるからと言つて金を借りては、寄席の書席に行つてごろりと寢轉んでゐると云つた風であつた。

「君も作家になるのなら體驗が必要ですよ、材料が平凡だとどうしたつて讀み應へがありませんからな」と彼は純一に說法した。

「さうですね」と純一はそんな時いつも輕く受け流してしまつた。彼は氣の毒で西尾宏のやうに江添をからかふ氣にはなれなかつたが、その尤もらしく獨りで頷いてゐるのを見ると焦々してくる事もあつた。それで一二度は體驗といふ事は江添の言ふやうな表面的の經驗といふ意味ではなからうと注意した事もあつたが、江添が一向受け付けないので、それからは彼を相手に物言ふ氣にはなれなかつた。そして自然主義の犧牲者として彼を憫れむと共に、彼が文壇に出られないのにも相當の理由はあると思つた。

江添はその後朝川英夫といふ純一と同年配の靑年を連れて來た。

「朝川君は不良少年の生活を描いて文壇に打つて出ようと云ふ方です、しかもその不良少年は社會主義を背景にしてゐるので、一層讀者には好評を博するでせう」と江添は紹介した。朝川はまるで江添忠治の長男ででもあるかのやうに子供々々してゐた。愛くるしい丸顏をしてゐて、妙に人なつッこいところがあつた。喘息の持病があつて、いつも喉が苦しさうに、嗄れ聲で笑つたり話したりした。彼が社會主義者と接近したのは、その父が有名な社會主義者貝塚湖泉の友人だからであつた。彼も多くの靑年と同じやうに激越した感情から出發してゐたが、しかもまだその出發點からいくらも歩いてゐなかつた、それ故彼の好んでやる議論なども隨分あやふやなもので、要するにただ先輩の說を斷片的に受賣するに過ぎなかつた。けれども、これまで不良少年として長い間父親に持てあまされて來た彼が、澤山の尾行巡査に跟かれていかにも反逆者らしい、また新時代の先驅者らしい大菅左門や赤畑荒村等の首領に對して一種の英雄崇拜の氣分に驅られて、巡査を相手につまらぬ惡戯を試みては小ぜり合ひをやつたり、妙に矯激な筆を弄して

快哉を叫んだり、下宿屋を踏み倒して共產主義の實行だと稱したりする事に非常に興味を見出してゐるのは不思議ではなかつた。社會主義は彼に取つて一番好都合な理論でもあり、彼の生活信條に迎合するものでもあつたのである。

「此間の上野の會の時は實に面白かつた、大菅君が演壇に上らうとすると、直ぐ奴等が四五人も驅け寄つていきなり引きずり下さうとするもんだから、皆盛んに憤慨してなぐつちまへと言つて、逢阪君なんか下駄を振廻してゐた、たうとう解散になつて外へ出ると、暗い處から三四十人もバラバラと飛び出して來て、僕等を取圍んで皆上野署へ來いと云ふ騷ぎなんだ。行つてやる行つてやると皆呶鳴つて押掛けて行つた、それからが面白いのさ、留置場へ入れられると、出來るだけワイワイ騷いでやらうと云ふので、足で床を蹴つたり歌をうたつたり二三時間も暴れるだけ暴れたもんだから、皆腹は空くし、へとへとに疲れてしまつて、中には寢込んでしまふ者もあつたが、實に面白かつた……」

などと朝川はいかにも得意さうに話して、さうした事が面白くて堪らないやうに笑つた。

純一が上京當時日比谷公園で突然ダツだと云つて擲たれた事を話すと、朝川は一層氣勢を擧げて憤慨した。

「今度一つ大菅君の家へ行からぢやありませんか、喜んで話してくれますよ、いい人です、學問もあり度胸もあり、仕事をする人としては選ばれてゐる……」

傍にゐた江添忠治も、一二度ある先輩のところで逢つた事のある大菅左門の印象を話して、三人連れで一度訪ねて見ませんかと勸めた。

純一は日比谷公園で受けた屈辱を考へると、今でもぢつとしてゐられないやうな激昂を感ずるのであつたが、彼に取つては富とか權勢とかに依つて弱者を虐げる强者に對する敵意と反抗心とは、その少年時代から既に已に培はれてゐたもつと根强い、もつと本質的なものであつた。彼の祖父と父との虐げられた不幸な生涯を考へると、彼は自分こそ强い人間になつて、不義不正な强者の壓迫と戰ひ、弱い者や虐げられた者の味方になるのだと胸を打つて叫ぶので

ある。
此の感情が彼と敏子とを相近づけた一つの理由ともなつてゐる。かの晩春の黄昏、相良元雄の書齋でなつかしくめぐり合つたその歸り路に二人が語り合つた事は、世の常の甘やかな囁きではなかつた、その事情は互ひに異つてゐたけれども、二人は互ひの悲しみを同情し合ひ、同じ熱望に共鳴したのである。城山で敏子がその結婚に就いて語つた時にも、彼女は一面その感情によつて動いた事を自分で語つたのである。然しながら、その敏子がさうした動機から出たにしても、金持の西尾友一郎の妻となつた事は、謂はば身を敵陣に投じなければならなかつた事は、更に二重に純一の心を痛ましく搾め付けるのである。敏子が西尾の家に嫁いだのは、結局、人身供養にあがつたかたちではないか。しかもどうして彼女が自らそれを知らう、あの美しい情深い心をもつた少女がつひに金持の庭に移し植ゑられた、その金持の庭で彼女がどんなに美しく咲いたところで、それが果してその花の幸福であらうか、涙の露がその花瓣の上に宿ることはないであらうか？
金持が一人の少女を捕へ、貧しい者を虐げ、その外何事にもその意の儘に振舞ひ得るのは言ふ迄もない事である。けれどもその威力は、最も物質的な勢力を超越して最も自由であるべき藝術の世界に於てさへも、運命的な條件となつてゐはしないであらうか？　西尾宏と親しくなつて彼の美點を認めるにつけても、彼の天分がその背景によつていかに保護されてゐるかを純一は考へずにはゐられなかつた、また彼の勝手氣儘な高飛車な態度がいかにも彼にふさはしく、また彼を立勝つて見せるのを思ふにつけても、さうした物質的勢力が、いかに彼を惠んでゐるかが感じられるのだ。然し、純一は宏を羨みはしなかつた、彼は宏の天分を隨分高く評價してゐたから、自分が一日精根の盡きる面倒な校正の仕事に頭腦を荒されてゐる間に、宏が悠々自適、美しい空想に耽つたり、好き放題な事をして、自由に奔放に生を樂しみ、その藝術の根を培養出來るのは運命の當然の處置のやうに考へられた。然し、だんだんに彼は自分の

方が宏よりももつと偉大な事業の爲めに生れて來た人間である事を考へるやうになつた。自分こそ眞に人類の爲めの戰士である、人間を幸福にする爲めに生れた人間であると彼は思つた。彼の前には美しいユウトピアが五彩の光の中に現れた、自分が一命をさへ惜しまなければ、その生涯を賭する事さへ厭はなかつたならば、自分の渇望と夢想との世界は直ぐにも實現するやうに思はれた、この不合理な現在の社會の狀態が自分の力で全く改める事が出來るやうに思はれた。それと共に、彼は自分と志を同じうしてゐるらしい或る種の人々に注意せずにはゐられなかつた。その時、彼は朝川と相識つたのである。朝川の議論は混亂した、要領を得ないものではあつたけれど、彼の頭に或る光を投げ込んだのは事實である。彼は朝川から借りて讀んだ大菅左門等の出してゐる雜誌『現代思想』を讀んで、もつと深く大菅の思想を知りたいと思つた。

朝川によつて傳へられてゐる大菅一派の行動は餘りに子供らしくて感心出來ないやうな氣がしたけれどそれも彼等の止むを得ない戰術であるかも知れない、純一にはその底にもつと眞劍なもつと本質的なものが隱れてゐるやうに感じられた、それを直接大菅左門から聞いて見たい。そしてそれが自分の信念と合致するものであつたならば、たとひ身はその爲めに滅ぶとも、階級戰の一兵卒として名もなき犧牲者として空しく斃れようとも、敢て進まうと彼は考へた。

或日、純一は朝川と江添に誘はれて東中野にある大菅左門の家を訪ねた。大菅の家の附近には二人の男が佇んでゐた、それを見た朝川はもう顏馴染と見えて、

「やア、御苦勞樣!」と反語的(アイロニカル)な調子で聲をかけた。先方では一寸頷いてゐるやうだつた。大菅の家の前に大菅左門、岡よね子と並べて掛けた門札を見て江添忠治は、

「ホウ、社會主義者はやつぱり違つてゐますな、門札まで同權と見えますな!」と感嘆した。

大菅左門は直ぐ會つてくれた。話に聞いてゐた通り、きりりとした好男子でいかにも一癖ありさうに見えたが、と

りわけそのぎよろりとした眼は薄氣味の悪い光を放つてゐた。然し頭をさつぱりと五分刈にして輕い髭を蓄へた、情熱よりも理智のよく發達してゐる事を思はせる彼のよく整つた顔は、温かに衆を抱擁する事の出來る度量を示してゐた。また彼の筒袖を着た身體は監獄で病氣を授かつたと云ふにも拘はらず、何處かしつかりした、ねばり強さを見せてゐた。朝川の話では、大菅初め此の一派の人達が初對面の青年などに對する時、先づ最初に自分達の主義に取つて敵か味方かを鋭く識別けて、敵だと認めるといきなり高飛車に冷笑的態度に出るのであるが、本當の要求から近づいて來たものだと看て取れば、懷に抱き込むやうな打ちとけた態度に出ると云ふ事であつたが、大菅は江添に對しては全く無頓着らしかつたのに反して、純一に對しては勿論この後の態度を以て接した。純一のこれ迄の經歴などを一寸訊いてから、

「君は社會學の本を讀んだ事がありますか?」と大菅は物柔かに訊いた、純一がまだ纏つて讀んだ事がないと答へると、

「これから少し社會學や自然科學の本を讀むやうにするといいですね、然し日本で出來たものにはまだ餘りいいものは無いが、君は語學は何が出來ますか?」と訊いた、そして純一が佛蘭西語を遣つてゐる事を聞くと、外國語學校の佛語科を出て佛蘭西語に最も精通してゐる大菅は大變喜んで、いろいろと佛蘭西文學の話を始めた。ゾラやアナトオル・フランスの話からベルグソンやソレルの話に移り、いつか話題はセンディカリスムの方に移つて行つた。

「よくいらつしやいました……」と言つて次ぎの部屋から夫人が出て來て、「朝川さん、先だつては大變でしたね、でも直ぐ歸れて結構でした、演壇にも上らせないなんて無法ですわ、そんなにすれば一層此方でも氣勢を高めますから、結局おかみで藪蛇ですのに……」などと言ひながらいろいろと皆をもてなした。大菅よりも年上だと云ふ夫人は社會主義者の元老である貝塚湖泉の義妹で、まだ年の若い學生であつた大菅の爲めにさんざ苦勞して、波瀾の多い生活に

よく堪へて、彼の爲めに何くれとなく盡してゐるので、今日の彼の地位もこの夫人の內助に負ふところ尠くはないと言はれてゐる。小柄で何處かヒステリカルな顏色の惡い婦人であるが、その人をそらさぬとりなしは、初對面の純一にも大變いい感じを與へて、大菅に對する親しさを一層深くするに力があつた。

大菅はセンディカリスムの成立と意義とを一通り說いて、その持說である社會的個人主義の說明を始めた。純一はその抽象的、哲學的な說明にはまだはつきり會得の出來ないところもあつたが、大菅が奴隸的境遇にあるものの忍辱は却つて甚だしき不德であると言つて、その所以を說明した時には同感せずにはゐられなかつた。

傍にゐる朝川は時々單純な合槌を打つて、嗄れた聲で笑つた。丁度我儘な甥がその叔父に幅を利かせてゐるやうな妙に甘えるやうな調子で、彼は大菅の目の色を讀みながら振舞つてゐた。

「一寸お話中ですが、あそこにあるあの刀は、あれは御先祖傳來の品でございますか?」とそれ迄傍で眞四角にすわつて退屈さうに聞いてゐた江添が、湯呑を一口飮んでから鹿爪らしく訊いた。

大菅は一寸その大きな眼の運動を休止させたが、

「あれですか?」と刀と江添の顏とを等分に見ながらにやりとした。

「あれは僕の親父のものです、親父は軍人で、しかも日淸戰爭で戰死した忠勇なる帝國軍人だつたのです」と彼は答へた。

「へえ、あなたのお父さんが軍人で、そしてあなたがこのやうな御主義で……」と江添は驚異を以て言つた。何事に對しても根掘り葉掘り訊く癖の付いてゐる彼は、どうしてもその理由が聞きたいらしかつた。

「そりや君さうさ、そこに必然的なものがあるのさ、僕の親父だつて君、軍醫なんだぜ」と朝川は得意さうに言つた。

愈々以て分らないと言つたやうに江添は純一の方に目交せした。けれども大菅はそれに就いては何とも言はなかつた。

「失禮ですが、一寸その刀を……」と江添は掌を突出して泳がせるやうにした。刀を見てしまふと、その次に彼は壁にかかつてゐるバクウニンの寫眞をあれは誰ですかと訊いたり、湯呑を取上げてその燒を見たり、菓子盆をいい盆だと言つて賞めたりした。大菅はそれが一々くすぐつたいやうであつた。

一二册本を借りたり、また四五日してからある同志懇談會に出てはどうかと云ふ勸めを受けたりして、三人は大菅の家を出た。

「さすがに社會主義者の家は何から何まで感じが違ひますね、第一大菅さんのあの筒袖なんかも實によくはまつてゐますな、あの奥さんも丁度露西亞の小說に出て來る何とかイワノフナなどと云ふ女革命家と匹敵するでせうな、何しろえらいもんですな……」と頻りに江添が感心すると、朝川はにやにやして、

「そりや君えらいよ、あれで語學は英獨佛露伊太利の外にエスペラントまで出來るんだぜ、今のアナアキストの中ではあの人が一番進んでゐるよ、貝塚湖泉なんかは溫和派で手ぬるくて駄目だが、大菅君の方はずつと徹底してゐるからね……」と言つて、默つて何か深く考へ込んでゐる純一の顏を覗くやうにして見て、

「君、大菅君はいい人だらう？」と訊いた。純一が素直に肯くと、彼は得々として大菅がある方面に一番恐れられてゐる事、警官などにも一番押しがきく事などを辯じ立てて、これ迄あつた警官と同志とのさまざまの衝突の例を擧げて面白がつた。

「そりや書けますな、『留置場の一夜』なんて云ふ題で書くと素敵なものが出來ますよ」と江添は頻りに朝川を羨望した。

七

江添忠治や朝川英夫はそれぞれ澤山の友人を有つてゐた。彼等は丁度玩具の組合せ繪のやうに、時々その顔振れを變へて、二三人宛つ連立つては文壇の大家連や、友人間を歴訪して、文壇の樂屋話、例へば誰れが此頃何と云ふ女流作家と遊び歩いてゐるとか、誰れが何處の細君とどうとかしたとか、また誰れ誰れが何といふ女優の事で絶交したとか云つたやうなつまらない噂話や、友人間の相互批評や、その月の雜誌の小說の印象批評などを、丁度行商人と屑屋とを兼ねたやうな工合にそれからそれへと持ち搬ぶのであるが、歩いてゐるうちに、雪玉を轉がすやうに新しい話題がだんだんにくツついたり、また飛んでもない形に曲げられたり、いろいろの說が雜然と調色されて誰れの意見とも分らないものがさも自分の意見らしく辯じ立てられたりした。そして彼等は結局、がつかり疲れて下宿に歸つて來るのである。さうした生活のつまらない事は彼等自身が最もよく知つてゐるので、彼等はそんな時間と神經との浪費に過ぎない無目的な彷徨を『訪問病』と云ふ自嘲的な名前で呼んでゐた。そして時折り發心しては、お互にみつちり眞面目な勉强をしようと言ひ合ふのであるが、その中の一人がいつかまたもとの訪問病にとツつかれるが最後、仲間が皆ばたばたツとそれに感染してしまふので、結局何にもならないのであつた。

彼等は一樣に不幸であつた。彼等はいづれも丁度蛾が華かな火光を目がけて飛んで來るやうに、文壇の華かな檜舞臺を慕つて、いろいろな地方から集つて來た文學靑年であるが――中には時々江添のやうな中年者もゐた――一寸見たところいかにも自由であるらしい文壇が、その實非常に窮屈な制限を受け、いろいろな情實に支配され、黨派や學閥で固められてゐるので、それ等の背景を有たない者がいきなり文壇に出ると云ふ事は容易な事ではなかつた。赤門出身の人々は元大學敎授であつた某大家の山房に集つて、そこから世間に押し出されて行つた、早稻田とか慶應とかの出身者も、それぞれその學校の先輩に引立てられその相互扶助の大網に苦もなくすくひ上げられて行つた。けれどもさうした學校の月謝を拂ひ得なかつた者は、資本を持たないで市場に立つた者は禍ひである。彼等はいつもいつ

て出來てゐる黨派は大抵それ等の學校出身者によつて形造られてゐるので、學閥外の人でその中に加へられるのには、他に何等かの有利な條件が必要なのであつた。勿論、かうした情實は表面に浮んでゐる事は稀れなので、何等の勢力の背景も緣故も有たない無名の靑年がその作品を發表しようとする時に、まのあたりぶッ突かつて初めてその存在を悟る透明な硝子の壁のやうなものであつた。文壇の標語は幾度び變らうとも、主義傾向はどんなに推移しようとも、此一事だけは永久不變のやうに見える。然し餘程すぐれた才能と非常に烈しい意志と忍耐力とは、最後にその强固な障壁をも打破る事が必ずしも出來ない譯ではなかつた。けれども生憎彼等の多くはそれ等の條件を缺いでゐた、否全く缺いでゐると言ひ切れないにしても、二重に不利な境遇に置かれた彼等は其日々々の麵麭の爲めの下らない俗惡な仕事にすりへらされて、何時とも知れずその熱意を失ひ野心も銷磨してつひには白眼を以て文壇を見るやうになり、初めは一時凌ぎに遣つてゐた妙な低級雜誌や婦人子供向の雜誌などの雜錄書きなどと云つた者に納つてしまふのであつた。

「今度神樂坂の高等演藝館で上演する古山白夢の『レモンの花の咲く國へ』に深澤君が出演するから一つ君も連中になつてくれ給へ」と言つて、江添忠治が或日切符を持つて來た。

深澤久滿一は純一も知つてゐる男で、宏の書齋で二三度一緒になつた事がある。彼も貧しい文學靑年の一人であつたが、然し彼の本來の望みは詩人とか小說家とかになる事ではなかつた。彼は能登の漁師の子で、脊の高いがつしりした骨組の見るから武骨な男であるのに、どうした初一念か俳優を志願して上京して、今では或る演藝雜誌の訪問記者をしながら、時々賣れさうにもない脚本の原稿などを書いてゐた。彼はいかにも漁師らしいくしやくしやした色の黑い、ひどく寸の詰つた顏をしてゐた。口の惡い西尾宏は深澤が便所へ立つた後で、

「深澤はあれで、俺は色は淺黑いし、苦み走つてゐると自分ぢや思つてゐるに違ひないぜ」と言つて一座を笑はせた

り、時にはまた彼を前に置いて、
「この男はこれで幸四郎に似てると言つて自慢なんだが、屹度何だよ、凹面鏡に顔を映した幸四郎にそつくりだと云ふつもりなのさ」と言つてひやかしたので、一時凹面鏡の幸四郎と云ふ綽名が付いてゐた事もある。彼は貧乏な癖に美裝家で、一帳羅のお召の著物を後生大切に著て、家に歸ると直ぐに疊んで、毎晩それを敷いて寢るのであつた。足袋などもいつも眞白なのを穿いてゐたが、それも寢る時は裏返しに敷いて寢た。雪駄が好きで、いつも穿き廻つてゐるのは大枚六圓だと云ふ話であつた。江戸ッ子がつて、食物の通を振廻したり、女のやうに流行の衣裳の噂をしたり、淸元の稽古に通つて、持前の太い聲で十六夜淸心を一くさり唄つて聞かせたりした。彼は雜誌の用事で出入りするいろんな劇場の役者部屋の噂をして、誰がどうしてゐたとか、彼がかうしてゐたとか、どの女優がどの役者とどうとかしたとか云ふやうな事をさも面白さうに話してゐた。時々駄洒落を交へて、餘り氣の利かない洒落に自分で感心して悅に入るのであつた。かうした彼が今度こそ多年の宿望が叶つて、今度新たに組織せられた新劇協會に加入して、愈愈舞臺に立つ事になつたのである。その新劇協會には藤岡富枝――相良元雄の同棲してゐるモデル女だつた富枝も加入してゐた。

純一は芝居は餘り好きでなかつた、また人中に出るのも好きではなかつたが、西尾宏を初め皆が此際大いに藤岡富枝と深澤久滿一との爲めに後援しようぢやないかと云ふので、誘はれる儘に出かけて行つた。高等演藝館の一等席には知名の文士達が此處彼處に並んでゐた。赤いネクタイを結んだ舞臺監督の古山白夢が四五人の靑年と一緒に廊下で立話をしたり、長髮をかきあげながら忙しさうに樂屋の方へ行つたり、知合ひの文士のところに來て何か囁いたりした。

こんな新劇の試演や、各種の文壇的會合には、いつもその顏を見せてゐない事のない、普通グデサンと呼ばれてゐ

る馬鹿げて長い顔をした脊の高い男も來てゐた。彼はそこらをのそのそ歩き廻つてゐたが、樂屋から出て來た古山を見ると、

「オイ、古山！　どうしてかう遲いんだ、早くやれ！」とぶつきら棒な言ひ方で開幕の遲延をなじつた。

グデサンは純一や宏などのゐる方に來ると、

「オイ、西尾！　下條はどうした？」と言つて、いつもの不機嫌な子供のやうな苦り切つた顏をして妻楊子をつかひながら、前の空席に一寸腰をおろして、「下條は親父について伊太利へ行くと云ふが本當か？」と訊いた。

「そんな話もあるがまだ定つてはゐないやうだ……」と西尾宏も素ッ氣なく言葉を切つた。

「相良はまだ來んか？　俺がこんなに聲援してゐるのに、亭主の癖に何で早く來ねえんだ？　富枝も今日はウンと旨え處を見せなくちやいけねえぞ、いつ迄も仕出し風情ぢや話にならねえ……」

問題の女や女優などの事を此のグデサン程よく知つてゐる男は無いと云はれてゐた。彼はさうした女達の戸籍面に至るまで詳細を極めてゐた。けれども彼が女に迷つたと云ふ話は聞かない、彼にはたださうした探索や評判が享樂となつてゐるのである。かうした彼も紅顏の美少年だつた時分には、此間まで西尾宏の行つてゐた慶應義塾の秀才で、殊に數學の天才と呼ばれてゐた。ところが學校を出てから彼の餘りに潔癖な性格が禍ひして、遂ひに世と相容れず、今ではこんな直情徑行な文壇的遊民となつてゐるのである。從つて彼は非常な正義派で、卑劣な事をする文士や不品行な女優や、またとりわけ女子參政權運動をする某々女史などに對しては一歩も假借しない罵倒を浴びせかけた。いつもぞんざいな調子で、「おめえおめえ」と誰れにでも無遠慮に呼びかけるが、それが一種の治外法權となつてゐた。

幕はなかなか開かなかつた。樂屋の方から髮を長くしたやや蒼白い一人の青年がやつて來て、純一たちのゐる後の席にそつと腰をかけて、前にゐる純一の肩をそつと叩いた。純一が振返つて見ると、それが相良元雄であつた。

『ア、相良君！」と純一は言つて上半身をその方に向けて、微笑んでその古い友達を見た。

「久し振りですね、龍田君、其後どうしてゐました、お訪ねしようと思ひながらつい失禮してしまつた……」

二人は實に久しく會はなかつたのだ。純一も時々訪ねて行きたいと思ひながらも、今年になつてからついその折りがなかつたのだ。自分が上京した年、それは三年ほど前の秋であつた、元雄と同じ家で何ヶ月かゐた時の思出は、純一に取つて忘れ難いものであつた。その後元雄はだんだん妙に古い友達を避けるやうになつて、つひにはその住家さへも誰れも知らないやうな事もあつた。彼と富枝との同棲はいろんな噂の種となつてゐた。富枝には他に金のある旦那があつて、その爲めに元雄が煩悶してゐるとか、喧嘩が絶えないとか、たうとう別れてしまつたとかいろいろ噂はあつたが、それ等は何處迄本當だか分らなかつた。けれども富枝と一緒になつた爲めに、彼が藝術上に破産したと云ふ事は疑ひがなかつた。始めこそ富枝は彼の藝術的精進を嬉しさうに見てゐたが、生活が苦しくなるにつれて彼女はだんだん我儘になり、ふしだらになつて行つた。元雄は大抵の場合女の意志を尊重して、その望む通りにさせる方であつたので、彼女のだらしのない暮し方に引きずられて、まだ本當の繪を世に問ふ遑もないうちから、直ぐ金になるやうなつまらない職業的な繪を書く方に走つたのである。彼自身とても自分が危機に立つてゐる事はよく自覺してゐたけれども、自分ではどうする事も出來なかつた。今度こそ今度こそと本當の繪を描きかけるのではあつたが、いつも目前の仕事に妨げられて、幾度も中止してゐるうちに、いつとも知れず、最初の自信も裏切られ、眞劍な努力を回避するやうになり、それを恥ぢるやうな心持から、今では我れと我が心から敷居高く世の中を感じてゐるのであつた。けれども富枝は元雄とは反對に、困れば困る程間口を擴げて世の中を廣く淺く渡つて行かうとするやうな女であつた。金持の旦那があるといふ噂もこんな彼女の派手な暮し方から立つた噂である。一時は或る劇場の舞踊部に入つた事もあるし、長唄なども知つてゐるところから、彼女は此頃頻りに出來るいろんな劇團に入つてゐる女友達に勸められて、こ

れ迄も一二度舞臺に立つた事もある。然しこれ迄はほんの仕出し同然の端役に過ぎなかつたが、今度の出演にはかなりいい役が振られたのである。

「やあ」と西尾宏が純一と話してゐる元雄に聲をかけた、「どうしてこんなに遲かつた、ね？　僕等は富枝さんの爲めに花環でも上げようと言つてるんだよ……」

「いや、なに……」と元雄は苦笑した、その顏を走つた或る暗い影を純一は見逃さなかつた。何處となく窶れた元雄の顏には、富枝の事を言はれるのが、身の負け目と恥ぢてゐるやうな弱さが見られた。けれども宏は無頓着になほも大きな聲で言ひ續けた、

「富枝さんはなかなか人氣があるぢやないか、先刻も早稻田の學生がなかなか未來のあるヴィヴィッドな女優だなんて賞めてゐたがね、僕もさう思ふ、何しろ富枝さんは押出しは立派だし、聲もいいからな……」

こんな話をしてゐるところへ、樂屋の方から深澤久滿一が出て來て、友人達のところへ寄つた。

「諸君どうも有難う、これから僕の妙技をふるふから、みんな感心してしまふよ、なんしろクマイチ熊になるんだものな」

「クマイチ熊になるか、クマつた洒落はよせ、見つともない」と西尾宏が笑ひながら叫んだ。

「クマらん役を仰せ付かつて飽くまでクマります……」と深澤はなほもおどけた顏でぐるりと四方を見廻して、いそがしさうに行つてしまつた。

やがてクマイチ熊になるといふ『レモンの花の咲く國へ』といふ一幕物が愈々始まつた。それは古山白夢が新しい氣分劇を建設するといふ絕大の抱負のもとに書き下ろした自信の作で、北海道を舞臺にして、興行に失敗した一團の旅藝人がその旅先で離散する前後の葛藤に儚ない戀をからませて、幕切れに松前追分節を聞せかたりして、北海道の

秋の氣分を現はさうとしたものである。一座の花形である若い女藝人が矢張り一座の若い藝人と戀仲になつてゐるので、それを嫉む仲間の小細工からつひに座頭と喧嘩をして、とどのつまりは二人相携へてレモン花咲く南國へ行かうと停車場に向ふ、その出しなに彼女は長い間舞臺で遣つてゐた熊を抱いて、その頭を撫でて、

「これ熊や、おまへともうこれでお別れしなくちやならないよ、私はこれから吉さんと一緒にレモン花咲く國へ行くのだけれど、そこ迄どうしておまへを連れて行かれよう……」と言つて、痛ましげにその熊の黒い短い顏を引き寄せようとすると、眞黒な熊の扮裝をして棒立になつてゐる深澤久滿一事藝名久滿雄はさも悲しさうにあまた度び頷いたのである。さうして彼女に甘えるやうにその頸をすりつけたのである。見物は一齊に拍手して笑つた。

「なかなか熊も當節はハイカラだね」と方々で笑つてゐる。

「成程、彼が言つた通り妙技だ、舞臺のどの人間よりも氣がきいてゐる……」と言つて宏は笑つた。元雄までも笑つた。

かくして深澤久滿一が長年宿望してゐた、最初にしてしかも最後となつたその出演は、大好評のもとに終つたのである。

次の幕が開いて、今度は富枝の出演する飜譯劇『銀の箱』が始まつた。それはゴルスワアシイのもので、富裕な自由黨の代議士バアスヴィックの息子ジャックが馴染の娼婦の處で醉つぱらつて、女の紙入を捲き上げて無斷で持つて歸つて來て、戸口の開かないのにまごついてゐると、その邊を徘徊してゐた職を失つた馬丁のジョオンスが手傳つて表戸を開けてやつたので、ジャックは彼を食堂に呼び込んで酒を振舞つてやるうちつい寢込んでしまふ、その後で盛んに煙草をのんだり酒を飲み漁つたりしてゐたジョオンスが、歸り際に卓上にあつた主人の煙草入の銀の箱とジャックが取つて來た紙入とを無斷で借用して歸つた事があとで露顯して、ジョオンスは法律に問はれるが、ジャックの方の罪は父のバアス

ヴィックの運動によつてもみ消されてしまふといふ筋の、社會の不公平を諷した三幕物の問題劇で、第一幕にジョオンスの女房に扮して現れた富枝が、卓子のまはりに三四脚の椅子があつて、壁煖爐や柱時計や窓などの書割りの變に歪んでゐる貧弱な食堂の眞中で、住込みの女中と一緒にばたくさと掃除をしながら、女中から「今のうちにどうかしないとニツチもサツチも行かなくなりますよ」と忠告されて、その持前の疳高いよく透る聲で、

「エヱ、それはもう随分難儀もいたすのですよ、夜だつておちおち眠れやしないのですもの。どうかすると、私に他に男があるだらうのなんて、飛んでもない事を言ふんですよ。そんな事があつて堪るものですか。私なんぞに話しかける人なんかありやしませんよ。そんな事を勘ぐつてるもんですから、亂暴をして困るのですよ。もしか私が逃げ出しでもしようものなら、喉笛をかッ切つてやるなんて脅すのですもの……けど眞は決して惡い人ぢやありません、折にふれるとそれは優しい事も言つてくれますよ。」と言つた時、西尾宏は元雄の方を顧みて、

「亭主たるもの奈何の感がある？」と言つて笑つた、そのまはりにゐた江添や朝川などの連中も一度に元雄の方に視線を集中して、頻りににやにやした。

富枝のジョオンスの女房は二幕目の住居の場、三幕目の法廷の場に亙つて大に活躍した。純一達から少し離れた處に構へてゐたグデサンは、彼女の科白の少し長く續く時など、時々首を後へ引くやうにして、

「うまい！　そこだ！」などと大きく聲を懸けた。

幕合ひに朝川はゴルスワアシイの今の社會制度に對する激しい攻撃的態度を感嘆して、古山白夢の氣分劇をブルジョア青年のマスタアベエションだと罵倒した。純一は不完全な演出の中からもなほ惻々として訴へる『銀の箱』の作者の精神を感ずるにつけても、正義の上に社會を建て直して、かうした不合理を絶滅するにはどうしたらいいか、いかなる方法があり得るかと考へると、憂鬱な氣分に沈んでしまつた。

「二人の健康を祝して一杯飮まう」と云ふ案が西尾宏の口から出て、皆がそれに贊成した。芝居がはねてから、久彌一と宮枝とを眞中にして十人あまり一團となつて劇場附近の田原屋にどやどやと入つて行つた。レストオランのウェエタア達が眼を圓くしてゐるのもかまはず、銘々ががやがや言ひながら二つ三つの卓子を目白押しに圍んで、酒や麥酒やウヰスキイを命じた。

「もつと何か持つて來給へ、今日はうんと奢るんだから……」などと言つて皆の樣子が非常に浮立つてゐるのが興ありげに、先刻から隣の卓子で一人でちびりちびり酒を飮んでゐた一人の男が、便所から歸つて來ながら、

「なかなかお盛んですな、芝居歸りですか？」

「さうです、この俳優の成功を祝してゐる次第です」と江添忠治が克明に答へた。

その男は狡るさうな眼付をして、深澤の色の黑い四角張つた顏を見てにやりとした。

「君、まあ一つどうです」と得意さうな深澤はその男に杯をさした。そして直ぐにその場の會話の中にその男は巧みに調子を合せた。

「僕はかういふ者ですが、今後どうぞ宜敷く……」と江添忠治は懷から大型の名刺を出してその男に渡した。すると恐縮した樣子で、

「あ、僕は名刺を持ちませんが、舟井國之助と云つて島根縣人です、今以てうだつの上らない一介の貧書生です」

「君は島根縣ですか？」と向ひの卓にゐた西尾宏が訊いた、「島根縣の何處です？」

「松江です」

「僕も松江の人間と云つてもいい位だが……」と言つて宏は舟井をぢつと見た。

「君は……」と舟井が訊いた。

「僕は西尾宏と云ふのです」

「あ、西尾君、では西尾惣兵衞さんの御子息でも……さうですか……あなたの兄さんと僕とは松江中學で同級だつたんです、これは奇遇ですな」と舟井國之助は物馴れた樣子で西尾宏の方へ杯を持つて行つた。

「一つ受けて下さい、お近づきのしるしです」

彼は三十前後にも見える、實際はもつと若いかも知れない、妙に黒いねばねばしたやうな感じのする男で、長い顏の左右に氣味惡く垂れ下つたもみあげの感じがそんなに思はせるのかも知れなかつた。苦勞人らしいところもあり、また何處か我儘らしいところがあつて、その育ちのいい事は誰れにでも分つたが、純一には餘りいい第一印象は與へなかつた。何處か薄氣味の惡いやうな一種のすばしこい人間に見えたのである。

富枝は血色のいい顏をして、皆の杯を片つぱしからぐいぐいと飮んでゐた。皆に蓮葉に喋りながら、ちらちらと元雄の方を見て「いいのよ」と言つたやうな笑ひ方をした。

「女優さんに一つ」と舟井國之助が杯を富枝にさした。

「これはどうも有難う、私からも一つ」と富枝がぬからず獻酬してゐる樣子を、元雄は苦り切つた樣子で見てゐた。

「御良人にも一つ」と舟井が江添から耳打せられて急いで杯をさした。

元雄と富枝とは直ぐ歸つて行つた。それと一緒に純一もレストオランを出た。後には舟井國之助を中心にして一層飮んでゐる樣子であつた。

八

不圖した事から知合ひになつた舟井國之助は、其後繁々と西尾宏の書齋に出入りするやうになつた。また江添や朝

川などの連中とも苦もなく親友になつて、よく連立つて歩くやうになつた。彼のやうな人間はどんな社會にも一人や二人は必ずあるものである「一寸燐寸を拜借……」とか、「一寸お訊ねしたいのですが……」などと、公園や劇場などで見も知らない人に口を切つて、瞬く間に相手の氣持を手に入れてしまふ、一度かうして知合ひになつたら、彼は極めて圓滑にいつともなく相手の生活の中に蚯蚓のやうに這入り込んで行く。ところがかう云ふ人物はある別種の人物――例へば西尾宏のやうな――にはとりわけ必要缺くべからざる友人となつてしまふのである。純一はなぜだか舟井を好きにはなれなかつた、けれども彼は純一に取つても或る意味での必要な友人となつてしまつた。

舟井國之助は最初出會つた日に自ら紹介したやうに、松江の生れで、西尾宏の兄とは遊び友達であつた。松江市屈指の大呉服店の次男に生れた彼は中學生時代から既に遊蕩の味を覺え、和田見や新地で浮れ廻つた揚句、たうとう勘當同樣になり、上京してからは一時親戚の榎木法學博士の家に身を寄せたが、其處でも不都合な事があつて出入を差し止められた、其後彼は例の彼一流の遣り方で新しい仲間をそれからそれへと造つて行つて、今ではかなり遊びながらも相當には遣つてゐる。彼は榎木博士の家に食客をしてゐた時代習ひ覺えた速記術によつて、その方面に職を求めて、今では『雄辯世界』の速記者となつてゐた。この雜誌はもともと某大學の小使だつた社主が學生演説會の世話をしてゐるうちに、かうした演説の速記で雜誌をこしらへたら、目新しくもあるし、またどんな名士のだつてそれに相當した原稿料を出さなくてすむし、第一學生界の新機運に投ずるに違ひないと考へて思ひ立つた企てで、それが見事當つて今では一萬以上も出ると云はれてゐた。舟井國之助は何處其處に演説があると云ふと、直ぐ馳け付けて、それを速記して歸り、政治界や學界の名士のも無名の一學生のも等しなみの一枚何十錢かの原稿料を貰ふべく、それを原稿紙に書き直して社に持つて行く。其他にも彼はいろいろ內職をやつてゐた。時には三百代言じみた事もしたり、廣告を取り歩いたりもするのであつた。若し彼と近付きになつた者が不圖氣が付いた時分には、もう彼の爲めにさんざ

ん利用せられた後である。

舟井國之助が西尾宏に容易に容れられるところとなつたのは、なほ他にももつと特別な理由があつた。西尾宏はその時丁度彼がいつでもその相棒にして連れ立つて歩き廻つてゐたかの下條潔の父の下條康彦が、今度伊太利大使として羅馬に赴任する事になつて、一家を擧げて日本を去つた爲め、急に寂寞を極めてゐたからである。

潔が羅馬へ行く事を喜んだのは言ふ迄もない。彼はいつも春のやうに晴れやかに輝いた南歐の青空の下で、そのカピトルのあの僅かな面積の間に起つた歷史的事實だけでも、遙かに露西亞全土のそれにも勝ると云はれるあの永遠の都で、親しくミケランジェロ・ブォナロッチやラファエロ・サンチョの傑作を鑑賞し、サン・ピエトロの大寺院やパンテオンの大建築に人間の力を驚嘆し、或ひはまた謝肉祭の喜びに加はり、或ひはティボリ、アルバノ、フラスカチに行吟しつつ、遠くダンテから始めて悠々文藝復興期の徹底した研究に耽り、そのうちに纏つた論文を書いて見たいと嬉しさうに話してゐた。それであるから彼はその友人の寂寥に對して同情を寄せる餘裕さへ持たなかつたのである。西尾宏が自分の妹に寄せてゐる感情を十分知つてゐる彼ではあつたが、わざとその事には一つも觸れないやうな別れ方をして、君も早く洋行するといいね、むかうで逢つたら面白からうと言つたきりで行つてしまつた。『新任伊太利大使下條氏の家庭』と云ふやうな見出しで、都下の各新聞紙に載つた下條家の寫眞には、白い洋裝をした愛孃紅絹子の美しい姿が繪のやうであつた。

西尾宏はその後純一に逢つた時から語つた、

「ニイチエは距離の哀感と云ふ事を言つてるがね、これはニイチエの意味とは違ふかも知らんが、人生に於いても藝術に於いても、人の心を動かしチャアムする爲めには、この距離が何よりも必要だと僕は思ふ、時間の上でも空間の上でも、更にまた二人の置かれた地位や境遇の上でも。遂ひに恢復する事の出來ないもの、到底手に入れる事の出來

ないもの、それはどんなに貴重なものだらう、そしてさうした充たされる事のない憧憬を思ふ時、僕は何かの雜誌で讀んだ事のある獨逸の詩人ヘルデルリンや、『魂は希臘の國を求め慕ひつつ日ねもす川の岸にすわる』と云ふイフィゲニイの言葉を思ひ出す。ヘルデルリンが失はれたる希臘の爲めに嘆き、高い地位にある人妻に注いだ宗教的な禮拜の心こそ、地上から天上を望む人間の渇仰ではないか、ここに純乎たる浪漫主義者の眞面目がある。僕は或る浪漫主義者の書いた、何處かで一度見たばかりで二度とめぐり合ふ事の出來なかつた少女を一生求めて過したと云ふ主人公の心持に同感を寄せずにはゐられない……」と宏は言つたが、直ぐまた例の皮肉な調子になつて、「けれどもそのめぐり合はなかつたのは彼の幸福さ、ベアトリチェは永遠に距離の面紗をかけて置かなきやならん……」と投げ出すやうに言つて笑つた。

宏はその前から學校の方が厭やになつて廢めてしまつて、退屈な懶惰な日を送つてゐたので、かうした孤獨感によつてとりわけ放縱になつて、不規則な受用の生活に浸つた。それには折よく知合ひになつた兄友一郎の遊び友達舟井國之助は持つて來いの水先案内人であつた。二人は連れ立つて濱町や蠣殼町の陋巷を漁つたり、遠く横濱の方へ露西亞人の賣笑婦を買ひに行つたりした、これまで兄とは違つて藝者などには餘り興味を持つてゐなかつた彼が、淺草藝者に高價な人形を買つて遣つたり、女義太夫を追ひ廻したりした。

「西尾君は此頃猛烈な發展振りですね、あれでよく負傷しないもんだと感心します、矢張り性でせうな」と江添忠治は或時嘆息した事があつた。

それは丁度夏の初めであつた。舟井國之助が或日純一を社に訪ねて來て、かういふ話を持ち出した。

「實はね君」と言つて彼は純一の興味をそそるやうに話し出した、「自社の社主の友人で株で儲けた男があつてね、駒込千駄木町に自分の好みで建てた家があるんだ、ところが主人公が今ぢやその家がいやになつて、中郷の方に新しい

家を建てたので、そちらへ引越して行けばあとの家は貸してもいいのださうだ。畫室風の洋館が五間ほどの平家の上に載つかつたやうにこさへてあつて、門もあり庭もありなかなか洒落れた家だ。僕が見て來たんだ。ところで自社の大將が言ふには、ああいふ家を四五人聯合して借りて理想的な藝術家合宿所と云ふやうなものをこしらへてはどうかと云ふ話なんだ。ところで都合のいい事には、僕の知合ひに未亡人があつて――勿論娘もあるのだが――その婦人が炊事萬端引き受けて遣つてくれると云ふ話だ。昨夜西尾君に逢つてその話をしたら、大將すつかり乘氣になつて、それは面白い、一つ遣らうぢやないかと大贊成なんだ。ところで收容人員はまづ三四人なんだ、數へて見ると西尾宏に僕、それに君、あとの一人は深澤久滿一でも誰れでもいいと言ふ譯で、朝川や江添はどうだと僕が言つたら西尾宏が曰く、彼等はいけない、結局此方の背負込みになつてしまふから加せちややるまいと一言の下に排斥さ」と言つて舟井はさうした侮蔑を樂しむやうに笑つた。

「是非君に贊成して貰ひたい、どうかね、西尾君が特に君にはさう言つてゐたよ」

「僕も何處かへ引越したいと思つてはゐるのだが……」

「それぢや丁度いい、君に持つて來いのいい四疊半があるよ、押入も付いてゐて一寸茶座敷風の感じのいい部屋だ、六疊が二間あるからそれは僕とも一人とで使ふ、あと二間は茶の間と未亡人親子の居間だ、二階の洋館は西尾宏が占領するのは言ふまでもない、その代り家賃の半分は彼が持つと言つてゐる。こんな貸間生活で自炊みたいな事をするよりかどんなに便利で自由か知れない、皆が集つてどんなに遲くまで談論風發に耽つても苦情言ふものなんぞありはしない。我々は自由でなくちやならんから、それには第一に生活の改善さ、炊事をしてくれる小母さんもなかなか話せるから愉快に定つてゐる、是非定めたまへ、西尾宏の頭ではもう君は加入者として定まつてゐるやうだよ」と舟井は國之助はその持前の勸め上手な滑かな辯舌を振つた。

純一は取立ててそれを拒むと云ふやうな氣持でもなかつた。けれども直ぐには確答しないで、その儘別れた。

其後西尾宏からの手紙が來て、是非にと云ふ事であつた。その手紙には「親しい者同志一緒になると嫌やな事が多いと言ふが、お互ひの缺點を知り合ふのもまた面白いぢやないか」といふやうな意味の事が書き添へてあつた。

それから間もなく西尾宏と舟井國之助との連名で、昨日引越して來たから君も是非來給へと云つて來た。兎に角家を見て來ようと思つて、その日の晝過ぎ純一は千駄木へ訪ねて行つた。話に聞いてゐた通りペンキ塗りの二階がかなり大きい平家の上に半分頭を擡げてゐるやうな家で、まだ新しい門が靜かな通りに向いてゐた。純一がここだなと思つて一寸立止つてゐると、中から一人の娘が風呂敷を持つて出て來た。少し薄いかと思はれる髮を控へ目な廂にして、根の高い束髮に結つてゐた、ほつそりとした顏付で、色は白かつたが、日當りの惡いところに咲く花のやうに寂しさうに見えた。

「ここへ昨日二人一緒に越して來た筈ですが……」と純一は自分でも間の惡いやうな問ひ方をした。すると娘は（アア、此の人だ）と云つたやうな氣持を眼付に見せながら、

「西尾さん達ですか？」と問ひ返した。

「その西尾です、ゐますでせうか？」

「おゐでになりますわ」と言つて、彼女はそれきり行つてしまふのかと思つてゐると、

「どうぞ此方へ……」と言つて先に立つて門内に引返した。そして玄關脇の枝折戸を開いて、向うの方へ行き、丁度二階の窓の下あたりに行つて心持仰向いて、

「お客樣ですよ、お客樣ですよ」と言つた。何だか小鳥が啼くやうな可憐な感じを純一に與へた。開け放しになつた二階の窓から西尾宏が鬣のやうに髮を後に立てたその隼のやうな感じのする鋭い顏を突出して、

「やア君か、上り給へ、そこからでいいんだ……多ちやん、何か旨い物を買つて來て下さい」

「はい」とその娘は答へて、純一に親切な眼付を注ぎながら、「そこの階段でございますわ」と敎へてからお辭儀をして出て行つた。

　庭に面した緣側の片方に彼女が敎へた通り廣い階段が見えた。それを上つて行くと、ぱツと明るい十疊位の、三方とも幅廣の窓の付いてゐる部屋が丁度芝居の舞臺面のやうに見えた。靑磁色のカアテンが絕えず風に飜つてゐて、壁際にはまだ揭げてゐない額が二三枚無雜作に立てかけられてゐた。宏は書物を餘り讀む方ではなかつたが、それでもそこらに積重ねられてゐる洋書や新刊の書物などはかなり澤山に見えた。今迄彼が例のやうに寢そべつて煙草をふかしながら、手當り次第の書物を拾ひ讀みでもしてゐたことは煙草盆や書物の位置で分つた。

「なかなかいい部屋だらう、まるでアンドレエフの『星の世界へ』の天文臺見たいぢやないか。何しろここからは夜になると、靑白い月が僕の久遠の戀人のやうに悲しげに訪れて來て、寢ながら空を見てゐると、自分の魂がその澤山の星の中にまぎれ込んで行くやうな氣がする。昨夜なんか一夜かうしてここに坐りながら、白銀のやうに降りかかる月の光を浴びながら、僕は丁度妖精の國に行つたやうな氣になつて、月を相手に獨白をやつてゐたんだ。兎に角僕はすつかりこの部屋が氣に入つてしまつた……」と宏は心に浮ぶが儘をどんな心持からも遮られない自由さで、詩のやうな美しい言葉に出すのであつたが、そんな時彼の顏は一番生々として見えた。

「然し、この下の部屋もなかなかいいんだよ、今に下へも行つて見ようが、その部屋はこの部屋とはまた違つた意味でいいんだ。靜かで落着いてゐて少し暗い、日本的な閑寂さがあるとでも言はうかな、さういふ意味であの部屋は君にいい居心地を與へるよ」

「さうだつてね、僕も舟井君からその部屋のいい事を隨分聞かせられた、屹度僕の氣にも入るだらう」

「それは靜かで氣分が落着くよ、ただね、隣の六疊に女がゐるので少し邪魔になるかも知れんがね、あんまりうるさかつたら叱つてやるさ」と言つて宏は微笑した、「だが、俺や舟井と違つて君は多分小母さんのペットになるだらうよ、ところが舟井の奴なかなか執心なんだから、さうなると飛んだ鞘當が始まつてしまふ。尤もその方が面白いから願はくはさうありたいもんだ……小母さんももう四十幾つださうだが、一寸見には三十四五だ、娘に劣らず派手づくりしてるところを見ると、なかなか未亡人とは言ひ條、一生一人を立て通す氣なものか……」と宏は純一をからかひ顏をした。

二人がも少し眞面目な話の方へ移つた時分、先刻の娘が上つて來た。チョコレエトを入れた菓子盆とバナナを盛り上げた西洋皿とを二人の間に置いてゐると、

「朝川はどうしたらうな、僕はチョコレエトを見ると朝川を思ひ出すんだ、奴はすわると直ぐ袂からチョコレエトを五つ六つ撮み出しては一つどうですと勸める、そしてはナポレオンはチョコレエトが好きでチョコレエトをいつも食つてゐたからあんなに戰爭に勝つたんだなどと出鱈目を言ふんだ」と宏は言つて、立去らうとしてゐた冬子が思はずくすくす笑ふと、「冬ちやんも朝川と同じ仲間の食ひしんぼうだから共鳴するでせうね……一體あの男はその體格を見てもまだ大人になり切つてゐないが、その所爲か知らんがいつも袂に何かしら珍らしい菓子を入れてゐて、それを嚙りながらサンデイカリズムだとかアナアキズムだとか言つて歩いてゐるから面白いよ。あの男のサンデイカリズムもまあせいぜいそれ位な程度のものさ、バアナアド・ショオのチョコレエト・ソルジヤアに倣つて言へば、朝川なんぞはさしづめチョコレエト・ソシアリストかね」

冬子が階段を下りて行かうとした時、宏は急に思ひ出したやうに、

「アア、一寸待つて……」と呼びとめた。冬子がそのほそぼそした白い小さな顏を此方に見せると、

「あの下の四疊半へこの人を連れて行つて上げて下さい、部屋を見に來てるんだからね」

多子は一寸赧い顔をして頷いて、純一の方を促すやうに見た。

「多ちやんのお隣りの部屋にはかう云ふおとなしい人がいいんだ」と下りて行く二人の後から宏が聲を送つた。

純一の眼にはその小娘の、紅い半襟のまつはつてゐる細い頸筋のほんのり蒼みがかつた匂やかな色が、いかにも純潔そのものの象徴を見るやうで、何だかいぢらしいやうな悲しいやうな氣がした。門のところで初めて見た時からこの内氣らしい小さな娘が、さして美しくもないし取り立てて怜悧らしくも見えないのに、何だかこの東京で初めてこんな感じのいい少女に出逢つたやうで何となく心を惹かれた。純一はその部屋をまだ見ないうちに、もう定めてしまつたのであつた。

「隣の部屋で話し聲がしたつて、笑ひ聲がしたつて、この娘とこの娘の母親とのそれならば、氣になるどころか、反つて自分の生活の慰めになるに違ひない、何だか妹のやうな氣がして可愛いから……」から考へた時純一は何だか自分でも氣が付くほど輕快な氣分になつてゐた。

多子は階段を下りて緣側づたひに一番端しの障子を開いて、ちらと此方に振り返つて純一を待つてゐた。純一が部屋の中に入ると、甲斐々々しく窓の障子を開いて見せたり、押入を開けて見せたりした。丁度その部屋に派手な明石縮の單衣物が、今衽でも付けてしまつたところと見えて、一寸疊んでその上に緋縮緬の小切れで縫つた小猿を一匹くくり付けた鋏と物差とを押へに置いてあつた。純一がそれに目を付けると、多子は、

「あの、私が一寸の間ここで御縫物してゐますの、母さんがお喋りなものですからこの部屋で私一人でゐたかつたのです、この部屋は私も本當に好きでございます、御都合がよかつたら越していらつしやいまし」と言つて、さも自分が出過ぎた事でも言つたかのやうに赧らんで工合が惡さうであつた。

「いや、決して……」と純一は思はず言つて同じやうに當惑した。彼は彼女がこの部屋でかうして縫物をしてゐた事を決して心配しなくていい（その癖彼はまだこの部屋の主人公ではないのだ）と言ふつもりで言つた言葉が、後を口の中に呑み込んでしまつた爲め、決して引越して來ないと云つた風に冬子に取られたのではないかと思つたのだ。

「本當に靜かでいい部屋だ」と純一は照れたやうに獨り言を言つた。

「私も西尾さんの部屋よりか此方が好きですわ、西尾さんの部屋もいい事はいいんですけれど、あんまり明る過ぎて何だか晴れがましいやうで……」

「晴れがましい……」と純一は彼女の言葉をその儘心の中に繰返して、その次ぎの瞬間に、眼を此方に向けて微笑んでゐる、何處かまだ子供じみた肩付きの薄手な冬子を見て、突然ある豫感が閃いた。今迄うつかり忘れてゐた本當に重大な事を急に心に喚び覺まされた人間のやうに彼の心は緊張した。

「僕……明日引越して來ます」と彼は言つたが、その聲は低かつたけれどはつきりとしてゐた。

「西尾さんは、家の母さんがそれは大切にしますのよ、なぜだか知りませんけども……でも西尾さんは面白い方ね、私あの方のお話し聞いてるといつも笑はずにはゐられないのですよ、どうしてあんなに私を笑はせる事が上手なんでせう。あなたとは古くからのお友達ですつてね、私いろんな事を聞きましたわ、大變御勉強家ですつて、僕なんかとてもかなはないつて言つてゐましたわ……」と冬子は無口らしいのにも似合はず、片手を障子の棧にかけて純一の方に横顏を見せながら話した。純一はもつとその次ぎがあるつもりでゐると、それきりで冬子は默つてしまつた。

「僕なんかさう勉强家ぢやありません、けれどここへ來たら屹度勉强がよく出來るでせう……」

「…………」

冬子が何か言はうとした時に、次ぎの部屋まで誰れかどしどしと入つて來た樣子なので、急に口を噤んで、ひたと

眼を純一に着けながら耳を澄ました。

「あア、暑い、暑い……冬ちやん、小母さんは何處へ行つたんだい？　土產を買つて歸つたのにゐないなんてあるか！」と舟井が矢鱈に話しかけながら間の襖を開いて、眞向うに彼が見出した純一と視線が合ふと、ひどく面喰つた樣子で、

「何だ、君來てゐたのか！」と言つて、忽ち例の調子になつて、

「冬ちやんも默つてここに立つてるなんて事があるか、氣が利かないな、早くお茶の支度でもしな……そんな間拔けぢや誰れもお嫁に貰ひ手はないよ」

「私お嫁になんか行かないからいいのよ、今この部屋へ御案內してお目にかけてるところなのよ、この方が……」と言ひさして冬子は默つてしまつて、向うへ行つた。

純一は舟井と一緖に二階へ上つて、そこで三人で食べたり話したりしてゐると、下町へ用達しに行つてゐたといふ小母さんが歸つて來て、冬子に手傳はせて三人の夕飯を搬んで來た。

「小母さん、隨分待たせたね、なに浮氣してたんだ？」と舟井がしやアしやアした樣子でいきなり言つた。

「浮氣どころですか、下町まで行くと生憎留守でひどい目に遭ひましたよ、これはいらつしやいまし」と小母さんは純一に聲をかけた、「初めましてどうぞよろしく、是非引越していらつしやいまし」

舟井と小母さんとは餘程親しい間柄と見えて、時とするとその目遣ひなどがすつかり夫婦のそれのやうで、これ迄の二人の交渉がそこに覗かれるやうであつた。

冬子は直ぐに下へ行つてしまつた。小母さんが三人の給仕をして、さらさらとこだはりのない話し振りで三人に應待した。

「此方は大變おとなしい方ですね、舟井さんや西尾さんのお友達とは思へない位ですね、こんなおとなしい人を墮落の道連れにしちやいけません。本當にお二人とは此處へ入らしつても別々になさいましよ」

「そりやいかん、そんな餘計な入智惠をしちやいかんね、第一それが女の淺智惠さ、この人はあんまりおとなし過ぎて何にも知らんから、これから僕が親友のよしみで大いに開發の勞を取る約束を定めたんだ、ねえ龍田君、さうだらう」

「舟井君に開發されなくつたつて龍田君はこれで何でも知つてるんだ、ただ考へ深い男だから僕等のやうに雜作なくしないばつかりだ、おとなしく見えたつて、實はなかなか隅に置けないんだ」

「まあ、さうでございますか」と小母さんは輕い調子でそれを受けて、

「兎に角私はおとなしい方が好きです、西尾さんのやうに我儘坊ちやんでは困るし、舟井さんのやうにすれッからしでは尙更ら困りものですからね」

三味線などを時々取出して彈くと云ふ小母さんは、いかにもさうらしく旨味のある聲をしてゐた。西尾宏をいかにもちやほやしてゐる樣子が見えて、それが時々純一に不快な感じを與へた。けれども彼は明日越して來るからと約束をしてその家を出た。

九

純一が引越して來てから一月經つた。最初はもう一人二人同宿者がある筈であつたが、宏が三人だけでいいだらうと言ひ出したのでその儘になつて、まだ誰れも新しく入つて來なかつた。けれども西尾宏の書齋には常に來客が絕えなかつた。朝川も來た、江添も來た、殊に朝川は時々二三日も泊つて行く事が多かつた。彼はいつも、

「一寸失敬します」と言つては部屋の一隅でよく自分で鹽化アドリナリンの注射をした。
「そんなに始終注射ばかりしてゐるといけないぢやないか」と誰れかが言ふと、
「いけないとは分つてゐても餘り苦しくなると注射せずにはゐられないから仕方がない、兎に角直ぐ癒るからそれだけでも止められないのさ」と寂しさうに苦笑するのであつた。或夜、彼は雨の中をやつて來て、暫く話してゐるうちに、急に發病した、その急激な發作に襲はれた彼は、疊に突伏してへたばつた儘自分の手で喉をしつかりと押へながら、殆んど間斷のない乾いた喘ぎと共に、苦痛に歪む肩を輾轉せしめるのであつた。宏を初め居合せた友人達は皆この見るに堪へない病苦の狀に話の繼穗を失つて、沈默してしまつた。
「醫者を呼ばうか？」と宏が訊いた。
「いや……いいんだ……注射したいんだが……今丁度藥が無いから……」彼のからう切れ切れに答へる聲が疊にしがみ着いてゐる空隙から洩れた。彼の襟首には汗の玉が浮んで、顳顬はびくびくしてゐた。
純一が下へおりて冬子に賴んで藥を貰つて來て貰つた。冬子は二階に上つて來て、純一に手傳つて貰つて朝川を下へ連れて下りて、玄關脇の六疊に彼を寢かせるまでいろいろとまめやかに働いた。ふだんから朝川は皆から困り者にはされてゐたが、こんな發作に食ひ着かれて喘ぐやうな生涯を送るべく運命づけられた彼の不幸を、かうして目のあたり見せつけられては、宏でさへも、
「まるで拷問に遭つてるやうだな、あの樣子を見ると彼の不良行爲も咎める氣にはなれん」と言つた位である。
深澤久滿一も屢々來た。彼はいつかの出演で好評を博して以來、宏ばかりでなく仲間一同から「日本一の能役者だ」などと言つてひやかされると、自分も一緒に笑つて、
「今に見てをれ、今度こそ人間になつて旨くやつて見せるから……」と、少し上向いた鼻からスッと煙を吐いて得意

がつてゐたが、次ぎ興行の出し物に振り當てられた役が人間は人間でも、前の熊ほどの意味もない仕出しに過ぎなかつたので、業を煮やして新劇協會を脫會して、自暴酒を飮んで、その勢ひで新宿で豪遊して馬を曳いて歸つたが、それ以來すつかり悄氣返つて、

「もう役者は眞平だ。これからは眞面目にイブセンを硏究して劇作家になる」と言つてゐた。

深澤の外にもまだ澤山さうした文學靑年が宏のところに集つて來ては、つまらぬ議論や無駄話に一日を空費するので、純一は宏の部屋には餘り行かないやうにした。けれども彼は時々その座に引張り出された。

純一は每日出勤して人中で働くのが堪へ難くなつたので、引越しと同時にこれ迄勤めてゐた社を廢めて、家の中にゐて出來る仕事を求めた。それ迄もいろいろと純一の爲めに便宜を圖つてゐた舟井は、早速彼に取つて最も都合のいい仕事を取つて來た。純一は二年餘りの熱心な勉强によつて今では一通り佛蘭西語に通じてゐたので、舟井の取つて來た佛蘭西小說の下譯などをした。時々分らない處を林田先生や大菅左門に質問に行つた。

「君、何か書いたものは無いか？」と舟井は時々純一にかう言つて、純一が嫌やになつてほつてある原稿を探し出しては、何處かへ持つて行く。四五日してから舟井は、

「この間の原稿は××へ賣つて來た、稿料五圓さ、一つ飮まうぢやないか」と言つて近所のレストオランなどへ純一を連れ出す事もあつたが、大抵はその原稿の載つた雜誌が——それは皆一般の人の餘り知らない何かの機關雜誌と云つたやうなものであつたが——純一のところへ送つて來るだけのことであつた。

舟井國之助は或日ひどく景氣のいい樣子で歸つて來て、純一に、

「君、一つ今日あたり僕の荷物を取つて來てくれないか」と言ひ出した。

「君の荷物？　何處へ？」

「僕が元ゐた下宿へさ、すつかり置いてあるんだ、荷物なんか大して必要もないんだけれど……」
實際、舟井國之助は荷物なんか一つも有つてゐなかつた。引越したと言つても、彼は商賣道具の鉛筆や薄い洋紙を綴ぢた速記帳などを包んだ風呂敷包み一つで遣つて來たので、蒲團なども小母さんの家のを借りてゐた。速記を淸書する時には、よく西尾宏の机でやつてゐた。
「君はうんと澤山机を有つてゐる癖に何だつて俺の机をさう使ふんだ」と宏に時々小言を食つた。
「ねえ、行つて來てくれ給へ、僕が行つてもいいけれど、君の方が面倒がなくていいんだ。なに、わけは無いんだ、これだけの金を渡すから荷物をよこしてくれと言ひさへすれば、むかうは兎に角半金にしろ現ナマの方が有難いから承知するさ。ねえ、賴むよ」
「そんなことは君の方が適任だよ、僕はそんな交渉は下手だからいやだ」と純一は笑ひながら斷つた。
「まあそんな事言はないで行つて來てくれ給へ、賴むよ、君はなかなか友情に厚いと僕は昔から見込んでゐるんだ。若し君が行つてくれなければ、僕はすつかり背負投げを食ふわけだ、君がそんな友情のない男の筈はない、ねえ行つて來てくれ給へ」
舟井國之助はどうでも純一を行かせずには置かない樣子であつた。純一はその日少し長い散文を書きかけてゐたので、一層そんな使者を勤める事が馬鹿々々しかつた。けれどもこれ迄の舟井との關係からさう無下にはね付けてしまふ譯にも行かなかつた。つひにうるさくなつて、彼の賴みを引き受けてしまつた。
その素人下宿は牛込五軒町で、指物師の家であつた。純一が行くと、店の仕事場には二三人の小僧を相手に主人が仕事をしてゐた。みんな怪訝さうに此方を見てゐるところで、純一はおかみさんと逢つて舟井の言つた通りに荷物の引渡しを請求した。

「私もあの舟井さんにはすつかり引つかかつてしまひました」とそのおかみさんはキンキンした聲で早口にまくし立てた、「あんまりお口が旨いので手前どもぢやすつかり信用してましたところが、間代は一向お拂ひ下さらんし、時々手前どもで御用立てしたものでもそれッきりですし、電燈代、新聞代のお立替もお拂ひ下さらんし、あんなひどい人は私もこれ迄逢つた事がありません。お見かけしたところ働きのないお方でもありませんのに、何だつて手前どものやうなしがない暮しをしてゐる者をお虐めにならうツてんです」

「別に虐めるつもりでもないでせうが……」と純一はあやふやに言つた。

「つまりはさう云ふ事になるんぢやありませんか、たつたそれツぽちの金で今荷物をお渡ししてしまへば、もうそれッきりになるのは知れた事です、お荷物と云つたところで、蒲團と机ぐらゐなものですけれど、それだつて手前どもではすつかりお拂ひ下さらなければお手渡しは出來ません」

こんな風におかみさんから頭ごなしにきめ付けられると、純一は宛かも自分がその當人でもあるやうな氣がして、殊におかみさんの方に十分の理のある事を承知してゐるだけに、返す言葉もなく、こんな役目を引受けた自分の弱さが顧られて、一層苦しい氣持になつた。

「それぢや歸つてそんなやうに舟井君に言ひませう」と、たうとう純一は言つて、手に持つてゐた帽子をかぶつた。

「今更そんな事言つたつて仕方があるめえ」と店にゐた親方がおかみさんの方に眼をやつて言ひ出した、「手前が初め信用したのが惡いんだ、今更文句を言つたところで始まらねえ、半金でもいいからその金を貰つてすつかり渡してしまひな、さつぱりしていいや！」

「おまへさんさへそれでいいなら渡すことにしようよ、繁公！　おまへ二階へ行つて舟井さんのものをすつかり此處へ擔ぎ下しておくれ」

「へい！」と小僧は愈々自分の出る番だと云つたやうに威勢のいい返事をして二階へ上つて行き、間もなく一閑張りの机を頭の上にかぶつて下りて來た、その次ぎには脚と脚との間に板を踏ませた新しい机を同じやうに冠つて下りて來た、その次ぎにはもつと古い、眞四角な机を擔ぎ下して來た、下して來るのも下して來るのも机であつた。

「まだ机があるんです、驚いた机大盡ですから……」と繁公は純一に言つてにやりと笑つた。

「本當に舟井さんは机の六つも有つてゐるんですよ、私もあの方が越してお出でになつた時に机があんまり澤山なので驚いちやつたんですよ。屹度何ですよ、これ迄何度もこの筆法で引越しばつかりして行つたもんだから、その度んびに机を買つて溜つちやつたんでせうよ」

「何だつて賣つちまはないんだらう」ともう一人の小僧が同じやうに面白さうに言つた。

「外に荷物らしい荷物も無いんだから、机でも澤山あれば信用がついていいぢやないか」と繁公が二階に行きながらその方に振返つて言つた。

「何なら家に一番いい机を殘しといて貰はうか」と親方が冗談のやうに言つたが、

「およしよ、そんな机なんか要るものか」とおかみさんは取合はなかつた。

純一が近所の運送屋から荷車を呼んで來て、その澤山の机と蒲團と輕い支那鞄などを積込ませてゐると、先刻から頻りに此方を注意してゐた筋向ひの煙草屋のおばあさんが慌しく下駄を突つかけて走つて來て、

「舟井さんのお引越しですか？」と純一に問ひかけた、「舟井さんは何處にゐらつしやるんですか？」

「何處つて……ゐるのは本郷ですが、何か用ですか？」

「用つて申す程ぢやないんですが、手前では舟井さんに六圓ほど煙草代が頂いてないんです、お引越しならば頂き度いものですが……」

「煙草代がそんなにあつたんですか、ちつとも聞きませんでした」

「それぱつかりぢやありません、いつか一寸急に要るから貸してくれ直ぐ返すからと言つて三圓ほどお立替したのもあるんです、今頃かなくつちや手前どもの方から貰ひに行くといふのも大變ですから、是非お願ひします」

純一はすつかり當惑してしまつた。舟井から貰つた金は既にすつかり拂つてしまつたし、彼自身とても十圓と纒つた金は有つてゐなかつた。

「まああんたも舟井さんのお友達だから、こんな事も聞いて下さい。煙草なんてものは一箱賣つたところで、手前どもの利得と云つては、ほんの何程にもなりやしません、それを六圓からも借り倒されてしまふと、手前どもでは元も子もありやしません、そんなひどい話はありやしません。手前どもだつて道樂でやつてゐる商賣ぢやありませんから、そんなにされると本當に困つてしまふんです……」こんな風にくどくどとおばあさんは何時迄も泣言を並べるので、すつかり荷積みをすました運送屋が純一の顏を見て、

「ぢや私は一足さきへ出ませう、あんたは電車だから……」と言つてにやりとした。それが純一には、さも自分がこの婆さんから自分自身の借金の催促を受けてゐるのに同情されたやうな氣がして厭やな氣がした。それに通行人に見返られるのも厭やだし、おばあさんが氣の毒にもなつて、たうとう自分の蟇口から、神田の三才社へ行つて原書を買ふつもりでゐた無けなしの三圓を取出して、

「ぢや、その借りの方だけでも僕が今立替へて置きませう、煙草代の方は歸つてよく話して見ませう」と言つて、不服らしい婆さんを納得させて、やうやうの事でそこを立去つた。

舟井の机が搬び込まれると、多子も多子の母親も呆れたやうな顏をした。

「やア、御苦勞樣」と舟井は運送屋が縁側に並べる机を一つ一つ部屋に搬び込んで、部屋の眞中に一番いい机を据ゑ、

殘りは片隅の壁ぎはへ五重の塔のやうに積上げた。
「舟井さん、私に一つその小さいのを貸して下さいな」と冬子が面白がつて言ふと、
「ウン、よしよし、幾つでもどれでも使つていい、おふくろにも一つ貸してやるよ」
「私なんか机借りたつて仕樣がない……學の方だつて何だつてろくすツぽ出來もしない癖に、机ばツかり澤山有つて人をおどしたつて、驚きやしない」
「失敬な事を言ひ給ふな」と舟井はおどけた顏をして、小母さんの肩を痛いほど擲つた。
冬子は自分の氣に入つた机を下ろして來て、それを純一の部屋へ持ち込んで來た。
「ねえ龍田さん、私にこの机いいでせう、今舟井さんから借りたのよ」
それはまだ新しい一閑張りの机であつた。漆の黑い艶々した面を、白いほつそりとした指で撫でる度びに、指の曇りで方々が筋づけられた、そしてそこには冬子の顏がほのかな月影のやうに映つてゐた。
「私の机ここへ置いてもいいでせう、彼方だと母さんが變な物を置いてくちやくちやにしちまふんですもの……私、机はあつたんですけれど、ここへ越して來る時に母さんが私にも相談しないで勝手に賣つちやつたんです、本當にあの時私は腹が立つたわ。私は机に向いて何か讀んだり書いたりするのは、これでなかなか好きですわ、さう見えなくて？」
「さう見えますね」純一は彼女の言ふ儘にそれを肯づた。冬子は純一の机の上にある原稿紙と萬年筆とを取つて、自分の机の上に持つて來て、それに落書を始めた。彼女は「文子樣」とか、「八重子樣」とか、「照子樣」とか頻りに書き並べて、今度は自分の名前の「冬子」といふ字を幾つも幾つも書きながら、
「何だつて私の名はこんなに寂し氣なんでせう、私、そんなに派手な名なんか要らないけれど、冬なんて隨分寒さう

な名を付けられてしまつて閉口よ、私、姓名判斷で變へて貰はうかしらと思つてゐるのよ」
「冬子つてさう惡くはありませんよ、おとなしくつていいですよ、何だか僕は山茶花の花の感じがしますよ」
「山茶花の花つて本當に寂しい花ぢやありませんか、あの白い山茶花の花なんか見てると、尼さんでも見てるやうな氣がするわ」
純一は冬子を喜ばせろつもりで言つた譬喩が反つて彼女を悲しさうにさせたのを見て、それつきり默つた。
「女の名で龍田さんの好きなのは何と云ふ名でせうね？」
純一は當てて御覽なさいと言ふやうな沈默を續けた。
「いつかね、私は西尾さんから聞いた事があるのよ、あなたの事を……」と冬子は突然顏を擧げて純一の眼にからかひの笑ひを照り付けた。
「敏子さんて云ふ方の事よ、あなたがお好きな方！」
「敏子さんですか……敏子さんは西尾君の兄さんの細君です」
純一はやうやうの事でかう言つた、彼は冬子の突擊に面喰つたのであつた。
「敏子さんつていい名ですわ、字だつていいし、意味だつていいわ、何だか美しくツて賢い方が御想像出來るわ、お年はお幾つ位でせう？　屹度私よりか四つ五つお上の方でせう」
「敏子さんは確か二十二です、僕よりか二つ上で西尾君と同い歲ですから……」
「では私の死んだ姉さんと同い歲ですわ、その姉さんは本當に優しいいい姉さんでしたわ、少しの間葭町へ出てゐて流行つてたんですけれども、急性肺炎で去年死んでしまつたのよ。その姉さんは私を一番可愛がつてましてね、死ぬ前私が病院へ見舞に行くと、悲しさうな顏をして私をぢいツといつ迄もいつ迄も見つめてるんです、私、眼が痛い位で

したわ。その姉さんが母さんに反對して、私を藝者にさせちやいけない、冬子だけは堅氣にさせてやつてくれつて言ひ續けたんですよ。あの姉さんに比べると、神樂坂にゐるずつと上の姉さんは私の事なんか思ひ出しもしないでゐるのよ、惡い姉さんぢやありませんけれど、それはお酒好きでいけないのよ、家へ來る時だつてぐでんぐでんに醉つ拂つてるんですよ、その代り私に隨分いい着物をくれますの、そして家の母さんなんか、いつでも遣り込められてゐるんですよ」と言つて、冬子は茶の間で舟井國之助とお茶を飮みながら無駄話をしてゐる母親の蔭口をきいた。

冬子と純一とはこの頃大抵の事は話し合へるやうに親しくなつてゐた。冬子に取つては、舟井國之助はいつも自分をからかふので嫌やであつたが、純一は大抵默つて自分の言ふ事を聞いてくれるし、年頃が丁度友達として程よいので、直ぐ仲よくなれたのであつた。二人の話は主に小說やお伽噺などのことであつた。冬子は少女物の雜誌を隨分讀み漁つてゐたからである。時々、彼女は、

「私、今度何か書くから、龍田さん、讀んで直して下さいな」と言つたけれども、これ迄まだ一度もその書いたものを見せた事はなかつた。字はなかなか旨い方であつたが、

「私はまづい字しか書けなくて本當に困ります、龍田さんは字がお上手ね、女のやうに綺麗な字をお書きになる、今度私にお手本書いて頂戴な」と言つたりした。

冬子は純一と大抵の事は話したけれども、西尾宏の事だけは何故か餘り話さなかつた。宏に對して彼女は妙に眩しげにさし俯いてゐるやうな、自分たちよりも一段高いところにゐる人を見るやうな、憧れに似た感情を有つてゐる樣子であつた。母親が宏に對してちやほやしてゐる態度を輕蔑しながらも、その宏を自分もまた尊敬してゐるやうであつた。時々宏が無頓着な樣子で彼女を子供のやうにからかつて見る時など、丁度思ひがけなく教師から賞められた少女のやうに嬉しさうに生々した。

純一は冬子のこの感情を最初の日から知つてゐるのだ。それは宛かも桃色の花のまだ堅い蕾が明るい太陽の方へ向かう向かうとするやうな、極めて自然な愉悦に見られた。冬子のやうな少女がいかにも富豪の次男らしく適意で豁達な、そしていかにも氣の利いた宏をそんなに思ふのは無理はなかつた。かうした少女のあこがれは、どうして永久に紅い草花とか薫る風とか綠の泉などと共に、春の日影のもとにそつとその儘にして置けないのであらう。さうしてさへ置けたならば、その若さ、美しさは、何時迄も愛らしく保たれるであらうに！　けれども不意の嵐が吹き起つたならば！　こんなにつつましやかに咲き初めようとする蕾の花が、忽ち荒い手に摘まれてしまふならば！　その事を考へると、純一は心底から寒いやうな思ひがした。彼には彼女が何にも知らないで、すさまじく廻轉してゐる齒車の方へ這つて行く幼兒のやうに思はれてならないのである。けれども宏は時々彼女をからかつたりして見る以上に、餘り彼女に頓着してゐないらしかつた。彼はだんだん暑くなつて來ても國の方へ歸省する風も見えなかつた、そして始終舟井と連れ立つて外出しては、夜遲く歸つて來て、「今日のあの女は一寸淺草のよか樓にゐたお豐ツて云ふ女によく似てゐたね、お豐よりか瘦せてたけれど、それでゐてお豐よりずつと豐滿な感じがする」とか、「あの月子ツて云ふ眞打は一寸踏めるね、あのスーツと顏を上げる拍子に此方を見た目付は何とも言へなかつた、一寸下品だが、その下品な處が反つてアトラクティイヴだ」などと娘義太夫や曖昧な女のことを話し合つてはいかにも面白さうに浮々してゐた。

その樣子を見てゐた純一は、いつとなく初めのやうに冬子の事が氣にかからないやうになつた。

多子が純一の口から敏子の噂を聞いた時から、彼女は頻りにその話を聞きたがつたり、話したがつた。彼女は出來るだけ敏子の事を知らうとしたり、純一を慰めようとしたりした。

「敏子さんは屹度あなたの事を死ぬまでお忘れになりはしませんわ、そんなにお愛しになつてゐらしつて、どうして忘れられませう、屹度あなたの事を思ひ出して、世の中の苦しい事を嘆いてゐらつしやるに違ひありませんわ。一體

人間の思ひと云ふものはなぜから叶はないものなんでせう、どんなに深く思つてゐても、つまらぬ物質的な事やいろいろな束縛で破れてしまふから、世の中は嫌やだと死んだ姉さんは口癖のやうに言つてました、私はこの頃その姉さんの言葉をよく思ひ出します。酒飲みの姉さんの方なんぞは、お金お金で年中通してゐますから、死んだ姉さんの半分も苦勞を苦勞と思つてやしません、死んだ姉さんは男のために苦勞ばつかりして、急に死んぢまひましたから本當に可哀相ですわ……」と言つて急にしくしくと多子は泣き出した事もあつた。

純一は多子から敏子の事を訊かれる度びに、小さい時からのなつかしい思出を語るのが樂しかつた。丁度我が妹のやうな多子のやさしい同情が嬉しかつたし、またこんなやさしい同情を得て心の祕め事を心置きなく打明けるのも嬉しかつた。年とともに敏子の面影は胸に鮮かになつて行つた、今はもう再び逢はれようとも思はれない人ではあるけれども、純一は時々彼女が夢うつつの間に自分を呼んでゐるやうに覺える事もあつた。その後敏子が西尾家の若夫人としてどんな生活をしてゐるか、それは宏からは聞き出す事は殆んど出來なかつたが、時々歸國してゐる信太郎からの手紙によつて、その動靜だけはわかつてゐた。信太郎の言葉によれば、彼女は餘り幸福ではないらしいとの事であつた。

十

多子はただに純一に敏子の事を聞きたがるばかりではなく、閑さへあると彼の机の傍にすわつて、例の手習ひをしながら、何か面白い話をしてくれと彼にねだるのであつた。

「西尾君が僕よりもずつといろんな話を知つてゐますよ、あの人にも聞いていらつしやい」

「でも、あの方は嘘の話ばつかりなさいます、それに私の事を子供だと思つてらつしやるから、猿蟹合戰のお話だの、

イソップ物語などが丁度いいだらうなんてからかふのですもの、本當につまりませんわ」
そんな言ひ方で冬子が寂しい顔付をすると、純一の氣持は丁度綱でたぐり寄せられるやうに冬子に引き寄せられるやうであつた。

西尾宏と舟井國之助とは打連れ立つて外出して、夜なんか歸つて來ないことがあつた。そんな時、冬子は純一の部屋にすわり込んで、又しても話をしてくれと頼むのであつた。

「冬ちやん、本當にいい加減におしよ、龍田さんだつておまへの爲めに生きてらつしやるぢやありませんよ、そんなに話をしてくれなんてせがむものぢやない。龍田さん、本當にいい加減にあしらつてやつて下さい、その子は我儘者で困ります」と茶の間の電燈の下で、退屈さうにすぱすぱ長煙管で煙草を吸つたり、團扇をばたばた使つたりしてゐる母親が言つた。

「お母さんこそうるさいよ、龍田さんは承知してらつしやるんだもの、私が無理に願つてるのぢやないわ、ねえ龍田さん、今夜は私が泣きさうな話をして下さい、ね」と彼女は机の上に小さな手を組合せて、その上に女には珍らしく恰好のいい、やや突出た顋を載せて、悒然として待ち構へるのであつた。それは丁度雛鳥が餌を求めるやうに、悲しい話を求めてゐるのだ。彼女に取つては泣きたいがその望みなのである。

「では、話しませう、あなたを泣かすやうな話ぢやないかも知れませんが、なかなか可哀さうな話です」から言つて純一は書棚から假綴の佛蘭西本を取出して來た。それは彼の好きなアンリイ・ミュルジエの『ラ・ギイ・ド・ボエーム』であつた。

「龍田さんは本當にえらいのね、そんな本もう皆すらすらと讀めるんでせう？　私も佛蘭西語が習ひたいわ」と冬子は言つた。

「僕、そんなに讀めはしないけれど……」と言つて、純一はその本の中の一章を目で讀んで行きながらその通り話し出した。

「ジャックとフランシイヌはラ・ツウル・ドオヱルニュ街のある家で出會つたのです。二人は同じ時に此の家へ引越したのです。誰れでも同じ家に住んでゐると、屹度直ぐ近所附合ひを始めるもので、この美術家と若い女も八日目迄にたつた一言も交さないでもうお互ひに知り合つたのです。女の方は隣の男が不仕合せな美術家だと知つてゐました、男の方も隣の女が小さな裁縫工女で、繼母のひどい仕打を避けるため自分の家を拔出して、獨りここで自活してゐるのだと云ふ事を知りました。

四月のある暮方、貧乏なジャックは朝から何にも食べないで無暗と悲しくなつて、疲れて自分の家に歸つて來たのです。部屋の中に入つたが息がつまるやうに思はれたので、少し呼吸する爲めに窓を開けて、モンマルトルの丘の上に落ちかかつた陽を見てゐましたが、前を鴉が啼いて通るのを見ると一層悲しくなつて窓を閉めて、カアテンを曳いてランプの石油が切れてゐるので蠟燭をともして、煙草をふかし始めました。その煙草には阿片を滴して置いたので、それを吸うてゐるうちにいつか眠つて夢の國へ入られるつもりであつたが、壁にかかつてゐるピストルも見えなくなる程部屋を煙で一杯にしたけれど、此の晩に限つていくら煙草をのんでも眠られないのでした……」

「まあ可哀相ね、その人そのピストルで自殺しちまふんですか？」と冬子が心配さうに訊いた。純一は人差指で原文の行を横へ追ひながら、

「いや……聞いてゐらつしやい」と言つて讀み續けた、

「ところがその晩隣の部屋の小さな裁縫工女はジャックとは反對に、大變はしやいで愉快さうに家に歸つて來ました。彼女は譯もなく嬉しくて堪らなかつたのです。小さな聲で歌をうたひながら階段を上つて來ましたところが、部屋の

戸を開けようとすると、廊下の開いた窓から風が吹き込んで來て、手に持つてゐる蠟燭を吹き消されてしまひました。

（あら、いやだわ！）と若い娘は叫びました、ところで下まで火を取りに行くのが嫌やなので、ふッと見ると隣の部屋の美術家さんの戸口から光が見えたので、その火を借りようと思つて、その戸をそつと二つほど叩きました。中からは戸を開けてジヤックが吃驚したやうな顏を出しました。ところがフランシイヌさんは部屋に入るなり、部屋中一杯の煙草の煙に急に息がつまつて氣が遠くなつて椅子の上に倒れてしまひ、手に持つてゐた蠟燭も鍵も床の上に落してしまつたのです。ジヤックは大變に吃驚しましたけれど、直ぐ窓を開けて風を入れて、水を數滴フランシイヌさんの顏に垂らすと、五分程たつて氣が付いてフランシイヌは火を借りようと思つて戸を叩いたのだと話して、

（もうこころよくなりました、もう私の部屋へ歸られますわ）と言つた。

その時また風が颯つと吹き込んで來て、ジヤックの蠟燭も吹き消されて、眞闇になつてしまひました。二人の若い人たちは闇黑の中に立ちすくんだのです。ジヤックは火を付けようと思つてマッチを探しましたが、もうすつかり使つてしまつて中には一本もありませんでした……」

「何て可哀相な人達でせう！」と言つて多子は身體を乘出して聽き入つた。彼女は大變な事件が起るやうな期待に胸をどきどきさせてゐた。

「フランシイヌが言ふには、蠟燭なしでももうよろしいけれど、鍵がないと入れませんから鍵を探して下さいと言ひました。

（ええ、探しませう）とジヤックが言つて、二人ともに闇がりの中の床をあちらこちらへその手で探し廻つて、二人が一つところを探しては、一分間に十遍も手が觸れました、それでも鍵が見付からないので、

（今に月が出て來ますから待つてゐませう、月さへ出れば直き鍵は見付かりますから）とジヤックが言ふと、

（はい、さうした方がようございますわ）とフランシイヌも同意して、それから狹い部屋のくらがりの眞中で二人はいろいろのお話をしました。たうとう月が出て明るい光が小さな部屋に充ち溢れました、フランシイヌさんは夢から覺めたやうに吃驚して小さな叫び聲を出しました。

（どうしたんです？）とジヤックが訊ねますと、

（何でもありません、誰れかが戸を叩いたのだと思つたのです）と娘は言つて、そこの床に見出した鍵を足で家具の下へ隱してしまひました。フランシイヌはもう二度と鍵なんか見たくもなかつたのです。

こんな風にして知合ひになつたフランシイヌとジヤックは六ケ月の間一緒に暮しましたが、可哀相な事にはフランシイヌが肺病になつて、あの人は木の葉が黄色くなると死んでしまふと醫者に言はれました。そのうちたうとう木の葉が黄ばんで來ました、その頃からフランシイヌは寢床に就くやうになつて、寢ながらも、

（そのうちに私はよくなつて外出が出來るでせう、だけど寒くなつたら私は霜やけになるのが恐いから手套を買つて頂戴な、長くもつようにいいのを買つて來て頂戴な）と言ひつづけました。たうとう最後の晩になつて、ジヤックが手套をもつて歸つて來ました。

（まあ、美しいこと！）とフランシイヌは言ひました、（私は出かける時これをして行くわ）と嬉しくて堪らないやうに言ひましたが、その翌日の正午の鐘の聲に、女はもがいて苦しみました、その身體全體は顫へ出して來ました。

（手が冷たい）女は小さい聲で囁くやうに言ひました、（私の手套を頂戴！）そして女は毛皮の中へその瘦せた手を入れました。息を引取る時、誰れかが手套を脫がせてやらうとすると、女はその手をしつかりと組合せました。

（いや、いや……かうして置いて下さい、……冬ですもの、寒いわ……ああ可哀相なジヤックさん……可哀相なジヤックさん……あなたはこれからどうなるんだらう、ああ苦しい……）

翌る日ジヤックは一人ぽつちになりました……」

「そのジヤックはどうなりました？」と冬子は訊いた、その兩頰を机の上に肱を突いた兩手で挾んだ姿勢で、彼女の眼からは涙が出放題に流れてゐた。

「そのジヤックはフランシイヌの眠つてゐる土を花で一面に埋めてしまはうと思つたのです、けれど貧乏なジヤックはその花もなかなか買へないうちに、春はジヤックよりも先きに彼女の墓の上に花を飾つてゐました、それでジヤックは自分の持つて來た花を隣の墓に植ゑて歸つて來ました。彼はその後フランシイヌに似てゐるところからマリイといふ女に親しくなりました、けれどその女とも間もなく別れた時分には、もうフランシイヌと同じ病氣になつて、サン・ルイの慈惠院に入れられました。慈惠院へ入つてからも、フランシイヌの墓に据ゑるつもりでフランシイヌの似顏の大きな天使の像をこしらへ始めました。けれどもそれを完成出來ないうちに病勢が進んで、始終情深く自分を看護してくれた尼さんに、自分のこしらへた、大理石に取ることの出來なかつたフランシイヌの石膏像を上げますと言つて、ジヤックは死んで行きました……一度だつて不平も言はず、靜かに自分の不幸に堪へながら死んで行きました……」

二人ともかうした哀れな戀人たちの生涯を哀悼する思ひで默つてしまつて、部屋にはしんみりした沈默があつた。茶の間では矢張り時々煙管をはたく音がした。

「私、さういふやさしい人達は大好きですわ、ジヤックも優しいし、フランシイヌも好きな女ですわ、私すつかり泣いてしまひました、私泣き蟲でせう……」と冬子は純一を涙の眼で見て言つた。純一はその眼に自分の脣を押し付けたいやうな氣持がした。

「僕もその話は好きです、こんなフランシイヌのやうな女があればいいのにと思ひます」

「私ならジヤックのやうな人があればいいと思ひますわ」

から言つて二人とも、思はず顔見合せて笑つた。
こんな風に、冬子と純一とはお互ひに話したり慰めたり遊んだりして仲よくしてゐるのであつたが、それを見た宏は、
「冬ちやんと龍田君とは實に仲がいいな、羨ましいね、僕も少し仲間に入れてくれないか」と言つて二人をからかつた。
「いつでもお仲間にお入りになるといいわ、でも、あなたは私たちを子供だと思つてらつしやるんですもの」
「だつて大人だとは思へないぢやないか、まだお母さんなんかに甘つたれるからな。それに押入の中に一體何があるか、僕知つてるから、冬ちやんを大人扱ひにはしないんだ」
「まあ、いやな事!」と冬子はさつと赧くなつて宏を睨んだ、「何があるつて言ふの? 何にもありませんわ、何かあるなら當てて御覧なさい、押入の中すつかり見たつていいわ!」と憤慨して辯解した。
「まあさう怒らなくつたつていいよ、僕この間君があの押入の中にお手玉を入れてるのを見たんだ」
「お手玉ですか、あれは母さんが巣鴨の叔母さんところの綾ちやんにお土産につて買つてるんですわ、私のぢやありませんわ」
「まあ怒るな、そんならそれでいい、だがまだ大人の資格はない、大人なら龍田君にお話をお話をつてせがんで、始終甘つたれてなんぞゐやしないよ」
「甘つたれて私……」と冬子は純一の方を屹と見て訊いた。純一は自由自在に冬子をおもちやにしてゐる宏が何だか憎いやうな氣がして、先刻から默つてゐたが、から冬子に訊かれた時は取合ふのがひどく屈辱のやうな氣がしてただ苦笑してゐた。

「多ちやん、いくらそんなに龍田君を好いたつて駄目だ、おまへのやうなお多福はお氣に入るものか」と舟井が例のがさつな言ひ方でよく冬子をからかつた。

「御心配無用よ　私、龍田さんに何してゐやしないから……私そんな事嫌ひですもの」

「嫌ひぢやないらしい、此間西尾君の書齋に行つて懸想文を置いて來たな、知つてるぜ」

「私が？」と冬子はぱつと眞紅な顏をして、「嘘よ！　嘘よ！　私そんな手紙なんか置きはしませんわ、何の證據があるの？」

「あるとも、ちやんと西尾君から聞いたんだ」

「西尾さんがそんな事言ふ筈ないわ、そんな事無いんですもの」

「懸想文でもないかも知らんが、まあさう言つたところで大した間違ひでもあるまい、西尾君の机の上の原稿紙に、西尾宏様と幾つも幾つも書いてあつた字がどうも冬子らしいんだ……」

「私ぢやないわ、私ぢやないわ……」たうとう冬子はかう言つてゐるうちに、涙がこみ上げて來たと見えて、その袖で顏を隱して緣側の方へ出て行つてしまつた。暫くたつて純一が緣側へ出て行つた時には、冬子は庭下駄を突つかけて向うむきになつて、しよんぼりと柱にもたれてゐた。

冬子は時々月のいい夜なぞに、ひとり垣根の方に行つて、高く聳えてゐる靑桐のその葉を深々と打開いてゐる樹の下に靠れて、ひとりで歌つてゐることがあつた。

庭の千草も、蟲の音も、
枯れて寂しくなりにけり、
ああしらぎく、ああ白菊、

ひとりおくれて咲きにけり。
露にたわむや菊の花、
霜におごるや菊の花、
ああ、あはれあはれ、ああ白菊、
人のみさをもかくてこそ。

とりわけこの歌が好きと見えて、幾度びも幾度びも繰返し歌つてゐる、その歌の曲調はいかにも緩く一節々々の餘音が長く、それが顫音になつて突然次ぎの節が高く起つてまた哀韻のうちに消え込んで行く、それが宛かも秋風に鳴る物の音のやうでもあり、草葉にすだく蟲の音のやうにも思はれ、この年頃の少女の感傷を託して、歌ひながら涙を樂しむには適はしい歌であつた。多子はいい聲をしてゐた、それは常々自慢なので、若し私がいい身分であつたら音樂學校へ入つて、聲樂の方で屹度成功すると或る學生さんが言つたのよと純一に談つた事もある。彼女は母親の仕込みで小さい時から踊りも長唄も少しづつ習はせられてゐたので、自然聞き覺えのむづかしい歌曲でも上手に歌つてのけるのであつた。彼女が好きなだけ歌を歌つて歸つて來た時には、その顏がさも嬉しさうに晴れやかな時もあるが、多くはその眼のまはりを眞赤にして涙の流れた幾筋もが頰にきらきらとしてゐるのであつた。彼女は宏の窓の下に行つて歌つてゐる事もあつた。そんな時に窓から宏が首を突出して、
「何處の旅藝人だい、なかなか旨く歌つてるな、これをやらう」と二階から花瓶の花を引き拔いて投げると、それをうまい事受取つて、嬉しさうに笑ひ聲を立ててゐた事もあつた。
「龍田さん、私のやうな貧乏な娘で、さうしていい聲を持つてゐて、旅藝人になつてあちらこちらへ旅をしてゐるうちに、何かの事から不仕合せになつて、氣が違ふとか自殺をするとか云ふやうな哀れな小說が何かあつたら今度話し

て下さいな、私、さういふ女も好きよ、この間聞いたフランシイヌといふ女のやうなのも好きですけども……」と彼女は純一に言つた事もある。

これを聞いた時、純一は故郷にゐた時――あの寂しい大根島で父と侘しい生活をしてゐた時――信太郎から借りて初めて讀んだ『水沫集』の中の『埋木』を思ひ浮べた。

　戀の樂みてふものは、唯だひと時のものなれど、
　戀の苦艱は絕えざらむ、人の命の盡くるまで。

とステルニイの前で歌つた少女アンネットを思ひ浮べた。不幸なゲザがその藝術を盜まれ、その許婚のアンネットを奪はれ、つひに死して生きながらの死骸となる、涙なくして今もなほ讀み了へる事の出來ない物語を思ひ浮べたが、罪を悔いて世を早めたアンネットのことを冬子に話しするには、純一の心には餘りに苦しいものがあつた。

「冬子が西尾宏に本當に戀してゐる？」

純一はどうしてもさう思はずにはゐられなかつた、そしてこの戀する少女の淸らかな心持を考へる時、宏のやうな男がそれを知らないでゐる筈はない、またそれを知つてその儘にして置く宏とも思はれなかつた。純一はさう思つて不安になる事もあつた。彼は冬子の顏を見ながら、時々西尾宏の常々言つてゐる言葉を不圖思ひ出す事があつた。

「藝術家には凡てが許されてゐるのだ、世界のあらゆるものは彼の藝術の完成の爲めにのみ存在するのだ。藝術家はその藝術の爲めにはどんなものでも犧牲にして差支はない、またそれでこそすぐれた藝術も生れるのだ。立派な藝術さへ生めば、彼の不品行位ゐ問題ではない！」

けれども純一にはさうは思へなかつた、彼はたうとう宏とその問題についてかなり激論をした。その時宏は或る有名な作曲家の例を引いた。その作曲家は常に新しい女性に對して欲情を求めて、その刺戟なしには創作力が枯渇して

しまふと云ふ奇異なる習癖を以て有名であつた。彼はその欲情を抑壓せられてゐると、殆んど何事も手に着かないのであるが、一旦それが滿足せられると、その瞬間彼の頭腦には驚くべき發想が閃いて、彼は狂氣のやうにその制作に猛襲する、しかもその最も得難い女性を得た時、彼の天分は最も華々しい火光を發するのであつた。現に彼の世界的の名作と云はれる管絃樂曲『蘆間の幻影』の如きは、彼が久しく戀慕してゐた某伯爵夫人との情事の樂しい記念だと云ふ事が公然の祕密であつた。

「見給へ、あの男が今のやうに世界的の名聲を獲得するに至つた名曲の多くは、彼が最も不道德を極めた時の收穫ぢやないか、君はそれに對してどう言つて見ようと云ふんだ？」と宏はきつぱりと言ひ放つた。

「いや、僕には異論がある」と純一は常にない烈しい調子で言ひ續けた、「若し藝術と云ふものが不道德によつてでなくしては成立しないならば、それは人生に取つて全く有害無益のものだ。その作曲家の作品がたとひどんなに多くの人の賞讃を贏ち得たところで、そんな不道德な基礎の上に成り立つてゐるものが、眞に人の魂に觸れる筈がない、僕はそんなものが純眞な本當の藝術であるとは信じられない。よしまた彼の作品が何等かの意義を有つてゐるとしても、それによつて彼の不道德は帳消しにはならない」

「さうは言はせないよ、ぢや君はバイロンの場合はどう思ふんだ、彼は道德家かい？　ワイルドはどうだ、男色の爲めに監獄へ送られたワイルドは？　彼の藝術を君は彼の私行の故に全然否定しようと言ふのか？　見給へ、道德家で天才的な人物は皆無と言つてもいいぢやないか、天才即不道德家さ、道德なんて云々するものは皆何も出來ない凡くらさ、天才を不道德呼ばはりするのは要するに俗衆の嫉妬に過ぎないんだ、天才者に取つては彼の意欲が卽ち彼の道德なのだ！　第一、君が崇拜してゐる大菅左門の說はどうだ？　彼の社會的個人主義なんか個人の極端な自由を唱道するからには、人間はどんな事をしてもいいと云ふ結論になるぢやないか、その結論からすれば人の女を奪略する位

ゐ朝飯前さ。一體、君は何かと云ふと、道德々々と言ふが、そんな事が君に取つてそんなに氣になるなら、僕は君に忠告するよ、藝術なんかよし給へ！」

宏は昂然としてから言ひ放つて、その言葉の相手に與へた效果を驗べるやうにぢつと純一の顏を見たが、純一はひるまず宏の眼を眞向から追ひながら、

「然し、大菅君だつてさうした不道德を支持しようと云ふのぢやなからう、反對に抑壓せられた個人を解放して、特權階級の横暴を根絶せしめようと云ふのぢやないか。また君は僕がまるで道學者ででもあるやうに言ふが、僕は何も藝術家は聖者でなければならないと主張するのぢやない。ただ彼が藝術の名を以てその不道德をジャスティファイする事が許されないんだ。人間は弱いものだから過ちなきを得ない事は僕も知つてゐる、ただその場合彼は飽く迄もその苦痛の負ひめを負はなくちやならんと思ふのだ。また、それだからこそ藝術家は人間(ヒユウマニテイ)の苦痛の代辯者となり得るのだ、そして Suffering(サファリング) humanity(ヒユウマニテイ) の聲でなくて藝術に何の意義があらう。藝術は虐げられたもの、惱んでゐるものの爲めの訴への聲だと僕は思ふ……」

「それぢや君は藝術は傾向文學や教訓小説でなくちやならんと言ふのだな。君のやうに言つた日には、丁度トルストイのやうに近代の大抵のいい藝術は全部否定してしまはなくちやならん、そして『アンクル・トムス・ケビン』だとか『クリスマス・キャロル』だとか云つた下らない面白くない物をいいとしなくちやならなくなる。藝術は自由だ、何物からも自由でなくちやならん、何物かに拘束される時藝術は死んでしまふんだ。君のやうにそんな事を言ふやうなら、寧ろ藝術そのものを全然否定した方が徹底してゐるよ。藝術は科學と同樣に何等道德的基礎に立つ必要はないんだ。早い話が道德的な事物を取扱ふほど藝術は面白くなくなるぢやないか。その證據にはダンテの『神曲』を見給へ、あらゆる種類の罪人で充滿してゐる『地獄篇(インフェルノ)』が一番價値があるぢやないか、『天堂篇(パラデイソ)』の如きは藝術品として見て最も

劣つてゐる事は定說だよ。これを見ても藝術と云ふものの本質は分る筈だ。しかも地獄を書くためには人間は地獄へ行つて來なくちやならん。ダンテだつて君の思つてゐるやうな道德的に完全無缺な人間でもなからう、第一そんな人なら藝術なんか見向きもしないだらうよ。藝術は人生の表現だ、そして人間と云ふものは元來皆不道德なのだ、そして不道德な事を聞きたがるのだ。新聞の三面記事なんかでも、孝行息子の記事なんか一向見向きもしないが——尤もそれが娘でその寫眞が美人ででもあれば別だが——强姦だとか姦通だとか殺人だとか云つたやうな罪惡の記事だと喜んで讀むぢやないか。藝術も畢竟さうした人間の欲求の生んだものぢやないか。深刻な人格を有つてゐればゐる程藝術家はすぐれてゐるのだ、そして深刻な人格とはあらゆる人生の深淵を平氣で瞰下して、その生の杯を澱まで飲み乾して、最大限度にその生を味はふ事の出來る人だ、彼はかの蒼白な奴隷道德に弱められ傷けられないで、鷲の膽勇と蛇の智惠とを以てあらゆる弱者を踏み躙つて、帝王のやうに濶步するのだ! 文藝復興期の偉大な犯罪者の事を考へて見給へ!」

「君の說を聞いてゐると、惡人が一番の藝術家だと云ふ結論になりさうだ……」

「さうだ、さう結論してもいい、善人ぐらゐ始末の惡いものはない」

純一は結局言ひ負かされてしまつた自分を見出した。彼は此上言ひ爭つても無益だと思つた。けれども魂の底に宏のあらゆる機才と詭辯とを以てしてもつひに屈伏せしめ得ない强い一つの叫びを聞いた。

「否!……若し西尾宏の說が正しいとすれば、藝術は畢竟惡い戲れである、藝術の本質がどうしてそんな背理なものであり得よう! 決してあり得ない事だ! 然し、若し自分の信念が誤りであつたならば、僕は躊躇なくそれを一擲する!」

彼は飽くまで西尾宏の說の誤謬である事を信じて疑はなかつた。けれども彼自身の正しと信ずる信念には、適當の

言葉が見出されなかつた、その焦燥が彼の胸を灼くやうであつた。
「もつと考へて見なければならぬ問題だ、否、一生考へなければならぬ問題だ、或ひは生命にも値するかも知れない重大な問題だ！」
純一の感ずる事は自分の弱年と未完成との悲しみであつた。

十一

或日、西尾宏の書齋に深澤久滿一とその友人の若い青年とが來てゐた。舟井國之助が純一を呼びに來て、純一もその座談の聽き手になつてゐた。
「僕は此頃一つ艷聞の口があるんだ」と深澤は得意さうに話し始めた、「それは素敵なんだぜ」
「君の素敵だはいつだつて素敵だつたためしはない、今度こそは本當かい？」と舟井はまぜッ返すやうに言つた。
「君なんざあ第一番に羨望するよ、今度のは永田錦心流の水號者で、その上美人なんだ」
「何だい、その水號者つてのは？」と舟井が怪訝さうに訊くと、深澤はしたり顏をして笑ひながら、
「その……何だ、水號つてのは、錦心流の謂はば教員免許狀見たいなもので、それを貰つたものが水號者さ。錦心流では宗家とあがめ奉られて、座蒲團なんかでも普通の三倍もあるのにすわる錦心師以外の琵琶師は、試驗を受けて合格すると、宗家から水の字を貰ふ事になるんだ。例を擧げれば、芝水、春水、新水、淨水、皓水、間水、英水、晴水、巢水、漂水と云つた工合だ、女だと是水孃、順水孃、章水孃つて事になるんだ」
「ぢや君のそのラヴアは何水孃だい？」
「まあそれは後で言はう」と深澤はにやりとしながら、「中には飛んだ水を頂戴してる連中もあるんだ、鬼水、眠水、

潟水などはまだしもだが、鹽水、甘水、痴水、珍水などに至ると笑はせるね」

皆笑つた。西尾宏は一番愉快さうに笑つた。

「その傳で行くと、ここにゐる連中は何水ぐらゐかね、僕は宗家だから別だが、深澤君はさしづめその痴水か珍水位だらう」

「そんな事はない、痴水か珍水は江添忠治あたりに授けてやるべしだ、僕は華水とでもして貰はうかな」

「華水はいいよ、同じハナ序に、いつそ鼻水にしたらどうだい、人氣を呼ぶぜ」と舟井はからかつた。

「いけないよ、鼻水なんかは、はなはだ鼻持ちがならん、人氣どころかはな水も引つかけて貰へねえや、それより舟井君に一つ水號を授けてやらう、この男速記の名人だから速水はどうだ？」

「いや、速水はいいさ、喜んで貰ふよ」と舟井が言つたので、深澤は折角の思ひ付を臺なしにされてしまつて變な顔をした。

「宗家たる僕が考へるところによれば、深澤久滿一氏は今後新劇作者たるよりも、よろしく琵琶歌作者たるべしだ、つまり、さうすれば、戀人ともうまく和合するし、柄にも合つてるから、斯界の大先生と言はれて、大に水號者の尊敬を贏ち得る、さうしたまへ、悪い事は言はんよ」

「君もさう思ふかね、此間曲水孃もさう言つて頻りに僕に勸めたんだがね、一つ遣つて見ようかな、なに、遣つて遣れない事はないさ、まあ聞き給へ……妙なる法の華咲きて。一天四海皆歸妙法。實相眞如の月澄みて。末法萬年の末迄も。無明の闇を照らすらん。さても日蓮上人は。一度遁れし龍の口。再度踏むや虎の尾の。佐渡ヶ島にぞ送られける……」と深澤は少し節を附けて、高らかに唱した。

「こりやらまい、さう馬鹿にしたものぢやないな、龍の口を虎の尾のと受けたあたりはなかなか玄人だ、勿論君の新

作だらう？」
「いや、まださうは行かぬのだ、これは青木馨水氏の近作で『佐渡の御難』と云ふんだ」
皆が笑つた。
「なに、僕だつて今にこれ位の傑作をこしらへるのに譯はないさ」
「曲水孃は美人かい？」と舟井が訊いた。
「沈魚落雁閉月羞花と云つたところだ」
「そんな陳腐な形容ぢやわからんよ」
「いや待つた、この式で行かんと琵琶歌の作者にはなれんのだ」
「なアる程」
かうしたたわいもない無駄話が一しきり續いて、ふッと皆が默つた時に西尾宏が、
「時に、三越なんかの食堂にあんないい女がゐようとは僕は思はなかつたよ、此間丸善へ行つた序に最近の流行でも見ようと思つて三越に行くと、あそこの食堂に大變な美人(ビユウテイ)がゐた。勿論女給なんだから贅澤な裝(なり)なんかしてゐない、それだのにあんなに眼に付くところを見ると餘程いいんだらう、いいと云ふよりは僕の趣味に合つてるのかも知らん、それから二三度行つて見たが、何度見ても僕を惹き付けるね、この頃なんざ毎日見に行き度くつて仕樣がないよ」
「道理で君は此間から自由行動ばかり取つてゐたが、さういふ譯があつたのか」と舟井が言つた。
「俺に默つてゐるなんて怪しからん」
「出し拔かれたつて譯かい。だがね、早く人に言つてしまふと、何だか自分の美しい幻影を破るやうな氣がして言ひたくなかつたんだ。あの騷がしい中で他(ほか)の人間を擦り消して、彼女と二人の世界をこしらへて、いつ迄も默つてぢつ

と眺めてゐたかつたんだ、だがもう默つて見てゐるだけでは滿足出來なくなつた……」

「フン、これ迄になかつた事だな、今度は大分眞劍らしいぢやないか、一つどんな女か見たいもんだ、若しその女が本當にいいのなら、一つ俺が大奔走をして君の爲めに一肌拔いでやつてもいい」

「兎に角いつか行つて見てもいい、僕の審美眼がどれ程高いか分るだらうよ」

「いつかなんて延ばす必要はない、思ひ立つたが吉日だ、一つこれから皆して出かけようぢやないか」

「それがいい、それがいい、僕も贊成だ、今度はうんと敵討してやるんだ」と深澤は立上つて、部屋の隅に丁寧に擴げて置いた絽の羽織を取りに行きながら、

「ねえ、君も行くだらう？」と友達の靑年を顧みて言つた。その靑年は笑ひながら頷いた。

「三越の三階で俺を奢らせようと云ふ寸法かい」と宏が言ふと、

「美人だつたら奢らせるんだ、さうでなければ僕等が奢る」

「いや、その賭は僕が負けだ、誰れが見たつて美しいに定まつてゐる……今日は一つ龍田君にも行つて貰はう、龍田君をパリスの役目に見立てるのも面白いからな」

純一は先刻から西尾宏の話を興味を有つて聞いてゐた、彼は美しい女給を發見して、今では單に默つて見てゐるに堪へられないと云ふやうな告白をした宏の樣子の、いつになく眞劍らしいのを見て、丁度洪水が向ひ側の堤防に間隙を見出して奔流し始めるのを見るやうな感じであつた。こんな感情が何によつて生ずるかは彼自身も固より知つてゐた、そして宏の生活に關心しすぎるやうな自分が自分でも不思議でもあり厭はしくもあつた、けれども彼はその女給が何だか見て見たい氣持を抑へることは出來なかつた。

どやどやと皆が揃つて階段を緣側へと下りて行つた時に、その緣側で母親の疊紙をひらいて、澤山の櫛や梳毛や油

の瓶などを並べて、小さな鏡臺に向つて髮をその肩に散らかして、梳櫛を手に持つて立つてゐる冬子が、髮の毛のねじれる風に顏を振り向けて、眼を圓くして皆を見た。
「何處へいらつしやるの？」と呟いて、彼女の眼はその質問を純一の方に投げてゐた。
「冬ちやんも連れて行かうか、三越の三階の食堂に大變美人の女給さんがゐるさうだ、西尾君がそれを見附けて來たんだ、これから皆でどんな美人か見に行くんだ、君も行かないか」と舟井が無頓着な調子で言つた。
「物好きね、皆さんは……龍田さんもいらつしやるの？」
冬子は今しも一等最後に二階から下りて來た宏を憚るやうに盜み見をして、こんなに純一に訊ねた。
「………」
「冬ちやんも一つ何處かの女給さんにならないか、あんな處にゐると飛んだ良緣にぶッ付かるぜ、こんなにして家にばかりゐては誰れも見付けてくれやしない」と宏は言つた。
「ええ、女給さんになりませうかしら、でも私なんか……」と言ひさして冬子は急に屈んで髮の毛をみんな垂らしてせかせかと梳櫛で梳きはじめた。少し明色がかつたやや薄い全體の髮の間に、その梳櫛が器用に動いた。それきり冬子は顏を上げなかつた。純一は振返つて彼女のいたいけな寂しい髮を見た。
純一に取つては三越吳服店は今や初めてその存在を明かにした。彼は買物一つしないものが三越なんかに入るなどと云ふ事は考へても見ない事であつた。西尾宏が單に女給を見る爲めだけに、アイスクリイムを飮みに毎日のやうに通ふなどと云ふ事は想像の外であつた。どうしてそんな事に興味が有てるのだらうと思つて、純一は今更のやうに彼と自分との相違を認めずにはゐられなかつた。
美少年の洋服姿で立つてゐるのは、この東洋一と稱されてゐる大デパアトメントストアの來客案内人であつた。下

足係りが七八人間斷なく働いてゐても、まだ立つて待つてゐる者がある程、後から後から澤山の人間が丁度龍門に吸ひ込まれる水のやうに流れ込んで來てゐた。美少年は下駄を渡して上つて來た者の手荷物を預つたり、またいろんな質問に答へたりしてゐた。その中に自動車を横付けにして、美々しく着飾つた某伯爵夫人とか、某實業家夫妻とかがあると、彼等は慇懃に敬禮して、さうしてその嚮導の任に就くのだ。

いきなり純一が自分自身を見出したところは、一杯の朝顔の紅、白、斑、紫、水色などの大輪の造花の降るやうに咲き續いて眞白の圓柱を飾つてゐるところであつた。正面には二階に導く大階段が華美な絨毯にその全體を包まれて、惜し氣もなく澤山の人々に踏まれてゐた。四隅には大小高低さまざまの陳列棚が高貴な品を二三點宛つ恰かも置物のやうに置いてゐた。上方を見上げると、三階、四階、五階の勾欄が次々に見えて、爛漫とその色彩を誇つてゐる種々の帯地や中形の浴衣や夏向きの白地の半襟などが躍り舞ふやうに宙に懸つてゐた。

この日は丁度日曜日であつたので、三階の正面の奏樂所からピアノの連彈の緩い音律が、數千人の足音を調節して輝やかな館内全體の空氣をゆらゆらと搖がしてゐるやうであつた。

「エレヱエタアに乘らう」と深澤が言つた。異議なく皆左方の一隅にある鐵格子の前に集つた。少しく待つてゐるとギイギイと音がして、上方から一個の眞四角な箱が滑り下りて來た。止まつた時にガチヤツと音がして鐵格子が開かれると、中から一度に美しい娘や女の兒や紳士や學生が現れ出た。それと入れ變りに皆は入り込んだ、それは暑くつて窮屈であつた。二十人餘り壽司詰めになると、ガチヤガチヤと戸を閉め切つて、直ぐに昇騰が始まつた、それは僅かに數秒の間であつた、箱が上ると云ふよりも二階が下りて來たやうな感じであつた、そこで四五人下りた。皆は三階が目的であつた。

「上ります」と運轉人が言つて、又もやほんの數秒の間に三階が皆の前に下りて來た。

「さあ、下りるんだ」

「ここで下りるんだ」と口々に言ひながら解放された人間のやうに外に出た。すると又もや眼の眩惑されるやうな明るい美しいものの充満があつた。硝子張りの陳列棚の中に五百圓と云ふ札の付いてゐる絞りの長襦袢、或ひは七百圓と云ふ札の付いてゐる裾模樣、或ひは千五百圓と云ふ札の付いてゐる丸帶などが、光琳模樣、又は近頃流行の寫生模樣などとりどりの新意匠を見せて、殆んど荒唐な程の豪奢な面影を偲ばせてゐた。

「何だ、この帶が千五百圓か、この帶一本あれば俺達のしたいと思ふ事は何でも出來るなア！」と深澤がだらしのない羨望を見せた。

純一は朝川が此の中にゐたら何と言ふだらうと思つた、彼は例の駄々ッ兒らしい調子で、憤激の言葉を四邊に蒔き散らすに違ひない。純一は憤激するよりも、寧ろうら悲しくなるのであつた、この美しい丸帶もこれを着けるその幸福な人よりも長く生きるのだと考へて、奇妙に憂鬱な、無常迅速と云つたやうな寂寥に沈んでしまふのであつた。

舟井は時々立止つて陳列臺の上にある、凡そ二三十圓から四五十圓までの大島紬、お召、縮などの男物、女物を問はず、片端しから賞めずるやうにその黄色い長い手でつまみまくつて、「これはいい」「これは澁い」などと分り切つたやうな讃美を空費しながら、

「一寸でもこんな反物にさはるといい氣持だ、我々は時たまかういふ處へ來て、かうして觸るだけでも幸福を感ずるなア！」などと言つた。

宏はさうしたさもしい口は利かなかつたが、それからそれへと殆んど凡ての美しいものにその鑑賞の眼を向けてゐた。

「食堂へ行かう」と舟井が言つた。そこで皆はぐるりと三階を一廻りして、向う側の食堂の方へ歩いて行つた。見る

からに爽かな食堂は、中間に白い圓柱がここかしこに立つてゐて、食卓が幾列か一杯に据ゑ付けられて、それの全部が人間で埋まつてゐた。大抵は子供連れの夫婦で、彼等は日曜を幸ひに、山の手から來た樂しい外出者なのだ。その中にはたまに眞紅の薔薇の花をそのボンネットに飾つた、白い夏服の金髪の少女と、それの同伴者とが腰かけてゐるのも見えた。何處にもかけるところが無いやうでも、少し待つてゐるうちに立去つて行く者が絶えないので、やがて皆は席に就くことが出來た、それは圓柱の傍らの食卓で、かの金髪の少女のかけてゐる隣席であつた。宏はこの席を喜んでゐるやうであつた。メリイとか、若くはルイザとか呼ばれてゐるであらうその少女は、相手との會話をやめて、傍らに來た日本の書生の粗野な風采を少しの親しみも持つてゐないやうな美しい眼付でぢつと見た、その眼は間もなく街路の彼方の日本銀行の建物の方に逸らされた。窓は開かれて、白いカアテンがステインドグラスの窓枠にひらひらと閃いてゐた。

鮮かなアイスクリイムの黄色い色が盛り上つて、木の實のやうに水々しく見える二つのコップを盆に乘せて、白いエプロンを着けた女給が此方に近づいて來た。彼女は肩と肩との間を巧みに分けて、盆をやや高く捧げてゐた、肩揚を取つたばかりの十五六で、紅い唇をしてゐる娘であつた。そのアイスクリイムを西洋人の食卓に置いて、此方に來た時、宏が五人分のアイスクリイムをあつらへた。

「君の言ふのはどれだい？」と舟井が汚ない肱を食卓の上に露はにした儘で小聲でから言ひながら、急がしく彼方此方に動いてゐるエプロン姿を見漁つてゐる。

「待てよ、ゐない筈はない……」西尾宏はその金縁の眼鏡を眼の上に正しながら、そこから凡ての皿が出し入れされる大きい仕切り壁の小窓のところに眼を注いでゐる。

女給たちはあつらへを聞くと、そのところで一々向うへ言つてゐるのだ。彼等はかなり忙がしさうではあつたが、

物馴れた聰い樣子で時々朋輩同士の微笑を取り交してゐた。

「ア、あそこにゐる、あそこで皿を集めて彼方向きになつてゐる、あれだ……」

皆が視線を遠方の方の食卓に向けた。今しも一家族全體で占めてゐた食卓が空いて、代りに二人の女學生が腰かけたその食卓で皿を重ねて此方に向いたが、傍らにゐる女學生が妙に貧弱に見えるのは、そのエプロンの美しいすらりとした、しかも豐滿な給仕女との對照からであつたかも知れない。澤山の濃い髮の毛を處女らしいきちんとつめた束髮にして、白い耳がはつきりと見える、紅い帶の恰好よく結ばれた豐かな背中にエプロンの幅廣の紐が蝶々結びとか云ふ結び方で、それが白い翼のやうに見えた。腰のあたりの僅かなからげの下に桃色の腰紐がちらちらと覗いて、それが可愛らしく見えるのだ。純一がこれ迄見た事のないやうな美は彼女の中高な、鼻の高い、彫刻的な派手な顏立ちの中にあつた。近くで見るよりも遠くで見て美しい、また狹い部屋で見るよりも、こんな處、或ひは舞臺などで、その盛裝した姿で見る時に一層引立つやうな大柄な女であつた。然しこれはまだ彼女がその脣の色、睫毛の色、皮膚の光りを十分に見せない爲めであつたかも知れない。

「だが、こんな美しさは僕のやうな人間には親しみがない、冷たい美しさだ、僕に取つては惱ましい位のものだ」と純一は考へた。

「ウン、遠方から見てあれだけよく見えるのは少い、隨分派手な感じだ、成程君が好きさうなタイプだ、よくこんな處にあんな女がゐるな！」と舟井が著しく心を動かされた樣子で言ふと、宏は得意さうに微笑して、

「どうだ、僕の言つた通りだらう、希臘風の美だ、彫刻的な美だ、もつと近くへ來るといいんだ、なかなかいい眼をしてゐる、ぢつと見てゐると別の世界へ連れて行かれるやうだ。まだ表情なんか極く單純だから、それが一層僕にはこたへる、ここへ來させる法は無いものかな……」

「呼んで貰ふと云ふ譯には行かぬかな」と深澤が言つた。
「君の曲水孃とどうだい？」と微笑して宏が言つた。
「曲水孃か……困るなア」と深澤は面白さうに笑つた、「豐滿な點に於いては遙かに曲水孃が勝つてゐるよ、體量十八貫以上かも知れんからな」
純一はその他の多くの女給の中に、その髮の工合身體つきの細々した樣子やらで何處やら冬子に似てゐるやうな、最も年若さうな女給をふッと見出した。だが、それが冬子に似てゐると云ふ事すらも彼は口から出さなかつた。
アイスクリイムが持つて來られた、唇の紅いその女給の眼は金魚のやうで、丸ぽちやな顏をしてゐた。
「ねえ、ねえさん、あそこで今あつらへを聞いてゐるあの牡丹の模樣の帶をしめた娘は何と云ふ娘なの？」と舟井がかう云ふ事には馴れ切つた氣輕な問ひ方をした。
「あの人、菊子さんですか……」とその女給は振返つて、今はかの窓の方へ行つてあつらへを通してゐる朋輩の女給を見た。
「何處に家があるか聞かしてくれないか」と舟井が追つ掛けて訊くと、その娘は素ッ氣ない調子で、
「あちらへ行つて訊いて御覽なさい、私から申し上げるといけない事になつてゐるのです」と返事してさつさと向うへ行つた。
「自分がお見出しに預らぬもんだから嫉けてゐるんぢやないかね」と舟井が一寸忌々しさうに言つた。
「なに、訊いて來てやるさ、何處の娘か直ぐに分るよ……」
「舟井君も隨分の信者になつたもんだ、訊きに行くのかい？」
「勿論行く」と言つて、彼はつかつかと向うの方へ行つてしまつた。どんな風にして聞いて來たのか、二十分程して

彼はにこにこして歸つて來た。

「分つたよ、分つたよ!」

「どう言つて訊いたんだ?」と宏が心配さうに訊いた。

「なに、譯はない、から言つたんだ、事務所へ行つて、私はここの食堂に出てゐる菊子の遠縁の者ですがと言つて、いろんな話をして、たうとうすつかり聞き出してやつた……」

「何處にゐるんだつて?」と宏が眞實な調子で訊いた。

「神田の田代町だ、何でも父親が無くつて、これと云ふ商賣もしてゐない家らしい。善は急げだ、一つ俺は今日歸りに行つて見る」

「なかなか探險家ですね」と深澤の友人が先刻から呆れたやうな顏をしてゐたが、たうとうから言つた。

「さうだよ、こんな事でもしなくちや世の中は一向つまらないからさ」

隣席には西洋人のあとへ若夫婦が腰かけて辨當を食べてゐたが、これ等の話を聞いて、驚いたやうに眼を見交してゐた。

十二

舟井國之助が神田の田代町へ訪ねて行つて見ると、その家は狹い横町の路次の中にやうやうの事で見出された。たつた二間しかない薄暗い家の中で、年老つた母親と婆さんとが忙しさうに團扇張りの内職をしてゐた。その樣子のみじめなのに、さすがの舟井も變な氣がしながら、然しまたこんな境遇だからこそ此方の持ち出す話も旨い事行くだらうと云ふ目算も立つた譯である。

「私は舟井と申すものですが、實は僕の友人で――この男はその土地切つての財產家の次男ですがね――つい此の間三越で偶然此方のお孃さんにお目にかかつた譯です」こんな風な切り出しで、彼は僅かの間に言ひ度い事を言つてしまつた。

「こんな譯でしてね、僕が遣つて來たんですが、何しろ當人はお米の値段も知らないと云ふ坊ちやんです、言ひ出した事は後へは退かないと云ふ性分で、なかなかたのもしい情のある男です。此方にもいろいろ御都合もあるでせうが一つ考へて見てくれませんか」

先刻から團扇を張りながら熱心に聞いてゐた婆さんが、おかみさんよりも先きに返事をした。

「それは一つ考へて見た方がいいぢやないか、ねえ、おかみさん」そのお婆さんは何だか悦に入つたやうな調子で言つた。「私が言つた通りだ、何しろ此家の菊ちやんは素晴しい別嬪だから、あんな處に出てをれば遲かれ早かれ屹度いいお方のお目に止まつて、玉の輿に乘れるやうな身分になるんだと私が言つた通りだ……へえ、そんな財產家の坊ちやんですかい」

「さうですよ、今なんか三十圓もの家を一人で借りて御飯焚きの小母さんを雇つて、好き放題な贅澤な生活をしてゐるんですよ、何しろ月々國から取る金でも二百圓近いですからね。だから僕がいつも細君を持つたらいいと勸めてゐる譯なんです、今のうちに緊つて行かないと矢張り當人の爲めになりませんからね。然し、あの男の細君になる人は幸福ですよ、次男だから姑に仕へるなんて面倒も無いんだし、國には何百萬と云ふ財產もあるんだから、一生仕事をしないだつて贅澤に暮せるだけの分配はあるんだと言つてますよ。僕なんかのやうな貧書生は、ゆくゆくはあの男の玄關番にでも雇つて貰ふより外仕樣がありませんや」

「御冗談でせう」と娘のやうな面立をした、大柄な、けれども貧乏の爲めに賤しく窶れてゐるその母親は、いつか舟

井の調子に釣り込まれて、身を入れて聞いてゐる樣子であつた。
「あの男は今のところ戀煩ひツてところです、此方の菊子さんを三越で見染めてからは、何だかぼんやりしてしまつて、毎日のやうに勉强そこのけにして、三越へアイスクリイムを飮みにばかり通つてますよ、いくら夏だつてあんなにアイスクリイムを飮んだ日には、おなかをこはしてしまひませうよ」
「戀煩ひにアイスクリイムかよ……今時の若い殿御はアイスクリイムだ…… 昔ならばお茶を一杯ツて言つて薄茶を所望するぢやアないか、此間寄席で聞いたツけよ……」と婆さんは浮々した樣子で喜んでゐる。
「兎に角、私どもではあれの兄が只今習志野へ行つてゐますので、此の次ぎの休暇にでも歸つて來ましたら、よくよく相談して見る事に致しませう。こんなに逼塞してしまつて、あんな處に出してゐる位ですから、行儀一つ知らないお恥かしい次第ですが、そんなに望んで下さるお方もあると聞くと、俗にも親馬鹿と申す通り嬉しい氣もいたします。けれど、私一存には參りませんから、兎に角暫く待つて頂けるやうに言つて下さい」とそのおかみさんは舟井に言つた。
「先づこれだけの手應へがあれば占めたものだ」と舟井は心の中で舌打ちした。
彼は飛ぶやうに歸つて來て、宏の部屋にこの話をしに上つた。それはもう夕食もすんだ後であつた。西尾宏はどんな結果になるであらうかと幾分不安で待ちかねてゐたので、舟井の顏を見ると、彼は直ぐにもうそれが吉報と言つてもいいのを感じた。
「御苦勞だつたね、すまなかつたね、どうだつた？」
「〆め、〆め……だが、なかなか家が見付からなくて閉口した、行つて見ると薄暗い二間ツきりの家で、團扇張りの內職さ」

「フン」

「近所の婆さんらしいのが一緒に團扇を張つてゐてね、飛んだ愛嬌者だつたよ、僕がこれこれと言ふと、それは面白いと言つたやうに膝を乘り出して、今時の殿御はアイスクリイムかよ、昔は薄茶一杯所望ッて言ふわけで戀煩ひになつたもんだと講釋師氣取りで喋つてね」

「フン」

「かみさんもたうとう俺の辯舌に釣り込まれてしまつてね、そんな次第なら習志野から兄が歸り次第相談して返事をするとにこにこして返事をしたよ、まづ成功と言つていいね、喜んでるさ、兄貴だつて厭やだとは言ふまいよ、何しろ鳥取縣下切つての財産家の御次男樣だと云ふ觸れ込みだからな……」

「成程、僕は今日一層君の天分に敬服したよ、飛んだメフィストだな、さしづめその婆さんがマルタと云ふところだらう、序に口說いて見させたかつたね」と宏も上機嫌であつた。

「それは困るよ、あんな婆さんぢや、僕が可哀相だ。然しあのかみさんはさすがにあの娘の母親だけあつて、窶れてはゐてもなかなかいい女だつた、あれなら惡くはない、ここの炊事夫人よりもずつと上玉だ」

「それはさうだらう、そんなに氣に入つたなら俺の義父になり給へ」

「惡くはないな」

こんなに言つて二人が話してゐるところへ冬子が入つて行つて、

「西尾さん、お手紙」と言つて手紙を疊の上に滑らして、直ぐ下に降りてしまつた。けれども宏も舟井も自分達の話に夢中になつて、冬子の方へは餘り注意もしなかつた。

冬子は西尾宏への手紙を持つてこの二階の入口に來た時、部屋の中から聞えて來る舟井の話をすつかり聞いてしま

つたのだつた。立聞をするつもりではなかつたが、彼女は部屋に入る事も出來ず、階下に下りて來る事もしないで、棒のやうに立ちすくんだまま二人の話をすつかり聞いてしまつたのだ。手紙を置いて逃げるやうに下りて來た彼女は、苦しさうにわくわくしてゐた。彼女はその足で純一の部屋に入つて來た。

「御勉强ですか？」

「いや、今日は勉强は止めです、三越なんかへ引張り出されたので疲れてしまつかたら、もう寢ようかと思つてゐるのです」

「では、一寸の間お話ししませう」

冬子は純一の傍らに來てすわつた。菊の花の模様の中形の單衣を着て、半幅帶をきりきりとしめて、その上を前垂の紅い紐でしつかりとしばつてゐる樣子は、見るから涼しいやうな姿であつた。どういふ譯か心持の輕やかになつてゐる純一は、冬子の姿をぢつと見てゐたが、

「冬子さんは今日は美しい……」と言つた。

「まあ……私が美しいだなんて……」と冬子はヒステリカルに呟いた。

「ええ、今日は美しいですよ、いつだつて美しいんだけれど……」

「そんな事仰しやつたつて本當には出來ません、私をからかふやうなもんですわ、それよりか今日皆さんで見にいらしつた女給さんは大變美しかつたのでせう？　あなたもさう思つたのでせう？」と冬子は言つたが、輕く言はうとしたその聲は唇のところで歪みかすれた。

「舟井さんがその女給さんのお母さんの處へ行つて來たんですとさ、誰れかがその女給さんを思つて、舟井さんを賴んで、貰ひに行つたのですとさ、私今ふッと西尾さんの部屋でそんな話を聞いて來ましたわ」と冬子は誰れに語ると

もなく昂奮して言つた。

「何て仕合せな人だらう、三越のやうな美しい處へ行つて、いい着物を着て、樂な仕事をして、人の目に着いて、そのうちには誰れかに美しいとか優しいとか言はれて大騷ぎされて、いい人の處へ貰はれて行くなんて、本當に何といふ幸福だらう、いい星の下に生れた方に違ひないわ……ああ、私なんか本當にくさくさしてしまふ……私なんか仕合せなんか一生ありはしないわ……美しくはないんだし、親はしつかりしてゐないし、人には馬鹿にされてばかりゐるのよ。舟井さんなんか私を見さへすれば、何だの彼だのとつべこべ言つて、心の中では嘲笑つてゐるんだ……どうしてあんな男を家の母さんは信用するんだらう……嘘ツ吐きで、薄汚なくツて、卑劣で、あんな厭やな奴ッちやないわ。西尾さんなんか何にも知らないから、あの人を信用してらつしやるけれど、今にどんな迷惑をかけるか知れないわ、西尾さんの事なんか餘計のお世話ばつかりしてゐるんだもの……ねえ、龍田さん、あなたね、明日でも西尾さんに、決して舟井を御信用なさらぬようにと言つて上げて頂戴、西尾さんは屹度今にひどい目に遭ひますよ」

「そんな事は無いでせう、西尾君はあれでなかなか舟井には警戒してゐますよ、ただうまく使つてゐるのです、心配するやうな事はありませんよ」

「いえ、いえ……さうぢやありません、その女給の事なんか舟井が何かたくらみがあるんですよ、だからそんなに熱心に世話するんですよ、家の母さんでも屹度さう言ひますわ、西尾さんがいい家の方で立派だから、舟井が利用しようとしてゐるんですよ、母さんがいつもさう言つてゐます、この家へこんなに皆を集めたのも、舟井の魂膽ですわ」

「まあ、さういふ事も無い事はないでせうが、西尾君だつて誰れだつてそんなに利用されてばかりもゐませんよ、反つて舟井君の爲めに便利を得てゐる事も多いのです」

「まあ、龍田さん迄があんなに仰しやる……」多子がかう言つて純一を見遣つたその眼には、怨の暗い輝きがぎらぎ

らしてゐた。
「然し、冬子さん……」と純一は自分の言はうとする事を整理しつつ、
「あなたにはまだ本當の西尾君が分つてゐないのですよ、僕は何も惡く言ふつもりは無いんですが、あの男は昔から娘を追つかける事なんか當然だと思つてゐる男なのです。舟井と連れ立つて方々歩き廻つて商賣の女を兎や角言つてゐるのはまだしもなんです、あの男は僕たちと違つてさう云ふ方面では一種の魔力を有つてゐる男です。だから今度の女給の事なんか、舟井に欺されて遣るやうな事はありませんよ、あの男程損得のはつきり見える男は無いのです」
「西尾さんが……私には分りませんわ」
純一はこの冬子の言葉に刺戟せられて、もつと話を具體的にした。彼はそんな事を言はずにはゐられない自分を厭はしく感じながらも制御する事が出來なかつた。
「この前もこれによく似た事があつたのです、もう聞かれたかも知れませんが、今から三四年前、下條と云ふ子爵の家の美しい令孃に丁度今のやうに夢中になつてゐましたが、さうしてゐながらも臨時に雇つた何とか云ふ若い看護婦を、あの男は自由にしたのです、さうしてその關係は長くは續かなかつたやうですが、多少の金を取られたとか言つて、損をした、今ならあんなへまを遣りはしない、あの時はまだ年も若かつたから、拙い事をしたと言つてゐました」
「それは屹度看護婦が惡いんですよ、屹度西尾さんがあんなに構はない、立派な家の方だからと思つて、そんなに誘惑したんでせうよ、さうとしか思はれませんわ……」
冬子の語氣には西尾宏を辯護する意志が益々はつきりして來た。それが純一を一層不快な焦燥に誘ひ込んだ。彼は更に何事か言はうとしたが、それを唇のところで嚙み潰した。

「あなたは西尾君を大變よく思つてゐるのですね、勿論西尾君が惡い人間だとは僕も思つてゐないけれど……」

「惡い人だなんてどうして思ひませう、あのやうに我儘で贅澤で、そして氣が利いてゐて優しい方ですもの、同じ事でも舟井から聞くと腹が立つて腹が立つて堪らない事でも、西尾さんだと私どもの心持に丁度合ふやうに言つて下さるんですもの、母だつてさう申してゐます、西尾さんは確かに御親切な方ですつて、たつた一言の言葉でもそれが有難く思へるんですもの……」

純一はすつかり疲れてしまつて、もう何も言ふ氣がしなくなつた。彼は西尾宏が勝手な事をすればする程、それが一種の魅力となり、有力な資格となつて、更に新しい快樂とやさしい信頼とに逢着する事の實際を見せ付けられたのである。彼は惱ましい心でこの人生の不合理を考へて見た、けれどもそれは今の彼には眼にも及ばぬやうな暗い深淵のやうに思はれた。

「どうなすつたの？　默つてしまつて……」

冬子はかう言つて氣遣はしさうに純一を覗いた。彼女は自分の言つた事が純一に齎らした暗鬱なものを少しも氣が付かないやうであつた。

「家にばつかりゐらつしやるあなたが、あんな處へ行つたんですもの、疲れるのは當り前ですわ、でも美しくつてよかつたでせう、私も近いうちに巣鴨の叔母さんと一緒に浴衣を買ひに行く相談がしてあるのよ、三越は餘りぴかぴかしてゐて五圓ぽッちの浴衣なんか恥かしくつて買へないやうな氣がするんですけど……遊んだり見たりするには面白いわ」

純一はかの千五百圓の丸帶がきらきらと光つて硝子の陳列棚の中に垂れてゐたのを思ひ出した、その千五百圓といふ莫大な金額と、一人の少女の一生とを考へて見た。その帶一本の金額が一人の少女の一生の幸福ともなり、不幸と

もなるのだ、そんな感傷的な氣持はとりわけ此の場合しみじみと思ひ出された。
「私……女給にならうかしら……でも、駄目ね、女給は容貌試驗があるんですもの、賣子ならばいいかも知れないわ、三越でも白木屋でも松屋でも隨分澤山の賣子がゐるでせう、賣子ならば雇つて貰へるかも知れないわ、時々母さんは私に藝者に出るがいいと言ふんですよ、神樂坂の姉だつて今の藝者は藝がなくつたつていいんだから心配しないでいつでも來るがいい、姉さんがいい藝者にしてやるからと言つてくれるんですけれど……何しろ私はこんなに髮が惡いんですもの……縮れッ毛が丁度左の鬢にあるんですから、島田なんかには大困りなのよ……いつでも髮を結ふたんびに泣きたい思ひをするんですよ、癖直し藥なんてありますけれども、そんなに利かないんです、熱い湯で何度も癖直しするより外ないんです、人の二倍も苦勞しなければなりませんわ……あんたのやうに坊主なら譯はないわ」と言つて冬子は思ひがけなく笑つた。
「今朝、皆さんが出て行つた後で、私は思ひ切り廂をふくらませて大きく派手に結つて見ようとしたのよ、でも駄目なの、水が乾いてしまふと直ぐにペコンとなるんですもの、何て因業な髮でせう」
こんな話は純一にはただ聞いてやるより外に返事のしやうがなかつたが、ふッと彼は思ひ付いたやうに、
「ではね、冬子さん、あなたは分けるといい、西洋の寫眞なんか見ると反つてそんなに縮れてゐるのが小波のやうで自然な美しい縮れに見えて美しいからね、無雜作に分けて束ねるといいでせう」
「そんな事したら支那人の娘だと思はれますわ、家の母さんが怒つてしまふでせう、たつた一筋ほつれ毛がこぼれてゐても、だらしのないつて怒りますもの、その癖母さんはあんなに短くつて困つてゐるのに一つも同情がないんです…今日の女給さんはどんな髮でしたこと？」
「女給さんの髮ですか？」純一はかう言つて後を曖昧にした、かの麗しい黒髮について言つて見ても仕方がないので

あつた。

「まだ話ししてゐるんかしら、いつ迄話し込むつもりなんだらう？」と冬子は舟井に對する奇異な憎惡をはつきりと見せながらかう呟いて緣側の方に出た。

「あ、月が出てゐる……」と彼女は呟いた、それから暫くの間柱に靠れて、純一を呼んで一緒に月を見ようと言ふのか、それとも舟井が二階から下りて來るのを待つてゐようとするのか、或ひはどちらとも付かぬ心持であるのか、長い間そこにゐる氣配がしたが、純一は先刻からの面倒な彼女との對話に疲れてゐたので、可哀相な氣もしながら出て行つて相手にならうと思ふ氣も出なかつた。

「おやすみなさい、龍田さん……」纖穗もなくかう聲をかけて置いて、冬子は庭下駄を穿いて何處かへ出て行く樣子であつた。丁度この晚は冬子の母親は何處へ行つたか留守であつたので、冬子のゐない階下はひつそりとしてゐた。二階には時々遠い話聲や笑ひ聲が洩れてゐた。

十三

「何だつて冬ちやんは此頃俺を目の敵にするんだらう？　物を言つたつて返事もしやしない、いつも白い眼ばつかりしてゐる」と舟井國之助が食事の時——彼だけは最初から冬子親子と同じ食卓で食べてゐるのだつた——小母さんに呟いた。

「どうして舟井さんにそんなにするんだい、冬ちやん』と母親が傍で食べてゐる冬子の方を見た。

「私はもとツから舟井さんにいい氣持ち持つてやしませんわ、いつだつて私の事をよくは言はないんですから、私の方だつて此の通りでいい筈ぢやありませんか」

「それ、そんな言ひ方だ、兎に角何か俺は冬ちやんに對して相濟まぬ事をしたらしいな、自分ぢやとんと分らぬが……これぢやまるで冬ちやんの袖でも曳いて肱鐵砲を食つてるやうなもんだ、つまらん話だ。これ、もうこれからはそんなに冷遇しないでくれ、ねえ、いい子だ、今度市村座へ連れてつて遣らう」
「お氣の毒さま、そんな事して頂く譯はありませんわ、三越の女給さんを連れてくがいいわ、美人ださうだからね」
「わかつた！」と舟井が大仰に叫んだ「なアる程……冬ちやん、嫉いてるな。無理もない。だが何も俺に食つてかかる譯はないぢやないか」
「ところで大ありなのさ……あなたはね、一體いけませんよ、卑しくつていけませんよ、西尾さんを欺さうとしてゐるのよ、女給の家へなんか行つて賴まれもしない事をしてるんだもの、うるさいッちやありやしない」
「そんなに言ふもんぢやない、此の親切な舟井國之助をそんなに侮辱するものがあるか、これが男なら直ぐにぶッぱたいて遣るんだけれど」
「此方こそ我慢が出來ないんだよ、西尾さんがお困りになるのが見え透いてるぢやないか」
「西尾が困るもんか、喜んでゐらア、見てをれ、今に女給さんを手に入れて、二人お揃ひで冬ちやん達に見せ付けるだらうよ、あの男はどんな女だつて直ぐ手の中に入れてしまふからな」
「嘘おつしやい、あなたが女給さんを取持つていい事しようとしてるんぢやありませんか、厭やな人だわ、ね、お母さん」
かういふ話し聲が一間隔てた純一の部屋へ聞えて來るのだつた。純一は丁度その時急ぎの仕事をしてゐたが、冬子と舟井との問答がかなり可笑しな狀態だつたので、ぢつと耳を澄ました。
「舟井さん、だがお冬の言ふ通り餘計な世話はしない方がいいぢやないか、何もあんたがそんなにしなくたつて、西

尾さんは女旱りがしやしないよ、男振りはいいし、お家は豐かだし、今にお國からお優しい奥さんを貰つていらつしやるよ」と多子の母親が舟井にたしなめるやうに言つた。
「あッちからもこッちからも、さうくどくど意見されちや堪らない。何も無理やりにあの女給を西尾に押ッ付けようなんてつもりが俺にあるものか、西尾が見てくれと言ふから見に行つたんだし、調べて來てくれと言ふから調べて來たんぢやないか、お前さんに文句なんか言はれる譯は無いんだ。多ちやんだつて何も俺をそんな風に言ふ權利は無いよ、西尾さんのおかみさんぢやあるまいし……」
多子が何と言ふかと純一は好奇心をもつて暫く待つたが、多分は伏目になつていくらか剌い顏をして不機嫌さうに默つてしまつたであらう、多子の返事はつひに聞かれなかつた。
「そりやアね、お前さんのなさる事だから、それを彼れ是れ私が言ふ譯は無いだらうけれど、俗にも言ふぢやないか、釣合はぬは不緣の基つて、そんな團扇張りの內職をしてゐる娘と西尾さんとを一緒にした處で長續きする筈はないやね」
「そんな事はてんから問題ぢやないんだ、あの男は手に入れさへすればいいんだ、厭やになつたら捨てもしようし、矢つ張り我儘な遣り方さ。子でも出來るなら金で片付くもんだと言つてるよ、俺なんかよりずつと徹底してゐる。あの男の兄貴もその點にかけちや凄いもんだが、宏の方が兄貴よりも大膽だ、それに兄貴と違つて妙に女に持てる男だ、これからどんな罪造りするか知れたもんぢやない、それを俺が一々お取持ちでもしたやうに取られては堪らぬよ、そんな苦情は拂ひ下げだ」
純一は不圖先き頃讀んだピエエル・ロティの『お菊夫人』に出て來る、お菊夫人をロティに取持ちした長崎の男カングルウを思ひ出した。その佛蘭西本の挿繪に載せてある、通辯もし洗濯屋でもありお嫁の周旋もすると云ふカングル

ウの丁髷を頂いて、傍らにステッキと山高帽とを置いて尺取蟲のやうにお辭儀をしてゐる滑稽な姿と、もみあげの長いどろりとした眼付の、長い顏の舟井國之助とを考へると、それは可笑しい聯想であつた。してまた、ピエエル・ロティのお菊さんに對する玩弄的な性的關係と、純一に取つては厭はしいものである彼の主我的な、冷酷な心の上に成り立つてゐるロマンティシズムを西尾宏の生活信條に比較する時、そこに相通ずるものが見出されるのであつた。

「然しまあ小母さんにしたところで、今ここに大層働きのあるいい家の息子からあなたの處の冬ちやんを見染めました、そして冬ちやんを貰へなくちや生きてはゐられないなんて事になつたら惡い氣持はしないだらう、それと同じ事さ。さうさう團扇張り團扇張りと言つて貶すものぢやない、ちつたア同情したつていいぢやないか」

「私達だと綺麗さつぱりお辭りしますよ、それよか藝者に出した方がどんなに增しだか知れない」

「さうよ、さうよ」と冬子がいくらか元氣になつて言つた。

「私ならば本當に見向きもしないわ」

「本當だな、本當に見向きもしないんだな、ぢや若しかして西尾宏が明日にも冬ちやんをお嫁に欲しいと言ひ出したら、それも綺麗にことわるだらうな」

「そんな事知りませんよ」

「さうだね」と母親の聲がした、「西尾さんならば特別として、それでは差上げますとお母さんは言ふかも知れない。西尾さんは舟井さん何かと違つて、冗談は冗談、眞實は眞實とちやんと使ひ分けの出來る人だからね、いつもだらしのない人間ぢやないからね、ああいふ方なら娘を遣つたつて心配はないよ」

「娘よりも母親の方が餘つ程執心だな」と舟井がからかつて言つた。

「西尾君の魔力には驚くよ、それでは意見が聞いて呆れる、俺に說教するよりも、一つ冬ちやんを西尾君に向けては

どうだい？」

「冬子がさう云ふ氣ならさうしてもいいよ、けれども冬子は西尾さんより龍田さんが好きだと言つてるからね」

「嘘ばつかり、私そんな事言つた覺えありませんよ、母さんがこさへ事言つてるのよ」

「やうやう俺には分つて來たよ、冬ちやんはそれでふくれてゐたんだ。三越の女給の家へあんな使ひに行つたのは、この舟井國之助一期の失敗だつたよ、成程……小袋と小娘とは油斷がならない」と舟井はわざと厭やがらせるやうにこんなに言つた。

　西尾宏と女給との問題で家中皆（いへぢうみんな）の氣持が妙に昂奮して來た。訪問客も殆んどそれを知つてゐて、とりわけ深澤久滿一などは興味を持つて繁々とその後の發展を探訪に遣つて來た。舟井國之助は冬子親子から愚圖々々言はれながらも、一度火を點（つ）けた花火を樂しむやうに、かなり進んで幾囘も神田田代町へ通つた。

　習志野に行つてゐる兵隊の兄が歸つて來て舟井と談合した、けれども話は兎に角も少し考へさせてくれと云ふ位にしか片が付かなかつたが、當人がいいと言ふならば勿論異存は言はない樣子であつた。かう云ふ風になつてから西尾宏は舟井と連れ立つて、神田の陋巷へ二三度訪れた。けれども二人はかたく祕めてそれを冬子親子に知られる事を恐れてゐた。舟井にさう言はれる迄もなく、宏は冬子親子の感情はずつと以前から知つてゐるのだつた。それを知つてゐて、時々巧みに冬子をからかつてゐたのである。

　宏の部屋へは最初から冬子が大方食膳を搬んでゐるのであつたが、この頃時々冬子はお母さんが持つてて下さいよと言つて、どうしても二階に行かうとしない事があつた。女給の事件が起つてから、妙にむら氣になつた冬子は母親にも冷淡なやうな物の言ひ方をしてゐたし、以前のやうに純一の部屋に來て、話をして下さいなと言つて靜かにすわつてゐるやうな事も無くなつた。

「うるさいね、おまへは、又そんな事を言つてお母さんを困らせる……」
小母さんも此頃はいらいらしてゐた。冬子が何かに付けて愚圖々々してゐるので、こんな言ひ方をして親子でいがみ合つてゐるやうな事も折々純一の眼に付いた。
或る夕方、湯上りの薄化粧をして、純一がこの家に部屋を見に來た時彼女が仕立てゝゐた明石の着物に博多の帶を可愛らしく結んで、椽側で冬子はにこにこしてゐた。
「どうしたのです？」と純一が訊ねた。
「私ね、今晩いい事があるのよ、當てて御覧なさい」
「さあ……芝居ですか？」
「いいえ、私、今晩神樂坂の姉さんがお客と一緒に國技館の納涼博覽會へ行くんで、連れてつてくれるんです、あなたも一緒に行きませんか」と冬子は氣も浮々してゐるやうであつた。
「姉さんと行けば私が半玉かと思はれちやうわ、私、此頃藝者になつて見たいやうな氣がするのよ、以前は一つもそんな事無かつたのですけれど……」
こんなに言つて二人が話してゐるところへ、二階から西尾宏が下りて來て、
「ア、冬ちやん、一寸來てくれないか、僕の洋服は何處に置いたんだい、あのポケットには手紙があつたんだが……」
「そんなものありましたかしら、無かつたやうでしたけども……」と言つて、冬子は氣輕に二階へ上つて行つた。
「君も話しに來ないか」と宏は一寸純一の眼を見て言つた。
「アア」と純一は言つたきり動かなかつた、その癖妙にそこにゐるのが苦しいやうな、何だかわくわくした氣持であつた。

「何でもないぢやないか、どうしたんだらう……」と彼は思ひながらも、二階の方へ無意識に注意が向くのであつた。すると暫くして多子が少し息をはずませて二階からばたばたと下りて來た。

「遲くなつてたらどうしよう、すつかり愚圖々々してしまつた……」と言つて、純一の後を足早やに通りすぎて、やがて出掛けて行つてしまつた。純一は何だか寂しいやうな空虛な氣持で何も手に着かなかつた。

その翌日、純一は仕事のことで外出して、序に久しく行かなかつた林田先生の家を訪ねたりして、夕方に歸つて見ると、小母さんは今日も留守で、階下には誰れもゐなかつた。多子がゐないと云ふ事は滅多に無かつたので、何處か庭の方にでもゐる事と思つて、その儘自分の部屋に入つて着物を着替へ、勝手の方へ行つて手足を洗ひ始めた。ザアザアと水音を立てながら洗つてゐたので、ちつとも氣が付かなかつたが、ふッと顏を上げた時に、便所から出て來る西尾宏にばつたり視線が合つた。

「いつ歸つた……ちつとも知らなかつた」と何だか硬い顏付をして着物の前を神經質な手付で合せながら宏が言つた。

「留守かね、みんな……」と純一が言つた。

「ウウ……ゐたやうだつたぜ、庭にでも出てゐるんだらう」と宏は言つて、その儘俯向き込んでゆつくりゆつくり二階へ階段を上つて行つた。

それから暫くたつて、自分の部屋にすわつてゐた純一は、家の半ばを取り繞らしてゐる庭の方から誰れかが勝手口を上つて來る足音を聞いた、彼が簾越しにひよつと向を見ると、茶の間の障子を開いて、その袖で顏全體を蔽うてふらふらと入つて來て、そこへべつたりとすわる多子を見た。

「氣分でも惡いのかしら？」と純一は思つたが、默つてゐた。多子は純一の方には顏を向けなかつた。

小母さんが歸つて來ると、冬子は氣分が惡いと言つて早くから寢床を敷いて寢てしまつた。
「うるさいから默つてて頂戴よ、お母さん」と冬子は時々舟井と世間話をしてゐる母親を叱つた。
「龍田さん、あなたも今日お出かけだつたのですか？」と小母さんは純一が水を取りに勝手へ行つた時訊いた。
「一日留守でした、先刻歸つて來たばかりです」
「それぢや夕飯はまだでせう」
「いや、先生の家ですまして來ました」と純一は言つて自分の部屋に引取つた。
「舟井さん、あなたの御贔屓のあの女給さんはあれからどうして？」冬子が突然、思ひがけない積極的な調子でから言つて、寢床から蚊帳越しに茶の間の方の舟井に訊いた。
「女給か、冬ちやんがあんまり嫉くから僕も西尾君もあれつきりにしてゐるのさ」
「嘘でせう、屹度何かあるのよ、私に話して聞かせて頂戴、いつかのやうに混ぜッ返さないで聞きますわ」
「そんなにおとなしく言はれると、言はなくつちやならないやうなもんだが、何も無いのさ」
「でも、あの兄さんが考へさせてくれと言つてから隨分になるぢやありませんか、もうかれこれ一月近いわ、どうなつたの？」
「ウン……」と舟井は喉で返事をして、默つた。
「西尾さんの樣子では何だかそれつきりのやうぢやありませんか」と母親が言つた。
「それつきり……ウン、それつきりだ」と舟井が唸つた。
「初めつから分つてゐる事だわ、舟井さんばかりが骨折り損の草臥れ儲けだわ、ねえ、お母さん」と冬子が笑ひながら言つた。

「骨折り損の草臥れ儲けか……冬ちやんにすつかり笑はれてしまつた、そんな事言つて今に冬ちやんが男狂ひでも始めようものなら、舟井の小父さんの前に來て、助けて下さいつて黄色い聲で泣いたり拜んだりしなくちやならないぞ、そんな時初めて俺の有難味が分るんだ」

「本當だわね、ね、お母さん、舟井さんの言ふ通りだわ、こんな親切な人ッてありはしないんだからね、私が女給さんならば西尾さんよりもずつと舟井さんの方が親切だと思ふわ、それに舟井さんの方が苦勞してるから物分りがいいわね」

「物分りがいいか、ハハン……今夜は何だつてそんなにお世辭を振蒔くのだい？　頭痛がしてゐると云ふ癖に……」

「いつもあんまり虐めてゐたから濟まないからだわよ……」と冬子は言つて、それきり默つて、寢たのか寢ないのか靜かになつてしまつた。

純一は長い間眼が冴えて寢られなかつた。彼は隣の部屋にゐる冬子とその母親との小さな寢息が靜かな夜を忍びやかに縫つてゐるのを聞きながら、これ迄にない感情を以て、靜かなたつた一人の生活といふ事に就いて考へた。彼は何處かへ明日にも引越してしまひたいやうな氣がした。西尾宏が最初に言つた通り、親しい友人同士の同居は實際厭やなものだ、否、苦しいものだ、丁度互ひに身體を逆様にして見合ふやうなものだ、互ひに何と云ふ竦み方であらう。それは初めから分つてゐない譯でもなかつたのに、どうしてこんな生活を始める事になつたのであらう。しかも純一は既に何かの不吉な暗いものに氣が付きながら、やつぱり思ひ切つて此の環の中を拔け出す決心はつかなかつた。否、反つて、一層力強い何物かが彼を錨のやうに引き止めるのを感じるのだつた。時々、ヒステリカルになつて笑つたり泣いたりする一人の少女が彼の心の靜安を掻き亂してしまふ、それでゐてその少女を自分の關心から引き離してしまふ事が出來ないのである。

「戀かしら？」と彼はこの異樣な苦しい感情に就いて考へるのであつた。けれども彼には戀だとは思はれなかつた、それは丁度兄が妹にするやうな慈しみの愛であり、やさしく庇ひたい氣持であるとしか考へられなかつた。宏の顏を見る時彼には冬子の事が考へられ、冬子と話してゐる時には宏の事が頭から離れなくなつた。さうした自分の心を省みるとき、彼はその心の動きが飽くまで正しいとは信じながらも、何だかさうした自分が非常に慘めなものに思はれて、それが彼の自尊心を傷けた。疑惑の心が強くなるにつれて、さうした彼の苦痛も增して來るのであつた。

冬子親子や純一が知らないうちに、西尾宏と舟井國之助との方では、神田田代町から小石川の上富坂の方へ引越した藤橋菊子の家へ繁々と通つてゐるのであつた。菊子の母親は團扇張りの內職を廢めて、家の掃除だの縫物だのにその日を暮してゐるのだつた。

「これは小母さん達に言つてくれては困るがね……」と次ぎの夜舟井に連れ出されて近所の寄席へ行つた時、純一は彼から聞かされた。

「例の女給事件だがね、萬事うまく行つたので、西尾は結納金の準備に國に歸つて來るさうだ。どうせ親父も兄貴もその道にかけては豪の者だし、他人に辛いだけ身うちに甘い家風だから、うまく納得させて來るだらう。既に先方では家も小石川の方へ引き移つてゐるのだ、勿論三越へ出るのは近々に廢めるさうだ。僕もこんなに旨く纏まらうとは思つてゐなかつたよ。何しろ西尾は果報者だ。むかうぢや喜んでゐるらしいんだ、僕の觸れ込んだのが仰山だつたから、餘つ程の見ッけものだと思つてゐるんだ、今にだんだん襤褸が出て來ると失望するかも知れないが、もうその時はその時さ、文句なんか言へないやうになるんだから、納まるよ。ところで、さうなると勢ひ今の家は解散しなくちやならないが、なに、又いい家はあるさ、何處か綺麗な離れか何か借りて君と二人で遣つて行かう、お互ひに便利だからね」と舟井はひそひそ話した。

「まあそれは兎に角、西尾君がそんなに行つてしまふと、多子も母親もどうなるんだらう？」
「あの親子か、なるやうになるさ。別に西尾が引つかけてゐる譯ではないんだから、面倒な事はない、ただこれから今のやうな狀態だと面倒で困るのだ。なんしろあの小娘が今ぢや本氣になつて西尾に參つてゐるんだし、母親がしたたか者で、西尾を自分にでも娘にでもと言つた調子なんだから、西尾が早速逃げ出さうと云ふ事を考へたのは尤もだ」
「だが、君はどう思ふ、西尾君は何かいたづらをしてやしないかね？」と純一が思ひ切つてから訊いた。
「そんな事はないだらう、あんな子供ぢやないか。だが、凄い男だから何してゐるか知れないとは思ふ。然し、どちらにしたつて問題ではない。萬一何かあつたところで俺が中に立てば、立派に解決つけて見せるよ」と舟井は寧ろ何事かあれかしと言つたやうな調子で言つた。
こんな考へ方で、こんな人間が用捨なく此の世の中から、純潔なもの、美しいものを踏みにじり摘み棄てて行くのだ。さう思ふと、純一は恐ろしいやうな氣がした。
それから二三日して、西尾宏が急に思ひ付いたやうな言ひ方で、明日歸國すると小母さんに言つた時は、小母さんは變な顏をして、
「へえ、それは結構ですね。けれど外の學生さんが東京へ來る時分に、あなたは歸つていらつしやるなんて氣まぐれですね」と言つて笑つた。
宏は調子よく田舍の話をして、自分の親達の事を言つたり、兄夫婦の事を話したりした。
「小母さんも多ちやんも一度來るがいい、それはいい處だよ、それに僕の兄貴の家内は龍田君も知つてゐる人で、それはなかなか優しい人だからね。何なら明日一緒に行かうぢやないか」と言つて見たりした。

「本當に連れて行つて下さいな、私もこれで田舎が好きなんです、出雲の神樣のあるところでせう？」と小母さんが言つた。
「さうです」
「ぢや、猶更らいいね、冬子の御緣談でもお頼みにお詣りしようかね」
冬子は素知らぬ顏をして默つてゐたが、その樣子には俄かに沈んだ悲しさうなところが現れた。
「出雲の神樣つてどんな願ひでも聞いて下さるか知ら？」と急に思ひ詰めた調子で冬子が言ひ出した。
「さうなんださうだ。例へば冬子さんの緣談も願へば叶へて下さると云ふ神樣だ」と宏がかう言つて微笑した。
「いい神樣ね」と冬子が沈んだ調子で呟いた。
「捨てられた時元通りにと言つてお頼みする神樣は何の神樣でせう？」
「捨てられる心配でもあるのかね、捨てられた時には舟井國之助といふ神樣があらたかださうだ」と宏が言つた。この戲れは冬子を不機嫌にした。彼女はその眼に涙を浮べて、ツイと立上つて勝手の方へ行つてしまつた。
西尾宏が國へ歸つて行つた翌日であつた、この家へ藤橋菊子が舟井國之助を訪ねて來た。彼女は三越を廢めて、今では女優のやうな派手な服裝をしてゐた。髮なども手際よく房やかに結つて、きらきら光る櫛を幾枚も挿してゐた。その日の服裝は金紗縮緬の單衣に鹽瀨と博多の晝夜帶をしめて、絹綱のかかつた桃色のパラソルを提げてゐた。そんな服裝は一層彼女を引き立たせて、道行く人がみんな振返つて見た。
取次ぎに出たのは小母さんだつた、舟井は生憎留守だつたので、菊子は上には上らないで歸つて行つた。その後姿を母親と一緒に冬子も見送つた。
「高慢な顏付ね！　母さん」と冬子は母親にささやいた。

「本當だ、舟井さんはゐらつしやいますかと言つて、ツーンと澄ましてゐたよ。あんな鼻の高い顏を見ると厭やーんなつちまふね。あれが西尾さんの大好きの美人かね、蓼食ふ蟲も好き好きと言ふが、本當に可笑しなもんだ、男つてものの氣心は分らないね」と母親は憤慨するやうな呟き方をした。
「でも、美しいわ、あれだけの押出しの立派な人はさうありませんよ。私達なんか惡口言ふのは間違ひだわ。けれどあんなに高慢なのは厭やね、西尾さんはあんな人と一緒にならないで本當によかつたわ」
「全くだね、西尾さんのやうな我儘な坊ちやんと、あんな高慢な女とが寄れば、喧嘩ばかりしてなくちやならないよ、三越で女給してゐたつてのに、何で威張るんだらう」
「それだから威張つて見たいんだわよ、そんなものかも知れないと思ふわ」
冬子と母親とは一しきりこんな話を續けてゐた。

十四

冬子が純一に對する樣子には、以前のやうな親しみは失はれた譯ではなかつたが、どう云ふものか妙によそよそしかつた。隣の部屋にゐても、以前のやうに母親とつまらぬ事を母子らしい言葉付きで言ひ爭つたり、笑つたりするやうな事が尠くなつて、ゐるのかゐないのか分らないやうな靜かな樣子で縫物なぞをしてゐるのであつた。そんな樣子は皆の眼に付いた。母親などはそんな風に愼ましくなつたのを喜んでゐる樣子であつた。
「多ちやんは此頃ひどくしをらしくなつたぢやないか」と舟井が通りがかりに言ふと、
「全くだね、何だか大人しくなつたよ。だがもう十八なんだから、昔ならば赤ん坊の一人でも抱いてる齢だから、本當におとなしくして貰はなくちや困るんだよ」

「私、この頃そんなに大人しいかしら、別段昔と變らないぢやありませんか」と多子は勝氣さうな言ひ方をして笑つた。

西尾宏がこの家からゐなくなつて、妙に中軸を失つたやうな風になつて、純一にしても何だか打寛ろいだやうでもあると共に、妙にがつかりしたやうな寂しい氣持だつたので、多子が眼に見えてつまらなさうに默り込んでゐる氣持が分るのであつた。一週間位で歸つて來ると言つてゐたのに、宏はなかなか上京しなかつた。純一に宛てて來た手紙によると、多分上京は來月初旬であるとの事であつた。彼の手紙は信太郎の手紙などと違つて、殆んど鄕里の匂ひを卷き込んでなかつた。彼は鄕土的な人間でない通り、その手紙も殆んど東京で書いたのと變りはなかつた。けれども、最後にかう云ふ事を附け加へてあつた。

「兄と敏子さんとの間はどうも面白くない」

どう云ふ風に面白くないのか、それに就いては一言も書いてはなかつた。だが、宏のやうな他人の事に――たとひそれが自分の家族であらうとも――全く興味を有しない無頓着な男がこんな言葉で言つて來る位だから、敏子がどんなに苦しんでゐるかは容易に想像が出來る。純一はこれ迄も一度ならず敏子にその身の上をたづねる手紙を書き出したことがある、けれども彼女の今置かれてゐる境涯を思つてはそれを破つてしまつた。敏子の事を思ふと、彼は何だか胸が苦しくなるので、いつももう思ふまいと急いで消してしまふのである。敏子に對する彼の感情は、土地の隔り、歲月の隔りによつて、いつかは深い水底で鳴り出づる鐘のやうに彼の胸底に沈んでゐるのだ。

純一は幾度となく宏に宛てて手紙を書きかけてはやめてしまつた。宏の性格とその生活信條とを熟知してゐる純一は、自分がただ愚かに見えるやうな事は書きたくなかつた。

「お手紙書いてゐらつしやるのですか、西尾さんへ」

或時、椽側から障子の眞中に箝めた硝子越しに机の上を覗き込んで多子が訊いた。
「私からもよろしくと書いて置いて頂戴」
「多子さんも西尾君に手紙を書いたらどうですか、同封してもいいから」
「さうね、何か書きませうかしら」と多子は言つて純一の部屋に入つて來た。彼女はなつかしさうに眼を濕ませてゐた。彼女は宏の封筒を手に持つて繁々と眺めてゐる、純一は多子の眼が一皮瞼である事をこれ迄はつきり知らなかつた、ぢつと俯いて手紙を見てゐる彼女の柔かな上瞼に眉の毛が生え餘つてゐた。
「けども廢めませう、私は字が拙いんですもの、金釘流で書いて來たと言つてひどく笑はれる位ですわ。どうぞ多子からもよろしくと書いて置いて下さい」と言つてから、多子はそこに開いた書物を机の上でコツコツと音させた。
「私ね、今朝、花屋で温室咲きのコスモスを見付けましたの、買つて來て西尾さんの机の上の花瓶に挿しました、行つて見ないこと、あなたもあれつきり二階へ上らないんでせう、いいものが見付かつたから見ませうよ」
「何ですか？」
「行つて見れば分るわ」
こんなに誘はれて純一は多子と一緒に二階へ上つて行つた。
西尾宏の部屋は彼のゐた時と殆んど變りがなかつた。毎日多子が掃除に來て、部屋を整理してゐる上に、今では多子がここで縫物を擴げてゐた。今朝挿したと云ふ白と薄桃色とのコスモスが四五本涼しげに花瓶の上にもつれてゐた。
「まあおすわんなさい」と言つて、多子は宏の羽二重の座蒲團を純一に勸めた。
「こんなにしてここであなたと話するなんて、西尾さんは想像も出來ないわね」と言つて彼女ははつきり宏を思ひ出

すやうな笑ひ方をした。
「こんなものが西尾さんの押入の中にあるのよ」
から言つて彼女が押入から持ち出して來たのは、紫縮緬の絞りの美しいバックであつた。
「誰れのかしらと私いつも考へるのよ、なぜこんなものがあるんでせう、それに此中には懷中鏡が入つてゐるんですよ、女持の……」
「誰れのでもないでせう、西尾君のでせう。あの男はよく自分で女装して見たいと言つてゐる位ですから、さう云ふ持物があるのなんか不思議はないでせう」
「さうでせうか？」と冬子は純一の言葉を否定するやうに言つた。
「さうぢやないわ……屹度あの菊子とか云ふ女の人の物でせう」から言つて冬子は唇のまはりを苦しい感情で痙攣させた。
「龍田さん、私に本當の事を言つて下さい、西尾さんとその女の人とはどう云ふところ迄進んでゐるんです？　舟井さんに訊いても分らないのです。でも先方ぢや承知してゐるらしいのね、どうもさうらしいわ。今度西尾さんが歸つて行つたのは何かさう云ふ事の爲めぢやないんですか？」
「僕はよく知らないのですが……けれど西尾君はあの女の人を諦めたのぢやないでせう」
「私だつてさう思ふわ。けども、今はまだこれと云つて二人の間は……」と冬子はおしまひの方を消してしまつたが、その訊ねようとする事柄は分つてゐた。この時分から純一は冬子とこんな處でこんな對坐の相手となつた事を苦しく思ひ出した。けれども冬子は純一にずつと以前から言ひたい事、話したい事を、皆持ち出してしまひさうであつた。

「たしかそんな事は無い筈です、若しさうならば、西尾君があゝして國に歸る前に何かあるでせう。そんな事があれば知られずにゐる事はありませんからね」

「さうでせうか……」から言つて多子は心なしか聲が顫へてゐた。

「然し、西尾君はあの女の人と結婚をするつもりで、その準備の爲めに歸つてゐるのだと思ひます。僕も直接聞いたんぢやないから斷言は出來ませんが、屹度さうですよ。家を持つとなると、結納金や何やかやにどうしても纒つた金が必要ですから、家の方の了解を得なくちやならんでせうからね」

「お家の方で承知するでせうか？」

「多分承知するでせう、西尾君の家ではそんな事は他の家と違つてさう面倒がらないのです。それに西尾君はあの通りの人間ですから、言ひ出した事は押し通すでせう」

「まあね……」多子のさう低く言つた驚嘆は悲しさうな羨望であつた。

「でも、あの菊子さんと云ふ人は美しい事は美しいけれど、あれで西尾さんのやうな我儘で贅澤な人の奥さんになつて家が持てるのでせうか。家の母さんも、三月と持たないだらうと言つてゐます……何しろ二十二ぐらゐで家を持つなんて早いんですもの」

「然し、菊子と云ふ人の母親が萬事するらしいんです。西尾君はむかうの家へ入り込むやうな事になるんでせう……」

「それもさうね……」から言つて多子はその胸に大きな傷口でも開いたやうにしくしくと泣き始めた。

純一が默つてゐると、泣きながら多子はささやいた、

「あなたは私が泣いたりして譯が分らないでせう……これには深い事情があるのよ」

から言つて多子はまた一しほ泣いて、その肩をびくびくと動かした。

「舟井さんが意地が惡いからです、若し舟井さんがあんな事をおせつかいしなかつたら、私だつてこんな悲しい目には遭ひませんわ。みんな舟井さんがひどいんです。いろんな事が私の心を滅茶苦茶にしてしまつたからなんです」

冬子が啜り泣きながら話したのは、彼女と西尾宏との間柄であつた。彼女は、

「私は初め、自分の氣持がはつきり分らなかつたのです。いつかあなたが西尾さんについて仰しやつた時だつて、私は少しもそれが呑み込めなかつたのです。でも、今になつて分りました、隨分よく分りました」と言ひながら話し續けた。

彼女は西尾宏と知合ひになつた一番最初から、彼から何か話しかけられる事が嬉しくてならなかつたのである。彼がどんな事を言つてからかつても、彼女は表面は一寸おこつて見たりしても、心の中では得體の知れぬ嬉しさに包まれ、彼がもつとひどい事を言つても、厭やではなく、いつもそれを憧れてゐたのである。

「何て云ふ馬鹿な私でせう……」と冬子は言つた。

女給の事件がだんだんに彼女の心を掻き亂して來ると共に、これ迄のやうに自分をからかつてくれない人に對する心が、宛かも退潮に引き込まれて行く砂のやうに、ずるずると引かれて行くやうな狀態になつたのである。かういふ氣持から彼女は泣いたり笑つたり、つまらぬ事で母親と口論をしたのである。しかも宏に對しては彼女はなぜこんなに近くにゐる自分をさし置いて、遠いところの一人の女をそんなにもちやほやする事かと怨みがましい心持と、自分の存在をはつきりさせたい衝動とから、彼女は宏の前でそんな悲しみと惱みとを自から見出させたのである。

「いつか姉と一緒に國技館に涼みに行くと言つて、私があなたと話をしてゐた時、西尾さんが私を呼んだ事があるでせう。私が何の氣も付かず二階へ上つて行くと、後から上つて來た西尾さんがいきなり後から私の頸のところを兩手で挾んで、(僕はこんな小鳥のやうな娘が好きなんだ)と言つて……きすしようとなすつたんです。私は逃げ出してし

はしてから心がそはそはしまひました。後になつて私はすつかり恐ろしくもあり、困つた事になつたと思つて、家を出てからも心がそはそはして、姉さんから（此の子は何だつてこんなにはしやいでゐるのだらう、屹度いい事でもあつたんだよ）とつけつけと言はれましたけれど、私は嬉しいんぢやなくつて、足が地に着かないやうな氣持だつたのです。けれどだんだん心が落着くと一緒に、私は自分が何だか幸福な自分に思はれ始めたのです。西尾さんが女給の方よりも私を選んで愛して下すつたのですもの、私はそれが生れて初めての誇りでした……でも、まるで石鹼玉のやうな誇りですわ」

「ただそれだけですか、それだけならば……」と純一は引き緊められるやうな心持から言つた。さう言ひながらも、彼は全く違つた豫感にとらはれたのである。

「そんな事のあつた翌日、あなたも母さんも皆留守であつた時に、私がひとり茶の間で居ますと、西尾さんがお呼びになりましたから、昨日の事を思ひ出すと、胸が動悸打つて恐ろしいやうな恥かしいやうな氣がしましたけれど、たうとう私は階段を上つて行きました。すると西尾さんは、（どうして早く來なかつたの？）と仰しやつて、それからこの間中ずつとどうしてお母さんと喧嘩ばつかりしてゐるのかとか、龍田君と此間どんな話をしたかとか、隨分二人は仲がいいので羨ましいとか、大變優しい調子で話してくれましたから、恐ろしいやうな嬉しい心持で私は話し込んでをりました。すると西尾さんは急に私の耳近いところで、（昨日どうして逃げ出してしまつたのかね？）と言つて、私の頸をいきなり昨日のやうに兩手で締めるやうになさいました。そして、（菊子なんかより此の方が可愛らしい、あれはちつとも本氣ではないのだから心配しないでもいいんだよ、さあ、かうすれば安心が出來るよ）と言つて、御自分のしたいやうになさつたのです……」

冬子はかう言ひさして、默つてしまつた。彼女はもう泣いてはゐなかつたが、その顏つきと云ひ、擧動と云ひ、强い悲しみから來る亂れた感じを取り繕つてはゐなかつた。それが純一に對して眞面に見てゐられないやうな痛みを感

じさせた。たつた一時間前まで、否、彼女がそんな風に話し出さない一秒前までも、彼の心に美しい純潔な少女であつた彼女を、處女ではないと思はせずには措かないやうな彼女の樣子は恐ろしかつた。
「長い間僕はそれを恐れてゐたのです、あの男がさうしないと云ふ事は、これ迄の遣り方から考へて見ても……」
から言ひながら純一は冬子の顔に歸る自分の視線を荒々しく追ひのけた。自分自身どうする事も出來ぬやうな不愉快な息苦しさが彼の心を雲のやうに蔽うて來る、それでゐて宛かも空の一部分をその雲の間に見出し得たやうに、不思議に輕い明るい氣持がするのだ。
「もつと僕がいろいろとあなたに言つて上げて置けばよかつたのです、僕はあの女給の事が起つたから、あなたと西尾君との事はさう危險に思はれなかつたのです、ところが彼は矢張り彼らしい遣り方をした……で、あなたはこれからどうするんです？」
「どうしていいんだか今のところ私にはよく分らないんです、それよりも私のやうなこんな場合に置かれた女はどんなにするでせうか？　どんなにしたらいいんでせうか？」
「僕にもよく分りません、だが、あなたが何處迄も自分の感情でさうせずにはゐられないやうに思ふ事をなさるといいでせう、それより外に道はない」
「さうせずにはゐられないやうな事さへ私はまだ分らないのです、もともと私は西尾さんが好きではありましたが、ただそれだけですわ。あんなひどい人とは知りませんでしたもの、私はね……」
「兎に角西尾君が上京しなければよく分らない事ですから、あんまり輕卒な事をしないやうにお氣を付けなさい」
「私もさう思ひますわ、それに私はあなたに何でも相談させて貰ひたいわ。一人では分らなくなつてしまふんですもの」から言つて冬子は純一の顔を見て、睫毛のまだ濡れてゐるやうな眼で純一を差し覗いた。その眼には何だか媚ら

しいものが感じられた。それは既に男に身をゆるした女の眼なのだと純一は考へて、その眼にぴつたりと寄り添ふやうに眺められた惱ましさを感じて、彼はこの上この二階で、あんな事のあつた宏の部屋で、二人きりですわつてゐる事の誘惑に堪へがたい氣持になつて立上つた。

冬子がこんな祕密を純一に告げてから、彼女の純一に對する氣持は再び親密になつて來た。再び以前のやうに彼女は純一の傍らに來て靜かにすわつて話をしたり、相談をしたりした。彼女が最も純一から聞きたい事は西尾宏に就いてであつた。それが非難であつても、彼女は賞讚のやうに喜んで聞いた。けれども冬子の好んでする辯解と執着とは、それが直ちに純一の苦痛であつた。彼は何度も分り切つた苦痛の味を呑み込んだ、即ちそれは西尾宏の味であつた。

「弱い少女をこんなに惱ませてもいいものであらうか」と純一はさういふ苦さの後味で考へずにはゐられなかつた。

また、宏の草履の塵を頭から浴びるやうな自分の立場が唾棄したい程に憤ろしかつた。

「冬子さん、一層すつかりの事をお母さんや舟井なんかに話をして、正面から西尾宏に交渉して見てはどうでせう。今のやうだとあなたが生殺し見たいになつてゐるばかりで、あんまり痛々しい」と純一が言はずにはゐられない事があつた。

「それはいけませんわ」と冬子は堅く言ひ續けた、「私も最初のうちは隨分そんな事も考へて見ました。けれど、もともと私のいたづらですから、西尾さんがお國から歸つて來たら私が直接にお話をして見ます、その上で考へて見ます。けれど私は若しか西尾さんがどうしても駄目であつたら、それッきり誰れの耳にも入れたくはないのです、私だけの胸に藏つてしまひます。私の母はあんな人ですから、どんな馬鹿な事を言ひ出すか知れません、お金でも請求するやうな事があつたら、私の立つ瀨がありませんからね……ねえ、どうぞお願ひですから、此事は母にも舟井さんにも知れないやうにして下さいね」かう言つて冬子は賴むのであつた。

來月初旬に歸つて來る筈であつた西尾宏が、突然上京して、しかも直ぐに上富坂のかの菊子の家に入り込んで、もう二三日にもなると云ふ事を純一は舟井の口から聞いた。

「豫定の行動だつたのさ。今日僕が行つて來るが、君行かないか」と彼は純一を誘つたが、純一はこの次ぎに行くと言つてことわつた。

その晩舟井が歸つて來て、西尾宏が此の家から脫退した事、從つて近々一家解散の止むを得ない事を、純一や小母さんに話をした。そして西尾宏のこれ迄の部屋代、賄料などとして、小母さんの方へ實際よりも澤山の金を手渡しした。

「そんな譯だから西尾がゐなくつちや、後の我々だけではこの家は大きすぎるんだ。さうかと言つて別に新しい人を入れるのも厭やだから、いつその事解散したがいいと僕も思ふんだ。ねえ、小母さん、それがいいんだらう？」

「皆さんがさうなつて見れば、私にはかれこれ言ふかどは無いのですよ。皆さんの御都合次第ですからね」と小母さんは言つた。彼女は西尾宏に對する裏切られたと云ふ感情もあつたが、こんなに行屆いた宏からの附屆けを貰つて見れば、さうさう惡口も言へないのであつた。

「それにしても、西尾さんはひどいわ」と冬子が呟いた。彼女は穩かならぬ顏をしてゐた。

「まるで私達を馬鹿にしてゐるわ、來もしないで……」

「それはすまないと言つてゐたよ。だが、あの男は人の思はくなんか構つてはゐないんだ。それにあんなにゴタゴタしてゐた上富坂の家へ入り込んでしまつたのだから、此方へ來るのは控へたんだらう。萬事僕に旨く遣つてくれと言つたよ」

「本當に舟井さんが何も彼も旨く遣つたんだわ……」と冬子が言つた。

「旨く遣るのが僕の手柄さ、額まれれば後へは退かんのが俺の流義だ」
「厭やな人！」と冬子は呟いて、出て行つてしまつた。
「小母さん、僕は龍田君と一緒に今度は何處かの二間位の離れでも借りようと思ふんだ」
「それもいいでせう、御都合のいいように」と小母さんは捨白のやうに言つた。
「今度は麹町方面がいいな、俺も方々引越したが、まだ麹町には不義理をした家がない、どうも近所に以前ゐた家があると厭やなものだ」と舟井はこれも小母さんの存在を無視するやうに勝手らしく言つた。
凡ての人が今では妙に氣まづい感じでゐるのであつた。
その翌日、西尾宏の荷物はみんな上富坂の方に搬んで行かれた。そんな事を舟井はまるで自分の事のやうに骨折つて、冬子の怨みを買つたのであつた。小母さんは二三日續けて轉居先の事で方々へ出歩いた。さうして大塚の方の知合ひの家の方に間を借りる約束が出來たと言つて、純一にも大塚の方へ來ないかと言つた。直ぐ近所にまだいい家があつたからと言つた。
「舟井さんなんかと一緒に間借りなんかなさらぬがいいですよ」と何度も言つた。

十五

冬子は純一に、自分に一度宏を逢はしてくれと言つて頼んだ。どうしても直接逢つて訊きたいからと言ふのであつた。それがはかない望みである事は分つてはゐたが、純一としては、冬子に對する憐憫からどうしても斷ることが出來なかつたので、承知をして、たうとう上富坂の家へ出かけて行つた。
舟井から聞いてゐたので、その家は割合ひに分りよかつた。通りからずつと引込んだ横町の片側に、生垣がまはり

を圍んでゐる新築の二階家がその家であつた。藤橋いちと云ふ古びた門札の傍らに、西尾宏の名刺が張り出されてあつた。玄關には赤靴と女の下駄とがやや高い踏石の上に並んでゐた。純一はそれを見て、急にその家に入つて行くのが厭やになつた。彼はその儘足を停めないで、俯いて先きへ歩いて行つた。どうせ宏に會つて見たところで、その結果は知れ切つてゐると云ふ氣がしてならなかつた。かうしていかにも新家庭らしく納つてゐるらしい構へを見ただけでも、彼が此の場合何と言ふか、その言葉さへ頭に浮んで來るやうであつた。そして、さうした氣の利かない立場に置かれる自分と云ふものが、自分で嘲りたいほど憫然に思はれたのだ。けれども、彼は一二丁行くと、顏を擧げて、急ぎ足に引返した。

彼が玄關でおとなふと、五十年配の顏色の蒼い、目鼻立ちのはつきりした女が、いかにも訝しさうな目付で彼を見成りながら、

「どなた樣でゐらつしやいます」と訊いた。これが母親なんだなと純一は思つた。暫く待つてゐると二階からその女が下りて來て、

「お上りなさいまし」と言つた。

安普請と見えて、その階段は踏むといくらか搖れるやうな階段であつた。

宏は見晴しのいい南向きの廣い部屋で、派手な浴衣の上に高貴織の羽織を引つかけて、その机の上に原稿紙を擴げてゐた。

「急に早く上京してね……直ぐに此方へ落着いたもんだから失敬してしまつた」と宏は人を食つたやうな微笑を浮べながら、「君によろしくつて言つてゐたよ……兄の妻からね」と言つた。

「頻りに君の事を聞きたがつてゐたから、僕が龍田君は今では錚々たる社會主義者になつてゐると言つたら吃驚して

ゐたぜ。ところが、あんまり君の事を聞きたがるもんだから、兄貴に叱られてゐた」と言つて宏は笑つて、「どうも旨く行かないやうでね、困つたものだ。歌なんか作つてゐて、僕も見せて貰つたが、どの歌もみんな愛のない結婚の悲しみや、昔の幸福の思出に泣くと云つたやうな歌なのだ。何しろ自分の良人よりも良人の弟をより親しんでゐるんだから、僕の遣り方一つでは、パオロとフランチェスカと云つたやうな事になるかも知れんよ。何しろ嫂と云ふものは興味のあるものさ。人妻とは言つても、その心持には一向普通の家婦らしい盲從がないのだ。あそこにいい處もある代り危險もあるんだ、今に兄貴はひどい目に遭ふかも知れん……」と宏はまるで他人の事でも話すやうに自分の兄をやや憫れんで語つた。純一は果てもない暗黑を漂ふやうな氣がした。彼は何だかさうした敏子の不幸には、自分にも責任があるやうな氣がしてならなかつた。けれども、この上、宏の口から、こんな面白づくな調子で彼女の不幸を聞くに堪へなかつた。純一が默つてゐると、宏は急に調子を變へて、

「今日はゆつくり話してもいいんだらう、どうかね、君のところでは變つた事は無かつたかね？」

「舟井君からいろんな事を聞いてるだらう、君がゐなくなつた爲めに、あの家も解散しなきやならないとかで、大分困つてるやうだ」

「そんな事も無いだらう……俺がゐなくなつて反つて靜かでいい筈ぢやないか。俺のゐた部屋を誰れかに貸せばいい譯なんだからね、解散なんてする必要はないぢやないか」と宏は自分の勢力を享樂するやうに言つた。

「然し何だね……あの小母さんはなかなかしたたか者なんだから、今度こそ多子を藝者にしてしまはうと考へてゐるのかも知れないぜ」

「然し多子は藝者にはならんといつも言つてるよ、そんな事は無い」

「さう言つてゐても今にさうなるから妙なものさ。然し、あの娘は流行妓にはなるまいけれど、一寸氣前の面白いと

ころがあるから、打ち込む者が屹度あるぜ。僕もあの氣前には參つてゐたんだ。だがあんな女にはみじめな苦勞はさせたくないもんだ……」

「そんな事を知つてゐながらどうしてあんな事をしたんだ！」と純一は直ぐ言ひたい位なのを抑へて、少し聲を落して、

「冬子が何だか君に一度逢はなくちやならんと言つてるから、逢つてやつてくれないか」と言つた。それ迄晴れやかに純一の眼を見てゐた宏は、その時急に眼をはづしながら、

「ウン……逢はう……逢つて見たつて仕方が無いんだが」と言つて、またその語調を變へて、「だが君を、そんな事に、賴んだりするのは惡いなア……君にどんな事を言つたか知らないが、君をそんな渦中に引き込むのはよくないんだ。僕はまた母親が騷ぎ出したり、舟井が母親につつかれて、大いにその獨得の才能を發揮するのかと思つて、內々用意はしてゐたんだ。なに、譯はないのさ、ありふれた事で片は付くのだからね……だか、君が使ひに來たのは意外だ。一體、どつちに賴まれたのか、聞かしてくれ」

「冬子から賴まれたのだ。母親は此の問題をまだ一つも知らないのだ、舟井でさへも知らないのだ、ただ僕だけに話をしたばかりだ、冬子は舟井と母親とに知られる事を恐れてゐる」

「フン……母親にも知らさない……」

「母親が知れば屹度西尾さんに對して金を貰ふ位の事も言ひ出しかねないから厭やだと言つてゐるんだ、そんな點では冬子は實に誇りの高い女だ。君がそれを知らない筈はないと思ふが……」

宏は默つて考へてゐた。

「君に一度逢ひたいと言ふのも、君に對して求めるところがあつてではない。もう何もかも諦めてゐるらしいが、た

だ一度君の顔を見たいのだらう」純一はかう言つたが、暗い沈んだ氣分に蔽はれて、もう此の上こんな會話を續けるのが、苦蓬でも嚙み返すやうに苦々しく、
「然し、君が逢ひ度くないのなら無理に逢つてやる必要もなからう」と言ひ捨てるやうに言つた。
「そりや逢つてもいいし、逢はなくつてもいい」と宏は純一に挑戰するやうに言ひ出した。
「君は僕を非難するのか？　非難したけりやしてもいい、それは君の自由だからね。だが、僕はまた僕としての理由を十分に有つてゐる。冬子が僕を思つてゐた事は君も知つてゐる筈だ。あの女は僕の顔を見さへすると、丁度猫の見みたやうに愛撫を希づてゐたんだ。殊に菊子との事件が起きてからは、やつきとなつて嫉妬した。君なんか知らんだらうけれど、給仕をしながら何と云ふ事もなくしくしく泣き出した事もある、そんなにされて見れば、僕だつて悪い氣持はしないさ。また、いつかなんぞは――僕は君も知つてゐる通り不眠症だから、いつも明方近くまで寢付かれないでぼんやりしてゐるのだが――不圖氣が付くと、部屋の外に誰れか立つてゐる白い姿が見えるぢやないか。何だらうと思つて頭を上げると、その姿はそつと階段を下りて行つたがね、それがどうも冬子らしいんだ。さう云ふ場合に、この僕がまさか八犬傳の犬塚信乃見たやうに開き直つて說法は出來ないぢやないか。僕はさう云ふ氣障な遣り方は嫌ひなんだ。むかうで愛してゐたんだから、こちらも愛したまでの事だ、その外の理由はない。だから今後どうしようと云ふ事は僕も思はぬし、むかうも思はぬ筈だ。全體、冬子のやうな境遇の女はどうせその行く道は定つてゐるんだから、成るやうに成らせた方がいいんだ。それを俺が引き受けて、今更型通りの事をしたつて下らんぢやないか」
「君がさう言ふだらうと云ふ事は前からも分つてゐた、君はもともとさう云ふ點では徹底した男なんだから。冬子だつてそれは知つてゐる……」

「冬子も知つてゐる……それならば問題はない。俺がどんな返事をしたつて今更失望もすまい。いつそかう言つて貰はうかな……西尾宏はあなたに逢つたところで仕方がない、反つてそれは殘酷だと言つてゐたとね、また僕に對して何か言ひ度い事があるなら何でも言つて下さい、だが龍田君を餘り煩はさない方がいいでせうとね」

これ等の事を宏は少しも悪びれない、率直な態度で、彼がその藝術上の主張をする時と同じやうな調子で言つた。

純一はそれだけに氣持が一層焦々して來た。彼は言ひたい事が胸一杯であつた、宏がそんな風な態度に出るだらうと云ふ事は十分すぎる程分つてはゐながら、かうしてその自分勝手な言葉を聞いてゐると、純一は反つて自分の胸が痛いやうな氣がした。然し、宏としては一應理窟は通つてゐるのだ、彼はその理論を以て自分の良心に對する楯にしてゐるに相違ない。だが、かうした事は決して理論で片付く問題ではないと純一は考へた。けれども、それを今いくら宏に向つて言つて見たところで、結局無益であるばかりでなく、愈々互ひの不愉快を增すだけの事なのは分り切つてゐるので、純一は默つてゐた。そして、かうした苦痛な交渉の後で、彼の心に一層はつきりして來たものは、冬子の今置かれてゐる立場であつた。それは丁度、今にも渦の中に卷込まれようとする流れの上の花のやうに思はれる。彼はそれをすくひ上げたいと思つた。彼の眼には世界はその一輪の花にのみ狹ばまつてしまふやうであつた。

「然し、僕の事によつて冬子と君とは一層親しくなつたやうだね。どうだい、君はかうなるのを待つてゐたんぢやないかね?」と宏はずばりと言ひ切つて、その射放した矢のあとを見戌るやうな眼付で笑つた。

純一は思はず射すくめられたやうに赧らんでしまつた、けれども彼は自分自身に答へるやうに言つた。

「そんな事を待つわけはない。君に取つては僕がこんな用事をするのは、或ひは可笑しいかも知れないが、今の場合、冬子は僕を唯一の賴りにしてゐるから、それを見放す事は出來ない、ただそれだけだ。」

宏が皮肉な苦しい顏をして何か言はうとした時、下からトントンと階段を上つて來る音がして、襖を半分ほど開け

て、菊子が今外からでも歸つて來たのか、けばけばしい裝ひをした姿を半ば現した。

「今歸りました」と言つて、ちらと宏と純一との顏を見くらべて、ぴしやりと襖をしめて、急いで下りてしまつた。

純一は何とも言へない不愉快な氣持が一時にこみ上げて來た。彼はもう一刻もそこにゐたくなかつた。

彼は宏の家を出て、暫くは自分が何を考へてゐるのか、自分でも分らなかつた。ただ、宏の家から遠ざかるに從つて、愈々自分の心が激昂に燃えて來るのを感じた。

「彼はむかうで愛したから此方でも愛したのだ、ただそれきりだと言つたが、愛とは一體そんなものであらうか？かよわい少女を苦しめ弄んでそれが愛した事になるのか？ いや、愛とは苦しむ事だ、彼女の幸福のために自分を犧牲にする事だ！ 然るに彼は一時のなぐさみに彼女の愛を野の花のやうに摘み捨てて、それで萬事十分だと考へてゐる、それが彼の遣り方で、また彼の理窟だ。然し、人間として果してそれで濟むものなのだらうか？ それが彼女を愛する道であらうか？ 彼は藝術家にはあらゆる事が許されてゐると言ふ、彼が冬子の魂を蹂躙するのも藝術家として許されると言ふのか？ 否々、さうではない、それがとりわけ許されないからこそ眞個の藝術家なのだ、彼こそは一層きびしい良心の審判の下に立たなければならない。一つの主義、一つの理論の下に隱れて、良心を欺くのは、人間としての卑怯であり、藝術家としての自殺である。石のやうな冷かな心を以て、ただ快樂をのみ追求してゐる者の藝術が、何で人を動かし得よう、自分の生活をその藝術の前に隱蔽してゐる者が、何で眞個の藝術家と呼ばれよう。藝術は單なる言葉ではない、熱烈な心臟の鼓動である、人生に對する善意である。たとひ一篇の詩、一篇の小説は書かなくとも、一人の人間を眞に幸福にする事の出來るものは、既に立派な藝術家である！」と彼は自分を激勵するやうにかう心で叫んだ。

秋の午後の日影の黄色く落ちてゐる白山の坂を上つて行きながら、彼の心はもつと當面の問題の上に歸つてゐた。

「ああ、どうしたら冬子は幸福になるだらう？」と彼は思ひ續けた。また彼は今日宏の言つた言葉をどう云ふ風に冬子に傳へたらいいかと云ふ事にも思ひ惑つた。ただ自分一人の言葉と遣り方とが彼女を不幸から救ふ力があるもののやうに彼は感じた。

その日の夕方、舟井が純一の部屋に入つて來て、にやにやしながら、次の部屋に憚るやうな小聲で純一に話しかけた。

「龍田君　君は今日西尾宏の家へ行つたさうだね、君が今歸つたと云ふところへ僕が行つたんだ。ところで君はなぜ僕を誘はないで出かけたんだ、君にも似合はないぢやないか。何だか西尾は君の事を笑つてゐたぜ、冬子を君が手に入れようとやきもきしてゐると言ふんだが、それは本當かい？」

「そんな事を言つたかね、成程、あの男の言ひさうな事だ。僕が冬子を氣の毒だと思つて、その賴みを聞いて行つたのを、そんな風に君には言ふんだ」

「冬子の賴みで……どう云ふ賴みなのだ？」と舟井がさり氣ない調子で拔目なく訊いた、「氣の毒なつて云ふのは何だね？……」

純一は當惑した。彼は自分の不用意であつたのを悟つて、ぢつと默つた。

「大丈夫だよ、隱すには當らないさ。俺だつてそんな事位ゐ氣が付かない男ぢやない。冬子が俺に何とか賴みさうなものだと思つてゐるが、未だに何とも俺には言はない。先方で言はないものを此方から言ひ出す譯にも行かないからな。ところが豈圖らんや、龍田純一と云ふ全權代理公使を以て交渉を開始したに至つては、舟井國之助すつかり蹴られちやつた……ところでどうなつたんだ、言ひ分は通つたのか？」と彼は冗談まじりに言ひながらも、その顏には眞面目にその成行を氣遣ふやうな色が見えた。

「言ひ分を通すとか何とか、さう云ふ意味で行つたのではないのだ。ただ一度逢つて見たいのらしい。だが、西尾宏は逢つてもいい、逢はなくてもいい、結局は殘酷だから逢ひたくないといふ返事なのだ」
「隨分得手勝手な言ひ草ぢやないか、それでは多子の立つ瀬はない、多子をどうしてやるつもりだか、それを訊いたかね？」
「いや、僕が引受けて見たところでつまらない、もともと多子が仕向けて來たのだからと言ふのだ」
「多子が仕向けた……そんな事はない筈だ、さう言つて見るんだらう。だが菊子の事を大變嫉いてゐたやうだつたから、そんな事から競爭的になつたのかも知れん、あんな子供見たやうな娘だのに大膽な事を遣る、まるで線路にでも飛び込むやうな際どい藝當をして見せたね」
「僕はこの家を見に來た時、何だか一種の豫感を感じて、出來る事ならさう云ふ事のないやうにと思つて、多子にも度々その事は言つて聞かせてゐたのだ。そのうち君の盡力で女給の方が愈々纏まりさうなので、一應は安心した。ところがそれが反つて彼女の感情に對して惡い影響を與へて、たうとう西尾の乘ずるところとなつてしまつた。女つてものはそんな感情からでも自分を破滅させるやうな事をするから可哀相だ」
「然し、西尾宏はひどい奴だ、それではまるで行きがけの駄賃に多子をつまみ食ひしたやうなもんだ。そりや俺だつて女に對しちや隨分惡るい事も遣るが、あんなに小さい子供のやうな娘を、たつた一度か二度の玩具にするツて云ふ程殘酷にはならんがなア、殊に一緒の家にゐて、まるで妹のやうに無邪氣にやつてゐるんだものをなア……では、多子は泣寢入りなのかい？」
「別に西尾に對して怨みも言はず、要求もしない氣持のやうだ」
「そりやいかん、當人はどう思つてゐようと、さう云ふ事を聞いた以上は、その儘には差し置けん。殊に西尾はあれだ

け犬馬の勞を取つてゐるこの俺に對して、今日まで何食はぬ顔して白ばくれてゐるなんて怪しからん。どうせ凄い男だから、それ位の事は朝飯前だらうが、それにはまたそれだけの手順がある、それぢやまるでこの舟井國之助を踏み付けた仕打だ……よし俺に萬事任せ給へ、屹度談を付けて遣るから」
「どうしようと云ふのだ？　西尾君を多子の方へ取り戻さうと云ふのか、それとも……」
「ウン……僕は西尾が多子の處へ歸つて來るものとは思はん、また二人の關係なんか切れちまつた方が反つていいんだ、多子が西尾宏のやうな男と連れ添へるもんではないからナ。それは身分が違ふとか何とか云ふんぢやないんだ。見てゐたまへ、あの菊子だつて今に飽かれて、體よく棄てられてしまふんだ。俺が骨折らうてのはそんな事ぢやない、つまり、多子の嫁入支度を彼に持たせようと云ふのだ、それ位の事をするのは當然だ、水揚げの値段としちや安いものさ」
「そんな事はしない方がいいだらう、多子はそんな事になつては困るからこそ、君に内密にしてゐるんぢやないか、それだけは止した方がいい」
「分らないなア君は……ぢやそんな瑕物になつた娘が、支度一つもなしに誰れが貰ひ手がある、顔だつてさう美しくはないんだし、あの儘では可哀相ぢやないか」
「いや、僕はさうは思はん、多子は別に美しいんぢやないが、氣心に極くいい處があるし、可愛らしくもある、それに氣位も高い。こんな事があれば一層彼女が氣の毒になつて、彼女の爲めにそんな過去なんかを問はないで結婚を申込む氣になる男はあると思ふ。だから僕はそんな金なんかは反つて彼女の爲めにはならないと思ふ、母親の爲めにはそれがよからうけれど……」
「勿論、母親はそれを望むさ。だが君はそんな求婚者が本當にあると思ふのか、今時そんなおあつらへ向きの人間は

ないよ」と舟井は純一の世間知らずを憫れむやうに言つた。
「ある、あるとも！」と純一はひどく侮辱されたやうに確信をもつて言つた。
「分つたよ、君がその求婚者にならうと云ふんだらう、さう云ふ君の初心な氣持が西尾の嗤笑を買つたんだナ。だが、君も損な男だナ、西尾が一時の氣まぐれでおもちやにした女と、眞劍に結婚しようと云ふんだからね、君は實際詩人だよ、君は可愛いよ、そんな事を眞面目に考へるんだもの……然し、冬子が聞くと喜ぶに違ひないぜ」
彼は冗談の中にもその若い友人を慈しむやうに、しんみりした心持を籠らせた語調で純一をからかつた。彼のこの言葉は純一の心に灯影をかざすやうな效果を有つた、それ迄は漠然としてゐた一つの考へが、この時パッとはつきり照らし出されたやうだつた。
「冬子が喜ぶ……君もさう思ふか？　そんなら僕は何でもする、彼女の爲めにはどんな困難でも厭はない、此の事件が起つてから、僕と冬子との間はこれ迄よりもずつと眞實なものになつたのだ、だから西尾宏が此の後すつかり冬子をかまはないのなら、そして彼女が僕を愛するなら、僕は冬子にさう云ふ話をして見てもいい」と純一は一氣に言つた。
「君は眞劍だね？　俺のやうな人間にはそんな氣持は分らんが、君のやうな詩人はそんな氣にもなるのだらう。西尾宏があんな事をしたもんだから、君は冬子を今迄よりもずつと値打のあるものに思ひ出したんぢやないかね、それともまた西尾に對する面當と云つた氣味でそんなに熱して來たのか、何にしろ君も面白い男だなア」
「面當と云ふと變だが、僕としては何だかその儘に見てゐられないやうな氣がするのだ、彼女が殘酷な目に遭へば遭ふ程、僕はそれをいたはつてやりたいのだ、僕のこの誠意さへ分つたなら、冬子は拒絶しないだらうと僕は思ふ……」
こんなに話してゐるうちに、だんだん自分の心が煽られて來るのを純一は感じた。

「冬子はもともと君を好いてゐるんだから、君の親切が分れば拒絶なんかする筈はない、だが母親が難關だと思はないか？」と舟井が言つた。純一はその舟井の顏をぢつと眺め遣つた、それ迄彼のあまり顧慮してゐなかつた母親と云ふ人物が、今初めて彼の心の中一杯に擴大されたのである。

「あの母親はどんな女と思ふかね君、君のそんな氣持なんか俺ほどにも分りはしないんだ。その上冬子を藝者かお妾にして、左團扇で暮したいと云ふ腹があんなにも見えてゐるぢやないか。これ迄は姉も反對だつたし、肝腎の冬子がかぶりを振つてゐたので生娘で通せてゐたのさ。かう云ふ事が分つて見れば、母親はそれ見た事かと言つて、西尾宏からは取れるだけ取るだらうし、後は寸法通りに遣るに定つてゐる。だから年の若い貧乏書生の――怒り給ふな、實際君はさうなんだから――君が鯱鉾立ちをして賴んだところで、先づは駄目だらうて……」

「そりや僕が年の若い事も貧乏な事も知つてゐる、然し本當の愛と誠實とさへあれば、僕はどんな事でも出來ると思ふ、どんな困難にも打ち克てると思ふ。僕はどんなに君に言はれても、ぶツ突かつて見る迄は駄目だと云ふ風に考へる事は出來ない、僕はもうさうせずにはゐられない氣になつたのだ」

「どうも君は危險だよ、思ひ詰めるとどんな無謀な事でも、どんな駄目と分り切つた事でもしようと云ふんだからな、そんな性分だから社會主義なんかにも共鳴するのだらう」と言つて、舟井は純一の顏をまじまじと見たが、急に調子を變へて、

「然し、俺はちつとも止めはせんよ、君の氣のすむやうにするがいい、何なら俺が母親に話して見てもいい。然しどうせ駄目ならいつそ思ひ切つて非常手段に出る事さ、俺が君なら勿論さうするところだ、本人さへ連れ出してしまへば、いくら問題はやかましくなつても、結局はどうにかなるものさ。尤も君にはちとこれは無理な註文だらうがね」と舟井はにやりとして、「俺は俺で西尾宏から冬子の嫁入支度を出來るだけ澤山取つてやるとしようか、舟井國之助の

手ごはいところを一番お目にかけて見せるのも一興さ」と彼は宛かも非常に興味のある仕事でも見付かつたか、いい鑛脈にでも掘り當てたかのやうに、景氣のいい言ひ方をした。

十六

その翌日、林田先生の家の女中が思ひがけなく先生の手紙を持つて來た。その手紙には一寸相談したい事があるから直ぐ來てくれと云ふ事が書かれてゐたので、純一はその女中と一緒に家を出た。

「此頃先生はお忙しいんですか？」と純一はその女中に訊いて見た。

「いえ、何だか別の事で少し取込んでをりますけれど、若旦那はいつもの通りなすつてゐらつしやいます」とその女中は純一の後から歩きながら、はきはきした聲で返事をした。ずつと以前から先生の家にゐる小間使で、何でも以前何かの事で、恩顧を受けた者の娘ださうである。純一が上京當時、信太郎と連れ立つて訪ねた時分からの顔馴染なので、大した話もしないけれど、純一を見かけると彼女の方では、謂はば純一の大人になつたのにかなりの興味を感じるやうな、一種の幼馴染のやうな親しさを眼付に見せて、にこやかにしてゐるのであつた。純一は彼女に逢ふ毎に、初めて先生の書齋で飲んだ最初の紅茶の味の記憶を喚び返すのだつた。その時分十五六だつた彼女は今では十八九の筈である。年頃は冬子とほゞ同じ位であるが、冬子よりもずつと骨太で、顔色は淺黒く、眼鼻立がいかにも理詰めに整つてゐるので、それが彼女を利巧者に見せてゐる。

町裏を通つて湯島の方へ二人は出て行つた。純一は餘り默つてゐるのが惡いやうな氣がして、時々振返つて見る度びに、彼女は驚いたやうに視線を彼の眼に合はして、何か話したさうな風にしては、心得たやうな笑顔をして見せるのであつた。

先生の純一に對する賴みと云ふのは、純一に留守番に來てくれないかと云ふのであつた。先生の言葉によると、先生の家では今度關係してゐる銀行の破綻に關聯して、多額の負債を負つた爲めに、急に今の邸宅を人手に渡し、新たに上野の櫻木町に引き移ることになつたが、債權者に對する顧慮から、その近所に別に小さな家を借りて、そこへ債務者たる先生の父の名札をかけねばならないのであつた。

「いづれ圓滿に解決する筈で、父もその爲め奔走してはゐるのですが、萬一を慮かつて表面上さういふ事にしました。で、差し當つて誰れかに住んでゐて貰はなければならぬのですが、若し差支なかつたら君に越して來て貰へませんか。期間はいつ迄か今分らないのですが、兎に角靜かで勉强が出來さうな家です。既に父はその家に名けて流逸山莊と呼んでゐます、そんな風な父ですから……」と言つて先生は穩かに笑つた。

「ところでこの二三日中に引越す事になつてゐますが、今度の家では私の書齋は少し狹いので、とても此處にあるだけの書物を持つては行けませんから、大方古本屋に拂ふことにして、本鄉の郁文堂と神田の東條とに今電話をかけて置きましたから、明日あたり來るでせうから、それ迄に整理して置かなけりやならないんですが、君一つ手傳つてくれませんか。賣る本と置いとく本との選擇がなかなかむづかしいので、その整理が一仕事ですよ」

純一は先生の依賴に對して快く承知をした。殊に山莊に引越す事は、此の場合、彼としては願つてもない事であつた。

「君が欲しい本があつたら選り分けて置くといいでせう」と先生は言つた。

やがて部屋中は和洋の書物で一杯になつた。こんなにも此の部屋の中に本があつたのかと純一は驚嘆した。とりわけ高價な西洋の名畫集や、『レヴュウ・ド・ラアル』だとか『クンスト』だとか『スタディオ』だとか云つたやうな美術雜誌が堆かくなつてゐるので、それは殘して置く事と思つて訊いて見ると、

「それも賣ります、繪の本なんか全部賣つてしまふのです」とその靜脈の浮いてゐる白い手で何かの洋書をめくつて見てゐた先生は此方に振向いて答へた。心なしか先生の顏には一味の寂しさがあつた。純一は氣の毒なやうな氣がして、何か言ひ度いやうではあつたが、適當な言葉がないので沈默を續けた。

一應整理が付いた時分には、もう電燈が來てゐた。

「御苦勞でした、ぢや夕飯にしませう」と言つて、先生が先きに立つて廣い茶の間へ案內した。そこには先生の年とつた母堂が待ちかねてゐた、純一を見ると、

「お疲れでせう、さあ召し上つて下さい」と言つて、先生と純一とを替る替る見るやうにしてもてなした。先生と此の品のいい老婦人との間には、いかにも互ひに敬愛し合つてゐる母子らしい會話があつた。給仕にとすわつてゐるかの小間使が「お千代」と呼ばれてゐるのを純一はその時初めて知つた。かうした家族的な晩餐をすましてから、純一が家へ歸つて來たのはもう八時頃であつた。彼は暗い夜の通りを步きながら、初めは多分生れて初めてであらう運命の打擊に遭つた先生の事を考へたり、これから先生の近くでする山莊の生活を空想したりしてゐるうちに、いつしか白い雪の降りかかるやうに、多子の事が彼の心の全部に積つて來た。彼は舟井との間に交はした昨日の會話を思ひ出した。多子に對する求婚と云ふ事に心持を煽られてゐた自分と云ふものが、目の前にあるもののやうにはつきり浮んで來た。彼の空想は山莊の靜かな生活と可憐な多子とを結び着けて、そこに詩のやうな幸福を描き出した。一人の少女が自分の手に愛されて、恩人の保護のもとに、その第一步を踏み出すと云ふ觀念が彼にはいかに美しく思はれたであらう。

純一は自分の家に入る迄、かうした樂しい夢想に浸りながら、いい心持であつた。庭から椽側の方に廻つて自分の部屋に入らうとすると、灯影を庭の方へ斜めに曳いて、それ迄開かれてゐた障子を、小母さんが急にはたと閉めてし

まつた。

純一は立止つた。何でもないやうな、單に默つて障子を引いてしまつただけの小母さんの遣り方も、彼の心をカタリと引落すだけの效果を有つてゐた。それが何だか自分に對する當てつけでもあつたかのやうな氣がして、純一はいらいらしい氣持になつた。平常ならば純一が遲く歸ると、單に言葉だけでも、御夕飯はいかがですかと訊くのがこれ迄の小母さんの習慣だつたのであるから、純一は本能的に自分に對する小母さんの心持の變調を認めずにはゐられなかつた。

茶の間ではいつになく何の話聲もしなかつた。けれども小母さんの煙管をはたく音もするし、頻りに簞笥の抽斗や押入の襖を開け閉てする冬子らしい物音も聞えてゐた。たうとう舟井があの事を母親に言つたのだ、その爲め冬子が叱られたのだと云ふ想像が純一には容易にその頭腦に來た。事によつたら自分が求婚したいと考へてゐる事まで言つてしまつたのぢやなからうかと思ふと、彼はなぜか顏が熱くなつた。

「舟井にも困つてしまふ。」あれだけ僕が止めて置いたのに、矢つ張り事件を起すなんてどうしたんだらう？　殊に今迄あんなに西尾の爲めに奔走して置きながら、今度はその西尾に盾衝かうと云ふのはどうした譯だらう？　面白づくで遣るのだらうか？　矢張り何か目論見があつての事だらうか？　それとも本當に冬子が可哀相になつての事だらうか？」純一には舟井と云ふ人物が分らなくなつてしまつた。

彼がもう寢ようとしてゐると、障子越しに小さな聲で、

「龍田さん、一寸裏庭の方へ來て下さらないこと？」と冬子が聲をかけた。母親には內密だと云ふ調子がその低い聲音にはつきり籠められてゐた。

純一が庭の方に下りて、家を廻つて行くと、垣根のところに立つてゐる無花果の大きい繁みの下に、臺所から出て

來た冬子がしよんぼりと立つて待つてゐた。彼女は白いフランネルの上に銘仙の羽織を着てゐたので、夜闇の中で胸からのほんのり白い細長いところが、彼女をいつもよりも丈高い女のやうに思はせた。彼女は片手で無花果の葉をとらまへてゐる樣子であつた。彼女は純一の近づくのを見ると、いきなり話しかけた。

「私、隨分今日困りましたのよ、あなたは舟井さんに仰しやつたのね、たうとう……」彼女の中途で言ひやめたのが、反つて純一の胸にこたへた。彼は答へた、

「僕が言つたと云へば言つたのかも知れませんが、實は舟井君がもう大凡の事は察してゐたのです。昨日僕が一人で西尾君の家へ行つて歸つた後へ舟井君が行つたものだから、彼のこれ迄の疑惑を一層深くしたのです。だが舟井君はあなたに對して同情を有つてゐましたよ、なぜ僕に賴んでくれないのだらうと不服を言つてゐました」

「舟井さんに同情されるなんて事は厭やなんです。同情だなんて言つたつて、あの人の同情は本當の同情ぢやありません、何もかも欲得づくですもの。たうとう今日母さんを突ッ突いてしまつたんですよ。母さんの慍り方つてないんです、大それた娘だと言つていきなり私は煙管で肩を打たれましたわ。でも母さんが慍るのは、私がそんな事をしたのを慍るんぢやなくつて、母さんに今日迄隱してゐたのを慍るんです。馬鹿な女だからなぐさみものになつて、その儘泣き寢入りにならうと云ふんだと言つて、それを叱るんです。もつと早くそれが分つてゐたら、西尾さんを上富坂へ引つ張り出されたりする自分ぢやない。結構娘を西尾さんの御寵愛にして見せるんだつたと言つて、それを口惜しがるんです。そんな母さんですから本當に厭やになつてしまふんです。何だか舟井さんと相談の上で舟井さんが今日西尾さんの家へ出向いて行きましたよ、こんなに遲くなつたのにまだ歸つて來ないんです……」と冬子は低い聲で、かなり落着いて話をした。

「あの事西尾さんから聞いて下すつたこと?」と稍羞を含んだやうな早口で、突然冬子は訊いた。

「あの事……あなたが逢ひたいと云ふ事ですか……」と純一は思ひ懸けない事でも聞くやうに、しかも思ひ懸けない自分自身の苦痛の中から曖昧な返事をした。彼は冬子からさうした問ひを受ける事がこれ迄の行き懸りから當然の事であるに拘はらず、それを不思議にも囘避したいと云ふ感情をどうする事も出來なかつた。

「ええ、どう云ふ工合でしたの、駄目だつたのかしら?」

「駄目と云ふ譯でもなかつたのですが……然しかうです、冬子さん、西尾君は責任感なんか少しも感じちやゐないんです、責任感どころかもつと重大な感情すらも彼は持つちやゐないんです。彼の言つた事をあなたにすつか話したところで、唯だあなたの氣分を惡くするだけでせう。そんなに彼の考へは利己的な冷酷なものでした。つまり、かう言ふんです、自分は冬子に愛せられた、だから自分もその愛を受け容れたに過ぎない、ただそれきりだ、だから冬子の方でも文句のある筈はないと言ふんです」

「私が文句がないつて……それは文句一つだつて無い事よ」と可哀相なほど一心に聽いてゐた冬子は思はずから口走るやうに言つた。

「だから逢つてもいいし、逢はなくつてもいい、だが今後どうつて云ふ事は無いんだから、逢ふのは結局殘酷だから止さうと言つてくれとの事だつたのです。彼に言はせると成るやうに成るがいい、自分が出て行つて型通りの始末をしたところで詰らん話だから、文句があるんなら、ありふれた方法で解決するばかりだと言つてゐました」

「あなた、それは本當に西尾さんが仰しやつた言葉なんですか?」と冬子は險しい昂奮に陷りながら、純一を詰問するやうに言つた。彼女は自分の耳を信じかねるやうな樣子で、身體中を顫はせてゐるやうであつた。彼女はそれ程までに宏の胸にわづかな位置さへも占め得ない自分であるとは、いかにしても信じかねると云つた樣子で、身體全體が昂奮の爲めに硬くなつて、今にも夜闇の中へ、遣る瀨なさにふらふらッとして行きさうな風に見えた。

「若し僕の言葉が信じられないなら、舟井君に訊いて貰つたらどうでせう？　もつと本當の氣持を話すかも知れませんよ。然し、それでは一層あなたが屈辱を感じなさるだけだらうと僕は思ふ……」と純一は冬子から信頼されない自分を悲劇的な立場に感じながら、しかもそれだけ愈々彼女を痛ましく感じながら言つた。

「僕に對しては西尾君は非常に虚勢を張つてゐたやうだつたから、本當の事を言はなかつたのかも知れない、冬子が君にこんな使ひを頼むのは惡いと言つてゐた位ですから……」

「お慍りになつたの、私はちつともあなたの聞いて來て下すつた事を疑つてはゐないんです。舟井さんに頼んで訊いて貰ふなんて事は、私としては厭やな事です。私に對しての返事は、誰れにだつてはつきりと言つて下さる筈です。どうせ成るやうに成るんですつて……さすがにえらい人だけあつて旨い事を言ふわ、私が愛したから愛してやつたつて事も隨分親切な言ひ方だわね。ありふれた事で片を付けさへすればいいんだなんて、隨分人を侮辱してゐるわ。兎に角、私があの方に取つて一握りの塵みたやうなものだと云ふ事が分り過ぎるほどもう分りました……でも私は辛いわ！」

かう言つて冬子はその黒い羽織の袖を顏に當てて泣き出した。純一はどうしていいか分らないで、ただ默つて立つてゐた。彼には此の場合言ひたい事は胸に一杯であつた。けれども彼女のそんな悲嘆に對して、自分の胸の思ひを無遠慮にさし示す事は、彼の性格としては餘りに心ない所業だと考へずにはゐられなかつた。冬子がその愛を自分の愛に答へたならば、彼女をしてこんなにも悲しい涙で泣かせるやうな事は一生ないのにと彼は思つた。彼は彼女の耳に口當てて、彼女に慰めの言葉を囁き、彼女の希望を再び喚び返し、彼女の肩をかき抱いて、かの西尾宏と藤橋菊子とのそれとは全く反對の、しかもまことの幸福がその仄暗い片隅に夕顏の花のやうにゆらめく小徑の方へと、二人の生きて行く道を見出すことの、寂しい二つの心に取つていかに限りない慰めであるかを言つて見たかつた。けれども彼

は躊躇した。殊に舟井の言つた非常手段と云ふ言葉を思ひ出すと、彼は內心からの不安と嫌惡とを感じて來て、ここにかうして二人きりで立話をしてゐる事さへ心が咎めた。彼は斷崖の上に立つやうな神經的な恐怖に襲はれながら、この短かい苦痛な時間を、ぢつと自分を保つた。

「御免なさい、どんなに辛いたつて、泣いて見ても仕方がないわね。こんなに意氣地のない私だとは思はなかつたわ。でも、まさかそんなに迄私がみじめだとは思はなかつたのよ。それではまるで私はそこらに轉がつてゐる銘酒屋の女よりも、もつとみじめだわ。でも……結句そんなに言はれた方が私の爲めにはいいのかも知れないわ。そんなに言はれないで見れば、私のやうな馬鹿な女は、一生の間浮ぶ瀨がないとは分つてゐても、あの人の殘酷なぐさみものになつてしまふかも知れないんですもの。逢ふのは殘酷だつてのは何て云ふ親切だらう、でも、私は一度位ゐ逢つてくれたつていいと思ふのに……」かう言つて多子はもう一度啜り泣をした。

「でも……あの菊子さんは……」と多子は急に氣が付いたやうに、稍高い聲で言つた、

「あの方だけは私のやうなみじめな目には遭はないでせうね、西尾さんが餘計望んだんだから……」

彼女は嫉妬を感じながらも、或る美しい感情をかうした言葉の中に閃かした。

「私のやうにされないように祈るわ、女がこんなひどい目に遭へば、一生、夜が來る每に泣くわ、どんな幸福な時だつて、暗い氣持がして泣いてしまふわ……」

純一は彼女のさうした悲しみを十分察しながらも、何だか厭やな氣持がした。彼は默つてはゐられなかつた。

「多子さん、そんな風な考へ方は愚痴ですよ、僕はそんな考へはいいとは思へません。不幸な經驗は、それは隨分悲しくもあり苦しくもある事ですけれど、さう云ふ事のあつた爲めに、反つて本當の愛がどんなものであるかと云ふ事を知る事が出來るのです、またその人はそれだけ愈々人間として立派な磨かれた人になるのではありませんか。それ

は僕が舟井君にも言つてゐる事です。けれど舟井君にはそんな事は分らないから、ただ何でも西尾君から冬子の嫁入支度金だけは取らなくちやならん、それでなければ冬子が可哀相だと頻りに言ふので、僕も大變困つたのですが、僕の考へから言へば、嫁入支度なんか冬子さんの爲めに要るものですか。あなたのいいところが分つてゐる人間には、ただあなた一人の心があればいいんですからね」

「さうさう……舟井さんが何だかそんな事を言つてゐましたよ、こんな私を支度も要らず、またあんな事があつたにしても、少しも厭はないで結婚でもすると云ふ親切な青年が直ぐ傍にゐるんださうです。さう言ふんですよ、舟井さんは……」かう言つて冬子は言葉の終りに笑ひを添へた。

「何でも言つてしまふ男ですね、舟井は……」と純一は闇の中でも赤面して言つた。

「然し、冬子さんはそれを變な事には取らないのでせう？」

「變な事つて言ふと？……」

純一は口籠つて、冬子の言葉を待つた。

「それは惡くは思ひませんわ、有難いと思ひますわ、若しさう云ふ人があつたら……でも今は私はあんな事があつて、まだその苦しみが殘つてゐますから、今はとてもさう云ふ方があつて有難いとは思つても、自分の心をどうする事も出來ませんわ。そんなに仰しやる方がいくら構はないからと仰しやつたつて、私の心はそれでは濟みませんからね。でも、嬉しい事は嬉しいわ、誰れがそんな事を言つて下さるのかしら？……」かう言つて、冬子は心持ち純一の方に身を寄せて來るやうに思はれた。

「舟井さんは西尾さんに千圓要求するんださうです」と、突然冬子が言つて、ヒステリックに笑ひ出した、「何て馬鹿な人達でせう、どうにかしてそんな事をやめさせる方法が無いでせうか。殊にあなたにあんなに話しに行つて貰つた

直ぐ後から、舟井さんがそんな談判を始めると、この私がまるで腹癒せにするやうで本當に厭やだわ。そんな事をされては、私の立つ瀬が無いんですもの……いつその事死んでしまひたいと思ひますわ、もともと私のいたづらなんですもの……」と多子は嘆いた。

「僕はあなたのその氣持がよく分るんです。實際、西尾宏から一圓の金だつてさう云ふ事の爲めに貰ふなんて事は、自分で自分の魂を汚す事ですからね。彼はいつも何だつて金で片が付くと口癖のやうに言つてゐるのですが、それを聞く每に、僕はまるで自分自身が辱められるやうな憤りを感ぜずにはゐられないのです。人間の魂を彼は餘りに見くびつてゐます、そんなものではない、決してそんなものではない、この世の中には金で買ふ事の出來ない貴いものがある筈です。しかも多くの人間はその貴いものに氣が付かないのです、そしては西尾宏に益々好き放題な事をさせるのです、僕はそれが心外でならないのです。だからあなたのその氣持を僕は一層嬉しくも思ひ、貴くも思つてゐるのです」

「そんなに仰しやつて戴くと、私、恥かしくなるわ、當り前の事を當り前に考へるだけの事ですもの……若し西尾さんから舟井さんが少しでもお金を取つて來たら、私が熨斗を付けて西尾さんの方に送り返してやりたいのよ、そんな汚れた金なんかあんな男の顏に叩き付けてやるがいいわ」かう言つて多子は笑つたが、そんな憎しみが何から來るかを考へずにはゐられなかつた純一は、西尾宏といふ一人の男が永久に彼女の胸から消え去る日のない事を思ひ浮べて、一切を破壞してしまひたいやうな絕望を感じた。

「そんな事言ふのはおよしなさい、僕はそんなお芝居は厭やです。僕はあなたが此上西尾君に翫弄されるのも好まないし、また藝者になつて、金持の卑しい人達を相手に自暴な一生を送つたりするのも好まないのです。僕はあなたにそんな事をすつかり止めて貰ひたいのです。あなたのやうな人はこれ位の不幸で惡くなる人だとは思へないのです。

世の中には西尾宏のやうなひどい利己的な人間ばかりゐる譯ぢやありませんから、本當に幸福な、本當に生き甲斐のある、いい生活に入る爲めに、ここ暫くぢつと落著いてゐて欲しいのです。それに僕も今日林田先生の家へ行つて、先生の話で定つた事ですが、二三日うちに先生の別宅の方へ留守居に引越して行きますから、一層氣がかりですから……」

「エエ、そんな話をもう定めていらしたのですか？　あなたが引越してしまつたらどうしませう？　私は母さんと相談して、私達が越して行く家の方へあなたを是非來て貰はうとお賴みする筈だつたのです……」と冬子はただならぬ調子で、純一を詰るやうに言つた。「いけないわ、そんな方へ行つては……」

「然し、僕としてはどうせ解散になれば何處かへ引越さなければならないのに、此の上舟井君と同宿するのも苦痛ですし、またあなたの方へ行つてお世話になるのも苦痛です。それに林田先生の家も今大變なんですから、今度の事を斷る譯には僕として行かないのです」

「困るわね、あなただつて隨分利己的ですわ、私は一人ではとても今のところぢつとしてはゐられないのですもの、御存じの筈なのに……」

「では……」と純一は言ひかけた、彼は躊躇もし、逡巡もしたが、たうとう勇を鼓して言ひ出した。

「そんなに僕のことを考へてゐて下さるなら、僕と一緒になつて、そしてその別宅の方へ行つてもいいのです……先生は親切な方ですから、どんな世話でもして貰へます……僕のやうな者でも、あなたがいいのでしたら、僕はあなたを幸福にする爲めに出來るだけの事をします」

彼の聲は低かつたが、冬子の注意は十分に惹いた。彼は冬子の返事を待つた。

「その事はね……私、私には……もつと考へさせて下さい。私にはあんな事があつて濟まないから、直ぐには何とも

言はれませんのよ。でも、考へて見ずにはゐられないわ。ねえ、どうぞもう少し待つて頂戴」かう言つて冬子は急に純一の傍らを離れて、家の方へ行つてしまつた。

十七

舟井國之助が西尾宏のところへ出向いて、どんなところ迄話を纏めたか、そんな事は別段純一に取つてはどうでもいい事ではあつたが、それでも彼は一種の焦燥的な氣持でそれが聞きたかつた。そんな事はあり得ようとは思はなかつたけれども、彼は舟井の盡力が思ひがけない方面へ——丁度菊子の事件があつた爲めに、冬子が急に宏に接近したやうに——その效果を顯はして、或る不自然な厭はしい狀態に冬子と宏とを再び近づける機緣になりはしないか、現に昨夜も冬子は、自分の心は今新しい方向へどんな愛情によつても直ぐには苦痛なしに動いては行けないと云ふ事を言つたではないか、さう思つた彼は、舟井の辣腕から今度こそ苦しく壓迫されるのを感じた。

純一は、冬子の爲めにどんな事でも厭はないと思ひ續けた。

「どうすれば冬子は幸福になるだらう?」

彼はこの呟きをその唇のところに幾度となく上せて見た。彼は冬子がこんなに迄自分の生活の眞中に息づいて、そしてその不幸に泣いてゐるのを愛する心持に、自分の未來を一擲してしまつても悔いないやうな烈しい感情に、自分がこんなにも襲はれようとは豫期しないところであつた。彼の愛は、想像を逞しくした。彼は自分のかうした愛が本當の愛である事を確信すると共に、冬子が自分の愛に對してその心を滲透(しんとう)される事を信じて疑はなかつた。勿論、彼は彼女の母親についても考へて見た。彼の記憶では、これ迄母親は少くとも自分に對しては、不親切な女としては殘つてゐないのである。昨夜歸つて來た時に、彼女が急に障子を閉めてしまつたその折りに見せられた不機嫌なぞは、

十分認められてゐたし、或る時にはまるで彼女の息子ででもあるやうに彼は優しくされた事もあるのだ。
此の場合無視していいやうな氣持がした。西尾宏のやうにちやほやこそされなかつたけれども、多子と仲のいい事は

「龍田さんはおとなしいから、この方のやうな人のおくさんになる人は仕合せだよ」と小母さんが冗談のやうに多子に言つた事もあるのだ。だから、純一は小母さんに對する危惧を極力拂ひ退けようと努めた。彼は自分が多子の良人として、西尾宏よりもいい良人である事を、小母さんから承知される事は容易だと云ふ考へを、その心の中で大切に培養した。小母さんの心がさうなれば、多子は言ふ迄もなく自分のものだと彼は思つた。これからの生活の方法も、さして困難ではない。山莊へは多子親子と自分と三人で行つてもいいと彼は思つた。先生が自分の爲めに、その家を三人に貸してくれると云ふ事は疑ひのない事であつた。自分の仕事も兎に角今では、定收入とは云へないにしても、まづ當分無くなるやうな事もないから——純一は此の前まで校正係りに雇はれてゐた書肆から、今度初めて自分の名前でかなり大部の飜譯を出して貰ふ約束を定めてゐた——樂ではないにしても二人で遣つて行けない事はない、それに多子は一度苦しんだ事のある女の持つてゐる從順さで、屹度やさしい小さなその身と心とで自分にかしづくであらう。西尾宏が自分のむしり捨てた小さな草が、今や本當の愛によつてどんなに可憐な花を咲かすかを見て、始めて男性としての悔を感ずる日もあるであらう。

舟井はいつも早く起きる人間ではないが、今日はとりわけ遲かつた。みんなが朝の食事をすましても、まだ起きては來なかつた。

「舟井君の話はまだよく分りませんか？」と純一は自分のところへ食膳を持つて來た多子に訊いて見た。純一はかう言つて見て、多子の言葉やその表情から、他のもつと大切な答をもその中に含めて訊かうとしたのだ。

「昨夜遲く歸つて來て、長いこと母さんとひそひそ話してゐました、けれど私にはよくは分らなかつたのよ。ただね、

今朝ッから母さんが私にちやほやしてるのよ、昨日まで随分邪慳だつたのに、今日は大分變つてゐるのよ、どう云ふ譯かしら……」

かう言つて冬子は眉を顰めた。かうして眉を顰めると、彼女の小さな細面の顔は一層寂しげに見えるのであつた。

「あれで母さんも私の事でどんなに心配でせう、私の事なんか思ふ儘になると思つてゐたのに、今度はすつかり弱つてゐるやうだわ、私も不孝者ね、舟井さんからあなたが何か聞いた事があつたらまた知らせて頂戴。それからね、私、母さんにあなたが先生の別宅へお引越しになるつて事を一寸言つて見たのよ、そして私も一緒に引越してしまはうかしらと言つたもんだから、これにも母さんはすつかり吃驚してゐますよ」

「あなたは本當に僕と一緒に引越しますか？」純一はかう言つて見た。

「……まだ分らないのよ」かう言つて、冬子は逃げるやうに出て行つてしまつた。

純一は、暫くの間仕事にかからうとしたが、氣分が亂れて、少しもはかどらなかつた。その上、何だかかう云ふ場合、そのまゝぢつと安閑としてゐられないやうな氣持になつて、何かの力に押されるやうに、茶の間の方へ出て行つた。冬子はゐないで、小母さんが一人火鉢の灰をかきならしながら考へ込んでゐた。彼女としては考へずにはゐられないのであらう。けれども、純一が入つて行くと、直ぐ顔を擧げて、

「ア、何か仰しやつたのですか？」と言つた。

「いや……ちよつと……」と純一は言ひかけた。

「では……まあお茶でも入れませう、何ですか、あなたは冬子から聞くと、お引越しなさるんですつてね、さうですか」

小母さんは火鉢のむかうへ座蒲團をまはしながら改まつたやうな言ひ方をした。

「先生の御別莊なんですつて、さうですか」

「先生のお父さんの家に借りた家ださうですが、住む人がないので、僕にと云ふ先生の話でした」
「でも、御食事なんかどうなさるんです、あなた一人ではお困りでせう」
「いや……先生の話では、食事は先生の家から女中が持つて來てくれるさうです」と純一は妙にせかせかした氣持になつて言つた。
「それはいい御都合ぢやありませんか、私は多子とも相談して、私達の今度越して行く大塚の方で知合ひの二階を借りて差上げようと思つてゐたんです、でも、先生のお家であつて見ればそれに越した事はありませんね、そしていつお引越しになりますか」
平常から要領をつかんで話する小母さんは、今日はとりわけかう言つた風にその話に餘裕がなかつた。純一は押出されるやうな一種の逼迫の氣分になつて、早く此の場を切り拔けたかつた。
「僕が今お話したいのは引越の事よりも外の事ですが……」
「へえ……外のお話と云ふと何のお話ですか……」かう言つて小母さんはわざとらしい、ありふれた改まり方をして、耳を傾けるやうにした。その樣子に厭やなものがあつたので、純一は苦い汁を飲むやうな氣持になつた。彼はその儘默つて立つて行つてしまひたかつた、けれどもそれも出來なかつた。
「僕は小母さんに聽いて頂きたいんです、僕は多子さんを……貰ひたいのです」
「多子を……ですか、あなたが……」
小母さんは純一の言ひ方が卒直であつただけ、氣を呑まれたやうに鸚鵡返しに言つて、瞬きもせず彼を見つめた。
「さうです、多子さんの事を僕は何もかも知つてゐるのです、そして多子さんを貰ひたいと云ふ事を考へたのです、多子さんも……」

「へえ、私はまた舟井さんの冗談だとばつかし思つてゐたら、本當だつたんだね。何ていたづら娘だらう、彼方も此方も引つかけてゐるんだね」と小母さんは純一には返事もしないで、さも腹が立つたやうに、自分の娘の事を言つた、「彼方は彼方でひどい目に遭つたッきりで、泣き寢入りにしようとしてゐるし、此方は此方でこんな……」その後の言葉を小母さんは言はなかつたが、語氣は純一に屈辱を感じさせるそれであつた。

「僕は小母さんに御承知が願へたら、この事を林田先生にも話をして、先生からの意見も聞かうと思つてゐるのです、引越して行く家は……」と言つて純一は急に默つた、彼は小母さんの心の中に湧き起つたものを見ようとしたのである。けれども小母さんは俯向き込んで、なかなか何とも言はなかつた。彼女のさうした沈默の仕方が純一に取つては一層の苦痛であつた。

「大變結構なお話ですがね、龍田さん」と暫くたつてから、小母さんが澁つた言葉でいやにゆるゆると話し出した、「それはその……あなたのいらつしやる先生とか云ふ方は御立派な方でせうし、お話もよくお分りになる方でせうよ、それはいいお世話もなさいませうよ。けれど、私がこれ迄世間樣を見渡したところ、他人の世話と云ふものは、それこそいい加減なものでござんすよ。自分の身うちなら兎に角、何の緣故もないものを、さうさういつ迄も世話をして、その……かう言ふとあなたは御立腹でせうが、まだあなたのやうなお年若な、御自分一人の活計だけの方を、これ迄よりもずつと……かう言ふと失禮でせうが、あなたに家內を持たせて、その世話までも見ようと云ふやうな、そんなにまで御親切なお方だらうとは私には思へませんよ。あなたは家內と云ふものはどんなに足手纏ひになつて、その上子供でも出來ようものなら、どんなに食べるに困るかと云ふ事なんか、てんで御存知ないんですよ。多子であらうが誰れであらうが、おまんまを食べてる人間なんですからね、さうさうみじめな事は出來やしませんさ。女髮結か何かなら、自分の好きな男なら、どんな年若だつて構はぬと云ふもんだがね」

「では、僕が遣つて行けないからと仰しやるんですか？」

純一はかう言つて、息を詰めて、

「勿論、僕にも樂ではないと云ふ事は分つてゐます、然し僕は遣つて見ようと思ふんです」

「それは結構なお考へですけれどね、そんな結構なお考へは兎に角、私どもの多子はあんな子供で、まだ月に十圓の金も稼いだためしは無いんです、夫婦共稼ぎつて事もありますがね、私どもはそんなみじめな事は嫌ひなんです。つまり、あなたに、あの娘のやうなのは向かないんです。あなたには、まあ私の考へるところでは、二つ三つ年上の女教員か看護婦か、まあさう云つたところですね。あなたのやうなお年若で、年歯の行かない娘を嫁に欲しいと云つた處で、直ぐ困る事が分つてゐるんだから、ここは若氣ばかりでは行きませんよ。尤も、西尾さんのやうに親許からどんな入費でも送つて來ると云ふ人ならば、いくら年が若からうが、働きがなからうが、心配にはなりませんがね」

「そんな事よりも……」と純一は思はず言つた、けれども彼は言つて見やうも無いのであつた。彼が望むのは愛なのだ、そして小母さんの答へるものはそれではないのだ。

「西尾さんはあんな浮氣な方ですけれど、親許が何しろ立派ですからね、どんな浮氣も我儘も眞直に通つて行つてるぢやありませんか。今度の女の事だつて、親許がおよろしければこそ、あんな事も出來ると云ふもんです。あれが若しあなたであつて御覽なさい、尤もこれは譬へ話ですよ、あなたがあんな三越の女給なんかをどうのかうのつて言ふ人ぢやない事は分つてますが、かう言へば分りいいからです。若し、親許もしつかりしてないし、御當人も若いと來れば、こんな世智辛い世の中では、御正直一方では女なんかから好かれるためしはありませんよ。一物價騰貴の今日日ですからね、ノホホンに遣つてゐたんぢや干乾しになつちまひますよ、何だつてお金が物言ふんです。ただおとなしいとか、優しいとかで遣つて行かうと云ふのなら、男妾にでもなるがいいんですよ。惱らないで下さい、あなたの事

を言つてゐるんぢやないんです。私だつてあなたの事をちつとも惡か思つてゐません、だからこそ心配して、後々の爲めにこんな厭味も言ふんですよ。あなたでも冬子でも、ねつからねんねえで困りますよ。冬子なんかあんな馬鹿では私も心配でなりません、もつとしつかりした娘かと思つてゐたら、すつかり當てが外れました。でもまあ、舟井さんの話では、西尾さんも考へ直したらしいので、今度は私が西尾さんに逢つて、うんとお話をして見ようと思つてゐるんです、三越の女なんかに負けて堪るもんですか」

かう言つて小母さんは急に心外さうにした。そしてそのおしまひの言葉は、宛かも打ちのめされたやうにだんだん垂れてしまつた純一の惑亂した頭に、最後の打擊のやうに徹へた。小母さんが何を考へてゐるかが彼には分つたのだ。それにしてもさう云ふ事は成り立つ事であらうとは思へなかつた。けれども彼は小母さんとの對坐に、この上の苦惱を嚥下する必要がなかつた。小母さんの親切な侮辱――純一は小母さんの惡意は認めなかつた――は、彼を憤激させるよりも沮喪させた。彼の心の中には人生そのものに對する殆んど絕望に似た暗鬱な傷感が沸き返つた。彼にはこの瞬間に小母さんも冬子も舟井も、皆が西尾宏と云ふ車輪のまはりに舞つてゐる塵でもあるかのやうに感ぜられた。

「金！ 金！ 金！」さう云ふ響が、彼の頭の中に無意味なリフレエンのやうに繰返された。

舟井が起きて來て、まだ洗はない脂の浮いた顏で、にやにや笑ひながら、茶の間に出て來て、

「何だ……朝つぱらから二人で何を話してゐるんだい、大變仲がいいぢやないか」と白ばくれた調子でからかつた。

「龍田さんがこんな婆さんを口說いてゐるんだよ、だからそれは若氣だと言つて、說敎してゐるところなのサ」と小母さんがまた一頃のやうな馴々しい調子で舟井に言つた。

「それは有難くお受けした方がいいよ、小母さんのやうな婆さんを、誰れだつてそんなにお目に止めてくれるもの

か」

こんなに言ひ言ひ舟井は臺所に下りて行つて、直ぐにカツカツと喉を鳴らしながら、顔を洗ひ出した。

小母さんの汲んでくれたお茶を半分ほど飲んでから、純一は自分の部屋に歸つて來た。彼は机の前にぢつと一ところを見詰めたなりで、長い事立つてゐた。

「かうなるのは分り切つてゐるのだ！」と彼は呟いた、彼は自分自身が掻きむしりたい程腹立たしかつた。

彼の考へたのは、自分の亂れた感情を整理する事であつた。この家にゐて、舟井や小母さんの聲を部屋越しに聞いてゐては、彼の頭は益々渦巻いてしまふばかりである、一刻も早く出て行きたいと云ふ氣がした。彼はそれから深くも考へない氣持で、反射的な樣子で、押入の行李を引つ張り出したり、本箱の本を部屋の一方にすつかり出してしまつたりした。彼はこれだけの本と荷物とを搬ぶには、二臺の車が要るだらうと云ふ事を見積りしたりした。けれどもそれも厭やになつて、その儘押入の中に無雜作に押込んで置いて、大急ぎで外出の支度をした。

彼が茶の間のそばを通つて、縁側から下りようとすると、

「おい、出るのか？」と部屋の中から舟井が聲をかけた。

「あア、一寸出て來る」と純一はものうささうな返事をした。

「まあ待ち給へ、一寸話があるから……」

「話はまた後で聞かう」

その次ぎの舟井の言葉を彼は耳には入れまいと云つたやうに、大急ぎで門の方へ歩いて行つた。

「多子は？」と云ふ考へが彼の心に起つて來た。先刻から家にゐる樣子はなかつたので、若し何處かへ買物に行つてゐるなら、何處かでぱつたり出逢ひさうなものだと云ふ氣がした。

彼は冬子がいつも行きつけてゐる、時々そこで店に上つて話したりしてゐる通りの煙草屋の店を注意して覗いて見た。けれどもその店には、いつものやうに、おかみさんが一人ですわつてゐるきりであつた。

十八

小母さんの考へでは、西尾宏を菊子から奪ひ返して、彼女の妙な意趣返しをしたいのと、また何處迄も宏の親許をすばらしい大財産家と信じ込んでゐるので、何處迄もこれによつてもたれ込んで行かうと云ふ慾と、その二つで、やきもきしてゐた。舟井は小母さんのこの腹を見透かしてもゐるし、また宏の實際のそれ程でもない事も十分知つてをりながら、どう云ふつもりか小母さんと一緒になつて、この男も同じやうにせかせかしてゐた。純一は自分の結婚の申込が殆んど問題にもされないで、その儘葬り去られたのを見た。それつきり噯にも小母さんの口から出ないのが、彼に一層の屈辱に感じられた。と同時に、もうその事に就いては此上何も言つて貰ひたくないと云ふ感じもした。彼は何か惡い事でもしたもののやうな面伏せな氣持と、自分と自分の周圍の凡てに對する漠然たる不滿とに苦しめられた。

冬子は母親から叱られたと見えて、ひどく眼を泣き脹らして、まるでその目鼻立が相を變へたやうに見えてゐた。つまり、彼女は母親から純一に親しくする事を禁じられたのだ。彼女はいくら母親からそんなに叱られたところで、自分自身の心持が定まりさへすれば、そんなにはしない女である。遠くの方から悲しさうに見遣るその眼には、からう云ふ事が純一に言ひたさうにゆらめいてゐる、

「私にはどうしていいか分らないのよ、私の心がまだ定らないのですもの……」

純一は、その囁いてゐる眼付のかうした嘆きと迷ひとを、十分に理解した。それだけ彼は冬子を一層痛ましいもの

に思つたので、こんなに苦しんでゐる彼女をこの上挑むやうにして、自分の無理強ひな――彼は自分が少しでも彼女の苦痛の原因となると云ふ事は考へても堪らなかつた――自己一流の幸福感から進んで見る事は出來なかつた。

「よく考へて見て下さい、凡てはあなた次第なのですから、僕への答はいつでもいいのです」彼はかう言ひたいやうな眼を彼女に時々注いでやつた。

けれども凡ての狀態が、かう云ふ風に純一には不愉快であつた。彼は事毎に氣まづい感じを小母さんからも舟井からも感じた。なぜもつと早くこんな人達の中から脫退してしまはなかつたのであらうと思ふ事さへもあつた。

林田先生の一家が引越した日から二三日して、純一はその別宅へ引越して行つた。その引越しの時には、冬子は手傳はなかつたし、小母さんも手傳はなかつた。否、たとへ手傳ふと言つても彼はそれを拒絕したに違ひない。舟井だけは、自分と一緒に引越しをする筈だつたぢやないかなどと言つて、引止めて見たり、また彼の手傳ひをしたりした。

林田忠勝と云ふ先生の嚴父の立派な陶器の門札――それは以前の湯島の邸宅の門にかかつてゐたそれである――のかかつてゐる門を入ると、その別宅は、兩側に隣家の板塀や羽目板のある細い小徑のむかうに、磨硝子戶の篏つた小體な玄關を見せてゐた。六疊二間に、二疊の玄關、臺所、便所など小綺麗に設けられて、一寸した庭には、梅の老木があり、稍や小高いところには捨石が二つ三つ轉つてゐて、その周圍に秋草が叢生してゐた。とりわけ萩が伸び放題に伸びて茂つてゐた。

純一は茶の間の方にその机やら荷物やらを置いた。その押入には先生の家で入れあまつた古い道具類や、葛籠などが詰められてゐた。蒲團が二組ほど入つてゐたりした。どの蒲團も綿の澤山入つた、見るから温かさうないい蒲團であつた。そんなものを見ても、先生の家が舊家で、裕福であつた事を偲ばせるのだ。その日一日、純一はそはそはしてゐた。彼は息苦しい犇めきの中からでも脫れたやうな輕い氣持になつて、自分の藏書を好きに並べたり、書きかけ

の原稿を取りまとめたりして、いつか電燈がともつたので我に歸つた、と云ふよりも、その時お千代が本宅から夕食を搬んで來たからである。

「お粗末ですがおあがり下さい、よそつてもおよろしいんですか」と彼女は訊いた。

純一が返事にまごついてゐると、彼女は心得たやうに笑つて、直ぐにも食べられるやうによそつて置いて歸つて行つた。

純一は一人で食べた。丁度一人旅に出て、宿屋の食膳に向つてゐるやうな感じがした。そして彼は箸を持つとともに、冬子の事を思ひ出したのであつた。何だか冬子とは餘つ程前に別れたやうななつかしさを以て思ひ出した。すると、彼女の遠いところから物言ひたげに此方をいつも見てゐたあの眼、綺麗な一重瞼の眼を思ひ出した。すると、急に悲しくなつて、彼は涙ぐましくなつた。

「冬子はどうしてゐるだらう、矢張りあんな氣持で迷つてゐるのであらうか？」と思ふと、彼は彼女がもどかしくもあり、可哀相にもなつた。自分があんな事を言ひ出したのが大變惡かつたやうな氣がした。けれども直ぐその後から「彼女がここにゐたならば！」と彼は思つた。

引越しの夜は大抵の人は妙に悲しくなる、純一もまたさうであつた。殊に此の場合は、あんな波瀾のあつた後だからなほ更らであつた。こんなに一人惱ましいものの中から全然離れてしまつて、これから靜かな新しい日を送ると云ふ事は、彼に取つてはいい事であつたが、自分の胸に大きなロストでも出來たやうな空虚の感に襲はれて、どう云ふ譯か頻りに冬子親子や舟井などの顏が目にちらついてならなかつた。

彼はさうした雜念を打切るために、少し早いとは思つたが、もう寢てしまはうと思つて、押入を開いてゐると、食膳を取りに來たお千代が向うの方から聲をかけた。

「もうおやすみになるんですか、それなら私がお寢間をのべませう」

純一がどう云ふ譯かと思つて躊躇してゐると、お千代はいろんな物を臺所へ持つて行つてから、上の押入から厚い軟かさうな蒲團を取出した。それは晝間純一が見て、いかにもいい蒲團だと思つたそれであつた。彼女は手際よく敷布を敷いて、掻卷と掛蒲團とをその上に置いて、黑い艶々した天鵞絨の襟のところを折り返して、そこにくくり枕を据ゑた。それを見てゐると、純一は不思議な熱苦しいやうな氣持に襲はれた。そしてそこに甲斐々々しく床を取つてくれてゐる女が、自分の親しい何者かでなくては變なやうに感じられた。それと同時に、彼は今この家の中に若い女とたつた二人きりでゐるのだと云ふ意識が苦しい程はつきり迫るのを覺えた。お千代はそれがすむと、別の押入からいかにも古風な漆塗の圓い行燈を出して來て、

「おやすみになる時は電燈を消して、これにおともしなすつて下さい」と言つた。

「ええ、有難う」と純一はなぜだか赧くなつて、何だかこんなに贅澤な客となつたのが間が惡いやうな、そんなにしてくれるお千代の笑つた眼付が熱いやうな氣持で、もぢもぢしながら言つた。それをお千代の方でも少し赧くなつて、輕い笑ひを以て見て、急いで歸つて行つた。

純一は言はれた通り、電燈を消して、行燈に火をともした。そして机の上から卷煙草を持つて來て、煙草に火を付けた――彼は舟井たちと一緒に住んでから、いつとなく煙草をすふやうになつてゐた――そして彼はそこにすわつて部屋中を見廻した。それは快美な光景であつた。仄かな行燈の光の中に凡てのものはすつかり美しくぼかされて、紫の煙の微かに細い環を描いてゐる下にのべられた寢心地のよささうな蒲團がいかにもなまめかしく見えた。彼は不圖朝川や深澤などのいつも好んで話す靑樓の一室を眼に浮べた。そして自らその聯想を驚きながら、彼は急いで床に入つてしまつた。掻卷の軟かな天鵞絨の襟は丁度女の肌のやうに彼の感覺に媚びた。彼はその抱擁するやうな溫かい蒲

園の中に横はつて、湧き起る雜念を懸命に拂ひながら、なかなか寢付かれなかつた。自分一人きりの家の中で、單に一人でゐると云ふ意識よりももつと深い寂寥が彼をおし浸した。
「ああ、自分を愛してくれる一人の女性もないのだらうか？」と彼は心の中で嘆息した。この瞬間、彼はいかに西尾宏を羨ましく思つたであらう。
その翌朝、昨夜のやうにお千代が持つて來た朝飯を食べてから、彼は久し振りに詩でも出來さうな氣持になつた。彼は長いことこんな氣持は起らなかつたのである。殆んど惱ましい程の紛糾した日ばかり送つてゐたので、仕事も出來なかつたし、詩も出來なかつた。ぢつと机に凭れて、やがて枯草となるべき庭の萩や、秋海棠などを見てゐると、今にも何か書けさうでゐて、なかなか浮んでは來なかつた。二三枚、單に題を書いたり、またその一聯を書いたりして、どうしても纏まらないので彼はそれを廢めて、次ぎには愛讀の書物を取出して一二頁讀んで見たりした。
「いや、よく御勉强が出來ますね」かう云ふ品のいい聲がして、先生の嚴父、この家の主人が入つて來た。純一が振返つて恐縮して、一つ二つ續けてお辭儀をすると、先方ではそこにすわつて、
「今度は飛んだ御面倒をお願ひしましたね、どうか遠慮しないで、何でも不自由なものがあつたら、千代に言ひ付けて持つて來させて下さい」
かう武士らしい慇懃な調子で言つた老人は、純一の恐縮してゐる樣子をにこやかに見やつて、
「これはお邪魔でした、さ、どうぞお構ひなく……」と言つて、一禮して、床の間のある次ぎの部屋に入つて行つた。不圖その床の間にまだ片付けないで立てかけてある反古に氣が付いた純一は、急いでそれを取りに行つた。その時、老人は違ひ棚の小さな押入から軸物の箱を出して、それを中腰になつて片手で上の方を持つて半分ほどを斜めにかざしてゐた、その軸には大きい文字が書かれてゐた。

「いや、その儘に、その儘に……」と老人は言ひながら、二つ三つから云ふ風に見たり卷いたりした後に、氣に入つたものを床の間に持つて行つて、今かかつてゐる軸と懸け替へた。それから老人は高野槇と秋草とを取り合して生けた花の根締めのゆるみを一寸しめてから、床の間の片隅にある蒔繪の煙草盆を提げて部屋の眞中にすわつた。煙管にも矢張り同じやうな蒔繪があつた。

純一が次ぎの部屋で一時間ほどの間勉强してゐると、その間時々その煙管をはたく音のみ聞えてゐた。

歸りがけに純一の部屋を通りかかつた時、老人は、

「ちと本宅の方へもお出かけ下さい」と言つて出て行つた。痩せて脊の高い老人の後姿を見てゐると、純一は封建時代の繪卷物を見るやうな感じがした。

本宅からお湯に入るやうにと言つて、お千代が知らせに來た。

「私が留守をするようにと奥樣が仰しやつてゐます、行つていらつしやいませんか」とお千代はにこにこして言つた。

「え、有難う」と純一は宛かもお千代がそんな親切の持主であるかのやうに返事をした。

本宅は極く近かつた。湯島の邸宅とは比べものにもならないけれど、先生自身の新しい木の門札の出てゐるその家は、その邊ではかなり目に立つた。入口の右手の突當りに湯殿があつて、三日目づつ位に湯が立つた。お湯から上ると、

「まあ話をしていらつしやい」と老夫人が言つて、下の茶の間に呼んでお茶を入れてくれたり、先生の書齋へ通してくれたりした。先生の書齋は二階にあつて、カアペットを敷き詰めて、そこにテエブルや安樂椅子や書棚やが置いてあつた。また、あのロセツテイの額緣も矢つ張りここにも懸かつてゐた。そのフランチェスカの面影には、先生の深い思出が籠つてゐる事を或時純一は聞いた事がある、そして先生の今なほ獨身であることの原因を、その邊りに推測す

る事が出來るやうに思つたのである。こんなに書齋はよく整つてゐたが、以前のいかにも奥深く落着いた書齋を知つてゐる純一は、それ等の裝飾を見ると寂しい氣持がした。けれども先生は滿足してゐるやうに見えた。そしていつものやうな靜かな調子で、純一に最近讀んだ書物の事や、詩の事を話してくれた。茶の間でお茶を飲んでゐる時、奥の方から嚴父が出て來る事もあつた。失意の閑散を書畫や盆栽に樂しむと云ふ風のこの老人は、純一のやうな青年の顔を見るのが好きなやうに見えた。

「あなたのお國は何處ですか」と極めて溫かな調子で訊いた。純一が山陰道の湖水のほとりの故鄕の名を答へると、

「ほう、あちらの方ですか……大分遠方ですなア」と老人は言つて、そして幕末の頃、自分のまだ弱年のみぎり、公用で松江の藩へ行つた事を諄々と話し始めた。

「何分その時分は今と違つて、道中には大困難しましたよ。どれ程の日數を要しましたかナ、とんと忘れてしまつたが、何しろ箱根を越えた際は夏の初めだつたのに、あちらをずつと廻つてゐる間に秋にかかつてしまつたと覺えてゐる。毎日駕籠だの馬だので、道中にはすつかり草臥れてしまひましたよ。然し、あちらの方は隨分景色がいいと思ひましたナ、今でも美保の關、夜見ヶ濱などの明媚な風光は夢寐に髣髴しますよ。何でもあの地方にかう云ふ謠がありましたね、(關の五本松一本伐りや四本、あとは伐られぬ夫婦松)……でしたね、それからもう一つ覺えてゐる、(嫁が島根に夕日がさせば、松の小枝を舟が行く)これなんぞは實に絕唱ですナ。然し、あの嫁が島の絕景を思出して見ると、こんないい謠の出來るのも成程と思はれますね。一體にあのあたりの夜見ヶ濱だとか宍道湖だとかの景色は日本三景なんかよりか、ずつと規模が大きくて、全く描いたやうで、松江大橋から大山を望んだ景色などはとても忘れられませんナ。もう一度行つて見たいものだと思ふが、この年齡ぢやもう駄目でせう……」と言つて、老人は死と云ふものを親しく望んでゐるやうな靜かな落着きで笑つた。

から云ふ風に純一は暮した。そして彼はだんだんその落着きを取り返した。振返つて此の半年ほどの間の事を考へて見ると、それが非常に遠く、冬子とのいろんな事はまるで自分とは外の人間の經驗でもあるやうに眺められるのであつた。然し、それにも拘はらず、その思ひ出は甘いものではなかつた、苦い苦い滓が彼の心の底に淀んだやうであつた。とりわけ純一はあの朝の、冬子の母親との對話を思ひ出す毎に、耳が熱くなつた。彼はいきなり大きな聲で叫ぶか、兩手を烈しく振廻すか、又は狂氣のやうに駈け出すかしなければ、その苦痛感を厭し潰してしまふ事が出來ないやうに感ぜられた。

「馬鹿ッ！」と云ふ荒々しい言葉が、屢々殆んど無意識に彼の口を出た。けれども、それは決して小母さんに對してではなかつた。小母さんのああした態度、一體に小母さんと云ふ人物が、今彼には明白に不愉快なものではあつた。けれども、彼はその小母さんの言葉が矢張り本當に譯の分つたものだつたと云ふ事を、だんだんに認めずにはゐられなかつた。それだけ彼は苦しかつた。彼が正面に見てゐられない程苦痛に感じ、どうかしてそれを自分の心から拭き消したいと思ふものは、反つて彼自身であつた。彼自身の無力、彼自身の世間知らずな考へ方であつた。

「若し、今自分が冬子と一緒になつたとしたら、どんな狀態に自分を見出してゐたであらう？」かう思つてその狀態を出來るだけいいやうに描き出さうとしたけれども、最早それが彼には出來なかつた。彼は自分の無力を淺猿しくなる程にはつきりと感ぜずにはゐられなかつた。西尾宏と自分！　それは何たる相違、何たる力の懸隔であらう。全く小母さんの言つたやうに、西尾宏にはどんな事でも出來るのだ、そして自分には何事をも許されないのである。そしてその理由は何か？　宏が金持の子で、自分が貧乏人の子だと云ふ、ただそれだけの事に過ぎないではないか？　人生は決して自分が考へてゐたやうなものではない、そこでは物質的勢力が凡てである、凡ての問題の最後の鍵は金である、――この悲痛な事實を、今や純一は厭やと云ふ程敎へ込まれた。しかも、此の無力な自分が、冬子を救はうな

どと考へたのは、何と云ふ僭越至極な事であつたらう。誰れかを救はうとする者は、先づ自らそれだけの力を有つてゐなければならない、單に自分が一緒に溺れるだけが果して愛であらうか？　否しかのみならず、自分が反つて相手の溺れるのを早める機因となつたならどうする？　自分は冬子が幸福になれかしとそればかり祈つた、それはいい、然しそれが直ちに、自分が彼女と一緒に新しい生活を始める事だとは、何たる大膽な速斷だらう。そんなにも身の程を忘れて思ひ上つてゐた自分は、何と云ふ厭やな、蟲のいい人間だつたらう！　自分は冬子を救ふ救ふと考へてゐたが、實は救はれるのは冬子よりも反つて自分の方ではなかつたか？　冬子の爲めとばかり思つてゐた事は、實は自分の爲めではなかつたか？　自分は彼女に同情した、彼女をシスタア・ラヴのやうな氣持で愛した、それは事實である、然しその同情の中には、不純な私心が籠つてゐはしなかつたか？

「否」と彼はつひに推究した、「元來、人間の行爲と云ふものは、凡そいかなる動機から出たものにしろ、それは皆結局彼のエゴイズムの發現に外ならないのだ。同情などと云ふものも、畢竟エゴイズムの變形した現はれに過ぎないのだ！」

純一は冬子と初めて會つた日からの事を考へて見た。凡ての記憶が彼には、自分のエゴイズムを證據立てるやうに見えた。初めから自分が冬子を愛して、彼女を宏から護らうとした氣持も、彼女が宏に苦しめられた時、自分が求婚した氣持も、みな自分の女性の愛に飢ゑた心の寂寥から出たものとしか思はれなかつた。確かに自分は初めから冬子を愛してゐたのだ。そしてこの愛こそは、人間のエゴイズムの一番端的な現はれなのだ、この美しい愛が――然らばエゴイズムは何で厭ふべきものであり得よう！

彼は自分が宏を非難出來ないやうな氣がした、宏と自分との差違はほんの一歩に過ぎない、しかも、中途半端なところで自己欺瞞をしてゐる自分よりも、遙かに徹底してゐる宏の方がどんなに男らしく美しいだらう！

さう云ふ事を考へて來ると、彼は凡てが厭はしかつた。生きてゐる事が厭はしかつた。たうとう彼は苦い笑ひを浮べて、投げ出すやうに呟いた、

「西尾宏が凡て正しい！　彼こそ人間と云ふものをも知り、自分と云ふものをも知つてゐる。然るに、この自分は哀れな夢想家に過ぎなかつたのだ！」

けれども、その時、なほ彼の魂の底から湧き返つて來るものがあつた、ああ、この根強く反抗するものは何であらう！

十九

摘まれ、捨てられ、
踏まれたる花のいとしさ。
我れは我が破れたる
夢想をいつくしむ。

これ迄とは違つた憂鬱が、もつと根強い力をもつて、內部から純一の心を封鎖し、束縛するのであつた。彼は引越して來て以來、殆んど一度も外出しなかつた。毎日のやうに閉ぢ籠つて、陰屈(いんくつ)してゐるので、林田先生が、彼に時々外出するように勸めた。

「お千代に留守を言ひ付けて、何處か郊外の方へでも遊びに行つて見てはどうですか」と言つた。けれども彼は先生に對しては、それに感謝するやうな返事をして、相變らず一室にすわつてゐた。

「まあ、あなたのやうに默つてすわつてばつかりゐらつしやる人は尠いわ、私は初めてあなたのやうな勉强なさる人

を見ましたわ、本當に生れ付きおとなしいんだわね」とすつかり馴々しくなつてしまつたお千代が感心したやうに言ふことがあつた。彼女は此頃、餘りそんな事に注意しない純一でも氣付く程、度々その半襟を替へてゐた。極く安い品だが、新しいのばかりであつた。彼女には刺繍のある襟なんかは買へないのだ。だが、そんなに澤山襟をかけ替へるのを、彼はをかしな女だと思つた。もつと純一が彼女ををかしな女だと思つた事は、彼女が本宅の方の臺所の裏で出入の若い魚屋と話してゐた時のはしやぎ聲であつた、それは純一を驚かすに十分であつた。ところで、彼にはお千代のかうした裏表（うらおもて）が妙に心にこびり着いてゐた。老夫人や若旦那の前で、丁寧な口を利いて、慇懃な樣子をして、さもさも禮儀正しい女中かのやうな「お面（めん）」をかぶつてゐるのが彼には擽（くすぐ）つたかつた。何だか若い男を見さへすれば、その眼付が猫のやうに變るのがをかしかつた。純一はお千代が來る度びに、自分が變に興味を有たれてゐる事を感じた。考へて見ると、彼女のする事や言ふ事には、大抵思はせ振りな事が多かつた。ただ彼女は一見利巧者に見えるだけに、それがぐうたら女のそれのやうに投げツ放しではなかつたので、純一には自分の氣の所爲（せゐ）のやうにも思はれた。けれども彼は時々自分のさうした關心に氣が付くと、そんな注意から自分を引き離して、もつと彼女を無視したいと思つた。

この家に引越して來てから、純一は轉居通知さへその友人に出さなかつた。彼は江添や朝川や深澤などのグルウプからすつかり足を洗つてしまひたかつたのである。ところが或日、その朝川と深澤が一緒に彼を訪問して來た。

「いい家だね、なかなか旨く遣つたね」と朝川が愛らしい丸顔に愛想を湛へながら、嗄（か）れた聲で言つた、「僕も誰れかこんなにしてくれないかな、探してゐるんだが……」

「探してゐるやうな者には、こんな旨い話は得て無いものサ。だが君、通知の葉書一枚くれないなんて君もひどいね、跡をくらます必要でもあつたのかね？」と深澤が言つた。彼は相變らずいい着物を着てゐたが、それがよく見ると大

分いたんでゐた。
「さう云ふ譯ではないんだが……どうせ舟井君が喋るだらうと思つたからだ」と純一は辯解した。
「勿論、彼から聞いて來たんだ、また君が冬子に虐め出されたと云ふ報告も聞いてゐるよ、どんな風に虐められたんだい？」と朝川が知つてゐて訊くやうな、知らないでゐて訊くやうな鎌をかけた。
「舟井君に虐め出されたと言ふ方が正しいかも知れない。だが、本當のところはそんな事で越したのではない、あの家は解散になる筈だつたし、丁度この家から賴まれたんだ。舟井君は其後どうしたね？」
「舟井か……」から言つて、朝川と深澤とは顏を見合して笑つた。
「西尾宏と同居さ」
かう云ふ事を想像もしてゐなかつた純一は驚いた、つまり、西尾宏と舟井國之助とに呆れた。
「西尾君は隨分閉口してゐるやうだ。だが、あれが惡因緣で、今更切れると云ふ譯にも行かぬ仲だからナ。ところで妙な事にはあの男、菊子夫人と馬鹿に仲がいいのさ、時々菊子夫人にからかはれて喜んでゐるんだ、丁度大神樂に出る馬鹿見たいにね。此間も僕たちが行つてる時に、何か舟井が冗談を言つたので、厭やと云ふ程菊子夫人からあの薄い頭の髮をむしられてゐた。ところが、西尾宏は一向素知らぬ顏をしてゐたよ、どうもあの男は僕には分らん、えらいんだらうがね」と深澤が解せぬやうに言つた。
「つまり、自信家だからさ、菊子夫人の貞操を信賴してゐるんだよ」と朝川が皮肉な言ひ方をした。
「美人の細君つて云ふ評判で、西尾君は今方々の噂に上つてゐるやうだよ。此間も『新文藝』のゴシップで何か書いてあつたよ、大分皆を羨ましがらせてゐるからね、あんな美人を細君にすると嫉まれるのは仕方がない。だが、隨分金が要るやうだ、此頃の西尾君の遣ひ方と云へば莫大なもんだからナ。西尾君の一月分の金があれば江添忠治なんか

一年位ゐ何もしないで寄席に寢轉んでゐられるサ、あんなみじめな姿でほッつき廻らないでもいいのになア……」
「ア、江添君は？」と純一がかの善良で克明で、そして不幸な中老靑年を思ひ出して訊いた。
「江添君は面白いよ」と朝川がまづ噴飯した。すると深澤が面白さうに話し出した、
「かうなんだ……」と彼は、曾つて高等演藝館の舞臺で熊になつて、その妙技によつて喝采を博した彼は、人眞似が相當に上手であつた。卽ち、彼は江添忠治のやうな少し猫背になつて、その背中に、純一の机の上にあつた原稿紙を斜めに負ふやうにした。純一が何の事だらうと思つてゐると、
「こんな小さい紙ではないんだ、大家連中に頼んで揮毫して貰つた繪短册だの、歌人の歌だのを數十枚長い板に挾んで、それをこの、背筋の、背中と着物との間にぐつと挿し込んで、ちび下駄を穿いて、甲州の方へ賣りに行つたんだ。その恰好ッたら珍妙で、まるで……アア、あれは何ッて名だつけ、それ、それ、子供がよくこさへるぢやないか、空豆を五つ位串で人の形にさすぢやないか、丁度あんな奇妙な形だ」
「彌次郎兵衞ぢやないか、ハハハ……」と朝川はこらへられないと云ふやうに喉で笑つた。純一も微笑んだ、けれども彼は急にその微笑が苦しく歪んだ事を自分で感じた。彼にはそれは笑ひ事ではなかつた、心のしびれるやうなショックをそれから受けたのだ。或る人間の末路と云ふものが、その話から痛切に感ぜられた。そして無力な善良と云ふ事が、そんなにも醜く、陰慘なものである事に、何とも言へぬ苦い氣持がした。
「冬子さんは此處へ來るだらう？」と深澤がそうッと訊ねた。
「いや」と純一は否定した。
「さうかね」と深澤は解せぬやうな顏をわざわざした。
「僕はまた時々來るのかと思つた。西尾の話では、君と冬子さんとは大變いいんだつて事だつたからね」

「そんな事は決して無いんだ、此處へは一度も來はしない、どんなにしてゐるか、一つも知らないのだ」と言つて、純一は心外な氣持から、何か西尾について言ひたかつたが、それを廢めた。
「さうかね、舟井の話では、今ぢや大塚の方にゐるさうだ。朝川君が君に訊いたら番地が分るだらうと言ふんだ。實はね、朝川君が冬子さんを訪問したくてならないんだ」
「僕ぢやないよ、君ぢやないか」
「まあ二人と云ふ事にして置かう」と深澤はにやりとした。
「いい女ではなかつたが、可愛かつたよ。何だか思ひ出して來ると、あの娘が何だか寂しさうな樣子をしてゐたからな。髮なんか惡かつたが、目はよかつたね」
「さうだ、姿だつて惡い方ぢやない。僕は菊子夫人のやうに完全に均齊を取つた美よりも、冬子のやうな、何處か未成品らしい感じのする美がいい」と朝川が言つた。
「君もさう思ふかね」と純一は言つた、そして心の中には悲しい氣持がまた新らしくされた。
二人が歸つて行つた後で、純一は彼等に自分と冬子との間に何かがあつたと云つたやうに思はせてゐる西尾宏の狡智を考へた。それからまた彼は、一時あんなに敵對的になつてゐるやうに見えた西尾宏と舟井國之助との同居を考へて、何處迄彼等は自分とは別種の人間であらうと驚き、人間と人間との交渉のいかやうにもあり得る複雜性に驚いた。けれどもかうした驚きからは、悲哀が感じられた。この人生と云ふものが恐ろしく散文的な、味もそつけもないものであると云ふ事、人間の交渉は丁度刄先と刄先とを突き合せるやうなもので、それに堪へて行く爲には、兜蟲のやうに心が鎧はれてゐなければならぬと云ふ事が、それにつけてもしみじみ感ぜられた。
「今日いい男の方が來ましたね、まああんな立派な人は尠いわ」と夕方食事を持つて來たお千代がどうして知つたの

かかう言つた。純一は微笑しながら、その立派な人が誰れであつたかを訊ねて見た。するとその男は黒い四角な顔をした深澤久滿一なのであつた。

「も一人の顔の丸い小柄な人も一寸可愛いわね。でも、あなたが一等やさしくつて、勉强家らしいわ」

こんな風に言つて、お千代は純一が照れてしまふ程、彼の顔を覗き込んで蓮ッ葉に笑つた。

山莊に來てからは寒さは次第に來た。いつか氣が付いて見ると、庭前きの萩の葉は下の方からすつかり黄色くなり、今では枝にわづかばかり殘つて、それもここ二三日中に吹き落されてしまひさうであつた。毎朝、お千代が先生の家から貸してくれた桐胴の古い火鉢に、澤山火をおこしてくれるので、純一はそれに手をかざしながらすわつてゐた。

「あなたの手は白くつて綺麗だわね」こんなにお千代が言つて、自分の炊事に荒れた赤い手を傍に並べて見たり、その後で火をおき返したりした。純一が火鉢の此方の方に手をかざしてゐると、彼女が向うの方で頻りにその手を動かし廻つてゐたりした。

かうした寒い或日、純一のところへ思ひがけなく冬子が訪ねて來た。玄關の方で輕い音がしたので、純一がぢつと耳を澄ましてゐると、暫くたつてから、

「御免下さい」と云ふ聲がした、それが冬子の聲であつた。無人の家なので、彼女の聲はまぎれもなく聞えて來た。純一は暫くの間胸がどきどきして困つた。そして又もや彼女に同じやうな聲を繰返させた。彼は玄關へ出て行つて、障子を半分程開けた。すると、そこには島田に結つた若い女が立つてゐた。著物は目に立たぬやうな銘仙で、羽織には紫がかつた露芝の模樣を置いた友禪をすらりと着てゐた。純一はそれを見ると直ぐ彼女のなくなつた姉の事が心に浮んだ。そしてそんな著物が、これ迄の彼の冬子に就いての觀念を戸惑ひさせた。

「びつくりなすつたでせう、不意だもんだから……でも、御免なさいね」と冬子は純一と一緒に部屋に通りながら囁

いた。
「いや、ちつとも不意ぢやありません」と純一は反射的に言つた。彼は冬子を見たその時から、ハッとして、涙ぐましくなつたその心持が矢張り續いてゐて、何を言つていいか、その言葉が直ぐには選び出せなかつた。
「ああ、以前と同じ樣だわ、ここでもこんなにして本を讀んでゐらつしやるのね、私の想像通りよ、今でもちつともお出なさらないんでせう。私はよくさう思ひましたよ、あなたはどんな時だつて私の考へられるやうにしてらつしやる……」
こんなに言つて、何が嬉しいのか冬子は喜んでゐるやうであつた。机の上をしげしげと見て、丁度そんなものが懷しくつて堪らないやうに眺めて、可愛い息をしてゐる。
「これをおあがりなさい」と彼女は言つて、袂と膝との間に先刻から潛めてゐた派手な縮緬の風呂敷の中から、細長い硝子の棒形の瓶詰に入つてゐるドロップを、一本出して机の上に置いた。
「話しながら私も食べるわ、これはお好きだつたぢやありませんか、いつもあなたに本を讀んで聞かして頂いた時に、二人で食べたのはこのドロップなのよ」こんなに冬子は氣持が安らかさうに言つて、その口をねじりながら開けて、純一の出した原稿紙の上にざらざらとそれをあけると、黃や赤や紫や白の可愛らしい形をした、丁度鳩の眼だの兎の眼だの猫の眼だの、さうした感じのする小さな菓子が、二人の氣分をなつかしくした。
「かうしてゐるとあなたに昔聞いたお話が一つ一つ思ひ出されて來るわ、その中でもとりわけあのフランシイヌの話が一番なつかしいのよ、あの話を聞いた時、私泣いたのね、本當に可哀相な話ですもの、二人とも死んでしまつたのね……」こんなに言ひながら冬子は机の上にそのドロップを轉がしてゐたが、フイと顏を上げて、
「何處も身體は惡くないんでせう、何だか顏色が少し惡いやうだけれど……痩せてはゐないわ、元ッから痩せッぽち

ですけれど……」と呟いた。

「あなたは……今日は美しいやうですね」

「有難うよ、他の人がそんな事を言ふと本當に厭味だけれど、あなただと何故だか本當に嬉しい氣持になりますわ、お世辭など言はない人がお世辭を言ふんですもの、いつだつたかも……あなたはそんな事を言つたわね」彼女は眼を宙にポカンとさせて、過ぎ去つた日の事を思ひ出すらしかつた。

けれども、純一は彼女が本當に美しいと思つたのだつた。髮が惡いと言つてゐた冬子の髮は、今見るところ、ちつとも惡い髮ではなかつた。反つて汚ない程澤山にある髮よりも、程よい薄さがかうした島田に結ひ上げるにはいいのではないかと、何にもそんな女の身だしなみを知らない純一にも思はれた。癖のある方の髮もさして目には付かなかつた。いくらかそこがいぢれてゐるのが、反つて愛らしかつた。けれどもかうした彼女の身裝が、もうそんな境涯に行つてしまつたのではないかと云ふ事を純一に不安がらせた。

純一がしげしげと自分の樣子を見てゐるのに氣が付いた冬子は、ツと首を傾げて、

「私はね……私はまだ家にゐるのよ、でも、此頃はずつと日本髷に結つてゐるのです。此間なんか丸髷に結つたんですよ、吃驚した？……」と彼女は笑つて純一をからかつた。

「丸髷に結つた時、私母さんに今日はこれから西尾さんの家へ行かうか、それとも龍田さんの家へ行かうか、どちらにしようかつて言つてやりましたよ。するとね、私の母さんが言ふには、龍田さんの家へお行きツてですつて……厭やな母さんぢやありませんか、さんざんあなたに厭やがらせを言つた癖に。私は知らないんですが、母さんはあなたに何か厭やな事を言つたでせう、濟まないつて今でも言つてゐますわ。あんなに申上げなくつたつてよかつたものをつて、ね。でも、許してやつて下さい、何も分らない愚劣な母ですもの、根は惡いんぢやないんですけれど、口が惡い

んです」

「僕はあなたのお母さんに對してちつとも惡くは思つてゐません、今ではあのお話を尤もだと思つてゐます。どうして僕があんな身の程知らずの事を言ひ出したのかと思ふと、恥かしくなります」

「いいえ……いいえ……身の程知らずなんてそんな事はありません、みんな私に同情して下すつたからの事です。私だつて、母だつて、あなただけには、いつ迄もいつ迄もいい氣持がしてゐますわ。だから母さんなんか言ふんですよ、冬子の兄か弟かに龍田さんのやうな人がゐると、私はどんなにいいだらうつて」

「そんなに仰しやつてゐますか」かう言つて、何がなしに純一は赧くなつた。彼は冬子の母親に對して新しい理解が感ぜられた。

「あの話はどうなりました、西尾君との……」

「あの話は……」と冬子は不愉快さうな眞面目な顏付になつた、「私には母さんは何も言ひませんけれど、あんなに喧ましく言つてたのに、もう何も言はなくなつた時分、母さんらしい事をしたのでせう。その事を考へると何と云ふ厭やな氣持でせう、あなたにはこんな厭やな氣持は分らないと思ひますわ。私達には厭やでならぬ事でも、それをその儘我慢してしまはなくてはならぬのが、腹立たしいのに我慢してゐる時があるんです。そして厭やだ厭やだと思つてゐたんですけれど、今ではどうでもいいやうな氣持よ」

かう言つて眉を顰めて寂しさうな顏付をした時に、彼女は老けて見えたのである。

「そんな話は廢めませう、今ではあんな事思ひ出したくないんですもの。今日は折角こんなに遊びに來たんですから、面白く話さうぢやありませんか」

二人がこんなに机に寄り添うて話してゐた時に、臺所の方からお千代が白い洗濯物を抱へて入つて來た。彼女は冬

子を見ると、急に鎧つたやうな、慇懃な態度をして、
「いらつしやいまし」と挨拶した。そして默つて押入を開いて、その白い襯衣や、敷布を純一の行李の上に置いて、更に純一の枕を出して、その上に蔽ひ布れを巻き付けてから、挨拶して出て行つた。
先刻から脊筋をその白い顳顬のところにほんのり見せて、こんな事を見てゐた多子は、お千代が行つてしまふと、こらへ切れなかつたやうに、
「私がここにゐるのに……押入を默つて開けたり、枕を出して布れを巻いたり、勝手な事をしてゐるのね」と彼女はせかせかと言つた。
「あなたはあんな事をいつでもさせておゐでなんですか」と彼女は詰るやうに純一に言つた。
こんな神經質な多子の言葉が、純一を返事に困らせた。彼は弱つてしまつたのである。
「先生の家で言ひ付けて僕の面倒を見させてゐるんです、僕はいつもそんなにして貰はなくてもいいと辭つてゐるんですが……」
「それは辭る方がいいわ、私だつて、私の母さんだつて、あなたの洗濯位いつでもするわ、今度は屹度持つていらつしやい、ねえ、さうなさいよ……」かう言つて見て、多子はふつと氣が付いたやうに暗い顏付になつて呟いた。
「私の母さんが何でもしますわ、これからは屹度家の方へいらつしやい、それに私の家へ越していらつしやらないこと、屹度家の母さんも喜びますわ」
「そんな事も出來ないでせう、それにあなたもゐらつしやるし……」
すると多子はまた別の當惑したやうな顏付になつて、
「私はゐなくなるのよ、だからいいでせう、私はこの暮から姉のところへ行くんです、だから今からこんなに髮を馴

らしてゐるのですわ、私たうとう出るやうになりましたのよ、それより外する事なんて今の私にはないんです、何だつて彼だつて此頃は厭やなのです、母さんと一緒に顏突き合してゐるのがどんなに辛いか、誰れにだつて分らないわ」かう言つて、冬子はハラハラとその眼から涙をこぼした、そしてこんなに言ひながら啜り泣した。

「いい著物を着たいからでもないし、樂がしたいからでもないし、姉さんの言ふやうに、いい旦那を見付けたいからでもないし、つまりは遣る瀬が無くつてさう定めつちまつたのよ。どうせどんなに厭やだらうかつて事は今から分つてゐるわ、だから私は自棄なんだわ」

默つて聞いてゐる純一は、胸をしぼられるやうに感じた。彼はかうした冬子の悲しみを、自分の何かで、否、自分の凡てで、どうにか救ふことが出來たならと思はずにはゐられなかつた。けれど純一は直ぐその後から悲しい自嘲を噛み潰した。それは自分の力の及ばない事なのだと、彼には今や分り過ぎる程分つてゐるのだ。これが冬子の運命なのだ。彼女のやうな優しい女が路傍の草花のやうに、粗暴な人々のむしり取り踏み躙るに委せなければならぬと云ふ事は、何と云ふ痛ましい事だらう。だが、これが人生だ。彼は人生のどうする事も出來ない苦しい實相を、冬子によつてまざまざと見たのである。

冬子がまだ泣いてゐる時に、お千代がまた入つて來た。今度は彼女はお茶道具だの、立派な菓子盆だのを持つて來て、それを冬子と純一のところに置いた。

「お粗末でございますが……」

冬子は鼻紙で急いで眼顏を壓へながら、亂れた調子で會釋した。純一が見るともなく見ると、冬子の頭上から見戍つてゐるお千代の眼には、恐ろしい凝視があつた、彼女の眉は逆立つてゐた。そんな表白が、何の感情からであるかを考へると、純一は恐ろしいやうな氣がした。

お千代は後に氣を惹かれるやうに出て行つた。冬子は言ふ迄もなく慍つてゐた。

「厭やな女ですこと……何だか私を嫉いてゐるわね、をかしいこと」かう言つて、冬子はもうそこにお千代がゐないのに、矢張り目顏を抑へてゐた。純一はお千代のかうした氣の利かせ方が無氣味だつた、そして彼女が本宅へ歸つて、若い女が訪ねて來て、しかも泣いてゐると云ふ報告をするのだと考へると、當惑せずにはゐられなかつた。これ迄も氣が付いてはゐたのであるが、彼はお千代の心持が、こんなになつてゐようとは思はなかつたのである。

「ア、私はもう歸らなくちやなりませんわ、いろんな事を話したかつたのに、何もお話の出來ないうちに泣いてしまつたりしたわね、けれどお話しする事ッたつて何があるんでせう……さうよ、かう云ふ事なの……私がね、そんなになつて行つてしまつても、あなたは、今の儘でゐて下さいね、奥さんなんか貰つては厭やですよ……私はあなたがそんな事するのは嫌やですから……家の母さんは面白い事を云ふんですよ、今三年も私が姉さんのところへ行つて自墮落でなしに、と言ふのはね、いい人なんかこさへないでゐてたら、その時分には二人が一緒になるのがいい、その時分になれば、龍田さんだつてしつかりした働きのある人になるよですつて……こんな事を言つて私の機嫌を取るやうな母さんですから可哀相ですよ。そんな事母さんが言はなくたつて、私達の勝手だわ。ただね、私はあなたがえらい方になつて下さるやうにお頼みするのよ。美人を細君にしたり何かすることは何でもないわ、そんな事ではなしに、私にはよく分らないけれども、もつと違つた事がえらいんだと思ふわ。だからえらくなつて下さいね。ぢや歸るわ、見送らなくてもいいのよ」かう言つて冬子は部屋を出て行くので、純一は後からついて行つた。彼はこの數歩の間に、言ひやうのない苦痛を經驗した。かうして彼女は永遠に自分の前から去つてしまふのだと彼は思つた。彼は何か一言言ひたかつた けれど何も言へなかつた。彼の心はもう以前のやうに、石油の火の燃えるやうに燃え立ちはしなかつた、ただ彼は鈍い悲しみが、重苦しく心の上に蔽ひかかるのを感じた。

「さやうなら」

かう言つた冬子は、急に純一の眼をうるんだ眼でぢつと見ながら、

「私のあそこへ行つての名は力彌……いいでせう、これは私が好きで付けるのよ、力彌……力彌……」彼女は純一の記憶に刻み着けるやうに、かう繰返して置いて別れて行つた。

第三卷

都會の黄昏

ああ二人(ふたり)して喜び聽きし其の歌は
秋と云ひなば返り來じ。
何時(いつ)の日か、われは又笑ひて眺めん、
今ははや淚となりし君が眼(まなこ)を。

アア・エ フ・エ ロオル
永井荷風氏譯

一

雨ふれば沼となり、風吹けば沙漠となる
この都さへ、樂園と、人は思ふよ。
ペンキ塗の會堂より讃美歌ひびき、
ここになほ神はゐますと告げ知らす。

此の大都會のすさまじい渦巻と、眼を昏ますやうな明るい繁華との表通りから眼を轉じて、極度の貧窮と、物狂はしい困憊との犇めいてゐる、暗い陰慘な裏通りを見る時は、どんな心にも、一種の激昂と傷感とを覺えさせずにはゐないであらう。

都會の脅威、都會の壓迫は、それに十分堪へる者には、馴致するに惡を以てし、堪へる力のない者には、與へるに死、發狂、破滅を以てする。

毎年、晩春から初夏にかけて、發狂する者が多い。また此頃には、些細な事から逆上して、殘酷な殺人をする者も頻出する。何とも知れぬ理由から、若い美しい女學生などが劇藥を飲む。上野の御院殿坂とか、大川の百本杭とかには、一日に二人も三人もの自殺者を見出す事も往々ある。

精神病院、若くは癲狂院には、悲鳴を擧げる若い女の患者とか、大臣、大將、大統領などを夢みて、罵り猛ける誇大妄想狂患者とか、誇小妄想からの憂鬱狂患者の、丁度蜘蛛のやうに壁にしがみ着いてゐる狂態や、嫉妬から發狂した患者の、丁度轡蟲のやうにがやがやと喋つて歩き廻らうとする痴態などが、宛かも狂つた機械が盲滅法に廻轉する

やうに、恐ろしい激動を見せてゐる。

都會生活の劣敗者として、彼をかうした癲狂院の患者として見出す時には、彼の友人や血族の者達の苦しみはどんなであらう。莫大の學資を送つて、その卒業の日を指折り數へて待つてゐたその長男の發狂を聞いて、氣も心もそぞろになつて、東京に引取りに來る老いた父親がある。その老人の苦痛はいかばかりであらう。

老いて働けなくなつて、一人の係累もない人間や、病氣になつて、誰れ顧る者もないやうな人間は、幸福な人達には殆んど想像も出來ないやうな、廢れたひつそりとした、灰色の空氣に滿たされた粗末な木造の幾棟かが、盲目のやうに立ち續く養老院內へ收容されて、年中無氣力な、倦怠した長い時間を、欠伸したり、ブツブツ言つたりして生きてゐるのである。

ああ、人間はいかにみじめな生をも生きようとする事であらう！　然るに、人間が生きて行くと云ふ事は、むづかしい事である！　とりわけ、誇りの高いものの、生きて行くといふ事はむづかしい事である！

純一は、此頃ずつと、或る惱ましい考へに襲はれてゐた。いろんな事が彼の思ひ通りにはならなかつたが、惱みはもつと深いところから彼を襲つてゐた。それは外部的事情からと云ふよりは、寧ろ彼の心の內部から徐々に湧き上つて、彼の胸を混濁させて來るのであつた。

「もう何年になるのだらう、東京に來てから？」彼は時々暗鬱な惱みの中から、かう考へて見る事が屢々であつた。

　　胸に充つるこのにがにがしさを、
　　云ひやうもなきにがにがしさを、

と彼はその苦い惱みを書き付けて見た、

　　胸に充つるこのにがにがしさを、

云ひやうもなきにがにがしさを、
(それに對しては未だ一つの言葉もあらず、
我が前にこの感情を味ひし人のなければ)
我れは惜しみつつ、
くりかへしくりかへし反芻する
我れは牛、憂鬱の牛!
もくもくと、重きあゆみに
いと遙かなる人生の路を辿りて、
かへり來し暗き厩にひとりつくばひ、
この苦しさを、寂しさを、憤ろしさを――
にがにがしさを――しみじみと我れは味ふ。
ああ我が苦痛は我が食餌となりぬ!
我れは牛、憂鬱の牛!

かう云ふ風に書き付けては見たけれども、彼の惱みの苦々しさは、こんな詩などに歌つて見られる苦さではなかつた。丁度舌を嚙み切つて見るか、頸根を裂いて見るかしたいやうな苦さであつた。

純一は自分ばかりがどうしてこんなに生きる事に苦しみを感ずるのであらうと思つた。西尾、朝川、深澤、どの友達を見ても、彼等の苦しみはそれぞれの程度でとどまつてゐて、どんな惱みも、その身を傷つけ、その心を破り、その全生活に滲透するまでには至らぬやうに見える。

「君、江添がたうとう養老院へ入つたよ、これであの男も、たうとう落着くところに落着いたわけさ」

或る時深澤の口から純一はかう云ふ事を聞いた。

江添忠治は四五年前、文壇の名家の短册を背負つて甲州地方へ行つてからは、二三年の間沓として消息が無かつた。ところが、この一年ばかり前に、彼は天狗にさらはれた人間が歸つて來るやうに、ブラリと舞ひ戻つて來た。その時には、彼はもうすつかり老耄したやうになつて、精も根も盡きたと云ふ風に見えた。彼は甲信地方の舊知の間を渡り歩いたり、某温泉地の或る寺に、寺男同然の生活を送つたりしてゐたが、矢つ張り初一念は挫けず、その間にも熱心に材料を蒐集したりしてゐたが、たうとうそんな埋沒した生活が堪らなくなつたと見えて、再び東京の知友の間に、塵のやうに落ちて來たのである。純一も屢々彼に泊り込まれたり、また彼の爲めに奔走したりしなければならなかつた。けれども、折角彼の爲めに仕事を取つて來て遣つても、彼はこんな仕事はどうだのかうだのと苦情ばかり言つてゐるので、多くの友人は、皆その蟲のいい我儘な遣り方に憤慨して、だんだん彼を相手にしなくなるのであつた。純一が或る時、彼の豐富な材料を以て、雜錄物でも書いてはと勸めた時なども、江添は侮辱されたやうな顏をして、

「そんなつまらん事は出來ません、僕の藝術的良心が許しませんからナ」と一言の下に斥けたので、純一は默つてしまふ外はなかつた。かうして江添は、つひには木賃宿などを泊り歩くやうにさへもなつたが、そのうち江添が足が立たなくなつて、石山愛作と云ふ和歌山の方の富豪の次男で、彼がその人の著述の筆記に行つてゐた事のある、いくらか社會主義傾向の人の家に擔ぎ込まれたと云ふ事を聞いて、純一は巢鴨にある石山の新築の洋館造りの家へ出かけて行つて見ると、江添はその裏手の暗い納屋のやうな處に寢かされてゐた。頭の髮が氣味の惡い程薄くなつて、顏がむくんで、黃疸のやうな色になつてゐた。長年ろくろく手當もしなかつた彼の痼疾が、こんなにも殘酷に、宛かも彼の生涯にとどめを刺さうとしてゐるのを見ると、當人が矢つ張りいつもの呑氣な樣子であるだけに、純一は一層いたま

しい思ひをした。
　江添を病院に入れるに就いて、石山の發起で、義金を集める事になつて、純一のところにも深澤が來た。その時深澤は、
「今、西尾宏のところへ行つて來たがね。西尾の奴、江添のやうなものは早く死んぢまつた方がいいんだ、全體貧乏人の癖に文學なんか遣るのが間違つてゐる、そんな間違つた事を遣つて苦しんでゐるからつて、同情はない、俺はそんな金なんか出すのは嫌やだと膠もなく撥ね附けたよ。俺もその言ひ草がグツと癪にさはつたが、そこは苦勞人さ、萬事御尤も御尤もで、たうとう人並の金を出させて來た」とさも西尾宏に金を出させたのが、一かどの手柄のやうに話して笑つた。
「貧乏人の癖に文學なんか遣るのが間違つてゐる……」
　この西尾宏が言つたと云ふ言葉を考へる時、純一は苦い微笑が口角に上るのを覺えた。それは西尾宏のいつも振廻してゐる言ひ草であるが、此の場合、それは純一に取つて一層苦い味をもつてゐた。
　成程、宏の言葉は眞理であるかも知れない。この四五年と云ふ年月は、純一に對しても、その言葉に含まれた苦い反語を犇々と身に感じさせたのである。何一つ有利な背景もなく、一人の力のある後援者も有たないで、たつた一人野放しにされた若い貧しい靑年の、生きんが爲めの勞苦と、深い心の惱みと戰ひながら、世に認められんが爲めの苦鬪とが、そして餘りに屢々の蹉跌と失望とが、既に彼の過去にむごたらしくも横はつてゐるのだ。
「あの時分は、此の自分のやうな者も幸福であつた……」
　彼は、丁度病苦に輾轉する疲れから、不圖とろとろと安らかになつて、昔の幸福を思ひ出すそれのやうに、上京した年の秋、親切な林田先生の家へ初めて、理窟好きな信太郎——彼は信太郎がなつかしい！——と一緒に行つて、そ

の玄關で相顧みて、微笑して見合つたその時の、自分の姿を思ひ返した。それはもう七八年もの昔になるのだ。
「あんな事を、自分のやうなティミッドな、シャイな人間が、どうして言つて見た事であらう！」彼は自分がたつた一度過去に於いて、愛を告げ、結婚の承諾を彼女の母親に得ようとして言つた言葉を思ひ出した。今でもその言葉を考へると、彼は身體中がチリチリと熱く感じられる程恥かしい！　けれども、さうした事も、もう四五年も昔の事となつた。そして彼女は、人傳てには、今では、或る請負師に落籍されて、その後妻になつて、自分の子供まであると云ふ事だ。彼女の名前が夜天の空にピカピカと、靑くきらめく寂しい星のそれのやうに、此の年頃の彼の心に、黃昏になると思ひ出された。それも今では薄れて、いつか微かになつてしまつた。
「自分が愛しない方がどんなによかつたらう！」彼はかう考へて、微笑んで見る事もある。淚ぐましい微笑みである。
多子の事を考へる時、いつでも彼は惡夢の中で、彼女をいつも呪はしげに凝視する一人の女を考へ出す。普通で言へば、その女こそ、純一に取つて消すべからざる存在である。彼はいつでも此の女の事が頭に浮ぶと、急いで拂ひ棄て、拭き消さうとする。けれどもそれは烙印のやうに、彼の心に赤黑い痕跡を燒き付けてゐるのだ。彼はそんな女に自分の純潔を與へたのである。心得顏な彼女の顏付き、そして面倒がらせる程の彼女の親切、思はせ振りな彼女の言葉、けれども純一は、單にそんなものばかりで囚はれたのではなかつた。懶い行燈の夢のやうな光りが彼の心に浮んで來る、天鵞絨の襟の付いた厚い絹夜具が彼の眼に浮んで來る。
林田先生の書齋で、雜誌の編輯を手傳つた後で、ウヰスキイなどをよばれて、遲く歸つて來た夜のことである。
今考へて見ると、その女が處女でなかつた事は分る。いろんな事を彼女は自分でした。彼女の顏には格別悲しさうな昂奮はなく、何方かと言ふと滿足してゐるやうに見えた。そして亂れた裾を直しながら、媚びるやうな眼付をして、笑つて見せた時の厭はしい不快な氣持は、今考へて見ても苦々しい！　その時から彼の自己嫌惡が始まつた。

彼はその女を愛してゐるのではなかつた、また、いぢらしいと思つてゐるのでもなかつた。何方かと言ふと、彼の好きな型の女ではなかつた。彼女が傍へ來ると、どう云ふものか熱苦しい壓迫を感じるのであつた。それなのに、彼女は一旦さうなつてからは、へばへばと彼に粘着して來るので、彼はいつでも頭が痛かつた。それでゐて、彼は蒲團を敷きに來たり、食事を搬んで來たりする事と同じやうな仕事の一つと言つてもいい、彼女の抱擁を受けずにはゐられないやうな寂寥に引きずられた。

「どうしてこんな事になつたのであらう？」と彼は自分を詰るやうに自問した。

彼は長いこと、どうして自分がそんな氣持になつたのか分らなかつた、それだけ一層、彼は彼女が厭やであつた。

「彼女が愛したから、自分もその愛を受けたのだ。あの時彼女の愛を受けるより外に、自分に何が出來たらう？」と彼は自分に言つた。かう言つて見て、彼はかう云ふ辯解を、曾つて西尾宏の口から聞いたことを思ひ出した。冬子の爲めにあんなにも義憤を感じ、西尾宏をあんなにも非難した、その直ぐ後で、西尾宏と殆んど甲乙のないやうな事を、自分がしてしまつたのであると考へる時、自分を恕す事がどうして彼に出來ようか。

純一は自分を責めた。自分と云ふ人間をすつかり赤裸にして、それに唾したいやうな憤りをさへ自分に感じた。そして彼は、自分と西尾宏との相違は、最後の一事、卽ち女に對する責任の觀念であると信じた。彼は西尾宏のやうに、

「成るやうに成るサ、僕が型通りの事をしたつてつまらんサ」と言つたやうに、輕く片付けてしまふやうな事は出來なかつた。

けれども、かう云ふ決心からも、彼は自分が裏切つて行く人間である事を見出さずにはゐられなかつた。お千代は純一と一緒になると云ふやうな事を一つも考へないで、單にその日その日の滿足ばかりで、純一が二人の關係を林田

先生に打明けて、二人の身の處置を付けるようにしてはと言つて、彼女の決心を求めるやうな時には、彼女は急いでそれを押し止めるやうにして、

「そんな事しちやいけません、そんな面倒な事考へないだつていいぢやありませんか、私はちつともあなたに迷惑をかけるつもりはないんですわ。お互ひに今は寂しいぢやありませんか、あなたは冬子とか云ふ人に別れてしまつたし、私は今ぢや一人だしするから、慰め合つてゐませうよ」と事もなげに回避してしまふのであつたが、そんなに言はれて見ると、純一はそれでも強つてと言ふ氣にはなれないで、結句それをいい事にして、心の底で稍や安心する自分と云ふものを厭はしく感じた。

こんな風にして、二人の關係は、純一が山莊に暮してゐた間、ずつと續いてゐたのである。今になつてその事を考へて見ると、彼は林田先生に對して、言ふべからざる慚愧の念に忸怩とするのである。

最近先生の家を訪ねた時に、先生が突然、

「君、千代と云ふ女中の事を覺えてゐますか？」と言ひ出したので、純一はギクリとして先生の顏を見た。けれど先生はいつもの他意のない調子で、

「あの、君が僕の家の別宅に留守居に來てゐてくれた時分、君のお世話を見させてゐましたね、あの千代が四五日前、子供を連れて久し振りに來ましてね、君の話も出て、よろしくと言つてゐましたよ」と言つたが、それを聞いた時には、純一は灰の中にでも自分の顏を押し隱してしまひたいやうな氣持であつた。

けれどもそのお千代も、月日の經るに從つて、今では――今一人の女性さへもない彼に取つては、次第になつかしい女であつた。殆んど理解し難いやうな彼女の性愛は、その當時こそ、いかにも厭はしい、苦しい、プロゼイックなものに思はれてゐたが、今になつては、年月の經過が、彼女の上に美しい紗を掛けて見せるやうである。

「たつた一人の女だつたのだ、こんな自分のやうな哀れな男に……何と云ふ可愛い女であらう。あんな愛し方で、自分を愛してくれたではないか。若し今も彼女が自分に對して、あの當時の、妙に高慢であつた若い男を憎まないでゐてくれるなら、自分はどんなに嬉しいであらう……」

こんなに考へると、彼の心は痛まずにはゐられなかつた。冬子と云ふ女が、流れの上を彼の手には觸れ難く、ゆらめき過ぎた花とすれば、お千代は彼の指のところに、暫しの緣を與へたのである。冬子を思ひ出す心持よりも、お千代に對する思ひ出の方が、彼の心に年を追うてはつきりして來る。かう云ふ事を、彼は若い時少しも知らなかつたのである。

山莊を出て、お千代とのさうした關係も絕えてからの彼は、時々、朝川や深澤なぞと一緖に、淺草や白山などの薄暗い家の中に、苦しい自分を持つて行つてゐた。他の人達のやうに、彼にはそんな事が少しも面白いのではなかつた。けれども、彼は昔のやうに、彼等の誘惑を斥けるだけの力がなかつた。戀愛と云ふものに對する信仰は、既に彼から失はれてゐた。彼は愛と云ふものがどんなに氣まぐれで、碎けて言へば「お生憎樣」なものであるかを知つてからは、また、愛情の少ないもの程、例へば西尾宏のやうな男である程、女から愛せられると云ふ事を知つてからは、「何と云ふ馬鹿げた戲れだらう！」と吐き棄てるやうに言つてしまひたい厭惡を、感ぜずにはゐられないのだ。

厭惡の感は單に戀愛の上にのみ來たのではなかつた。文壇に出ようとする彼の望みも、瘴霧のやうなこの厭惡の感に包まれようとしてゐるのである。

林田先生は親切である。また、その人格から言つても、敎養から言つても、名だたる文壇人に遜色のある人ではない。けれども先生には、所謂文壇的勢力は無かつたと言つていい。先生は文壇の片隅にゐた。否、先生は、騷々しい新奇な物を次ぎへ次ぎへと安易に騷ぎ立てる文壇からは、まるで忘れられてゐるやうな地位にゐる人である。從つて

先生には後輩を、文壇の檜舞臺に引き出してやれるだけの便宜も得られなかつたのは無理もない。然しまた先生は、さうした後輩に對する世話を、さう好んで遣ると云ふ程、勢力の扶植に腐心するやうな人ではなかつたのである。それに此頃では『日本文學』も財政の困難から廢刊になつて、今では先生は某中學に教鞭を執つてゐる。雜誌の廢刊によつて、先生は少し殘つてゐた文壇的名聲さへも失はれつつあるのである。

林田先生の肝煎で、此處彼處に少し宛つ載せられてゐた純一の詩や散文も、それは單に印刷になると云ふだけの事であつたが、それすら『日本文學』の廢刊と共に、空しく篋底に埋もれることが多くなつた。

これ迄の『日本文學』で發表した詩だけでも、優に一册の集となる程であつたので、先生の世話で、日本文學社から出版されると云ふ話があつて、純一はこれ迄の作の中から、自分でいいと思ふもののみを選んで、今にも印刷にかかれるやうに整理して、『裂けた靑絹』と題して先生に渡した。それは既に一年も前の事である。けれども『日本文學』の廢刊から引續いて、社の方も解散となつて、今のところ一寸出版の豫想は着かないのである。

「君には實にすまないのですが、もう一寸待つて下さい、僕にも考へがありますから。出ないなんて事はありません、屹度僕が出しますから。あの君も知つてゐる細谷氏ですがね、あの人が今度文藝物の出版の方にも手を出して見たいと言つて、先日相談に來られたので、愈々その話が定つたら、そのうち君の詩集の話もして見るつもりです。大變義俠心のある人ですから、屹度引き受けてくれますよ」とこの前逢つた時、先生は純一の顏を見て、慰めるやうにかう言つた。

先生の紹介狀を貰つて、彼は自分の原稿を、某新聞の文藝欄に持つて行つて見た。記者の口吻では、載せてくれさうだつたのに、持つて行つた日から幾日たつても、それが載らないばかりか、殆んど同じやうな內容を、もつと冗長に、もつと曖昧に述べたものが、幾日も連載されてゐた。彼は今日は今日はと新聞をひらいて見ながら、一月ほど待

つて見た。から云ふ場合の焦々しい不愉快な氣持と云ふものは、經驗のないものには分るまい。たうとう彼はその原稿を戻して貰はうと思つて、葉書で問ひ合せてやると、二三日たつて、記事が輻湊してゐるから、面白いとは思ふけれど、載せられなかつたと云ふ添狀と一緒に、皺くちやになつた自分の原稿を見出した。彼は丁度自分の心臟をもみくちやにされたやうな感じがして、その日一日不愉快な氣持であつた。また、或る雜誌へ送つて置いた詩稿は紛失したと言つて來た。ひかへとては無かつたので、彼は再びとはそんな詩を書く事は出來ないと思ふにつけても、さうした理由もない侮辱が腹立たしかつた。しかも彼には、さうした侮辱にもひるまずに、押強く幾度も幾度も屈辱を繰返して、つひに相手を根負けさせる、かの厚顏粗暴な執拗さや、あらゆる勢力に媚びて、權門から權門へと伺候し廻つて、つひには何處かで何かにぶツつからうとするやうなさもしさやは、他の者の遣つてゐるのを見るのさへ堪らなかつた。勢力のある大家の處へ、見え透いたお世辭と、おべんちやらと、いろんな引合ひとで取り入つて、情實の搦手から文壇に乘り出さうと云ふやうな下劣な事は、考へるさへゾツとするやうに厭やであつた。しかも今では、その下劣な事が普通であつた。文壇の裏面を見れば見る程、情實の力がどんなに強いものであるかが分つた。人間が義理人情の支配を脱し得ない限り、何事にも情實と云ふ事は免がれないであらうし、さうした情實にすがつてでも、どんな卑屈の限りを盡してでも、遣つて行かうと云ふ人間の賤しさにも、止むを得ない必然性を有つてゐる事は肯ひながらも、さうした暗面を見る毎に、「人間は生きて行くためには、どんな事でもするものだ、藝術家と云ふ美しい名で自分を呼んでゐる者でさへも！　しかもそれが一人二人ではなく、殆んど大部分がさうなのである！」その事を思ふと、彼は絕望的な氣持になる。彼は時々、自分の方が間違つてゐるのではないかとさへ疑つた。そして自分は餘りに潔癖すぎるのだ、餘りに氣位が高すぎるのだと言つて、そしてこの潔癖、この矜恃を、自分の弱點として考へようとした。けれども、彼は自分が誤つてゐるとは、どうしても思はれなかつた。若し文壇と云ふものが、こんな卑俗な不合理なも

のであつたならば、自分は文壇に適しないのである。そして、若し、一般的に、人生といふものが、こんな厭ふべきものであつたならば、自分は人生に適しないのである。しかもなほ、その醜悪な鑄型に適合させるために、無理に自分を屈げなければならぬとするならば、それは何と云ふ恐ろしい事であらう！

潔く凡ての執着の根を斷たう、潔く生を一擲しよう！　彼は幾度びさう心で叫んだ事であらう。人生が生きるに足らぬものならば、それに執する程の迷妄はない。潔く生を一擲する事よりも、人生に於て高貴な事はないとさへ、彼には屢々考へられた。ああ、然し何物かが、彼を生の方へと喚び返す。幾ケ日か、幾ケ月か、苦く甘く、壓し搾るやうな死の前味と、重苦しい沈思の試練との後に、彼は再び自分を生命の強い鼓動の中に見出す。抑も何が彼をその決意から引き止めるのであらう？

彼のまだうら若い生命を擲たんが爲めには、ただ一つの事が缺けてゐるのだ。それは一つの狂瀾であり、一つの颶風であり、一つの激動であり、また彼の愛するものの一つの微かな呼び聲でさへもある。存在の高潮時、この一毫のその上は斷じてない彼の生の最高頂は、未だ未だ遠くにある。彼は未だこの人生で自己の爲すべき業をしてゐない、時は死すべく未だ熟してゐない！　彼は夜半に一つの小さな囁き聲を聞いた、「おまへはまだ死んではならない、まだ死ぬ事を許されない！」と。

彼がその藝術に對するどうする事も出來ない熱愛に驅られれば驅られる程、彼の苦痛はひどかつた。そしてつひには、その花の生え出でる泥沼の厭はしさから、その美しい花をさへ忌はしく思ふ心にさへもなつて、彼は次第に實行の方へと、社會運動の方へと惹き付けられた。然し、彼はそこで自分がいかにみじめな無能な一弱卒に過ぎぬ事を、感じなければならなかつたらう。そこでも彼は、いかに自分の夢想の愚かであつたかを、苦い經驗として味はねばならなかつたらう。

「抑も、この凡ての爭鬪と努力との中には、何程の必然性があり、何程の意義があるか！」彼は密かに自分にかう囁きさへもした。

つひに純一は、安飜譯に苦しめられてゐる不如意な月日の中で、かうしたさまざまの惱みに追跡されながらも、宛かも何者かに憑かれてゐるやうな、止むに止まれぬ衝動からして、毎日毎夜、机の前で、或ひは沈吟し、或ひは懊惱しはじめた。彼は丁度かの詩集『裂けた青絹』の出版の行惱みになつた時分から、長い間——殆んど一年ちかくもかかつて、『二重の反逆』と題する五百枚ほどの小說を書き上げたのである。

それは、「破壞欲は同時に建設欲である」と云ふミシェル・バクウニンの言葉を標語（モットオ）に有つその小說は、不幸な反逆者の悲劇的な生涯を取扱つた作品であつた。彼はその中に、彼自身のあらゆる苦惱と懷疑とを、暴烈な激情と悲痛な幻滅とを、利己心と愛他心と、藝術欲と實際運動との葛藤とを投げ込んだのである。純一其人の複寫であるその主人公は、同じく逆境に生ひ立ち、同じく異常な反抗心を植ゑ付けられて、大都會の眞中にたつた一人はふり出される。そこで彼は、一人の祖母を捨てて上京して來て間もなく、群集の罵詈と嘲笑との眞中で、忽ち掏摸（すり）として刑事に捕へられる。この痛ましい屈辱的な場面（シイン）——ここに彼はその日比谷公園での屈辱を再現した——で一篇は始まる。彼は警察に引かれて行き、そこで彼自身と同じやうな無辜の老人を見、一つの忘れ難い辛辣な目擊の下（あと）に、彼は胸を叩いて、蹂躪された正義の爲めに復讐を誓ふのである。やがて彼は或る大きな印刷工場の職工となり、そこで藝術に對する愛を喚び起されると同時に、社會主義の洗禮を受ける。朝川を模型とした彼の新しい仲間は、彼の激越な反抗心と、殆んどマニアに等しいあらゆる不正不義に對する憎惡とに火を點ずる。彼等は相率ゐて、階級戰の渦中に投じ、自ら社會の反逆者として宣言する。やがて彼は印刷工の總同盟罷工に連座して、その友と一緒にその工場を逐はれる。それから、彼は激越した感情に驅られて、さまざまな實行運動にたづさはる。然し、彼の餘りに纖細な心身は、その粗豪

な周圍と過激な奮闘とのために、全く困憊してしまふ。そしてつひに、彼は二三の同志と共に、彼の先輩の所謂別莊行きをする。即ち、下獄するのである。――然し、事實は、當時は政府の方針として、一切司法處分を避け、すべて行政處分ですます事にしてゐたから、大杉のやうな首領でさへも下獄するやうな事はなかつた。それ故勿論純一自身は下獄の經驗はなかつた。ただ一二度、演說會の時、大杉等とともに、附近の警察に引つ張られて、一晩冷たい留置所で送つた事があるだけであつた。――獄中で彼はその祖母が、一人の孫のための心配と苦しみとから死んだ知らせを聞く――實際、純一の祖母、かの慈愛の深かつた祖母も、この二年程前に死亡した。彼はその時、悲痛な一篇の弔詩を書いた、それが彼の祖母に對する唯一の謝恩であつたのである――祖母の死は、純一に對してと同じやうに、この主人公に對しても、自分でも判然しない漠然たる罪の意識を齎した。それだけではない、數ケ月の獄中生活は、彼に不治の疾患と、その信仰個條の壞崩とを齎らしたのである。彼は自分の信念と認めてゐたものが、愚かな感情の盲動に過ぎなかつた事を悟る。自分は身を以て一つの拙い詩を書いただけだと彼は呟くのだ。我々のこのあらゆる努力が、つひにこの不合理な社會狀想を改善する事が出來たとしても、それで人間が果して幸福になり得ようか？否、あらゆる不幸の原因は人間の內部にある。然るに、この內部の病源を無視して、我々社會主義者の如く、外部から、社會組織から、人間を幸福にしようといふのは、この病める肉體を癒やさうとするのは、畢竟徒勞に過ぎない。人間はただその內部から、その魂からでなくては、つひに救はれもせず、改善もされないのである。そして人間そのものが改善されない以上、社會はつひに改善されないのである。かう云ふ自覺に導かれた彼は、再び蒼空の下に立つた時には、あらゆる熱狂に對する皮肉な批評家であつた。今や、藝術のみが彼の救ひのやうに思はれた。人の心を愛によつて結び付けるものは、藝術の外にはないと思はれた。然し、かうした彼の主張は同志の怒を買つた、或る者からは嘲笑を浴びせかけられ、或る者からは鐵拳を見舞はれた。反逆者の間で彼は反逆者として侮辱と迫害とを受ける。しかも、

社會は依然反逆者として彼を容れない。彼は鳥の中の蝙蝠となる、鳥でもなく獸でもないものの悲しい運命に陷る。そして、しかも、その藝術すらも、つひに彼を裏切つた。彼は尊い藝術が、資本家階級の獨占するところのもので、金錢で才能の左右される悲しい實例を見る。藝術が人の魂を淨化する代りに、これを混濁せしめるのを見る。彼は自ら抑へる事の出來ない藝術欲に苦しめば苦しむ程、愈々藝術そのものを呪詛する。彼は結局どうして生きていいか分らなくなる。さうした絶望の中で、彼は一人の無智な若い女と關係する、そしてここでも、痛ましい幻滅と、自己嫌惡とに襲はれる。彼は人類の愛のために己れを棒げてゐた筈の自分が、恐るべきエゴイストに外ならぬ事を認める。しかもこの人間のエゴイズムこそ、凡ての物の基礎ではないか、——然し、このエゴイズムを肯定する時、彼は凡ての不義不正、資本家の横暴をはじめ、彼の嫌忌する凡ての物を肯定しなければならない。凡ての矛盾と撞着とが彼を搾木にかける。彼はつひにかう叫ぶ、すべては誤謬だ、世界は神の失錯だ、凡てを破壞しろ、破壞したなら、或ひは新しいものが生れるかも知れない。人間の生活は不治の疾患だ、その治癒の途は、破壞を措いて他にはない。この世界はこれを破壞する外に何の救ひもない。「だが、若しそれが出來なければ、いつそ自分自身を……」そして彼は、常に身を爆彈のやうに投げつけて、敵と共に己れを粉碎するナイヒリストの悲壯な結末を夢想してゐた彼は、秋雨の蕭蕭と降る一夜、郊外の鐵路をのぞんで、ただ一人の我が身を、生の最後の抗議（プロテスト）として、地上に向つて投げつけるのである。「宇宙の反逆者」と若い作者自身の呼んだこの主人公は、凡てを求めて凡てを擲つたのである。否、凡てを擲つ事によつて、凡てを贏ち得たのである。

「生の最も徹底した形は死である、死の中に凡ては生きる、凡ては在る、自由も、正義も、幸福も」と純一は書いた。そしてこの悲痛な逆說（パラドツクス）を、苦い微笑（わらひ）を以て抹殺した。

　純一はこの稿を終へた時、宛かも長い間の重い病から癒えた人のやうに感じた、けれども、その安心の底には、何

とも言へない落膽と憂鬱とがあつた。この作品を生かすものは、ただ自分の生涯――否、自分の死の外にはないと感じたのである。

「みんな言葉だ、單なる言葉だ、藝術とは畢竟空しい夢か、本當の事が人間にどうして書ける！」から呟いて、彼はその厚い草稿を引き破るか、燒き棄てるかしたい氣持がした。けれども、引き破る代りに、彼はその稿を更に二度も淨寫した。然し、兎に角、これは自分の信仰告白だ。「朝川と龍田とは社會主義者か文學者かと、貝塚湖泉の出してゐる雜誌で自分を非難した靑年にも、これを讀ませてやりたい。これを讀んだならば、彼も自分がどんなに苦しんだかを知るであらう。純一は自分の才能はたつたこれだけかと云ふ歎息の奧にも、この小說こそは、自分を最もよく語り得たものだ、これだけの作品が認められないと云ふ法はないと云ふ誇りと確信とが、その底に動くのを感じた。彼ははじめその原稿を、かねがね自分の文才を認めてゐてくれるらしい貝塚湖泉に見て貰はうかと考へたが、この作の中心思想が、あの確信の牢獄に安住してゐる唯物論者に、氣に入られようとは思はれなかつたので、やつばり林田先生に會つて、あの人の意向を聞いて見ようと思つた。

「たうとう完成しましたね、大變な努力でしたでせう」から先生は言つて、厚い原稿の綴りを純一の見てゐる前で、十枚ばかりも讀んだが、

「なかなかすばらしい書き出しですね、一つ早速讀んで見ませう」と言つた。四五日して純一がその批評を乞ひに行くと、先生は、

「實に深刻な作品だ、あんまり眞劍すぎて、讀んでゐて苦しいやうです。から云ふ力強い作品を書いてゐる人は、今の文壇にはないと僕は思ふから、屹度認められますよ。ただ、ところどころ一寸危險な處もあるやうですが、それは伏字にすればいいでせう。ところで、僕は批評するよりも何處かへ紹介して上げたいのですが、何しろ詩集でさへも

ああ云つた次第ですから、勢力のない僕には、折角いいものだと認めても、どうする事も出來ないのが殘念です。それで、僕が紹介狀を書きますから、君一つあの巖本閃光君に會つて見て、この原稿を見せて賴んでは見ませんか。あの人なら勢力もあるし、かうした傾向の作品はとりわけ認めるだらうと思ひますから。君は巖本君を御存知ないですか？」と林田先生は親切に言つた。ニイチエの祖述者として、氣の利いた評論家として、文壇に特殊の地位を占めてゐる巖本閃光の噂は、純一は西尾宏から始終聞いてゐたし、朝川や深澤からもいろいろと聞いてゐるので、その人柄は大凡分つてゐた。皆から一度行かないか、靑年が大變好きな人だからと言つて幾度びも誘はれたが、勢力のある大家を歷訪したりする事の嫌ひな彼は、これ迄さう云ふ氣にはならなかつたのである。今、林田先生の言葉に、純一は心が動いた。彼はたとひ巖本閃光がどんな人物であつたにしたところで、自分の作品を認める事は疑ひがないと思つたのである。

その翌日、純一は巖本閃光の家を訪問した。朝川などの話によると、どんな人でも來訪すると、直ぐ喜んで面會して、その美點を賞めそやすと云ふ閃光は、純一が訪れた時にも、勿論心易く面會してくれて、ちやほやもてなしたので、純一は殆んど照れてしまふ位であつた。

「西尾君なぞから、君の事は折り折り聞いてゐましたよ、君は大變語學がよく出來るさうですね、なかなか大變な御勉强ださうですね。今の靑年には、兎角鼻息ばかり荒くつて、怠け者が多くて困りますよ。何しろこれからの文壇に出るのには勉强しなくツちや駄目ですよ、君なんかその點で立派なものです」などと、閃光はのつけから純一を賞めそやした。その言葉には何と云ふ靑年の心に迎合する甘さがあつた事だらう。そしてその態度は何と云ふ隔意なさであつたらう。けれども純一は、西尾宏や朝川から閃光の性行を聞いてゐたので、殆んど何の豫備知識も有たないで面會する靑年程には、閃光の甘言に心を委せなかつた。

「ホウ、すばらしいものを書きましたね、これぢやまるで西尾宏君なんかそこのけですね。西尾君の長篇もここに來てますが、君の方が厚さから言つても上だ。まあ、そのうちせいぜい早く讀む事にしませう」

かう言つて閃光は、純一の原稿を、後の床の間に置いてあつた西尾宏のであるらしい原稿の傍に積みながら、

「なに、作品さへよければ、僕の勢力範圍の本屋も雜誌社も相當ありますから、何處へでも御紹介しませう。然し、君の作品はまだ讀んで見ないと分らないが、僕は自然主義的傾向を帶びた眞面目振つた告白的な作品は大嫌ひなんですよ、さう云つた小說は僕は認めないいんです。何でも彼等は、私は私はツて云つた風に言ひさへすれば、それで小說になると思つてゐるから困りますよ。僕は今の『私は小說家』の充滿してゐる文壇を輕蔑してゐますよ。僕がこれからの新進作家諸君に註文したいのは、一つ、大太鼓入りで、法螺でも何でも滅茶苦茶に元氣なところを見せて欲しいのです。自分の下らない經驗なんか取扱はないで、一つ思ひ切つて派手に、當て込みだと言はれてもいいから、大きく見得を切つて貰ひたいのです。さうしなくつちや誰れだつて認めやしませんよ。少し位ゐ不自然だとか、誇張だとか、いや、ものだとか言つて、律義一方の自然派の連中なんかに非難されたつて、そんな事は問題ぢやないんです。何分こさへものだとか言つて、律義一方の自然派の連中なんかに非難されたつて、

ゴミゴミした自己の經驗を書いてゐるうちは駄目です。西尾君なんかにも、いつもさう言つてゐるんですが、今の文壇に出るのには、先づ何よりも頭からおどし付けて、アッと言はせなくちや駄目です、模倣でも燒き直しでも何でもいいから、ウンと變つたものを、不眞面目と思はれてもいいから、堪らなく面白いものを書くんですね」こんな風に閃光は、宛かも純一の耳のところで、樂隊まじりに演說するやうに、彼の心を煽動した。純一は最初はその調子のいい滑かな辯舌に引き込まれて聞いてゐたが、彼の藝術觀がこんなにも自分と相違してゐるのに氣が付いてからは、暗い氣持になつた。彼が暇を告げると、

「さうですか、ぢやまた來て下さい、今度は西尾君と一緒に出かけて來て下さい。そのうち一つ青年諸君で會をこし

らへたらどうです、今の下らない大家連中に隱退して貰ふには、これからの靑年諸君が大いに氣勢を張つてくれないと駄目ですからね」こんなに玄關のところで言つて、閃光は過分な同情を純一に送らうとするかのやうであつた。けれども純一の心持は暗かつた。彼には閃光のやうな考へ方が厭はしかつた、また閃光その人の態度も厭はしかつた。朝川の言葉によれば、巖本閃光の門に出入してゐると、一度より二度、二度より三度、三度より四度、會ふ每に自分の聲價が低下して行くさうで、最初の時は、誰でもが閃光の口からの天才者であるのが、いつとなく何の取得もない低能兒になつてしまふのださうである。それは單に朝川の惡口にのみは止まらないだらうと純一は頷いた。

　純一が豫感したやうに、彼の作品は巖本閃光の認めるところとはならなかつたのである。

「君にはこんな物でない、もつと愉快なものが書けるでせう。そりやなかなか獨創的なところもあり、深刻なところもあるが、何しろ全體が生々しすぎて、眞劍なのはいいが、考へ方があんまり一本調子すぎて、人を壓迫するやうで不愉快なところがある。つまり、一言にして言へば愛嬌がない。讀者と云ふものは、面白がりたい爲めに讀むのだから、どんないい物でも面白くなくッちやいけない。眞面目一方ぢや世の中は渡れないやうに、こんなに讀者を單に苦しい氣持にさせるばかりぢやアどうも困りますね。それに第一、こんな風に考へて行つた日には、小說を書くより死んでしまつた方がいいと云ふ事になる、第一義の問題にあんまり卽き過ぎてゐる。僕の見るところでは、君はかなり貴族的で、享樂的の素質が豐富らしいから、――實際、この主人公のいろんな苦悶も、つまりは滿たされない欲望から生れてゐると僕は考へる――一つさう云つた傾向の奔放なものを書いて見てはどうです。この作品は、僕として忌憚なく言へば、餘りいいものぢやないでせう、君も自信がある譯ぢや無いでせう、今これを出すのは君の爲めに不得策です。是非もつと派手な、明るいものを書いて御覽なさい、そちらの方をお世話しませう」二

　幾囘か無駄足を踏んだ末、やうやく會つてくれた閃光は、初めの時とはまるで人が變つたやうに、澁い苦さうな顏

をして、こんな風に言つた。その樣子があんまり變なので、純一は自分が何か彼に對して、不愉快な事をしたのではないかと疑つた程である。いや、少なくとも、自分の作品が彼を不愉快にさせた事だけは確かである。多分閃光は自分自身を、自分自身の生活には出來るだけ觸れまいとするやうな自分の態度を、攻擊されたやうに感じたのかも知れない。第一義の生活を直視する事が恐ろしく嫌ひらしい彼に取つて、自分の作品が何物であるかを考へると、純一はさう云ふ人物のところへ賴つて行つた自分の愚かさが、何とも言へず苦々しかつた。

「愛嬌がない」この閃光の評語を思ひ出すと、純一は苦笑せずにはゐられなかつた。彼は閃光の批評が、自分の弱點を突いてゐる點も認めた。けれども自分の素質が貴族的で享樂的だから、明るい派手なものを書けと云ふのに至つては、やつぱり苦笑の外はなかつた。或ひは自分がさう云ふ素質を有つてゐるかも知れないとは思つた。然し、認められようが爲めにのみ、自分の心を欺いて、心にもない戲作がどうして出來よう。自分は自分だ、自分の書かずにゐられない事を書くだけだ、そしてその必死の努力がつひに無意義なものであつたらそれ迄だ。人に認めて貰ふためには、どうしても此の自分と云ふものを、駈引させねばならぬと云ふのなら、自分は敢て認められなくつたつていいのだ。この中には、自分に取つて一番切實な問題を取扱つたのだ、それが惡ければ自分はゼロだ。この自分を僞つて、人目を眩惑せしめるやうな藝當を演じて見たところで、それが何になる？

純一は二度と再び、巖本閃光などの助力を乞ふまいと決心した。若し文壇と云ふ處が、すべて閃光のやうな考へ方をする人間で充たされてゐるならば、自分はそんなものを輕蔑する。さうした醜怪な文壇に認められるなどと云ふ事が、果して何の意味がある？　それは本當の自分を辱めるだけの事だ！　かうは叫んだものの、然し、彼の衷心の索漠と沮喪とは、どうする事も出來なかつた。彼はもう此上その原稿を、誰かのところへ持つて行く氣にはならなかつた。

純一がこんな風に、蹉跌と失望との苦々しさに惱み傷いてゐる間に、彼とは殆んど反對の性格と才能とを有つてゐる西尾宏は、この四五年の間に、どんな生活をし、どんな開展を示したであらうか。

二

西尾宏は坦々たる道を進んで行つた。あらゆる事情が彼には有利であつた。美人の細君によつて、物好きな噂の種となつた彼は、その細君を美しく着飾らせて、音樂會や新しい芝居や、文壇的な會合などに、いつも連れ立つて出かけてゐた。宏も風采のいい方だつたので、洒落れた洋服に氣取つたネクタイなどで、いかにもワイルドだとか、ダヌンチヨだとか云つた豪華子振りを見せてゐたが、押出しの立派な菊子は、人中へ出れば出るほど華麗に見えるので、この二人の姿が現れると、皆の者が目をそばだてるのであつた。宏が昔の傲慢な態度とは打つて變つて、如才なく皆と話したり笑つたりしてゐる傍で、その夫人は、いかにも思ひ上つたやうな、周圍の男の視線がみんな自分に集つて來るのを、いかにもうるささうに無視するやうな白々しい表情をして、ツンと澄ましてゐるが、時々懷中鏡を取出して、紙白粉を刷いたり、髮に手をやつて見たりして、自分の美しさをいやが上にも人々に印象させるやうに、意識してやつてゐるやうであつた。

「いやに高慢ちきな女ぢやないか、一體ここを何處だと心得てゐるんだ！」と忌々しさうに連れに囁く者もあつた。

然しかうした華かな二人の生活も、二年ばかり續いた後で、變化が來た。二人が國に歸つて、暫くして再び上京してからは、會にも芝居にも、宏一人を見かけるやうになつた。

「どうして細君を連れて來ないのだ？」と仲間の者がたづねると、

「ウン、此頃は母親が病氣なんだ、それに當人もヒステリイをおこしてゐるから、來ない方がいいんだ」と無頓着に

宏は言ふのであつた。そのうちに、西尾宏が細君とは別居して、そのころ出來た蜂窩式家屋（アパアトメントハウス）へ一人で引越したと云ふ記事が、新聞の文藝消息に現れた。

「西尾君たちは確かに破綻してしまつたよ。此間俺が本郷三丁目で、バッタリ菊子夫人に出逢つたんだ、相變らず人目に付くやうな派手な身なりだつた。俺を見ると、直ぐ知らん顔でむかう向いてしまつたが、俺が聲をかけたもんだから、仕方なささうに話したがね、（先生は私とはもう無關係です、左樣御承知下さい）と切口上で言はれてしまつた」

と興味津々たるものがあるらしく、深澤は言つた。

或る者は菊子夫人が、西尾宏を尊敬して近づいて來た三田の學生と何かあつた爲めに、西尾宏が離婚したのだと噂した。するとまた或る者は、それは西尾宏が自分で言ひ觸らした說で、實はさうではなく、離婚されたから菊子夫人が、その三田の學生を相談相手にしたに過ぎないのだと、彼女の爲めに辯護した。然し、純一は西尾宏をよく知つてゐた。彼は單に彼女に飽いたのだ、そしてそれは豫定のプログラムを追つたのに過ぎないのだ、口實なんか彼には必要ではないのだ、多分彼はその興味の對象を他に發見したのであらう、ただそれだけの事だと言つていいのだ。すると果して、純一の想像した通り、西尾宏が新進の聲樂家小花園子に、頻りに接近しようとしてゐると云ふ噂が傳はつた。やがて彼が彼女の爲めに詩を作つて、その友人の作曲家山村俊作がそれを作曲して、保險協會での小音樂會で歌つたと云ふ新聞記事が出た。然し、宏はかうした戀愛事件のために、その藝術方面の活動を怠つてゐたのではなかつた。

彼は『星宿』と云ふ贅澤な同人雜誌を、十人あまりの友人と一緒に出した。言ふまでもなく、この友人と云ふのは、江添とか深澤とか云つた連中ではない。最近伊太利から一人で歸朝した下條潔とか、山村俊作とか、横濱の貿易商の息子の北村麥秋とか、其他或ひは學習院、或ひは赤門、或ひは三田の門を出た才氣煥發の人々であつた。この雜誌に

擽つた人達の作品は、在來の自然主義派の作家や、在來の三田派の作家などとは違つて、もつと自由奔放で、もつとロマンティックで、しかももつと耽美的であつたので、それが非常に天才的に思はれ、一般にフレッシュな印象を與へた。同人たちの作品の中で、西尾宏の短い散文詩風の作は、とりわけ評判がよかつた。もつと長い物をも彼は書いた、それは、ルミ・ド・グウルモンや、アナトオル・フランスを思はせる、心憎いほど氣の利いた短篇であつた。また彼は、これ迄の詩を集めて、『大理石の家』と題する、マアブル模様の淸楚な裝幀から、活字の組方に至る迄、極めて貴族的な、高雅な詩集を自費出版した。才人西尾宏の名は、疾く既に文壇具眼の士の間に、廣く喧傳せられてゐた。また、宏自身も、各方面の大家の門に、つとめて出入する事を怠らなかつた。かの巖本閃光の如きも、宏をその門下生同樣に心得てゐる一人である。

つひに宏は『驚異の再生』と題する三百枚ほどの長篇を書いた。（純一が閃光の家で見たあの原稿がそれであつた）それは宏がそのあらゆる才能と知識とを傾注して、彼の唯美主義の三昧境を說いたもので、富裕な伯爵家に生れ、豐かな藝術的天分を惠まれ、その上宛かもワイルドのドリアン・グレイの如き美貌を授けられた主人公が、十九世紀末の散文的な卑俗な現實的精神に反抗して、飽く迄詩的な、貴族的な浪漫的精神（ロマンテイツク・スピリツト）に目覺めて、乾燥無味な現實の中に、失はれた驚異の再生を求めて、これを美に、しかも地上の最も美しいものである女性に見出す事の外なきを知り、彼はその絕對美の化身なる理想の女性を發見せんが爲めに、宛かも胡蝶が花壇の上をさまよふやうに、或ひは名望ある貴婦人、或ひは無垢の町娘、或ひは汚れた娼婦、或ひは聲樂家、或ひは女優と云つた風に、次ぎから次ぎへと、凡て眼に觸るる限りの美しい女性を、あらゆる危險を冒し、あらゆる詭計をめぐらして手に入れ、これを自分の胸に押し付けるけれど、つひにその夢想を滿足させることが出來ないで、絕望のあまり、無賴の徒と相伍して、下等な酒場に沈湎し、はては祕密の阿片喫煙場に入り、その阿片の甘美な睡夢の中に、つひに神の與へた絕美の女性と相擁するに至

るその徑路を、浮誇と思はれるほど絢爛に、誇張と思はれるほど大膽に、輕薄と思はれるほど自在な筆で描いたもので、その一々の情事、一々の冒險の描寫は精細大膽を極め、殆んど女性誘惑の敎科書と云つてもいい位である。就中、挿話として談られてゐる、肥滿した中年の文學者が、一年計畫で文學少女を誘惑した祕戲畫的な功名談や、墓地で少女の凌辱される刺戟的な場面などは、宏の神經がもつと粗雜なものであつたなら、當然その筋の諱むところとなつたであらう。また、主人公の行動に疑惑の眼を注いでゐる刑事と、主人公との智慧くらべに至つては、一種探偵小說的興味さへもあつて、一體にその波瀾と曲折とに富んだ構想は、殆んどセンセイショナル・ノヴェルに類するものさへあつて、一讀息も繼がせない程の面白さがあつた。殊にその最後の怪奇を極めた阿片の夢は、最も獨創的なもので、その中のフロックコオトを着た神が現れて、主人公と問答する章に於て、宏は彼一流の徹底した個人主義、享樂主義の哲學を、ワイルド式な奇警な逆說（パラドックス）を以て論じてゐる。それは全く奇拔な、我が文壇に未だ類のない愉快な作品であつた。そしてそれは、あらゆるものを攝取し同化してゆく宏の特殊の天分を、遺憾なく現してゐた。宏は純一と違つて、その生活と藝術とを全く引離して考へてゐた。彼は藝術家に取つては、その藝術こそ本當の自分の生活なのだ、藝術家は卑俗な現實を一切無視して、その空想の中から美しい傳說を作らねばならないといつも主張してゐた。從つて彼のその作品の中には、現實地上の生活に惱み傷ついてゐる人間を慰め勵ますやうなものは、卽ち、人間的なもの、人間としての苦しみなどは見るべくもなかつた。彼自身の心臟の鼓動などは何處にも聞かれなかつた。然し、そこには何と云ふすぐれた巧智と、華かな機才と、すばらしい思ひ付きとがあつた事であらう。人生を樂しい遊步場のやうに心得てゐる人々を樂しますための、何といふ煥發の才氣と、盛んな遊戲的氣分とが橫溢してゐた事であらう。

常々西尾宏の推賞者である巖本閃光が、この作に動かされたのは言ふ迄もない。それは閃光の抱懷してゐる藝術觀を、具現したものと言つてよかつたからである。『驚異の再生』は閃光の推奬の辭を前に附して、『新文藝』の創作欄

の殆んど全面、約三百頁に亙つて揭げられた。そしてその閃光の推奬の辭こそは、およそ人間の考へ得られる讃美の極を盡した、全く驚くべき名文で、それを讀めば、どんな人でもその作が不朽の傑作である事を、いやでも信じないではゐられないやうなものであつた。

「『驚異の再生』は、それ自ら驚異の再生である。」と閃光は書いた、「此の年少氣鋭の作家の魔術は何たる驚異を我々の胸に再び新しくした事であらう。彼はこの僅々三百枚の中に、古來のあらゆる大天才が言はうとして、未だ十分に言ひ得なかつたものを、殆んど言ひ盡し得たかの觀がある。これだけの作品が、結局世間の視聽を聳動しないですむ筈はないと信ずる私は、玆にこの作品の價値を喋々力說することを、甚だ氣の利かないことに思ふ。けれども、私はその氣の利かない事を敢てせずにはゐられない程、此の作品によつて動かされたのである。この作品の讀者諸君が、殆んど例外なく經驗するであらう如く、私もこれを讀みはじめると、中途で休むことが出來なかつた。それ位にも、この作の美と魅力とは强烈を極めてゐるのである。それ位にも、この作は獨創的な、殆んど天才的な極印を帶びてゐるのである。今にして思へば、十數年來のさまざまな名に呼ばれた流派や、主義や、傾向なぞの總ての一生懸命な奮闘努力が、殆んどこの淸冽なる噴泉のための開鑿であり、此の力强き芳烈なる開花のための播種であつたかの觀がある。そこにはバルザック、フロオベエルの描寫が、生活肯定があり、スタンダアル、ブルジエの心理學があり、ニイチエ、スティルナアの哲學があり、ワイルド、ゴオティエの美の宗敎があり、ダヌンチオ、ロティの憂鬱があり、そのほかなにがあり、かにがあり、殆んどないものがないのである。

殊に驚異すべきは、富裕なる良家に人と成つたこの年少作家が、かくも豐富なる人生の經驗を享受し、しかもその經驗に壓倒される事なく、この遺憾なくロマンティックであると共に、より遺憾なくリアリスティックであるところの製

作に於て、神聖なるその『若々しさ』と、殆んど不可思議なるこの『老成』とが、互に何等の相妨ぐるところなく、自然に、幸福に手をつなぎあつて來てゐることである。

げに、本當のロマンティシズムと、本當のリアリズムとが、決して別々な物でないこと、また最初からの老成と、最終までの若々しさとが、聊かも相斥けるものでないことは、この作者西尾宏君の場合に於て、最も痛快に、最もめざましく證據立てられてゐるのである」

この巖本閃光の殆んど荒唐不稽と思はれる程の激賞は、言ふ迄もなく文壇の問題になつた。その上、かうした華々しい出現は、これ迄類例の無い事だつたので、批評家は爭つて褒貶を恣まにした。文藝新聞として聞えてゐる某新聞の如きは、西尾宏の鋭い横顏を現はした寫眞を掲げて、『天才作家現はる』と云ふ標題で、彼を紹介し、數人の文壇大家の合評を以て、日曜附録の全面を埋めた。雜誌に現れてから一月も經たないうちに、『驚異の再生』は、文藝物の出版書肆として、出版界の覇王と稱せられてゐる新星社より、宏の凝つた好みに從つた、埃及模樣のきらびやかな裝幀で現はれた。賣行はすばらしいものであつた。殆んど『不如歸』以後の成功と云はれてゐた。「賣れる！ 賣れる！ 飛ぶやうに賣れる！ 此の破天荒の賣行を見よ！」と新星社の廣告に載つた文句には、一厘の懸値もなかつた。續いて彼の詩集『大理石の家』が、更にその後の作詩を加へて、『樂園の曲』の名の下に同じ社から出版され、また短篇集『靑白き都會』が紅毛書房から出版されると云ふ豫告が出た。今や、宏は一躍して文壇の流行兒であつた。多くの文藝雜誌は、爭つて彼の原稿を乞ひ求めた。就中、現下雜誌界に重きをなしてゐる『中外公論』の主筆竹田紅桃が、俥で宏の宅に乘りつけて、向後一年間他雜誌に一切書かぬと云ふ契約で、月々何百圓かの金で彼を買ひに來たと云ふ噂が、不遇な文學靑年の間に、羨望と嫉妬を以て語られた。そしてつひに、かうした宏の勝利を遺憾のないものにする爲めに、彼の友人たちによつて、大規模な祝賀會の計畫が立てられるに至つた。

「西尾宏の會」と云ふ名で、堂々たる文壇の大家の名を、かの嚴本閃光を筆頭に賑かに並べた會の通知狀が、純一のところにも來た。場所は上野の精養軒で、會費五圓、プログラムには、新進聲樂界の花形小花園子の獨唱が餘興として記されてゐた。かう云ふ意味の會合は、これ迄に例のない事なので、文壇全體が驚異の目をみはつたのは、無理もない事である。

西尾宏の會のその日、純一は氣がすすまなかつた。それは西尾宏の華々しい勝利を目擊するのが苦痛だからと云ふばかりではなかつた。元來、彼はさうした人中が厭やで、そんなけばけばしい處へ、みすぼらしい風をして出て行つて、大家の間を自己紹介して廻るやうな事は、餘りに卑屈で、厚かましくて、厭はしいし、また片隅に、誰とも話しもしないで、ぼんやり立つてゐるのも、自分が餘りにみじめで厭はしかつた。

けれども彼は出席の旨返事を出したので、行かなければならないと思つた。西尾宏とのこれ迄の關係を思ふと、別に都合の悪い事もないのに、出席しない譯には行かなかつた。宏とは冬子の事件があつてからも、彼は別に宏と冬子を爭つた譯でもなかつたし、個人的にも宏に對して、彼から敵意をもつところもなく、宏から彼に對して含むところもなかつた。彼は朝川や江添なぞとは違つて、他人の生活に割込んで行つたり、他人の恩惠を受ける事は、その最も恥づるところであつた。殊に、宏とは最初から、いかなる意味でも、その世話を受けたり、立入つた交渉を結んだりする事を絕對に避けてゐた。それが二人の間柄を、濃淡なく持續させて來た何よりの理由である。彼は初めから、宏の友情をあまり信じてはゐなかつた。それだけ彼は、宏の多くの舊友たちのやうに、宏に對して不平は有たなかつた。彼に取つては、宏が極端に自分と違つた人間である爲めに、いろいろな點で刺戟され、益々自分と云ふものが、はつきり分つて來ると云ふだけで十分であつた。そして宏は、自分に對して敢て求めるところの無い者には、必ずしも不愉快な人間ではなかつた。

上野の精養軒まで、電車を下りてから、公園の廣い通りを、東照宮の方へ歩いて行つてゐると、後から脊の高い男と、非常に脊の低いハイカラな洋服の男とが遣つて來て、純一の傍まで來ると、その背の高い男が彼を呼びかけた。
「おい龍田ぢやないか、どうした？　ちつとも此頃出ないぢやないか。おめえも西尾の會へ行くのか？　今日は盛會だぞ」と彼はムツリとした調子で言つたが、不圖思ひ出したやうに、
「おめえ、富枝の事を聞いたか？」と訊ねた。
純一は富枝と云ふ女の名を、直ぐには一寸思ひ出せなかつた。彼が默つて相手の長い顏をぢつと見てゐると、
「富枝の奴は馬鹿だ、男に關係するのに、自分の方から金を出す馬鹿があるか！」と彼はいきなり呶鳴り付けるやうに言つた。その時、純一はその富枝が、相良元雄と同棲してゐた女の名だつたといふ事を思ひ出した。
グデサンはずんずん行つてしまつた。それに負けないやうに、脊の低い男も思ひ切り股を張つて行つてしまつた。
考へて見ると、その脊の低い男は古山白夢であつた。純一は二人の後姿を見ながら、いつかの夜——四五年前の芝居の夜を思ひ出した。その夜の歸りに、神樂坂の田原屋で、あんなにも皆が、幸福な深澤久滿雄と藤岡富枝との爲めに祝盃を擧げた事を思ひ出した。寂しいやうな痛ましい思ひが彼の胸に漲つて來た。彼は近年すつかり相良元雄の事を思ひ出さなかつた。元雄は二年程前、兄の病氣から引續いての死亡、そんな事から歸國したきりになつてゐる。信太郎の手紙によると、今では相良先生の夫人と老いた父とを助けて、小學校の教師をしてゐるが、此頃矢張り先生と同じやうに病氣が出來たと見えて、いつも藥瓶を離さないでゐる。いつもその病氣らしく、頰がほんのり紅潮してゐる事や、咳をする事や、いろんな事が先生とそつくりになつてゐる。然し彼は相變らず繪には熱心で、東京にゐた時よりも、眞の畫家としての良心を打ち込んでの制作に親しんでゐるのが、何とも言へず痛々しいと云ふ事であつた。
初夏になると、まはりの木立が生ひ茂つて、その中に家が急に低くなつたやうに見えるあの相良先生の家が、純一

の眼にカツキリと浮んで來た。あのやうに少年時代の希望に燃えながら、畫架に親しんだその同じ處で、敗殘失意の身を鞭つて、今や流れる水の上に血を以て繪をかくやうな、この不幸な友の悲しい藝術欲を考へると、純一は凄愴の感に打たれざるを得ない。ああ、それが本當の藝術か！　と、純一は深く痛まずにはゐられないのである。

純一は其時不圖、十年の後にはその壞滅する事を知りながら、寺院の壁に描いたといふ伊太利の古名匠の心事を想ひ起した。止むに止まれぬ藝術の愛が、生と死の彼岸に彼を導いて行く。功名、野心、それは凡て空な名だ。藝術家はその描く事によつて生きるのだ。そこに彼の法悅がある。そこに彼の救ひがある。今ここに、一人の畫家がある、彼はその胸の傷口から血をしぼり出しては、日每にそのカンヷスを紅く彩つて行く。彼はそのために死なゝければならない。然し、それによつて彼は眞に生きるのだ！

ああ、然し、今やいかに多くの商賣人が、藝術家の名を冒してゐる事であらう。彼等は世間的に成功を贏ち得るがよい、自分はいかに敗れ傷くとも、どうしてこの自分の魂を賣る事が出來よう。若し自分がさうでなければ、自分は元雄に恥ぢなければならない。純一はかう考へて、遙かに目路を遮つてゐる博物館の建物の上に飛んでゐる一抹の白雲を眺め遣つた。

藤岡富枝は、元雄が兄の病氣で歸つた時に、一緒にその國へ行つた。けれども一週間もたたないうちに、一人で歸京して來た。それ以來、彼女は相良元雄に代るべき優しき美しき愛人を、若い文學者の間に求めてゐたが、一二度位の關係でみんな長續きがしなかつた。彼女は文學的會合に招待されれば、どんな工面でもして出て行つた。短歌なぞは相當に作れるので、さう云つた方面での男の取卷きも相應にあつた。かうした彼女の情生活を、グデサンは神經過敏な注意を以て調べ上げてゐるので、彼に依れば、彼女がいつ誰と親しくなつて、何處で會つて、どんな事をして、どんな樣子で喧嘩したか、どんな風に別れたかなどと云ふ事まで、掌を指すやうに分るのであつた。憤慨家である彼は

彼女のさうした男に打込んで行く安易な遣り方を、だらしがないと思つてゐるのであらう。

「富枝の奴は馬鹿だ、男に關係するのに、自分の方から金を出す馬鹿があるか！」から言ひ捨てて行つたグデサンの言葉を、純一はもう一度思ひ出して見て、悲しい微笑をその頬にのぼした。

精養軒の入口まで來て、純一は躊躇した。家を出る時から進まなかつた氣持が、一層濃くなつて、何だか引返したいやうな氣分になつた。彼は大佛前の鐘樓のところを引き返して、櫻並木の下の捨石に腰をかけて、暫くの間、前を通る人々の様子をぢつと眺めてゐた。通行の人々は、大方は廣い通りを眞直に行つた。が、折々、長髮にした若い男や、赤い靴を穿いた紳士などが、精養軒の方へ入つて行つた。その中に、向うから二人連れの男女が來た。不圖純一は、その女が稍や小柄ではあつたが、目の覺めるやうなピンク色の襞の多い洋服を着て、紅い薔薇と紫のライラクとの飾りを着けたボンネットをかぶり、白い靴を穿いて歩いて來るのを、白皙人か、それとも混血兒の美人かと思つて見た。脊のすらりと高い男は、先きの曲つたステッキの柄を片腕にブラリと懸けて、片手には吸ひかけの葉卷を持つて、女のゆるい足並みにわざと合せるやうな、ブラリブラリとした歩き方で近付いて來た。だんだん傍に來るのを見ると、その女の靴の上げ方がいかにも鈍くて、靴そのものの感じとは全然違つて、まるで駒下駄でも引きずつてゐるやうな歩きつきなので、その女の顏は白かつたが、直ぐ日本の女だと云ふ事は分つた。通りすぎて精養軒の方へ入つて行くのを見送りながら、純一は彼女の頭に注意した。それはボンネットの下の、丁度首筋のところで、その美しい黒髮をるのも痛いやうな切り方で、ザクリと揃へてゐるので、首筋が格別白く細長く見える。

「あゝ、あの女も西尾宏の會へ來たと見える……」と純一は口の中で呟いて見て、何とも言へぬうら寂しさを感じた。

純一がこんなに暗鬱な氣持でゐると、反對の方から、二三人で笑ひながら來かかつた者がある。不圖振向くと、その三人の眞中に、西尾宏が紫紺色の服に黒のネクタイをつけて、りうとした風采の、いかにも新しい藝術家らしいス

タイルで、晴れやかに微笑をして、何氣なく純一を見た。

「ア、來てくれたね、君は出嫌ひだから、どうかと思つてゐたんだ」と、彼は眞實嬉しさうに言つた。宏のその調子には、優勝者の寛大と善意とが現れてゐた。宏が純一をいかにも音樂家らしい、瀟洒なすつきりした風貌をもつた山村俊作に紹介してしまふと、

「やア、久し振りでしたね、僕は下條です」と宏の左方にゐた、すらりとした貴公子が、から純一に言葉をかけた。純一は向うからかうした慇懃な言葉をかけられて、あわてて挨拶を返した。

下條は羅馬滯在中に、レナといふ或る言語學者の娘と戀に落ちたとかで、レナに與へる詩とか、レナと一緒に羅馬カムパニャの野ロマナを逍遙した思ひ出とかを、『星宿』に時々載せてゐた。然し、彼の本領は外國文學の紹介――彼自身はそれを文獻學的の研究と呼んでゐた――にあつた。昔言つてゐたやうな文藝復興期ルネッサンスの徹底的研究はまだ現れなかつたけれども、彼は『ジョルダノ・ブルノオを想ふ』とか、『情熱の女性エレオノラ・ドゥゼ』とか云つた小論文や、紹介を書いたり、ダンテの『新生ヰタ・ヌオワ』を飜譯したりした。

純一はその儘、この三人の後について歩き出した。けれども彼はこの三人が、今夜の會の中心人物である事を考へると、さうした中心人物の後について會場に入る事が、いかにも彼等に親しい事を誇示するかのやうで厭やだつたし、また滿座の注目の的まとになる事も堪らなく厭やであつた。一二度下條が振返つて見た程、彼の歩き方は遲々としてゐた。かうして彼は宏達が、待ちかねてゐた幹事の北村麥秋などに迎へられて、早く旣に四五十人も集つてゐた來會者に惹き起したどよめきのひまに、そつと會場に滑り込んだのである。

會場は美しかつた。そこはかなりの大廣間で、室の入口には「西尾宏君の藝術のために」と、黑い長い板に白い文字で書いた札が出てゐた。室は大きい靑い絹で張つた大衝立おほついたてによつて二分され、此方こちらは休憩所となり、彼方かなたには食卓

の白い布れや、澤山の椅子の列などが淸々しく見えてゐた。
休憩所の片隅には、今日の會のために搬び込まれた大形のピアノが据ゑつけられてゐた。方々には煙草の煙が紫のゆるい渦を卷いてゐた。そしてその煙草の煙の重つてゐるところには、それぞれのグルウプが作られてゐて、その幾つものグルウプの間を、頻りに往つたり來たりする者も多かつた。また、中には隅の方で、何か密談でもするやうなひそひそ聲で、頻りに囁き合つてゐる者もあつた。
「やア、なかなか盛んぢやありませんか！」と大きい聲で言ひながら、首に白い布れを卷きつけた嚴本閃光が入つて來た。すると下條潔が立上つて、
「ヤ、先生、お待ちしてゐました」と言ひながら、西尾宏の前の椅子をすすめた。
「ア、有難う、實に多方面な人が集りましたナ、西尾君はなかなか以て、當代の人氣役者ですからナ、少しあやかりたいもんです」と言ひながら、どうだ、この俺の推奬の力を見てくれと言ふ滿悅を鼻の先にぶら下げてゐるやうな、氣の利いた顏をして、いかにも愉快さうに方々を見廻した。すると閃光の眼のとまつたところにゐた二三人の靑年が、あわてて彼の前へやつて來て、ぺこぺこ頭を下げた。その中でも、ヒイヒイと笛のやうな黄色な聲を出す靑年は、閃光の傍に椅子を引き寄せて、
「先生の此間お書きになつた『電光』は、實に素敵ですね。あれを讀んだ時、私は昂奮して、一晩中寢られませんでした。五分の隙もない會話の受け渡しと云ひ、人物の出し入れと云ひ、すつかり感心してしまひました。とりわけ、主人公と女主人公とが、默つて蛙の啼き聲を聞いてゐるあたりの微妙なラヴ・シインは、先生のやうな女性通でなくちや、到底企及する能はざるところですね」などと、最近閃光の發表した戯曲を、口をきはめて賞めそやしてゐる。
「いや、あれはイブセンとズウデルマンとの中間をねらつたものでして、その爲めでせう、或る人からは甘いと評され

ましたがね。然し、うんと甘くしなくつちや大向には受けませんからナ。第一、古來の大藝術を見給へ、シェクスピアにしろゲエテにしろ、皆大甘物ぢやないですか……」と、閃光もいい氣持になつて辯じ立ててゐる。この靑年は、閃光が西尾宏のために、あの途方もない推讃の辭を書いてから、閃光の門に日參して、その御機嫌伺ひをして、自分も例の「なにがありかにがあり」や、「神聖なる若々しさ、不思議なる老成」やを頂戴したがつてゐるのだと、專ら噂されてゐた。然し、或る者は、彼が今では閃光でなく、西尾宏の方に日參してゐるのだと、その噂を訂正してゐた。彼の事は兎に角として、閃光が近來靑年の間に不人氣であつたのが、あの推奬以來、文壇に出られないであがいてゐる文學靑年達を、その周圍に集め出したのは事實である。

閃光の言つたやうに、今夜の會合は多方面の人々を集めてゐた。この顏振れを見ただけでも、宏がいかに多方面な交友をもつてゐるかが一目で分つた。自然主義系統の文學者を除けば、文壇の大家小家は、各方面に亙つてかなり網羅されてゐた。尤も、自然主義の作家も二三人は來てゐた。その一人は、某新聞の合評を引受けて、『驚異の再生』をつくり物である、自然からの直寫でなく、巧みに案出された模寫の藝術であると非難した人であつた。また他の人は自分の存在を忘れられまい爲めに、大抵の會には無理をしてでも出席すると云はれてゐる人で、「犬も歩けば棒に當る」と云ふ諺の如く、さうした會に行けば、そこに來てゐる雜誌記者から、其場の調子で、屹度一つ二つ原稿の註文を受けるのを、彼はよく心得てゐるのである。また其外に、西尾宏の周圍に此頃急に集つて來た若い學生や文學靑年達も澤山來てゐた。彼等の多くは、旨い物に群がる蠅のやうに、新しく頭角を現はした流行作家の處に蝟集して、其日其日の風向きで、それからそれへと轉々してゐるのである。

「案內狀を二百枚出して、百人以上も集まるんだから大成功だ」と幹事のしるしの薔薇の小さな花をその胸に挿してゐる下條は、詩人の北村麥秋をはじめ、同じやうにその薔薇を挿した幹事達と、會場を往つたり來たりしながら話し

てゐた。

若い美しい聲樂家として、今人氣のある小花園子の、裾模樣にきらきらする丸帶をしめてゐる、すらりとした姿の外に、まだ女の來會者の姿が三四人見られた。けれども此の女達は、いづれも知合ひでありながら、しかも餘り親しくしてゐないと見えて、反つて男の方へ話しかけたり、話しかけられたりしてゐた。その女が入つて來た時、そこにゐる男たちが一齊に振返つて見た程、その着物が赤と黑との棒縞のお召で、それに鮮綠色に白の總刺繡をした半襟を胸一杯に見せて、その小皺の寄つたやうな大きい顏一杯に、脂粉と臙脂の色彩を凝らしながら、しかも一種凄慘な物狂はしいグロテスクな印象を人々に與へる大柄な女が、何だか照れたやうな樣子で、默つて入口の近くで澄ましてゐた。それとは反對にずつと室の中央の、テエブルクロオスをかけた上に、溫室物のカアネエションの置かれてある卓のところで、今、日本のモオパッサンと言はれてゐる、妙にあくどい色話を發賣禁止にならぬ程度で、出來るだけエロティックに書いた小說で文壇に認められてゐる、脊の高い、色の黑い、その年頃の分らぬやうな變な若さを持つてゐる中年男と、盛んに笑つたり話したりしてゐる女がある。

「わたくしは此の日本は、たとへ世界のどんな國から壓迫されても、必ず撥ねッ返して生きて行く、永久に若い若い日本だと思ひますわ、それだけわたくしは、この若い尊い日本を信愛してをりますわ」と、彼女はその白い面にヒステリックな昂奮を見せながら、唇の上を撥ねるやうに歪めて言ふと、その普通の女よりもずつと大きい口の、眞紅にふくれた唇を嘗めずるやうな眼付で、かの性慾文學者は撫で廻しながら、

「それもさうです、何でも信愛すると云ふ事は結構な事です。僕等もいろいろと信愛したいんですが、どうも近代的精神に目ざめた我々は、單純に信愛すると云ふ事が出來ないのです。殊に男女間の關係に於て、とりわけさうした痛ましい幻滅を感ぜずにはゐられません」と、彼女が言つてゐる事とはぴつたり合はないやうな事を言つてゐる。然し、

女自身もその相手と眞面の話をしてゐるのではなかつた。彼女の涼しい眼は絶えず、他の一隅で西洋流の立話をしてゐる、かの斷髪したピンク色の洋裝の少女と、その取卷の靑年達との一種淸新な社交振りや、また、ピアノの傍で山村俊作と何か話してゐる小花園子の方に、嫉視の視線をちらちらと放つてゐるのだ。

「薔薇の城の女王さん、アハハハ……」と取卷の靑年が、彼女にこんなに言ふと、彼女はその美しい眼を斜めにさッと射た。

一見舞踏女かと思はれるやうな柔軟な肉體を、ピンク色の薄い服に包んだ斷髪の少女は、異性に對する一顰一笑を、どんな女よりも、もつとフリイに、もつとチャアミングに、もつとプラウドにやつてゐた。

「アラ・ナジモヴ夫人は確か髪を短く切つてましたね」と、一人の靑年が、氣の利かない樣子で言ふと、彼女は妙に冷淡になつて、

「アラ・ナジモヴ夫人はいい藝術家ですわ、私大變好きです。この間何處かでナジモヴ大會があつたぢやありませんか、いらつしやいましたか、あなた？」とまるで反對の方にゐる、脊の高い細面の靑年に、彼女は言葉を投げ與へた。

「然し、あなたは何だつて思ひ切つてそんなに髪を斷つたんです？」と、中年の文士が笑ひながら訊いた、「ラヴ・ハンタアを避けるためですか？」

するとと彼女は得意さうに微笑したが、

「私、そんな弱蟲ぢやないことよ、藝術に一生を獻げる堅い決心からですわ」と、いかにもその決心の堅さを示すやうに、眉を上げて言つた。

藤岡富枝は、パッと電燈のついた時分に、バタバタと入つて來た。彼女は西尾宏を見ると、

「ア、遲くなつちやつたわ、私、でも間に合つてよかつたわ、隨分來てゐるわね。ア、あの女また來てゐるわ、何の

會でも來ないつて事ないわ。橋本久美子も來てゐるわ、一帳羅の洋服なんか着て威張つてゐるよ」から言ひながら爪立つやうにして彼女は彼方此方物色した。やがて彼女は先刻閃光のところへ行つて黄色い聲をかけたかの青年のところへ、そそくさと歩いて行きながら、

「秋雨さんはどうしてゐらつしやるの、なぜいらつしやらないの？」と、大きな聲で訊ねた。するとその青年はあわてたやうに、

「君こそどうしてゐました。ちつとも來なかつたぢやありませんか」と、その秋雨と云ふ女の事を、こんな人中でその上話されては大變だと言つたやうに、そのグロテスクな聲で話頭を轉じた。この青年は、その秋雨女史と云ふ自分より十幾つも年上の閨秀畫家と同棲してゐて、その放縱な情生活は、文壇の話題になつてゐるのである。

「どうも風邪を引きまして……」と、閃光が喋つてゐるところには、彼よりも一段先輩株に當る、立派な八字髭を生やした、外國文學の紹介者として聞えてゐる横山江潮のまはりを、三四人の赤門出の大家が輪を作つてゐた。ブヨブヨと白く肥つた、一見草相撲の一つも取りさうな恰幅をした毛利素瓶が、下唇の下にチョッピリ生やした小髭を捻りながら、重ッ苦しい調子で、挨拶に來た西尾宏をつかまへて、

「僕は君に抗議を申し込みたいんだがね、あんな書き方をするなんて、隨分ひどいよ。あれぢやまるであのダンヌンチオの『快樂兒』の中の英吉利人見たいな男が、俺の事のやうに皆に取られさうで困るよ。俺にはそんな事は無いんだからね」と、彼は自分でもきまり惡さうにニヤニヤして、「それに生が藝術の模倣だと云ふワイルドの說の例證に俺を取るなんて、少し惡戲が過ぎやしないかね」と、何だか頻りに抗議を申し込んでゐる。

「いや、そんな事はないですよ、あれはみんな僕の想像力の所産ですからね。折角大に自分の想像力を自信してゐるところへ、そんな事を仰しやつちや、僕の方からこそ、抗議を申込みたいですよ。一體人間は凡て弱點に於て一致

するものですからね、悪い事だと何でも自分の事のやうに思はれるんですよ。さう思ふのが第一、身に覺えのある證據になりやしませんか」と、宏は眼に皮肉な色を浮べて、ぬからずさかねぢを食はせた。
「こりやよかつた！」と人の善ささうな横山江潮は、涙を出して笑つてゐる。彼にはこの二人の對話に、特別可笑しがる理由があるらしかつた。

三

「君、こんな處にゐたのか、僕はまた君は來てゐないのかと思つた」と、後から肩を叩いて話しかけられて、純一が振返つて見ると、それは朝川であつた。彼は今日は割合ひに血色のいい顏をして、とりわけ人なつッこい樣子を目色に見せてゐた。
「なかなか盛會だね、見給へ、みんな幸福さうな顏付をしてゐるぢやアないか、愚人の樂園と云つた感じだね。僕はこんなブルジョア臭味の紛々たる中にゐると、今にも窒息してしまひさうで、むかッ腹が立つてくる。アルツィバアセフの勞働者セキリオフ見たやうに、あの髮を長くした奴等のかたまつてゐる眞中へ、いきなりピストルをドンドンぶち込んで遣りたくなる……」と朝川は例のがむしやらな調子で、賑かな集團を見廻しながら、いかにも腹立たしげに言つたが、そんな猛烈な憤りも彼の口から出ると、可愛らしい冗談のやうに聞えた。
朝川に取つては、此頃見るもの聞くものが憎惡の種であつた。純一に取つて輕蔑に値する凡ての物が、彼に取つては、息詰まる程の憎惡となり、憤怒の膽汁となつて込み上げて來るのだつた。この四五年は、彼に取つても重い苦役であつたのである。彼は痼疾の喘息の頻々たる發作を、續けざまの注射で彌縫しながら、月々の生活費をやうやうの事で掻き集めたり、踏み倒したりしてゐた。彼は貝塚湖泉がその父の友人である關係から、湖泉に甘えては小遣錢を

せびつたり、その經營してゐる賣文協會の仕事を貰つたりした。彼の小說も、貝塚湖泉や大菅左門の雜誌に書いたりしてゐるうちに、いくらか認められて來て、有望な年少作家として、雜誌『新星』の新進作家號に載つたこともあるのだつた。最初のかうした順調にその儘乘つて行けたならば、彼は西尾宏ほどには行かなくとも、その生活の基礎をかためる事位は容易であつたらう。ところが、彼の一つは病氣から來るふしだらな懶惰癖と、平素の些々たる不良行爲——仕事をいい加減にごまかす事、不義理な借金の尻を他所へ持つて行く事、誰にでも平氣で靠れ込んで行く事、表でお世辭を言つては蔭で惡口をたたく事、いい加減な嘘をついて人をごまかす事——とが、彼の軌道を歪めてしまつた。少年の時代に一種の愛嬌となつて、人に可愛がられる理由であつた事が、年を取つて來ると、一個の人格としての恕し難い缺陷として、人に厭はれ排斥される原因となつてしまつた。かうして彼は次第に先輩知己の信用を失つて、延いては彼の生活を惡い狀態にした。又か、と言つた風に、誰もが彼の言行を差引して考へるやうになり、つひにはさすがの寬容な義俠心の强い同志の中にも、あんな不徹底な口先きばかりのやくざ者なんか相手にするなと言ひ出す者さへ出來て來た。

「文學者か社會主義者か、態度を明かにしろ」と、彼は屢々罵られた。純一は自分が朝川と一緒にして考へられてゐるのが苦痛であつた。文學者ともつかず社會主義者ともつかぬ中途半端な立場にある點に於て、自分が朝川と共にそんな罵倒を受けるのは、それは止むを得ない事であらう。然し、ただそれだけの事から朝川とごツちやにして考へられてゐるのは忍び難かつた。私行上からは、純一は朝川とは全く反對であつたからである。純一は寧ろ朝川から迷惑を受ける側であつた。尤も金を借りられたり、書物を賣り飛ばされたりするやうな事は、まだよかつたが、彼は一度朝川のために苦しい立場に置かれた時には、少し弱らずにはゐられなかつた。

それはもう二年程前の事である。純一はその頃新しく出來た上谷書店と云ふ書肆から出す飜譯叢書中の一册として、

ゴオリキイの「その三人」の飜譯を――無論佛蘭西譯から――引受けたが、その書肆が拙速主義を尙ぶ、かなり無責任な事を平氣でやる店だつたので、ゴオリキイのアドマイヤラアである純一は、その無理な註文に應ずる事が隨分苦痛であつた。けれども生活上の必要から、止むなく安い稿料で、目をつぶつて先方の註文通り仕上げたが、本が出來て見ると、飜譯者としての態度を辯明した序文を、書肆の勝手から無斷で取り除いてあつたので、純一は我慢が出來なくなつて、强硬な抗議を述べた手紙を書肆に送ると共に、その不快を朝川たちのゐる處で話さずにはゐられなかつた。

すると、それから二三日たつて、純一のところに、その書肆の編輯部員である靑年文士が二人連れで、非常に改つた樣子で言譯に來た。ところが、その言ふところに依れば、あの後で、朝川が純一の賴みを受けたからと云つて、猛烈な罵倒の合の手の入つた手紙を送つて、その書肆の出版上の祕密や弱點を列擧して、かうした事實を某々新聞に書くが、それでもいいかと云ふやうな脅し文句を並べ立てたので、書肆では恐慌を來してゐると云ふのだ。そして彼等の言葉には、いかにも純一が朝川を使嗾して、そんな芝居を打つてゐるものと信じ切つてゐるらしい口吻があつた。

朝川がどうしてさう云ふ事をしたのか、單に自分に對する同情としては、餘りに無思慮で亂暴だし、恐喝が目的だとすると、子供じみてゐて馬鹿げてゐる。要するに、つまらない惡戲としか純一には思はれなかつた。けれども、二人の靑年文士が、

「これから文壇に立たうと云ふやうな方が、かうした自分の人格を傷けるやうな事をお遣りになるやうぢや、少しお考へが足りないかと思はれますがね」などと、馬鹿丁寧な言葉付きで、嘲笑ふやうな言ひ方をするのを聞くと、純一は自分が笑はれてゐるやうで、馬鹿々々しくも思ひながら、自分の立場を辯解しなければならなかつた。それから彼は、朝川がこの頃、病氣を始めいろいろな事情から、絕望的な氣持になつてゐるので、その鬱憤の遣り場が無いところから、遣つた惡戲に過ぎないだらうと言つて、彼の爲めにいろいろと辯護した。二人は兎に角朝川君に直接會つて

見て、圓滿に解決する事にしませうと言つて、その日は歸つて行つたが、その後で純一が朝川を訪ねて、その次第を訊いて見ると、彼はニヤニヤと笑つて、

「いや、何でもないさ。資本家の横暴を懲しめてやるには、あれ位の非常手段を取らなくツちや駄目だよ。實に近來の痛快事サ。二人の奴、入つて來るなり、御身體は此頃如何ですなどと、馬鹿にお世辭を言やがつたよ。たうとうすつかり仲善くなつてね、大いに三人で文壇を談じ、資本家を罵つたよ。あの本屋の主人は馬鹿殿樣だから、少し懲しめて遣つた方がいいと、二人も賛成した位だつたよ。兎に角面白かつたよ」と言つて、彼は少し照れた顏をして、話題をそらしてしまつた。純一は可笑しくもあり、腹立たしくもあつた。下宿屋を踏み倒すのさへ、資本家征伐と號してゐる朝川に取つては、今度の事件なぞは、或ひは階級戰の殊勳であつたかも知れない。然し、それは何と云ふ哀れな殊勳であつたらう。その事件はそれつきり何の結果もなく、有耶無耶のうちにすんでしまつたからである。けれども、朝川としては、人騷がせをしただけで本望であつたかも知れない。かうした程度の惡戲は、彼の最も興味のあるものであつたのである。

かうした生活の間に、朝川は次第に窮迫し、次第に東京にゐるのが氣まづくなつて來た。彼自身もこれは弱つたと思つた。こんな風にしてゐたんでは、いけなくなるばかりだ、どうにかして生活を一變して、眞面目な勉强をせねばならぬと思つた彼は、丁度此頃哈爾賓の新聞社で記者を求めて來てゐたのを幸ひ、彼の父も奉天にゐる事でもあるし、つひに滿洲まで出かけて行つて見ようと決心をしたのである。彼の言葉によれば、三年計畫で行つて、露西亞語の勉强をしたり、養生もしたりして、新生活に入りたいと云ふのであつた。これは彼としては眞面目な自己改革である事は確かであつた。

この前貝塚湖泉の家の懇談會の時に、純一は初めてその話を、朝川の口から聞いたのである。

「いつ頃發つやうに定つたかね？」と純一は朝川に訊いた。
「一日でも早く行き度いんだけれど、愈々となつて見ると、なかなか厄介な事が多くつてね。でも、もう大凡片付いたし、旅費も來たし、あとは送別會をして貰ふばかしさ、君も來てくれるね？」
「アア、行くとも、いつ頃かね？」
「二三日中には通知が行く筈だ」
　朝川は暫く考へ顏をして默つてゐたが、不圖微笑して、純一にやさしく話しかけた。
「君の詩集はどうなつたね、僕が彼方へ行く迄に出來るかしら？」
「アア、あんまり延び延びになつてゐて、僕ももうどうでもいいと云ふ氣になつてゐたんだが、今度たうとう本になる事はなる、君の出發迄には間に合ふまいけれど……」と純一は答へた。
　久しく行き惱みになつてゐた純一の詩集は、此頃漸く細谷の出版部から出版される事になつて、もう近々に校正刷が出るとの事なのであるが、それも今となつては、純一の氣持は、折角出してくれると云ふのを斷るほどでもなからうと云ふのに過ぎなかつた。彼は自分の詩なぞが、文壇に認められようとも思はれなかつたし、また認められるとか認められないとか云ふ事も、問題ではなかつた。ただ、せめて義侠的に出版を引き受けてくれた細谷氏が、損をしない程度に、賣れてくれる事を望むだけであつた。
「おや、江添忠治が來てゐる……」
　室の突當りのところで、二三の批評家を相手に何か話してゐた人が、急に立上つて、何氣なく此方を振り向いた時、朝川は吃驚したやうにかう叫んだ。純一もその方を見た。けれど、それは江添ではなかつた。その顏は實によく似てゐたが、もつと上品な、もつと豐かな、もつと教養のある、聰明な顏であつた。丁度その時、純一と朝川との前を横

ぎつて、その人の方へ近づいて行つた、露西亞文學の飜譯家として聞えてゐる靑年文士が呼びかけた言葉で、純一はその人が最近人道主義の作家として文壇に現れて、非常な人氣を得てゐる事と、その人の受け繼いだ財產の莫大な事とが、さもしい文壇人の噂に上つてゐる新進の某大家である事を知つた。

「こんなによく似てゐて、しかもこんなに違つてゐる、それは好運の影のためだ」と純一は不圖から云ふ事を考へた、「若し、江添が此の人のやうな財產を有つて、此の人のやうな敎養を積む事が出來たとしたらどうだらう？　たとひ此の人程の大成はしなかつたにしろ、果して、あのやうなみじめな末路に遭つたであらうか……」そして純一はよく外國の文學史などで屢々見る「彼はよりよき事情の下にあつたならば、より大いなる詩人となつたであらう」と云ふやうな斷定を思ひ出して、強く頭を振つた。

「要するに、彼の運命が、卽ち彼の天分である！」

愈々デザアトコオスが始まつた。皆が席に就かうとする時、そこに一場の滑稽があつた。某新聞の懸賞小說で文壇に出た中老の小說家が、急にせかせかと人の中をくゞつて、今しもそこの椅子にかけようとした靑年を、輕く向うの方へ突きやるやうに肱を張つて、自分がその椅子へ安心したやうに腰をかけた。その椅子の向ひ側には、かの『中外公論』の主筆で、その人の胸一つで文壇の流行兒ともなり、流行兒でも凋落を來すとさへ言はれてゐる竹田紅桃がかけてゐたのである。

ずつと向うの正面の中央には、紫紺色の洋服に、黑のネクタイの澁い好みがいかにも爽かに、いかにも天才者らしく見える西尾宏が着席した。その右側には、此頃評判の作家達が並んでゐた。またその向ひ側には、下條や山村などの幹事達が着いた。

ざわざわしさが鎭まつて、一しきりフォオクや匙の音がした。やがて幹事が挨拶のために立上つた。皆が輕い拍手で

それを迎へた。立上つた幹事の下條は、妙に舌の短いやうな調子で、いかにも日本語に不自由さうなポツポツとした言ひ方で、西尾君の會のために來てくれた事を一同に感謝して、どうぞ愉快に一夕の歡を盡して下さるやうに、いづれ次々に大家の方々の演説もありますが、皆さんも西尾君に對して、何か感想を述べられたいやうでしたら、後でお立ちを願ひますと言つた。

「ウン……ン、俺がやるぞ」と眞中の列の中頃に頭を高く張つて、チビリチビリ酒を飲んでゐた、グデサンが振り向いて呶鳴つた。

大家たちの演説の劈頭に、巖本閃光が立上つた。

「皆さん、今日は西尾宏君の爲めに、こんなに賑々しく御來場下さいまして、我々西尾宏君の藝術を尊重する者に置きましては、まことに此上の滿足はございません。實に、我々は西尾宏君に、過去の藝術の綜合と、將來の藝術の暗示とを與へられたのであります。我々が同君に多大の感謝の義務を負うてゐる所以であります。疑ひもなく西尾宏君は、生れたる詩人、生れたる藝術家であります。ラテン人の理智とチュウトン人の情熱とを一身に兼ね備へたる稀有の能才（タレント）であります、恐らく、或ひは天才（ジニアス）と呼んでも差支ないでありませう。序に他事ながら一寸斷つて置かなければならないのは、私が西尾君を天才呼ばはりしたやうに申された方もあつたやうですが、果していつ私がさう申しましたらうか、私自身一向その憶えがありません。私はただ、西尾君の天才的な閃きに世の注意を喚んだだけであります。そして西尾君の天才であるかないかは、同君の將來がこれを遺憾なく裁決するでありませう。それからまた、私が屢屢天才と云ふ言葉を惜しげもなしに使用してゐることに就いて一言いたしますと、天才者は凡才者と違つて、他人が天才者であることにたやすく堪へ得るのであります。また、本當の藝術家は、ごまかしものと違つて、所詮みな天才者でなければならないのであります。そして私の見る所では、西尾君は本當の藝術家に外ならぬのであります。本當

の藝術家であるところの西尾君は」と閃光は一段聲を張り上げた、「近頃の仲間賞めや批評家の提灯持ちで、やつとその文壇的生命を繋いでゐるやうな凡庸作家とは違つて、眞に藝術の爲めに殉ずる人です。藝術の爲めにあらゆるものを犧牲に供して、敢て悔いない人であります。實に、西尾宏君は古來の大天才と同じい、若くはそれ以上の嶮しい道を踏んで、初めて今日の盛んなる饗宴にまで到着せられたのであります。これは我々に取つて實に好箇の模範であり且つ好箇の鞭撻ではありますまいか。そしてこれこそは、今日の盛宴に二重の意義を附與するものに外ならぬと私には思はれるのであります。さて、西尾宏君の『驚異の再生』に就いては、私は既にその所感を十分に吐露しましたので、此上一言の加ふべきものもありませんが、ただあの作を批評せられた方のうちには、『驚異の再生』はつくり物である、寄せ集めであると云ふやうな非難をせられた方もありましたから、それに就いて些か申したいと思ひます。私から見れば、いかなる藝術がつくり物でないと斷ぜられませう、藝術は畢竟つくり物に外ならぬのであります、寄せ集めに外ならぬのであります。天才者こそは、その最も巧妙なるつくり手、寄せ集め手に外ならぬのであります」、と言つて、閃光は昂然として一堂を見廻して見得を切つた、「西尾君に置きましても、いかに富贍の才能ありとも、無から有を出す事は出來ぬのであります。卽ち、西尾君は古來のあらゆる大藝術を咀嚼玩味して、これをその驚くべき獨創力の鎔鑛爐の中に溶かして、その中から純金の眞藝術を作り出したのであります」

かう言つた調子で、閃光はその容貌とは妙に不調和な、いやに氣取つた態度で、滔々と西尾宏の藝術の卓越してゐる所以を說き來り說き去つて、最後に、西尾宏が今日のやうな美しい花を咲かせたのにつけても、その根を培つた彼の家庭の美しさを閑却してはならないと言つて、その子の爲めにあらゆる助力を惜まなかつた、宏の父西尾惣兵衞を、ゲエテの父に比較して、惣兵衞に對する頌德の辭を以てその演說を結んだ。

「ナーンだ、馬鹿にしてやがる、いやに辯解ばかりしたり、こぢつけの詭辯を弄したりするかと思ふと、金持の讚美

までする、閃光も近頃どうかしてやしないか」と朝川は憤慨したやうに、純一の耳のところで呟いた。

閃光が着席すると、續いてかの江添忠治に似た大家が立つて、西尾宏君の藝術が、尠くとも在來のものより、一步進んだものである事は、彼の反對者と雖も認めずにはゐられないと云ふ事は事實である。然し自分として言へば、西尾君はいい芽生えを見せてくれた人である。つまり、現在よりも將來の人である。餘り早くえらくされてしまふと、得て人間は自得して、精進努力の念を失ひ勝ちなものであるから、西尾君に於てはさやうな事は無いであらうけれど、此際大いに自重されん事を切望しますと云ふ意味の事を、極くあつさりと述べた。

その次ぎに立つたのは、かの西尾宏の藝術をつくり物だと非難した自然主義の大家であつた。その人は重みのある謹嚴な調子で、

「只今、巖本閃光君は、その縱横自在の辯舌をお振ひになりまして、西尾宏君の藝術に對する非難にお答へになりました。然るに、西尾君の藝術に對して、ああ云つた言葉で非難をした者は此の私でありますから、一言辯解する必要を感じました。私は決して西尾君の藤術を認めない者ではありません。西尾君の才氣、西尾君の文章、それは私などのやうな氣の利かない人間に取つては、全く見るのも眩しい位に華かなものであります。一讀、ダヌンチオとかワイルドとか云ふ才人を聯想した程に、『驚異の再生』は華麗な奔放な作品であります。そしてその中には、巖本閃光君の言はれたやうに、あらゆるものが含まれてゐるかも知れないと、私も思つた程であります。然し、たつた一つ、遺憾ながら缺けてゐるものがあると私は感じたのであります。それさへあれば、西尾君の藝術は完璧と申して差支ないでありませう。恐らく私は一言半句の非難も申す事は出來なかつたでありませう。して、その缺けてゐるものは何であるかと申しますと、それは作者のシンセリテイであります、モラルを破壞した我々に取つて、より高いモラルとなるべきシンセリテイであります。これこそ眞に西尾君の藝術に取つては、畫龍の點睛ではありますまいか」と云ふ風に

藝術家に取つて眞率の大切な事を諄々として說き、最後に西尾宏の自重と加餐とを祈つて着席した。この演說の間、顎をピクピクさせて、何か言ひたいのを、一生懸命に抑へ付けてゐるやうに見えた叢本閃光が、再び立上らうとした時、

「よし、今度は俺の番だ」と言つて、グデサンが立上つた。誰の時よりも夥しい喝采が起つた。

「グデ、しつかり遣れ」と隅の方から誰かが聲をかけた。

「ウ、しつかり遣る」と一種異様なふくれてでもゐるやうな暗い顏をして、彼は言ひ始めた。

「俺は西尾宏の小說の事は知らん、女の方の事だけで俺は西尾を認めてやる。西尾は女に持てる。自分でもどんな女でも直ぐ手に入れて見せると言つてゐるが、そりや法螺だ、さうは行かん」一齊に笑ひ聲が起つた、「だが、まあ今の女たアあんまり緣の無ささうな文壇の連中に比べると、女に持てる方だ、それはこの俺が認めてやる。だが、俺は西尾に一言言つてやりたい事がある、おめえももうすつかりえらくなつたんだから、あんまり變な女を相手にしちやいかんぞ、これは小說なぞよりももつと大切な事だ、分つたか。俺の言ひたいのはそれきりだ」と言つて、グデサンは首を左右に振つて、顎を持ち上げるやうにして見得を切つた。

「では僕が……一言御禮を申し上げるとしようか」と、いくらか上氣した顏をして、西尾宏が立上つた。

「今日はこのやうに、數ならぬ私如き者の爲めに、御多用のところをわざわざお集まり下さいまして、何と申して感謝いたしてよろしいか、その言葉に苦しむのであります。ただ、私としては、將來益々藝術の一路に、精進を怠らないで、皆樣の御厚情の萬分の一に酬いたいと、ただそれだけを心に念ずるのみであります。最初私はこの祝賀會の企てについて、二三の友人諸君からその相談を受けました時、こんな種類の會合は、これ迄例のない事でもあるし、また私自身、藝術家の報償はただひとへにその藝術その物にあると信じてゐますので、切に辭退したのでありますが、

友情の厚すぎるのがその缺點であると言つてもいい位の下條潔君などは、そんな事を言ふものではない、こんな場合には默つて受けるものだ、殊にさうした辭退はわざとらしく、勿體がましいからと忠告さへも始めると云つた譯で、つひに諸君の强つてのお言葉のままにお受けした次第であります」から宏が言ひさした時に、彼の前面に先刻から三つ程の寫眞機の口を、彼の方にさし向けてゐたところで、マグネシュウムの爆聲が起つた。濛々たる白煙が部屋中に一杯になつた。その煙の薄れて行くのを待つてゐる西尾宏の顏には、快適の微笑があつた。

「先き程、巖本閃光先生はその雄辯をお振ひになつて、極度の讃辭を惜しげもなくお浴びせになりまして、その溢美のお言葉、ひとへに恐縮赤面の外はありませんでした。然し、賞讃は宛かも甘美な砂糖や蜜のやうなもので、そればかり食べてゐる子供は、しまひにはおなかを惡くいたします。私も藝術家として、まだ一個の子供に過ぎませんから、さうした蜜のやうな甘言よりも、反つて口ざはりの惡い苦言苦語の方が、どれ位身のためともなり、どれ位有難いか知れません。それ故私はあらゆる甘言を擲つて、敢て苦言を呈して下さいました先輩の方々に、深く感謝いたさずにはゐられません」一種深長な意味を含めたやうな、快哉の拍手が數ヶ所から起つた、「そのお言葉に含まれた眞理は、私に取つては實に恰好の啓示でございます。今日此時、徒らに貧しい過去に執着する事なく、新しく更により嶮しい眞實の一路に就くに當つて、それ等の御敎示を深く肝に銘して置きたいと期するのであります。一言御挨拶を申し述べた次第であります」一同の拍手喝釆がこの最後の言葉を卷き込んだ。

西尾宏が着席すると、皆は再び食べ始めた。宏の左側には四五人の女が並んで食べてゐるのであつたが、宏の隣にまだ大役を控へてゐると云ふ爲めか、一向食べようとしないでゐる小花園子の次ぎには、かの厚化粧をした女が、脣の臙脂の流れてしまふのを虞れてか、極めて愼重に食べてゐた。口の大きな美人は、その向ひ側にゐる立派な恰幅をした、いかにも都下屈指の大出版書肆を背負つてゐるやうな貫目を見せた新星社の支配人に、頻りに愛嬌を振り撒い

て、時々首を傾げては才氣振つた笑ひ方をする。すると、その隣にゐる富枝は、それを忌々しがつてゐるやうな樣子で、隣にゐる橋本久美子に何か言つては時々笑つてゐる。

　やがてデザアトコオスがすんで、一同は元の控室に歸つて來た。人々はてんでに椅子をその好きな場所に寄せて、打寛ろいだ團欒を作つた。

　入口の處で大分前から待つてゐた新星社の社員が、支配人を呼び出すと、やがて二くくりの大きな包が、その社員と給仕とによつて持ち込まれた。

「やつと間に合ひました、然し外ぢやとてもこんなに早くは出來ませんよ。それに素晴らしい本になりましたよ。この羽二重は特別に京都へやつて染めさせたんですからね、晝間見ると目が覺めるやうですよ」と包を開けて、上の一册を手に取つた新星社の支配人は、下條や北村にそれを見せて、我が兒を自慢するやうに喜んでゐる。著者の西尾宏は、

「少ししつこ過ぎたかしら……」などと、金箔の模樣を言ひながらも、かなり滿足らしく、パラピンを取つて見たり、頁をめくつて見たりしたが、

「さ、一つ配つて貰はうか」と下條を促した。

「皆さん、西尾宏君の詩集『樂園の曲』が出來て參りました。今夕わざわざ御出席下さいましたその記念までに、西尾君が特に差上げたいと言ひますから、どうぞ御愛讀下さい」と下條潔は高く皆の注意を喚んで、數人の幹事と手分けをして、來會者一同にその本を配り始めた。下條は純一と朝川との處に來た時、

「なかなかいい本になりましたよ、西尾君はなかなか凝り屋ですからね」と純一に言つた。

「綺麗な本だなア！」と、朝川はナイーヴに感嘆した。

『驚異の再生』も、随分美しい本であつたが、この詩集は更にそれ以上であつた。新星社の支配人の自慢も尤もである。藤紫色の羽二重表紙に、唐草模様の金をちりばめて、眞紅の見返しと大膽な對照を取つた眩しいやうな裝幀で、巻首に刷り込まれた宏の肖像は、バイロンやシェレイのやうなロマンティック時代の美しい詩人のそれを思はせた。

「何しろ藝術は贅澤なりを眞向から主張する西尾君の本だからナ、いかにも一分の隙もない西尾君らしい本だ。實際西尾君は利巧者だね、利巧さで藝術を作つてゐると言つてもいいんだ。君、先刻のあの答辭はどうだい？」と言つて朝川は皮肉に笑つたが、やがて、

「僕は今夜はこれから赤畑君のところへ廻らなくちやならんからこれで失敬しよう、君はまだゐるかね？」と言つて、貰つた本を懐へ入れた。純一は朝川と一緒に歸らうかと思つたが、どうしたものか、彼はその片隅が動けなかつた。彼は朝川の寂しさうな後姿を見送りながら、苦い杯の滓まで飲んで見ると云つたやうな反抗的な心持が、閃光を始め愚劣な文士たちの輕薄な道化芝居を、もつと見てやらうと云つたやうな皮肉な興味が、自分を引き止めたのだと彼は思つた。

「これから小花園子さんの獨唱があります、これは西尾宏君の詩に山村俊作君が作曲を附されたものであります、次ぎに唱はれるシュウベルトの『魔王』とともに、どうぞ御清聽を願ひます」と下條潔が紹介した。喝采が起つた。

小花園子はピアノの傍に出て行つて、皆の方に向つて、靜かに一禮した。それから彼女は自分の息を測るやうに、靜かな數秒間をぢつと保つた。そのうちに、ピアノが山村俊作によつて彈き始められた。

春のさみしき夕ぐれに
さまよひくれば花うばら

……………………

かうした宏の詩句を、彼女は美しい肉聲で、高い調子で歌ひ始めた。彼女が聲を顫音にして長く曳いて行く時には、身體全體が波打つて、絶えず戰く胸のところが美しく盛り上つて、それが異樣な魅力を聽衆に與へた。

……………

秋のさみしき夕ぐれに
さまよひくれば夕づつの

……………

彼女は消えて行つた音を、またもう一度高い調子に還して來て、ピアノの音と入亂れたソプラノの中に、戀する少女の感情の高調を見せた。

次いでシュウベルトがすむと、夥しい喝采の後を引いて、雜談になつて、方々で高い議論や饒舌が盛んになつた。初めのやうに一人ぼつちになつた純一は、默つてそれ等の光景を眺めてゐた。彼はもう十分だと云ふ氣がした。彼の張りつめた冷やかな心持も今は重い疲勞となつて彼を壓した。凡てこれ等の眩惑されるやうないろんな事を、見たり聞いたりしてゐるうちに、周圍が明るく幸福であればある程、暗く沈んで行く自分の心持をどうする事も出來ないで、彼はつひに窓に凭れて、木立が微かに夜風に鳴つてゐる暗い庭の方を眺め遣つた。

「龍出さん、どうしたんです、氣分でも惡いんですか？」かう言つて、もう自分なんか忘れてゐるだらうと純一の思つてゐた富枝が、思ひがけなく馴々しげに聲をかけた。

「アア、藤岡さんですか、暫くでした」と純一は彼女に挨拶した。間近に見ると、富枝ももうさすがに昔のやうではなかつた。目のあたりや口元のあたりに、妙に暗いものが漂つてゐて、皮膚も荒れてゐたし、目付も濁つてゐた。そ

のうらぶれたやうなのをぢつと見てゐると、彼は相良元雄の事を考へて見ずにはゐられなかつた。
「でも、何だか苦しさうだわ、もう歸つちやつたつていいんでせう。デザアトコオスさへすめば、私達のゐる必要もないんだわ。暗中飛躍する連中こそこれからだらうけれど、私達はもう歸つちまはうぢやありませんか」と富枝はどうしても、純一を連れ出さずにはおかないやうな調子で言つた。純一ももう歸らうと思つてゐたのだし、久し振りに富枝と何か話しても見たかつたので、彼女の言葉に同意して、誰にも格別の挨拶もしないで、入口の方に出て行くと、そこで立話をしてゐた西尾宏が、目敏く二人を見て、
「もう歸るんですか、何處かに待つてゐる人でもあると云ふ寸法ですか」と富枝に言つた。
「そんな人があるなら、私もこんなに苦勞はしないわ、待つてるものは電燈ばツかりだわ」と、富枝は撥ねッ返すやうに言つた。
「君はまあいいぢやないか、富枝さんのお伴になつて歸るのか、相變らず女には親切だナ……ア、さうさう、君に取立てて言ふ程の事でもないが、僕の兄貴が今度田舍で新聞社を買收したので、そんな事に就いて近々のうちに、ワイフ携帶で出て來ると云ふ知らせがあるんだ。その時には君もやつて來ないか、また詩が出來るぜ」と彼は言つて、そこにゐた若手の批評家が釣り込まれて笑つたほど、愉快さうに笑つた。
純一は富枝と一緒に外へ出てから、今宏の言つた事が、急に落ちて來た石のやうに、胸の上に重たくのしかかつて、妙にわくわくと胸騷ぎがしだした。何だかそれが自分の丁度今迄あそこで待ち受けてゐた何物かであつたやうに感じられて、純一は不思議な後めたい氣がするとともに、それが一層彼の心を陰鬱にした。
「どうしたんです、龍田さん、相變らずあなたは沈默家ね、何か話しませうよ、元雄の事でも何か知つてる事があつたら聞かせて下さい」

「僕もあんまり知りません、ただ友達からの手紙によると、少し身體が惡いやうだが、それでも熱心に繪をかいてゐるとの事です」

「それは私も知つてゐますよ、今では私のやうな女がゐないから、いい繪が屹度書けるわ。私もあの人の爲めには隨分苦勞しましたわ、私はこんな風に、見かけはいかにもチヤラッポコに世の中を渡つてゐるやうに見せてはゐますけれど、實際はさうでないのよ。あなたなんか、そんな事で隨分私を誤解してゐるわ。元雄の事だつて、ただの浮氣ぢやあんなに出來るもんですか。でも、私の心盡しも、今になつて見れば、水の泡のやうなもんですわ。あの人の兄さんが病氣だから歸れッて言つて來て、私も一緒にお國に行つて見たんですけれど、あの人の家庭ッてば、それは羨ましい程兄弟仲もいいし、親子の仲もいいんですけれども、ただ何しろ貧乏でね、貧乏も貧乏、あれぢやまるで赤貧だわ。とても私のやうな者が飛び込んで行けるところぢやないつて事が分つたから、直き東京へ歸つて來ました。元雄も直ぐ上京すると云ふ筈だつたんですけれど、兄も死んだし、皆が困つてゐるするので、小學校の敎師なんかになつてるさうです。何だか氣の弱い人で、私も思ひ出すと、いつもどうにかしたいと思ふんですけれど、どうする事も出來ないんです。つくづく儘ならぬ世の中だと思ふわ」と富枝は終りの方は涙まじりに言つた。

富枝は何處かレストオランへ入つて、ゆつくり話さないかと頻りに誘つたけれど、純一は富枝のやうな來歷を有つた女とたつた二人で、さう云ふレストランなどに入ると云ふ事が、自分で氣が咎めるやうだつたので、それを辭ると、

「あなたは相變らず氣むづかしいのね、ぢや、そこらをぶらぶらしませう」と本意なげに、富枝は言つた。二人は廣い通りを横切つて、公園の樹木の間を、アアク燈の青白い光を浴びながら、鶯谷の方に歩いて行つた。その途次、富枝はもう元雄の事には觸れないで、西尾宏の事ばかり言つた。

「兎に角、西尾さんはえらいと思ふわ、少し薄情なやうだけれど、まあ大抵の女なら好くわ。菊子とか云ふ女と一緒

になつて直ぐ別れたんですッてね、ああ云ふ人は連れ添つて見る人ぢやないかも知れないね。橋本久美子が大變持ちかけて見たいらしいけれど、あんな勝手な女では三日と續かないから、世話しない方がいい。それよりかあなたに、誰か優しい人を世話して上げたいものだわ」と彼女は純一をからかつた。昔彼女がよく言つた通りの言葉で。

こんなに彼女は、自分自身の悩みなんか問題にしないやうな風で、他人の情事に興味をもつて、それで自分の寂しさを慰めてゐるやうに見えた。

純一はさうした富枝の果てのないやうな饒舌を、半ばうはの空で聞いてゐたが、彼女と別れる時分には、頭が重くなつて、自分で自分を支へかねるやうな、苦しい氣持であつた。彼は何から何まで苦々しかつた。會そのものの氣分、若い文學靑年の卑屈な態度、巖本閃光のいかにも輕薄な、人を喰つたやうな演說、宛かも藝者見たやうな役目を勤めて得意でゐる女達、お義理一片で顏を出したと云ふやうな文士達、どうしてあんなにも泥沼のやうに混濁し、沈澱し、發臭して、しかもその臭氣の中に、平氣で安息してゐられるのだらう。彼は文學者の厭やなところを、一纒めにして見せ付けられたやうな、嘔き出したいやうな嫌惡を感じた。今にも大きな革命の暴風が吹き起つて、あんな浮薄な連中を木ッ葉微塵に吹き飛ばしてくれたら、どんなに痛快だらうとさへ考へられた。

「ぢや、さやうなら。送つて來て貰つたやうだわね、すまなかつたわ。何だかあなたに話したい事があるやうな氣がしてならなかつたのに、何も別に話す事もなかつたわね。また此方へいらしつたら寄つて頂戴、私の家は御存知ですか？」から言つて彼女は自分の名刺を純一の手に殘して置いて、暗い坂を踏切の方へ下りて行つた。純一は何だか非常に疲れたやうな氣がして、眼が濕ふやうな氣持がした。或ひはそれは、富枝のさうした洒落の中に包んでゐる、不如意な人生の哀れさに、感じたのであつたかも知れない。

明るい廣小路の方へ、山下の木柵に添うた薄暗い道を歩きながら、純一はもう一度、相良元雄の事を思ひ返した。

「この同じ夜に、故鄕では彼が病みつつ生きてゐるのだ。あんなにも憧れてゐた東京での生活に敗れて、空しく歸つて行つた彼が、寢られない夜を、昔の夢を思ひ返しながら、どんなに輾轉反側してゐる事であらう。思へば、元雄の生涯も失敗の生涯であつた。しかもあんな無殘な失敗はない。彼は謂はばその第一步に於て躓いたのだ、そしてその生涯の門出に於て蹉跌した者は、永久に傷つけられてしまふ。だが、その蹉跌もつひに何であらう。否々、それこそ眞の生活の第一步なのだ。彼は今こそ本當に生きてゐるのだ。不治の病を抱いて、一家の重い責任を雙肩に擔つて、生活と苦鬪しながらも、彼は今こそ本當の藝術をも知り、本當の人生をも見てゐるのだ。ここに至つては、最早失敗は失敗でない。敗れ傷ついてこそ、人は始めて本當の生き方をも知り、本當の藝術をも解する事が出來るのだ！」さう考へると、純一はただ元雄だけが、自分の知己だと思はずにはゐられなかつた。

東京へ相前後して四人出て來た。最初は四人とも、その希望も、抱負も、相遜らないものがあつた。ところが、一年にもならないうちに、都會を唾棄して信太郎は歸つて行つた。彼は既に結婚して、もう二人の子供さへもある。純一は信太郎が結婚當時によこした手紙を思出した、それには「僕は結婚した、殆んど不用意に、一切他人の意志のままに結婚した」とあつた。彼は今では、もうすつかり平凡な一田舍教師になつてしまつたらしい。此前の手紙では、頻りに靜座法に凝つてゐる事を告げて、君にも切に勸めると書いてあつた。今にして思へば、少年時代にはあんなにも有爲な才能と考へられた信太郎は、こんなにも小さく纒まつた人物だつたのである。何處と言つて非難すべき點もない代り、彼は餘りに安易である。信太郎に比べると、西尾宏は非難すべき點も多い代り、人間として遙かに大きいし、また重大な意義をも有つてゐる。彼は巖本閃光の言葉によれば、天才者ではないが、天才的で、しかも天才者以上の人間らしい。然し、天才であるなしは別として、兎に角、彼が世間へ出て成功する人間である事だけは確かである。今の所謂藝術家とは、結局彼のやうなものであるかも知れない。要するに、西尾宏は通貨を有つてゐるのだ。然るに

この自分はどうだ、自分の有つてゐるものは何であるか？　それは不換紙幣に過ぎないのだ、古錢に過ぎないのだ。つまり、此世では西尾宏が自分よりえらいと云ふ事になる。自分が宏よりも、もつと偉大な事業のために生れてゐると考へたのは、少年の夢想に過ぎなかつた。この世界で自分が企てようと志した事は、悉く空しい夢想に過ぎなかつた。社會改革、それは遂ひに信ぜられない事でもあり、また自分の任とすべき事業でもなかつた。何と云ふ哀れな男であらう、自分は！　少くとも宏は此の世のために生れてゐる、此の世に適するやうに出來てゐる。然るに、この自分はさうではなかつた。自分は此の世のための人間、此の世に適應する人間ではなかつた。そして若し、此の世のためでないとすれば、それは果して何の爲めであらう？

少年時代には、祖父や父が、あんなにも手痛い失敗の生涯を送つたのは、その性格の弱さ、善良さの必然の結果だと信じて、自分こそは強くならなければならないと叫んだけれど、最早彼にはその意氣も、その思慮もなかつた。それはもつと深い根ざしを有つた、運命的なもののやうに今では思はれたのだ。要するに、彼等は此の世に適應する器ではなかつたのだ。そして彼等の血から血に流れるものは、等しく此の世では、敗殘に終るべく運命づけられてゐるのだ。血は運命だと彼は考へた。自分の唯一の救ひであり、信仰であつた藝術は、生に執する限り、自分の救ひではない、本當の藝術家は此の世では滅びなければならないのだ、滅ぶ事によつて彼は生きるのだ。生ある限り、救ひは何處にもないのだと、彼は考へた。

「藝術！　そんな言葉を聞くさへ嘔吐が出る！」

「ああ、こんな時、自分に神があつたならば！」

「自分は現世のための人間ではない、しかも神を信じなければ、自分は結局どうしたらいいのだ！」

彼は呻吟し、懊惱した。この自分に、何の救ひがあり、何の慰めがあるか？　望はすつかり破れてしまつた。光は

またと返つて來ない。

潔く生を一擲しよう！　この決意が再び彼の頭に湧き返つた。自分に取つては、その欲するが儘に生きるか、然らずんば全く生きないかだ。一切か、皆無かだ！

氣が付いて見ると、純一はいつの間にか、また上野の方にふらふらと舞ひ戻つて、公園下の薄暗い、停車場附近特有の一種石油の臭を含んだ臭氣の漂つてゐる木柵のところに立止つてゐた。左手には數丁に亙つた構內のところどころに、小さな火がついて、遠くの方には數臺もの列車が、來て止つてゐるのか、出るために置かれてあるのか、幾列も並んで、それ等の上に濛々として煤を含んだ黃色い夜空が低く垂れてゐる。

その時、日暮里の方から、けたたましい地響を立てて、汽車が走つて來た。長い、長い貨車である。地響が刻々迫つて來る。

「いつそ今、ここで、この線路の上に身を橫たへようか、『二重の反逆』の主人公のやうに……」

半ば失心したやうな純一の心の中を、一つの悲壯な、武者顫ひに似た顫慄が走つた。そのうちに、貨車は彼の目の前を、重々しく軌りながら、行き過ぎてしまつた。それと殆んど同時に、彼の頭には、その事を宏の口から聞いた時から、心の底に波打つてゐる一つの訪れがはつきりと浮んで來た。

「西尾友一郎が新聞社經營の準備のために、ワイフ同伴で上京する」この思ひがけない訪れを、宏がやや狡猾な表情を見せて、惡戯らしく、

「その時はやつて來給へ」と言つた事が徐ろに浮んで來た。彼は急いで木柵のところを離れた。

上京して七八年にもなる。この間、彼が敏子に對する愛慕の感情は、丁度潮の滿干のやうなさしひきはあつたけれども、なほ脈々として續いてゐた。

多子とのこみ入つた事件の時にも、彼は敏子の事を忘れたのではなかつた。彼に取つては、敏子は最も親しい、なつかしい女性であつた。或時は戀人の如く、或時は彼女は母の如く、姉の如く、賢い女友達のやうに思はれるのであつた。つまり、彼女は彼に取つての守護神、宛かもパラス・アテエネとも云ふべきであつた。彼は彼女に相隔ててゐる事によつて、彼女を理想化して考へ、宛かも久遠の女性のやうな幻像を築き上げたのである。そして彼自身その事を、だんだん意識して來たけれども、とりわけこの三四年の、何事に對しても疑ひ、何事をも吟味せずにはゐられないやうになつてからは、自分のさうしたロマンティックな、甘美な自己惑溺を、愚かしく思ふやうになり、敏子とても矢張り普通の女性である、いかに愛なくして結婚したとは云へ、長い同棲のうちには、良人に愛情をも感ずるやうになつたに違ひない、人妻の苦しみと共に、人妻の喜びをも味ふやうになつたに違ひない、そして自分の事などは遠い過去の幻として、その心から消え薄れたに違ひない、さうした地上の女性に對するこの神化、この眷愛、この思慕は、彼には嗤ふべき素朴なロマンティシズムとして、拭ひ消したいものとなつたけれども、しかもなほ、彼の心の底には、さうした皮肉な考へ方に、極力反抗しようとするものがあつた。彼の根深い感情は、さうした美しい幻想を掻き亂してしまふに堪へなかつたのである。

けれども……彼女は今どんなになつてゐるであらう? 彼女は矢張り昔の美しさとやさしさとを失はないでゐるであらうか?

彼は敏子が上京して來ても、逢はぬ方がいいのだと、かう一應は思つて見るが、その後から逢つて見たいと思ふ氣持が、押返して來るのを禁め得なかつた。彼はそれが恐ろしかつた。

彼の心がとりとめもなく、險しくなつて、一歩一歩遲々として、明るい廣小路一帶の遠い火光を見てゐた時に、その火光を背負つて黑く浮き出してゐる、一人の男の影が近づいて來た。その男は流行唄を口吟んでゐた。通りすがり

に、純一の鼻先きに安酒のにほひを、エブエブと吐くやうにして、千鳥足をして歩いて行つた。

四

西尾宏の會があつて二三日して、純一はゆくりなく舟井國之助の訪問を受けた。

舟井國之助とは冬子の事件以來、純一は殆んど何の交渉も有たなかつた。彼が西尾宏の家で當分同居してゐた間は、純一の方から西尾宏の家へ殆んど行かなかつたし、宏が菊子夫人と別れて、蜂窩式家屋(アパアトメント・ハウス)に來てからは、時々純一は宏の家へ行つたけれども、その時分には、宏は舟井國之助とはもう殆んど交際(つきあ)つてゐないらしく、その噂さへしない位であつた。その後一年ばかりして、純一は偶然彼と電車の中で出逢つた。その時舟井は純一の今の住所を訊いて、そのうちに訪ねて行くと言つたが、其後間もなく純一は、不便な郊外の方へ引越して行つたので、舟井と逢ふやうな機會はなくなつた。ただ時たま、同じもぐりの雜誌記者仲間を泳ぎ廻つてゐる深澤などの口から、彼の其後の消息を聞くことがあつた。それもあんまり景氣のいゝ消息ではなく、反つて彼の失敗の方面で、株に手を出してすつた事だの、雄辯世界社で何か不都合な事があつて、そこを出てしまつたとか云ふやうな事であつた。

「此の間、舟井君が神樂坂に冬子が力彌つて云つて出てゐるから、時々呼んでやつてくれつて言つたが、どうだね、君呼んでやらないか」と深澤が純一に言つた事がある。

こんな風にこの二三年、舟井國之助なる人物は、純一に取つて既に過去に屬してゐた。冬子の事を思ひ出す時にのみ、純一は彼を思ひ出した。親切なやうで薄氣味惡く、厭やなやうで妙に人を惹き付ける彼の性格は、純一に取つて珍らしい發見だつたと、よく考へる事があつた。

「舟井さんて仰しやる方がおいでになりましたが……」と宿の女中が、純一の部屋の障子を開けて、何だか怪訝(けげん)さう

に言つた時、純一は、

「舟井……舟井ですか？」とその女中に問ひ訊した程、彼は心を動かされたのである。

やがて入つて來た舟井は、手に黒の毛繻子の小風呂敷を持つて、部屋にすわると、じろじろあたりを見廻した。大抵の人はもうセルか單衣を着てゐる時分なのに、彼は大分汚れの目立つた黒つぽい袷を着て、羊羮色のメリンスの帶をしめて、その袖口のところなどがよれよれになつてゐた。その樣子だけでも、宿の女中が彼を宿なしだとでも思つた事は首肯かれる。この男は昔からかなりいい着物を身に纒つても、何處か薄汚なく見えると云ふ質なのに、今では着物がこんな樣子なので、昨夜なぞはどんな處で寢て來たのだらうと思はれる程であつた。

「隨分久し振りだつたね、變りはなかつたか？」と舟井は病後かと思はれるやうな、精のない聲で純一に訊いた。

「訪ねよう訪ねようと思つてたんだが、あれから君が郊外の方へ行つたと云ふ事を聞いたし、僕も近年不景氣續きで、おまけに病氣までしたもんだから、すつかり疎遠してしまつた。君はうまく行つてるか？　新聞で見ると、二三日前西尾宏の會が盛大にあつたさうだね、君は行つたらうね！」と舟井は言つて、純一の眼顏を、彼の宏に對する感情を探るやうに窺つた。

「アア、行くことは行つた」

「どんな樣子だつたね？　宏は得意だつたらうね、新聞で見ると、宏も此頃はすつかりえらくなつたやうぢやないか、實際あんなにえらいのかね？　屹度、拔目のない男だから、金でも廻してあんなところ迄こぎ着けたんぢやないか。今の文壇の大家の推奬なんてものはいい加減なもんだらう、金次第でどんな折紙でも附けようッて云ふんだらう。中でも巖本閃光なんて奴は、とりわけ臭いッて云ふ評判だぜ」と言つて、舟井はニヤリとした。

「いや、そんな事はない。勿論情實はあるにしたところで、そんな露骨な、金次第と云ふやうなものぢやない。僕は

西尾宏の作品をそれ程すぐれたものとも、獨創的なものとも思はないけれど、現在の文壇の職業的な作品よりは、ずつと意味のあるものだと思ふから、兎に角あれだけの評判になつても、全然不當だとは言へない」
「さうかね……だが、僕には文壇の事情なんかよく分らんけれど、あんな品性の下劣な男が、新聞に堂々と西尾宏でございと、あの尖つた顔を見せびらかしてゐるのを見ると、つくづく世の中ツてものは妙なもんだと思ふね」と舟井はいつか話に興が乘つて來たと見えて、聲がはつきりして來て、話し振りに昔の舟井の元氣を蘇らせた。
「君なんぞ眞先きに彼を攻撃するのかと僕は思つてゐた、どういふ譯で西尾をそんな風に怨せるんだい？　一つ聽き度いね」
「そりや個人として、西尾は惡いところを、澤山有つてゐる。然し、それだからとて、彼の有つてゐる藝術的天分まで否定する事は出來ない。それに彼のあの性格とても、立派な天分さ。僕なんかその爲めばかりでも、西尾宏をえらい男だと思ふよ」と言つて、純一は反語的に微笑した、「今の文壇では――一體世の中と言ふものがさうなんだらうが――彼のやうな強さと利巧さとが無くては、その存在を許されないのだからね。その點から言へば、彼は實際天才と言つてもいい。彼は優勝者だよ、現世の適者だよ。……だが、僕より、君こそどうしてさう西尾を惡く言ふんだね？　君は僕なんかと違つて、ずつと西尾に接近もしてゐたし、西尾の家にかなり長い間、同居してゐたさうだから、僕なんかよりずつと西尾に親しい筈だが……」
「それは君の言ふ通り、君より僕の方が彼に接近してゐた。だから、彼の正體を僕が一番よく知つてゐるんだ。あの男には愛情もなければ友情もない、情愛なんてものは爪の垢ほども有つちやゐないんだ。僕も元からそんな男だとは思つてゐたが、まさかあれ程だとは思はなかつた。君が大變同情した冬子に對してもひどかつたが、菊子に對してはもつと殘酷だつたんだ」

彼はかう言つて、西尾宏が、菊子の母親が腸窒扶斯に罹つて、菊子がその附添になつて病院へ入つてゐる間に、別れ話を持出して、飄然と引越してしまつた時の離れ業を、さもさも大變な惡事でもあるかのやうに話しまくつた。

「それから俺が彼の引越し先を突き留めて行くと、留守だと言ふんだ。二三度訪ねて行つたがどうしても會はないんだ。この舟井をすつかり見くびつた遣り方なんだ。どうせ奴の事だから、屹度俺が菊子の方から頼まれて來たんだと思つて、それを逃げたのさ。あの男、あんな風に財産家の次男風吹かせるが、隨分吝嗇な男なんだぜ。外の事は兎に角として、冬子の母親に遣つた金をいくらだと思ふ。たつた五十圓サ。菊子との手切金は、出す譯が無いと言ふんだ、つまり、買つて遣つた着物だの、簞笥だの、其他の家具だけでも、それだけの事は十分してやつてある、それに母親の藥代だつて莫大なものだと、不平の逆捩ぢさ、それが奴の手なんだが、驚いたものさ。が、まあそれはいい、然し、此の俺に對しての遣り方ッてものはどうだ……」と、舟井は水がブップツ湧くやうに、昔の忿懣を持出して來た。

「此の俺も時には飛んだ失敗を遣る事があつてね、實は飛んだ失錯を遣らかしたんだ」と、彼は笑つたが、寂しい笑ひだつた。

「なに、大した事ぢやないんだがね、俺が雄辯世界社で、方々を駈けずり廻つてゐた時分の事なのさ、或る演說會で、モルモン宗の宣教師と知合ひになつたと思ひ給へ、この亞米利加人は今考へて見ても厭やな奴だが、其奴が俺に旨い話を持ちかけて來たんだ、日本語もてんでなつちやないし、說敎と來ちや愚劣でお話にならん癖に、ひどく高慢な奴で、俺の說敎をうまく日本文に修正して、每號『雄辯世界』に載せるようにしてくれろ、その報酬として一回百五十圓は出すと言ふんだ。俺が『雄辯世界』を一人で背負つてゐるやうな事を言つたもんだから、すつかり信用したんだね。俺も普通の原稿のやうな顏をして、社へ持つて行けば、原稿料は原稿料で貰へるし、一擧兩得と言ふものさ、こんな旨い話はないと思つて、二つ返事で承知して、契約狀に署名なんかして、一回分の金を貰つた迄はよかつたが、

折角俺が苦心して意味の通るやうに修正して、原稿を持つて行つたところが、雄辯世界では載せやがらないんだ。社長の因業爺め、何と言つても、こんな下らん原稿は載せられないと言ふんだ。そこで仕方がないから、これこれつて云ふ内情を打ちまけて、金は山分けにしようと云ふ相談を持ちかけて見たんだ。ところが社長の奴め、ずるい事にかけちや此上なしの狸爺だ、拔目はないやね、俺には知らさずに、こつそり宣教師に直接交渉を開始しやがつたもんだから、すつかり俺の儲けはフイになつて、毛唐め、金を返せ、返せと火の付くやうな催促をしやがつて、返さなきや訴へると言ふんだ。俺もこれには弱つたね。その時サ、俺が西尾宏に、これ迄あんなにいろいろ世話もしてやつてあるんだから、それ位の事はしてくれたつてよからうと思つたから、窮狀を打ち明けて、一時その金の融通をしてくれないかと頭を下げて頼んだのだ。ところが宏の奴、どう言つたと思ふ、俺はそんな金出すのは厭だ、そりや一緒に遊んだりする金ならいくらでも出すが、人の尻拭ひは無意味だから先づお斷りとせうと、木で鼻を括つたやうな挨拶なのさ。何と言つてもウンと言はない。言はないばかりか、反對に俺の遣り方を不德義だ、愚劣だと攻擊し始めるぢやないか。西尾宏が德義問題を口にするから笑はせるよ。俺も隨分いろんな人間を知つてるが、あんな冷酷無情な男は初めてだ。さすがに强慾無道で聞えてゐる西尾惣兵衞の息子だよ。だから、あんな男を天才だとか何だとか言つて崇め奉つてゐる世間の奴等は馬鹿だと俺は言ふんだ、君はさう思はないか?」

　かう言つて、舟井は女中の持つて來た番茶を啜つた。話してゐた間は元氣がよかつたが、そのお茶を啜つてゐる橫顏には、疲れと衰へが見えた。舟井のやうな拔目のない、世渡りの上手な男でも、こんなに衰へるものかと純一は思つた。

「ところで、金儲けの名案は大分あるんだ。そいつが一つでも旨く當ると、俺も景氣を持ち直すんだがナ。君も知つてるだらう、あの新しい女で賣り出した江東奈枝子サ、あの女大分向う息が强いので、大向うに受けてゐるやうだか

ら、あの女を眞打にして、二三人の問題の女、例へばお目見え女中やヽヽやとな探訪などで凄い腕を揮つた大平富子だの、美人記者で賣り出した上山鏡子だのを狩り集めて、新しい女大演說會を、物見高い大阪京都神戸と打つて廻るんだ。上方人は金があるし、女と來れば目がないから、エイトエイトと押しかけて來て、ちつと位入場料が高くたつて、大入滿員立錐の餘地なしの盛況を呈する事疑ひなしと、此の俺は思ふんだ。儲かるぜ、で、これには第一に奈枝子の亭主を動かさなくちやならんのだ、將を射るには先づ馬を射よだからナ。君はあの男知つてるだらう、知つてるなら俺を紹介してくれないか、紹介さへしてくれればいいんだ、後は萬事この俺の方寸の中にあるんだ、君に迷惑はかけない。君は西尾とは違つて友情の厚い男だから、一つ俺を奈枝子の家へ連れて行つてくれんか……」

純一は舟井の型通りの哀訴が始まつたので、心の中で苦笑した。彼はその舟井の計畫が成功するものとは思へないばかりでなく、眞面目に合槌打つのさへ馬鹿々々しいやうな氣がした。けれども、その持前の氣の弱さから、相手の落目になつてゐるのを見ては、さう無下にも斷る事が出來なかつた。奈枝子の良人の隅田順は大菅左門の家や、時々の社會主義傾向の人々の會などで、純一も一通り知合ひであつた。以前純一がゴオリキイの飜譯をしてゐた時分、上谷書店の應接室で、四十恰好の見窄らしい身裝の男が、年の若い主人に何か頻りに飜譯上の苦心談をしてゐるのを見て、誰だらうと思つたが、それが隅田であつた。其後、大菅の家で逢つた時、純一は彼が初めの時より大變若く、十位も違つて見えるのに驚いた。彼は一寸年頃の分らないやうな處があつた、然し、純一より五つ六つ上である事だけは確かだつた。彼は誰とでも直ぐ親しくなる男で、純一もその逢つた度數に比しては、隅田と親しかつた。そして、彼に多くの珍らしい文學者の名を敎へられた事を感謝してゐた。實際、隅田は妙な性癖から、一般にオーソドックスとなつてゐる、例へばトルストイとか、ドストエフスキイとかの作品などは讀まないで、餘り一般の人の知らないやうな「通な」ものばかりを讀んでゐる男で、現に純一の愛讀書となつたレオパルディイやセナンクウルを彼に奬めたのも

隅田であつたのだ。世間からは、奈枝子の人氣の作つた偏見から、いかにもやくざな亭主のやうに思はれてゐる男だが、純一は彼の學殖と、徹底した一種の人生觀と、特にその風變りな面白い性格との爲めに、彼を意味のある人間として見てゐた。

「すまんね、君だけだよ、俺を見棄てないのは。えらくなるやうな奴はみんな薄情だ」と舟井は立上りながら呟いたが、ふと純一の顏を見ると、「君はえらくもあるし、親切だ」とごまかした。

「アア、さうだつた、君はあれ以後ちつとも冬子の消息は知らんだらうね」と、純一の意を迎へるやうに、突然舟井は言つた。

「深くは知らないが、請負師の細君になつて、子供も出來て仕合せに遣つてゐると、いつか深澤が言つてゐた」と純一は言つた。

「さうだ、まづ仕合せだ。俺はその請負師をよく知つてゐるがね、實は時々金を借りに行く事があるんだ。なかなか腹の大きい、氣のいい男でね、ずんぐり肥つて、太い木の株見たいな不恰好な男だけれど、まあ立派な男の中さ。何なら今度君を連れて行かう、相當話も分るから、君が厭やな思ひをするやうな事はないよ。冬子も黒繻子の襟ッてつい、くりで、姐御らしく遣つてゐるよ。君の噂はよくする、一つ行つて舊情を温めてはどうかね」と舟井は例のニヤリとした顏をした。

「僕は彼女が仕合せでありさへすればいいんだ」と言つて、純一は舟井より先きに部屋を出た。

隅田順の家は、小石川植物園の右側の通りの、少し引込んだところにあつた。日當りの惡い平家で、玄關の横に奈枝子の經營してゐる雜誌『ブリュウ・ストッキング』の標札が牛乳受箱と並んでかかつてゐた。二人が案内を乞ふと、玄關の横の開き戸をあけて、男の兒を抱いた色の淺黒い、目の丸い、濃い眉をした、丸顏の女が顏を出した。それが江

東奈枝子であつた。

「どなた？」と奈枝子はにこにこして訊いた。彼女の直ぐ後から、隅田順が蒼白い、頰のところに縱に皺のある滑かな顏を出して、

「ヤ、君ですか、上り給へ。龍田君だ、まだおまへは知らなかつたかね、大菅君の家へよく行く方だ」から奈枝子に言つて、純一には、

「お連れですか、さあ一緒に上つてくれ給へ、僕の家は汚ないですよ」と言つた。

隅田が言ふやうに、家の中は取り散らかされてゐた。玄關の片隅に幾列にも堆く積まれてゐる『ブリュウ・ストッキング』の返品だの、讀み散らした儘になつてゐる新聞だの、疊の上にころがつてゐる原稿の束だのが、六疊の方の壁にかかつてゐる三味線だの尺八だのと面白い對照を見せてゐた。

子供の着物なぞを乾してある緣側には、金網の眞四角な籠の中に、蟲のやうなものが動いてゐた。それは河鹿であつた。

「朝川君が滿洲へ行くさうですね、いつです？」と隅田が訊いた。

「エ、此間西尾君の會の時、ここ四五日のうちに發つやうに言つてゐました」

「さうさう、西尾君の會は大變なものだつたらしいですね。僕は貧乏だから出られなかつたが、詩集だけは貰ひましたよ。西尾式な凝つたものですね、まづゴオティエと言つたところだらうナ」と隅田は言つた。彼も西尾宏の才能に驚嘆してゐる一人であつた。

「だが、巖本閃光の例の推讚の辭はどうです、あそこ迄人を食つた事が恥かし氣もなく言へれば、人間も生きてゐるのが樂しみだらうね。然し、あんなに持上げられながら調子に乘らないところは、西尾宏も利巧者だね」

「全く利巧その物と言つていい男ですよ」と純一は答へたが、西尾宏の話を早く打切らねばならないと思つたので、
「近頃何か譯してゐますか？」と隅田に訊いた。
「相變らずスティルネルをぼつぼつやつてゐます。賣れない飜譯をコツコツやつてゐるのも、隨分馬鹿らしい話だが、今更捨ててしまふのも惜しくつてね。どうも僕はアナクロニズムの人間と見えて、僕の好きなものは定つて本屋が喜ばなくつてね」と、隅田は自分の反時勢的なのを反つて樂しみ誇るやうに言つた。
「一體、飜譯つてものは骨ばかし折れて、誰れもその苦心を買つちやくれないし、まづ好きでなくちや出來ないもんだが……」と隅田は言つて、丁度その机の上にあつた、スティルネルの『唯一者とその所有』の英譯を手に取つて、
「スティルネルの文章はキビキビしてゐて、實に齒切れがいい、僕はこれ位イントリケエトな意味で音樂的な文章はないと思ふ。その思想の思ひ切つて徹底してゐるところはユニックですよ。その癖人間はあまり徹底した、齒切れのいい方でもなかつたやうですがね……」と人の好ささうな笑ひ方をした。
隅田は此の獨逸の、生前殆ど全く認められなかつた個人主義の哲學者に傾倒してゐた。あらゆる權威を認めず、あらゆる教義を斥けて、何物からも自由に、ただ自我の赴くままに生きようとするスティルネルの極端な自由主義は、人生を生産場とは見ないで消費場と見てゐる彼の享樂的な氣質に最もよく迎合したのである。けれども彼をスティルネルに結び着けたのには、今一つ、二人の性格と閲歴の類似と云ふ事も與つて力があつたのである。
「その人間の光彩のない點だけから言つても、僕は大いにスティルネリアンですよ」と、隅田は自分を投げたやうな言ひ方をして、窺ふやうな眼付で純一を見たが、急に手持無沙汰さうな舟井の方に眼を轉じて、
「君は矢張りソシアリズムに興味を有つてゐるんですか？」と訊いた。
「さうですね、どうせ貧乏人ですから、ソシアリストには違ひないですがね、理窟は一體嫌ひな性分でしてね、そん

な事より矢つ張り金儲けですナ」と舟井は妙におとなしい返事をした。

三人がこんなに話してゐる間、奈枝子はずつと離れたところに、別にお茶を入れようともせず、子供を抱へて、皮肉な顔をして、何か言つてやりたいのを我慢してゐると言つた風で、妙に唇を反らしながら、三人の顔をぢろぢろ見てゐた。彼女は明かに舟井を輕蔑してゐる樣子であつた。

奈枝子は九州の女で、彼女がこれ迄『ブリュウ・ストッキング』に書いて來た小說や雜文によれば、小さい時から同じ町の醫者の家に貰はれて、その家の長男の妻となる內約があつて、その家からの學資で上京して、上野の某女學校に入學して勉强をしてゐるうちに、彼女の才氣と、いかにもジプシイ娘のやうな野生的な愛らしさと、その奔放な情熱的な性格とが、受持の英語教師の愛するところとなり、つひにその教師と戀愛關係に陷つた爲め、彼女は學校を逐はれ、教師もその爲めに職を失はねばならなかつた。その教師が卽ちこの隅田順である。

當時十七歲の少女であつた奈枝子は、隅田の愛撫と指導との下に、當時宛かも勃興しかけた婦人運動の中心人物なる石塚朋子女史の結社に投じて、その機關雜誌『ブリュウ・ストッキング』に、每號情熱と反抗心からの若々しい筆致を以て、人氣を博し、また彼女が隅田と共同生活の名によつて極端に自由婦人である事が、男性の興味を唆るものと見え、彼女に愛を告白する靑年が絕えない事によつて、一層その聲價を高めてゐた。そして彼女は今では雜誌を石塚女史の手から引きついで、懸命の奮鬪努力をしてゐるのである。

かうして奈枝子の名聲が高くなればなる程、隅田順は裏面の人物となり、その生活は無爲になつた。然し、その無爲な懶惰は單に奈枝子の活動と發展とからのみ來たものではなかつた。寧ろさう云ふ風に見るのは皮相の見である。隅田は一種の生活信條を有つてゐた。彼はスティルネルの所謂自由人を以て自ら任じて、どんなに逼迫しようとも、自分の氣の向かない仕事は絕對にしなかつた。その爲め家庭には始終いざこざが絕えず、奈枝子の活動も、一つはさう

した生活の逼迫に餘儀なくされた結果でもあつた。そして彼のかうした生活信條は、スティルネルを初め、いろいろの詩人や思想家の思想の影響から來たもののやうに言はれてゐたが、然し、それはもつと根本的な、彼の性格、否、彼の血に根ざしをもつた、もつと運命的なものであつたのである。隅田は江戸ッ兒であつた。下町の方の放恣な亂脈な家に生れて、その一族には精神病の遺傳もあると言はれた。彼の若いのか年とつてゐるのか年齡の分らないやうな青白い、いつも倦怠を示してゐる容貌が既にそれを語つてゐるやうに、さうした頽廢した江戸人の血が彼の脈管には流れてゐたのである。

彼は正則英語學校や國民英學會に多年學んで、その英語の學力は、通例の英文科出の文學士などの及ぶところでなかつた。そして或る緣故から、上野の某私立女學校の英語の敎師となつた彼は、本來ならば、その平和な生活に滿足して終つたかも知れなかつた。けれども、奈枝子との戀愛事件は彼の生涯の轉機となり、その爲めに職を失つてからは、彼の不規則な浪人生活の第一歩が始まつた。最初、彼の興味は專ら奈枝子に向けられた、奈枝子の啓發の爲めに、奈枝子を有名にする爲めに、彼はあらゆる努力を惜しまなかつた。彼女の名で、婦人問題を論じたエンマ・ゴルドマンの著書を譯したり、彼女の論文の材料を蒐集したりした。けれども、奈枝子の有名になるに從つて、隅田の懶惰と放逸とはひどくなつた。彼はその仲間と安酒を飲み歩いたり、寢轉んで好きな書物を拾ひ讀みしたり、尺八を吹いたりして日を送つた。彼と同居してゐる母親は、長唄の師匠をした事もあつて、三味線が上手であつたので、三味線と尺八との合奏に夏の夜を更かす事も多かつた。隅田は音樂には自信を有つてゐた、また實際、彼にはその方面に相當の才能(タレント)が有つた。否、ひとり語學や音樂ばかりでなく、彼にはすぐれた頭腦と見識もあり、犀利な批評眼もあつて、若し彼が平俗な努力を輕蔑さへしなかつたなら、文學者として相當の地位を占める事は容易であつたらう。けれどもその私生活に煩はされて、かうした彼の眞面目(しんめんぼく)は容易に人の認めるところとはならなかつたのである。

舟井が金儲けの話だの、女の話だのを例の調子で始めると、隅田もそんな事には興味があると見え、だんだん純一を置いてきぼりにして變な方へと話をころがして行つた。こんな風に半時間程たつた頃、玄關に來て、

「ゐますか？」と力の籠つた低い聲で訪なふ人があつた。その聲を聞くと、奈枝子はハッとした樣子で隅田の顏を見た、

「坊やはおしッこしたんぢやないこと？」と、まるで別な事を言ひながら、子供を抱いて向うの部屋から玄關の方へ行つた。

「いらつしやい」と彼女は馴々しさうに來客に言つてゐる。

「誰れ？」と舟井が殆んど無意識に隅田の顏を見て言つた。

「大菅君ですよ。君はまだ會つた事は無いんですか？」と言つて、隅田が一寸立上つて、

「やア、まあ上りませんか、龍田君などもゐますよ」と大菅に聲をかけた。

「有難う、だがさうしてをられんのです、龍田君によろしく言つてくれ給へ、直ぐ行かなくッちや先方ぢや待つてゐるだらうからね」

純一は玄關へ行つて、大菅に言葉をかけようかと思つたのであるが、こんな風に言はれて見ると、何だかそれが出來なかつた。

「實にすみませんね、ぢや早くして行つた方がいいだらう、坊やは僕が抱いてゐるよ」

「そいぢや賴むわ」と奈枝子は、先刻皮肉に默り込んでゐた顏とはまるで別人のやうに、愛くるしい小娘のやうな笑ひ顏をして、はしやいで、そこらあたりを掻き廻すやうにして、紺縮の單衣の上に男物のやうな絹の羽織を著たりして、外出の支度を始めた。その間玄關では、立つた儘で大菅は待つてゐるやうであつた。

「ぢや賴むわ、お母さんが歸つて來たら、庸ちやんには……」かう言つて彼女は隅田の耳に小さい聲で何か言つた。
「よしよし」と隅田は言つた。
二人は出て行つた。
「奈枝子の『ブリュウ・ストッキング』に書いた評論を文友社へ話し込むのに、いろいろ大菅君が骨折つてくれてゐるんでね……」と隅田は純一に言つた。彼は何だか間が惡さうに見えた。舟井は先刻から呆れたやうな顔をして、奈枝子の一擧一動を見てゐたが、隅田のこの言葉を聞くとニヤッと笑つて言つた。
「然し、君とこは實に羨ましいね、君はまるで左團扇ぢやないか……」
「さう見えるかね、僕はどうも誤解されて困るんだけれども、何と思はれたつて、もう慣れッ子になつてるから平氣なものだがね……一體、僕は誰をも束縛するのが厭やなんだ、人間は互ひに自由を尊重しなくちやならんよ」と隅田は自分が奈枝子をどんなにか認めて愛し尊重してゐるかを包むに餘るやうな風に言つた。
「ぢや、君は若し君のワイフが、誰かと何か出來ても、それでも、君のワイフの自由を尊重するかね？」と舟井が言つた。
「まアそんな事があれば、仕方がないから別れる迄さ、愛がなくなれば別れるより外はないと思ふね、僕等は習俗的な夫婦關係なんてものは認めないんだ」
「成程、新しい女と新しい男の結婚は違ふナ」と言つて、舟井はちらと純一の方を見たが、奈枝子がゐなくなつたので、丁度いい機會が來たと云ふやうに、彼は急に語調を變へて、
「ところで、君に一つ相談があるんだが……」と言つて、彼が隅田順に相談したいと云ふ、例の話を持ち出した。
「君が言ふやうにそんな演說會で金儲けなんて出來るもんかね、金儲けになるんなら僕だつて不贊成ぢやないがね、

だが、先づむづかしいと思ふナ」と隅田はいくらか氣が動くやうな樣子で笑つた。
「大丈夫だよ、君」と言つて、舟井は膝を進めて、そのいかに有望であるかを力說し始めた。
「だが、それにしても君、先立つものは金だね、遊ぶのにも金が要るが、金儲けにはなほ金が要る」と隅田は警句らしい言ひ方をして、純一の顏を見て笑つた。
「いや、君にそんな心配はかけんよ、君はただ奈枝子さんを說き落してくれさへすりやいいんだ、後はこの俺の方寸の中にあるサ、いい金主はいくらもあるんだからね」と舟井はいかにも確信があるらしく言つた。
からうして二人はあれこれと話し合つたが、話はいろんな問題の女の噂になつたりして、道草を食ふばかりで、結局纏つた話にはならなかつた。

五

西尾宏の會の時に、朝川が言つてゐた彼の滿洲行の送別會の通知が來た日には、純一は會費の外に、朝川への餞別を調達して、時刻より少し早目に、會場へ出かけて行つた。その會場は最近よく文學者や社會主義者の會合の催される處で、數寄屋橋外にある篠屋といふ西洋料理店で、そこの女將は石倉公爵の愛妾で、彼女の爲めに石倉公爵家が、富と名譽とを傾けたと云ふ事によつて、好事家の興味を惹いてゐる梅吉と云ふ女であつた。
純一が三階へ上つて行くと、その上り口に、磯部と云ふ顏馴染の靑年がぼんやり立つてゐた。この男は下谷の寄物屋の息子で、いかにも下町ッ兒らしくいなせな若者だが、矢張り社會主義に共鳴して、啄木風の反抗的な歌を作つたりしてゐた。朝川とは古い友達で、朝川は困つて來ると彼の家の二階に轉げ込むのだつた。
「やア、まだ誰も來てませんよ」と磯部は言つた。二人が椅子を引き寄せて話してゐると、四五人どやどやと上つて

來た。
「や、早かつたね」と朝川は純一や磯部に聲をかけながら、何だかその愛らしい丸顔に、得意さうな色を見せながら、
「大變待つたかね、僕は一寸廻り道をしてゐたんで遲くなつちやつた……」と彼は嗄れた聲で笑つた。
「送別會だと言ふのに、出席者は當人ばつかりで、一人も送別しに來なかつたら大變だと言ふので、方々に驅り出しに行つて來たんだよ」と朝川の後から入つて來た、物部と云ふ小柄な利かぬ氣らしい顏をした男が、いかにも朝川を叱つてゐるやうな風に言ふと、朝川は丁度からかはれた子供のやうに小鼻のあたりで笑つた。
一番最後に上つて來た男は、肩付のがつかりした大男で、いかにも腕力が强さうであつた。前河と云つて、以前足尾の鑛山で幾年か坑夫生活をしてゐた外にも、いろんな勞働に從事してゐた經歷を有つてゐる男だけに、外の若い生白い顏をした社會主義靑年とは、一見その性質を異にしてゐる事が分る。けれどもまた、彼はさうした閱歷の人間には珍らしく、鋭い頭腦と、藝術的の天分とを有つてゐて、旣に『勞働』と云ふ長篇小說を出版して、アナアキズムの作家として、一部の人々の尊重するところとなつてゐた。
「やア、龍田君か」と彼は直ぐ純一の傍へ來てかけた。
「お變りはありませんか」と純一が言ふと、
「ア、有難う、君の詩集はもう出來ますか、僕は君の詩が好きだもんだから、出たらば是非買つて讀まうと思つてるんです」と前河は言つた。その率直な表白が純一を勇氣付けた。
「出たら直ぐに送ります、是非どうぞ讀んで下さい、西尾君の詩集のやうな立派な本にはなりさうもないですけれど……」
「西尾の詩集ですか、僕は此間隅田のところで一寸見たが、あんなものが何處がよくてああ持て囃されるのか僕には

分らん。いかにも資本家の横暴を具體化して見せ付けられるやうな氣がして、見るのも不愉快だ。詩はまだしもだが、あの男の『驚異の再生』ッてありや何だ、あんまり評判だもんだから、どんなものかと思つて買つて見たが、あんまり愚劣千萬なのに呆れてしまつた。女を抱いて寢て、何が驚異の再生だい、人を馬鹿にしてゐるぢやないか。大倉喜八なんザ、もつとどえらい驚異の再生を幾つでも遣つてゐらァ。あんな寄せ集めのまやかし物が、どうして天才的なすばらしい藝術だい、あんなものが評判になるところを見ても、今の靑年がどんなに意氣地なしで、小利巧で、怯惰安逸を貪る利己主義の奴等かつて事が分るんだ、西尾宏なんかその代表的な奴だ」

前河は立て續けに、その太い熱のある聲で罵倒した。

「僕は會なんかで彼奴に逢ふと、何だかムカムカして來て撲り付けて遣りたくなるんだ。考へて見ると、そんなにする程の人間でもないんだらうが、あの小利巧な才子氣取りを見ると堪らなくなるんだ」

「そりや君、君が蟲が嫌ひなんだよ、西尾だつていいところはあるよ」と、朝川が如才のない調子で言つた。すると物部が横合ひから、

「朝川君はこんな場合、西尾の辯護をしなくちや義理が惡いんだらう」と、からかふやうに言つた。

「ウウ、さうぢやないさ、そんなに西尾に義理はないよ、それほど人の世話をする西尾ぢやないからナ」と朝川はもう一度辯解した。

そのうちに十四五人集つて來た。貝塚湖泉とか大菅左門とか赤畑荒村とか云つた尾行巡査のついてゐる首領株を始め、若い社會主義者たちの外に、かの巖本閃光や横山江潮などの文士も集つて來た。

「西尾なんか來ないのかね？」と純一が朝川に言つた。

「アア、西尾は君の送別會よりも僕の藝術の方が大切だとか言つて來ないと言つてゐた」と、朝川は苦笑した、「エ

ゴイズムもあれ位ゐ徹底してをればえらいよ」
ざつくばらんな雜談のうちに、みんなは一皿二皿の洋食を平らげ、生麥酒を傾けた。
「酒を飲みたいものは勝手に取らうぢやないか」と前河が言つて、日本酒を持つて來させると、同じ飲み仲間が、そこに集つて行つた。
やがて、二十人位も顏觸れが揃つた時、一座を一わたり見渡した貝塚湖泉が、
「まあ、こんなものだらうナ……ところで、形式張るのも可笑しなものだから、この儘で雜談會としようぢやありませんか、その方が朝川君も結句いいだらう。一つ朝川君の改悛の一念を賛成して祝つて下さい、諸君の中で朝川君に對して何か言つてやつて下さる方があつたら、隨意に立つて言つて下さることと……」と碎けた調子で、一同に相談するやうな風に口を切ると、
「それがいい、それがいい」と皆が贊成した。
「それなら僕が一つ送別の辭を呈するとしませう」と言つて、貝塚湖泉の傍にゐた嚴本閃光が立上つた。すると、皆は輕く手を拍つた。
「朝川君は、稀れに見る才氣煥發の才人であると同時に、天才的な不良性をも有つてゐます」と、閃光は例の氣取つた樣子で得意の辯を振ひ始めた、「この同君の不良性は、個人としては自他共に、時には持て餘すやうな場合もあるでせうが、然しこれは、同君の藝術家たる本色を恥かしめるものでないばかりでなく、反つて同君の藝術に天才的な極印を與へ、且つ同君の生れたる藝術家たる事を最も雄辯に、最も端的に物語るものに外ならないのであります。何となれば、藝術家は社會に於ける不良兒に外ならぬからであります。餘りに善良な、餘りに糞眞面目な、毒にも藥にもならない非藝術的なフィリステルどもの多い現今の文壇に於て、かやうな不良性は寧ろ非常なる天惠として見てはならな

いものでせうか。尠くともこの私に取つては、朝川君はその個性その物が既に立派な藝術であり、また今の餘りに小利巧な文壇に對する立派な抗議であり、諷刺であるのであります。然しながら、餘りに顯著な個性は必然社會の容れるところとならないものです、碌々たる凡庸兒、屑々たる低能兒に充滿してゐる文壇が、どうしてかかる顯著な個性を寛容しませうか。思ふにこれが朝川君が今日なほ君の天分に相當するだけの地位を、文壇に占める事の出來なかつた唯一の原因であると思ひます。不幸にして十分文壇の認めるところとならなかつた同君の處女作『不良少年の手記』の如きは、一讀私はその才氣に舌を卷いたのであります、實に後世恐るべき靑年だと驚嘆したのであります。然し、これだけの才氣をもちながらも、朝川君が今の儘では全く寶の持腐れで、平常から惜しいことであると思つてゐたところの私は、今度同君が哈爾賓に行かれて、大いに落着いて勉强されると云ふ事を聞いて、實に嬉しい事であると欣喜雀躍したのであります。いかなる大天才と雖も、肥料を施さなければ、豐麗な花を咲かせる事は出來ません。朝川君もここ二三年靜かに勉强して、徐ろに鋭意を養はれた上で、捲土重來の意氣を示して頂き度いものです。そしてその曉こそは、朝川君は文壇の覇者となられるに違ひないと信ずるのであります。この期待を以て、此の大才人の前途を祝したいと思ひます」

かう云ふ風に辯舌を振つて、閃光が着席すると、一同面白さうに手を拍つた。朝川は眼を丸くして、ふやけたやうな顏をして聞いてゐたが、この時純一の方を顧みて、ニヤッと笑つた。

「僕も同感だ、滿洲へ行つて露西亞語を習つて來るのは實際いいよ、僕も行きたいと思つてゐるんだ」と、純一の前の席で酒を飲んでゐる前河は、いかにも太い力のある聲で言つた。

「大菅君にも一つ言つて貰はうぢやないか」と物部が言つた。

大菅は大きなマドロス・パイプをくはへて、何か考へ顏に、筒袖を着た身體を、中央の卓子と窓際の椅子との間の空

ゴイズムもあれ位ゐ徹底してをればえらいよ」
　ざつくばらんな雜談のうちに、みんなは一皿二皿の洋食を平らげ、生麥酒を傾けた。
「酒を飲みたいものは勝手に取らうぢやないか」と前河が言つて、日本酒を持つて來させると、同じ飲み仲間が、そこに集つて行つた。
　やがて、二十人位も顏觸れが揃つた時、一座を一わたり見渡した貝塚湖泉が、
「まあ、こんなものだらうナ……ところで、形式張るのも可笑しなものだから、この儘で雜談會としようぢやありませんか、その方が朝川君も結句いいだらう。一つ朝川君の改悛の一念を賛成して祝つて下さい、諸君の中で朝川君に對して何か言つてやつて下さる方があつたら、隨意に立つて言つて下さることと……」と砕けた調子で、一同に相談するやうな風に口を切ると、
「それがいい、それがいい」と皆が賛成した。
「それなら僕が一つ送別の辭を呈するとしませう」と言つて、貝塚湖泉の傍にゐた嚴本閃光が立上つた。すると、皆は輕く手を拍つた。
「朝川君は、稀れに見る才氣煥發の才人であると同時に、天才的な不良性をも有つてゐます」と、閃光は例の氣取つた樣子で得意の辯を振ひ始めた、「この同君の不良性は、個人としては自他共に、時には持て餘すやうな場合もあるでせうが、然しこれは、同君の藝術家たる本色を恥かしめるものでないばかりでなく、反つて同君の藝術に天才的な極印を與へ、且つ同君の生れたる藝術家たる事を最も雄辯に、最も端的に物語るものに外ならないのであります。何となれば、藝術家は社會に於ける不良兒に外ならぬからであります。餘りに善良な、餘りに糞眞面目な、毒にも藥にもならない非藝術的なフィリステルどもの多い現今の文壇に於て、かやうな不良性は寧ろ非常なる天惠として見てはならな

いものでせうか。尠くともこの私に取つては、朝川君はその個性その物が既に立派な藝術であり、また今の餘りに小利巧な文壇に對する立派な抗議であり、諷刺であるのであります。然しながら、餘りに顯著な個性は必然社會の容れるところとならないものです、碌々たる凡庸兒、屑々たる低能兒に充滿してゐる文壇が、どうしてかかる顯著な個性を寛容しませうか。思ふにこれが朝川君が今日なほ君の天分に相當するだけの地位を、文壇に占める事の出來なかつた唯一の原因であると思ひます。不幸にして十分文壇の認めるところとならなかつた同君の處女作『不良少年の手記』の如きは、一讀私はその才氣に舌を卷いたのであります、實に後世恐るべき靑年だと驚嘆したのであります。然し、これだけの才氣をもちながらも、朝川君が今の儘では全く寶の持腐れで、平常から惜しいことであると思つてゐたところの私は、今度同君が哈爾賓に行かれて、大いに落着いて勉强されると云ふ事を聞いて、實に嬉しい事であると欣喜雀躍したのであります。いかなる大天才と雖も、肥料を施さなければ、豊麗な花を咲かせる事は出來ません。朝川君もここ二三年靜かに勉强して、徐ろに鋭意を養はれた上で、捲土重來の意氣を示して頂き度いものです。そしてその曉こそは、朝川君は文壇の覇者となられるに違ひないと信ずるのであります。この期待を以て、此の大才人の前途を祝したいと思ひます」

かう云ふ風に辯舌を振つて、閃光が着席すると、一同而白さうに手を拍つた。朝川は眼を丸くして、ふやけたやうな顏をして聞いてゐたが、この時純一の方を顧みて、ニヤツと笑つた。

「僕も同感だ、滿洲へ行つて露西亞語を習つて來るのは實際いいよ、僕も行きたいと思つてゐるんだ」と、純一の前の席で酒を飮んでゐる前河は、いかにも太い力のある聲で言つた。

「大菅君にも一つ言つて貰はうぢやないか」と物部が言つた。

大菅は大きなマドロス・パイプをくはへて、何か考へ顏に、筒袖を着た身體を、中央の卓子と窓際の椅子との間の空

席になつてゐる二間あまりのところを、往きつ戻りつゆつくり撥んでゐたが、
「いや、僕は別に言ふ事もない」と言つた。朝川の顔には寂しい表情が浮んだ。
「ただ、朝川君がいつものやうに口先きばかりでなく、本心から眞面目になつて遣つてくれる事を、君自身の爲めに希望する。君のやうな有爲な青年が、いい加減な生活をやつてゐるのは惜しい事だからね。大いに眞面目になつて勉強して貰ひ度い」と、大菅はその持前の、いかにも情熱家らしく思はせる少し吃つた口調で言つて、そのギョロリとした眼を朝川の上に落した。
「そりやさうだね」と貝塚湖泉は、純一や磯部などと並んでゐる朝川の方を見て、
「朝川君には、僕はこれ迄いつでも小言ばつかり言つてゐたから、君はさぞ厭やな親爺だと思つてゐたらうが、そこは矢張り年齢の相違で、我々老人株から見ると、どうも若い人達の遣る事は不安心でならないのも無理はなからうと思ふ。だが、若し君が僕の言葉の總てを、その儘に受容れてゐたら、僕は却つて失望しただらう。僕も君の年齢の頃には、かなり生意氣な青年として、先輩に顰蹙されてゐたものだ。然し、いつ迄もその儘ぢやまた困るから、君がこれ迄の生活を改めて、眞面目に勉強しようと云ふのは大いにいい事だ。何しろ我々の運動もなかなか前途遼遠で、これからは大いに若い諸君に遣つて貰はなくちやいけないのだからナ……」と、いかにも一派の長老らしい落着きと貫目とを見せて言つた。
貝塚湖泉が言つたやうに、彼等社會主義者の運動は、此頃では官憲の極端な壓迫の下に、殆んど火の消えたやうになつてゐた。そのうちに何か突發事件でも起らない限り、その儘じめじめと消え盡してしまふのではないかと、外部の人からは疑はれる程であつた。明治末年に、××事件を導火として、一時天下を驚かした××事件なるものが起りそれに關聯して、彼等の上に猛烈なホワイト・テラアが來てからは、日本の社會主義運動もここに一頓挫を來したので

ある。わづかに奇禍を免れた彼等の同志とても、或る者は外國に去り、或る者は市井の生活に韜晦するの外はなかつた。

一派の元老である貝塚湖泉は、諧謔的な匿名の下に、ユウモラスな雜文を書いたり、社會主義的傾向を帶びた西洋の思想家や文學者の著作を飜譯したりしてゐたが、先年から二三の同志を語らつて、賣文協會なるものを組織して、文章立案、代作添削、原稿作成、飜譯、編輯等、文筆百般の依賴に應じ、相當の成功を示して、同志の者に衣食の資を供する事を得てゐた。彼の立場はマルクス直系の正統派であつたが、その臨機應變の政治家的才能は、感情や理想に走る直接行動派の一本調子な行き方とは違つて、飽く迄實際に卽して、少しでもその主義主張の根柢をかため、その地位を占めて行く事に努めてゐるところに、自から調和的な色彩が現はれてゐた。彼は平日は尾行巡査もつかなくなり、殆んど普通の文學者と變らない生活をしてゐた。之れに反して、大菅左門や赤畑荒村などは、過激な左黨センディカリストなので、官憲の最も恐れるところであつた。けれども、彼等とても猶更ら何事も爲し得なかつた。言論集會の自由は殆んど無きに等しかつた。出す雜誌も出す雜誌も、發賣禁止を命ぜられ、沒收されるので、あらゆる手段を講じて官憲の眼をくらまして、その印刷部數を出來るだけ多く印刷所から他へ隱匿するのが、彼等の一つの事業と言つてもいい位であつた。彼等はその主張を眞向から振りかざした「勞働運動」といふ週刊新聞の發行を許されなくなつてからは、より抽象的、思想的な月刊雜誌を『現代思想』『文化批評』と、次ぎ次ぎに發刊したけれど、それすら發賣禁止を免かれる號とては、數へる程しかなかつた。こんな風であるから、まして、一切の實際運動には、全く手も足も出ない狀態にあつたのである。

かやうに、主だつた社會主義者たちは、今や專ら文筆の士としてのみその存在を許されると云ふ狀態にあつたが、とりわけそのラジカルな個人主義的思想の上から、最も文壇に多くの接觸點を見出し得た大菅左門の如きは、その透

徹した頭腦と、その豐富な學殖とを以て、しばらく純粹の思想家の立場に立つて、『早稻田文藝』とか『新星』とかの文學雜誌に、每號のやうに、犀利な評論を發表して、文壇に特殊の地位を占めるに至つた。その中の『近代個人主義の諸相』を論じた論文の如きは、此種の評論中最も明快周到なものとして、多くの文學靑年を喜ばせた。彼はそれ等の論文に於ては、出來るだけ婉曲に、出來るだけ危險な問題に觸れないように警戒してはゐたが、しかも彼の一文の爲めに、『早稻田文藝』は一二度發賣を禁止せられねばならなかつた。

　かうした大菅等の文壇的活動に對して、文壇の方からも、妙に社會主義、無政府主義かぶれして、大菅等の思想に共鳴を表白して、危い一線の上で彼等と接觸してゐる文學者が出て來た。早稻田文藝社の草間微風や、かの巖本閃光などがその主なるものであつた。草間微風は大菅左門と肝膽相照して、盛んに無政府主義的な個人主義に立脚した論文を書いて、文學者に書齋より街頭に出づべき事を勸告してゐるうちに、だんだん彼は自分の生活と思想との一致を示さねばならないやうになつた。然るに彼は、その豫期せられた實際運動の方には進まないで、反つて、一卷の『退耕錄』を文壇に殘した儘、故鄕の金澤へ退隱してしまつた。之れに反して、巖木閃光の方は、宛かも上手な輕業師のやうに、今なほ巧みにどつち付かずの繼ぎ目の上に踏み止つてゐるのである。

　巖本閃光は貝塚湖泉と草間微風の事を話してゐた。

「草間君も氣の毒な事になつたもんですね。以前のやうにアナアキズムを一人で背負つて立つてゐるやうな口を利いてゐた時は、隨分癪にもさはつてゐましたが、かうなつて見ると、一片送別の辭を送つてやりたいです。一體、僕は文壇の人氣の的(まと)になつて附け上つてゐる連中に對しては、用捨なく遣つ付けてやりたくなるが、一たん落目になつた時には、敵味方に拘はらず、同情したくなる方でしてね……」と閃光は得意らしく言つた。實際、彼はその競爭者(ライヴァル)の——彼と微風とは批評家として、赤門對早稻田の爭覇戰のチャンピオンと言はれて、多年相對立してゐたのである——退

耕に關して、その得意の警句入の名文で、半ば揶揄し、半ば同情したやうな評論を發表してゐた。

「然し、草間君はあれでいいんだよ、一時は僕も隨分小癪な氣がしたから、あんなに小ッぴどく虐めてやつたものの、案外脆い男だつたね。それにあんな逃げ方をするところは、彼も思つたより正直者さ、一體あの男は思想家なんて柄ぢやないから、時々田舍から一寸した雜文でも送つてゐた方がいいんだ、その點で彼も自れを知るの明ありさ」と、顋のところに、モヂヤモヂヤと短い髯を生やした色白の丸顏をした長成安郎といふ男が、東北訛の拔けない早口で言つた。彼は徵風の生活と思想との矛盾を最も痛烈に攻擊した一人であつた。

長成は草間徵風の事からふッと思ひ付いたやうに、

「此頃の西尾宏君の人氣はどうだい、すばらしいもんぢやないか、何しろ素晴らしい觸れ込みだからな。だが、あんなに觸れ込むと、後で當人が自繩自縛に陷つて苦しみやしないか？」

「僕もさう思つてゐるんだ」と物部が言つた。

「そんな事もないだらうがナ」と言つて、湖泉が閃光を見た。

「いやア、どうも……ちと舊惡と言つた形でしてね」と閃光は言つた、「だいぶ賞めすぎたので、少々きまりが惡いんですがね、尤も、あれ位賞めなければ、世間でも注意しないから止むを得ないんだが……僕としては、一個の西尾宏の事なんか問題ぢやないんです、僕はもつと大きな問題を眼中に置いて、あんな推奬の態度を取つた譯です。あれ位にしなくつちや、現在の低能な作家達を驅逐する事は出來ないと思ひますからナ。僕から見れば、寧ろ第二、第三に現れる西尾宏こそ本物だと思ふので、さう云ふ見地からすれば、一個の西尾宏の食傷なんか問題にしてはをられないんですよ。つまり、僕のやうな年配の者は、直ぐ次ぎの文壇とはどうしても相容れんから、その次ぎの文壇をいつも味方にしておく必要があるし、それでなくつたつて、次ぎの次ぎの文壇の中心人物になりさうな作家を出來るだけ

拔擢推薦するのが、文壇に對する貢獻だと考へるんですよ。然し、諸君が案ずるよりも、ずつとあの男は如才のない利巧な男ですよ。うまい事その地位を保つて行きますよ、さう云ふ事のために生れて來たやうな男ですよ」などと言つて、閃光は頻りに自家辯護をやりながら、西尾宏の人物批評をした。

「あの男はちつとも僕の推讃を多としてゐやしませんよ。どうも飛んだものを紹介してしまつて、今では少々後悔してゐますよ……それに比べれば、ここにゐる朝川君や龍田君は本物だ、それだけに今の文壇では損ですがね……」

純一はそれを聞いてゐると、不愉快な氣持が込み上げて來た。つい此間までは、あんな途方もない讃美演説までしたその同じ口で、平氣でこんな事を言ふ閃光に對して、西尾宏に味方するのではないが、純一は抑へ難い義憤を感じた。

「第二、第三の西尾宏こそ本物だとは何だ！ そんな事のために生れて來たやうな男だとは何だ！ さういふ事がそんなに分つてゐながら……その上、必要もないところへ、わざわざ朝川や僕の名前を持出してあんな事を言ふ、その腹が見え透いてゐる……」

純一がいらいらして、何か言ひ出したいやうな氣持になつてゐると、

「成程、君の考へさうな事だナ」と長成が言ひ出した、「さうすれば、次ぎの次ぎの文壇が次ぎの文壇になると、またその次ぎの次ぎの文壇を味方にするから、君の勢力たるや永久不變だツ……ハハハ……」と長成が哄笑した。この次ぎの次ぎの、またその次ぎの次ぎの文壇と云ふ語呂が、長成の東北訛の早口によつて、面白くこんがらがつたので皆は失笑した。

長成は「學は東西に亙り、識は古今を貫く」と自ら號して、『高等幇間を志願するの書』と云ふ韓退之もどきの名文章で儕輩をアッと云はせたこともある。彼はこんな調子で間斷なく喋り立て、上は高遠な哲學、社會學、人類學の事

より、下は卑俗な女の話に至るまで、絶えず豐富な話題を提供しては、人を笑はせ、自分も樂しさうに悦に入るのであつた。

「どうだい諸君、一寸この密室へ入つて見ないか」と長成が言つて、室の一隅に張り出されてゐる狹い室の、小さい覗窓を中からカアテンで塞いだ靑塗の扉を押しあけて、中へ入つて行つた。

「密室？　こりや面白い！」と言つて、好奇心の強い閃光が立上つて、その後から、中へ入つて行つた。續いて二三人の者が覗きに行つた。長成と閃光とは何だか頻りに笑つてゐたが、直ぐ出て來て、

「この密室へはよく學習院の生徒なんかが、虎の門あたりの女學生と一緒に來るんださうだよ。Tete-a-tete と云つた譯だ……」と長成が言ふと、閃光も後から出て來て、

「なアる程、いい密室だ……これは今に『白潮』あたりでS屋のテタテト・ルウムなんて言つて、彼等の安價な人道主義的小說にはなくてならない立派なシインになりますよ……」

丁度そこへ可愛らしい顏をした十七八の女給が麥酒を搬んで來たので、閃光が早速、

「ねえさん、この部屋はどうです、繁昌しますかね？」と訊くと、

「エ……」とその女給は、嫌やな事を訊く人だと言つたやうに、閃光の顏をちらと見たばかりで、何とも答へなかつた。

「聞くまでもない事だね」と大菅が微笑して言つた。すると閃光は大菅の方に向いて、

「どうです、大菅君、君も一つ御使用になつては……」と言つた。

「最近使用の出來るやうな事にでもなればいいんですがね」と言つて、大菅はパイプに煙草を詰め替へながら、例の大きな眼玉をギョロリとさせて、大きな聲で笑つた。彼は何だかいつもとは違つて浮々した樣子で、ひどく愉快さう

であつた。
こんな雑談が一しきり續いてゐるところへ、また違つた少し年の行つた女給が上つて來て、
「大菅さんに女の方からお電話でございますよ」と言つた。
「ア、さうですか」と言つて、大菅は大急ぎで階下へ下りて行つた。間もなく上つて來た大菅は、
「僕は一寸用事が出來たから、今日はこれで失敬する」
「何だい、その用事ッてな？」と赤畑荒村が濃い眉を顰めながら訊いた。
「いや、別に大した事でもないんだ……」と大菅は、妙に照れたやうな笑ひ方をして、その儘出てしまつた。
彼が出て行つてしまふと、その後は何だか大きな間隙でも出來たやうに、皆は暫くの間默つてゐた。前河だけはグイグイ酒を呷つてゐた。そのうち貝塚湖泉や赤畑荒村などの主だつた人たちも、ポツポツ歸り出した。するとその後で、長成はふと思ひ出したやうにニコニコして、
「大菅君は新時代の色男だね、此頃江東奈枝子と意氣投合してゐるさうぢやないか」と言ひ出した。
「意氣投合以上の問題ぢやないですか、何でも近々我々を驚かすやうな事があると云ふ評判ですよ」と閃光がいかにも眞相はこの俺はよく知つてゐますよと言はんばかりに、膝を乘り出して言つた。
「そりや面白いナ、どう云ふ事件かね、まさか駈落とか心中とか云ふ古風なもんぢやないだらうが……」
「ま、それを近代的、英雄的にやるんだと思つて差支はないんでせう。ところで此の事件は、大菅君をもつと華々しい英雄にしますよ、大菅君の社會的活動よりも、かうした戀愛的活躍が一層大菅君の男ッ振りを上げる事になるでせう」
「そんな事はないよ」と横合から、前河が口を入れた。彼は今や酒が無くなつて、間が拔けたやうな氣分で話を聞い

てゐたものである。
「そんな事は絶對にないんだ。大菅は今更色戀に迷ふなんて云ふ無分別な男ぢやアないんだ。彼には自分の全生活を打込んでゐる運動があるんだから、そんな無思慮な事はしないよ。それに細君はあの通り賢夫人だし、最近神山高子ッて云ふ親友もあるんだしするから、奈枝子なんぞと駈落だの心中だのと云ふ箆棒な事があつて堪るもんぢやない」
彼はいかにも日本人的な——夫婦關係を特に嚴肅に考へる——情感を以て、皆の面白づくな空氣を唾棄するやうに反駁した。
「神山の話には、大菅は神山に大變惹き付けられてゐるさうだから、奈枝子とは單にザラにある交際に過ぎないのだ」
「さうぢやないらしいよ」と物部がいかにも、前河の眞劍な調子を見て微笑するやうに言つた、「神山はさう言つてるだらうけれど、それは神山自身の主觀に過ぎないのさ。僕等が見たつて、大菅の方から神山に參つてゐるのぢやなささうだ。いや、神山を避けようとしてゐるらしい形跡さへあるんだ。だから奈枝子の方に心を持つて行くと云ふ事も領けない事はない」
「だが、奈枝子には亭主があるぢやないか」と前河が呶鳴つた。
「その亭主が隅田順なんだからナ、細君の自由意志についちや絶對の尊重を拂つてゐるんだからナ。現に此前の例もあるサ、おまへの心が動いてゐるのなら靜かに別れよう、その方がいいだらうと言つて、彼女が新しい愛人の方へ飛び付いて行かうとするのを靜かに見送つてゐたんだからナ。僕等から考へると領けない事なんだが、あの男も妙な男で、夫婦關係を妙に自由に考へてゐるんだからナ」
「分らないナ、僕には……だが、一體嗅は何なんだ、女中や小僧と同じぢやないんだぞ！　女中や小僧の出代りぢやないぞ、自分の嗅ぢやないか！　そんな馬鹿な事はない。ぢやア隅田は嗅が他の男に關係して歸つて來た事が知れて

も、彼女の自由を尊重して默つてゐるッて云ふのか？　そんな事は僕には分らん。僕がそんな女の亭主なら、默つちやゐない、二人とも殺ッつけてやる！」
「君なら勿論さうするに定つてゐる、だが、隅田順はそんな事はしないよ」
「だが、隅田だつて男ぢやアないか……然し、どつちにしても、僕は大菅のためにそんな事は取らんナ、今は人の嬶を取つたり何かしてゐる時ぢやないからナ、大菅のやうな利巧な男がそんな事を知らん筈はない」と、前河は、大菅のために辯解して、もうその上何か言ふのが厭やだと云つた樣子で、くるりと向き返つて、純一の方に向いて、
「龍田君、君は相變らず默つてゐるナ」と聲をかけた。
純一はかうした騷がしい席上に出ると、平常から默り勝ちの方であるが、殊に此頃はとりわけ沈鬱な氣分になつて、周圍が面白さうであればある程、佗しい苦しい心になつてしまふので、先刻から一言も言はないで、大菅の行動について語られるのを聞いてゐたが、
「エエ」と言つて、前河の酒氣に赧らんだ顏を見て、寂しく笑つた。
「龍田君、君は藝術と實際運動との調和をどんな風に考へてゐますか？」と前河が話しかけた、「僕はこれでゐて、まだこの二つの間に彷徨してゐる人間です。君はどんな風に解決を付けてゐるんです？　いつも一度訊き度いと思つてゐるんだがね」
純一は突然提出されたこの重大な質問に、短い言葉で即答の出來ないのを感じたので、また相手が大分醉つてゐる樣子なので、答への代りに微笑を以てした。
「僕も長い間その問題には惱んでゐるんですが……」
「さうだらうとも、君のやうな詩人で、デリケエトな人間は、僕なんかよりも一層その點では苦しんでゐるだらうと

思ふ。然し、僕もその迷つてゐる事から言へば、敢て君に劣らないつもりだ。僕は高畑なんかのやうに、藝術をつまらない無意義なもんだとは思はない、本當の藝術家ならば十分尊敬を拂ふつもりだ、また第一、僕自身もいい藝術を作りたいとは思つてゐる、本當にすぐれた立派な物さへ書ければ、どんな物だつて惜しくないとさへ思ふんだ。それでゐて、僕にはぢつと落着いて、氣長にコツコツ筆を執るなんて事が出來ないんだ。何だかまどろこしくつて、下らない遊びでもしてゐるやうな氣がして、焦々して來るんだ。もつと直接的な、この身體全體を投げ付けるやうな、生命がけの仕事がしたくなるんだ。それだからとて、會へ出たり、皆と議論したり、巡査なんかと喧嘩したりしてゐると、その時はまぎれちやゐるが、歸つて來る時には、實に寂しい空虛な感じがしてならないんだ。こんな事をしてゐるより、やつぱり家にゐて、靜かに本を讀むとか、原稿を書くとかしてゐた方が、ずつと本當の有意義な仕事ぢやないかしらと思つて來るんだがね……」

前河のその語氣には、いかにも眞劍に考へ惱んでゐる人の眞摯な表情があつた。純一はそれに動かされた。それには、彼自身の苦悶と疑惑とに、深く相通ずるものがあつたのだ。

「同感です。僕等に少しでも藝術欲があり、藝術を愛する念があつたならば、丁度反對の方向に向いた二つの車輪に繋がれた人間のやうなものです。僕は藝術と實際運動とは、どうしても相容れないものだと思ふのです。藝術家に取つては、靜かな沈思と內省とが何よりも大切だが、そんなものは、實行家に取つては一番の邪魔物です。我々が一圖に實行の方へ走る時は、露西亞のナイヒリストのやうに、藝術を全然否定しないとしても、その實際に於て、結局藝術を否定する事になる。またそれ位でなくちや本當の實行家とは言へない」と純一が言つた。

「そりやさうかも知れん、仕事の方に熱中してくると、いくら閑暇があつたところで、小說なんかとても書けなくなつちまふからナ。」と前河が言つた。

「また書く氣もしなくなるでせう、實行家に取つては藝術なんてものは、まどろッこしいに違ひないし、藝術家に取つては實際運動は、たとへ、どんな感憤からそれに與つたところで、さしたる效果はない。結局その人の素質と才能との問題に歸するでせう。そして僕の場合を言へば、僕の衷にあるこの熱望、この觀念、この叛逆本能は、何等かの形で表現されなければならない、然しその場合、藝術によるか、實際運動によるか、それは僕の自由でなければならない。然し、僕にはもうそんな事は問題ではなくなつたのです」と純一は言ひさした。彼の言ひたい事は、それからもつと先きの方にあつた。「だが、その藝術も實際運動も、自分に取つては今何の意義があらう？」と純一は言はうとしたのである。けれども前河は大きく頷いて言つた。

「さうだ、君なんかは元來實行家といふ肌合ひぢやないからナ、君なんかは先づどうしても文學者として働くべき人だ。ところが、僕なんざそれがまだ分らないんだ、どつちとも定らないんだ。小說を書いてゐても、それに何處迄も魂を打込んで行けるかどうか分らんし、實際運動の方だつてやつぱり下らんやうな氣がしてならん、みんなまどろッこしい、酒でも飮んでゐる方がまだましだ」

「さうだ、君にはまづ酒だね」と物部が口を入れた、「君のやうな性急な男は堪らんだらう、全く、こんな生ぬるい事ぢや仕方がないからね。要するにどんな人でも藝術なんかどうでもいいと云ふ氣になるやうな時代にならなくちや駄目だね。今の狀態ぢやどんなに思つたところで始まらん話だから、まあ當分は藝術に遊んでゐるのもいいさ。だから僕はせいぜい音樂の硏究でもやるつもりだ」

すると、傍にゐた磯部がその物部の終りの言葉を註釋するやうに、

「物部君は近々蓄音機を買ひ込むさうだよ、ヴィクタアのいいレコオドを聽かせてくれるつもりなんだ」と披露した。

「物部君は此頃景氣がいいんだよ」と朝川が、更に第二の註釋を入れた。彼は初めから面白さうに嗄れた聲で笑つた

り話したりして、その樣子では、滿洲に行くなどと云ふ事はもう考へもしないかのやうに、晏如として見えた。
「物部君のやうに、全く方面違ひの仕事をやつてるものは羨ましいナ。僕なんかは、いくら小說を書いたところで、書いただけの小說を賣るのはなかなか骨だからナ。それに僕は此頃自分の作品に對して疑ひを挾んで來たんだ、自分で書いてゐても下らなく思へて仕方がない」と前河が、慨嘆するやうに言つた。
「そんな事はない、僕は前河君にもつと小說を書いて貰ひたいんだ。『勞働』は實に力强い作だつたからナ。大菅君の云つたやうに、ゴオリキイを思はせる……」と朝川が言つた。彼は前河をいつも尊敬してゐるやうであつた、とりわけ前河の腕力に對しては、絕對の尊敬を拂つてゐた。
暫くかうして話してゐたが、やがて、
「もう引上げようぢやないか」と前河が、急に思ひ付いたやうに言つた。彼は酒が無くなつて手持無沙汰らしかつた。
「も少し酒を取つたらどうだ、まだ一向醉つてゐないやうぢやないか」
「ウン、も少しやらうか」
「此間、君のところに泥坊が入つたッて云ふぢやないか、したたか盜まれたさうだね」と長成が聲をかけた。
「ウン、やられたよ、何だか俺の家の事を何から何まですつかり御承知の野郞なんだ。御丁寧にも二日續けてやつて來て、しまひの果てには僕と鼻との萬年筆を持つて行つたし、『現代思想』の合本まで持つて行きやがつた。あの合本なんか攫つて行くやうな泥坊は、こりや矢つ張り同志中の泥坊志願者らしいナ」
「ぢや君、その人間の當りは付くだらう」
「付く事は付くが、付けて見たところで仕方がないや。俺のところに前に居候してゐた奴が、共產主義を實行したんだらうよ。まるで泥坊を飼つてゐたやうなものだ。ところで、萬年筆が無いので、俺は忽ち困つてゐる、誰か寄附し

てくれる者はないか」
「そりや困るだらうナ、一つ前河盜難後援會ッて奴を設けて、大いに寄附を募らうぢやないか」
「ウン、そりやいい、一つ君幹事になつてやつてくれ」
「何だ、盜難後援會か、妙な會だナ、いつそ泥坊奬勵會とした方がいいや」と朝川が言つた。皆が、ワイワイと口々に喋つてゐる。

前河は何處か親分肌の男で、誰でも氣に入ると、酒を振舞つてやつたり、家へ連れて歸つて泊らせたり、居候に置いたりした。彼はその多年の勞働生活から得た經驗と、熱心な讀書と硏鑽とで、自づとアナアキズムの理論を築き上げてゐた。然し彼のさうした思想の根柢となつてゐるものは、いかにも日本人らしい、弱きを扶け強きを挫くと云つた任俠の精神であつた。「前河の頭には國定忠次とバクウニンとが同居してゐる」と、曾つて誰かが評した通り、國定忠次とか、淸水の治郞長とか云つた俠客を好きである彼は、自分の生活を亂してまでも、好んで人の世話をすると云ふ風であつた。

然し、單に前河ばかりでなく、一體、社會主義方面の人達は、互ひに團結して助け合つて行くと云ふ氣風が强かつた。各人それぞれの立場の相違から、隨分烈しい激論をしたりする事はあつても、その生活上の問題となると、兄弟のやうに扶助し合つた。それは多分多年の壓迫から、止むを得ない必要上からして、自づと助成せられた美風であつたらう。彼等は壓迫がひどければひどい程、一層鞏固に團結し、一層本物になつて行く傾向をもつてゐるのだ。宛かも古來の宗敎迫害が、さうした著しい幾多の例を示してゐるやうに、不合理な壓迫は、愈々彼等の叛逆本能を煽り、愈々彼等の信念を固めると同時に、また彼等の中の薄弱な連中や、疑はしい連中を淘汰して、自づから彼等の間の連鎖を强めるのに過ぎなかつた。そして、かうした美しい團結の力に魅せられて、さまで深い理解もなしに、彼等の仲

間に入り込んで行く青年も決して少くはない。
純一は長い、とめどのない人々の饒舌にすつかり疲れてしまつて、向うの方で話してゐた朝川のところへ行つて、その肩を叩いて、
「朝川君、僕はもう歸るが、君の發つ時には見送りたいから知らせてくれたまへ、ね」と言つた。朝川は立上つて一緒に上り口に出て來て、
「ア、有難う、見送りなんかしなくつたつていいんだよ。それより君はあんまり悲觀なんかしないで大いに小説を書くといいね……エエと、それからね、君の詩集が出來たら、是非あちらへ送つてくれたまへね、僕は早く讀みたいんだから……」と、いつもの彼に似氣なくしんみり言つた。
「ア、送るとも、では……」と言つて、純一は階段を下りて行つた。すると、その中途で、丁度便所へでも行つてゐたらしい最本閃光が、下から上つて來るのにばつたり出逢つた。閃光は純一の顏を見ると、ひどく愛想よく笑ひかけて、
「君はもう歸るんですか、まあいいぢやありませんか……アア、その後小説はどうです、書けましたかね。書けたら是非見せてくれませんか。實はね、最近新作家を紹介して、ウンと雜誌の景氣付けにしたいと言つて來てる處があるんです、僕の紹介で出る事がお嫌やでなければ、僕は喜んで紹介しますよ。ウンと派手な變つたものを書いて持つて來て下さい」と云つた風に、若い心を亂さすには十分な激勵の甘言を亂發した。
純一は眞向から瓦斯の光を浴びた閃光のつるりと氣の利いた顏を、丁度ドミエエか何かの繪からでも拔け出して來たグロテスクな人物のやうな氣持で、ぢつと眺めた。彼は惡魔が魂を賣らせようと誘惑すると云ふ調子はこんなものであらうかと考へた。然し、惡魔と云ふ程の邪惡な毒氣はなかつた、反對に、そこには何だか悲しいものが感ぜられ

た。いかにしてでも自分の勢力を張り、地位を守らうとする人の懸命の努力が見られるやうに思はれたのだ。彼は閃光のその言葉には擽つたい焦々しさは覺えたけれど、最早憤激の情は起らなかつた。むしろ閃光が非常に氣の毒な憫れむべき人間に感ぜられたのだ。彼は簡單に答へた、

「エ、まだ書きません、出來たらまた見て頂きます」けれども純一はもとより閃光の推薦にあづかつて、文壇に出ようと考へたのではなかつた。

階下にはもう尾行巡査は一人もゐなかつた。下駄を穿く時、見るともなく奥の帳場のところを見ると、丁度衝立の蔭から、いかにも藝者上りらしい年增の女の横顔が、半分ほど、くつきりと鮮かに浮んでゐた。あれが梅吉と云ふ女ぢやないかしらと思ひながら、純一はそこを出た。

數寄屋橋から日比谷の方へ歩いて行つて、純一は交叉點を越えて、公園外の、以前——ずつと以前、彼が上京した當時、そこで毆られた待合所の建つてゐた地點へ歩いて行つて、ぢつと彳んだ。今ではもうあの小さな建物は跡方もなく、鐵柵の間から、公園の種々の靑葉が、埃をかぶつて垂れてゐた。ダツだと言つて、突然に毆打された事は、上京したての彼の心を激昂させ、その激昂が彼の多感な心に根ざしてゐる、强い者、不正な者に對する反抗心と、弱い者、羨しい者に對する同情心とに油を注いで、その權力に對する憎みと憤りとが、自づと彼を驅つて大膽にも近づかせ、殊に文壇の忌はしい裏面を知つてからは、とりわけ熱心な同志の一人ともさせたのである。彼は自分のシャイなティミッドな性質に反抗しながら、彼等と共に働きながら、自分が强い人間になつて行くのだといふ誇りと滿足とを感じた瞬間もあつた。けれども、やつぱり自分がそんな事に適した人間でないといふ自覺が、さうした周圍の中で、餘りに自分をオークワアドに感ずる心が、また彼を藝術の方へと引き戻すのだ。そしてかうした彷徨の中で純一は、かの突然前河から問ひかけられた社會主義に行くか文藝に行くかと云ふ問題を、彼の生活全體を擧げて考へて來たので

ある。

貝塚湖泉や大菅左門などの年配の人々の態度議論には、それぞれの思想的な根據もあり、多年の苦難の試練を經た誠實があつたが、純一と同じ年配の靑年には、殆んど大半、朝川などよりもつと無意味な、一種の精神的虚榮や、英雄氣取りから、要もないところでワイワイ騷いだり喋つたりして、得々としてゐるやうな小英雄が多かつたので、その粗剛な生活態度は純一に取つては本能的に相容れないものであつた。從つて、純一は彼等とは親しむ事が出來なかつたし、彼等からは、朝川などと共に文學者として輕蔑されてゐたのである。そんな時には、彼は反抗的に、「俺は文學者だ、それがどうしたのだ？」と云つた氣持になつた。けれども、文學者の厭はしい空氣――ブルジョア風の自得と自衞心と商人的態度と――に觸れる每に、彼はそれを唾棄したくなつた。そんな者の間に伍して、卑しい努力がどうして彼に出來ようか！

然し、この數年の間に、彼を前後から反撥したものは、さうした外面的な事實、眼中に置くにも足らぬ人々の嫉厭ではなかつた。彼の惱みはもつと內面的な、もつと本質的な疑ひから來た。その惱みこそ、彼がその小說『二重の反逆』の中に盛つた、あの沈痛な絕望の聲であつたのである。しかも『二重の反逆』の受けた運命は、彼の絕望に對する更に斷乎たる裏書きとなつたではないか。

純一も最初の間は、露西亞のテロリストの悲壯な最期――身を爆彈のやうに擲つて、敵と共に自れを粉碎する――にいかばかりか血を燃やし、昂奮を感じた事であらう。然し、それはただ一篇の詩に過ぎない事が、年の若い彼にもだんだんに分つて來た。社會主義運動は華かな一場の芝居ではなく、反對に、長い長い不屈の苦鬪、地味な光彩のない隱忍刻苦の持久戰である。貝塚湖泉のやうな老巧な人は實によくそれを知つてゐるのだ。或る同志が湖泉の態度の手ぬるさを非難して、何か或る開き捨てにならない事を言つた時、彼は容(かたち)を改めて、人のない二階へその男を連れて

行き、肅然としてその萬一の覺悟を披瀝して、その男をして頭を垂れしめたと云ふ事は、純一も後で聞いた。彼等は犬死をしてはならないのだ。それは決して彼等の臆病心からではない。しかも其上、今ではその犬死さへも許されない有樣ではないか。純一もさう云ふ事をだんだん悟つて來た。その間に、純一は先輩の說をも聞き、また自ら書を讀みもして、彼等の主義主張の間に、いかに無數の差別と異同とがあるか、一見相接した面は忽ち輪を一轉する程の差違となるかを知り、要するにそれは理論ではない、理論は末の末だと考へた。理論を生かすものは、その人の精神であり、信念である。だが、その信念が問題である！　今や彼には、唯物史觀に基づく樂天的見解は――その主張さへ貫徹されたならば、貧富の差別、階級の不平等、都會と田園の別、筋肉勞働と腦力勞働との別、一言にして言へば、あらゆる不合理と惡德とは消滅し、萬人皆自由平等の平和な幸福な理想鄕が現出するといふ見解は――つひに信ぜられない事となり、想像の出來ない事となつたのであつた。彼には、兎に角先づ破壞を、兎に角現狀打破を、――その絕望的衝動、その反抗的の痙攣こそ、先づその心を喚び起こす。しかも次ぎの瞬間には、丁度それに彼を驅るものが、同時にまた彼を引止めるものとなる。彼の愛が、彼の人道的感情が、彼の情緒のデリカシイが！　そしてああ――だが、彼が街頭に立つて、勞働者の間に伍して、いかなる破壞をなし得たかよ！

V narod!（ナロッド）その言葉はいかに屢々感激をもつて語られたであらう。然し、それは餘りに詩的に受け容れられた。ツルゲエネフの『勞働者と白き手の人』の悲痛な反語（アイロニイ）は、我國に於て、更に幾倍の眞實であらう。純一がいろいろな機會で知つた生粹の勞働者は、彼にその事を深く感ぜしめた。彼等の中からは本當に人間的な强さと熱も見出される。また稀れに前河のやうな人物をも出す。然し、彼等の大部分は白き手の人を理解しない、二者の間には深い深い溝がある！　そしてその溝を飛び越すための努力が、果して何の意義を有つか！

止むに止まれぬ必然の要求、それが人間に異常の力を與へる。勞働運動が彼等勞働者の自發的運動でない間は、果

してどれだけの必然性を有つであらうか？　眞の戰士はその虐げられた者の間から生れ出なければならない。勞働者を救ふものは勞働者の間から出なければならない。そして、貝塚湖泉や大菅左門などは？……彼等は溝を飛び越さうとする。だが勞働者が眞に眼覺めて來て、勞働運動が彼等の自發的の運動となつた曉には、彼等は勞働者に取つて抑も何者であらう？　彼等はやがて自分が刺される劍を自分で鍛へたことを、苦い苦痛をもつて味ひはしないであらうか？　いや、彼等は既にその運命を覺悟してゐるかも知れない……

「然るに、自分は何者であるか？」と純一は考へた。ツルゲエネフの『處女地』のネヅダアノフの哀れな最期が彼の頭に浮んで來た。あのネヅダアノフが、つひに短銃をもつて自らの頭を貫いた苦悶こそ、同時に自分の苦悶ではないか。「たとひ自分がそのあらゆる革命運動を肯定し、社會運動の意義に信仰を有ち得たとしたところで、自分が實行の上に表現するものは、みんな惘然な出來損ひの詩に過ぎないのだ。丁度『眠り』といふ詩に於て最も有意義な詩を書いたネヅダアノフと同じやうに！　しかも自分は、單に貝塚の亞流の無能な一弱卒、大菅の滑稽なパロデイとして自分を見出したくはないのだ。そして自分がこんな事を考へるのも、要するに自分がその爲めに生れた人間でない證據ではないか？」

純一は多くの意味でラジカリストであつた。彼は一擧にして勝敗を決したかつた。常に乾坤一擲の壯圖を夢みてゐた。些かの妥協もこころよしとしなかつた。一切か、然らずんば皆無――それが彼の標語であつた。從つて彼は、現實家である貝塚湖泉の調和的な、やや妥協的な立場よりも、理想家である大菅等のアナアキストの立場に、專らその心を傾けた。明快で、警拔で、力強い大菅の論文は、彼の心を惹き付けた。けれども、それもまた、詩に過ぎない。その思想を生かすものは、ただひとり實行あるのみである。大菅はもとよりそれをよく知つてゐる。然し、多少でも社會の注目を惹きさうな一切の司法處分を避けて、謂はば一種の默殺政策を取つて、ジリジリと氣長に責め拔かうと

するやうな遣り方をされては、一代の英雄児と云はれる大隈其人でも、奈何ともする事は出來ないのだ。そして今やかたい信念をもつた人はすべて沈默して、ただ、血氣の靑年のみが口先きばかりで傲語してゐる！　そして、さうした靑年の一人であるといふ事は、何といふ恥づべき事であらう！

「だが、こんな事を考へるのも、やつぱり自分がその爲めに生れた人間でない證據なのだ。その生涯を賭するには、どうしても、その事のために自分が生れて來たと云ふ信念が確立しなければ駄目だ。藝術もよからう、社會主義運動もよからう、それはその爲めに生れ、その必然の要求に動かされる人に取つてはである！　さうだ、たとひそれが客觀的に見て、どんなに小さな、どんなに些細な事であらうとも、その事に全心を打ち込んで行けたなら、これこそ自分の天職だと信じられる筈だ。文學者でもなし、社會主義者でもなし、今ある自分は何者でもない、何事にも打ち込んで行けない人間だ、まるで風に吹き飛ばされる塵みたやうなものだ。若し何かがあるとすれば、たつた一つある、それは死だ……だが、死ぬと云ふ事さへも……」

　プラタアヌの並木の下を花壇の方へ歩いて行くと、ここかしこに二三人連れの人影が黒く見えて、芝生の上には、アアク燈の靑白い光が冷水のやうに流れてゐた。藤棚のある暗い池の畔りにある四阿の中の、木の腰掛けに腰をおろして、噴水の方をぢつと見てゐると、さらさらといふ水音まで、いかに彼をして銷魂の思ひに堪へざらしめたであらう。

　純一が疲れ切つて、がつかりして、寂しい宿へ歸つて來ると、もう階下は暗く靜かだつた。彼が自分の部屋に入ると、机の上に開き封の嵩高な灰色の封筒が載つてゐた。

「アア、來た、出て來たな！」と純一は覺えず呟いた。彼は直ぐそれが、彼の詩集の校正刷だと云ふ事に氣が付いたのだ。そして自分が非常に苦々しい心持で、公園などをぶらついてゐる間に、自分の部屋では、この封筒が歸りを待

つてゐてくれたのだ、そしてこれが今では自分の生活の支柱なのだと考へると、わくわくするやうであつたが、そんな喜びが彼には何だか後めたい氣がした。
原稿の一綴りが丸く卷かれてゐる中から出た、薄い洋紙の上に浮き上つた活字は、何とも言へず美しかつた。凡そ三臺位であつた。彼はこれ迄校正の仕事を隨分長い間して來たが、未だ一度も自分自身の著作の校正をした事はなかつた。それで、今校正といふ事がどんなにか樂しい事に思はれたのに驚いた。
彼はその儘机に向つて、赤インキにペンを浸しながら、原稿を低唱しては校正刷を見て、それが小半時間もかからないですんでしまつたのが名殘惜しかつた。彼は蒲團を敷いて横になつてからも、枕もとに、校正刷の三臺をずつと擴げて、繰返し讀んでは、陶醉したやうな氣になつて、彼は呟いた、
「自分の詩は決してつまらない詩ではない。たとひ誰一人認めてくれる人はなくとも、この中にこそ自分の慰めはある……」

六

詩集の校正が二三度來た時分に、純一は今度の出版に力を入れてくれた、細谷氏の家へ訪ねて行つた。それには林田先生からの言傳てもあつたし、勿論彼としての謝意もあつた。
細谷氏は中野信太郎が手傳つてゐたかの經濟大辭典を出版して、それが當つてからは、徐々にその事業を發展させ、今では印刷工場の方もずつと擴張させてゐた。數年前、一少年に過ぎなかつた彼が、舊友信太郎を訪ねて行つた時の事が彼の心に蘇つて來た。それと同時に、彼には美しい少女の姿が思ひ出された。
「私がお連れいたしませう」と言つて、今迄掃除でもしてゐたらしい赤い襷を、その右の手に丸めながら、先きに立

つて門を出て、坂道を少し下りたところの工場へ彼を案内した脊の高い娘の事がなつかしく思ひ出された。美人と云ふ程ではなかつたが、脊が高いので、從つて姿がすつきりとしてゐて、面立が美人系らしい中高な輪廓を有つてゐる少女であつたが、今では某銀行の重役の次男の許に嫁してゐるとの事であつた。兎に角、平和な幸福な日を送つてゐるのだ。中野信太郎が令孃の事と云ひさへすれば、何によらず熱中して辯舌を振つた事が微笑ましく思ひ出されて、こんな事にも純一は慌しい歲月の推移を感じた。信太郎は既に二人まで子供があつて、幸福な家庭を作つてゐるらしい、そして先頃では、話の分る女友達を得たとかで、いかにも現在の生活に滿足してゐるらしい。純一から見れば、信太郎のさうした濱邊の波が一つ一つ跡を消して行くやうな、こだはりのない安らかな生活態度は、微笑を誘ふのではあつたが、また一面には、彼の方が自分よりも生きて行く上に於て惠まれてゐるのだと考へられるのであつた。

坂のあたりは多少は變つてゐた。工場は同じ位置にはあつたが、すつかり改築されて、坂の上の細谷氏の家には應接室らしい小さな洋館が玄關脇に見えた。

純一が通されたのはその新しい應接室であつた。八疊位の廣さで、室の一隅にはピアノが一臺置かれてゐた。片側の書架には、この家で出版した、どつしりした大版の經濟大辭典を始め、經濟や實務に關する澤山の出版物が並んでゐた。

「やア、お待たせしました」と言つて、細谷氏が、巻煙草の箱を片手に持ちながら、親しさうに聲をかけて入つて來た。

「隨分久し振りでしたナ、かれこれ十年にもなりますかナ。あなたはすつかり見違へましたナ」と言つて、卓の上に置いた巻煙草入を純一の方にすすめながら、

「いや、私も老いましたわい、自分一人ぢや若い氣でゐるけれど、あなたなどを見ると、新しい時代と云ふ事が感じ

られて、矢つ張り自分の時代の去つた事を思ひますね」
細谷氏の横顔には、さすがに五十年配の人のさびた面影があつた。けれども話し聲も元氣で、眼にはまだ輝いてゐる若さがあつた。それが此人をいかにも野心家らしく見せた。
純一が林田先生からの言傳てを述べたり、自分の今度の詩集出版についての禮などを述べると、
「いや、そんなに言はれると反つて恐縮しますよ、もつと立派な本にして上げたいのですが、いろいろ思ふやうにならないで氣の毒だと思つてゐるんです。何しろ文藝物はこれ迄餘り手にかけた事がないもんですからナ。然しまあ本になるだけで滿足して下さい。然し、紙だけはいい紙にしませう、紙の悪いのは厭やなものですからね」と言つて、卷煙草の灰を落しながら、
「然し、あなたもよく東京で今迄やつて來られたですナ、隨分骨の折れる事もあつたでせう。然もあなたはかうして詩集を著述なすつたのは、滿足でせう。家の娘があなたの『日本文學』に書いた詩を愛唱してゐますよ、今十八になる奴で、文學が好きだとか言つて、小說をこつそり讀んで困つてゐますよ、ハハハ……」と細谷氏は潤達に笑つた
「それはさうと、中野信太郎君は、あなたのところに便りがありますかね？　あの男はなかなか才子でしたね。自然主義を大いに罵つて、僕と大いに共鳴し合つたんですが、議論と實際とは別と見えて、今嫁いてゐる姉娘に、なかなか名文の手紙をくれましてね。なに、大して悪い事をする男ぢやないとは思ひましたが、何しろ此方は娘の身ですから、間違ひがあつては困ると思つて、一寸骨が折れましたよ。先生、どうしてゐます？」
純一が、その友が既に妻帶して、子供のある事を話すと、
「ホウ……そりやいい事だ。いや、ああ云ふ男は極めて無事に行くものです。だが、あまりえらくはならない、器が小さいですからナ」

こんな話の後で、詩集の裝幀其他の相談がすんでから、細谷氏は不圖思ひ出したやうに、
「ところで、君は今御多忙ですか？ 若し、暇があるんでしたら、少しお賴みしたい事があるんですがね」と訊いた。
純一が自分に出來る事なら引き受けてもいいと答へると、
「お願ひが出來るなら大變好都合です。實は僕の鄕里の男で、渡邊虎造と云つて、元代議士ですがね。此の男は大變な變り者で、若い時から政治狂でして、其の爲めに產を破つた位ですが、たうとう一度國民黨から代議士に出ましたが、其後は落選ばかりして餘り振ひませんが、矢つ張り鄕里の方で縣會に出たり何かしてゐましたがね、さア、もう五十四五歲でせうナ。元氣はなかなかいいんですが、先頃から胃癌に罹つて、その爲め大學病院の診察を受けに上京したとか言つて、四五日前訪ねて來ましたが、その際の話に、先生、變つた人物だけに、自分の餘命も既に幾何もないと信ずるからして、此際、平素の主張である『自死自葬論』を著述出版したいと云ふ意向で、それに就いて、自分の意見を誰か文章のうまい人に聞いて貰つて、一篇の論文に書き上げて貰ひ度いと云ふんです。君にお賴みが出來れば當人も大變喜ぶでせう」
「自死自葬論と云ふのはどう云ふ事でせうか？」
「僕もよく知りませんが、兎に角、その字に示す如く、自ら死に自ら葬ると云ふ主義でせうナ。なに、あなたがやつてくれるとなれば、ウンと說明して聞かすでせう。此間僕もいろいろと聞かせられたんですが、なかなか面白いところもある代り、譯の分らん奇拔すぎる點も少くはなかつたので、兎に角出版して世に問うて見るのもよからうと挨拶して置きましたがね。何だか急いでゐるやうでしたから、丁度あなたが見えられたので、丁度いい工合だと思ひましてナ」
さう言つて細谷氏は、不圖思ひ付いたやうに女中を呼んで、

「工場へ行つて詩集の校正が出てゐるやうであつたら持つて來てくれ」と命じた。
「さうですか……では僕が歸りにお訪ねして見る事にしませう」と純一は言つた。
「歸りに行つてやつて下されば何よりです、渡邊へは今僕が紹介狀を書きますから、まあ會つて話を聞いてやつて下さい、一寸變つた男ですから會つて見るのも面白いでせう」かう言ひながら細谷氏は手早く紹介狀を認めてくれた。
校正はまだ出てはゐなかつたので、純一はその儘辭し去つた、
「自死自葬論とは面白い」と途次純一は思つた、「その男はどんな事を言ふのだらう？　兎に角餘命幾何もないと自ら信ずる人の、是非書き遺したいといふ意見なのだから、そこには何か自分の胸に觸れるものがあるに違ひない」と純一は、やや昂奮する程の期待を覺えた。
下谷黑門町の停留所で電車を下りて、少し行つたところの横町を半丁ばかり行くと、このあたり一帶の廢れたやうな古びた構への家の並びに、越後屋旅館と云ふその旅館は、石の門の奥の方にあつた。
胃癌だと云ふからには、痩せて骨立つてゐる蒼白い、陰鬱な人物であるかと思つてゐた豫想を裏切つて、純一の通された部屋には、五十年配のでつぷりした赭ら顔の、赭い口髭のもぢやもぢや生えた人物が、いかにも老書生と云つたやうな趣で彼を迎へた。
「や、よくこそ……さ、どうぞどうぞ」と言つて、彼は座蒲團をすすめてから、ポンポンと手を拍つて、遠くで返事する女中の聲を聞いてから、
「拙者が渡邊虎造でがす、どうぞ今後御懇意に願ひますぢや」
そこへ女中が入つて來て、
「お呼びでございますか？」と訊くと、

「ウン、一つ旨(うま)い物を持つて來てくれんか、何か見合はしてナ……」
「畏まりました」とその女中は退いた。
「して、あなたは今何處の學校に勉强してゐられますかナ、帝大ですかナ、早稻田ですかナ？」
純一が學校には行かないで、自活してやつてゐる事を手短かに述べると、
「フン、成程、成程、お若いのになかなか感心ぢや。拙者も、獨立獨歩には頗る賛成ぢや、男子は須らく獨立獨歩すべし、婦女子の態を學んで、權門に媚び、富豪の駙馬となり、節を賣つて一身の榮達に汲々たる當世の輕薄才子の如きは、男子の共に齒すべからざるの徒ぢや。多年苦節を守つて動かざる我が黨の犬養總理の如き人物こそ、まことの人物なのぢや。その點で細谷氏なども、獨立獨歩、多年辛酸を甞めて今日の地位を築き上げた點で、なかなか見上げた男ぢや」
女中が菓子盆と茶道具とを持つて入つて來て、お茶をついで行くと、
「さ、どうぞ一つ、取つて下さらんか、わしは病氣で甘いものは食べられんのぢやから、どうぞ遠慮なく……」と渡邊は純一をもてなしてから、
「萬事細谷氏から聞かれた事と思ふが、わしのお頼みしたいと云ふのは、わしの話しする事を、一つあなたの明快なる頭腦と縱横の才筆とを以て、條理正しい大論文に書き上げて貰ひ度いと云ふ、かう云ふ願ひでありますのぢや、一つ御盡力を願ひたい」
彼は病人とは思へない程しつかりした、腹の中から太く出て來るやうな聲で言ふのであつた。
「御覽の通り、一介の老書生であるから、十分の報酬も差上げられぬかも知れんが、それも細谷氏に萬事委してあるによつて、左樣御承知願ひたい」

純一はから云ふ人から報酬などを貰はうとは思はなかつたので、

「いや、そんな事は……」と輕く挨拶した。

「ところで、此の思想と云ふのは、殆んどこれ迄類の無い破天荒のものであるによつて、社會にどれ位の反響を喚び、またどれ位の攻擊反對を受けるか分らないが、兎に角これはわしの多年の抱負でありますのぢや。實は今度當地へ出て參つて、大學病院で診察をして貰つた結果、どうやら胃癌と云ふ宣告を受けましたのぢや。そこで再び起つ能はずと決しました曉には、乞ふ先づ隗より始めよで、先づわし自身その說を實行する所存でありますが、それに先立つて、先づわしの此の主張を一小册子に印刷して、廣く社會に問ひ、世の識者の一顧を乞ひ度いと云ふのが、これが拙者の唯一の志望なのぢや。で、此の自死自葬論と申しますのは、極くつづめて申し上げると、先づかうぢや。一體、日本の習慣には、極めて繁文縟禮な、不經濟極まる虛禮が多いが、就中、かの葬式などと云ふものは、全く忌むべき虛禮に過ぎんので、死者の爲めに遺族が莫大の費用をかけて、葬式を盛んにするのを以て、死者に對する禮儀と心得てゐるのが、これ先づ第一に誤りぢや。またその葬式に集まる者共も、多くは義理で顏出しをすると云ふだけの事で、全く以て僞善的の行爲に過ぎんのでして、かうした事の爲めに各自多大の經費と時間とを空費するのは、甚だ以て國家の爲めに宜しくない事ぢやと、かねがね此の拙者は思つてゐた次第なのぢや。また、單に葬式のみならず、わし等の國の方ではとりわけ甚しい事ぢやが、墓地を立派にして、巨大な石碑を立てるのを以て一家の名譽となし、左樣な虛榮のために貴重なる財寶を徒費して、ひいてはお寺に莫大の喜捨をして見榮を張り、一家の格式を保つ所以ぢやと盲信するのに對して、坊主の方では不埓にも出來るだけ澤山の金を檀家からふんだくつて恬として恥ぢざるが如き氣風の存するのは、國家の將來に取つてまことによろしくない事ぢやと拙者は慨嘆に堪へんのぢや。勿論、死者を尊崇し、祖先崇拜の美風を蔑ろにせぬと云ふことは、人間自然の性情として、またとりわけ我が國傳來の美德として甚だ喜ぶ

べき事ぢやが、されぱとて左樣な表面上の虛禮にのみ專らにして、その精神を忘却するが如きに於いては、必ずや死者に對する禮に非ずと信じますぢや。心中に深く故人の遺德を銘し、身を以て故人の遺風を繼ぐと云ふのが、これが本當の死者に對する禮ぢやと拙者は考へる。そこでかやうな虛禮を一切廢して、死者は一切一身上の處置を獨力以て行ひ、遺族に迷惑をかけぬ事にいたし、遺族もまた死者の爲めに虛禮を行はずと云ふのが、拙者の多年の主張なのぢや。

殊には、不治の宣告を受けた病人が、再び社會に對して何等の貢獻する能はずと決した以上、徒らに病苦の軀殼を橫たへて、家族の迷惑を顧みず、旦夕の生を貪るが如きは、淺猿しいと言はうか未練なりと言はうか、言語道斷の不所存ではござらぬか。社會國家の爲め何事をも爲す能はず、徒らに近親緣者に迷惑をかけ、自分も病苦に苦しみながら、徒らに生きながらへてゐると云ふ事は、ただ是れ小人の無知の妄念の致すところに過ぎんと斷じて可なりぢや。ここに於て、我輩の自死自葬論を廣く天下に徹底せしむるのが、必ずしも無用の業でない所以もまた明白である。論や奇矯に似たりと雖も、前述の如き不所存者の多い當世に於いては、まことに一世を警醒するに足る名論卓說ぢやと、まア、拙者自身は確信してをる次第でごわす」と言つて、渡邊は部屋の隅に置いてあつた旅行鞄の中から一束の書類を取出して來て、その中から四五枚の罫紙を綴つたものを拔き出して、それを純一の前に開いて、

「大體の綱領はこれに書いてがすが、どうも文章と云ふものは經國の大業とも云はれる通り、なかなかむづかしいものでしてナ、その點は一切あなたにお委せ申すからして、適宜に文飾して頂きたいと考へるのぢやが、つまり、わしの特に力說したいと云ふ要點は、最早や起つ能はずと宣告せられた病人はですナ、もうさうなつて生きとつたところで、自分にとつても他人に取つても何の利益も意義もごんせん、それ故そこは達人の悟脫を以て、自ら進んで死ぬべしぢや。ところで、陸上で自死したんでは遺骸が人の邪魔になる、どうしても葬式せんぢやならん、然るに海中ならばそんな事を要らん、海中がもとこれ大なる自然の墳墓ぢや、そこで一隻の船に搭じて、海中遠く乘り出して行つて、

そこで潔く自ら葬るんぢや」と演說口調で昂然と言ひ放つて、老政客は深く息をした、「卽ち、ここのところぢや、この大丈夫の覺悟が出來んでは、苟くも一個の人間として將さに天に恥づべしぢや」

純一は彼の言葉にも態度にも、滿腹の決意と熱誠とが籠められてゐるのを感じ、その眞率の氣に打たれて、かうした唐突な自死自葬論の要旨を深く感動して聽いた。

「私としても、その御說には共鳴を感じますから、御滿足なさるやうなものも出來ますまいが、兎に角出來るだけ骨折つて書いて見ませう」と純一は彼に言つた。

「何分賴みますぢや、それさへ出版されれば思ひ遺すところ更にござらん、乞ふ先づ隗より始めよ、我輩からして自死自葬を實行しますぢや」と渡邊はそれが旣定の事實であるかのやうに、極めて平然と言ひ切つた。

純一は赭ら顏の老書生が心の底から滿足したやうに、確信を以てかう言ふのを聞いて、此人は實際その所論を實行する決心を定めてゐるに違ひないと感じた。さう感じながらも、その感動の底から一種悲痛なユウモアを感じないではゐられなかつた。

ところで、その夜歸つて來て、渡邊虎造の書いた覺え書を開いて見て、もう一度彼の言つた事を回想すると、彼はその人物と云ひその話と云ひ、凡てが茫漠として、妙にとりとめのない空虛な感じさへして、何から書いていいか分らなかつた。けれども、その茫漠とした中に、何か彼の心の底の何物かに相觸れるもののある事を感じた。彼は自分の考察をそこから始めなければならぬ强い要求が、自分の心の底から湧き上るのを感じた。

七

純一は自死自葬論の稿を起して、幾びもその草稿を破つた、彼には一種の謎の如く落ちかかつて來た此の思想、此

の主張に、眞劍に考へ込んで行く時、彼は彼自身の當面の問題――藝術や社會運動の意義から延いて人生の根本疑に、彼の考察を掘り込んで行かずにはゐられなかつた。自死自葬論者である渡邊虎造に取つては、この主張は專ら功利的根據から立てられ、また功利的な目的を有つてゐるのに過ぎなかつたが、純一が筆を着けて見ると、どうしてもそれを單に功利的根據のみを以て立論したのでは十分でないと思はれた、それだけでは餘りに卑近で且つ薄弱に見える心配があつた。彼は渡邊虎造の所謂達人の悟脫、大丈夫の覺悟からして說き始めようと決心した。そこで彼は先づ第一に自殺といふ行爲の倫理的意義について、哲學的の考察を下さなければならない必要を感じた、そしてその結論は勿論自殺の肯定でなければならない。

彼は近年の心の苦悶――苦々しい懊惱が、此の考察に宛かもいいはけ口を見出したやうに、湧き寄せて來るのを防ぎ止める事が出來なかつた、宛かも、潔く生を一擲するのが生の最も高潔な事柄であるといふ彼の年來の悲痛な傾向が、今やその哲學的倫理的な根據を見出す事の機會を得たのを喜び勇んで、躍り上るかのやうに。

「最早や起つ能はずと宣告せられた病人はですナ、もうさうなつて生きとつたところで、自分に取つても他人に取つても何の利益も意義もごんせん、それ故そこは達人の悟脫を以て、自ら進んで死ぬべしぢや」と言ひ切つた時の渡邊虎造の顏には、男らしい果斷と決意とから來る英雄的（ヒロイック）な美しさがあつた。彼自身の失敗に終つた前半生の政治的奔命、現在の不治の疾患を背景としての此の達觀的言議には、十分に純一の心を鼓吹（インスパイア）するものがあつた。然し、彼の感情の高揚は、直ちに彼の冷靜な推究を妨げた。

「別に至急とも言はなかつたんだから、もつと考へて見て書くことにしよう、いゝ加減に書いたのでは、あの人の誠實に對してもすまない」と純一は書きかけの草稿を見ながら、彼の靑白い面を垂れた。

彼の詩集『裂けた靑絹』が菊半截版の假綴（かりとぢ）の何の飾りもない小册子としてたうとう出來上つた時、あの初めて校正

刷を見た時の喜びとは引きかへて、不思議にも彼の心は殘灰のやうに白けてゐた。それは一日千秋の期待にすつかり疲れてがつかりしたからと云ふよりは、寧ろ何遍も何遍も飽かず繰返して校正刷を讀んでゐるうちに、自分の詩が全く下らない無意味なもののやうに考へられ出して來たからであつた。一般的に詩そのものが下らなく思はれて來たのだ。彼の心は最早や處女のやうに喜びを奏でなかつた。反對に、こんな詩集なんか出さない方がよかつたのではないかと彼は思つたのだ。細谷氏から十部ほど貰つたのであるが、彼は氣輕な氣持で、その詩集を知友に頒つ氣にはなれなかつた。けれども、白い羅紗紙の上に、『裂けた青絹』と二號活字で青く刷り出されたその題名を見てゐると、彼はこれこそ自分にふさはしい本なのだと思つた。此の詩集は、宛かも小さな流れの岸に、ありなしの影を落す、名も無い花のそれのやうだ。こんなに芽生えて、こんなに花となる迄の日は、何の慰めもなかつた上に、やうやう花瓣を日の光に打ち開いても、誰れの眼にもとまらないのだ。それを思へば、此の厭はしい出來損ひの子供も、それが醜いだけ、それだけ一層あはれに可哀相に思はれるのだ。然し、それがこの詩集には相當した運命であるに違ひない、それでいいのだ、自分にはそれでいいのだと彼は思つた。

「然し、自分も詩人である。自分の名も他日或ひは好事家の口に上るかも知れない。人は運命に虐げられて貧しく死んだ哀れな詩人として、一生を夢より夢に轉々として終つた滑稽な痴人として、自分のために泣き且つ笑ふかも知れない。十年、或ひは何十年かの後、サント・ブウヴやマシュウ・アーノルドが――丁度彼等がセナンクウルやモオリス・ド・ゲランを發見したやうに――忘却の墓の中から自分を喚び起してくれるかも知れない。それはどうでもいい。自分が何でそんな事を賴みにしよう」

純一は餘り多くもない友人の中から、とりわけ自分に愛をもつてくれる友達の名を次々に署名した。第一に彼は相良元雄の名を書いた。元雄が此頃思ひがけなくよこした手紙によれば、彼は此頃詩を作つてゐた、「此頃は身體の工合

か惡くて繪も書けないので、詩を作つたから見てくれ」と言つて、二三篇の詩を書いてあつた。純一はその詩を讀んで感動した。以前からの元雄が詩人の素質を多分に有つてゐる事は認めてゐたが、今かうした悲痛な詩を書いてゐる彼に、自分の詩集が讀まれると云ふ事は、純一には好もしい事であつた。その次ぎに純一は舊友中野信太郎の名を書いた。此方からの一通の手紙に對して、二通三通の手紙を惜しまぬ彼の筆まめな性分からは、この詩集を受取つたならば、どんなにか喜んで、丈餘の手紙を以て細評してくれるに違ひなかつた。信太郎は飽く迄も純一に對して一日の長を以て任じ、彼を鼓舞激勵して止まないのだ。それを思ふと、純一は半ば感謝の心からの微笑が浮ぶのを禁じ得ない。

朝川の名前は書く事は書いたが、まだ彼からの手紙が來ないので、何處に送つていいか分らなかつた。哈爾賓に着いたら直ぐ、手紙をよこすと言つてゐたが、途中で何處へ寄つてゐるかも知れなかつた。最後に、彼は前河の名を書いた。

「西尾宏に送つたものだらうか？」この疑問は本を受取つた時から、彼には一寸宿題になつてゐたのだ。かの華やかな出版祝賀會の席上で配布された彼の詩集『樂園の曲』は、現に純一の乏しい書籍の中に一個の銀の燭臺のやうに燦めいてゐる。

「詩集なんてどうせ贅澤品なんだから、出來るだけ感じのいい立派なものにしなくちやいけない、僕は出來る事なら全部羊皮紙にして、金で活字を出したいのだ。それにただ活字にしたといふだけのけちな見窄らしい詩集なんか出す男の氣が知れない」と西尾宏は何かの機會に言つた事がある。純一はこの自分の詩集が彼の所謂「ただ活字にしたといふだけのけちな見窄らしい詩集」だと考へて、苦い笑ひを浮べた。

「然し、兎に角、彼は鋭い眼をもつてゐる、時々ずばりと言つてのける彼の印象批評には、相手の急所を突くものがある。彼が友人を虐めて快とするのも、さうした機才を自ら享樂するものに過ぎないのだ。相手を不快にするだけそ

れは適確なのだ。彼には他人の弱點に妙に敏感なところがある。だが、彼がこの詩集を見て何と言ふかは興味のある事だ。或ひは讀んではくれないかも知れないが、讀んだら何とか言ふだらう」

純一は宏に送る分も小包に包んで見て、宛名を書く迄にして、ふと、「これは持つて行かう」と呟いた。彼の心には宏の口から聞きたい事があつたのだ。會の時、宏の言つた事が彼の心に根を張つてゐるのだ。宏の言つた言葉によれば、もうこの東京に彼の嫂がその良人と共に來てゐる筈ではないか？……純一はこの事を考へると、身體が妙に硬くなるのを感じた。苦しい期待、惱ましい望み——この逢つて見たいと云ふ望みは——この危險な望みは、宛かも魔女の煮る鍋の中に現れてくる泡沫のそれである。

その日の午後、四五の小包をもつて宿を出た純一は、途中の郵便局で市内や故郷への書留の薄い受取證を四五枚受取つて、それを小さく疊みながら、

「だが、矢張り小包にして送つてやらうか」と考へ直した。彼は自分が西尾宏のただ一言のために惹かれて、宏の指頭に自分の生涯の重大事を委する事が、腑甲斐ないものに見えて忌々しかつた。或ひはそれは宏のその時の氣まぐれな間投詞同樣のもの、宛かも餌をかけた釣針のやうなものかも知れないではないか。彼の兄が新聞社經營の準備に上京すると云ふ事は事實かも知れない、けれども彼女が良人と共に上京すると云ふ事は——純一は此の場合、中野信太郎からの度々の手紙で聞いてゐる、西尾若夫人は幸福ではないさうだと云ふ言葉を思ひ出した——どうも領き難い氣がするのだ。夫婦連れ立つて上京すると云ふ事は、彼等の幸福を裏書きするのでないとどうして言へよう。また、若し彼等が幸福でないならば、彼女がその良人に同伴する筈はないと思はれるのだ。

「なぜ自分はこんなに心の平衡を失つたのだらう？」と純一は考へた、「逢つて見たいと云ふ此の心持——丁度火のついた火繩のやうに焦げて來る心持、此の沸き亂れる感情を揉み消してしまふ事がなぜ出來ないのだ？　それでなけれ

は、少くとも、なぜこの事を忘れてしまへないのだ？　逢つて見てどうしようと云ふのだ？　それでも逢はなくてはならないのか？」

彼は心を縒り捻られるやうな苦惱に陷つて行つた。西尾宏の皮肉な顏が眼の前にちらついて、「君は弱いなア！」と憫れむやうに意地惡く覗き込むのを感じた。

畫家ばかりでも此の附近に八十人近くゐると云ふ田端の、それ等の一部の人達の娛樂の爲めに設けられてゐると云ふポプラ倶樂部の前を小半丁行つた左側に、板圍ひの新しい住心地のいい家が、幸福さうなそれぞれの生活を仄見せてゐる一つの門に、西尾宏の門札がかかつてゐた。その門前には一臺の俥が、いかにも今にも門内から出て來る客を待つてゐると云つた風に置かれて、若い車夫が向ひ側の畫室を控へた家の生垣に添うて立つてゐた。その車夫がふと此方に振向いて、矢張り此の門に入る人だナと云ふ顏付をしたので、純一は妙に氣まづいやうな心持がした。

門の戸を開けて入ると、袖垣の上に見える客間には、此方向きになつて客に對坐してゐる西尾宏の上半身が見えた。彼は此方を向いて、「やア」と云つたやうな目付を見せた。客の聲は純一に直ぐそれが誰れであるかを思ひ出させた。「笛のやうだ」と誰れかの評したその男は、聲は一度聞いた者には忘れられないものである。西尾宏の出版祝賀會の時、頻りに如才なく振舞つてゐた鶴見藻太郎といふ男であつた。

何處かの本屋の番頭か雜誌記者かが原稿でも賴みに來てゐるのかと思つたら、鶴見なのだ。なぜ俥なんかで來たんだらうと純一は思つた。玄關には十五六になる男の兒が、小さな机をひかへて、何か本を讀んでゐたが、純一を見ると玄關番の役目をした。

「ずつと上つてくれたまへ、差支はないから……」と宏は部屋の方から聲をかけた。

「僕にはお構ひなく……」と鶴見が如才なく純一を迎へて、席をゆづるやうに場所を開いた。外からは見えなかつた

が、向うの方の隅に一人の文學靑年らしいのが、身がひけるやうなすわり方をして、西尾と鶴見との何か面倒な對談を今迄聞いてゐたやうであつた。

「君は短篇作家と云ふよりも長篇作家だよ、僕はさう思ふよ。此前君が自費出版した『麗人の許へ』なんか、僕はいい作品だつたと思つてゐる、あれがもつと認められなかつたのは不思議だと思つてゐる。僕は愛讀したんだよ。だから今度なんかも、片々たるものを書いて、譯の分らない月評家に何だかだと言はれるやうな事をしなくつてもいいぢやないか。長篇時代が今に來る事は確かなんだから、君も長篇を書く事だね、長篇だと月評家の手は屆きやしない、賣れさへすりやいいんだからね」と西尾宏は好意とも取れ皮肉とも、取れるやうな調子で、鶴見に言つた。

「全く長篇小說を書く事ですね！」と傍らの文學靑年が感激したやうに言つた。

「そりや旨く行けば長篇小說がいいね、金は纏つて入るし、月評家には叩かれないと來れば、それに越した事はないからね。何より早く金にしたいんだ。ぢやその長篇の方を一つ新星社か紅毛書房かへ話をつけて見てくれないか、話が纏まりさへすれば書くのは直き書けるんだ、田岡のやうに一月に最低六百枚は書けると云ふ程の豪傑ぢやないがね。あの男、今一萬五千枚の大作『大宇宙人』をもう脫稿して、原稿料五千圓からは一文もまけないと言つて方々に交涉してゐるさうだ、そしてその條件が面白いよ、出版は百年後でもいいが、金は一分おくれても困ると云ふんださうだ、尤もあの男は今困つてゐるんだから無理もないがね……」

「えらい人があるもんですね、その精力だけでも僕は尊敬します」と文學靑年が純な氣持で驚いてゐる。

「ぢや君よろしく賴むよ、僕は田岡のやうな事は言はないからね、どうぞ賴むよ、君が一言口添へしてくれれば纏まる事疑ひなしだよ。ねえ、どうぞ忘れないで話してくれ給へね。それから二三日中に是非遊びに來ないか、此頃家へ輝方門下の美しい閨秀畫家が遊びに來る……何だか君に引合せたい人もあるさうだからね。」

「ぢや、諸君失敬ッ！」彼は宛かも腕白盛りの男の兒が諸君失敬ッと叫んで、目のところに手を擧げるやうな感じの立上り方をして、玄關へ出て行つてから、

「ア、先刻の風呂敷を一寸……」

「ア、今度からあんな事はしないでくれ給へ、此方からは何も出來ないんだから困るよ」

「いや、なに……」

俥に乘る氣配がして、やがて行つてしまつた。

西尾宏が席に歸ると、

「君は知らなかつたかね、あの男を？」と純一に訊いた。

「一度も話をした事はないが、噂は聞いてゐるし、それに君の會の時に見たと思ふ」

「ア、さうだらう。何處かの雜誌へ小說を持つて行くのに、一つ君折紙をつけてくれないかと言つて來たんだがね、もう既に文壇の老大家山崎黑村氏の序文を貰つてゐるが、それに僕の跋文が貰ひたい、さうさへすれば何處の雜誌社でも喜んで載せると云ふ目算なのだ。さう言つて賴まれたんだが、僕としては困つてね……だからさう言つてやつたんだ、君と僕とは同じ時代に文壇に出て、その文壇的地位だつて甲乙はないんだから、今僕が推薦すると云ふのも變なものだらう。それに僕は讀まないで御座なりを言ふやうな無責任な事は嫌ひだからね。それでも強つてとの事なら、そりや批評をしてもいいが、さうなると自然君の痛いところにも觸れなくちやならないと云ふものだ、と、かう言ふと、鶴見は閉口したやうな顏をして、いつの間にかその原稿を引込めてしまつた。もつと押強く出れば、此方からもウンと言つてやるつもりだつたが、ああ見えてゐてその實馬鹿に氣の弱い男なんだ、その點は氣の毒だよ。然し、それにしても隨分面白い事を考へるぢやないか、單行本なら兎に角、雜誌の原稿に序文や跋文を付けようと云ふんだか

らナ、何處か變だよ、第一今頃折紙付で押出さうなんて考へるからしてね……僕なんぞも變な折紙を付けられて閉口してゐる、その癖あんな途方もない推讃の辭を書いてくれた巖本閃光氏が眞先きに、此頃僕をこきおろしてゐるさうぢやないか」

「何だかそんな風ですね、どうしたんでせう？　此間推讃の辭の辯解の辭をあの人は書きましたね、推讃したり辯解したり隨分巖本さんも多忙ですね」と文學靑年がそれを言ふだけでも心の平靜を失つたやうな調子で、何だかドキドキするやうな顏付をして言つた。その樣子ではこの若い純な心にも、巖本閃光の『西尾宏推讃の辭』は毒のやうにその血を濁してゐる――これと同じやうに、何萬といふ靑年の血にこの毒氣が廻つて行く！　巖本閃光は、何と云ふ名文を書いたことであらうと、純一は嘵嘆した。

「實にすみませんが……」と文學靑年は懷から原稿の一綴を取出して、西尾宏の前に置いた。

「いつかお暇の時に讀んで下さいませんか、まだ未熟なもので僭越なお願ひですが、いつでもよろしいんですから、何か一言でも言つて頂けたらと思ひますから……」後は十分聽き取れないやうな聲で、靑年は西尾宏に賴んだ。

「君は伊田君にこれ迄も見て貰つてゐたんぢやないんですか、僕よりも伊田君の方がずつと鋭い批評眼を有つてゐますよ」

「いや然し……どうぞお願ひします」かう言つてその靑年はいかにも世馴れない樣子で、そわそわと歸りを急いだ。

「君の詩集が出たやうだね、一冊貰ひたいが……」と西尾宏は突然純一の方に向いて言つた。

「持つて來てゐる、本になつて見ると自分でもつまらない氣がして、誰れにも見せ度くない位なんだが……」と言つて、純一は持つて來た詩集を間に置いた。

「こんな小さい本にしたのか……僕は四六版だとばつかり思つてゐた、恐ろしく粗末だね、丁度基督敎の宣傳用に配

るパンフレット見たいぢやないか」と言ひながら、宏は手に取つて、眞中どころを開いて見て、
「ひどく詰込んでしまつたナ、何だか君讀みにくいよ、ラインとラインとの間がこんなに狹くつちや、目がちらちらして、疲れるよ。それに詩は一つ一つ獨立して鑑賞しなければならないんだから、一篇毎に頁をかへて置いて貰ひたかつたなア、それに活字もひどく汚ない、なぜポイントにしなかつたんだ、何と云ふ本屋だ、これは？　馬鹿にけちな本屋だナ、詩集なんてものは感じのいい立派な本である事が何よりだのに、惜しい事をしたね、これでは折角の君の詩も臺なしだ……」
　歸らうとしてもぢもぢしてゐた文學靑年は、此時氣の毒さうに純一を見た。純一はこれ等の豫期してゐた宏の言葉には左程不快を感じなかつた。
「僕にはこれでいいんだ、僕はこんな粗末な本が反つて自分の本としてふさはしいと思つたので、寧ろ自分から進んでこんなに定めたと言つてもいい位なんだ。本を見て貰ひ度いのではなくて、詩を讀んで貰ひたいのだからな」
「そんな事を考へるのは、君が詩人としての感覺の一面を缺いでゐるのぢやないかと疑はせるね。詩は實に微妙なものだよ、詩は最もデリケエトな感覺に訴へるものだから、本が汚なかつたり、活字が惡かつたりすると讀みたくないものだ。しつとりしたアートペエパアとざらざらしたラフとの手ざはりを比較して見給へ、僕はそんな本なら敢て出さないね」と宏は言ひ切つた。
「君ならさうだらうとも、君はさういふ感覺もデリケエトだし、またさう云ふ趣味の滿足も容易に滿たすことの出來る境遇を惠まれてゐる人だからね。然し、僕にはそんな事は考へる事さへ許されてゐないのだ、僕はこの詩集をかうして出してくれただけでも出版者に感謝してゐる……」
「……………」

宏が何も言はないので、一座は白けた。妙に間の惡くなつた靑年は、もう一度西尾宏に原稿を讀んで置いてくれと賴んで辭し去つた。

「君の詩には案外愛讀者があるね」と言つて、純一の詩集を方々開きながら、宏は妙な氣分を切り拔けてしまつた。

「此間家へ來た女學生が君の詩を誦じてゐたよ、どの詩だつたかナ、何でも秋を歌つた斷片の詩だ、僕もあれは好きだ。この詩集をもう一册くれないか、實はね、嫂にやるんだ、君も知つてる通り、君の詩の愛讀者さ、勿論やつてくれるだらうね？」

「……持つて來よう」と純一は答へた。

「もう來てゐるのだ、宿は築地の水明館さ、昨日一寸行つて見たがね、兄貴は早稻田の大隈伯を訪ねて、庭園拜觀をすまして、例のあるんであるの長廣舌を拜聽して來たらしいんだ、新しい新聞經營法に就いて大隈伯はどう言つたかう言つたと、一人で悅に入つてゐたよ。すると嫂が堪らないやうなうるささうな顏をしてゐたのが今でも目に着くよ」

純一は思はず耳を傾けた。彼は宏がもつと敏子について澤山の事を聞かしてくれればいいと思つて、心を惹かれた。

「兄貴も敏子さんについては、兄貴なりに苦勞はしてゐるんだ。そこは惚れたが弱身だ、君は知らんだらうが、先々月敏子さんが家出をしてね、何だのかだのと悶着もあつたが、やうやうの事で連れて戾つた。さう云ふ事件があつたものだから、兄貴が今度の上京に連れて來たのも御機嫌取りが一つと、もう一つは、どうも敏子さんの身體の工合がよくないので、大學病院か順天堂病院かで診察して貰ふと云ふ目的なさうだ。僕が見ても何だか面變りしてゐるやうなところがあるから、何かの病氣があるのかも知れんナ」

純一は息を詰めて聞いてゐた。宏の口から新しく聞くさうした事が、彼には一つも不思議ではなく、十分の理由があつてさうだと彼は考へるのであつた。

「敏子さんも氣の毒なら、兄貴も氣の毒だ。最初からいい工合には行かなかつたんだ。いつそ別れちまつた方が二人とも幸福なんだらうと思ふんだけれども、兄貴はあの通りの痴人だし、未練はあるし、敏子さんは義理やら何やらに犇々と絡まれてゐる人だから、此分では何度家出しても引張り戻されてしまふばつかりなんだ。僕から見れば、賢いやうでもそこが女の愚かさだ。君の事はいつもよく噂を聞きたがつてゐるから、近々に僕が屹度機會を造るから、逢つて話をしてやつた方がいいナ。兄貴の思はくなんか、どうせ構はぬさ、僕はさう云ふ意味での同情は、兄貴に持つてゐやしない」と西尾宏は言つたが、純一にはぞつとするやうな恐ろしいものが、その宏の言葉の裏に感ぜられた。

八

息が詰まる、息が詰まる……

左右からじりじりとせり出して來る。ギザギザした岩の壁がせり出して來る。暗い巖窟のやうなところで、逃げて行く事も出來ないのだ。ただ、一分一秒の虞れを以て、身を窄め、足を爪立て、硬立するばかりなのだ。せり出して來る速力は緩いが、それが緩いだけなほ恐ろしいのだ。こんな感じで、全身を冷たい汗に濡らしながら、純一は長く聲を曳いた。そしてその悲しげな呻きの聲が、自分の口から發せられたのだと云ふ事を、彼は朧ろ氣に感じた。やうやうに氣が付いて見ると、胸の上に自分の手を載せてゐた。そこは丁度心臟の上で、その手の下であはれな心臟は、怯えたやうにドキドキと躍つてゐた。

「苦しかつた！」と彼は起き上つて、思はず呟いた。その儘暫くの間ぢつとして、心を落着けてゐると、もう止宿人達はすつかり起きて、出る者は出て行き、女中達はあちこちと働いてゐた。

「餘つ程心が疲れてゐたんだ。こんなに遲くまで寢てゐたんだな」彼はややきまりの惡いやうな氣持で、蒲團をしま

つてゐると、障子の外から、
「龍田さん、先刻から女の方があなたにお目にかかり度いと言つて、帳場の方で待つてゐるんですよ、逢つてから御食事にしますか、御食事をさき持つて來ませうか、大變お疲れのやうでしたね」
「ええ、一寸……僕は顏を洗ひますから、ここの掃除がすんだら通して置いて下さい、食事はその後にしませう」と純一は答へた。
どんな女の人ですか、と普通の人ならば直ぐ訊ねるのだが、純一はとつさの間に、そんな如才が出來ないのだつた。誰れだらうと思ふと、何だか胸が不安なやうで、夢の續きの心持である。
含嗽をしたり、顏を洗つたり、急いですまして、部屋に歸つて來ると、中にはもう人の氣配がした。
「早くから參上しまして、まことに御迷惑樣でございます」から挨拶をした女は、四十恰好の色の小黑い、小柄なおかみさんで、ついぞ一度も純一の見た事のない顏であつた。
「いえ……」と純一は手拭や石鹼箱を机の上に置いた儘で、先方の言ひ出すのを待つた。
「實は甚だ突然な事で、相濟みませんでございますが、あなたは朝川さんのお引越先を御存知の事と存じますが……決して御迷惑はかけませんでございますから、手前どもにあの方の御宿所を一寸御教へ願ひ度いものでございます。實は少々宿料の殘りがございますので……なに、ほんの僅かではございますが、實は今度私どもでは他へ參りますので、自然榮進館は他の人の手に移りますやうな譯でございまして、此際いろいろと整理をいたし度いもんですから、かやうに滞りの分も出來るだけは頂戴出來るやうにしたいと思ひますので、實に……突然で御迷惑樣でございますがどうぞ御存知でございましたら、お知らせ願ひ度いもんでございます」
おかみさんの饒舌は、まだ夢心地にゐた純一を、はつきりした現實の世界に連れて來た。彼は朝川と云ふ名を聞い

た時から、氣が樂なやうになつて、頰のところに自づと笑みのやうなものが浮んでゐたのである。

「朝川君の事は僕もよくは知りませんが、今、日本にゐないと云ふ事だけは確かです」

「日本に……」とおかみさんは何を聞いたか知らと會得の出來ないやうな顏をした。

「何でも哈爾賓か奉天の方に旅立ちましたよ、むかうに着けば手紙が來る筈ですが、まだそれも來ません、むかうの住所でもよかつたら、分り次第お知らせしていいです」

「まあ、哈爾賓でございますツて、では大變遠方なところでございますね、あんなお身體の弱い方が、どうしてそんな遠方へ……」

おかみさんは意外さうに繰返した。

「家においでになつた頃から、あの方は隨分御持病持ちで、時々病氣が起つちや、注射しておゐでのやうでしたが、そんな身體でよく思ひ切つて遠方迄お出でになりましたね」とおかみさんは、宿料の事なんか置き忘れたやうな樣子で、朝川の病氣を痛ましさうに言つた。

「何ですか、あの方は隨分御自分の身體を粗末にしてゐましたね、お若いからでせうけれど……」

「哈爾賓と云へば隨分寒い處ですから、あの男の病氣にはよくないだらうと僕も心配してゐます」

「全く左樣でございますね……いや、これは飛んだお邪魔を致しました」

おかみさんはかう言つて、その用向は不得要領のまま歸つてしまつた。後で純一は何とも知れず寂しくひとり微笑つた。朝川が發つてから、附近の××署の高等視察も――その男は朝川が純一の近くにゐた時分から、始終二人の間を見廻つて、相互の事について、見え透いた鎌をかけては、何かを訊き出さうとしてゐるのであつた――彼の事を訊きに來て、矢張り同じやうにポカンとして、結局朝川の病氣を同情して歸つて行つた事をも純一は思ひ浮べたのであ

る。

朝川に就いては、彼が出發してからまだいくらにもならないのだけれど、何だかもう餘程前に行つてしまつた人間のやうに思はれるのだつた。彼の知人達凡ては、彼の持病と彼が行つた異境の氣候との事を考へて、一樣に彼に同情し、それと同時に、彼の人なつツこい面影を偲ぶのであつた。朝川が哈爾賓に行かうと決心したその心持は、彼としての棄身の覺悟であつただけに、今では誰一人彼を非難するものは無かつた。たとひ非難はしても、それは不思議にも、丁度故人について語るやうな寛容な調子を以て言はれたのである。

「住所が知れたら直ぐ送つてやらう」と純一は自分の詩集を朝川に送る事について考へた。それと同時に、西尾宏から、

「勿論やつてくれるだらうナ」と念を押された事を考へると、勿論自分がそんなに言はれなくとも、喜んでおくるあの一人の女性の手に、この詩集をおくる事が、或ひは誰れにおくるよりも一番意義のある事だと云ふ事は知つてゐるのだが、その何でもないやうに見える一瑣事が、重大な事なのだと彼は考へた。

「自分の詩集を讀んでくれる人の中で、彼女が一番よく自分を理解してくれる、それはよく分つてゐる、さうしてそれが恐ろしいのだ」

いろいろこんなに考へて見た後で、ペンを執つて、河野敏子様と彼女の名を書き、自分の名を署名した時には、純一は丁度何か大きな事業でもしとげた時のやうに、心から嬉しい氣がしたが、ふと氣が付いて見ると、そこに書かれた姓は敏子の未婚名であつた!

彼は暫くそれをぢつと眺めてゐた。長い間考へてゐたが、彼はそれをその儘にした。

彼が昨日、西尾宏の家から歸つて來たのはもう夜であつた。本を置いて直ぐ歸つて來るつもりだつたのだが、宏か

ら彼女の事を――彼女が家出した事や、彼女と彼女の良人とが複雜な關係に陷つてゐる事やを聞き、その話の後に宏が附け加へた言葉、「君のために機會をこしらへるから、詩集は君が直接渡すといいよ」と言つた事などが自分の心に與へた影響を考へると、妙に宏に自分の心持全體を手繰られてゐるやうな一種の屈辱を感じながらも、彼女に逢ひ得ると云ふ事を思ふと、さうした屈辱の感じをさへも何でもないやうに思はれて來て、彼が心にもなく長居をしてゐると、宏もまた急いで書かなければならない原稿があると言つてゐながら、丁度少しでも苦しい責任からのがれようとしてゐるかのやうに、次ぎへ次ぎへと巧みな轉換で、今度書かうと思ふ小說の筋を話したり、巖本閃光とのこみ入つた關係――あの推讚の辭が西尾宏に取つては二重の負擔となつてゐるのだ――を打明けて、こぼしたりした。純一は前から西尾宏が此頃人間がよくなつたと云ふ事は聞いてゐたのであるが、かうして會つて話して見ると、まだ志を得なかつた雌伏時代の彼からは感じられなかつた彼一流の怜悧からの溫情と謙虛とが、極く僅かだが、彼の話にも態度にも一刷毛刷かれてゐた。

來客は鶴見藻太郎や無名の文學靑年が歸つてからも二三人來た。某文學雜誌から談話筆記に來た男は、明後日の午後來てくれと言つてかへされた、主幹の手紙を持つて原稿の催促に來た某雜誌社の編輯部員は、半時間ほど二人の會話の中に交つてから、

「何分あなたのが出來ないと困りますから、是非お願ひします」と懇願すると、

「僕も書かうと思つてゐるんだが、何分今引受けてゐるのだけでも五口あつてね、これから月末までに原稿紙で三百枚も書かなきやならないッて云ふ譯だ。『中外公論』からは竹田紅桃君が每日俥でやつて來て、何のかんのと機嫌を取るので、まるで拷問にでもかかるやうな鹽梅だつたよ。やつと昨日すんだがね……今日は『改革』から取りに來る筈で、まだそれが書けてゐないからびくびくものなんだ。苦しいよ。何でこんなに苦しまなきやならないかと思ふと、

聊か癪にさはるよ」と言つて、宏は純一の方を見て微笑つた。

「それに『大阪日日』の長篇小説を引受けてゐるが、これがなかなか難物でね……」と苦澁な色が彼の面を掠めた、「鶴見には苦もなく勸めてやつたが、また鶴見には、秋雨女史と差し向ひで、ノホホンと鼻唄半分で二百枚や三百枚は瞬く間に書けようと云ふもんだが、おれには長篇となると餘程準備も要るし、材料は手薄になつたし、困つてゐるんだよ」

「それはさうでせうね、全く流行作家の苦衷お察ししますよ。然し、そんな苦しみは味つて惡い氣はしませんね」とその編輯部員はにやにやと笑つてゐた。

「おれのやうにいい物の書ける男には材料が思ふやうに集まらないし、材料を澤山有つてる奴にはやくざ者が多いし、世の中は妙なものだよ。おれもからう方々からせツつかれると、時々あの江添なんて男の材料倉が欲しくなるよ。あんなに蓄め込んでゐたつて何にもならんのだからナ……養老院でどうしてゐるだらうナ、なかなかあの男ねばり強いナ」と宏は輕く言つた。

「明日の午後僕の家へ來てくれ、連れ立つて行から、兄貴は大抵晝間はゐないから好都合なんだ」と宏は彼が取り寄せた洋食を二人きりで平らげながら純一に言つた。

純一は昨夜一晩、種々の感情の入れ亂れた苦しみに心を圍繞されて、いかばかり思ひ惱んだであらう。

「僕があの人に最後に言はれた言葉通りになつてゐない、えらくなつてゐない、それが何よりも苦しい……長い間東京で自分のした事は、ただ辛うじて生きて來た事ばつかりなのだ、文學者の混濁した集團の空氣を吸ひ込んだばかりなのだ、やくざな社會主義者の端くれになつたばかりなのだ……えらくならないばかりでなく、えらくなる筈はない事を知つたばかりなのだ。然し、自分は旣に世間的にえらくなると云ふ事が、どんなに無意義な事であるかを、十分

に悟つて來てゐるではないか。それなのに、あの人に今逢はうとするのに、この一事が最も大きい苦痛とならうとは！
……然し、然し、敏子さんはそんな事で僕を侮蔑するやうな女性ではない」と彼は考へた。

「『宏さんに負けちやいけませんよ、しつかりえらくなつて下さい！』と彼女は勵ましてくれたのであつたが、今はこの通り勝利者である西尾宏の後に見窄らしく從つて、彼女に逢ひに行かうとする自分なのだ。あの華麗な藤紫色の羽二重表紙に唐草模樣の金をちりばめた眩しいばかりの西尾宏の詩集を片手に持つてゐる人に、薄ツぺらな粗末な表紙の假綴の詩集をおくらうとする自分なのだ。然し、彼女がそんな事で僕を侮蔑する女性であるとは思はれない」と彼は考へた。

純一の心には彼女の言葉が思ひ出されるのだ。「苦しい時には言つて下さいね、何でも困る事は打明けて下さいね、どんなに遠くに離れてゐても、どうしてこの氣持が變るものですか！」

「ああ……あの言葉を思ひ出す！　あの言葉を思ひ出す！……」

櫻の花のやうな女だと中野信太郎が曾つて言つた彼女の顏！　純一は自分の心をじりじりしながら、搾り始めた。自分の記憶は今こそはつきりして欲しいと彼は思つた。あの眼！　切れ長な眼！　黑い瞳に才氣と情熱とが……烈しい感情が湧いて來ると、嶮しくなつて冴えを增す眼であつた！

「ああ、あの眼を思ひ出す、その一寸した瞬きをも思ひ出す……」

朝飯とごつちやの晝飯をすましてから、純一は、暫くの間、割合ひに新しい襯衣や、汚れてゐない足袋を小さな行李の中の全所持品の中で探し求めた。探し求めながら、絶えず心には、西尾宏から今日のこの事件には、徹頭徹底皮肉に觀察せられるのであると云ふ觀念を忘れる事が出來なかつた。

顎や頰などにさはつて見ると、ざらざらしてゐるので、床屋に急いで行つて來ようと思ふのだが、あの剃り立ての

妙に筋立つた感じが、自分にも殊更らしく厭やだつたが、宏が皮肉な微笑をもつてじろじろ見ることは疑ひがなかつた。

餘り早く行つてもと思つて、少し遲い位に宿を出て、西尾宏の家へ行くと、彼は、

「君は來ないのぢやないかと思つてゐた、そんな筈はないんだが……」と言つて迎へた。

「丁度いい、直ぐ行かう」

人の世話なんか昔から一つもしないので通つてゐる西尾宏が、誰れしもが煩はしがるかうした感情の上の事件に、一種の介添役――丁度かの舟井國之助が好んでやつたやうな事――を、このとりわけ感情の上でのエゴイストの西尾宏が、しかもこんな忙しい場合に、敢て辭さないのを考へると、純一は宏の底意を汲み取りかねるやうな氣がした。

彼の興味が何の上に向いてゐるのか、この自分といふものを、宛かも自然科學者が昆蟲を危險な狀態に置いて觀察するやうに觀察しようと云ふ意地の惡い興味なのであらうか？　或はそれとも、自分を連れて行く事によつて、敏子に對する彼の一種の特別な感情を滿足させようと云ふ微妙な氣持なのではなからうかなどと思はれて、いづれにしても、純一は宏に對して無關心ではなかつた。

銀座の交叉點で電車を下りると、近いところだからこの儘歩かうと言つて、宏は先きに立つて、築地の方に向いて行つた。

「君は知らんだらうが、僕の兄は餘り感じのいい男ぢやないよ。ファザアが同じなんだから、或る點では似てるかも知れんが、まづ大體に於いて母親似だから、僕とは違ふ。かう見えてゐても、僕は母があんな立場なもんだから、かなり厭やな苦勞をしてゐる。だが、兄貴はさう云ふデリケエトな心持の問題には、至つてインディファレントなんだ。惡い人間ぢやないが、骨の髓までのマテリアリストで、早稻田仕込みの田舍政治家だもんだから、代議士になるのが

その畢生の目的なんだからね、今度の新聞社買收もその準備に過ぎないのさ。俗物なりに徹底してゐるから手が着けられない、困つたものだよ……」と宏は半ば呟くやうに言つた。

「おれが何か目論んで、金でも引出しに來はしないかと、そればかり遠巻きに警戒してゐるんだ。僕が親父のペットだつて事が面白くないらしいんだ。僕が東京へ早くから出て來たのも、さう云ふ原因があるんだし、國にあんまり歸らないのも、つまり、そんなプロゼイックな渦中に投じたくないからなんだ。ところが、兄貴の奴、此頃おれがえらくなつて來たし、また自分が新聞社の買收にも成功して見ると、このおれが以前ほど煙つたくないばかりでなく、かなり利用したいらしいんだ。兄弟とは言つてもそんなものさ……」

宏にしては珍らしい打明話であつた。

「あ、通り過ぎてしまつたかナ」

「ウン……此の横町だつた」と宏は細巻のステッキを上げて、自らさし示しながら、その横町を曲つた。彼の背廣姿はいつ見てもリウとしてゐた、とりわけ今日は、純一には羨ましいほど水際立つて見えた。

つやつやと拭き込まれた玄關の式臺には、外光が匂ふやうにほんのり映つて、正面の新しい障子はぴたりと閉まつてゐた。純一はその障子をぢつと見詰めた。宏は物馴れた樣子で、その式臺のところで、

「御免なさい」と聲をかけた。

障子のむかうの左側の遠くで、

「はアい……」と女中の聲がして、間もなく、いかにも小股の切れ上つた女と云つたやうな爪先きの音をさせて、障子が半分開いた。

「ゐますか？」と宏は訊いた。

「ゐらつしやいまし……おゐでになりますわ、おあがりなさいまし、お連れ樣でいらつしやいますか」女中はから言つて純一の方にも眼をくれながら、殘りの障子をすつかりあけた。障子に輕く懸けた白い手には、赤い珠を鏃めた指環が光つてゐた。

突當りには素晴らしく大きい姿見があつて、その傍には丈の高い棕櫚竹の鉢が、その葉の影を鏡面に投げてゐた。仄暗い清淨な廊下を奥の方へ入つて行くと、左側には中庭があつて、そこには赤い鳥居を建てた稻荷の祠が祭られてあつた。廊下が向う側へ曲つたところに廣い階段があつて、それを上ると、右側の二番目の部屋の前で宏は、

「宏です、入つてもいいですか？」と聲をかけた。

「ア、いいよ」と部屋の中から男の人の安易らしい低い聲がした。

「…………」

宏は純一の方に振向いてにやりとした。純一は笑ひの代りに、歪んだビクビクするものが唇の上を這つた。

「君、入りたまへ」と宏は改まつたやうに純一の方に聲をかけて、障子を開けてから、

「今日は郷關を同じくする友人を誘つて來ましたよ……君、入りたまへ」

「どうぞ入つて下さい、御遠慮なく」と中から先刻の男の聲がかかつた。

純一は躊躇する餘裕さへも心には有たなかつた。寧ろ彼は飛び込んで行くやうな氣持で、しかも努めて冷靜に室に入つて、宏の傍に少し身を退いてすわつて、宏の兄を正面から見た。友一郎は入ると直ぐ左側で、一閑張りの小机をひかへて、何か調べ物でもしてゐたと見え、いろんな書類が膝のまはりに散らかつてゐた。

「僕は龍田純一と云ふ者です」

「僕が註釋を加へませうかナ」と宏は微笑しながら言ひかけて、兄の顏をまじりと見た。

の效果を自得するやうに喋つた。

「嫂(ねえ)さんの舊友です」

「……敏子の……」と友一郎は注意の集注によつて、その眼の色が濃くなつたやうな顏色(かほいろ)で、

「成程、伺つた事のあるお名前だ、さあどうぞこちらへ。丁度今敏子は銀座へ買物に行くと行つて出かけて留守ですが、もう歸つて來さうな時分です」と純一に言つて、續きを宏の方に持つて行つた、「なにね、綾子が身丈(みたけ)位の人形が欲しいと言つて來たのでね、宿の女中さんと一緒に銀座の玩具店(おもちやや)へ買ひに行つたんだ。彼女(あれ)は綾子の事つてなると夢中だからナ、何でもトランクに一杯玩具を詰め込んで歸つてやると言つてゐるんだ」と友一郎は滿悅さうに、二重の效果を自得するやうに喋つた。

「あなたは一緒になぜ行かなかつたんです？ 珍らしい事ですね。」と宏が揶揄した。

「女子供の玩具を買ふお伴なんてものは、あんまり見つともいい圖ぢやないからナ。それにどんな買物でも、これにしろと言ふとあれにすると言ふし、あれにせよと言ふとこちらのにすると云ふ調子だから、徒らに疲れるばかりだ。それに今日は夕方から或る事件に就いて今村辯護士と會見する約束があるので、その爲めの調査しなけりやならん事もあつたししたからナ」と友一郎は言つて、次ぎの言葉を純一の方に持つて來た、

「早稻田御在學中ですか、あそこもなかなか盛大になりましたナ、僕等が卒業當時と大變な相違です。過日、大隈伯爵閣下を御訪問いたしましてナ。いや、老來益々旺盛當るべからずですナ。然し、あんなえらい人は無いと思ひますよ、實際、世界的人物です。いかなる問題と雖も、立ちどころに論破するですからナ、人は大風呂敷だと言つて笑ふが、その大風呂敷たるや世界的ですからナ。いや、敬服しましたよ。僕も新聞政策上大いに有益なる高見卓說を拜聽して、いい事をしましたよ……ところで、あなたも大いに勉强なすつて、稻門出身の秀才として、大いに大活動して下さい、不肖一日の先輩として出來るだけの事は御助力しますよ」

「龍田君は早稻田なんかに行つてやしないのさ、早稻田なんかを出て、びくびく世の中を渡るやうな人間ぢやないんです、これで堂々たる社會主義者です」と宏は可笑しくて堪らないやうに言つた。

「ハハア……社會主義者ですか、あなたは？　成程、それも一理あるでせうナ」と友一郎は出先きを挫かれたやうに默つてしまつた。

女中が茶菓子の用意をして入つて來て、皆の前に湯呑を置いてしまふ間、三人はそれぞれの張りきつた氣持で、それを見てゐた。

部屋の奧には床の間があつて、そこには旅行用の化粧道具が並び、新しいパラソルが青い袋に入つたまま立てかけられてゐた。その横の隅のところには、二枚折りの屛風が開かれて、そのむかうの少し覗いてゐる大トランクの上に、派手な羽二重の帶がきちんと疊んで置かれてゐた。

「奧さんはもう歸つて來さうなもんぢやないか？」と友一郎がその女中に訊ねかけた。

「左樣でございますね、もう追つつけお歸りでございませうよ、何ならお迎へを差上げてもよございますが……」とその女中はくるりと友一郎の方に向いて、丸ぽちやの白い顏に、お甘い旦那樣ネと言つたやうに眼尻を下げて、

「奧さんがゐらつしやいませんと、御不自由でございますわね、一寸の間でも、オホホ……」と宏にその笑ひを傳へるやうにした。

「なに、嫂さんは今直ぐ歸らなくつたつていいさ。然し、吃驚するだらうナ、舊友が來てゐるんだもの」と宏が言つた。

「どうぞお一つ」と女中は純一の方へ菓子をすすめながら、かう云ふ社會の女特有の恣な興味をかけてゐる樣子で、その序に友一郎の顋骨の張つた黑い顏をにやにやと見てから、

「外に御用は……」
「いや、もういい」と友一郎の言ふのを聞いてから、空になつた急須を持つて出て行つた。
「もう東京での用事は大凡片付いたんですか？」と宏がお茶を飲んでから訊いた。
「さうだナ、大體重要な事はすんだ、後一つ二つあるが、これは新聞社參觀とか、遞信省參觀とか言つた枝葉的事務さ。折角東京まで來て此儘歸つたのではつまらないから、明日あたり敏子を連れて帝劇へ行かうと思つてゐる、帝劇を知らなくつちや東京を談ずる事は出來ないからナ……」
「帝劇？……僕も帝劇行は勸めたいと思つてゐたんですよ、但し、今度のプログラム中の重要なナンバアでせうからね」と宏がいかにも調子を輕くして言つた。
「その時、龍田さんと一緒に來てはどうかね、一つ懇親のために僕が奢りませう」
「それはいい、どうだ君」と宏は純一を見た。
純一は先刻から、ひたすら、ひたすら、待つてゐるのだ。宏や友一郎の會話が時々自分を誘ひ出しに來ても、彼は微笑と簡單な返事とで答へて置いて、耳を澄まし、心を彼女の爲めに十分に打ち開いて、早く、早く歸つて來るやうに、早く、早く、あの晴れやかな美しい花のやうな顔、星のやうになつかしい眼を見たいものと待つてゐる！
彼は敏子に何と話しかけよう、詩集を渡すにはどう云ふプロセスをもつてしようか、と、思ひ耽る！　いづれにしても、敏子が直ぐに晴れやかに聲をかけてくれる事は確かである、自分が一言を言ふ間に、彼女は千語萬語をもつて語るやうな眼を惜しみなく呉れる！　自分の喜びは二倍になつて返つて來る、彼女の紅い唇が（いい御本になりましたわね）と云ふ言葉のために開かれるのは、今直ぐだ、今直ぐだ！
「したが、龍田さんの社會主義は、あの金持を敵呼ばはりして、片つ端しからやツ付けようツて云ふ連中ぢやありま

すまいナ、もつと新式な文明的なものなんでせうナ？」と友一郎が、今では先刻の武装を解いて――と云ふよりも、そんな必要はない、ほんの貧乏な靑二才ぢやないかと言はんばかりの、侮蔑的な打ち解け方で、話しかけた。その調子には奇妙に挑んでくるやうな、或るしつこいものがあつた。

「西尾君の言はれる程の本式の社會主義者ではないのです、社會主義者の主張には共鳴はするんですが、單なる共鳴や理窟でなしに、實際運動の渦中に投じない以上は、一人前の社會主義者なんて云ふのは僭越だと思ふので、そんな肩書は自分で恥ぢるところです。今のところは、まだその中途に引ッかかつてゐるやうなものです。然し、今直ぐにも、何かのチャンスさへあれば、遣れるだけの事は遣らうと思つてゐます！」

純一は自分の聲が、抑へかねる銳いものとなつて、友一郎の方に迫るのを感じた。

「然し、それはよくありませんナ、僕は一日の先輩として忠告せずにはゐられませんナ。金持を敵呼ばはりするのは、誤つた感情論だと僕は思ふですナ。貧乏人には貧乏人の言ひ草はあるだらうが、金持にはまた金持の言ひ分があるですからな。」と友一郎はしたたか喋らうとするかのやうに唾を呑んだ。

純一が心が尖つて行くやうな氣持で、友一郎の顏を眞面に見ると、宏とは殆んど似てゐない――强ひて似てゐると言へば、一種氣の利いた冷かさが眉目に現れてゐる――頑强な顏相の、少し灰色の眼を友一郎は斜めにはづした。そして彼は喋り出した。

「貧乏人はどうもひがみ根性が强くていかん、何にも碌すつぽ働きもしないし、働いたところで遣り方が一體馬鹿だから、貧乏するのは當り前だ、誰れを怨む譯もない話ぢやないですか。善かれ惡かれ、金持になるには、これでなまなかの苦勞ぢやない、一朝一夕の事ぢやないですからナ。それを何だの彼だのと言ふのは、要するに貧乏人の嫉妬の感情に過ぎんのです。僕の持論はですナ、金持になるのは立派な仕事だ、社會はこれに絕對の尊敬を拂はねばならん、

を作つてからの話だ、名譽も樂しみも、先づ金を作つてからでなくては、眞實の味を味はふ事は出來ん、人間も六十七十にならなくちや人間の味は出ん、それ迄は金を作る一方だ、わしもやつと相當の金が出來たから、これからは社會のためにも働くつもりぢや）と言つてゐるが、僕も全く眞理だと思つて敬服してゐるんです、そこで僕も今度新聞社を經營する事になつて、これから大いに政治の方面にも活動して、行く行くは代議士として社會のために働かうと思つてゐるやうな譯で、金持と云つても、皆それぞれ社會公共の爲めと云ふ事をいつも念頭に置いてゐる。然るに、金持々々と言つて、何かと云ふと非難したり攻擊したりするなんて事は大きな心得違ひです」

「なかなか兄さんも雄辯家になりましたね」と宏が微笑して言つた、「その調子で大いに政談演說をやるんですナ。ところで、金持が社會公共の爲めに盡すなんて事は、口で言ふのはやすいが、なかなか容易に出來る事ぢやありませんよ。僕としては、金儲けしたい者はどんどん金儲けし、金を遣ひたい者はどんどん遣ふがいいんだ。人間はみな自分の好きなやうにやつた方がいいからナ。僕をして言はせれば、世の中を恐れて社會公共の爲めなんて假面をかぶらないで、大手を振つて金儲けを看板にするのがえらいと思ふナ」

「僕もさう言ひたいんだ」と友一郎が言つた、「そこで理窟は何とでも言へるが、とりわけ貧乏な人間は、カネタメ主義を第一にして行くと云ふ事は、極めて結構な美德だと斷言して憚らない。社會の爲めに働かうなんて云ふのは、まあそれからの事だ。然るに、自分一人の身の處置も出來ない癖に、社會の改革なんて事を考へるのは、ちと本末を顚倒した事だと思ふですがナ。あなたなんぞも、東京で社會主義者なんかになつてそんなにされてゐるよりも、一つ國へ歸つて來て、商賣するなり百姓をするなりして、もうそろそろ妻帶もなすつて、ちやんとした生活をなすつた方が幸福でせうがナ」

その友一郎の言葉、その中に含む敵意の刺をも、純一は神經にビリビリと感じた。ナニ、小癪な！　と、先刻惣兵衞の言葉を持ち出した頃からの憤怒を、强ひて外へは出すまいと、堪へた。早く歸ればいい！　と彼は一心に思ふ。

「そんな立入つた說敎は餘計ぢやないですか」と宏が口を入れた、「龍田君は最近詩集も出したし、飜譯もやれるし、兎に角東京で七八年もゐるんだから、食ふに困るやうな事はないさ。妻帶しようと思へばいつだつて出來るさ、ただ誰れかに心中立してるんですよ。貧乏と言つても、ただ藝術家として最も必要な贅澤な眞似が出來ないばかりなのさ。國に歸らうと思へば、いつだつて歸れるんだから、そんな忠告はしない方がいいでせう」

「いや、さう云ふ譯ぢやない」と友一郎は狼狽した、「ナニ、一寸思ひ付いた事があつたからナ……つまり、今度買收した僕の新聞に是非二三人敏腕な記者が欲しいので、此方へ來た序に一つ招聘して歸らうかと思つてゐたもんだから、何なら敏子のお知り合ひの方ださうだから、どうかと思つたんだ」

「それぢやまるで龍田君の爲めよりも、嫂さんを喜ばす爲めに、思ひ付いた態ですナ、嫂さんが聞くと喜ぶでせう」と宏が言つた。

友一郎は不快な顏をして辯解した、

「いや、さう云ふ譯ではない、決してさう云ふ譯ではない」

彼は宏が何かにつけて自分をやり込めるのが癪にさはると言つたやうに、妙にふくれて、ポンポンと强く手を拍つた。暫くたつてからもう一度手を拍つた。

「はアい」と階下の方で女中の聲がした。

「お呼びになりましてございますか」

先刻の女中とは違つて、十五六の可愛い顏をした紅いメリンスの前垂をしめた若い女中が障子を半分あけて、何だ

か嬉しさうににこにこして覗いた。
「もう歸つて來てゐるのか？　奥さんはなぜ來ないのか？　何處にゐるんだ？　お客樣だから直ぐ來るやうに言つてくれ」
「先刻お歸りになつたんですけれども、お客樣が込んでゐるからつて仰しやつて、おかみさんとお話しなすつてゐらつしやるんです、只今直ぐお呼びいたします」
かう言つてその若い女中は、そこらにある湯呑を集めて、その盆を持つて二階を下りて行つた。
「君は敏子さんを見ると吃驚するぜ」と宏が言つた。
「多分さうでせう」と友一郎が言つた、「彼女は此頃身體が弱くつて困つてゐます、早く達者になつてくれて、子供の一人も產んでくれないと困るんですがナ……それにどうも我儘で……」と友一郎はいかにも彼女を寵愛してゐるやうに言つた。
純一は先刻からの友一郎の數々の言葉が、一つ一つ彼の誇りを傷つけ、彼の夢を破つてくるので、考へれば考へる程、憤懣を感じるのであつたが、辛うじてそれを堪へてゐるのであつた。
何か小聲で話し合ひながら、階段を二人で上つて來る音がして、はづれの障子が開かれると、先刻の紅い前垂をしめた若い女中が、大きなボオル箱や風呂敷包を持ち、その後から、紫紺色の紋付の羽織に黒いセルの、肩付のいかにもほつそりした、廂髮の脊の高い女の人が入つて來た。しとやかな樣子で、客の少し背後にすわつて、
「失禮をいたしました、大變遲くなりまして……」
かう言つて、眞直ぐに向いてすわつてゐる客の後に身體をたわめて、
「いらつしやいまし」と氣の張つた聲で言つた。

「その方はおまへの昔のお知合ひださうだ」と友一郎が妙な笑ひと共に言ふと、宏は友一郎に先を越された態で口を尖らして、何か言ひたさうに友一郎の顏を見てにやにやした。
「わたくしの……」かう言つて、ぢつと見に來る彼女の瞳は――それは昔ながらの冴えやかな瞳であつた――それ迄友一郎の方に向いてゐた純一が、彼女の方に向いて、ぢつと彼女を見守ると、その情に燃える彼女の瞳がパッと涙で刷かれてくる。
「まあ私の思つた通り、あなたでゐらつしやいましたわ！……よくまあ……」と彼女は言ひさした。
「お久し振りです、お變りはありませんでしたか？」と純一は努めて語尾をはつきりと言つた、するとその聲が他人の聲のやうに感じられた。
「ほんとにお久し振りでございましたわね、わたしは是非……」
かう言ひさして――彼女の聲の調子は亂れようとした――ふッと氣が付いたやうに、聲を變へた、その樣子には西尾友一郎の夫人としての儀禮があつた。
「宏さんがいつもお世話になりまして有難うございます、お國許の皆さんもお變りがなくつてゐらつしやいますか、一つもお伺ひいたしませんで失禮でございました」
彼女の恰好のいい顏は、宏と友一郎とが此方の方に向いてゐるのを避けるやうにあらぬ方に向けられた。そして若い女中がボオル箱を運び棚の上に置いてから、何か用事でも訊かうとするかのやうに中腰になつてゐるのを見ると、
「あ、もう別に用事はありませんでしたよ、それから旦那樣のお伜を呼んで置いて下さい」
「畏まりました」と言つて、女中は出て言つた。
「いいのがあつたかね？ 大分時間がかかつたぢやないか？ 俺はその爲め出かけるのが遲くなりはしないかと思つ

て心配してゐたんだ。おまへの事だからまた何が面白くなつて、遠方へ行つてしまふか分らないと思つて、隨分心配したよ」と友一郎が敏子をしげしげと見ながら、「頼んであつたネクタイは買つて來てくれたかね？」

「はい、買つてまゐりました、でもあんまり澤山の中では眼移りがして、反つてまづいのを買つて來たかも知れませんわ」

「ネクタイと言へは、此間白木屋にいいネクタイがあつた、言つといてあげればよかつたナ、どんなのか一寸見せて下さい」

「あなたが見ると、みんなつまらぬものでせうよ」かう言ひながら、敏子は立上つて、先刻持つて歸つた風呂敷包みの中から、三條ばかりのネクタイを出して宏に渡して、宏と友一郎との間にすわつた。

「これはいい、これは一つ僕のに貰はうかナ」かう言つて宏は格別鮮かな紺に赤の霜降りの模樣のところどころに白い斜線の通つてゐるのを選んで、見てゐる。

「あげよう、僕はそちらのが好きだ」

「あなたにはこれがお似合ひになりますわ。」かう言つて敏子は同じ紺に鳶色の圓點のあるのを差出した。

純一は名狀の出來ない焦々しい複雜な感情を自分で意識しながら、ネクタイを持つてゐる敏子の靑白い美しい手を睨んだ。

「夏向きの白いのも二條ばかり求めてまゐりました」

敏子はこんなに言ひながら、いかにも純一が默つてすわつて、自分のする事を一つ一つ見てゐるのが、氣になつて苦しくて堪らないやうな樣子で、絕えず見ながら、それでゐながら、純一からの視線には急いで避けてしまふのであつた。

敏子の態度には柔和な、いかにも忍耐深いやうな、家婦の面影があつた。そしてその老けてゐる事はいかに純一を驚かしたであらう。まるで思ひもかけぬ普通の中年の女であつた。

「お加減が悪いさうですが、いかがですか？」と純一が訊ねると、

「いいえ、別にたいして悪い譯ではございませんの、ただ一寸肋膜の氣味があるんだと大學では申しましたが、自分では一つも病氣のやうな氣はいたしませんのですわ。あなたは續いて御丈夫でございましたか？」と言つて、彼女は純一の肩のあたりをぢつと見た、宛かも純一の眼を恐れてゐるやうに。

彼女はほつそりとした白い手を膝の上で重ねた。その膝は長すぎる程長いやうに純一には見えた。一體にすんなりとしてゐて、昔はこんな體格の人ではなかつた、もつとも小柄な方ではなかつたが、顔なども丸顔の、いかにも快活な明るい彈力のある少女であつた筈である、こんなにしをしをとした、靜かな寂しい女の人ではなかつた筈である。何か言ひさして、さし俯くところを見ると、純一は別人ではないかと云ふ氣がするのである。しかも何處かで見たやうな氣のする面影なので、考へて見ると、そこに微かな思ひ出として殘つてゐる彼女の病身な母親の横顔が思ひ出された。それは彼が少年の時、あの海産物問屋の店で見た、海苔を手に持つてゐる母親と殆んど同じ人のやうに思はれる楚々たる姿である。

「嫂さん」と宏が口を切つた、「龍田君はあなたにデディケエトすると言つて、今日詩集を持つて來てるんです、一つ貰つたらいいでせう、あなたは愛讀者だから」

「まあ、さうでございますか」と彼女は眼を輝かして純一を見た。

「本の體裁は一寸まづいが、まあそれは見ぬ事にして、内容だけを見るんですね」

宏がずばずばと言つてのけるので、純一は先刻から妙にはぐれた氣持になつてゐたが、敏子から來る感じが餘りに

違つて別様なものなので、自分ばかりが逢ひたがり、話したがり、見たがつて、ひとりで昂奮してゐたのが、餘りに浮き足なものに思はれて、自分の心持の過剩が今は恥かしく、かうして一方では宏からの或る心持の壓迫、他の方面では友一郎からの侮蔑に辛うじて堪へたその總ての苦痛の報償は、既に何にも無いのだと考へると、其上自分のこの苦しい感情が、愚かしい嫉妬に過ぎないと云ふ事を考へると、今やこの座に居堪へない位になつてゐるのである。彼には敏子が西尾夫人として、毫も不幸であるとは思はれなかつた。彼は自分の見窄らしい詩集を、見るから貞淑なこの人妻の手に渡す事が、既に堪へられなく感じられるので、默つて持つて歸るつもりでゐる。

「僕のはつまらぬ本ですから、實は差上げるのを控へようかと思ひます」

「なぜでございますの、さういふ事を仰つやつて？　どうぞ拜見させて下さいまし」と敏子は言つた、「是非どうぞ頂かして下さいまし、折角持て來て下すつたのに、なぜそんな事を仰しやるのでせう？」

　彼女はぢつと純一の眼を見守つて言ひ續けた。その眼を見ると、純一は抗ひ難い氣がした。

「置いて參りませう」と言つて、彼は自分の詩集を敏子の前に出した。敏子はそれを手に取つた。

「ハハア、それがあなたの詩集ですかナ」と友一郎が事も無げに言つた、「なぜあなたも宏の本のやうに派手なものにしませんでしたかナ？」

「この方にはかういふ本でなくちやならないんです、飾りのないのがいいんです」と敏子が頁をばらばらさせながら言つた。

「さう言ふだらうと思つてゐたよ、嫂さんはね」と宏が高く笑つた。

「僕は詩とか何とかは一向趣味がなくてつまらんですが、然し、あなたのものなら一つ讀んで見ませうかナ」

「あなたは講談本をお讀みなさいまし」と突然敏子が妙に冷たい聲を出して、友一郎の出先きをはたくやうに言つた。

「そんな事はない、講談本は講談本、詩集は詩集、分らんなんて事はない、現に俺は此の間も宏の詩集を讀んだぢやないか」と友一郎が言つて、彼は敏子が手に持つてゐる詩集『裂けた青絹』を取らうとした。

「いやですよ、これはわたしの本です」

から言つてくるりと向きを變へて、巻頭の見返しを見ると、につこりした。純一は彼女が自分の未婚名を見たのであると思つた。

「只今お俥がまゐりました」と女中が知らせに來た。

「ア」と友一郎は挨返事をして、

「ぢや失禮して出掛ける事としよう、着物を出してくれ」彼の言葉の調子には、敏子にやり返すやうな良人としての威壓があつた。

「それぢやない、洋服で行くんだ」と友一郎は、部屋の隅の方の屛風のかげで、むかうむきになつて、大きいトランクの中から和服を出した敏子にあたつてゐる。

「ネクタイはそれぢやない、今日買つて來たのにするんだ、その爲めに買ひに行つたのぢやないか！」

敏子は何とも答へないで、いろんな支度を手傳つてゐるのだが、どんなにその心の中では思つてゐるだらう、と、純一は考へて、もどかしいやうな一種苦しい不如意を痛切に感じた。どうにかしたいのだが、どうしていいか純一には分らないのである。

「留守中出てはいかんぞ、何處から電話がかかつて來るかも知れんのだから」と友一郎はブリブリして敏子に言ひ付けをすましてから、洋服に着替へてから男振りのぐツと引立つた彼は、二三度鏡で顎のあたりを撫で廻してから、出口のところで此方に向いて立つた儘で、

「それぢや甚だ失禮ですが、僕外出しますから、御ゆつくりお話し下さい」と純一には言つて、宏の方へは、

「帝劇へ行くつもりなら敏子と打合せしといてくれ、さうでないと席の工合があるからナ、それに今日もあんまり長居して敏子を疲れさせないやうにしてくれ、病氣なんだから」かう言ひ捨てて、どんどんと足音をさせて出て行つた。その後から敏子が、彼の大きいふくれた革の鞄を提げて、ついて行つた。紫紺の羽織の裾が、純一の眼の中で暫くの間名殘を曳いた。

九

「僕ももうそろそろ出かけなきやならん處があるんだよ」と、敏子が友一郎を送つて行つてゐると、ゆるやかになつたやうな言ひ方で、宏が純一に言つた、「有志の者だけで撮影禁止物のフイルムを見る會が今夜新橋の紅玉館であるんだ。古山白夢君なんかが斡旋で、極めて豐潤な肉體美を鑑賞しようと云ふわけさ。君が行くんなら一緒に行つてもいいが、恐らく君は行かんだらう」

「今日は何だか疲れてゐるから此儘歸らうと思ふ」

「まあいいぢやないか、少し夫人と話して行き給へ、構はぬよ」

「さう云ふ譯に行かない」

二人がかう言つて話してゐるところへ敏子が歸つて來た。彼女は林檎と苺との盛られた玻璃の水菓子器を持つて、輕い足音をさせて障子を開いた。

「何にもなくつて……でも、何か取りませう」と樂しみらしく自分で呟いた。

「いや、何も取らん方がいい」と宏が言つた、「僕はもう歸るんだから」

「まあ、なぜ？　これからお話をするのぢやありませんか！」と敏子は大きな聲で言つた。
純一はその不意に出た明るい聲を不思議な氣持で聞いた。
「僕は歸るんだが……龍田君はゐるさうだから」と宏が言つた。
「いや、僕も失禮しませう」と純一が言つた。
「…………………」
敏子は明るい氣分を急に失ひかけたやうな、稍悲しい表情をして、二人をぢつと見た。
「二人ともなぜそんなにお歸りをお急ぎになるの？」
「でも先刻から隨分長い間お邪魔をしてゐますし、それに西尾君が行かなければならぬ處があるとすれば、僕もお暇をいたします」と純一はてきぱきと言つた。何かさうはつきりと言はなければ蟲が納まらぬやうな氣持なのだ。
「まだ何もお話を伺ひませんのに……」と敏子は細い聲で呟いた。
「それぢや嫂さん、一緒にそこらあたりへ出ませう、僕もあそこ迄歩いて行つていいんだから、三人連れで銀座の方へ行きませう」
「さうね、それはいいわ、ほんとにいいわ、宏さんはなかなか智慧者ね！」と敏子は笑つて、
「それだと龍田さんもおよろしいんでせう？　お差支ありませんでせう？」と彼女は氣遣はしさうに訊いた。こんなにやはらかに問はれると、純一は何だかひどく敏子に氣の毒な氣もしたし、殊に彼は先刻友一郎が出て行く時、「留守中出てはいかんぞ」ときつい言ひ付けをした事が、頭にこびり着いてゐるので、妙にじりじりとする氣持で——そんな事は一つも言ひたくないのに——變な複雜な氣持に陷つてしまつた彼は言つた、
「留守中お出かけになつてはいけないのぢやないですか？」

「君そんな事は構はないんだ、ああいふ事でも言はなくちや兄貴もつまらんと思つてゐるんだらう、ねえ敏子さん」
と宏が言つた。敏子はただにこにことして、
「一寸待つて下さい。わたしはこの着物を着替へますわ」
彼女は二人を待たせて置いて、それ迄着てゐた黒つぽいセルの着物を、部屋の隅の方で、先刻友一郎が着替をした屛風のむかうで、紅い色をちらちらさせながら、お召の派手な袷に着替へた。
輕い打白粉に紅をさしたと見えて、羽織の代りに羽二重の帶を恰好よくしめた彼女が此方に出て來た顔を見ると、婀娜としてゐて、萎れた花に生氣が蘇つたやうに、冴え冴えと若やいでゐる！
純一が見ると、そこに華かな少女の敏子が思ひ浮ぶ！　だが、昔なかつたものがいろいろ加はつてゐる、上品な媚び！　寂しい魅惑！　純一の心をそそるもの！
「若くなつたナ、嫂さんは！　まるで十七の小娘見たいだ」と宏が本當にそんなに思ふやうな聲で言つた。
「これでわたしだつてまだ若いんですもの、まだお婆さんツて齡ぢやありませんわ、かはいさうに！……」
「勿論お婆さんツて齡ぢやないが、いつも黒い着物を着てゐるから、喪服見たいでね、これからはちつと派手にして下さい、あなたは地味なつくりはうつりませんよ。ねえ龍田君、さうぢやないか？」
「………………」
「そんなこと龍田さんには分りませんわ、あなたとは違ひますから」と敏子は言つて、ぢつと純一の方を見て、
「わたし……ずゐぶん……ふけてるでせう」と言つて、ほつそりとした青白い手で、自分の白い頰を兩方からおさへた。それでほつそりとした彼女の顔は、一層細く美しくなつて、それが純一にはいぢらしいと思ふ！
三人は宿を出ると、電車通りの方へ話しながら歩いて行つた。歌舞伎座の櫓が直ぐ傍に立つてゐる電車道を行くと、

橋があつて、それを渡ると直ぐ向にうカフエエ・ライオン、服部時計店、山崎洋服店、××銀行とで四疊を成してゐる繁華な十字街を見渡すのであつた。

黄昏前の都會の息吹が華かに漂つて、澤山の着飾つた男女達が、一團二團、それぞれ立つてゐる。それらは電車に乘らうとしてゐる人々である。

日本人にはとても眞似の出來ないやうな、華やかな服裝をした西洋のブリュネットの少女が、身綺麗なブロンドの若い紳士の腕にその豐かな片腕を差し込んで、四つの靴の音をアスファルトの上に快活に響かせながら、スパロウの囀りその儘に話し合ひながら、あからさまな樣子をして歩いて行く。その抱擁しつつ歩く一種の美しさが、電車を待つてぼんやりとしてゐる人達の心に殘る!

三人が交叉點に來た時分に、大廈高樓、その凡ての電燈がパツとともつた。その電燈の流れは目もはるかに連つて高く飛び上り、低く渦卷き、京橋、日本橋、室町、本石町の方へと光霧を漂はせてゐる。

「や、西尾君ぢやないですか」

向うから歩いて來る極く小柄な可愛らしい洋服姿の中年の男が、にこにこして聲をかけた。

「何處へ?」

「や、古山さんですか、あそこへ行くんです、紅玉館へ」

「それぢや丁度いいですナ、一緒に行きませう」

彼はかう無雜作に愛らしく言つて、純一の顏を見知りと見えて、ヒョイと純一に會釋をして、眼を敏子の方にまつはらせながら、小刻みな足踏みをしてゐる。

「あなたも御一緒でせう?」

「いや、此の人は行かないんだ」と宏は言つて、
「ぢやね、龍田君、僕は失禮する、敏子さん、帝劇へは僕行きませんから……」
宏と古山白夢とはくるりとむかう向いて、アスファルトの道を歩いて行つてしまつた。
「どうしませう？」
暫くたつてから純一が敏子に訊いた。
「あちらの方へ歩いてまゐりませう、わたしは……でもお差支はありませんか？」と敏子は例の奥樣風に言つた。
「僕はかまひません」
敏子が歩いて行くのについて、純一は歩いて行つた。彼女はもと來た道へと引き返して行く。純一はふッと彼女が自分の宿へ連れ歸つて行くのではないかと思つて、惱ましい困惑の感じに包まれた。彼はそんな筈はないと思ひながら、歌舞伎座のイルミネエションが近づいて來ると共に、わくわくした。
敏子は默つて先きに立つて、歌舞伎座の前をもちらとも見ないで、歩いて行く。橋を渡つてしまふと、兩側の燈は稍少くなつて、時々靜かな仄暗いところがあつた。
二人はどちらからも直ぐには話し出さなかつた。明るいところでは二人とも早く歩いたが、暗いところがくると、敏子が待ち合はすので、そこで二人は一緒になつた。
「あれからこちら、どうなすつてゐらつしたか聞かせて下さい」と純一がきつぱりした聲で訊いた、
「聞かしてよかつたら話して下さい」
「何でも……みんなお話しいたしますわ、けれど何から言つていいか……」と敏子は賴りなげな聲で少し亂れて言つた。

「相良君は病氣だつて事ですが、どんなにしてゐますか御存知ですか、此間久し振りに手紙は貰つたんですが……」

「わたくしも少しも外へは出ませんし、瀞子さんにも此頃さつぱりお目にかかりませんので、ほんの人の噂で聞くばかりでした、あの家もお氣の毒でございますわ、先生もあんな風に……あなたは先生のおなくなりの事を御存知ですか？」

「聞いてゐます、相良君が此方で一緒に暮してゐた女の人から聞いたのです」

「ア、元雄さんにはさういふ方がありましたツてね、何でも大變惡い人だと云ふ田舍の評判です、先生の御病氣中、元雄さんと一緒に看護にお歸りになつてゐたのに、フイと上京してしまつたので、不人情な女だと言つて、先生のお父さんが非常な御立腹だつたさうです。元雄さんが東京で失敗なすつたのも、專らその方のせゐだといふ評判でございますが、さうでございますか？」

「その女の人のせゐばかりとは言へません、さして不人情な惡い女ではありません。然し、東京で女の人とさう云ふ問題が起きると、元雄君でなくとも本當の仕事は出來にくいでせう、餘程しつかりしないと……」

「あなたはいかがでした？……」と敏子は人妻らしくやや微笑んでゐるやうに訊いた。純一は急にさういふ事を自分に持つて來られて、不意を打たれて、直ぐには返事しかねた。二人はまた默つて歩いた。

やがて向うの方に二三臺の電車がとまつて、澤山の人が行つたり來たりしてゐるかなり賑かな交叉點に來た。新聞を賣つてゐる聲もするし、そこらの店で蓄音機の唄が聞える。ジヤリジヤリといふ雜音が交りながらも、その譜が高い調子になると、肉聲がはつきりと聞えて、いかにも心をそそるやうなので、歩いてゐる人が後へ後へと立止つて、二三分聞いて見ては、妙に樂しげに歩いて行く。

純一と敏子はその時計店の前に來て、同じやうにふツと立止まつた。三味線の音がパチパチとして、さはりが始ま

つた。
「オオそれよ……互ひに顏を見てゐては……身の上語るも面はゆし、寢入り給ふを幸ひに……今みづからが言ひ殘す、必ず夢とおぼさずと、明らさまに聞いてたべ……
「のうわれこそまことは柳の精……雨露の惠みに生ひ育ち、かやうに夫婦となることも、一方ならぬ因緣ぞや……
「前の生にて誓ひたる、契りを結ばんその爲めに、かりに女の姿と現じ……柳が下に待ち受けて、夫婦となりしも五年の、春の昔の春の頃………」ふッとそこで聲が斷れて、ジヤリジヤリ言つてゐる。小僧さんは少し俯いて機械を直してゐる。
「この街は何といふ街でございますの？」と敏子が訊いた。純一はハッとして、敏子の顏を見た。
「これは三十三間堂棟由來のさはりです」
「アア……柳のお柳のさはりでございますわね」と敏子は步きながら、
「わたしの叔母さんはあの三十三間堂が大好きで、いつも寢物語に話してくれましたから、よく覺えてゐます」と話しつづけた。
「わたしはあのお柳の話はほんとに美しいと思ひます、それにこんな美しい街でかうしてふッと聞くなんて……この街は何といふ街でございますの？」
「茅場町です、ここは東京でも一番下町らしい處です、ここから兜町にかけて株屋が澤山にあるし、一帶に老舗の多いところですから、江戸の情調が多分に殘つてゐるのです。晝間だとどちらかと云ふと、いくらか敗殘の感じがするんですが、夜はほんとに美しく見える……」
「ほんとに東京には美しい街があるのね！ わたしも東京に來ようかと思ひますわ、身を隱すには東京が一番いいッ

てことが今度分りましたわ、こんな澤山の人間がゐるんですもの、わたし一人ぐらゐ分らなくなつちまひますわ」
「あなたは家出をなすつたさうですね」と純一が敏子の方を振り向いて訊いた。
「家出しましたのよ、それは此の春です」と敏子は切つて、純一の言葉を待ち受けるやうにした。
「家出をしなけりやならぬやうな苦しい事でもあつたんですか？　そんな事をあなたがなさらうとは思へないけれど……」
「わたしのやうなものだから、家出をするのだと、お思ひにはなりませんか？　それに、あんな間違つた結婚をしたんですもの、當然だとお思ひにはなりませんか」と妙にやはらかに敏子が反問した、「わたしはほんたうに不幸なんです、それはあなたも御存知の筈です」
　純一はなぜか、さういふ筈はない――敏子に逢ふ迄は不幸な女だとあんなにも思つてゐたのに――と云ふ氣持がして、友一郎のいろんな言葉がフッフッと思ひ浮んでくる。
「然し、御良人はよく物の分つてゐる方のやうだ」
「譯は分りますわ、けれどその譯の分り方があんなのですもの、あなたは今日隨分あの人を輕蔑なすつたでせう？　いつも金、金と言つて、何でもそれで定めて行きますし、見え透いたやうな嘘をつきますし、一體に下卑てゐて、ひどいんですもの」
「それはあなたが一體に眼が高いからの不平でせう、人間はさう飛び離れた人はありません、西尾さんだけの方であれば、不足はないと思ひますね」
「さうでせうか……」と敏子はいかにも苦しさうな返事をした、「どうにかして、もう少し高尙な人間になるようにと思つて、わたしもいろいろ骨を折つて見たんですけれど、今になつて見れば、女の力なんてものは、ほんとに數にも

足らぬ力ですわ、何一つわたしがかうしたいと思ふことがその通りになつた事はないのですもの。西尾の家へまゐりました時は、ずゐぶんわたしも自分の力を信じて、屹度自分の思ふやうに、周圍を氣持のいい、高尙なものにしたいと思つたのですけれども、今になつて見れば、ただ疲勞と幻滅とばつかりですわ。わたしは女の力といふものが、もつと世の中に受け容れられるものと思つてゐましたのに、その夢はすつかり破れてしまひました。西尾の家へ入つてからのわたしは、軒端につるされた籠鳥のカナリヤと同然で、ただ音色と羽色とが、西尾の人達のなぐさみになりさへすればそれでいいのだと云つたやうな取扱ひを受けたのです。家事一切はお母さんが取りしきつて、わたしが臺所へでも出て行かうとすると、直ぐあちらへあちらへと追ひのけるのです、わたしが行つて何かすれば不經濟になるといふところから、何一つ手出しをさせないのです。わたしのする事と言へば縫物ですが、それとてもお母さんの思はく次第で、その上お針女もゐる事ですから、毎日々々何の張合ひもない無意味な日が過ぎて行くのです。いくらわたしが善くしようと思つても、父と母とは時々醜い嫉妬喧嘩をやりますし、友一郎は友一郎であさましい事を次ぎから次ぎへとしでかすのです。みんながあんまり邪見にこき使ふので、見るに見かねて、わたしが女中や下男にやさしい言葉一つでもかけると、直ぐ皆からひどい小言が出るのです。殊に血も涙もない遣り方で、貧乏な小作人や商人をひどい目に合はせてゐるのを見ると、心が痛んで、思はず何か言つて見ると、女なんかがそんな事に口出しをするのは餘計な事だ、西尾の家では世々代々女の差出口を取り上げぬといふ家憲だ、牝鷄の晨するは禍ひのもとだと言つて、頭ごなしにやられてしまひました。そして友一郎を呼びつけて、おまへが萬事手ぬるいからだ、あの女はすつかりおまへを食つてゐる、おまへの代になればどんな事をするか知れん、今からそのつもりで一切西尾風にしつけねばならん、だいぶんしたたか者だとぷんぷん呶鳴つてゐましたッけ」と言つて、斂子は當時を思ひ出すやうに言葉を切つた。

「こんなわけですから、わたしには今のところでは、どうする事も出來ないのです。もつとも、今はぢつと何處迄も

辛抱してゐて、友一郎の代になり、わたしの代になれば、少しはわたしの思ひ通りに出來るかも知れませんが、此頃になつてわたしは、そんな事を考へるからして間違ひだといふ事に氣が付いたのです、わたしの生活が初めから虚僞の上に築かれてゐたといふに氣が付いたのです、わたしが本當に生きてゐないと云ふ事に氣が付いたのです」と言つた敏子のその樣子には、眞摯な感動が籠つてゐた。

「つまり、わたしは今、人をどうしようかうしようなんて云ふやうな事は、身の程を知らない淺はかな虚榮だと悟つたのです、そんな事を思へば思ふ程、何も彼もが反つて惡くなるのぢやないかと云ふやうな、まるで反對の考へになつてしまひました。さういふ風に考へて來ますと、もう前途は暗いばつかりです。身體は弱くはなるし、心は荒んでくるし、ジリジリと自滅を待つばつかりなんです。それに自分でも自分の心の弱いのが恐ろしくなるのです、西尾の家へいつてからのわたしは、あの貧乏な實家にゐた時にくらべると、妙に一種の金持氣質が沁み込んで、氣も付かないうちに、何かの考へ方が西尾風に殘酷になつてゐるんです。つまり、わたしはこの自分の心の弱さを、その儘にしては置けないと思ひ始めたのです。人間が周圍の事情に左右される、それに打ち克つ力が自分にないといふ事に氣が付いた時には、どんなに悲しいか、考へて見て下さい。この儘で行けば、西尾家に取つては大變に都合のいい金の番人の合棒にはなるでせうが……また、大抵の女の人はさうするでせうが、わたしのやうな氣象の人間にそれが出來るものでせうか？　その上友一郎に愛もないのです！……ああ！　ほんとにそんな事は堪りませんわ！」

「城山であなたのお話を聞いた時から、僕はかうした結果がくるのではないかと思つて非常に悲しんだのです。あなたは勝氣だから、自分の思ひ通りやつて見せると思つてゐるのだが、あれだけしつかりした根柢をもつて築かれてゐる西尾家といふ城廓の中で、あなたが自分の感化力といふものを何處まで與へて行かれるかツて云ふ事は、僕には信じられなかつたのです」

「ああ！……ああ、城山！」と敏子は聲涙ともに下るやうに言つた、

「恥かしいわ、わたし．あの時の事は、わたしは冷汗が流れますわ。あなたがおとなしい靜かな方だといふ事をいい事にして、わたしはさんざん空威張りしたんですもの。ちつとの誠實ももたない癖に、野心ばつかり強くツて、何といふ嫌やなわたしだつたでせう。あなたが後で殘つて泣いてゐるのをわたしは十分に知つてゐて、自分も眼から一杯……熱い熱い涙をこぼしながら、それでゐて歸つて來てしまつたんですもの、それは長い長い間わたしの良心の苛責になりました、すみません、ほんとにすみませんでした、どうぞ許して下さい」

彼女はうち顫ひ、泣かんばかりである。

片側の板塀が盡きてしまふと、思ひもかけず、二人の歩いてゐる右側に近く、廣い水が夜闇の中にも漫々としてたたへてゐた。廣い廣い緩やかな水面である。彼方の方に遠く對岸の灯が點々と落ちて、水の上でギラギラと曳いてゐる。

「海ですか！」と敏子がびつくりしたやうに訊いた。

「いや、海ではありません、海は近いんですが、ここは大川です、隅田川の下流で、もう汐入です、あちらに見えるのが兩國橋です、ずつとむかうに見えるのは月島です」

「ここは何といふところですの？」

「ここは濱町河岸です」

「濱町ツて云へば何だか變な女がゐる處ぢやありませんか、何でも宏さんが濱町に度々入り浸るとか言つて、友一郎がやかましく言つてました事がありましたわ」と敏子はやや輕い聲で言つた、「二人とも道樂者ですからね」

二人は河岸を右に折れて、人の往來の少ない、電車の寂しさうにがらがらと走つて行く音さへも、後の方に遠ざか

つて、また暫くの間ひつそりとする河岸通りを、水の匂ひに心の濕ほひを感じながら、ゆつくりと歩いて行く。
「あなたは品行方正だと言つて、宏さんがひやかすのだか何だか、いつも批評してゐますが、ほんたうにあなたは宏さんとは違つて、嫌やな事一つなかつたのでせうね、わたしはさう思ひますわ」
「そんなに品行方正ではなかつたやうです」と純一は忸怩として言つた。
「わたしは知つてゐますのよ、あなたが何とかいふ娘さんを大變に愛して、その方に結婚を申込なすつたッて事を、それはほんたうですか？……なかなかあなたはしようと思ふ事は勇敢になさると思つて、わたしはその話を聞くと涙ぐましい氣がしましたわ、その娘さんは幸福だと思ひましたわ、其後どんなになりました、今でも御交際ですか？」と敏子は何だかほめそやすやうな、妬むやうな、何かを引き出さうといふつもりらしい、底の知れない問ひ方をした。
彼女の言葉の調子にはやさしい揶揄があつた。
「西尾君があなたに傳へたのは屹度誇張でせう。結婚しようといふ事はその母親に言つて見たんですが、僕のやうな貧乏書生にはやらないと言つて、綺麗に斷はられたのです。思ひ通りに行かなかつたのは、あなたばかりではありません。僕もあなたの激勵の言葉に送られて、えらくならうと思つて上京した當時は、いろいろと夢があつたのですが、今になつて見れば、この六七年間の都會生活で僕の得たものは、自分の魂を賣らなくては此の世の中では生きて行かれない、本當の意味で生きようとすればする程、此の世の中では生きてゐられなくなる、といふ悲しい自覺のみでした。今は文學の方でも、社會主義運動の方でも興味を失つてゐるのです」
「あア、あなたが社會主義者になつたと云ふ事を、宏さんから聞いた時は、わたしはどう云ふ事情でさうなつたか、どんな事をなすつてゐるか……あなたの事だから、思ひ切つた事をするかも知れないと思つて、心配になつて、當分の間、東京から新聞が西尾のところに來るので、その紙面に、(社會主義者檢擧さる)とか、(大菅左門召喚さる)と

か云ふ標題の記事が出てゐると、そんな人の中にあなたの名が若しやありはしないかと思つて、隨分ハラハラして探したんですよ、そして無いのを見ると、ホッと安心しましたわ」

「僕の名がその紙面に出る程、僕は社會主義者として顯はれた人物にはなつてゐないんです、結局……僕は、まだ何者にもなつてゐないんです。然し、僕の心の中には抑へ難い渴望がいつも燃え立つてゐるのですから、何か自分の魂を打ち込んで行けるものさへあれば、僕はどんな事でも遣るつもりです! けれども、そんなものがあらうとは思はれません、そして疑ひばかりはだんだん深いものになつて來て、どうする事も出來ない憂鬱が心を蝕んで堪らなくなるのです! 汝等靑春の希望よ、かつてかくもやさしく我が前に漂ひしものよ、我れは我がみすぼらしくも悲慘なる生を思ひて かくも多かりし美しき希望のうち、ただ死のみが、今日なほ我れに殘れるを知る……心はをののき、かかる運命にはただ一つだに、慰めのあらじとぞ思ふ……これは僕がいつも苦しい寂寥の中で慰めにくちずさむレオパルディの詩の一節です。レオパルディといふのは、伊太利のあはれな厭世詩人でした、彼は一生病と戰ひながら、幸福を求めて幸福を得ず、自由を求めて自由を得ず、懊惱寂寞の中に空しく死んだのです、燃えるやうに愛を求めながら、一つの愛も得ずに死んだのです……」

「詩人にとつては」と純一は聲を勵ました、「本當の詩人にとつては、とりわけ、愛のない生活といふものは、堪へられないのです。愛さへあれば、彼はどんなに苦しみ惱みながらも、兎に角生きて行くでせう」と言つて、純一は默つた。

「…………」

敏子は苦しさうに呼吸づいてゐる!

「詩集なんか出すといふ事からして、僕は今どんなに無意味に思つてゐるでせう、ただただ、僕の氣持はにがいので

す、にがにがしいのです……あなたにこんな事を言つても仕方がないが」
「さうではございませんわ、何も彼もおつしやつて下さい、もつともわたしのやうなものは、何處まで本當の事がわかるか……それは心が及ばなくて悲しいんですが……あなたの惱みはかりそめなものでないといふ事は十分に分ります。愛情といふものが、誰れしもの强い渇望である事は言ふ迄もありませんけれど、その愛といふものが、ザラなありふれたお體裁のいいものでなく、眞實魂と魂との愛ならば、此の世の中にはいくらあるでせう。愛だ愛だと言つてゐる人達の愛も、いろんな利己的な厭やなものに絡み合はされた不純なものに滿たされてをりますわ」
「勿論さうです、先刻あなたが仰しやつたあの娘も愛を知らない娘でした。そして僕自身の愛も、何處まで純粹の愛であつたかと、僕は後で考へる每に、深い羞恥を感ずるのです。よしあの時、あの母親が承知をして、あの女と同棲したらどんなものであつたか、その結果は知れてゐます。同情から出た間柄なんてものは、大抵終りを完うする事はありません。本當の愛は、もつと强いものでなければなりません。その强い本當の愛は、オール・オア・ナッシングです、愛する人のために全世界を擲つ事です。それは死です。その死のやうな愛を此の現實に求めようとすれば、結局何が與へられるでせう？……與へられるものは despair のみです……」
「それは絕望と云ふ事でせう」と敏子が言つた、「絕望の氣持はわたしとてもあなたには遜りません、今度わたしが上京したのも絕望の中の一縷の望みです。はじめ東京へ友一郎が來ると云ふ話があつた時に、わたしはどうかして東京に來たい、そして、先づあなたにも會つたり、その外いろんな事を見たり調べたり、いろんな人を——石塚朋子女史のやうな人を訪ねて、その意見をきいたりしようと云ふ、わたしはわたしとしての大きな目的があつたのです。宏さんが突然あなたを連れて來てくれようとは思ひませんでしたから、住所さへ宏さんに聞けば、わたしがお訪ねしようと思つてゐたのです、友一郎が何と言はうが、わたしはあの人に愛はないのですから、問題ではありません。」

「わたしと友一郎との生活が、どんなつまらない生活かッて事をお話しすれば、あなたはわたしが家出をした事が當然だとお思ひになるでせう、場合によつては東京で職業婦人にならうとわたしが決心するのも當然だとお思ひになりますよ。今は婦人記者とかタイピストとか女事務員とか、いろんな女の仕事も出來てゐるといふ事ですから、女一人食べる位の職業はあるでせう、人のする事が同じ人間に生れてゐて、人並みに出來ないと云ふ法はないと、わたしは信じてをりますわ……どんなに寂しからうとも、虚僞な無自覺な日を送るよりは、生き甲斐があると思ひますわ」

斂子は今では心からしつかりと考へるだけ考へぬいて、何の迷ひもない、何の躊躇もないと云つたやうな調子である。

十

海ですかと、先刻斂子が廣い水面を見て言つた言葉が、純一の心にやはらかな響を曳く。彼は先刻からこの水ばたが、故鄕のなつかしい海ばたでもあるかのやうな氣がする。靜かな夜の砂濱のやうな氣がする。何だか幼い二人にかへつた氣がする。

悲しいこころよい沈默のうちに、純一は斂子の打明話を聽くのであつた。

「わたしが友一郎の妻になつたその翌月です、町に大阪から芝居が來て、それに友一郎がわたしを連れて行つたんです。すると同じ枡に、三歳ぐらゐの女の兒を懷にかかへた小綺麗な女がゐるのです。友一郎がわたしに（梅屋のねえさんだ、よろしくと挨拶するがいい）と言ひますので、わたしは何にも知らないで、いろいろ話ししたり、その兒をだいたりしたんですが、後で聞くと、その女は友一郎の妾であつたんです……」

「その人の兒ですか、あなたが人形を買つて歸るとかいふ女の兒は？」と純一が訊いた。

「さうなんです、綾子つて云ひますの。わたしは子供好きですから、それにその梅屋の女と云ふのがたいして惡い女ではないんですから、綾子が四つの時から引取つて、わたしが自分の子のやうにして面倒を見てゐるんですが、昨年また今度は宅の女中に男の兒が生れました。ですからわたしは自分の腹を痛めない二人の子供の母親なんです。それでゐて、友一郎の言ひ草が言ひ草です、(妾宅の二人や三人持つのは男の腕づくだ、この米子にしろ松江にしろ、大きい商人とか相當に名のある實業家で、妾を一人も持たないと云ふ男があるか、妾を持つのこそ男の器量つて云ふもんだ)と言ふんです――あなたも御存知のやうに、一體あの邊の土地は、風儀の惡いところで、妾宅なんか普通ですから、友一郎に取つてはいい口實でございますわ。けれどそんな事ばかりぢやないのです、家へ來る女中は、綺麗であらうがきたなからうが、片つぱしからみんな手を着けるので、その度び度びにわたしは恥をかくんです。一度女中がお手付きになると、威張り出して來て、手におへないんです、妙にわたしを輕蔑しましてね、暇さへあれば白粉を塗るんです」と敏子は言つて、その女中たちを思ひ出すやうに笑つた。

「それにこんな事はわたしの心一つにしまつて置かなければならぬのですけれど、實は、友一郎の問題の外に、もつと難題があるんです。それはほんとにお恥かしくつて、お話も出來ない事なんですが……宏さんや友一郎の父親があんな人でせう! 宏さんのお母さんの外にも、まだ二三人若い女のお妾があるんです。ですからあちらへ二三日、こちらへ二三日と泊り歩いてゐるんですが、歸つて來ては家のお母さんとやきもち喧嘩をするんです。をかしい事には、一寸可愛らしい女中でしたが、それに友一郎とお父さんと二人が通ひましてね、とんだ鞘當があつたりして隨分滑稽でしたよ。その女中ですよ、子供を產んだのは。今ぢや金で片が付いて、何處か農家へかたづいてゐるさうです」

「わたしが西尾の家へいつた當時も、わたしを馬鹿に可愛がつてくれて、實の娘のやうな氣がするとか、家の嫁はこの米子一のいい器量だとか言つて、何か彼か外から貰つて來てはくれるので、お母さんがやけて、またわたしには當

り散らし、夫婦喧嘩をするといふ始末です。わたしはいつも中に立つて隨分困つてゐたんです。ところが、この春お母さんが御自分の實家に御病人があつて、二週間ほど家を留守にした事があるんです、その上あいにく友一郞が大阪へ二三日急用で出かけてしまつた事がありました、その留守に、お父さんが無理な事を言ひ出しましてね、わたしはずゐぶん困りました。家出つて云ふ直接の原因はそれなんです。その晩わたしは着のみ着のまま跣足でめくら滅法に飛び出してしまつたんです。それからわたしは二里ほど離れた小波村といふところの、父方の親類へ驅け込みましたのよ。小波村、御存知でせう？」

「小波村ですか、淀江の手前の方の村ですね、日野川のむかうですね」

「え、さうです、寂しい海邊の村です。あの日野川の長い橋を、わたしは夜夜中、こはいとも思はずに駈けたんです。あの昔は追剝が出たなんて云ふ橋を越してからの寂しい松林や砂丘に沿うた街道を、先きの方から脅かすやうに聞えてくるドッドッといふ濤の音を聞きながら、夢中で駈けたんですわ、今考へ出しても自分の大膽なのが恐ろしい位ですわ。親類の者はどんなにびつくりしたでせう、幽靈でも來たかと云つたやうにわたしを見つめましたよ」と言つて、敏子は寂しく笑つた。

「いろいろと叔父叔母に賴んで、一週間そこで隱して貰つてゐたんです、けれどその家の人もわたしの實家の者も、誰れ一人離緣には贊成してくれません、辛抱せえ辛抱せえと言ふばつかりなんです――それにはわたしの弟が西尾の家から資本の融通をつけて貰つてゐるので、さういふ事情がわたしを締め付ける大きい原因なのです、つまり、わたしに犧牲になつてくれと言ふんです――たうとう西尾から使ひが來て、それにはてつきり立腹して暇をくれると思つてゐたのとは反對に、惣兵衞さんからの手紙やら友一郞からの手紙やら、中に立つ人の上手なとりなしやら、何やら彼やらで、わたしをのつぴきならず丸めちまふやうな遣り方で責め立てるものですから、わたしもその儘ゐたのでは小波

村の親戚にも、實家の者にも迷惑がかかるばかりなので、考へ直して歸つて行つたんです。すると惣兵衞さんは、まるでわたしをこはいもの扱ひに丁寧にするし、友一郎は友一郎で、何が不足で家出なぞしたのだ、何でも欲しいものは買つてやる、見たいものは見せてやる、少しも無理は言はないつもりだから、おまへの方も馬鹿な事はしないでくれと云つたやうに、いろいろと機嫌を取るので、有難いと思はなくちやならないんですけれども、心と云ふものは一旦ふつつり切れてしまふと、もう二度とは戻らないものと見えて、どうにもかうにも厭やで厭やでならないんです。そんなこんなで、すつかり身體も弱くなつてしまつて、今ぢや夜寢ると熱がいつもいくらか出て、どうも氣分がせかせかして、慍りつぽくなつてゐるんです。わたしには母親ゆづりの病氣があるんです、お母さんがあんな風に長わづらひをして死んだやうに、わたしも不治の病氣にとらはれてゐるらしいのです。醫者はほんの一寸した輕い肋膜の徴候のやうに言ひましたけれど、何しろわたしはそんな輕いものぢやあるまいと思ふのです。西尾の家へ行つてからの氣苦勞が身體にこたへたのでせう。これも誰れを怨むこともありません、みんなわたしの根本の考へが間違つてゐたからです。わたしが間違つた結婚をしたからです。自分の力に及ばない事を思ひ付いて、大變なところへ飛び込んで行つた罰です。けれど、さうかといつて、これで自分の生涯をこの儘泣き寢入りして、うツちやツてしまふと云ふ諦めはつきませんのです、それがわたしの性分です。つまり、わたしはもう一度、生活を根本から遣り直して見たいのです、本當に生きて見たいのです」

かう言つて敏子は純一の意見を聞かうとするかのやうに、ぢつと彳んで、水の方を見ながら、默つてゐる。

純一は敏子がそんなにも戰ひ、そんなにも苦しんで、身心ともに痛み傷つきながらも、なほ、そのあらゆる惡い狀態の中から、何か自分の復活を求めようとする覇氣の中に、悲壯なものを感じた。純一が敏子を限りなく愛するのも、彼女がかう云ふ性格であるからである。打ち見は弱々しく窶れて、かなり長い間の西尾家での奥様としての生活に煩

ひされて、年よりも老けて寂しくは見えながらも、話せば話すほど昔ながらの男まさりな彼女の生々した情感が冴えてくるのである。ぢつと水の方に向いてゐるそのほんのりと闇に白い横顔には、さうした金と色慾との城廓から身を以て逃れ出した雄々しい純潔な少女のその崇美がある。純一は久しい間自分の失つてゐたものが、こんなに近い親しさで、わが手わが眼の前にあるのだと思ふと、不思議な感動に包まれる。

「わたしがもつと身體が丈夫だと何をしても遣つて行けるんですけれども、こんなに弱くつては、心があせるばかりです。けれど、決心はその通りなんですから、どうぞこれから助けて下さい、力になつて下さい、ほんとにお願ひいたします」と敍子は眞によりすがるやうに言つた。

「東京に來てあなたに會ひたいと思つたのも、こんなお願ひが先きに立つてゐたのです。友一郎のことはもう明瞭なんです。たとへ友一郎がわたしに離縁を許さなくつたつて、そんな事は形式だけです。わたしは何度でも家出をしますし、どんな事でもしようと思へばするんです。弟のため弟のためと云ふので、これ迄わたしが犧牲になつていろいろ彌縫して來たんですけれど、それも根本的に考へ直して見れば、わたしの實家もいつ迄も西尾家に隷屬して、そのおなさけでやつと持ちこたへてゐると云ふ風ではつまりません。わたしの問題が片付きさへすれば、西尾の方の手もきれいに切つて、小さいなら小さいなりに手堅い暮しが出來るやうになるでせうから、その方が結句いいのです。それにわたしが東京で都合よく行けば、みんなを東京に呼び寄せてもいいんです。この事は別に案じる程の事ではないと思ひます。友一郎の方の事も同じですわ、あの人の愛は、愛といふよりは玩弄です、あの人にはほんたうの愛がどんなものであるか分りませんわ、極くつまらない氣の毒な人です、氣の毒ですけれどもうかうなつては致し方がありません、もともとわたしとはまるで住んでる世界が違ひます、あの人が傍にゐたつてゐなくつたつて、わたしの寂しさはちつとも變りません。二つの心はあべこべに向いてゐるやうなものです、觸れ合ふ點は少しもないのです。極くつ

まらない無駄話でもすれば喜ぶのですが、わたしはこんな性分ですから、心にもないことを言ふ事は出來ないのです。どう考へて見ても、わたしの結婚は失敗でした、わたしは間違つてゐました……」

「あなたはあなたで失敗者だ」と純一は言ひ出した、「僕は僕で失敗者です。あなたにしても僕にしても、此の世に生きて行くには、あんまり求めるところが高いのです。人からは氣位が高すぎると言はれるかも知れません、少しの妥協もこころよしとしないのだから。けれど、どんなに苦しくとも、それが本當です。この世の中は、卑しい人々や、卑しい行爲や、卑しい感情の世界です。その卑しさに順應してさへ行けば、どんな厚顏無恥な事にも、平氣で馴れてさへ行けば、そんなに苦しまなくとも、兎に角生きて行けるでせう。けれどそんな生活をして、どんなに外からは幸福に見えようとも、それは決して本當の幸福ではありません。それは卑しむべき生活に過ぎないのです。から考へて來ますと、失敗必ずしも失敗ではないのです。反つて、本當の意味から言へば、それこそ眞の勝利ではありませんか。人間が本當に生きることを知り、本當の愛を知り、本當の心の救ひを見出すためには、必ず一度は運命の笞に鞭たれて、その魂を碎かれなければならないのです。寶石だと一度碎かれてしまふと、最早や何の價値ももたないでせう、然し、人間の魂は一度び碎かれなければ、いや、二度び三度び碎かれなければ、ただ動物の魂といふに過ぎないのです。幸福な生活は人間を墮落させますが、不幸は心の救ひとなるのです。不幸な目に遭へば、人間はおのづと心の瞳が開いて來ます、本當の事が分つて來ます。この不幸の中から、わたし達の本當の生活が始まるのです」

「わたしもさう思ひますわ！」と敏子は心から同感したやうに言つた。

「どんなに苦しくとも、本當の生活をやつて行きませう。自ら顧みて疚しくない生活、衷心に何の不安もない生活、そんな生活をするといふ事が、それだけで既に十分の慰めです。僕は今日あなたに會つて、あなたのお話を聞いて、つくづくさう感じました。世間の人から見て、どんなに見窄らしからうと、どんなにあはれに見えようと、自分でさ

へ安心立命が出來れば、それに越した幸福はありません。それでこそ、始めて生き甲斐のある生活と言へるでせう。もつとも、そこまで行くのには、かなり遠い道程がありますから、隨分いろいろと迷つたり疑つたり、絶望したりもするでせう。然し、私達はそれを遣つて見ませう、お互ひに助け合つて遣つて行きませう。あなたがさうして欲しいと思ふ事があるなら、それを言つて下されば、僕はどんな事でもします。お互ひに助け合つて遣つて行きませう！」

「ええ、さうして行きませう、何くれとなく御相談が出來るやうになつて、わたしはほんたうに仕合せですわ！」と敏子は言つて、純一の手を執つて、それに自分の額をさし當てた。彼女のさうした思ひ切つた行爲が、心からの感謝の誓ひだと、純一には感じられた。彼は敏子のうなだれてゐる肩を、自分の胸にしつかりと抱き寄せずにはゐられなかつた。

「あのむかうの方に船のやうな家がありますね、鰻船でせうか？」と敏子が純一の腕の中で言つた。

そこの河沿ひに船がかりしてゐるやうに、水樓が澤山の灯をキラキラさせてゐるのである。

「あれは船料理です、あそこへ入つて見ませうか？」

「あそこへ……ですけど、今晩はよしませう。明日か明後日、もう一度お目にかかつて、その時こそ何處か靜かなところへ行つて、もつとお話をいたしませうよ」

「そんな事が出來るでせうか？　とても駄目でせう」

「駄目なんて事はありませんわ、どんな事でもわたしはするんですもの、友一郎は恐れてゐますわ。若しわたしがさうしたかつたら、今からでもあなたと二人で隱れちまふ事も出來ますのよ、あのずつとむかうのあの小さな家の中へ隱れて住むんです、あなたはお厭やでせうか？」と敏子は微笑んで言つた。

勿論、純一が厭やだと考へる筈はなかつた。けれども彼は默つてゐた。嬉しいために默つてゐた。

「あなたは苦しくはありませんか？」と純一が訊ねた。

「いいえ……なぜ？」と敏子が問ひ返した。

「夜氣は身體に毒です、その上あなたは病氣なんだから、もう歸りませう、あんまり遲くなると？……」

「遲くなつたつてかまひませんけれど……でも大分話し疲れましたから歸りませう、わたし送つて下さるでせう、木挽町まで」

「ええ、送りませう」

「うれしいわ」

二人は河岸をまたもとの方へ引き返して、兩國橋まで歩いて行つた。そこから電車に乘つて、先刻話しながら歩いた道を、木挽町の方へ廻つて行つた。ゆつくり席を取つて、二人はいろんな話をした。國の話である、なくなつた純一の祖母の事、中野信太郎の事。

「中野さんは此頃同じ學校の女の先生と問題をこしらへて、奧さんが泣いたり騷いだり何かして、大分評判になつてゐるんです、中野さんは女に好かれるたちですわ、まつたく女難だわ」と敏子はいい氣持で輕く戲れるやうに微笑んで話した。彼女はほんのりと上氣して、その冴えた眼をキラキラ輝かせながら、純一の膝に自分の膝をより添はせ、自分の重みを純一に持つてくるやうにしながら、何くれとなく、純一の眼色を讀み、彼の心持をあやつりながら、話し續けた。處女のやうに彼女が喜んでゐる顏には、時々急に疲れの影がさして、眼のまはりが暗くなると、病氣から來る憂鬱な美しさが深刻に見えた。

「ぢやあ明日か明後日、あなたの家へ行きますから、一日中家にゐて下さい。ゐらつしやらないと、わたし困りますから」と敏子は念を押した。

「一日待つてゐます、明日も明後日も」

「それぢやさやうなら、どうも有難う、わざわざ送つて下すつて、でも、ほんとに氣が晴れ晴れしましたわ」

敏子はかう言つて、電車の一寸搖れた時に、はずみのやうに、その白い手を純一の肩にかけて、直ぐもう一度吊革を握つた。彼女は身體を斜めにして、幾度びも幾度びも純一に笑みを注いだ。

「では、さやうなら」と、電車が木挽町に來たとき、敏子はもう一度繰返した。

「氣を付けておかへりなさい」と純一は言ひたかつたが、歌舞伎座のはねで、どやどやと入つて來た芝居歸りの客が二人の間を遮つてしまつたので、彼は窓からずつと首を出すと、直ぐ眼の前に敏子が此方を向いて笑つて立つてゐた。美しく、そして惱ましさうに彼女は見えた。

「さやうなら」と彼が聲を投げると、彼女はにつこりして、會釋した。

敏子の別れの笑顏は、忘れ難いものであつた。幸福と不幸とが同時に宿つてゐるやうな彼女の眼は、消え難いものであつた。隣にゐる男が、先刻からの二人の話や、二人の別れ方に、想察の眼を注いで、なほもぢつと自分の方を注意して見てゐる事を感じながら、彼は羞恥よりも、誇りと幸福との感に浸つた。

「今、自分は幸福である！」

彼の幸福の意識は、――だが、長くは續かなかつた。電車が夜の濠に沿うて、次第に暗いところへ行く時分、心もまた暗い方へと沈んで行つた。

「あんなにして歸つて行つたが？……」から考へると、彼は彼女が歸つた時、既に友一郎が歸つて來てゐて、何か面倒な事が起りつつあるのではないかと思はれて、彼女をああして、一人歸したと云ふ事が、取り返しのつかない事をしてしまつたやうに、胸騷ぎがするのだ。「どうぞ何事もなくすんでくれればいいが……」と考へると、またさう考へ

る事が一層の寂寥をさそふのだ。彼はあだかもたつた一人で吹きさらしの野の中にでも立つてゐるやうな、直ぐにもどうにかせずにゐられないやうな心持に襲はれて來た。苦しい事が次ぎへ次ぎへとやつてくるやうな豫感とともに、本當の喜び、本當の生活が今度こそ自分に現れてくるといふ事をも、彼は豫想した。

牛込の宿に歸り着いた時は、何だか身體中が恐ろしい程に見通し難い靄のやうなものに、幾重にも包まれてゐるやうに彼は思つた。彼は机にむかつて、長い間電燈の灯を見つめてゐた。彼はもはや敏子と離れて生きて行けない自分を痛切に意識した。

「自分はこの感情に、身を打ち込むんだ、これが自分のたつた一つのものだ！」と彼は言つた。

十一

純一は敏子が訪ねて來るのを今日も一日待つてゐる。

君がまことのその愛に
むくゆるものをもたぬわれ、
あらず、ちひさきわが愛を、
さはれ、まことの愛をもて、
やさしき君にむくいまゐらす。

昨日も一日彼は待つたのである。夕方まで待つてゐたが、來たのは舟井國之助一人であつた。

「やア、どうしてゐる？」と彼は障子の外から聲をかけて入つて來たが、純一の机のそばに胡坐(あぐら)をかいて、

「どうしたんだ、何だかぼんやりしてるぢやないか」

から言ひながら彼はだぶだぶした懷から夕刊を取出して、純一の机の上にはふり出した。

「たうとう面白い事件になつた、見て見るがいい、大菅左門が江東奈枝と一緒になつて、もう東京なんかにゐやしない、二人が連れ立つて房州は鏡ケ浦に佗住居といふシヤレ方だ。此間俺が例の新しい女大會の事で隅田の家へ行つて見ると、二人とも留守なのさ、仕方がなく歸つてくると、小石川の植物園の横で、隅田順と奈枝とが何かひそひそ話しながら、連れ立つて歩いてくるのにばツたり出會つたのさ。二人とも暗い顏をしてゐたが、隅田順の顏と言つたら、さア何と言つたらいいかナ、メランコリヤな表情とはこれだナと俺も思つたよ。何だか樣子が變なので、さすがの俺も大會の相談をもちかける氣にもなれないで、そこそこに別れたがね、今度の事で二人で相談でもしてたんだらう。隅田順のあの時の苦しさうな陰氣な顏は今も目に付く。然し、この新聞で見るとえらい意氣地がないやうだが、一體あの男はどう云ふ男なのだい？　俺はまだ一二度でよく分らんが……」

「あア、あの男は變つてゐる……」と純一は言ひながら、その夕刊を手に取つて見た。それには新聞記事獨特のセンセイショナルな書き方で、大菅左門と江東奈枝子との戀愛事件をさも天下の大事件ででもあるかのやうに大袈裟に書き立てて、なほそれに大菅夫人や神山女史などの談話もずらりと並べてある。いつかの朝川の送別會の時に、巖本閃光が今に我々を驚かすやうな事が起きますよと豫言した事件がこれなのだ。あの時、前河がそんな事は絕對にないと打ち消したにも拘はらず、やつぱり事實だつたのかと純一は思つた。

大菅左門が多年同棲してゐた年上の夫人との間に、何か感情の上の破綻を來したか、それとも單に年上の女を妻とした男の經驗する愛情の上の不滿からか、或ひは主義の人としてのもつと深い考慮の結果からか、兎に角、新しい女と呼ばれる知識階級の年若い女に興味を有つて、曾つては神山高子を近づけ、今は江東奈枝子に近づき、思想上の共鳴者、主義の上の同志を彼等の中に求めてゐたとすれば、彼が何處かクリスティアン風な堅い感じのする、そして愛を

強ひ求める神山を避けて、いかにも野性的で熱狂的で、ジプシイ娘のやうなチャアムを有つた奈枝子の方に傾いて行つて、彼女と共に新生活を始めようとしてゐるのは、無理のない事と言はねばならない。今迄はあの女性關係には極めて恬淡な大菅にそんな事があるだらうかと純一も疑つてゐたのだが、かうしてそれが事實だと分つて見ると、何だかかうなるのが當然の事のやうにも考へられる。大菅のやうな、遊戲的な取引的な女性關係には、曾つて係はつた事のない男が、そして思ひ立つた事は何でも遣り遂げるだけの意志の力をもつた彼が、一人の女性に愛を感じた時、一切の顧慮を棄て危險を冒しても、一意その愛する女を得ようとするのは、彼としては不思議でない事のやうに思はれる。その上、彼にはかうした行爲をジャスティファイするための理論が缺けてはゐないのだ。

「兎に角、大菅といふ男はえらい男だナ、」と舟井が言つた、「厭やになつた古女房や古い色女を棄てるのは何でもないが、現に二人も子供のある人の女房を正々堂々と奪つてるんだからナ。だが、隅田だつて默つちやゐないだらう、俺のやうな者でも默つちやゐないナ、出刄庖丁なんか振り廻さないにしても、自分のためにも自分の可愛い子供のためにも、これぢや默つてすまされないよ」と舟井は彼のやうな今以て家を成さないやうなズボラな男に似合はず、珍らしく昂奮して言つた。

「然し、この問題はなかなか君が思ふやうに單純には行かないだらう」と純一もかなり昂奮した氣持で言つた、「隅田君は恐らく何もせず、何も言ふまいと僕は思ふ……なぜかと云ふと、あの男は、これ迄、社會の缺陥なり罪惡なりを端的に現してゐる事件が起つて、それに對して奈枝子がムキになつて激昂したり憤慨したりするやうな事があつても、自分は皮肉な顏をしてそれを眺めながら、可哀さうな目に遭ふ奴はそれだけの力しか有たないからだ、弱い奴が強い奴に負けるのは當り前だと言つて、そんな事はてんで問題にしないと云ふ風だつたのだ。そしてそれはスティルネリアンとしての隅田の隅田らしい十分の思想的根據から出てゐるもので、その點で彼の思想は大菅左門の個人主義と

は、その方向こそ違へ、相ひ遜らない程徹底してゐると言へる。厭やになつたらいつでも別れようといふ約束で奈枝子と同棲してゐたのも、その個人主義から出たものだ。それだから今自分よりも強い、自分よりも積極的な一人の男が現れた場合、彼としては默つてゐる外はないだらう。尤も、隅田だつて人間だから、苦しいのは苦しいに違ひない、然し、どんなに苦しくとも彼は默つてゐるに違ひない。彼はあんなに見えて、恐ろしく誇りの高い人間なのだ、自分に對して恥かしいやうな事は出來ない男なのだ、彼は、さうだ、消極的な一種の强さを有つてゐる……」

「それで見ると、細君を奪られてもえらい、奪つてもえらいと云ふ事になるナ、俺なんかにはわからないナ。だがそんな事はどうでもいい、ただ俺は大菅のお蔭で新しい女大會の目論見がフイになつて困つちやつた、折角目鼻がつきかけて來たところを、今奈枝に逃げられちや當分駄目になつちまふ、飛んだ番狂はせだよ……だが、まあいいや、計畫は他にもいくらもあるんだからナ……」

かう言つて彼はその新しい計畫の一つ――雜誌『大雄辯』について話し出した。それは月二回發行の四六二倍版十六頁位の新聞型の雜誌で、彼が一人で速記もし編輯もし經營もしようと云ふのである。彼は大雄辯と言つても實際は小雄辯だがナと言つて苦笑しながらも、今に『雄辯世界』のお株を奪つてやるんだと意氣込んで言つた。彼は『雄辯世界』の社主に對しては、今以て鬱憤が晴れぬらしく、その企ても、一つはさうした對抗意識から考へ付いたものらしい。

「君もウンと盡力してくれ、何か佛蘭西の面白い戀愛小說でもあつたら飜譯してくれないか、每號連載したいんだ。今のところは原稿料は出せないが、先きになつて大いに儲かるやうになつたらウンとお禮はするよ」などと舟井は景氣よく言つた。

彼はかうした事を喋りたいだけ喋つた後で、最近懇意になつた神樂坂裏の生花の師匠の娘がおとなしくつて可愛い

から、一つ君のために骨折つて見たい、いつ迄も一人でゐると、この俺見たいに世間から馬鹿にされるなどと一しきり言つた後で、

「一寸小遣ひを少し貸してくれ、二圓位でいいんだ」と無心を言つた。純一は蟇口の中にあつた紙幣の中から二圓出して、こころよく彼に渡した。彼の蟇口の中には、詩集の稿料として、細谷の方から屆けて來た、四十圓ばかりの金があつたのである。ただ本を出してくれさへすればいいと思つてゐた純一には、そんな事は全く思ひ懸けない事なので、一度手紙でことわつて遣つたのであるが、細谷の方からは、是非取つてくれるように、詩集も幸ひに思つたよりは景氣がいいからと折返し云つて來たのである。

「君はなかなか景氣がいいナ、何だか蟇口がふくれてるぢやないか、もつと貸さないか」と舟井は居直るやうに言つて笑つた。

「それはよさう、澤山も持つてゐやしないが、持つてゐたにしても、僕だつて時には纏つた金の要る事もあるんだよ」と言つて純一は笑つた。

「此頃はみんな金廻りがいいと見えるナ、この間も深澤が百圓札を持つてゐた！　あの男と百圓札とを考へると、どうも辻褄が合はんけれど、まさかかつぱらつて來たんでもあるまい、あの男にそんな氣の利いた事は出來ないからナ。まあ一緒に暮してゐるあの女琵琶師の方からでも入つたんだらうナ」

「深澤君だつてそれ位の金も入る時には入るだらう、此頃どうしてゐるかね？　いつ見ても幸福さうだね」と純一が言ふと、舟井は急に面白さうな顏をして、

「いや、此頃はさすがの呑氣坊の奴も少々弱つてるんだ、彼奴此頃痔が惡くつてね、變に腰をかがめて歩いてゐるんだ、近々肛門病院に入るから、當分留守だと言つてゐた。肛門病院はいいぢやないか、あの男にあつらへ向きだ、あ

の男が肛門病院へ入るのは、江添忠治が養老院に入るやうなもんだ」

こんな下らぬ理窟を喋つてから、彼は二圓を携へて出て行つた。

その後で純一は、舟井が置いて行つた夕刊を、幾度びも繰返して見た。彼は奈枝子を失つた隅田順の苦衷を考へずにはゐられない。——あの年の程の知れぬ青白い、いかにも都會人らしい、憂鬱な彼の容貌に、保ち切れない苦痛が澁面となつて、泣くにも泣かれず叫ぶにも叫ばれず、冬の日の曇天のやうに暗憺としてゐるであらう事を考へた。

彼は奈枝子をどんなに愛したであらう。まだ紅い襷をしめてゐた子供上りの小娘の生き生きした性格を愛した彼は彼女にまづ英語を敎へたり、エンマ・ゴルドマンなどの著書を讀ませて思想上の覺醒に導いたり、エレン・ケイに私淑する石塚朋子女史を訪問させたり、『ブリュウ・ストッキング』のグルウブに加はることを奬勵したりした。それゆゑ彼女は同棲してからも、彼の事を先生先生と愛敬して呼んでゐた位である。彼に取つては奈枝子は可愛らしい傀儡であり、彼女がえらくなつて、やがて新日本の婦人の先覺者となるといふ事が、彼としては珍らしい夢であつたのである。ところが、奈枝子が『ブリュウ・ストッキング』の生んだ唯一のいい芽生えとして、石塚朋子女史その人よりも遙かに本物だと、一種のシャアラタニズムの批評家のおもはくあつての激賞が人氣を喚んで、とみに世間的名聲を贏ち得て、方方にその原稿が金となる頃から、適意からの驕慢の氣分に驅られたワイルドな彼女がノンシャラントな彼に對するあきたらなさが——凡そかうした境遇に陷つた男女が大抵は乘り上げる暗礁が——始まつたのである。不幸な乖離が始まつたのである。

彼の惱みは並々ではなかつた筈である！　なぜならば、彼にはそんな場合、普通の者がするやうに、一圖に奈枝子を壓迫し束縛するといふ氣にはなれなかつたのだ。それには彼自身の誇りがあり、自他の自由を尊重する彼自身の生活信條があり、また貧乏だから仕方がないと云ふ言ひ分もあつたのである。然し、貧乏は往々人間の心をもてあそぶ、

餘程信念の强い者でなければ、その飜弄を免れない。とりわけ女は弱いものである、彼女とても女である、彼女が殆んど收入のない良人と、二人の子供と、貧しさを呟ちつづける姑との重荷を負はされて、彼女のしたい勉强も十分に出來ず、どんなに苦しみ、どんなに惱んだかは想像に餘りがある。つひに彼女が良人を棄て、子供を棄てても、なほ且つ自分一人の生活を求めたのは無理はない。厭やになつたらいつでも別れようと云ふ約束のもとに同棲した彼の結婚生活は――自覺した新時代の男女が結婚の樣式の豫想と實現とを目ざした企ては――こんなに殘酷に彼の希望を破壞したのである。奈枝子に對してその愛を失つてゐない彼は、奈枝子からの別居の請求、愛のないと云ふ告白によつて、無慘に自分の全生命を轢殺されたと言はなければならない。けれども誇りの高い彼は、自他の自由を尊重する彼は、彼女の別居の請求を容れ、その離婚を許したのである。

大菅左門は三人の女――岡よね子、神山高子、江東奈枝子、この三人の女を同樣に愛すると新聞記者に談つてゐる、宛かも世間全體に挑戰するやうに。神山高子も江東奈枝子も、それがさも新道德、新戀愛であるかのやうに、この極端な自由戀愛の可能を說いてゐる。

見よ、大菅左門は獅子のやうに荒れてゐる！　三人の女を意の儘にして、自ら呼ぶに法外人、惡魔の名を以てし、彼の嘲るブルジョアの道德を恐るるところなく蹂躙してゐる！

「願ふものには少しも與へられず、脅かす者には僅かを與へられ、無法を働くものには凡てを與へられる。」これは曾つて彼が『現代思想』誌上で、『無法論』と題して書いた一文の冒頭である。この無法論をもつて、戀愛事件を肯定した彼の言葉には、純一は苦笑する。この無法論は、恐らく多くの實際運動者に取つては、遵奉すべきプリンシプルではあつても、純一に取つては、無條件に肯定の出來る理論ではないのである。純一は先天的にあらゆる無法を厭ふ。この性情が彼をして、今なほ純然たる實際運動家の仲間たる事を許さないのである。

「だが、無法をするより外の途がない場合があつたなら？　そして、さういふ場合は、この人間の生活には確かにある！　そして、その場合には、無法必ずしも無法でない。否、一體、無法とは何だ？……」

純一は夕刊をそこにはふり出して、暫くのあひだ、この燃ゆる苦惱の渦中に喘いだ、長いあひだ喘いだ。彼は机の上で空になつた幾つもの敷島の箱を小さな鋏で細かに切り刻み、その切屑を又もや細かく切り刻んで、長い長い間、ぼんやりとすわつてゐた。やがて彼は呟いた、

「どうして彼女は來ないのであらう？　何か止むを得ない事が出來たのだらうか？　いつそ、これから出かけて行つて見ようか？　だが、この場合出かけて行くのはどんなものだらう……彼女のために……」

敏子の事を考へれば考へる程、友一郎のあの顴骨の張つた、眉目の間に冷薄な氣分の見える顏が押し迫つてくるのを感ずる。こんなに待ち望んでゐる者が、待つてゐる者の手に來ないのは、ただその一人の男の爲めのみであると考へる。彼は自分が今迄こんなに一人の人間の存在を厭ひ、且つ憎む感情に驅られた事はない事を意識する。

「あなたもですナ、自分の一人の身の處置も出來ない癖に、社會の改革なんて事を考へるのは、ちと本末を顚倒した事だと思ふですなナ。あなたなんぞも東京で社會主義者なんかになつて、そんなにされてゐるよりも、一つ國へ歸つて來て、商賣をするなり百姓をするなりして、もうそろそろ妻帶もなすつて……」と、かう言つてまじりと此方を見た友一郎の眼！　彼はその眼を正面に見る、眼は互ひにこの事を言ふ、身を滅ぼすか、或ひは滅ぼされるか？

「ああ、彼女が來てくれたら」と彼は心を追求する、「もう彼女を返しはしない、決して返しはしない。もともと、彼女は自分のものだ、自分のものを奪はれてゐたのだ、今こそ、自分はそれを奪ひ返すのだ！」

「今こそ自分の生涯のわかれめである」と彼は考へる。彼はあらゆる事を考へる。彼女が自分のものでなければならないと考へる。彼は彼女を得なければならないと考へる！

君を得ずに生きてあるより、
君を得て死なんとおもふ。
いとたかき譽れを得るも
身を墓となして生きんより、
世に忘れられ、沙漠のはてに
ここに眠るとも知られずに
朽ちて行くとも。

純一は敏子が言つた言葉を思ひ出す、（こんなに弱くつては、心があせるばかりです。けれど、決心はその通りなんですから、どうぞこれから助けて下さい、力になつて下さい）と敏子が言つた事を思ひ出す。記憶に殘つてゐる敏子は自分のやさしい愛護者であり、尊い守護神であつたのに、年を隔てて逢つて見ると、彼女は身も心も痛み傷ついて宛かも唯一の救ひの如く、自分にその靑白い手を差しのばすのである。純一はそれを考へると、自然の深風な攝理を感ずる。不幸が互ひの救ひとなり、碎かれた事によつて本當に生きる事を感ずる。彼は自分の男性としての力を意識する。いかに彼女はかよわい女性であつたであらう！　さうしたかよわい彼女のために、自分はどんな苦痛をも恐れないと考へる。

身をくるしみにゆだぬるは
ああ、ただひとりのあればこそ、
ひろき世界にひとりのみ
われを涙にひき入るる。

今日こそ來なければならないと思つて、朝から待つてゐるのだが、晝過ぎになつても來ず、つひには夕方になつても來ず、彼女はまだ訪ねて來ないのである。

敏子が訪ねて來るといふこの時にあたつて、彼が詩集からの稿料を有つてゐると云ふ事が、こんな些々たる事、彼には折りからの慰めに感じられ、謂はば貧しい自分のやうな者の一番富んでゐる時に、彼女の訪ねて來るやうになつたのを神に感謝したい氣持なのである。彼は彼女のためにその路を花で飾り、そのすわるところに美しい絹をかけ、彼女の好む物の善美のために、この囊中を傾けたいのである。それなのに、彼女は來ないのである。

「美しい花でも買つて來よゝか、それとも御馳走を買つて來ようか」こんなに思つて彼は外出しようとしたが、留守中彼女が來るかも知れず、萬一ほんの一寸した留守の間に彼女が自分を訪ねて來たなら、留守だといふ事によつてどんなに彼女が寂しいと思ふであらうと思ふので、今もう少し今もう少しと、いらいらしながらも、ぢつとすわつて待つてゐた。

「龍田さん、電報ですよ」と言つて、宿のおかみさんが障子を開けて、彼の目の前に二つ折りの電報を出した。

「昨日も今日も一日お出かけにならなかつたやうですね、ちつとも運動しないとお身體によくありませんよ」と親切に言つて下りて行つた。

「敏子から來たんだ、これを見れば分る」と純一は思ふのだが、それを開いて見るのが恐ろしかつた。彼の先づ考へる事は、あの時の彼女の歸宅が餘りに遲かつた事である、必ず夫婦の間に面白からぬ事が出來た爲め、一歩も外へは出られないのだ、と云ふ事が考へられるのだ。

思ひ切つて封を開くと、片假名の讀みにくい文字が七字目につく。

ケサジロシンダ

純一は變な氣がして、ぢつとその文字を見詰めた。シンダとあるのが純一には、はつきり讀まれた。發信人を見るとヒロタとある。

「何だ！」と純一は思はず言つた。彼は急にがつかりして、その電報を机の上に置いた。そしてぢつと見詰めた。

數分間たつてから、彼は考へるともなく、死んだといふ從弟の次郎――昔、一緒に働いたり遊んだりした利巧な少年――を思ひ出した。

純一は東京へ來てから七八年にもなるが、未だ一囘も次郎から手紙を貰つた事もなく、自分から手紙を出した事もないのだ。時々の母の手紙で、次郎が親戚の南の家へ養子に行つてゐる事、廣田の叔父が南の家を好き勝手に支配してゐる事、次郎には家內を貰つて、子供が一人か二人ある事などを知つてゐる位なもので、病氣をしてゐた事さへも知らないのに、突然かうした死亡の電報を打つたのはどうした譯であらうと考へた。

勿論、次郎の死亡を知らせてくれたのは、叔父が自分に對して、もう以前のやうに立腹してゐない事の裏書きのやうなものであると共に、自分の事、自分の子供の事と言へば、大小となく、他人に吹聽して、他人も自分同樣喜憂を分つべきものだと思つてゐるところに、叔父の性格がありありと見えるやうに思つた。

「然し、手紙で言つてくれればよささうなものに、どうして電報にしたのだらう？」

十二

敏子は來ないばかりでなく、手紙でも來ればと思ふのだが、その手紙さへも來ないのである。いらいらしい、苦しい日が二日程過ぎた。もう國へ歸つてしまつたのであらうか、まだゐるとすれば、あんなに「しようと思へばどんな事だつてわたしは出來るのです、友一郎の思はくなんか問題ではないのです」と言つた位であるから、訪ねてくるの

をやめたとすれば、それは友一郎からの事情ではなく、敏子自身の事情でなくてはならないのだ。

「彼女は僕を何と思つてゐるのであらう?」と純一は思つた。

純一は久し振りに會つた敏子が、「あなたばかりが救ひです」と言つて、その手を差出したあの事を考へる。「あんな絶對の信頼を見せておきながら、こんな遣り方をするとはどうしたのだ? 自分が來なければ、なぜ僕を呼ばないのだ? なぜ一言でも事情を知らせて來ないのだ? 今はもう昔のやうな二人の間柄ではないのだ、そしてこの僕といふものを、こんな風にないがしろにするといふ法はないのだ……だが、想像も出來ないやうな突發的な事件でも起きたのではなからうか?……」

彼女が東京にゐるかゐないかは、西尾宏の家へ訊きに行けば直ぐ分る事だ、とは思ふのだが、あの明敏な西尾宏の眼は、苦しみを二重にする。

たうとう彼は憑かれた人のやうに、家を出て、電車に乘つて、木挽町で下りて、かの水明館の方へ歩いて行つた。彼はつかつかと、かの玄關に立つて、聲をかけた。あの時の女中のどちらかが出て來る事と思つてゐると、かなり年とつた番頭が出て來て、

「ハイ、どなた樣で」といぶかしさうに訊ねた。その眼付には、かうした種類の人間の、一目で相手を値打付けようとする不快なものがあつた。

「西尾さんはおゐでですか?」

「西尾さんと云ひますと、あの鳥取から御夫婦連れでお出でになつてゐたあの方ですなら、もう手前どもにはおゐでになりません」

「もう國へ歸りましたか、いつ歸りましたか?」

「左樣ですナ」と番頭はややうるささうな顏をして、「急用が出來たとかで、二三日前お立ちになつたやうです」
純一はあの夜の翌日だと直ぐに思つた。彼は「何かあつたのだ」とはつきりと感じた。
「友一郎の激怒、友一郎の虐待、——無理に、無理に引つ張つて歸つたのだ、手紙一つさへ書く事が出來ず、引つ張られて歸つたのだ」と純一は激昂して考へた。
その夜、純一は、宿の附近の酒場——ヤマニ・バアで、痛飲してゐた。飲めば飲む程、彼は蒼くなる方であつた。彼の父淸太郎も、矢張り醉つて蒼くなる方であつたし、酒を飲む程沈鬱になるのも、同じやうであつた。彼は案外大酒であつた、自分ではそんなに飲めようとは思はなかつたのに、この四五年の間の憂鬱な生活の中で、彼はブランデイでもウォッカでも、何でも飲んだのだ。
その翌夜も、彼は同じ酒場の卓に片肱を突いて、見も知らぬいろいろな醉客の放談に耳を委しながら、旨くもない酒を默つて飲み續けてゐた。
「いつそ思ひ切つて西尾宏のところへ行つて見ようか」と彼は杯を卓上に置いて考へた、「だが、西尾宏に會つたところで、どれ程の事を知り得るだらう。いや、彼は二人が歸國した事さへもまだ知らぬかも知れない。よし知つてゐたところで、自分は彼に何を訊かうと云ふのだ？ 敏子はもう國へ歸つた、なぜ歸つて行つた？ 歸つてどうするつもりだ？ 自分が訊きたいのは、その敏子の心だ、その敏子の心は、西尾宏の寸毫もあづかり知るところではない」
さつきから純一の隣の卓子(テエブル)で、自分の子供らしいのを二人腰かけさせて、何か食べさせながら、自分はチビリチビリ酒を飲んでゐる三十五六のよれよれの單衣を着た男が、十四五の女中を呼んで、
「ねえさん、カツ一枚」と註文した。
二人の子供は、先刻(さつき)から食べたり玩具(おもちや)をいぢつたりしてゐる。姉の兒の持つてゐる玩具は、いろんな繪を兩面に書

いた細長い紙を編み合せてあつて、パタンと叩いてあけて見ると、引つくり返つて裏の繪が出てゐるといふ風に、次ぎへ次ぎへと叩いて行く毎に新しい畫面が現はれるのだ。
「お父さんに見せれ……」とその男は、女の兒から玩具を取つて、自分で二三度パタンパタンして見てから、
「フン、これは面白い、いつ誰れに買つて貰つた……お母さんにかい……これは面白い、御覧になつちやいかがです」
と言つて、その玩具を純一の方に出した。
「ア、どうも……」
急に途徹もない子供の世界へ誘ひ込まれた純一は、あわててその玩具を受取りながら、二人の子供が今にも若い小父さんが、パタンパタン始める事と思つて、目をみはつてゐるにも拘らず、その玩具を卓子の上に置いた。
「あなたは學生さんですか？」とその父親は馴々しく訊いた、「御近所ですか？」
「いや……」と言つて純一は相手の顔を見た、「この近所です」
「いけるお口ですか、どれ位いけます？」
「たいして飲める方ぢやないです、あなたは？」
「僕はまあせいぜい三本位ですナ、その代り始終飲まずにはゐられないのでしてナ、始終ここへやつて來るんですよ、家は直ぐこの裏の方でして……」
彼は話好きと見えて、女中の持つて來たカツレツを二人の子供に分けてやつたり、自分の杯に酒を注いだりし乍ら、
「あなたは矢張り酒場がお好きでせうナ、どうも縄暖簾の居酒屋へ我々が飲みに入るといふわけにも行かず、料理屋は肝腎の酒や肴よりも、白粉をべたべたつけた女で金を取らうと云ふんだから、本當の酒を飲みに行くところぢやない、それに何しろ高いですからナ、我々には酒場が一番似合ひですよ。つまり、時代の要求だつたのでせう、淺草に

カミヤ・バアが出來てから、あちらにもバア、こちらにもバア、實にバア、バアと澤山バアが出來ましたナ……」
すると傍で父親の口許を見てゐた二人の兒が、くすくすと笑ひ出し、男の兒はバア、バアと口眞似をする。父親はそれを制しながら、
「ところで此のヤマニ・バアは、あなたも御存知でせうが、此の少し先きの有名な細暖簾のどぶろく屋飯塚氏の矢張り一門ださうでしてナ、本店は淺草の大きな酒屋ですから、一寸廣告の意味もありましてね、安い金で割合ひにいい酒や肴を出すので、一寸手輕に飲めるから便利ですよ」以下數十言、ヤマニ・バアの酒場としての由來沿革を雄辯に話してゐるうちに、いつか話は日本畫家論に轉じてゐる。
「日本畫家として立つ事も實に困難ですよ、世間ぢや日本畫家とさへ云へば、鼠の尻尾みたいな松の樹一本かいても、それが五十圓にも百圓にもなるから、こんないい商賣はないやうに思つてゐるが、どうしてどうして、そんなもんぢやない。卑しい手段で虚名を博したお蔭で、そんななぐりがきをやつては、榮耀榮華に耽つてゐるものがあるかと思へば、可惜立派な才能を有ちながら、そんな卑しい事が出來ないばつかりに、世間に出られないで悶々と苦しんでゐるものがあるのです。今の世の中ぢや實力よりも虚名ですからナ、何でも廣告術ですよ。尤も、文展といふものがあつて、誰れでも出品が出來るから、實力のあるものはどんどん世の中に出て行けるやうに思はれてゐるが、それがまた問題です。文展にさへ通れば傑作と信じて、世間の有象無象は無上に有難がるものだから、今では文展にパスするとしないとで、畫家はガラリと生活狀態が變つてくると云ふんですからナ、皆が文展のために血眼になつて出品して、落選と聞いて發狂したり自殺したり、離緣問題が起つたりするのも無理はありませんテ。ところで、その文展がです、美術奬勵とかいふおかみの有難いお趣旨で、畫壇のお歴々が嚴重な審査を經て採擇するといふ振れ込みは立派だが、その內情はどうです、醜陋の極です。だから始終紛擾があつたり、脫退したり、墨塗事件が起つたりするので

す。どうしてどうして、やつぱり情實ばかりでさア。審査員は銘々自分の弟子を入選させて恩を賣らうとするし、一方世渡り上手の連中は拔目なく立廻つて、お臺所から取り入るんですからナ。世の中はかうしたもので、實力はなくとも、大家に取り入つたり、當て込みをやつたり、廣告がうまかつたり、俗臭紛々たるヤマカンの連中が成功するんです。だが、そんな卑屈な事や、卑劣な事のしたくない、何處迄も自分の獨力によつて立ち、自分の信念を曲げないでやつて行かうとするものは、忽ち赤貧と取ッ組み合ひをしなくちやならない。赤貧ばかりぢやない、此方が眞劍であればある程、さうしたお利巧な連中はそれを煙ッたく思つて、やれ變物だの狂人だのと言つて、どうかして世の中に出すまいと邪魔をするんです。そんな卑劣な奴等ばかりでさア。だがナニ、どんなに邪魔をしようと、此方には信念があるから構ひませんよ、またそれだけの覺悟がなくッて、此の道に入るものは不覺と言はざるを得ないです。……こんなわけで、實に、生きて行くのは困難です、殊に眞のアーティストであればある程、生きて行くのは困難です。然し、それだけに淸節を守つて、名利の上に超然として、一本の彩管に生涯を賭すると云ふ事は痛快な事です」

「何に限らず」と純一は彼に答へた、「世間的に成功するものの遣り方は、十中八九卑劣なものですが、またそれでなくては世間に立つて名を成す事は出來ないのかも知れませんが、そんなに迄卑しくならなければならないかと思ふと、淺猿しい氣がしますね。殊に、日本畫家の方面には、隨分卑しい幇間的態度で俗惡な富豪なぞに媚びて行つて、その歡心を買はうとするやうな傾向が烈しいやうですね。文展なぞでも、新聞で見ただけでも、そのいい加減なものである事、いろいろな情實に左右される事、こけおどしや當て込みの作品の多い事が分るので、僕なんか一向見に行く興味もないのですが、――實際、あなたのやうな方には、そんな空氣は堪らない事だらうと思ひます。然し、さういふ世俗的な一時の成敗や得喪利害を全然眼中に置かないで、確乎たる自分の信念――藝術的良心に殉ずると云ふ事は、たとひその爲めに、その作品が毫も世に認められず、空しく陋巷に埋れ果てようとも、眞の藝術家としての本懷です、

それでこそ本當に生きた事になるのです。僕はあなたのお言葉には全く同感します。恐らく凡ての日本人はさうでせう。僕は繪の事はよく分りませんが然し、洋畫よりも日本畫の方をずつとファミリヤアに感じます、恐らく凡ての日本人はさうでせう。油繪が濕潤な日本の空氣に適しないと云ふ事は別としても、僕はいろいろな點で洋畫よりも日本畫の方に十分强味があると思ふのです、それだけ今の日本畫が、手先きの器用と熟練ばかしの、精神のない、コンヴェンショナルな、薄ッぺらなものになつてゐるのを殘念に思つてゐるのです。恐らく、すぐれた本當の藝術家が出て來て、この頽廢期の日本畫に、新しい生命を吹き込んで欲しいと思ふのは、僕一人ぢやないでせう」

「全くです、全くさうです！」と日本畫家は卓子を脇の下にたぐり込むやうに身を乘り出して、いかにも百年の知己を得たと云ふやうに、酒杯をも忘れて話しつづけた。

「御覽の通り、僕なぞは、まだ取るにも足らぬ一介の窮措大で、三十未だ自信の大作も成さない身ですが、然し、何處迄も純粹な日本人の精神に則つて、本當に日本の土から生れた、日本人の心に最も感動を與へるやうな作をしたいと、いつでもそればかり思つてゐるのです、いつかは會心の作を以て世に問ひたいと思つてゐるんですが、ついドらぬ間に合せ仕事にかまけてしまつて、いや實に、古人に對して汗顏の至りです。然し、此頃のヤマカン的な畫壇の風潮を見ると、僕と雖も默するに忍びないんです、一體此頃のあのいやに洋畫かぶれのした作品は何です！　今年も文展が開かれたら、行つて見て御覽になるがいい、一見嘔吐を催すやうな、當て込み一方の、油繪もどきのゴテゴテしたイカサマものが、羽子板の押繪そつくりな美人畫なんかと一緒にウンザリする程並ぶ事でせう。殊に、此頃の大澤竹波の傾向と來たらどうです、あれが未來派といふのか知らんが、あんな奇怪な繪の何處が面白いんです、何處に藝術としての氣韻があるんです……」

四列に屈折した飲臺(のみだい)の兩側の椅子は、勞働者、學生、會社員などで、八分通り滿たされてゐる。正面には幅一杯の

鏡の下に、ウヰスキイ、コニヤック、ブランデイ、ウォッカなどの洋酒の瓶が美々しく列んで、鏡に映る影と二重になつて一層多く見える。鏡は純一のかけてゐる横側の丸卓子の横の壁にも三つほど嵌め込んである。その鏡には上部から兩緣にかけて、靑や紅のペンキで、それぞれ櫻の花だとか葡萄だとか草花だとかを描いてある、その一つの鏡が、その隣の鏡との間の壁に凭れてゐる純一の右側で、懸命になつて氣焔を擧げてゐる日本畫家の、いかにも生活に窶れたやうに頰のこけた橫顏と、まだ何の苦しみも知らぬ無邪氣な姉弟の笑顏とを映してゐる。下ぶくれの愛らしい、父親似の女の兒が時々その鏡をぢつと見ては、あちこち首を振つて見たり、おちよぼ口をしたりして、いかにも女の兒らしい素振りである。

二つある入口の右側の方のドアを押して、二人連れの男が入つて來た。もう何處かでしたたか飮んだと見えて、酒氣を帶びて一人は赭く、一人はやや蒼い顏をしてゐたが、同樣に醉つてゐる樣子で、そこらの空席を見廻してゐる。

「やア君か」赭い顏をした男が純一に聲をかけた。見ると、前河哲雄と、隅田順だ！

「やア、龍田君ですか」と隅田も聲をかけた。

二人は純一のかけてゐる丸卓子の傍へやつて來て、隅田は純一と差向ひに、前河は二人の間に、鏡に向つて腰をおろした。

「この間は詩集を有難う」と前河は懷に手を入れながら言つた。

「僕はこんなに愛讀してゐるんです、今日もかうして持つてゐる……」と彼は酒氣をはきながら、その自分の懷から一寸純一の詩集を見せた、「寂しくなると僕はこれを讀むんです、何だか靜かな聲でやさしく慰められるやうな氣がする、情熱もあり皮肉もあり、懷疑もあり憤激もあるところが、僕の胸にはぴつたりくる……」

かう言つて前河からすつかり打ちとけた眼付を向けられて、心で感謝しながらも、純一は默つてうつむいた。

「龍出君もいい愛讀者を得たもんですね、かう見えてゐて前河君は、昔は詩を作つた事もあるんですよ、ボオン・ロマティシストだからね」と隅田が言つた。
「詩を解さない人間は駄目だ、此頃詩のない小說がはやるが、そんなものは本當の藝術ぢやない」
かう言ひながら前河は、註文をききに來た女中に酒を命じた。
「もうそんなに酒は要らんよ」と隅田は言つて、純一の方に向いて、「今日はもう二三軒も飲んで來たんです、前河君は僕を酒で大いに慰めようとしてるんです」
「慰めてゐるんぢやない、君に男らしい元氣を吹き込まうとしてゐるんだ」と前河が叫ぶやうに言つて、「君も知つてるでせう、今度の事件は？」と純一に言つた。
「知つてゐます」と純一は答へた。
隅田は二人の會話を聞きながら笑つてゐるのだが、その歪んだ笑ひは異樣である。
「男らしい元氣を出せと前河君は頻りに勵ましてくれるんだが、僕にはその男らしい元氣といふのが何だか分らないんです」と隅田は二人の顏を交互に見ながら言つた。
「オイ、酒！　酒はまだか！」と前河は喋るためにはまづ酒が必要だと云つたやうに叫んでから、くるりと純一の方に向いて、
「君はどう思ふです、君は此の事件を此儘默つてすましていいと思ふですか！　とりわけこの隅田君が、默つてゐていいと君は思ふですか！　自分の女房が子供も亭主も置き去りにして、勝手な眞似をしてゐるのを、その儘うッちゃッといていいと思ふですか！」
彼は純一に詰め寄せるやうにして詰つた。

「君、そんな事を龍田君に訊くのはよし給へ、そんな事は當事者だけで澤山だよ」と隅田は言つた、そして純一の眼を探りながら、

「前河君は僕に大菅君と決鬪しろと勸めるんですが……然しねえ、決鬪でも出來るならまだいいです、僕の場合は決鬪さへも出來ないんです、然し前河君は、それは君が意氣地なしなんだと言つてしまふんだから……」

日本畫家は自分の氣焔の聞き手を突然横取りされて、ポカンとしたやうに三人の樣子を見てゐたが、いろんな言葉のはしに何か思ひ當る事でもあつたと見え、純一の方をちらと見てにやにやしてから、勘定をはらひ、

「おいおい、もう歸るんだ」と二人の子供を促して、もう腹一杯食べて眠さうに眼をこすつてゐた男の兒の手を引いて出て行つた。

女中が酒を持つて來て、前河の前に置くと、

「それが意氣地なしなんだ」と前河は言つて、一口飲んでから、彼は急に聲を低くして、

「だが、僕ア大菅の今度の行動はわるいと思ふナ！」と、いかにも慨嘆するやうに、沈痛な調子で純一に話しかけた。

「僕は大菅がこんな事をしでかさうとは豫想しなかつたよ、あの男には僕もこんなに裏切られようとは思はなかつた。何しろあの男は自分一人の身體ぢやないんだからなア、今更色だ戀だといふ場合でもないんだが……神山をあんなにのぼせ上らせたのからして、よろしくないと思つて忠告してゐたんだ、ところが今度の事件はどうです、こんな事を始めれば、第一自分にもいい結果はないし、奈枝にしたところでさうだし、ここにゐる隅田順を始め、よね子夫人はみんな犧牲者だ。だから僕が言ふんだ、隅田順はあの奈枝を取り戻せ！　と僕は言ふんだ、それが出來なければ決鬪しろと言ふんだ。さうすれば隅田順も一個の男子としての屈辱を雪ぐ譯ぢやないですか」

純一は前河のかうした激勵の言葉が、餘りにも自分の胸に徹するのを感じた。最初、決鬪と云ふ言葉を聞いた時か

ら、彼の心には、友一郎が――敏子の良人が反射的に浮んだのである。彼は息をもしないで、二人の會話を待つた。

「それやアね、僕は意氣地なしかも知れん、腑甲斐ないかも知れん、然し、この問題は君の考へるやうに、僕が出て行つて何か遣れる問題ぢやないんだ。それに今更どんな事をして見ようもないんだ。よしんば僕が大菅君と決鬪して見たつてつまらないぢやないか」と隅田は自分の大きい痛手を片手に抑へてゐるやうな、苦しい傷ついた表情で言つた。

「ぢや、君はこんなに僕が言つても、やつぱりどうしても默つて引つ込んでると言ふのか？」と前河が隅田をキッと睨むやうにして訊いた。

「僕か？……」と隅田はもう一度決心するやうに返事をした、「そりや先刻も言つた通りだ、別に何にもしない、默つてゐる……」

「默つてゐてすませるか？」

「すませるよ、人生は默つてゐてすませる外はないところだ、人生の事はすべて池の面に落ちる鳥影みたやうなものだ、直ぐ消え去つてしまふんだ……ただ厄介なのは子供だが、上の子はおふくろに、もとッからなついてゐて、奈枝子がゐなくつたつて別段困らない、下の子は負つた儘鏡ヶ浦へ行つてゐるんだが、今に戻して來てくれるだらう、大菅君は僕の子供は要らんだらうからナ……」

前河は、隅田が自分で自分の痛ましさを傍に置いて見てゐるやうな言ひ方を、我慢が出來ないと言つたやうに、逞ましい廣い肩をモガモガさせながら、

「君は何だつてそんなに平氣でゐられるんだらうナ、まるで他人の事でも言つてゐるやうぢやないか」

「平氣だと見えるかね、僕はちつとも平氣ぢやない。だが、かうしてゐるより外にどうしようがあるんだ？　僕はち

つとかうして默つてゐるんだ、世間の所謂えらい人達が、どんなに僕を罵倒しようが冷笑しようが、僕に取つては何でもないんだ、何の痛痒も感じないのだ、かうなるならかうなつていいんだ、奈枝さんも行くところに行つたのだ、僕はさう思ふ……」

隅田順は暗い苦惱の眼を純一の眼に持つて來た。

「僕にはよく分りませんが、然し、かういふ場合、その感情の赴くままにいろんな行爲が出來る人はいいが、物事の奧底が見え過ぎてゐる者には、結局何も出來ないで、苦しみばかりが二重になると云ふ事は本當ですね……」

「さうです……さうです！」と隅田順は嬉しさうに言つた、「大菅君はあんなヒイロオだし、僕はこんな光彩のない人間で、謂はばあらゆる世間的名聲の棄權者ですから、奈枝さんが大菅君の方に惹かれるやうになつたのも當然かも知れない。奈枝さんが最近になつて、僕とは性格が合はないから、これから先き一緒にゐればゐる程、睨み合ひ憎み合ひになつてしまふと頻りに言ひ出したんですが、そんな風に言はれて見ると、僕もさうでないとは言へない氣もしてくるし、大菅君と性格が合ふと言へば、成程それはさうかも知れんと思へる……だが、まづ、奈枝さんには大菅君のやうな人がいいかも知れませんよ、女といふものは、一體にさういふものかも知れませんよ……僕もライフだけは、だんだんスティルネルに似て來ましたよ」

さう言つた隅田の言葉には、一種の誇りと自嘲との妙に混交した調子があつた。彼の傾倒するマックス・スティルネル――溫順で、遠慮深く、引つ込み思案な人間で、女學校の教師をした事があつて、精神病の母親をもつてゐて、その生涯の唯一の華々しい事件、當時の新しい女マリイ・デエンハルトとの共同生活も、貧乏と失敗との爲めに、三年許りの後に破れて、女に棄てられて、孤獨と貧困と失敗との中に光彩なく終つたスティルネルの生涯を知つてゐる純一は、ぢつと相手の高い額を見ながら、默つてうなづいた。

「僕は奈枝を毆り付けたくッて堪らないんだッ」と、前河が心から憤激してゐるやうに言つた、「何と云ふエゴイストだ！　何と云ふ愛のない、不人情な女だ！　まるでそこらの女郎と同じ事ぢやないか……同じ別れるにしても、いつたん隅田君と別れて、相當の期間でもたつて、大菅といい仲になるんならまだいいさ、ところがどうだ……今朝まで隅田順の噂で、夕方には大菅と鏡ヶ浦へ駈落してゐる……どうしてさういふ事が出來るかナ……君が今迄甘やかして、附け上らせてゐたのがいけない、君が一體いけないよ、人が折角何かいい仕事を見付けてやつても、そんな下らん仕事は出來ないとか、こんな無意味な事をやるのは厭やだとか、何だの彼だのと苦情ばかり言つて、何一つ仕事らしい仕事もしないで、尺八を吹いたり、ごろごろして本を讀んだりして、さんざん貧乏をさせたからナ……」

「まあ、さう言はないでくれ、言はないでくれ、僕には僕の缺點がよく分つてゐるんだ、それだけ苦しんだ……僕は出來ることなら、尺八でも吹きながら、何處か遠いところへ行つちまひたいんだ……」

「何といふ困つた男だ！……君は！」と前河は言つた、「こんな場合に、そんなことを言ふ奴があるか！　君はどうしてそんなに男らしくないんだらうなア！　この場合、君はどうしても君の名譽のために、大菅と戰はなければならぬと僕は思ふ、さうでなければ卑怯だ、さうだ、卑怯者だ。君は大菅の細君とは違ふんだぜ、大菅の細君は女だし、はしたないやうに見られたくないから默つてゐるだらう、また默つてゐた方が、世間の同情を集める點から言つてもいいんだ、だが、君は男ぢやないか、君は默つちやすまされないんだ、此儘默つてゐたんぢや、君の社會的生命は斷たれてしまふんだぜ！」

「然しね、前河君、君はあんまり君一流の考へ方をしすぎるよ、先刻から言つてゐる通り、僕は奈枝子が大菅君の方へ行く時に、奈枝子と相談して、それは止むを得ない事情として同意したんだから、今更、君が言ふやうに、取り戻すとか何とか、そんな事をする氣にはなれんし、またそんな事をしたところで、僕に對して愛がないと言つてゐる以

上、取り戻して見たところで、仕方がないぢやないか。それにそんな無理强ひは僕としてしたくないんだ。僕としては、奈枝子が僕に愛想を盡かして、大菅君の方に心が動いて行つたと云ふ事は、自然の成行きだと思ふから、苦しくッても、僕はこの僕の生活の破綻に堪へて行かうと思つてゐる……ナニ、人間ッてものは、どんな運命にでも結局堪へる事が出來るもんだ、また堪へる外はないものなのだ……社會的生命、そんなものは僕には塵みたいなものだ……然し、子供の事を考へると、さすがの僕も胸が一杯になるよ」

隅田順の悲痛のためか、それとも單に醉ひのためか、顏全體が痙攣的に硬化してゐる、その眼尻のあたりがピリピリして、眼中には靜かにさしぐんでくる暗涙があつた。

「子供の事を思へば、母親といふものの心は、馬鹿に愚かになるし、弱くもなるものだ。そこに女の美しさもあり、やさしさもある。今迄の日本の女は大抵さうだ、舊道德と笑ふ奴もあるかも知れんが、僕はさういふ女が非常に好きだナ。そりや僕だつてアナアキストだ、從來の日本の、女を奴隷扱ひにする道德の排斥すべき事は知つてゐる。だがそれとこれとは事が違ふ。この母性本能は、人間本來の性情のうち一番尊いものだと僕は思ふんだ。女は母となつて初めて女らしいいいところを見せるんだ。奈枝子はなぜ自分の子供の事を考へないんだ？　なぜ自分の子供の犧牲になれないんだ？　それが新しい女と云ふのなら、僕は新しい女ッてものは大嫌ひだ。よくあの可愛い庯ちやんを打ッちやれる氣になれたなア……」と前河はその大きな强い體軀の中のやさしい軟かな心が、その儘聲になつたやうな言葉の調子で、嘆息した。

「子供の事は」と隅田が話し出した、「奈枝子も苦しんではゐたやうだ。だが、奈枝子に言はせると、僕と愛のない同棲を續けて、憎み合ひ睨み合つて暮さなければならない日が來るかも知れないから――その實僕が奈枝さんを憎む筈もないし睨む筈もないし、まあ貧乏で苦しめるので、それをすまなく思ふ位のものだ――若しそんな事にでもなれば、

さういふ不快な兩親の空氣が、敏感な子供等に對して非常にいけない結果を與へるに違ひない、それよりはいつそ母親を失つた方がましだ、子供には子供の運命があるんだし、殊に、子供に對してどんなに氣の毒な事であらうとも、斷じて子供の犧牲にはなりたくない、どんなに可哀さうな事であつても、子供の犧牲になつて自分の一生を無意味に送つて、後になつて、子供の過重な荷厄介になつて持て餘されたくない、そんな事はお馬鹿さんのする事だ、子供ばかりでなく、誰れの犧牲にもなりたくない、犧牲なんて事は一番因習的な事で、その爲め今迄の日本の女は駄目になつたんだから、自分はそれをポンポン打破すると言ふんだ……」

「そりや無知な犧牲が無意味な事は言ふ迄もない、我々にしたところで、勞働者が資本家の犧牲になつて、日に日に自分の髀肉をそぐやうな事をしてゐるのを見るに忍びないからこそ、勞働運動もやらうと云ふんだ。だが、さうした階級關係と、親子夫婦の關係とは全然問題が違ふ。階級と階級との間には、ただ敵意と鬪爭とがあるのみだが、親子夫婦の間柄は愛情によつて結び着けられてゐる筈だ。それにそんな蟲のいい事を言ふのは、つまりは奈枝が本當の愛情を知らないからだ。大菅の方へ行つたのでも、そりや大菅は人間は面白いし、男つ振りはいいし、袖を引かれて厭やな氣のしないのは勿論だつたらうが、こんなになつたには、單に惚れたといふ事以外に、もつと厭やな打算が目に付く。世間的に何の力もない隅田順と貧乏世帶を張つてゐるよりは、當代の人氣役者の大菅と氣儘な暮しをして、同志の間に姐御と立てられて、ロオザ・ルクセンブルクやブレシコフスカヤ氣取りで、人の目につく處に出しやばつて、ワイワイ騷がれた方が、こりや割りがいいと思つたからだらう。そんならそれで、正直にさう言やアいいぢやないか、それを體のいい理窟で金鍍金してしやアしやアしてゐる。一體、石塚朋子の連中は、みんなさうした似而非理窟に囚はれてゐて、一向女らしくない奴等だが、理窟は所詮理窟だ、そんなものは人間の本當の感情の前には碎け散つてしまふんだ。奈枝子も理窟のために本當の感情が確かに分らなくなつてゐる、分つてゐるのは大菅にまゐつた事だけだ、

だが、そのまゐつた事さへも、あの女は理窟でごまかしてゐる。一體、奈枝子には大菅といふ男は分つちやゐないんだ、大菅の生活の中での自分の地位がどんなものか知らないんだ、自分ぢや飽く迄も相互の個性を尊重し合ひ、相互の自由を束縛しないで、何處迄も對等なんかと言つてゐるが、その力み加減が反つて可愛らしい位なものだ。なに、大菅に取つては、奈枝子なんぞは、都合のいい操り人形に過ぎないんだ、そりや好き勝手に振舞はせもするだらうし、勝手な熱も吹かせるだらうが、そりや末の末で、肝腎の大本はちやんと握られてゐるんだ、つまり、大菅のあやつる儘に踊るまでの事なのだ。だから、奈枝が本當に利巧な女なら、大菅の方へ行くよりやつぱり隅田のところにゐた方が、ずつと自分の個性を衞つて行けるつて事が分らなくちやならん、現にこれ迄成長して來たのも君のお蔭なのだからナ。どうしても隅田と一緒にをれんなら、自分一人の生活を立派に立て通すがいい、それが自分の個性の尊重を叫ぶ彼女の理窟の當然の歸結ぢやないか。大菅と一緒になれば、大菅の女房にはなつても、奈枝自身の個性はなくなつてしまふのだ、それでもあの女は、それをさうぢやないと言ひくるめる女だ、降參すれば可愛いんだが、何處迄も剛情ッ張りだから憎らしくなるんだ」

「そこが奈枝さんの一番の美點なんだがナ、君には分らんかナ……」と隅田は慨嘆した。

「龍田君」と前河は純一を呼びかけた、彼の眼は酒氣のために溫醇な和氣に潤ほつてゐる、「君は新しい女と問題を起しちやいけませんよ、隅田順のやうな目に遭ひますからナ……」

「なアんだ、忠告か……」

から言つて、隅田順はかの不思議な、一種深刻な印象を與へる惱みの顏に苦笑ひを浮べて、その首を曲げてぢつと鏡を見つめた。その鏡に純一も眼を注いだ。櫻の花で上半を飾られたその鏡には、幾つかの電燈の光が入つて、白く光つてゐるのだが、その白い明るい底には、幾通りも重なり合つた酒客の影が雜然と映つてゐる、その前面に、彼—

—隅田順は苦笑ひしてゐるのである！

「龍田君……」と隅田順が暫くたつてから、鏡から眼を放して純一を見た、

「君はいつか言つたレオパルディをもう讀みましたか、あの中の Memorable Sayings of Filippo Ottonieri を讀みましたか、僕はあの最後にある墓碑銘が大變好きなのです」と言つて、彼は前河の眼をピタリと見ながら、一種の悲痛な調子をつけて、その英譯の句をそらんじた、

「Bones of Filippo Ottonieri, born for virtuous actions and for glory, lived idle and useless, and died without fame,but not ignorant of nature or of himself……」

「それはどう云ふ意味なんだね？」と前河がぢつと隅田の顏を愛を以て見ながらたづねた。

「Without fame, but not ignorant of nature or of himself……」と隅田はその終りの句を今一度繰返した。その言葉のリズム、その英語特有の鋭いアクセントの中に、常に隅田には感じられない激情と矜恃とが響いた。純一は頭の中でその句をまた一度繰返した、そして隅田がそれによつて語らうとしてゐる事を、彼は悲しい同感をもつて理解した。

「德行と光榮とのために生れ、無爲且つ無益に生き、名聲無く、然し自然に對しても彼自身に對しても無知ではなくして死んだフィリッポ・オットニエリの墓……少くとも僕は、この墓碑銘には相當する人間だといふ自信はある……」

かう言つて、隅田順は二人の顏を順々に見た。非常に悲しい、然し、やさしい暗い眼付をもつて。

十三

昨夜、隅田順、前河哲雄と、ヤマニ・バアを一緒に出て、それからもう一度、神樂坂下の小さなレストオランで酒を飮んで、そこでも前河の烈しい正義感に裏づけられた激越な議論や、隅田順の悲痛裡のノンシャラントな話や、自分自身

の思ひがけない熱辯に、純一は酒のそれよりも芳烈な陶醉――平常の沈靜な氣分では感ぜられない高揚と激發とに浸つた。三人はもう一度、また氣分の違つた家へ行かうと、そのレストオランを出たが、既に夜は遲くなつて、坂下を通る電車を見ても、乘客の影はちらほらしか見えなかつた。

「もう何時だい？　餘程遲いのかナ」と前河が、もう小僧が重さうに店の戶をしまひかけてゐる、ガランとした明るい藥屋の大時計を中腰に覗き込んだが、したたか醉つて、眼のちらちらする彼に、その針の位置がはつきり見えたかどうかは分らない。

「もうかなり遲いよ、歸らうぢやないか、君の家では待つてるだらう」と隅田が言つた。

「ウン」と前河はうなづいて、

「勿論待つてもゐるし、酒も取つて置いてある筈だから、一つこれから僕の家へ行つて、ゆつくり飮み直しながら話さうぢやないか。君は寺へ歸つて行つたつて、寂しくつて仕樣があるまい」と、奈枝子が出ると同時に家をたたんで母親と子供とは妹のかたづいてゐる家へあづけて、自分はたつた一人で、本鄉の或る寺に下宿してゐる隅田順を、思ひやるやうに前河は言つた。彼はこんな場合、また一般に、行くところがなくて困つてゐるものを見ると、默つて見すごせないやうな俠氣から、これ迄にも何人となく、いろんな人間を自分の家へ、どんな夜夜中でも、連れて歸るのが例のやうになつてゐるのである。その爲め、時にはいつかのやうに、その居候に物を盜まれるやうな事もあつたのだ。彼の妻のとき子は、一かどの見識も具へ、才氣もあり、頭腦もよかつたので、先輩からは前途を囑望されてゐたし、澤山の同胞もあるので、家族からはいろんな意味でたのみにされてゐたのであつたが、社會問題に興味を有ち出して、大菅などの始めた硏究會へ行つて、そこでふと見知りになつてから、前河の男性的な氣魄に心を惹かれ、つひに周圍の壓迫や反對をも斥けて、前河と同棲した程の仲なので、その後引續いて生れた二人の子供をかかへて、收入

の不定の中で、前河の奔放不覊な生活をもよく堪へて、時々引つ張つて來る人にも、厭やな顔一つ見せずよくもてなすので、賢夫人と言はれてゐるのである。

「君もよかつたら來ませんか、ちつとも遠慮はいらないから」と前河が頻りに勸めたが、純一はそれをことわつて、停留所で彼等に別れた。

ひとり靜かになつた神樂坂を上つて、下宿に歸つて來た純一は、自分の部屋に入るなり、机の前に端坐した。宛かも鍛へ上げられた劍の冴えた光のやうに、彼の心は冴えわたつて――酒を飲んだ時に、往々かういふ風た狀態に、心のはつきりしてくる事がある――今や、人觸るれば人を斬ると云ふやうな、一種殺氣ばんだ頭腦の明晰が、彼を拍車で驅るやうに驅つて、彼のペンは『自死自葬論』に向つて走つた。

この『自死自葬論』は、これ迄幾度びか筆を著けて見た稿なので、その論旨は旣に彼の頭の中で大體出來上つてゐたが、然も、これまでは、それ等の思想を統一する心熱が滿ちなかつた爲めに――純一はどんな仕事でも、感興が來なければ出來ないと云ふ性でまつた……これを整理し秩序立てて一篇の論文に纏め上げる事が出來なかつたが、今や、樂人が鍵盤の上に、その熟練の手を霞の如く驅使するやうに、彼のペンは正しいタクトを踏んで、書けば書く程、思想と言葉とが湧き上つて、年來の彼の心に蟠つてゐたものが、曾つて彼が『二重の叛逆』に於いて、その具體的表現を與へたものが、今や、その面を變へ、その思想の過程をすすめて、彼にその理論的の表現を求めるかのやうに、意に滿ちた一大論文が現はれて來るやうに思はれた。

「夫レ人生トハ何物ゾヤ」と筆を起して、彼は先づ人生の意義を說く。人生の意義――それは、彼がこの數年間を、絕えず沈思し攻究し來つた題目である。しかも、その推究は、彼をただ絕望に驅るのみの題目である。考へれば考へる程、人生は無意義なもの、不合理なもの、救ふべからざるものと思惟せられる。けれども、渡邊虎造にとつては、人

生そのものは無意義なものではない、彼の所謂國家社會に對して何等貢獻するところ無き者の生のみが無意義なのである。そして、その見解は必ずしも誤りではない。我々をこの人生に對する絶望的の懷疑から救ふものは、我々の信仰であり、理想であり、愛である。換言すれば、信ずべき神を有するものに取つては、その生涯を委ね、その生命を賭するに足るものを有するものに取つては、人生は必ずしも空虚なものではない筈だからである。そして、渡邊虎造の場合には、その國家社會の觀念が、その信仰であり、理想であり、愛である。それゆゑ彼に代つて言へば、國家社會に貢獻するものが有意義の生であり、その然らざるものが無意義の生である。そして彼はこの後者を斷乎として擯斥する。

渡邊虎造の覺え書きによれば、無意義の生は、精神的無意義の生、肉體的無意義の生の二つに分類される。そして前者にあらゆる精神低格者、犯罪者、無能力者、非愛國者等を總括し、後者には各種の虚弱者、不具者、不治の病者等を總括する。

口角にかすかな微笑を湛へながら、これ等の綱要を書いた純一は、ここに筆を一轉して、死の無意義の生に勝る所以を說いて、死生を超越すべき達人の覺悟に及ぶ。

「死ハ人間ノ最モ恐怖スル所タリ。サラバ何ガ故ニ死ハ恐怖スベキ乎。死ハ個體ノ絶滅ナレバ也。自已ノ狹隘ナル物欲ニ執スルモノニ取ツテハ、其ノ身命ノ滅却ハ、最大ノ不幸事ニ外ナラザル可シ。而シテ此ノ如キ卑小ナル物欲ノ徒ニハ、死ハ最モ宜シキヲ得タル刑罰而已。然レドモ、此ノ如キ物欲ノ徒ト雖モ、能ク其ノ心眼ヲ開クヲ得バ、死ハ毫モ恐ル可キモノニ非ザルヲ知ラン。何トナレバ、死ハ吾人ノ意識ヲ奪ヒ去レバ、死後ニ何等ノ苦悶アルベキ筈ナケレバ也。死ハ死ノ意識ヲ感ゼシメズ、然ラバ人間ヲ恐怖セシムルモノハ、是レ死其物ニ非ズシテ、死ノ觀念ニ過ギザルヲ知ルベシ。」と斷じて、死の毫も恐るべきものに非ざる所以を詳說し、これを畏怖するものは、畢竟人間の無知迷妄に過ぎ

ずとなし、絶えず生に戰き、死を恐れ、タンタルスの岩の下にあるが如き不安の日を送るものの、いかに憫れむべきかを說いて後、

「然ルニ、世ニハ此ノ如キ妄執ヲ悟脫セルノ士アリ、能ク天命ヲ知ツテ、生死煩惱ノ繫縛ヲ脫ス、之レヲ達人トナス」と一轉語を下して、達人の道を說く。彼は先づ、死生の間に出入して、身命を擲つて國事に奔走した維新の諸英雄、彼の愛する橋本景岳、吉田松蔭を始め、特に薩摩灘に於て僧月照に殉ぜんとし、城山に於てつひにその子弟の爲めに殉じて、成敗を問はず、名を惜しまず、自若として自死せる西鄕南洲の如き人物の事蹟を引證し來つて、その光風霽月の如き正大の心事を說いて、達人の道ここに在りとなし、そのよく浮生の繫縛を脫して、天命を知る事を稱し、人の能く死すべき時に死せざるべからざる所以を說く。

「死スベキ時ニ死セザレバ、是レ死ニ勝ル恥辱也。一度ビ死所ヲアヤマタバ、終生雪グ可カラザル辱シメヲ受クベシ。俗諺ニモ、長生スレバ恥多シト曰ヘルモノハ、蓋シ此ノ如キ死所ヲ失ヘル煩惱ノ徒ヲ戒ムルモノ也。然ルニ、達人ハ之ニ反ス、能ク死スル事ヲ知ツテ、マタ死所ヲアヤマタズ、是レ其ノ生ヲ徒爾ナラシメザルノ達識也。何トナレバ、能ク死所ヲ知ルモノノミ、マタ能ク眞ニ生ケルモノト云フベケレバ也。」と云つて、世に生くるもの、此の達人の覺悟なかるべからざるを論じたる上、愈々本題に入つて、此の如くして自己の生活の無意義なる事を自覺せしものは、よろしくこの達人の悟脫を以て、その執着の根を斷絕し、進んで死に就くべき事を力說し、彼はその自死を以て初めてその無意義の生に意義あらしむるを得べきを說き、此の如き場合、社會は毫もこれを妨ぐる理由あるべからずとなし、自殺を非とし、これを罪惡視し、道德に反するものの如く見なすは、これを社會の偏見に過ぎずと斷じ、殊に近代に至つて、一代の風潮滔々として歐化し來つて、今や、自死を讚美せし昔日の美風に代ふるに、基督敎國の誤れる自殺罪惡說を以てするは、神州男子の志氣をして衰頽せしむる事幾何なるかを知らずと痛嘆して後、

「若シ自己ノ生存ノ全ク無意義ナルヲ自覺セシ場合、更ニソノ無意義ノ生ニ執着スルト、潔クソノ生命ヲ一擲スルト・イヅレガ果シテ眞ニ道德的ノ行爲ナリヤ」と提言して、彼は自死自殺の道德に反せざるのみならず、反つて眞に道德的行爲なる所以を說く。

社會が自殺を非とする理由は多々ある。宗敎家によれば、人間の生命は神の與へ給ひしものである、それを勝手に破毀してはならない、個人の勝手な自己破壞は宇宙の調和を破るものであると云ふ。倫理學者によれば、人間は社會の一員として、各自他人に對する義務を負うてゐる、然るに自殺はこの社會に盡すべき義務を逃避するものであるから、卑怯且つ利己的行爲であると云ふ。その外なほ、自殺は一種の殺人である、殺人は十誡に於て禁ぜられたとこであると云ふが如き神學的論證は、その加害者が同時に被害者であり、その破戒が同時に贖罪である事によつて、全く無意味の言である事を知るべく、また、自殺は弱者の執る手段である、意志薄弱を表明するの外何の意味なき恥づべき行爲であると云ふが如き非難は、世上最も多くの支持者を有するだけ、それだけ淺慮の俗見に過ぎない。ひとへに生に執着するものを以て意志鞏固となし、その執着の根を斷絕するものを以て意志薄弱なりとなすは、非難よりも、より多く自家辯護の口吻を帶びるやうに思はれる。のみならず、それは毫も道德的非難とはなり得ない。威壓的態度を以て宇宙の調和を說く宗敎家の言も、一神敎の神を信じない邦人に取つては、殆んど多くの無意義を有しないのみならず、全能の神が微小なる一被造物の爲めに、その宇宙の調和を破られると云ふのは信じ難く、また、神の與へしものを勝手に破毀してならないならば、勝手に破毀せざるを得ない狀態にそれを導くと云ふ事はあり得ない筈である。それ故、自殺を否定するに當つて、唯一の首肯すべき理由として考へらるべきものは、ただ倫理學者の云ふ他人に對する義務の一事に過ぎない。しかしそれすらなほ十分なるものとしては考へられないのである。然し、社會が自殺を承認せず、これを恕し難い一個の罪過として見ようとするのには、必ずしも全くその理由がない事はない。なぜなら

ば、自殺は個人の社會に對する直接の非難、最も端的なる社會生活の否定であるからである。自殺者はその行爲によつて、此の社會の惡社會にして、到底安住する事の出來ない世界であると云ふ事を、最も手きびしく表明する。それ故社會はその爲めに傷つけられて感ずる、自らその不完全なる事を敎へられ悟らしめられる。のみならず、自殺は自殺者にとつて、その絕對的自主權の確立である、社會よりの個人の最も消極的にして、且つ最も完全なる解放である。卽ち、社會に對する個人の斷乎たる叛逆である。社會がこれを許容し得ない所以はここにある。社會が自殺を非とするのは、自殺が社會を非とするからである。この理由を最も簡明に表白せるものは、アリストテレスの「自殺は國家に對する不正である」の一語である。然しながら、渡邊虎造の場合に於ては、自殺は彼の國家社會に對する貢獻と思惟せられてゐるのを奈何。かやうに自殺は一般に毫も道德に牴觸すべき理由がないのみならず、とりわけ彼の場合にあつては、自殺を非とするに當つて、唯一の正當なる理由として考へられる他人に對する義務――その義務の觀念が反つて自殺の動機となつてゐるのであるから、殆んど全く非難の餘地はない筈である。

　然しながら、飜つて冷靜に考察する時、この渡邊虎造の信念は、なほ或る疑問に値する。彼自身は不治の病氣を宣告せられたる自分は、既に無意義なる生存である、生よりも死すべきものであると斷じてゐる。然しながら、それは果して眞實であるだらうか？　彼の誤想ではないであらうか？　彼の死によつて、社會が、尠くとも彼の妻子眷族が利益よりもより多く損害を蒙るものとすれば、彼は死よりも生を執つて、その天命の許す限り生きなければならない筈である。彼は專ら功利的見地に立つて推究してゐるけれども、精神的の見地から云へば、彼の死が一日早ければ一日多く、彼の周圍を悲しましめないとは云へないのである。だが然し、彼自身の場合は、彼の斷定をその儘受容れる事としよう。然しながら、これを一般におしひろめて、一切の無用なる人間の自死自葬すべき事を說くに於てはどうであらうか？　それは宛かもニイチェの言葉の如く響く。その上、その有用と無用、その有意義と無意義とを差別する

しい微笑が口角にのぼる……

「おれの方が、渡邊虎造よりも先きに、自死自葬を決行すべきその人かも知れない……さうだ、凡ての出來損ひと餘計者と失敗者とは自死すべきである」さう心で呟きながら、純一は書く、

「サレば自死ハ毫モ非議スベキ行爲ニ非ズシテ、反ッテ甚ダ賞讃セラルベキモノニ非ズヤ。自死ハ死ノ最美ナルモノニ非ズヤ、何トナレバ、生ハ他人ノ意志ニ關ハレドモ、死ハ己レノ意志ニ存スレバ也。己レノ意志ヲ以テ己レノ生命ヲ損ツ、是レ男子ノ最モ快トスル適意ノ行爲ニ非ズシテ何ゾヤ。死ハ强奪セラルルナリト雖モ、自死ハ放棄スルモノナレバ也。シカモ世上ソノ勇氣ト明察トナクシテ徒ラニ醉生夢死スル事ヲ恥トセズ、無用ノ生を貪ランガ爲メニ、アラユル不義不正ノ暴ヲ犯ス富者アリ、虛僞ト妥協トノ中ニ一日ヲ糊塗スル學徒アリ、卑屈ト忍從トヲ以テ奴隷ノ生ヲ送ル貧者アリ、是等ハ凡テ夫ノ精神低格者、無能力者、老耄者、虛弱者ニ非ズシテ何ゾ、シカモ其數ノ如何ニ夥シキヤ。」

ここ迄書き來つた時、純一はその言葉が、明らかに自分自身の言葉となつてゐる事を意識した。それが自分自身に對する痛罵である事を意識した。彼は最早筆を改めて、渡邊虎造の主眼とする、しかも彼にはあまり意味を有たない自葬論を書く氣にはなれなかつた。彼の興味は今や代作の制限を受けてゐる『自死自葬論』を離れて、彼自身の內面生活の端的の表現に向つてゐた。彼はその書きさしの原稿の上に、傍らの備忘錄を開いた。その右の頁には、『神樣の失錯』と題して、次ぎの斷想が書かれてゐた。

「神樣は人間を創る時には、まづその弱點から與へる事にしてゐた。神樣は私をこしらへ上げるとき、こいつを天才にしてやらうと思はれた。そして、天才のもつてゐるあらゆる缺點を、氣違ひじみた考へや、瘦せた病弱なからだや、世界中をぶらぶらほッつき步いてゐたかつたり、寢床の中で煙草をふかしながら、うつらうつら一日を過してしまひた

かつたりする怠け癖や、何事にも最後の限界を越えようとする欲望や、激烈な感情に伴ふ薄弱な意志やを與へたとき、神樣は急に手を止められた。それはこれ迄あまりに多くの天才を世界に與へた事に氣が付かれたからであつた。また、このあはれな者を、天才に固有の悲慘な運命に投ずるのが可哀相になつて來られたからだ。『これで此奴も幸福になる』さう呟いて、神樣はそのあはれな奴を、多數の幸福な世間人の中に投げ込まれた。そしてそれは何といふ慈悲だつたらう！ かうして、天才なしに、私はこの世界に生れて來た。そしてなほ一層わるい事には、全能の神樣は、このちよつとした考へ違ひがどんなに大きな間違ひを生んだかを、つまり、そのためにこの出來損ひの人間が、誰れよりも、一番悲慘な天才よりも、また完全な凡物よりも、十層倍も氣の毒な人間だといふ事に一向お氣付きでない」

彼はこの斷想の上に、ちらと眼を走らせて、ニヤリとした、そしてそのわらひを、屑のまはりにすり消しながら、その次ぎの頁に、『失敗者の哲學』といふ題を書いた。

「人生には凶日と云ふものがあるとグラチアンは說く。その日には何事もうまく行かない、善い事はわるくなり、しかもわるい事は變じない。だから、二度ほど試みに賽の目で吉凶を占つて後、人はその日の行動を定むべきであると、このworldly wisdomの哲學者は敎へてゐる。だが、人生には、單に凶日があるのみならず、その一生が凶日の連續であるやうな呪はれた不幸な人間はないであらうか！

西洋の古い諺に、朝、左の足から先きに床を出たものは、その日一日何處へ行つても躓いて、つひには足を折つてしまふと云ふのがある。その出發點をあやまつたものは、その第一步に於て躓いたものは、資本を持たずして人生の市場に立つたものは、確かに、一生の凶日であるやうな不幸な呪はれた人間ではないか？ そして、さう云ふやうな人間は此の世に決して尠くはあるまい。しからば、その人はどんなにしたらばいいのであるか？

一生が凶日なる人は

何事もせずして
　人生の舞臺より引き退くべし。

さうだ、その人にとつては、ただ引返す外はない。その人にとつて一番いい事は、一日も早く此世を去る事である。若し、それが彼に出來ないならば、出來得る限り消極的に人生に對する事である。彼にとつては、現在の地點が最善のものである。それより一歩進めば、不幸は大きくなる」

彼はペンをやすめて、宛かも闇の中に誰れかの囁きを聽き取らうとするかのやうに、耳を澄ました。その囁きは、宛かも伴奏のやうな關係をもつてゐて、彼の言葉を調子づけるやうに見えた。

「人生の路半ばにして、暗き森蔭に我れ迷ひぬ。

この句をもつて、ダンテはその『神曲』を始めた。自分も今、人生の行路に迷うて、ひとり闇中に行き惱む。凡ては空し。凡ては悲し。あゝ、自分の前に横はるものは、いかなるインフェルノであるか？

その生の盛夏にあたつて、自分は早くも心に秋を覺え、若くして既に晩年を見た思ひがする。一體、何がかくも自分に速かに秋を齎したであらうか？　我が破れた夢想が、苦い眞實が――人生の空虚と醜惡、自分の無力無價値、一切の物の徒勞！　それはすべて誤つてゐたと、我が閲歴が悉く叫ぶ。今、自分が抱くところのものは、自分が在るべからざるところに在ると云ふ自覺である、自分があやまつて世に生れて來た人間であると云ふ意識である。然し、かかる意識をもつて生きるものは、いかに悲しい人間であらう。そして、かうした人間は、世にそれ程多いとは思はれない。

然らば、自分は人間に於ける一つの變則であらうか？　いや、自分はそんな風變りな人間でもなく、またすぐれた人間でもない。自分はどの點でも、人類の除外例たり得ないにきまつてゐる。ただ、自分の胸が裂けたのだ、この外

の何事でもない。然し、此の事は悲しい事である。

世の中には、失敗すべく生れ着いてゐる人間がある。ラ・ロシフコオは、『世の中には愚人たるべく定められてゐる人間があつて、自ら愚をなすばかりでなく、また運命が强ひて愚をなさしめるやうに見える人間がある』と云ふ事を言つた。世に生きて行くために最も肝腎なものの缺けてゐる人間がそれである。運命は彼を飜弄する、つひに失錯の山の下に、彼が壓しつぶされてしまふまで。愚かな人間には、その運命さへも愚かにふるまふやうに見える。

だが、それも至當の事である。彼は此世に適合する性質を有たぬからである、彼は此の世界では、そのエレメントには在らぬからである。生活のあらぬところ、生活の停止するところ、それが彼の故鄕である。Any where out of the world――それが彼の安住の地である」

「世間から意氣地なしだとか、失敗者だとか嗤はれても、此方から言ふと、さういふ事は問題ではない。僕から見れば、世間の奴等こそ何だと言ひたい」と、隅田が昨夜にがにがしさうに言つた言葉が、純一の記憶にうかんでくる。「自分は自分の半生を顧る。そこには失敗の連續を外にして何があるか？ 抑も自分の企てた事で、一として成功した事があるか？ 曾つて自分の熱望の充たされた事があるか？ 自分の幸運が不運に變じなかつた事があるか？ そして、にがにがしさが自分の胸を一杯にする。人生に處して行く肝腎な或る物が自分には缺けてゐるのだ――そしてその或る物を、英語では worldly wisdom と云つてゐる。

我々がこの複雜多端な生活の舞臺で、無事にその役割を演じ通さうとすれば、たとへ華々しい成功はその斷念してゐるところであらうとも、なほかつ十分の worldly wisdom を有しなくてはならない。この世間智こそは、世界の關門を無事に通過すべき唯一の通行劵である。その人の此の世界に於いて獲得すべきものは、ただその世間智の多寡に正比例するものである。これなきものは、つひに何物をも得ない、彼の不幸なる失敗の生涯を外にしては。

然らば、その世間智とは何物であらう？　世俗の言葉では、これを利巧と呼び、或ひはもつと露骨に狡猾と呼んでゐる。それは、人生の戰場に於ける戰術であるばかりでなく、その最も鋭利な武器である。それはまた、鋭敏な利害の觀念、此の世でただ得をして、決して損をすまいと云ふ意識でもある。要するに、それは人のわるい事である。そして、これを最も多量に有するものが、常に此の世の勝利者となる。彼は常に人生のよき賓客である。文學者の間に於てすらもまた然りである」――純一は西尾宏を想起せずにはゐられない。

「世界は一つの誤謬である。人生は不正その物である。社會は即ち惡の具現である。さればこの世界に於いて成功するのは惡である、その成功の度が高ければ高い程、その惡の程度も高まる。彼等の惡を證明するのには、彼等がこの間違ひだらけの、邪惡な人生に於て成功すると云ふ事實だけで十分である。

　これに反して、失敗者はより善なるものである。彼は此の世界より一層高い美しい星宿に屬する、彼等はこの惡い空氣にふさはしい肺を有たぬ、彼等は斃れる、そして彼等が失敗すればするだけ、彼等は自己の義しい事を證明するのだ。

　實際、我々が世間に出て、『うまくやる』ためには、決して義しきを須ゐないのである。其處では多くの虚僞と冷酷と卑屈と厚顏無恥とが必要である。これなくしては、此の世に立つ事は出來ない。何等かの惡を――妥協と屈從の如きをも――忍ぶ事なくしては、誰れが生き得られたらう？　しかも、榮達し、功名し、即ち『うまくやる』ためにはその惡こそ絶對に必要の事である。人生の事は凡てマキアヹリの敎訓に則るべきものである。その道德的なりや否やを考へるよりも、先づいかにして勝つべきか、いかにして生を確保すべきかが緊要事である。

　人間はその生存してゐる限り、正義を口にする權利はない。生きると云ふ事は、既に惡の第一歩である。凡ての不正が其處から芽ぐむ。

然らば、我等の善は奈何？　それは此の世に在らぬ事である。最高の善、最高の道德は、この惡の世界を拒否するにある、生をやめるにある、死滅するにある！」

純一の頰は熱し、その眼は輝き、その息は胸に塞つてゐる。

「さうだ」と彼は叫ぶ、「惡は人間の免れ難い宿命である、それは人間と共に生れ、人間に內在する。だから、基督敎で原罪說が生れ、佛敎で捨離が說かれるのだ。この惡を免れるには、ただ隱遁と死とがあるばかりだ。だが、隱遁は要するに姑息の手段に過ぎない、自殺のラジカルなのに如かない。これ、ワイニンゲルが自殺した所以だ。これ、マインレンデルが『救拔の哲學』を書いて、自殺をもつて救拔の唯一の途となし、自らその學說を實行した所以だ」

だが、凡ての人はマインレンデルではあり得ない。そして彼等の爲めには、マインレンデルは狂者に過ぎない。自殺は一つのマニアであると、彼等は言ふ。人生は惡であり、存在は苦であるとは十分悟りながらも、人間はつひにその苦惱と邪惡との根源を捨て得ない。そこに何物かがある。

苟くも、敏感にして、眞に人生の事を考へるものが、何人が自殺未遂者でないものがあらう。誰れかは一度び死を決しなかつたものがあらう。死が凡ての解決だと思はなかつたものがあらう。だが、多くの人は、ヱルテルでなく、ヤコポ・オルティスでない。あのやうに純潔でなく、勇敢でなかつたりすると共に、またそんなにも一圖ではなく、單純でないのである。あの冷靜沈着な『ヱルテルの悲しみ』の作者ですらも、その靑年の日に於ては、その寢床の下に匕首を置いて寢たではないか。幾度となくその匕首を胸に當てがつたではないか。だが、ヱルテルが拳銃を額に當てて引金を引いたのに反して、ゲエテはその匕首を胸に突き刺す事が出來ないのを見ると、自分を笑つて、憂鬱な思想を放擲して、生きようと決心した！　そこに何物かがある。

セナンクウルほど自殺の辯護の爲めに熱烈であつた人はない。だが、彼もつひに大きな決心に到達する、彼は斷乎

として享樂と幸福とを斷念して、その生をして運命に對する一つの反抗たらしめる！　レオパルディほど痛烈に人生を呪詛した人はない。だが、彼もまたその生に堪へる、死を讃美しつつ彼は生きる！　そこに何物かがある。そして此の何物かが、人生の基礎ではないだらうか、人生にとつて最も貴重なものではないだらうか。かくも根強く我々を引き止める力が——この生命の愛が、なぜ惡であらう？　それは不合理ではないか、人間はこんなに生きたいのに、生きてはならないと云ふのは！　それは不思議な事ではないか、どんな厭世主義者でも、どんな虛無主義者でも、なほ且つ生きようとするのは！　セナンクウルも、レオパルディも、彼等を愛讀する隅田順も、そしてまた純一自身も……

不思議な程、純一の心には、隅田順が憑いて來る。これ迄、あの不得要領な、頽廢した、蒼白の人物が、こんなにミシミシした肉迫力をもつてゐるとは、どうして思ひ得たであらうか？　現在、何人からも意氣地なしと嘲られ、五年同棲のその妻から、あんなにも手きびしく愛想をつかされた、この男子としての面目を踏み潰されてゐる人物が、今や、こんなにも自分の心に、重大な意味を有つて來るのは何事であるか？　否！　隅田には實に不思議な力がある。彼は人を暗鬱にさせ、厭世的にさせる不思議な力をもつてゐるのだ。彼は謂はば否定の精である、言葉の嚴密な意味に於ける虛無主義者である。

純一は考察を進めた。隅田順の一種消極的な根强い力は、彼が何物にも囚はれず、何物をも棄却し、世間の名利名聞、これを一切塵埃視し、一切のものを否定し去つたところにある。彼の宗とするスティルネルが、その『唯一者とその所有』に書いた如く、「だから、全く、俺に關係のない凡ての關係は行つてしまふがいい！　君は少なくとも『善のため』が、自分のためでなければならないやうに考へてゐるであらう。だが、全體、善とは何だ？　惡とは何だ？　兩方とも俺には無意味だ。俺以外の事は俺にとつては全く無だ！」

此の世の中の眞理、善、正義、自由、凡てを空氣の如く見なし、ただ自分一人、自分が唯一の者、無二の者である

と主張し、自己以外の何物の價値をも認めず、自己以外の何物をも求めないのである。

隅田はこんな自分の生活の危機にあつて、どんなにスティルネルの此の思想に、安心立命の地を見出し得たかを、はつきり感じさせるやうな、一種靜かな口調で、まだスティルネルのテキストを讀んでゐない純一の心に、スティルネルの哲學のアウトラインを描いたのである。

「僕はスティルネルを讀んで、初めて自分の態度が定つたんです。つまり、ポオズが出來たわけだ。全體、僕のやうな人間は、自分の人生に對する態度が定まらないうちは、何一つ遣る氣にはなれない人間なんだから。此のスティルネルを見出した時は、僕は初めて眼が覺めたやうな氣がして、今迄どうにもならない事に、餘計な頭を惱まして來たのが馬鹿らしくなつた」

彼はニヤリと笑つて、話し續けた。

「スティルネルは個人の自由な結合狀態と云ふものを豫想してゐるんです。彼の豫想した所有人の最も自由な結合と云ふのは、つまり、相互の我儘を認めて許し合ひ、相互に自分を利すると考へる人々のみが集つて、何人が何人を支配するとか、命令するとかしない狀態で、君は君の好きな事をやり給へ、僕は僕の好きな事をやるからと云つた工合に自分の生きて行く標準を他に求めないで、自分の尺度以外に、在來の因襲とか道德とか云つたやうな客觀的標準を認めないで、各自が自分の自我を意識して、自分の性情の導くままに、ただ自分ばかりの爲めに生きて行く……から云ふのがスティルネルの說なんですが、さアどう言つたらいいかナ、こんな言葉さへもスティルネルは重んじない、この自覺の境地は、禪門の所謂『本來の面目』と云つたやうなものでせう、刹那々々に移り動く創造的虛無と云ふのでも、例の『色空』と云ふ字を當てはめて考へて見てもいいね」

「何だい、君はスティルネルを禪にしてしまはうと云ふんだナ？」と前河が口を挾んだ、「僕はスティルネルをそんな風

に解釋したくはないね。だがまあ、それもいいとする。だが君、今のこの場合、君は色即是空ですませるかい。すませるならそれでいいさ。だが事實は、君はこんなに苦しんでゐるぢやないか、そんならそんな禪宗風なさとりでごまかさないで、正面からその苦悶にぶッ突かつて行つたらいいぢやないか。スティルネルだつて、アナアキズムを生んだのだ、君のやうなそんな和氣靄々たるものぢやない筈だ。欲望があれば鬪爭がある。例へばこのカツを、この一片の肉を、僕も欲しい、君も欲しい、龍田君も欲しい、みんなそれが自分のために必要なんだとする、だが肉は一つしかない……もつとはつきり言へば、奈枝子を、君も愛してるんだし、大菅も愛してるんだ、さうするとどうするんだ？それとも君はもう奈枝さんを、そんなには思はないと言へるかね、言へまい、さうすると、そのスティルネルの自由な結合狀態の中だつて、どうしたつて大菅と君とは衝突するぢやないか、そんな場合にも、やつぱり君は君の好きな事をやり給へ、僕は僕の好きな事をやるからですませるか！」

前河が勢ひ込んでかう言つた時に、隅田順は辟易したやうに、何か答へさうにしたが、答を唇で嚙み潰して、苦笑ひした。

「君もスティルネリアンだし、大菅も」と前河はダメを押すやうに言つた、「大菅もスティルネリアンだ。君達は逢ふとスティルネルの話をよくしたと云ふ話ぢやないか。大菅も君の他の點は默つてゐたが、スティルネルに對する君の傾倒は意味ある事だと言つてゐたよ。だが、かうなつて見ると、君と大菅とのスティルネルに對する解釋は違ふと云ふ事になる。大菅に言はせれば、強いもの、力のあるものは、どんな事をしてもいいと云ふのだ。聽き給へ、ここに一疋犬がゐて、他の犬の持つてゐる骨片を見て、若し默つて控へてゐるとすれば、それは自分が餘りに弱いと感じたからに過ぎない。だから、さうした他人の持つてゐる骨片の權利を尊重するのを、人道的行爲だなんぞと云つて、それに反すれば野蠻な行爲、利己主義の行爲だと貶したところで、愚な話だ、要するにそれは弱蟲の世迷言に過ぎないのだ。

いいかね、これはスティルネルの言葉だ。して見ると、自分の物まで奪はれながら、君が默つてゐるのは、君が弱いからと云ふ外、說明が出來ないぢやないか。つまり、大菅が強くて、君が弱いと云ふ事になる。だが、僕は君にもつと強くなつて貰ひたいんだ、自分の弱さをそんな理窟なんかでジャスティファイする事をしないで、大いに戰つて貰ひたいんだ」

この短兵急なる前河の論鋒、この思ひがけない突擊に、隅田順は仕方がないと云ふやうな、暗い苦澁な顏をして、ただ默笑をもつてそれに答へた。彼は默つて再び鏡の方に向いたが、然し、その樣子には、單に弱いとか卑怯とか云ふやうな言葉で片付けられない、或るノオブルなものが見えた。隅田順は、その態度によつて、自分は自分の自我をはつきり意識してゐる、卽ち自分を所有してゐる、そして自分を所有してゐるものは、同時にあらゆる物を所有してゐるのだと言ふかのやうに見えた。

然し、純一は、隅田の思想には、根本的の矛盾を見る。ここでもまた、それは彼の信念と彼の存在との撞着、彼の主觀の世界と客觀の世界との不調和である。彼のやうな生活態度では、その主觀の中で王者であるが如く、客觀の現實では、結局破滅の淵にまでも押し流されてしまふ。兎に角、彼は全社會を無視して、自分だけの世界に閉ぢ籠つたのだから、社會もまた彼を無視していいのだ。結局、社會人としては彼はゼロでなければならない。或る人から見れば、唯一者は影辨慶とも見えよう。それは幻滅の哲學であると共に、また逃避者の哲學でもある。つまり、彼は弱いのだ、そして自分の弱さを自覺して、蝸牛が殼に隱れるやうに、自我の世界に立て籠つたのだ。前河の鋭い突擊は、彼の急所を衝いたのでないと、どうして言へよう。

大菅左門が、どんな堅壘でも拔かうと云ふやうな、勇敢な戰士の態度で、社會の因習的繫縛を蹂躙し打破して行くところに、自ら新しい價値を創造しつつ生きて行くのに反して、彼れ隅田順は、一歩退き、二歩退き、森から谷へ、

谷の中の小さな巖窟へと退いて、その安全な靜かな巖窟の中で、つひには入定せんとするやうな、生活の否定者である。彼自身、自分以外の何物にも價値を置かず、社會の客觀性を認めないならば、そこにはただ虛無があるのみだ。そして彼によつて肯定される唯一の自我の本體は、究極不可說である！

大菅左門と隅田順！　それは今や、純一の眼前に差し付けられた大きな問題である。

「それは二つの世界だ、二つの途だ、そして自分は？……」

純一は自分の性情の中に、隅田順に共通するものが、いかに多いかを見出す。

自分に興味のある事でなければ、どんないい報酬の仕事でもしたくはないと云ふ事、世間的生活のために、あらゆる卑屈に甘んじたくないと云ふ事、俗才を有せず、またそれを輕蔑してゐる事、さうした自己を毅然と保たうとする誇りに於て、彼は隅田の惱みに共感を感じる。そして、かう云ふ點で、純一もまた隅田と同じやうに、外部の生活で壓迫され、人には意氣地なしとも、無能力者とも考へられるだらう。

「だが、おれは果して隅田と同種類の人間であるか？　おれは、隅田のやうに、自分の自然の性情や傾向のままに生きようとする人間であらうか？」

純一はそれを肯ふ事は出來ない。否、自分は隅田とは相反する人間であると考へる。彼は生れたる理想家である。彼は隅田から言へば、矢張り憑かれた人であるに相違ない。彼は常に善と惡との問題に惱む。それは、その相反は、昨夜、彼が隅田と、スティルネルとニイチェとの比較について語つた時に、明瞭となつた事である。

「ニイチェは『超人』を說いた、スティルネルには『超人』の必要なんかないんだ。超人は、『人間らしい人間』『眞人』などと同樣、スティルネルにとつては無用な幻影だ。ウォオカアの言つたやうに、ニイチェがスティルネルと異つてゐるのは、宛かも綱渡りの輕業が代數の方程式と異つてゐるやうなものだ。ニイチェは暴君を熱愛するが、スティルネルの

目的は暴君を滅亡するのにある……」と隅田は言つた。

ニイチェの貴族主義に對しては、純一は反感と共感との相交錯した、奇異なる感情をもつてゐた。然し、善惡を常に問題にし、つひに一切價値の顚倒を企てる迄に至つたニイチェの性情は、彼には或る意味を有たないものではなかつた。その君主道德、それは彼の餘りに善良で餘りに溫和すぎる性情に對する反抗として生れたものではないか？　それは自己叛逆的な企てではないか？　そしてその超人の理想は、理想主義的精神の發現、彼にはなくてはならない『幻影』でなければならない。ニイチェも現前のあるがままの世界に滿足出來ない人であつた。究竟、彼の求めたものは神であつた！

「おれも神を求める人間だ。人格的の神は永遠の不在である。しかもおれは信仰なくしては生きられない人間だ。それ故、おれは藝術に於て、また、社會運動に於て宗教を求めたのだ。それ故、幻滅しなければならなかつたのだ。おれに取つては、藝術も社會運動も信仰でなければならない。そしておれの今の惱みは、その信仰が有てないからではないか。大菅は常に、自分は懷疑者の如く思索し、信者の如く行動すると言つてゐる。懷疑から行動は生れない。大菅にしても、前河にしても、みな理想家だ。いや、凡てのアナアキストは、皆熱烈な理想家ではないか？　だからこそ死身になつてぶッ突かつて行けるのだ。けれども、隅田によれば、さうした凡ての理想家は皆、單に憑かれた人に過ぎない」然し、さうした隅田の見方は、こんな懷疑と幻滅との間に於てさへも、純一には直ちに同意が出來ないのだ、こんなに希望に手ひどく欺かれてゐても。

彼が隅田順に於て最も重んじてもをり、また最も自分と共通して見出すのは、世間的名譽の拒否と輕蔑とである、「何かやれば出來ない事はないと思ふが、やつて見たところで、下らない氣がして仕樣がない。全體、えらくなるなんて事が何の意義があらう」と隅田は言つた。彼は世界に價値を認めない、從つて世界の與へる尊敬にも輕蔑にも價

値を認めない。

「だが、おれは野心家だ」と純一は考へる　「勿論、上京當時のやうに、單純な心持で、ただえらくなりたいと思ふのではないが、尠くとも、自分の價値を正當に承認させたいのだ。おれが自分に不滿なのは、常により多くを望むからだ。おれは常に最高位を望むのだ、そして現實に於ては、おれは最低位だ。しかもその大望に對しては、おれの力は何と云ふ無力であらう。第一、世間に立つて、かの西尾宏のやうに押し廻して行くには、俗才を缺いでゐる。厭やな卑屈な事をするには、おれには誇りがありすぎる。しかも此の誇りを傷つけないで、世に出るためには、それに必要な背景もなく、財力もない。勿論、おれはそんなものを欲しいとは思はぬ、また、さうした卑しい成功者たちを羨ましいとも思はぬ。だが、おれは生きてゐるのだ、そして自分の欲するがままに生きたいのだ、しかもそれが出來ない……そこで死の觀念がくる。あの不名譽な訪問――自分の誇りを最も傷けた――の際に、かの最本閃光が、『二重の叛逆』の主人公の凡ての苦悶は、滿たされない欲望から出てゐると評した時、おれは急所を突かれたと思つた。だが然し、おれにはもつと高い、淸純な氣持がある筈だ。現に今おれは、さうした野心がどんなに醜いか、さうした地上の名譽が、どんなに空虛で、どんなに賤しいものであるかを十分に知つてゐる。地上の名譽は一切虛榮に過ぎない、そして名聲は我々を世間の奴隷にする事であると自分も感じてゐる。それにも拘はらず、文壇を思ふ時、おれの心にはチクチク痛み出すものがある……その點では、隅田順よりも、おれは弱い。だが、おれのこの熱望が、どうしてさうした卑しい虛榮からばかり湧き上るのだと言へよう。その熱望はかう叫ぶのだ、たとひその爲めに身は滅ぶとも、本當に生きて見たいのだ！　生命がけの仕事がして見たいのだと！……

おれはつひに隅田ではない。

ただ、二人の間に共通してゐるものは、その誇りの高いことと、その性格的の弱さとだけだ。しかも、隅田が自分

の能力の限界を見極めて、自分のありの儘の姿で生きて行かうとしてゐるのに反して、おれは最後の限界をも――自分の頭の上さへも飛び越したいのだ。隅田はスティルネルによつて安心立命してゐる、彼には不安はない筈である。だが、おれはその弱さに、そのあるが儘の自分に滿足出來ない。おれは何によつて安心立命しよう、何にもない、何にもない！」

もう明方に近い。何處かで鷄がなく。一番鷄だ。かうした都會の中ででも、黎明を告げる鷄の聲をきく事が出來ると云ふ事が、純一には何だか不思議な事のやうに、いかにも偶然な事のやうに思はれる。そしてそれが一層の心の寂寥を誘ふ。かうした大都會も、まるで草分けの野ででもあるやうに、ただ我れ一人生き、我れ一人考へ、他にいかなる存在もないやうな氣がする。それが彼には限りなく寂しい。

「失敗者の哲學では、生の否定が最高の道德である。生きてゐるものは皆罪人である。沒我、献身、自己犧牲、それらの自己否定が德であるのは、それらがいづれも或る意味での自死だからである。それは自滅のシステムである。結局、それは天國の報償を目あてに生きて行かうとする弱者の道德である。

だが、生命に對するこの熱愛はどうする？　生命を愛する事は不德であるか、果して罪惡であるか？　人間が死ぬ事が出來ないならば、生きなければならぬのだ。生きなければならぬとすれば、勇敢に生を肯定すべきである。人間が一度びその生命を肯定するならば、生きんとする意志を肯定するならば、生きんが爲めに、あらゆる手段を執るべきである。一たん生を決した以上、おづおづと泥坊のやうに生きるべきではない。否、大手を振つて生きるべきだ。自分のために、自分の生命と欲望とのためには、いかなる約束も因襲も打破して可なり。そして、どうしてそれが惡であり得よう。惡ならばそれを一擲せよ、一擲する事が出來ないものは善だ。いや、抑も、善惡とは何物だ？　道德とは何だ？　それは蒼白なプレジュディスに過ぎないのではないか。ノンセンスに過ぎないではないか。現實世界で相

對立するものは、善と惡ではない、善と力とだ。そして、力は卽ち善だ。

あはれ我れはあやまりたり、
「力卽善」の眞理を
知るために、いかに多くの
犧牲をば拂ひ來れる。
力あるところには善、
なに人もただこれを知れ。
力なきところには常に
愚かなる淚ただよふ。

力が始めて生だ。力あるものは生きよ。然し、力のないものは？　力のないものは、力を得なければならない。
「自分の弱さを、そんな理窟なんかでジャスティファイする事をしないで、勇敢に戰つて貰ひたい」かう言つた前河の忠言は、隅田にと云ふよりも、むしろおれ自身に言はれたものではないか。おれはこれ迄餘りに弱かつた、餘りに女性的だつた、餘りに自己否定者だつた。それは何と云ふ影の薄い生き方だつたらう！　ああ、それは何と云ふ死人の生活（デッド・ライフ）！

だが、今こそおれは強くならなければならぬ。自我だ、生きる事だ、その生の杯を一杯に滿たす事だ、一杯に滿たして、これを一息に飲み乾す事だ！

おれが弱い人間であるならば、おれは極力その弱さに反抗しなければならぬ。反抗がおれの生涯のシステムだ！　たとひそれが自己に對する反抗であらうとも！　自己叛逆――それが叛逆者龍田純一の最大の叛逆である！

若しおれが隅田であるとすれば、おれはその自分に反抗する。おれは大菅のやうに生きたいのだ！　おれは隅田として生れたかも知れない、然し、大菅として死なければならない！」

彼は開いたままの備忘錄の上に額を押當てて、兩手で頭をかかへた。彼は暫くは、何にも心にない、忘我の狀態にあつた、それからだんだん意識が返つてくると思ふと、急に、彼は眞の深いソリテュウドに陷つて行つた。それはまるで名狀の出來ない、空虛の感であつた。恐らくは極度の過勞から來てゐた、恐ろしいロストの意識だ。こんな恐ろしい寂寞感は、彼はこれ程までに感じた事はなかつた。彼は眞に自分がたつた一人である事を感じた。彼はあらゆる意味に於て、自分がそれなくしては生きてゐられない唯一のものを、今なほ把握せずにゐると云ふ悔恨に心をしめつけられた。

「おれは駄目だ、やつぱり駄目だ。あの時なぜ、おれはあんな煮え切らない態度を執つたのだ？　彼女はあんなにも自分を信頼してゐるではないか、あんなにも自分に愛を示してゐたではないか……どうして、彼女をその良人の手に歸したのだらう？　それがおれのデリカシイであつたのだが……やつぱり、いつものやうに、worldly wisdom の缺乏だ……そして、酒を飲んで、失敗者の哲學を考へる……何と云ふ醜惡だらう！」

彼は頭が昏んでくるやうだつた。

「だが、今度こそ、どんな事があらうとも、おれは斂子を得なければならない。今、おれの信仰はただ彼女だけだ。彼女だけが、今ではおれの救ひだ。この世で、本當に自分を愛し、自分を理解し、自分を救つてくれるものは、ただ彼女だけだ。

ああ、自分にとつて、斂子はいかに貴い存在であつたらう！　彼女の美點は、とりわけそのすぐれた理解力にある。昔からさうであつたが、最近逢つた彼女には、今東京で新しい女とか何とか騷がれてゐる女よりも、ずつと立ちまさ

つたインテレクトとインテリジェンスとが見えてゐた。それに、あのパッショネエトな性格！　彼女は確かに女性の有つあらゆるいいものを有つてゐる、それはおれのイリュウジョンではない筈だ。あんなに長い間、いつも胸の底に彼女に對する思慕が離れる事がなく、苦しめば苦しむ程、心が荒めば荒む程、おれは彼女の事を思ひ出した。それもあゝした彼女だからだ。

　幼い時からの二人の關係を考へて見ると、實に不思議な感動に包まれる。あの秋の嵐のあとの濱灘で、おれが辨當を落した時に——昔からおれはオークワアドな人間だつた——あんなにやさしく、おれに辨當を分けてくれたあの女の兒、おれの家が破産をして、一家が零落の底へ沈んだ時に、あんなにやさしい同情を寄せて慰めてくれたあの少女、親切な姉のやうであつた彼女、彼女は今、おれを、痛み傷ついたこの自分を、どうして見放してしまふ事があらう。あの日、あの晩、彼女はあんなにも素直に、殆んど、ずつと年の若い少女のやうに、自分について來たではないか。城山のわかれを話した時、彼女は泣かんばかりであつたではないか。詩人にとつて、愛のない生活がどんなに堪へられないものかを言つた時、彼女は一言も言はないで、苦しさうに喘いでゐた！　わたしのやうなものは、何處まで本當の事が分るか、それは心が及ばなくて悲しいんですがと言つた彼女の言葉！　だが彼女はよく分つてくれる、自分のあらゆる惱みを分つてくれる。彼女はどんなにいい自分の共感者となつてくれるだらう。彼女を思ふとき、おれは本當に linked by fate といふ氣がする……

　ああ、今、彼女が自分のそばにゐたならば……

　だが、彼女が今のやうに、友一郎の許にゐたのでは、彼女の折角のその魂の光りも輝く事はなくて、反つていやな曇りをかけられて、つひには空しく滅びてしまふばかりだ。それは堪へ難い事だ、忍び難い損失だ。

　自分は彼女を救ひ出さなければならない。彼女を得るためには、自分はあらゆる事をする。いかなる堅壘をも突破

する。彼女を救ふ事が、同時に自分を救ふ事だ。

藝術も、社會主義運動も、自分に取つてはみんな嘘だ、みんな間違ひだ、みんな廻り道だ。ただ、彼女ばかりが、自分の生涯の目的だ、自分の生れて來た意義だ、自分の理想だ、自分の宿命だ！

その唯一のものに比べれば、全世界のあらゆる名譽も、いかに色褪めて見えるであらう！　名譽名聲――そんなものは皆空しい夢に過ぎない！」

いつからともなく、机の上の電燈の光が四方へ逃げるので、徹夜に痛めた眼のねばねばするのを、一晩中夜氣に濕つてゐた窓の障子に持つて行くと、その鼠色の全面が、次第次第に白く剝げて、やうやく粗い紙質のきめを通して、押し入つてくる光線が、もう輝やかになつてゐた。朝のあかりは、机の上の堆い反古に影をつくり、『自死自葬論』の草稿と、開かれてゐる備忘錄との上に反射する。

昨夜の間にのんだ煙草の吸殼が、青い灰皿からはみ出すやうになつてゐる。その灰皿に書かれた草花の模樣が、はつきりと浮いてゐる。

「お早うございます」と、いつも朝になると聞える、窓の下の平屋の老人の聲がする。彼はぢやぶぢやぶと水の音をさせながら、顏を洗つてゐるのだ。

「今日はいいお天氣でございますね、もう梅雨に入つてゐるのに、よくかうお天氣が續きますね」と、その老人と毎朝のやうに挨拶する隣家のおかみさんが、米を磨ぐ音をさせながら言つた。

「梅雨になつたら、我々のやうな商賣は上つたりですから、今のうちに働いて置かなくツちやなりません」

「大きに左樣ですね、毎日よくお廻んなさると感心してるんですよ、昨日は御商賣はどつさりあつたんでせう」

「なアに、ありやしませんよ、十圓札が出て來たなんて云ふのは、あるにはあるだらうが、私のやうな貧乏神のとツ

ついてゐる人間の籠からは、五厘錢だつて出ませんや。だが、ああして方々歩くのは、お天道様に對してのおつとめだと思つとりますよ」かう言つてその老人は、何かブツブツ唱へながら、拍手を打つた。

純一はさうした朝の挨拶を聞きながら、頭をかかへて、暫くぢつとしてゐたが、やがて思ひ付いたやうに立上つて窓の障子をあけて見ると、左の方の高い二階屋の新しい硝子戸に、朝日が鮮かに映つてゐる。その硝子戸の中で、いつもミシンをガチヤガチヤと鳴らして、傍き目も振らず仕事をしてゐる三十臺の男が、不思議と隅田順によく似てゐるので、彼はいつもその方を注意して見るのであるが、今朝はとりわけその男の働き振りが目に付くので、純一は何がなしに微笑した。

こんなに明るい、いい朝であつたが、純一は顳顬がズキズキして、身體は困憊し、心は陰鬱に沈んでゐたの　、蒲團を敷いて、その中に入ると、その儘ぐつすりと深い眠に落ちた。

彼が目を醒ましたのは、もう晝過ぎであつた。晝間に熟睡して眼醒めた者の、自分一人が遠く後の方に取殘されてしまつたやうな、あの妙に氣迷ひのする氣分で、頭を擧げて見ると、氣分はもうすつかり恢復してゐた。彼は何氣なく入口の方に目をやると、障子の間から差入れたと見えて、二三通の手紙が散らばつてゐた。彼は床の中から手を伸ばして、それを取つて見ると、その一つは何でもないものであつたが、あとの二つは彼をはつきりした心持にさせた。彼は床の上にすわつて、その二つの手紙の表皮を暫く見てゐた。一つは彼女から來たもので、あとの一つは、叔父の浩藏からの手紙であつた。

十四

純一は叔父からの手紙が、何か仔細のありさうに思はれはしたが、先づ敏子からの手紙を――二枚の切手を貼つた

厚い手紙の方を、焦つたやうな手付きで、先きに開封した。中實は薄い書簡紙で包まれてゐるので、それを開くと、もう一度同じやうに包まれてゐた。かうした女らしい心遣ひが、純一の心に、溫かい息吹のやうに感じられた。それを開かうとして、ふと氣が付いて見ると、その書簡紙の片隅に、ペンの纖い走り書きで、一首の歌が記されてゐた。

人の世のおきてのままに別るとも命のかぎり相ひ合はむ君

純一は縫ひ着けられたやうな心持で、この思ひがけない歌を——宛かも今の自分自身の心の聲をその儘うたつたかと思はれる歌を、ぢつと見つめて、心からの感動の烈しくなつて行くのを自ら抑へたが、どうしてそれが抑へられよう。

「命のかぎり相ひ合はむ……」と彼はもう一度その歌をよんで見て、彼は微笑んだ。そしてかうした歌を何よりも先きに自分に見せようとした敏子の用意、敏子のデリケエトな心のあらはし方が、やさしく感じられて、その手紙が、今の自分の遣り場のないつきつめた氣分に、血路を開いてくれるものである、自分の生涯にとつて決定的なものであると云ふ豫想をもつて、彼は靜かに讀みはじめた。

「大變にすまないことになりました。どんなにお詫び申上げていいかわかりません。私はあんなかたいお約束をしておきましたのに、お訪ねしなかつたばかりでなく、手紙も差上げず、お別れも申上げず、急に東京を去りました。あの翌日の夜行に乘つて、途中京都に一泊、一昨日無事歸宅いたしました。身體も心も疲れ切つてをりますけれど、氣が張つてをりますから、何ともありません。御安心下さいまし。

龍田樣　あなたは定めしお待ち下すつたことでせう、待つて待つて、たうとう來ないのだとお思ひになつた時のお心持はどんなでしたらう。かたい約束をして置いても、女の弱さよ、賴みにならぬ女ごころよと、どんなにかうとま

しくお思ひになつたことでせう。考へて見ると、これ迄私は何度となくあなたを失望させ、幾度となくあなたを苦しい立場に置きました。さぞ心なき女とおさげすみでございませうが、どうぞお許し下さい。

なぜ私があの日お訪ねしなかつたか？　どうして急に歸國したか？　あなたは何よりもそれをお訊ねになるでせう。あなたとしては、本當に思ひもかけないことでせうから。こんなことを辯解がましく申上げたとて、それがあなたにとつて、また私にとつて、何の慰めになりませう。けれど兎に角、私としては、冷靜に前後の次第をお知らせしなくてはならないと思ひます。取り急いでをりますので、走り書きですけれど、心に浮ぶまゝに書き記します。

今度の事は、なみなみならぬ事情でございました。私としては、考へに考へぬいて、歸國を決心したのでございました。なぜかと申しますと、この前あんな不用意な家出をして、そのため一層ぬきさしならぬ狀態になつた經驗がありますから、あの儘東京にゐたい、東京で友一郎から離婚を取りたい、もつと氣短かに、あの晚身を隱してしまひたいなどと、心は千々に思ひ亂れましたけれども、それも許されない事情もあり、反つていい結果にはならないと思はれましたので、たうとう自分を抑へて、一番正しい、一番確實な道を選ばうと云ふ氣になつて、歸國をしたのでございました。

私は苦しい心持で歸國いたしました。今になつて見れば、なぜあの儘東京にとどまらなかつたか、なぜあの夜身を隱してしまはなかつたかと、かなはぬことを、今更ながら殘り惜しく思つて煩悶いたしてをります。けれども、どんなに離婚が困難でありませうとも、今度といふ今度は、立派に離婚して見せます。意地ですもの、私はきつと自由になつて見せます。私の結婚は間違つてをりました。今その間違つた結婚を一日も早くやめて、何の束縛もない、自由な身となつて、私は今度こそ、あやまりのない、眞の生活をするために、東京へまゐります。あなたのおゐでになる都へまゐります。

東京は何と云ふ自由な、明るい都でありましたらう。見るから潑剌としてゐる東京は、私に非常にいい印象を殘しました。東京でこそ、生き甲斐のある生活が出來ると、私ははつきり思ひました。この美しい大都會で、私といふものに、絕對の信頼をもつて下さるあなたを恃みにして、新しい生活を築いて行くと云ふ希望は、私の胸を轟かせます。一日も早くさう云ふ自分になつて見たいのです。東京ではみんなが本當に生きてゐるのですもの。たとひどんなに貧しくつても、貧しいなりに張合ひのある生活をしてゐるやうに見えますわ。色彩に充ちた店や、豐富な美しい町の魅力、何から何まで、東京は私の氣に入りました。

ああ、あなたと連れ立つて、あの銀座の十字街に出て行つた時、手を組み合つた美しい西洋の人達が、誇らはしげに步いて行きましたね。私はたつた一日、たつた一時間でも、ああいふ快活な生活がしたいと思ひました。

あなたは私を御覽になつた時、どうお思ひになりましたか。私が女中と一緖に部屋に入つて行つた時、あなたはどんな氣持がなすつたことでせうか。少女時代の敏子とは違つて、靑白く瘦せて、年よりもずつとふけてゐる私の面影は、あなたの思出を傷つけはしませんでしたか。それよりももつと私にとつて悲しいことは、あなたが友一郞の妻としての私をどんなに御覽になつたことかと、それを考へると、何とも言へない苦しい氣持です。私はあの折り友一郞の顏付で、何かお二人が言ひ合つてゐたのだと云ふことを氣付きました。友一郞はいつも自分の誇りが傷つけられると、何とも言へず醜い顏付をするのです、あの時の顏が丁度それでした。何を二人でお話しになつたのでせうか。いづれにしても、ふだんからあなたの名を私が一寸でも口にすると、不機嫌になるのでしたから、あなたに面とむかつては、どんなにいやな態度を取つたことでせう。それにしても、偶然だつたかは知れませんが、私のゐない時にあなたを連れて來て、友一郞に應待させるといふ遣り方には、宏さんの意地のわるさが見えるやうで、私は恐ろしいやうな氣がします。銀座から歸つて、女中から、宏さんと、それに同じ年配のお友達とが來てゐられると聞いた時、私は

直ぐにそれがあなただと感じました。何といふ嬉しい事であらうと思ふ次ぎの瞬間には、困つた事になつたと私は氣遣はしさに胸がドキドキして、早く行つてあなたにお目にかからう、何といふ嬉しいことかと思ひながらも、私は下でおかみさんとつまらない世間話をして、友一郎から迎へにくる迄、部屋へは行きませんでした。あの折り、私の變れてゐること、私の變つてゐることが、どんなに私を悲しませたでせう。あの十年の昔の敏子であつたならば、あんなにもあなたを遣り込めてゐたうきうきした娘でしたのに、今の私はあなたの前でおづおづします。なぜ私はこの羞恥を抱くことになつたのでございませう。

友一郎が出て行つた時には、心の底からホッとしました。急に世界が明るくなつたやうな氣がして、三人で出かけると云ふ時、お化粧をした時には、せい一杯若づくりをして、宏さんにからかはれたのも反つて嬉しい位でありました。宏さんがあの脊の小さな方と一緒に、活動とかを見に行くと言つて、歩いて行つてしまつた後で、たつた二人きりになつて、あなたとあの華美な都の眞中で相ひ見合つてをりました時、もう私は誰れをも羨やみませんでした。私の幸福なあの夜よ。あの下町の仄暗の中を、大川の方へと歩いて行つて、昔の罪を詫びたり、今の悩みを打明けたりあなたの深い惱みをうかがつたりした時は、これが私の長年の望みであつたのだ、これが私のあこがれであつたのだと、私は心で叫びました。あの大川端は丁度ふるさとの海邊のやうに、私たちを清い幼な友達にかへらせたではありませんか。

私が將來のことをお話しして、あなたのお力を借りたいと、勝手なお願ひをした時にも、あなたは少しもおおこりにはならないで、おやさしい目で私を御覽になつて、承知しました、お互ひに救ひ合つて行きませう、新しい生活に入りませうと言つて下さいました。あの時の私のうれしさはお察し下さいまし。あの時あなたが、愛さへあれば兎に角生きては行くでせうとお言ひになつたお言葉は、そのまま私の場合にあてはまります。愛なしに女は生きて行け

るものではありません。それだけ愛のない私の結婚は非常に間違ひであつたのです。すると私がをりません、留守中出てはいかんぞと嚴しいことを言つて出たのに、私がゐなかつたこと、とりわけあなたたちと同伴して出て行つたといふことが、非常にあの人の誇りを傷つけたのです。（知ればおこるといふ事は十分に私は知つてゐたのですけれども、友一郎がそんなに早く歸つて來ようとは思ひませんでした）自分はどんな不品行をしても、それが特典だと云つたやうな勝手なことを考へる人間ほど、かういふ誇りは病的なほど強いやうです。その上、私の人格なんか一つも認めない壓制家なのです。友一郎はたいして惡い人間ではありません、けれども嫉妬心は非常に强いのです。友一郎は私が昔の親しい男の友達を思ひ出すことが、堪らなく厭やだと言ふのです。あの人は自分が私としつくり心が合はないと云ふことを知つてゐるものですから、一層私の仲よしの友達を憎むのです。かういふわけで、私が宏さんと話が合つて笑つたりしてゐると、宏さんをさへ憎むのです。

あの樂しい電車の中の語らひに、心の朗らかになつた私が、玄關で私を見た女中が、まあお珍らしい、あかい顔なすつてらつしやいますと言つた位ゐ血色のいい顔をして、自分の部屋に入ると、そこには友一郎が腕組みをして、獣のやうにすわつてゐまして、じろりと私を睨み付けました。私はしまつたと思ひましたが、何もとりたてて疚しいことはないのですから、一言二言、町へ出て行つた詫びを申しますと、

「嘘をつけ」と彼は叩きつけるやうに呶鳴りました。こんなに言はれると、私は意地にも辯解してはやらないと思つて、默つて部屋の隅で着替へをしてゐますと、

「オイ、みんな話せ、何處へ行つた？　何をして來た？　よくしやアしやアとしてゐられるナ。僕は譯の分らん事は言んはぞ、過ちは過ちだと言つてあやまれ。人の女房たるものは貞節が一番大切だといふことは、この俺が言ふ迄も

ないことだ。そしておまへのやつた今晩の仕草は、その貞節道にかなつてゐるのか？　こんなに遲くまで、くだらぬ男とほつき廻つてゐることは、これは許せることかどうか考へてみるがいい。俺は譯の分らぬ人間ではないつもりだ、然し、汚ない關係さへなければそれでいいとは言はん……」

かう言はれた時、私はカッとしました。思はず振向いて、

「汚ない關係とは何です？」と言ふと――こんなに話すと長い時間のやうですが、とつさの間のことで、全く私の言葉と同時に、友一郎の大きい平手がピッシャリ私の横頬をはたきました。身をかはしたつもりだつたのですが、一體に、私はあの晩あんなに疲勞してゐたものですから、運惡くその硬い掌を受けたものですから、よろよろとして、そこに倒れてしまひました。どういふものか、私も反抗的になつて、續け樣に打ちおろすその強い打擲の手を避けなかつたのです。一言だつて、呻きの聲は洩らさなかつたのです。愛のない人間同士の間では、すべてがこんなあさましいものなのです。

「何といふ强情な女だ！」と友一郎は怒りが戸惑ひしたやうな樣子で、私から離れましたが、いつ迄も私がそこに突ツ俯してゐると私に病氣があるだけに心配になつたと見え、

「いつ迄さうしてぶつ倒れてゐるつもりなのだ、いい加減にしたらよからう。おまへのやうな我儘な女は一寸ない、おまへのやうな女を辛抱して連れ添つてゐる男は、どんなに辛いか、考へて見るがいい」と呟きました。この時こそと思つたので、

「どうぞ離婚をして下さい、何もそんなに我儘な困つた女を、あなたが御辛抱なさる必要はありますまい。私はあなたも厭やになつたし、あなたの家も厭やになりました、その上、あなたのお父さんも厭やです。あなたにはお梅さんがあるし、お梅さんにあんな立派な子供もあるんですから、あの方をこそ奥さんになさいまし。私は丁度子供もない

んですから、離婚なさるのに何の面倒もございますまい。あなたのお家のやうなお金持には、私のやうな勝手な女は財産を散らすばかりだと、あなたのお父さんも恐れてゐらつしやるんですから、丁度いいぢやありませんか。本當に私が自由に出來る時が來たら、あなたのお家のお金なんか、片つぱしから困つてるものに遣つちまひますよ。どうせ私はあなたのお家の氣風には合はない女です。どうぞ今のうちに出して下さいまし。今日私が龍田さんとお話したのは、離婚してからのことを御相談してゐたのです」

非常に冷靜な心持になつて、私がこれだけの事を一氣に言つてしまふと、友一郎はそれには何とも答へないで、長い間腕組みをして考へてゐましたが、

「何處迄女つてものは增長するかわからない……おまへの言ふことはよくわかつたよ、厭やになつたなら厭やになつたでよし、俺はおまへの考へるほど未練な男ぢやないつもりだ、暇をくれと言ふのに遣らんとは言はん。だが、こんな東京の宿屋なんかで、此の問題の解決は着かない。十日二十日の旅先きで、かういふ大問題を二人差向ひで爭ふのは、どちらにしたところで、あまり賞めた話ぢやない。これは國へ歸つて、お互ひにもつととつくり考へて見た方がいいんだ。俺の方にもわるい事もあるだらうし、おまへの方にも我儘がある。どんなに考へ直してみても、別れなければならないなら、仲人の手を經て、物事を綺麗にして別れようぢやないか。立つ鳥は跡を濁さずといふことがある。おまへも餘りはしたない出方はしたくないだらう、俺も女中を出すやうな工合におまへを出す譯には行かない。もう東京に用事もないことだし、こんなにしてまごまごしてゐると、どうせろくな事はないんだから、明日の晩匆々國へ歸ることにしよう、おまへもそれには不服はあるまい……」

こんな風に友一郎から折れて出られると、いつもの遣口だとは思ひながらも、それが條理の立つた言ひ分であるだけに、私としても、それでもとはあらがひかねる自分の弱點も十分知つてをりますので、たうとう友一郎の言ふなり

に、歸國することになりました。東京を發つ際、葉書でなりとも、その事をお知らせしようと思つたのですが、葉書なんかでかいつまんで書けるやうな單純な成行きではなかつたし、いたづらにあなたをお苦しめするのも心なきわざと思ひましたし、また、いづれは近々にお目にかかれるやうにしようと思ひましたので、わざとお便りを申上げませんでした。

汽車がだんだんに東京を遠ざかつた時は、私は非常な悶へと悲しみとに囚はれました。あなたから遠ざかつて以來、あなたといふ人が私の心から離れません。あの美しい夜の電車が、今に幾度も私たち二人を乘せる機會を與へるのだと思ひながらも、この暫くの別離が悲しくてなりません。城山でお別れして以來、長い間あなたの面影は、いつも私の胸に疊まれてゐて、何かにつけてなつかしく慕はしくお偲びしてはゐたのですが、あの夜、あんなにお目にかかつて、いろんなお話をして以來といふものは、これまでの慕はしさが、急に遣る瀨のないやうなものに變つてまゐりました。今ではこんな心持がどんなに變つて行くか、自分でもはかり知れない感じがします。いろいろと申上げたいことは數限りないのでございますが、今はただこれのみにとどめておきます。

私の身體は案外大丈夫です。東京へ行つて、何か職業を求めて、暇さへあれば圖書館などにも通つて、もつともつと勉强して、婦人記者にでもなるかして、——私のやうな才能のないものが、こんなことを申すと恥かしいのですが萬一修養次第で、小說でも書けるやうになりましたなら、どんなにうれしいでせう——あゝもしよう、かうもしようと考へると、ただもう心がわくわくとしてなりません。私が東京へ行けば、あなたも屹度幸福ですよ。いろんなことを私がしてあげます。かう申しても、事實は反對で、かへつてあなたの重荷になるのかも知れません。けれども、どうぞ、よろしくよろしくお願ひいたします。」

綾子の手紙はこれで終つてゐたが、最後のもう一枚の紙に、追伸として、御返事を待つてゐる事、西尾宛にしても差支ない事を述べて、歸つて來て以來、友一郎が新聞社の用件で一日中外出してゐる事や、自分が廣い部屋でたつた一人、旅嚢をかたづけてゐると、綾子が傍で人形をかかへて遊んでゐる事まで書き添へてあつた。

純一は一氣に讀み終へて、暫く机に肱を突いて、目を一點に張つた儘、種々の想念に囚はれた。彼女の來なかつた譯は、これではつきり分つたが、その歸國の決心をしたにつけても、またその折り自分の方に何の通知もくれなかつた心持につけても、そこに彼女の心が長い間の「友一郎の妻」としての生活の隋性から、容易く良人の言ひなりになつて行く可能性と、愈々の間際に狐疑逡巡するやうな、女らしい弱さとが見えて、純一には齒がゆくもあり、少しく不快でもあつた。東京をいかにも明るい美しい都會のやうに思つてあこがれてゐるのは、都會の華かな表面ばかりを見て行つた彼女としては、無理のない事かも知れないし、婦人記者になりたいとか、小說家になりたいとか云つたやうな夢想を抱くのも、今の場合、勝氣な彼女としては、考へずにはゐられない事かも知れないとは思ひながらも、彼女もやつぱり女らしい無知と虛榮心とに陷つてゐると惧れまずにはゐられなかつた。純一としては、彼女が東京へ來るならば、彼女とともに、この呪はしい、虛僞と罪惡とに充ち滿ちた都會の中ででも、二人の愛を力にして、これ迄よりも、もつと辛い事も、もつとみじめな事も――否、これ迄の自分としては忍び難い妥協でも屈從でも敢て辭さないで、戰つて行くつもりなのだ。彼女の弱い身體も、彼女の傷ついた心も、全部自分が一身に引受けて、一歩また一歩、苦難と嶮岨との路を辿つて、彼女の幸福をつくり出さうとする努力は、非常に生き甲斐のある事に感ぜられるのだ。「命のかぎり相ひ合はむ君」と書いてある歌ほどに、彼女の情熱は、手紙の文句にははつきり示されてはゐないけれども――そしてそこに彼女のデリケエトな遠慮が見出される――その心全體が、自分の方にのみ向つて來つつあると云ふ事は、實にはつきりと見えてゐるのである。

純一は自分の足もとに確かな地盤を踏み占めたと云ふ意識、今こそ自分は一個の男子であると云ふ軒昂の意氣を感じながら、それにつけても、自分がもつと強くなり、もつと力のある人間にならなければならないと云ふ覺悟を新たにしながら、ひたすらに敏子の事を思ひながら、殆んど不用意に、叔父の手紙を開封して、讀みはじめた。はじめ十行位は、叔父一流の肉太な律義な書體で、久濶の辭を述べたり、時候の挨拶を述べたりしてあるので、何氣なく目を走らせてゐると、さきにとりあへず電報を以て一報した如く、次郎事かりそめの病よりして死去致し、家內一同遺憾此事に思ひ、哀悼の涙に暮れてゐる事、南家にとつても非常な損失である事、南の叔母も落膽のあまりただ茫然と氣拔けの體である事、殊に自分は最も愛し、且つ最もたのもしい相談相手としてゐた次郎を失つて、その心の打擊も人一倍である事、彼の死のために自分の各種の目論見もすつかり齟齬してしまつた事など、種々な事を、老人らしい誇張した候文で書き連ねた末に、

「就ては小生の考へとしては、貴殿も上京既に十年に垂んとするにも拘はらず、今以て生計の途立たず、空しく東都に窮迫するは賞めた事に非ず、龍田家の相續人として、亡父淸太郎殿の失敗のあとを受けて、一旦傾いたる家運を挽回し、龍田家を再興すべき責任者たる貴殿としては、不心得千萬の事と愚考するによつて、此際至急歸國あつて、一先づ南家に入つて、その家業の助力なされ度く、然る時には、今や當主を失つて家業に支障を來しつつある同家としては、親戚間に適當の養子の候補者も無之事なれば、此際貴殿を迎ふる事は、同家として甚だ好都合の事なれば、南の叔母も定めし安堵致す可く、貴殿の母堂も一層の安心かと被存候。また貴殿としても、かねて南家に對して多大の損害をかけたる貴殿亡父淸太郎殿の罪滅ぼしともなるべく、これに上越す孝行は他にある間敷愚考仕候。生來氣位高き貴殿の事なれば、或ひは南家の家業を陋となし、拒絕の意志もあらんかなれど、それは大なる心得違ひ也。薄志弱行、徒らに富者の子弟を羨望するも、水中の月を捉へんとするに似たる愚擧にして、到底成功覺束なき事は、火を見

るよりも明かなれば、此際意を決して、萬事を放擲して、至急歸國あるが貴殿として最善の道なりと愚考致候。萬事愚生の方寸の中にあるによつて、貴殿に對して決して惡しきやう取計ふ間敷、此際小生の意見を用ゐて歸國被成候はば、泉下の亡父、亡祖母に對しても、第一の孝養となるべく、且夕不自由勝に暮さるる貴殿母堂に對しても、これに勝る奉仕ある間敷、必ずともに歸國なさるべく、鶴首相待申候。歸國するに就て必要の金子は、御申越次第、電報爲替にて匆々御送り申べく候間、兎に角一旦は御歸國然るべく、御決心の程願上候。」と云ふ風に、歸國の勸告を懇々と書き記してあつた。

純一は澁い顏をしながら、巻紙を巻き返した。この手紙全體に漲つてゐる叔父の我意——何事につけても、自己中心の考から行動し、相手の個性なんか、てんで認めようともしない——を苦汁の如く味はされて、彼は思はず顔をしかめずにはゐられなかつたのだ。彼は親父が迷惑をかけたから、その子たる自分は、これを償ふために、犠牲になつて南家のために働かなければならぬと云ふやうな叔父の口吻が、腹立たしくもあり、馬鹿々々しくもあつた。が、それよりも、とりわけ「薄志弱行、徒らに富者の子弟を羨望するも、水中の月を捉へんとするに似たる愚擧」と云ふ文句が、それが自分に對する痛烈な批評として、かなり自分の急所を衝いてゐるだけに、彼は一層にがにがしく、またいまいましかつた。彼はさすがの叔父も今度は大分弱つて、狼狽してゐるなと思つて、氣の毒な氣がしないでもなかつたが、反感の方が先きに立つて、

「なに、歸るものか、下らない!」と呟いて、苦笑ひをした。

叔父の浩藏は、質屋である南の家へその次男の次郎を養子にやつて、これ迄南の家の實權を自分の手中に収めて、金なども流用させ、萬事自分の都合のいゝやうに切り廻してゐたものである。從つて、次郎の死とともに、若し萬一他家から養子を迎へる事でもあれば、どうしてもこれ迄通りのやうな自由が利かないばかりでなく、あらゆる意味で、

不利な地位に陥るのであるから、彼としては、此際、自分の身うちから、自分の意の儘になる人間を選んで、南の家に据ゑておく必要を感じたのである。そしてそれに對して、今の場合、適當な候補者としては、いろいろな點から勘考して、曾つて彼に背いて上京した甥の純一の外に、一寸見當らなかつたのである。ところで、浩藏をして、かやうに南家に殊に重きをおくに至らしめた原因は、別にあつた。それはこの近年の彼の事業の破綻である。彼の嫡男市郎が、東京から歸つて來て、研究所仕込みの自慢の釀造法で、しこたま造り込んだ酒が、驚くべき成績を擧げて、見事に腐敗してしまつた爲め、非常な損害を蒙つてからと云ふもの、何かにつけて仕事が食ひ違ひ出して、思ひがけないところで餘計な腹を痛めるので、その痛めた腹を癒やすために、以前は純一の父の淸太郎の派手な遣り口を極力非難してゐた彼であるにも拘はらず、だんだんその遣り口が派手になつて、大儲けしよう大儲けしようと、あせつてゐると云ふ狀態にあつたからである。かうした事情を、姉の梅子や母の手紙などで、いくらか聞き知つてゐるだけに、純一は叔父がさうした自分の危機に、このおれを利用しようとしてゐるのだとはつきり認めて、その利己的な思惑を一層いまいましく思つた。

「おれは叔父なんかに利用されて、その都合のいいから、からくりなんかになつて堪るものか。僕の東京での生活はこれからなのだ、敏子も東京に來るんだし、何もかもが、これからだ。これから本當の生活が始まるんだ。こんな場合に、歸國なんか出來るものではない、馬鹿々々しい……」と彼は呟いた。

十五

西尾敏子樣と宛名を書いた手紙を、純一がポストに入れてから、四五日の間暗い曇つた空から、氣味のわるい雨が、降つてはまた止み、降つてはまた止みする鬱陶しい日が續いた。純一のところへは、誰れも訪ねては來なかつた、彼

も誰れをも訪ねなかつた。梅雨に入ると、いつでも神經衰弱がつのつて、頭がわるくなる純一は、鼠色の壓しかぶさるやうな雨空を、堪らない氣持で、幾度びも幾度びも、窓の障子をあけては、ぢつと見上げるのであつた。例の二階屋の隅田順に似た男の、時々踏むミシンの急な音が、雨の間からしきりと聞える度に、一層佗しい氣持がした。彼はかうした陰鬱な、長い雨期を、「敏子なしに」生きて行かなければならぬ自分が堪らなかつた。彼女と再會しなかつた前までは、彼のにがにがしさも、彼の生の嫌厭も、なほ一種の絶望の慰めを以て、彼の孤獨を支へてゐた。今や、彼はその孤獨が堪へられなかつた。雨は彼をますます孤獨寂寥をもつて包むやうに見えた。兎に角、仕事に沒頭して凡てを忘れようと彼は思つた。そして長いこと打つちやつて置いた飜譯の仕事に、彼は一生懸命にしがみついてゐた。彼は時々飜譯の手をやめては、二本も三本も立て續けに煙草を燻らした。いつの間にか彼の煙草の嗜好は病的な程になつてゐた。煙草をのみすぎると、普通頭が痛くなるのに、彼はそれとは反對に、煙草をのまなければ、頭が働かなかつた、とりわけこんな暗い不快な雨の日には。

「煙草といふものは」と純一は考へた、「傳説のかたるやうに、惡魔の發見したものかも知れない。確かに煙草の性質の中には、何處か惡魔的なものがある。サア・ウォオタア・ロオレエが亞米利加から持つて歸つてから、瞬く間に世界中に傳播したと云ふのも、此の惡魔的な性質のためであつたらう。一半は煙となり、一半は灰となる、そして惡魔はその煙の中にゐる、そして肺臟の中に毒をもたらしては、天に昇つてしまふのだ。だが、その毒が人間にとつては、反つて幸福なのだ。身を害ふもの程、人間にとつては價値がある。戀といふものも、同じ性質のものかも知れない。一度これを知つてからは、一刻もそれなしにはすまされないのだから」と、こんな煙のやうなとりとめのない事を考へてゐると、「さうさ、戀だつて煙草と同じやうなものだよ」と西尾宏の口吻で喋るやうな氣がする。

「おれはキナ臭い安煙草なんかを、平氣で喫んでゐる男の氣が知れない、煙草は贅澤品だ、贅澤品である以上、出來

るだけ上等の、香氣のいいやつを喫まなきやならん」いつか西尾宏がかう言つた事がある。彼には或ひはさうだらう。だが。おれにとつては煙草は贅澤品でなくつて、必要品だ。どんな安煙草でも喫まないよりかましだ。そして、これはひとりおればかりでなく、多くの勞働者や貧民にとつても、さうであるに違ひない。彼等は葉卷がふかせればそれに越した事はないが、その金がないから、ゴオルデン・バットでも滿足してゐるのだ。立ん坊などは、通行人の投げすてた卷煙草をさへ拾つて喫ますではないか。だが、すべての金持といふものは、それをさへ貧乏人には僭上の沙汰だと考へる……」

彼は金持の心理といふものを考へるとともに、それに關聯して、彼の想起したのは、かの不幸な江添忠治に關する一つのエピソオドである。

江添忠治がかの富豪の石山愛作の家に居候をして、その著述の筆記をしてゐた時分の事である。石山の書齋の卓上には、いつも一本何十錢とかする金口の埃及煙草が、銀の箱に一杯詰められて置いてあつた。それを石山がとつつまつて、口述の長く途切れてゐる手持無沙汰に、ぼんやり待つてゐた江添が、ちよいと一本つまんで、火をつけて、うまさうにすぱすぱと喫してゐると、石山はそれをじろりと見て、不愉快な顏をして、
「江添君、君にはその煙草の味がわかるかね、僕は君には『朝日』の方がずつと向いてゐると思ふんだがね……」かう言つて、石山は急に立上つて、戸棚から朝日の箱を取出して來て、江添の前に置いて、
「君にこれをあげよう、これをのみたまへ」と言つたので、江添も變な氣がして默つてゐると、石山はニヤリとして、
「誤解しちや困るよ、僕は何もこの金口を惜しむわけぢやないんだよ。だがね、君の舌の感覺にとつては、この金口だつて朝日だつて同じだとすれば、君がこの金口をふかすのは、結局無意味な話だから、安い方の朝日をのんだ方がいいと云ふ事になるぢやないか」と言つたさうで、それにはさすがの江添も癪にさはつたと見えて、金持つてものはひ

どいもんですよと前置きをして、その當時、友人の間にその話をし廻つたものである。純一は時々葉卷なんかを貰ふ毎に、この石山愛作の言葉を思ひ出して、江添のその時の顏の表情などを想像して、微笑せずにゐられない。

純一は日を追うて仕事に身が入つて行つた。それはメエテルリンクの『モンナ・ヷンナ』の飜譯で、昨年の暮あたりから取りかかつて、その後長い間うつちやつてゐたものである。この五六日ずつと續けてやつてゐるうちに、餘程はかどつて、もう最後の幕に取りかかつてゐた。この作は時代を十五世紀、舞臺をフィレンツェの大軍に包圍されてゐるピザの街に取つた三幕の悲劇で、第一幕では、孤城落日の狀態にあるピザ軍の隊長ギドオ・コロンナの館で、一同評定してゐるところへ、フィレンツェ軍に人質にやつてゐたギドオの父マルコオが歸つて來て、敵將プリンチヷルレが、本國の意に反して、ピザのために、彈丸と糧食とを供給するについては、その條件として、ギドオの妻ヷンナを單獨で、外套を着ただけの姿で、自分の方によこして貰ひたいと申込んだ事を傳へる。モンナ・ヷンナはピザの街を救ふために、つひに意を決して敵將の許に行く。二幕目では、本國政府から謀反の疑ひを受け、身には微傷を負うたプリンチヷルレが、危險と劍戟とのただ中で、同じく肩先きを彈丸にかすめられて、手に血のついたヷンナの姿を見て、顫へる聲で「ヂョオヷンナ」を呼ぶ。それから熱烈な愛の告白が始まる。彼はヷンナとは幼馴染で、ヷンナが八歲、自分が十二のその昔、ヷンナの家の美しい庭園の、薔薇や柘榴や月桂樹の間で、二人は一緒に遊んだ間柄で、彼女があやまつて、その大切な金の指環を泉水の中に落した時、生命がけで泉水に飛込んで、大理石の盤底からそれを拾ひ上げて、彼女の指に嵌めてやつて、感謝の接吻を身に受けた、その當年の少年ジャネルロが自分であると告げる。貧しい錺職の息子である彼は、それから長い長い年月を、辛い苦しい漂浪と、艱難辛苦のあげく、劍を執つて勇士の名を擧げ、今や、フィレンツェの傭兵の大將として、その多年眷戀してゐた、そしてその生涯の望みであつたヷンナとまのあたり相見たのである。このプリンチヷルレの熱烈な告白と、身を棄ててかかつたその犧牲とは、貞操の鎧に身をかためたヷ

ソナの心に、深い感動を齎らし、二人は互ひの魂と魂との聲を聽く。そしてつひに、その陣營の中で身の危くなつたプリンチヷルレは、ピザの方へ、ヷンナに連れて行つて貰ふ。三幕目では、妻の勝利を見たギドオの喜び、その汚辱を想像するギドオの疑ひ、そのどうしても自分の潔白を信じようとしないギドオの猜疑、嫉妬、憤怒の闇の悲しみと、飽くまで自分を庇ふプリンチヷルレの獻身とによつて、ここにヷンナの心には轉成が行はれる。彼女は僞つてその貞操を傷つけられたと訴へて、今からその復讐をしたいから、自分も一緒に牢獄に入れてくれるやうにとたのんで、プリンチヷルレの投げ込まれた牢獄の鍵を求めて、（ああ、みんな惡い夢であつた、けれど、これから美しい夢が始まります）と叫ぶのに終る。靈と愛とのこの目覺め、靈魂の世界と世俗の世界とのこの戰ひは、今のこの場合純一に取つては、いかに意味の深い暗示と思はれたらう。彼はさながらに自分と敏子との上のことのやうに考へられるのである。

「さうだ、この通りだ、敏子は自分と一緒に牢獄へ入つてくるに違ひない、そして、そこで美しい夢ははじまるであらう……」

　非常な熱心をもつて、その譯稿を終へた時に、純一はその戲曲を宛かも自分が書き終へでもしたやうな氣持がした。いや、これよりも一層美しい戲曲、これよりも一層深い悲劇を、自分達こそ身をもつて書かねばならないのだと、彼は感じたのである。

　その翌日は、空には雲があつたけれども、その間から、初夏の日ざしが強くさして、此間中からの心の濕氣をも乾かさうとするやうな、氣持のいい晴れた日となつた。一日でも雨が降ると、忽ち深い泥濘になる東京の街衢は、一寸でも日がさすと、乾いて行く事も早かつた。今日あたり敏子の手紙が來さうなものだと、彼は朝から心待ちに待つてゐたが、午後になつて、久し振りに散歩かたがた『モンナ・ヷンナ』の原稿をもつて、書店へ出かけて見ようかと思ひ付いて、机の上などを片付けてゐると、宿の女中が、少しあけた障子の間から、その赭ら顏を出して、

「お客樣ですよ、御夫婦らしいですわ」と知らせた。彼女の眼は明らかにその強い好奇心を洩らしてゐた。

やがて、來客は純一の部屋に入つて來た。

「あ、大菅君」と、純一はこの場合思ひがけないので、少し面喰つた氣持で、

「どうぞ……」と言つた。

「お邪魔ぢやないかね」と言つて、入つて來た大菅の後には、頭の髮を眞中から分けて、頸で束ねた小柄の女がにこにこしてゐた。それは江東奈枝子であつた。

「つい此の前を通つたもんですから……」と彼女は矢張りにこにこして、そこら中見廻しながら、大菅の傍にすわつた。

「靜かでいいわね、この部屋は……」と奈枝子はいそいそとしてゐる樣子で、誰れに言ふともなく呟いて、純一を一寸見てから、大菅の方を甘えるやうにさし覗いた。

「どうしてゐます、何をやつてゐます?」と大菅は靜かに訊いた。

「メエテルリンクの『モンナ・ヷンナ』の飜譯をしあげたところです」と純一は答へた。

「『モンナ・ヷンナ』を?」と言つて、大菅は意味あり氣に微笑した。

大菅のその樣子には、新聞や人の噂で傳はつてゐるやうな、どんなにか昂奮し、熱してゐるであらうかと想像し得られるやうなものは一つもなかつた。然し、その中には、何となく憂鬱と言へば言はれるやうなものがあつた。けれど、その一味の憂鬱さへも、實は大菅左門の持味と言つていい。彼はどんなに快活に談笑してゐる時でも、その何處かに、革命家らしい或る沈痛な、落着きを有つてゐた。そしてそれが彼の人物に重みを加へてゐた。純一は危急と紛料の場合に、愈々冷靜になり沈着になる大菅の性格を知つてゐたから、それは不思議とは思はなかつたが、ただ、か

ういふ揚合、彼が此頃すつかり疎遠になつてゐる自分のところへ、奈枝子と連れ立つて、序とは言ひながら、かうして立ち寄つてくれたのは、そこに何かの意味があるやうな氣がしてならなかつた。尠くとも、それは純一にとつて、意味がないことはない。彼は自分の心の隅に或る喜んでゐるものを感じた。

「いつこちらへ……」と純一が訊いた。

「今朝早く出て來たのです、汽車でくると二三時間とかからないんです、買ひたい本もあつたし、原稿も賣りつけたかつたし、どうも金つてものはいくらあつても足りないものでね……」と言つて、大菅は奈枝子の方を見て笑つた。

そこには彼の愛する女の濃い眉をした丸顔もにこにこしてゐた。奈枝子はすつかり若く見えた。隅田順の家で、暗い皮肉な顔をして、子供をかかへてゐた時とは、まるで別人のやうに見えた。新調らしい派手なセルの着物に、赤の入つたメリンスの帶をしめて、その服裝からして、まるで甦つたやうに、いかにもいきいきとして見えた。隅田順の家で、あのやうに老けて、理窟つぽく、トゲトゲして見えたその女が、大菅左門の傍で、こんなにもいきいきと、あどけなく、女らしい女に見えるのに、純一は注意を向けずにはゐられなかつた。

「あなたのとこにも、その本があつたわね」と、純一の藏書を物珍らしさうに見てゐた奈枝子が、そこに出てゐた『義人田中正造翁』といふ本を見て言つた。

「あ、その本ですか」と純一は言つた。

「あれは面白かつたでせう、あの中にある翁の終焉の時の言葉は隨分考へさせられるわ。あの中にSといふ谷中村の若者の事が出てゐるでせう、あの男だけは少しは物のわかる男だつてことですが、谷中村には、本當に翁を理解する者がなかつたつてことは本當ですわ……」

「谷中村は今はどんなになつてゐるんでせう？　隨分ひどくなつてゐるでせうね」と純一が言つた。

「エエ」と奈枝子がその返事を引き取つた、「私は此間大菅に連れられて、谷中村へ、そのSといふ青年を訪ねて行つたんですよ。枯木が一本しよんぼりと立つてゐる長い土手を通つて、こんな新綠の時分だのに、荒涼としてゐる沼地を、何處迄も何處迄も歩いて行くと、まはりには長い墓石が弔ふ人もなくころがつてゐて、何とも言へず悲しげに沈まり返つてゐました」と奈枝子は興に乘つたやうに話しつゞけた、「道が無くなると、泥地の泥水の中を跣足でわたつて、やうやうに水の無いところまでくると、一段高くなつた木立の中に、人つ氣のない家がありました。それがSの家でしたが、Sはゐなくつて、Sの兄が私達にいろんな話をしましたが、つまりその男の言ふのには、ここを立退いてはどうする事も出來ない、收用金はくれるんですが、大變尠いので、それだけの金で手に入る土地位では、とても食べて行けないので、餘儀なくかうしてゐるのですと言つてましたわ。その樣子には、そんなにもわざわざ遠くから訪ねて行つた私達に、別に感謝する風もなく、冷淡かと思はれるやうな樣子でしたよ。話してゐると、五十位の、やつぼり村に居殘つてゐる男が來ましたが、その男の顏には、意地も張りもないやうな樣子がありました。その歸りに、また沼の水をわたつた時には、隨分冷たくつて閉口しましたわ。歸りに大菅がさう言ふんですよ、どうだい、少しは重荷が下りたやうな氣がするか、もつとあそこでいろんな事を訊くのかと思つたら、何にも訊かなかつたねと言つた事です。本當にあそこの荒涼とした、すつかりの生氣と物音とを奪はれた、たつに木が一本立つてゐるばかりの、何里四方の泥地を考へ出すと、言ふに言へない氣がしますわ」と彼女は大袈裟に顏をしかめた。

奈枝子の話してゐる間、大菅はぢつと何にも言はないで聞いてゐるのだ。普通の男なら、自分が連れて行つたのだから、何とか言ひたがるものだのに、彼は何にも言はないで、奈枝子の話を靜かに聞きながら、微笑してゐる。

此の谷中村の滅亡は、明治二十年代に、田中正造が議會に始めて訴へてより、前後三十年に亙つて、明治年間の大きな社會問題であつたかの足尾鑛毒問題の、避くべからざる歸結であつた。當局は渡良瀨河畔の被害地たる谷中村其

他二三村を犧牲として、これをつぶして一大瀦水池とする事によつて、この問題を解決する爲めに、その居住民を全部、僅かな收用金によつて立退かせるやうにしむけたが、いづれも祖先墳墓の地なので、初めはなかなか立退かず、毒氣と湛水との中に、あらゆる苦痛と戰ひながら、寸地を耕して、辛うじて踏みこたへてゐたが、その大部分は、年年堪へ難くなつて離散し、この問題のために最後まで戰つた田中正造翁の死後は、僅かに四五軒が頑强に居殘つてゐるばかりなのである。この問題は初めこそ社會の注目を惹き、殊に社會主義者間に熱心な支持者を得てゐたが、今では奈何ともし難い事實として、人々の注目からは殆んど忘れられてゐるのである。ところが、最近に谷中村から出て來たS青年によつて、その窮狀が訴へられたその知人の夫人から、その悲慘な事實を傳へ聞いた奈枝子は、それ迄そんな事を全然知らなかつただけに、一層昂奮し、殆んどヒステリカルに激昂もしたのである。そして、さうした昂奮から、彼女は『ブリュウ・ストッキング』に、激烈な感想を書き出した。

（こんな事は、廣い世の中のほんの一部分の出來事に過ぎないで、もつともつとひどい不公平を受けてゐる人も、もつと悲慘な事もあるかも知れないのだ。今の私達は大抵の場合、自分達の努力に幾十倍幾百倍とも知れない、世間に漲つた不當の力に壓迫されて、どうかすれば、底の底まで突き落されてしまふのだ。そんな不公平な目に遭はない爲めに、出來るだけ戰はねばならない、そして同時に、もつと自分よりも可哀相な人々の爲めに戰はねばならない。）かういふ意味の文句もその中にあつた。けれども彼女のかうした一本氣な氣持に對して、彼女の良人の隅田順は、（そんな考へは幼稚なセンティメンタリズムだ）とこれを一笑に附したので、奈枝子の不滿と激昂とは一通りではなかつた。

然るに、彼女のさうした感想に、非常な注意を向けた人があつた。それは大菅左門である。彼は彼女に於いて、熱烈な自分の魂を見出したと思つたのである。その頃から彼は彼女に接近し、彼女の友人となつて、今やつひに奈枝子の所謂「私達の仕事のため」、「深い深い戀愛以上の意味ある握手」によつて結合すると共に、二人を結び着ける機緣と

なり、また彼女の最も關心事となつてゐる谷中村へ、彼女を連れて行つたのである。
「けれど、あの人達はどうしてあんなに冷淡なんでせうね、まるで反感でも有つてゐるやうだわ」と奈枝子が言つた。
「さうだね、別に反感を有つてゐると云ふ譯でもなからう。殊更らしい感謝や、女々しい感情を見せないだけ、そこにしつかりした諦めと決心とが見えてゐるぢやないか。なかなかああは行かないものだ。それに、どんな場合でもさうだが、我々はたとひ自分達を理解されなくたつて、虐げられてゐるものの爲めに働かなきやならないのだ」と大菅はしつかりした調子で言つた。その大菅の一語々々は、奈枝子にはいかにも素直な同感をもつて、受け容れられるやうに見えた。
やがて、奈枝子は急に變つた快活な調子になつて、純一に向つて、
「あ、龍田さん。いつかあなたが白山の家へ連れて來た、あの薄汚ないやうな男の人はどうしました？　あたしに何か演說をさせるんだとか言つてましたつけね」と言つて、舟井國之助の事を訊いた、「いつか植物園のところで逢つた時、何だか人の顏をじろじろ見て、隨分厭やな氣持でしたわ。私なんか、あんな男と一言だつて話ししたくないのに、隅田はいい氣になつて、いろんな下らない事を話ししちや、後で面白い男だつて言つてました。何處が面白いんでせう、私には分らないわ。」
こんな言ひ方をすると、奈枝子は意地の惡さうな目付になつた。
「あア、舟井ですか、此間來ました。あなた達の事が初めて夕刊に出た時、それを懷中してやつて來て、面白い事が始まつた、見て見るがいいと言つて、何か喋つて歸りました」
「馬鹿な男ね！」と奈枝子は言つて、大菅にながし目をくれて、何だか幸福さうに笑つた。その樣子を見ると、純一は隅田順を強く思ひ出さずにはゐられなかつた、あの暗い、にがにがしさうな、鏡の中の隅田の顏を！

「僕は此間、隅田君に逢ひました、前河君と一緒でした」

純一はかう言つて、二人を見ると、大菅は純一の思つた通り、何でもない知友の名前を聞いたのと同じやうに、顔色一つ動かさず、ただ微笑したのみであつたが、奈枝子はどぎまぎしたやうに、嶮しい眼付になつた。

「隅田君は相變らずスティルネルの話をしてましたが、前河君が盛んに遣つ付けるので閉口してましたよ」

「前河が遣つ付けるのは、寧ろ僕ぢやないですか、何でも大變僕に對して憤つてゐるさうだから」

「さうですッて」と奈枝子が口を歪めて言つた。「私をぶん毆るんですッて……ぶん毆りたければぶん毆るがいいわ、かまやしないわ。からなつてくれば、世間全體が敵になつたつてかまやしないわ、世間なんか恐れてゐて何が出來るもんですか！」

そんなに奈枝子が荒々しく野性的に言ふ時には、何だか若い牝馬でも見るやうであつた。

けれども、大菅はさうした奈枝子の樣子をいつくしむやうに見ながら、自分はさうした世間や同志の非難や反感などについては何も言はないで、純一の興味を有ちさうな話題を選んで話し出した。話題は朝川英夫の滿洲から最近によこした手紙の事や――朝川は、その通信によれば、オムスクの方から流浪して來た露西亜人の青年と同宿して、直ぐ懇意になつて、互ひに自國語を教へ合つたり、一緒にトランプをとつたりして、面白く、然し勤勉にやつてゐる――貝塚湖泉一派の行動の批評や、同志一般の此頃の意氣地ない事などを話したあとで、大菅は急に語調を變へて、

「然し、僕とても皆を非難出來ないかも知れない。どうせ今のやうな狀態では、ただ疳積玉が破裂するばかりだからね。だが、それにしても最初の意氣込みだけは失つて貰ひたくない。一體、誰れしもが初めて抱いて出發する感情を、よく幼稚なセンティメンタリズムだなどと言つて笑ふが、この生々しい實感のセンティメンタリズムが、本當の社會改革家の本質的精神なのだ。それを皆長い間の無爲と韜晦との惰性から、すつかり忘れたやうになつてゐる。それが何

よりもいけない。だが、それは他人に向つて責むべきではなく、僕自身が現にその硬直した心になつて、無感激に陥らうとしてゐるのです。僕としては、今その僕の幼稚なセンティメンタリズムを取返したい、憤るべきものには飽くまでも憤りたい、憐れむべきものには飽くまでも憐れみたい。どうせ手も足も出ないとしても、その儘死灰となつてはならないのだが…… それには先づ自分の生活から變へなくつちやならない……」と言つて、大菅は默つた。

「さうですわ、自分の生活から……」と奈枝子は言つた。

「さうですね」と純一も言つた。彼は大菅の言はうとしてゐる事を、よく理解したと思つた。

奈枝子と大菅との樣子には、その愛情の上に、互ひに少しも疑ひもないやうに見えた。勿論、奈枝子にしても、二人の子までなした、その上自分の精神の開發にあんなにも力のあつた隅田順を、さうさう容易に忘れ去られるものでもないであらうし、同時に、大菅がその妻の岡よね子に對する仕送りや心附けを見れば、時として嫉妬の心に驅られて、暗い氣持になる事もない事はあるまい。然し、そんな事は、早晩二人の間の問題ではなくなりつつあるやうに見えるのだ。かの神山と云ふ大菅の前の愛人に對しては、奈枝子は少しも顧慮してゐる風は見えず、大菅の愛を專らにしてゐると云ふ意識は、いかに彼女を晴れやかにしてゐるであらう。

純一は先刻隅田を思ひ出したと同じやうな氣持で、よね子夫人の心持と、大菅に金を貢いだり何かすると云ふ噂のある濃情な神山高子の煩惱とを考へて見ずにはゐられなかつた。けれども、それをどうしよう。愛は最も強い强者である、それは先づ愛するもの同士を犧牲にする、彼等のために、彼等の周圍を犧牲にする、そしてその犧牲の大きいほど愛は強い愛である。純一はさう考へながら、大菅の今言つた言葉を心に繰返した。

二人は一時間位ゐて、これから附近の某雜誌社へ行くと言つたので、純一も一緒に原稿をもつて、三人で揃つて下宿を出た。大菅達には尾行がついてゐるやうにも見えなかつた。或ひは途中でまいたのかも知れない。

通りまで出て、町角に行くと、そこから大菅達は右の方へ行つた。純一は左の方へ歩いて行つたが、暫くして振返つて見ると、プラタアヌの靑い葉が繁つてゐる下に、その男女が睦まじさうに、何か話しながら歩いてゐる姿が、心に沁みるやうに感じられた。四面楚歌と言つてもいい、此頃の社會と同志との手きびしい反感とを身に受けながら、たつた一人の女の殉情に身を委ね、心を勵ましてゐる、大菅左門その人の一種憂鬱な、謂はば勝利の悲哀が、純一の心に殘りとどまつた。

「ああ、戀は人を孤獨にする、廣い世界をたつた二人に縮めてしまふのだから……だが、それだけ一層それは強い、それは高い生なのだ……」と純一は呟いた。

彼はこの時はつきりと、大菅と奈枝子とに對する理解と同情とをその心に感じた。彼は大菅左門が奈枝子を深く愛してゐる事、彼女の幼稚ではあるが熱烈な、單純ではあるが一向きの心によつて、この沈滯期に處して銷磨せんとする自身の情熱に火を點じ、謂はば社會改革家としての自身に活を入れようとしてゐる事、一言にして言へば、奈枝子を自分の救ひに看なしてゐるのだと云ふ事を、實にはつきりと理解した。彼は大菅があんなにも多大の犧牲を拂つても敢て悔いない心事を了解したと思つたのだ。奈枝子自身は、別に深い思想の持主ではない。けれども、女には、とりわけ或る種の女には、この不思議な、男子を鼓舞する靈妙な力がある。古來、すべての革命に、紅一點とも云ふべき女性を見出すのは、かういふ意味合ひもあらう。男子は石炭の如く燃える、然し、女性は石油の如く燃えあがる。そしてその速かな焔と熱とは、男子の可熱性のためには、いかに貴重なものであらう！

こんな事を考へてゐるうちに、彼の意識の對象となつてゐるものは、大菅と奈枝子とでなくして、彼自身と敏子との事になつてゐた。彼は火のやうに、その愛する敏子の事を思つて、彼女の離婚するまでの經過、上京するまでの方法について、此間それとなく訊いてやつたいろんな事を考へた。彼から言へば、敏子の手紙にあつたやうな、正式の

離婚などは信ぜられなかつた。また信ぜられたにしても、とてもそれ迄ぢつと待てない氣持であつた。彼は彼女に、逃げ出すより外に何の道があるのですかと言つてやつた。彼女が逃げ出して來た爲めに起る結果が——いろんな制裁がたとひ彼女を牢獄に繫いだとしても、それこそ彼女の望むところである。社會的制裁も、法律の制裁も、彼女を除いては、凡ての損失も、彼に何であらう。一日も早く、一刻も早く、——彼は彼女に強い言葉で、さう言つてやつたのである。

十六

また二日ほど雨が降り續いた。今日こそ必ず手紙が來る筈だと思つて、朝から純一は待つてゐた。彼は敏子が、自分の言つてやつたやうにするであらうと云ふ事を、信ぜずにはゐられなかつた。自分の言つた事に應じない彼女とは思はれなかつた。あらゆる繫累と障害とを物ともせず、古い衣裳をぬぎ捨てて、もとの單獨な彼女になつて、自分の腕に身をゆだね、自分の胸に頭を押當てる、愛する彼女を見出さなくてはならないのであつた。

彼はこの二日ほどひねくり廻して、昨夜やつと完成した『自死自葬論』を、もう一度入念に讀み返してから、それを封筒に收めて、細谷氏宛に發送するために、雨の晴れ間に散歩がてら街(まち)に出て、途中のポストにそれを入れた。

「あの自死自葬論者はどうしたらう、病氣はどんなになつたらう……」

渡邊虎造の事を考へると、純一はあの一種風變りな彼の人物が、直ぐその眼に浮ぶ。彼は實際その言葉通り、自死自葬するかも知れない。そして、自分が今書いて送り出した自死自葬論を讀んで、彼が一層その自死の決心をかためたとしたならば、さう云ふ自死の直接の責任は誰れにあるか？　此の事を考へると、彼はその理由を發見し得ないにも拘はらず、妙に陰氣な氣分になり、非常に痛ましい氣持になる。けれども、人間はさうさう容易に自殺の出來るも

のではない。人間一人死ぬ迄には、――それがどんな厭世家であつたにしても――實に多くの條件が要る、幾つもの事情の複合が要る、意志の力と、運命の助けとが要る。また彼がよし、その說を實行しても、それは彼の所信の斷行であるとすれば、それを誰れか咎め得よう。人間は彼の欲するが儘に生くべく、また彼の欲するが儘に死ぬべきである。それに對して餘計な干涉をするものは、個人の自由に對する不遜な侵害者でなければならない。純一はかう結論して、渡邊虎造の事から思考を轉じた。けれども、その時、彼は泥濘を避けようとして、どうしたはずみだつたか、片足ヒヨイと足駄から外して、足の裏を泥まみれにしてしまつた。何となく不吉な豫感に襲はれた時のやうに、この何でもない事のために、彼の心は妙にドキドキしだしたので、彼は袂から手巾を出して、足の裏を拭いて、その手巾を投げ捨てた。その儘散歩を切り上げて、急いで下宿へ歸つて來ると、宿の帳場机の上に、止宿人への幾通かの來翰があつたので、若しやと思つて、その中に自分宛ての封書を探すと、果して、その中には彼女からの手紙があつた。それは以前のほど厚くはなかつたけれど、かなり厚かつた。彼は氣息のせまるやうな氣持で、その手紙をもつて、部屋に歸つて、心持を落着けながら開封した。

「お手紙を拜見いたしました。いろんな意味で嬉しく拜見いたしました。あんな手紙を差上げてからと云ふものは、この御返事をいただくまで、いろいろ隨分苦しみました。お心はよくわかつてゐるのですけれども、自分でも譯のわからぬ氣短かな氣持になつて、せかせかとしてゐました。胸のところがただ苦しくて、何かに憑かれたやうに、心がワナワナ顫へるのでございます。けれど、お手紙を見てからは、少しは心が落着いてまゐりました。

　こんなに昂奮した譯は他にもあるのです。歸國以來、友一郎は妙に私を避けるやうにして、一度私が少し改まつた樣子になりました時などは、直ぐ新聞社の用事にかこつけて、座を外してしまひましたが、それからは家へもあまり

歸りません。夜分も梅屋の方に泊つて歸つて來ません。あの事を恐れてゐるのです。東京であんなに言つたことが、いつ私から持ち出されるかわからない、それを持ち出されたら、一層面倒だ、離婚なんか承知するかと言つたやうな樣子で、たまに書類を取りに家に歸つて來て、私と顏を合はす時でも、妙ににこにこして、どうだ、綾子を連れて芝居でも見に行つたらなんか言つて、見え透くやうな樣子を見せるんでございます。その拔目のない顏付を見ると、私は一層厭やになつて堪らないのです。

一昨日の朝でした。私が鏡に向いて髮をあげてゐると、外から俥で歸つて來た友一郎が、私の後に來て、その鏡臺の上にあるちッぽけな本は何だと言ふのです。私はあなたから頂いた詩集を、歸國以來ずつと手許はなさず讀んでゐるものですから、その時も鏡臺の上に置いてゐたんでございます。ちッぽけな本は何だと言ふ友一郎の聲付が、思はず私の癇にさはつてしまつて、こらへ切れなくつて、(私の大切な本ですわ)と言ひますと、(大切な本か、あの貧乏書生が持つて來たあの本だな、そんな本を讀んでゐると、只さへガムシヤラな氣持になつてゐるおまへが、一層ガムシヤラになるばつかりだ、こんな本はかうしてしまへ)と言ふなり、『裂けた靑絹』の詩集を鷲づかみにして、バリバリと引き裂いて、パラパラとそこらへ投げ出してしまひました。私の立腹を想像して御覽なさい。何も彼も考へる餘地がありませんでした。私が友一郎に飛び付いて行きますと、ドンと友一郎が私の肩を突き飛ばしました。私はそこに突ッ俯して、一瞬間苦しい息づかひをしてゐましたが、ふッと目に着いたのは、半分開いた鏡臺の抽斗の中の、紅絹でその刄先を卷いた剃刀でした。思はず手を伸ばしてそれを掴み出して、握りしめて起き上ると、眞向から私を見おろしてゐる友一郎が、(狂人め! 狂人め!)と呶鳴つて、私の持つてゐる剃刀をもぎ取りました。

今考へて見ると、何のためにその剃刀に私が手をつけたのかわかりません。人を殺さうとしたのか、自分を殺さうとしたのかわかりません。いや、その兩方の氣持であつたかも知れません。カッとした氣持の持つて行き場がそれよ

り外になかつたのです。本當に物凄いやうな氣持が、私の頭を貫いたのです。ああ、恐ろしい私よ。私は何をしでかすか知れない女です。こんなことをお話しするのは恥かしいのですが、然しあなたには、どんなことでもお話をして差支がないと思つてゐます。ああ、いつそあの時、あんな氣持で、私はあの刄物で自分の頸動脈をプツリと斬つてしまつた方が、どんなによかつたかも知れないと思ふのです。友一郎からは離婚は許されず、あなたへと言ふと、お手紙毎に私の心持は駈け寄つて行きます。あなたを見たい、あなたに逢つて話をしたい、かう思ふと、寢てゐる私の頰には、熱い熱い涙がとめどなく流れます。あの幸福な東京の一夜の邂逅と歡樂とが、どんなに私を燃え立たせてゐるか、どんなに私を思ひ焦れる心におとしいれてゐるか、それはこんな言葉なんかで申し盡されません。私の右の方の手は冈襲にいましめられ、左の方の手は自由の世界へと引つ張られます。ああ、私はどうしたらいいか。

あなたは逃げて來いとおつしやる、私はそれを知つてゐます、とてもとても、それより外に道のないことはわかります。今日……明日……明後日……いやいや、私には今何が出來るでせうか！

私は今、病床に横はつてゐるのです。一昨日友一郎にドンと突かれたあの肩の打擊がこたへたのです。(わるい事をした、おまへは病氣だつたのに、わるいところを打つた、許してくれ）と友一郎が昨夜も枕もとにすわつて、あやまつてゐましたツけが、あの友一郎の手の當つた肩や肋膜のところが痛いのです。その痛みが、何だか身體の組立を一つこはしたやうな氣がします、どうもただではないのです。今度こそ肺をやられてゐるやうな氣がします。死ぬかも知れないと思ひます、血をはくかも知れないと思ひます。

あなたのところへ逃げて行つたその日その時、私がどんなになるかも知れないと云ふことを覺悟して下さい。逃げて行くことは逃げて行きます。けれど、またもう一つ考へ直すと、あなたのところへ行つた匆々私が病んで、血をはいて死ぬなんて云ふことは、あなたに對して、どんなに考へても、あまりにすまないのです。こんなに考へるのは、

病氣からの神經過敏だとも思ひます。あなたはどんなにかじれつたくお思ひになるかも知れませんが、當分の間、小波村へ行つて靜養して、もつと健康を取り戻して、この秋のはじめあたりに、あなたを喜ばせるやうな健かな明るい顏をして、お目にかかりたいと思ひます。あなたに對して、とやかくと云ふ氣持からではありません。女の身になつて考へて見て下さい。こんな自分をあなたにお目にかけるのは、あまりにみじめで悲しいのです……」

「こんなに變つて來た狀態に對して、おまへのとるべき手段は何であるか？」

純一は手紙をぢつと見つめながら、頭腦一杯の燃える嵐のやうな混亂の中で、自分に問ひかけた。その時、彼は心內に、宛かも地を打つて響く音のやうに、

「歸國するのだ！」と云ふ確かな聲を聞いた。

發作的に剃刀をとつた、それで自分の頸動脈を斬つてしまつたらよかつたと云ふやうな彼女の手紙の文句は、彼の心に強いショックを與へたのだ。それは彼の耳元に亂打される鐘のやうであつた。何とも言へぬ悲痛な呼聲が、その事柄によつて傳へられるのだ。彼女が來ると言ふからこそ、都會に待つてゐる事も出來る。こんな狀態になつて、とても長い旅など出來さうもない、病氣になつて、こんなみじめな自分が悲しいと言つてゐる彼女のあはれな焦慮と苦悶とを考へては、會ひたい、會つて話をしたいと言つて泣いてゐる彼女に、一日も早く、會つてやらねばならないと、純一は思ふのである。

彼は仕事が——『モンナ・ヴンナ』の飜譯も、『自死自葬論』も——すつかり片付いて、今は丁度取りかかつてゐる仕事もないので、歸國には持つて來いであると思つた。歸國の旅費位は、直ぐにも出來る筈である。飜譯の方からもまだ入る筈だし、それに詩集からの稿料の殘りもまだある。下宿料などの借りをすつかり拂つても、まだ餘裕はある。

荷物と云つても、さう澤山はないし、藏書も重立つたものを二つ位の行李につめれば、あとは賣拂つていいのだ。敏子が來ると言つたから、この東京にとどまつて、今度こそ本當の戰ひをしようと思つてゐたのだ。今はその戰ひの場處が、故鄕であると云ふに過ぎない。何も彼も――文壇的野心も、その他の何物も、今は自分には一文の價値もないのだ。敏子が東京に住みたいと言ふなら、一緖になつて二人で來てもいいし、若しまた、敏子が東京に來ないと言ふなら、あの湖畔の町の山蔭にでも、海邊の町の砂地にでも、小さな家を見付け出して、そこでたつた二人の本當の生活をやらう。そしてその生活のためには、自分はどんなつまらない事をしてもかまはないのだ。

純一はこんなに考へてゐるうちに、叔父から言つて來た事を思ひ出した。質屋をしてゐる南の家へ手傳ひに行くために、必ず歸國するやうにといふ、まるで自分の息子にでも命ずるやうな、叔父の勝手な手紙を思ひ出した。また、その事については、あれから彼の母親からも、それとなく氣を引いて見るやうな手紙も來たのである。今自分が國へ歸つて行けば、テッキリこれはおれの手紙で歸つて來たんだぞと、大得意になつて、叔父の浩藏が歡迎するのは知れた事である。それを考へると、いまいましいやうでもあり、また、可笑しい氣もするのだが、かうなつては、そんな事なんかかまつてはゐられなかつた。

「むやみな事を言つたら、片つぱしからはねつけてしまへばいい。また、都合がよかつたら、叔父の方を反對に此方から利用も出來ようと云ふものだ。が、いづれにしても、そんな事は問題ではない」

彼は敏子に手紙を書いた。それには、手短かに、歸國する事と、どんな方法をもつてでも、お目にかかるやうにすると云ふ事をも書いた。

純一はもうぢつとしてはゐられなかつた。その日一日、夜遲くまでかかつて、彼は書物を行李につめたり、賣り拂ふものは賣り拂ふものとして整理したりしてゐるうちに、本箱の後から部厚なノオトが三册ほど出て來た。それには

『人生記錄』と書いて、なほそれに（ヒュウマン・ドキュウメント）と克明に傍註してあつた。これは江添忠治の祕藏のノオトで、彼が甲州から歸つて來て、まだひどい病氣にならない時分、ここで一週間ばかり同宿してゐた時、

「このノオトを君に御用立てませう、この中の事件を取扱つたら、いいものが出來ますよ。僕はまだ外にも澤山ありますから、これは一つ君に役立てて貰ひたいですナ……」とにこにこしながら言つたので、純一が僕は材料は要らないと言つても、

「いや、またこれの役に立つ事はあります、兎に角預つておいて下さい」と言つて、置いて行つたものであるが、いつかこんな處に落ちてゐたと見える。そのノオトの日附を見ると、いづれも殆んど十年程も前のものであつた。中の記錄は、面白いものもあるが、中には愚にもつかない事を、極めて綿密に、調査的に書き上げてあるのもある。この古いノオトを前にして、江添忠治の風貌を想起すると、純一の心には、この時曾つて思ひも寄らなかつた江添に對する親愛の情が湧き上つて來た。彼はあの大塚の町はづれの養老院の中で、生命のほどをいつとも知れず、生きてゐるのだ。彼は今どんな生活をしてゐるのであらう？　一度訪ねてやりたいと思ひながら、これまでまだその機會がなかつたのであるが、今國に歸ると云ふ場合、彼は誰れにも會ひたいとは思はなかつたが、あの善良で、克明で、しかも妥協と屈從とを潔しとしない性格をもつてゐる失敗者の江添忠治を訪ねてやつて、そしてこのノオトを返してやつて、これ迄西尾宏なぞからは、とりわけ無視され侮蔑されてゐたあの不幸な男と話し合つて、誰れにも知られず、東京を引き上げたいと彼は思つた。

その翌日、純一は林田先生の家へ暇乞ひに行つて、それから細谷氏の家へ廻つた。

「やア、昨日は大變面倒な原稿を立派に仕上げてお送り下すつて、感謝しました。なかなか面倒でしたでせう。ああいふ奇拔な論文は、當事者でさへも書けないのに、ましてそんな問題とはまるで沒交渉な他人が代つて書くといふの

は、これや餘程の才能です。實はあれを一讀して、一層君の文才を見出したのです。鬼氣人に迫ると云つたところもあり、何人にも首肯させずにはおかない論理の正鵠と、筆力の雄健とがありました。あれを讀んでゐると、何だか人間はみんな自死自葬した方がいいやうな氣がして來ますな……ところで、頗る殘念な事には、あの論文の依賴者は、數日前その鄕里で、急死しましたよ。まだ電報が入つたばかりで、詳しい事は分りませんが、ああいふ風な男はえて頓死するものですから……これで渡邊も海の上で自死自葬する必要もない事になつたのです。實に氣の毒ですが、然し當人としては、まああれだけ死といふものに對する安心立命は出來てゐたんですから、自死自葬出來なかつた事位はあきらめられたでせうよ。そんな譯で、折角書いた頂いたあの論文も、出版といふ事にはならないのです。折角力を入れて書いて頂いて、君には實にすまないのですが……」

細谷氏は氣の毒さうにかう言つた。

渡邊虎造の急死したといふこの訃報は、非常に純一を驚かした。彼は自分の苦心の草稿が渡邊虎造の目に入らないでしまつた事が何より殘念であつた。何かは知らず、心の重荷の除れたやうな氣がするとともに、拍子ぬけのしたやうな、がつかりした氣持であつた。

彼は『自死自葬論』の草稿を懷にして、細谷氏の家を辭した。

その歸りに、純一は電車を大塚行に乘り替へて、長い軌道をその終點近くまで行つて、そこの停留所で下りて、一二度附近で訊きながら、白堊の門柱の立つてゐる養老院の中へ入つて行つた。建物はずつと奧の方にあつた。砂利の敷かれた庭には、古びたやうな色をした檜葉がずつと植ゑられてあつた。左右ともに、板壁の平屋がうづくまるやうに續いて、屋根つきの廊下があちらこちらに見えた。受付に行つて見ると、そこの齒の拔けた口のやうな受付口の中にゐた、色の褪せたやうな着物を着て、木綿の袴を穿いた、無愛想な中年の男が、ちつとも表情の動かない顏を見せて、

「江添さんですか、あ、ゐられます。一寸待つて下さい、應接室はそこを上ると直ぐ左側です」と言つて、冷飯草履をバタリバタリとさせながら、何處か奥の方へ行つた。

入口を上つて左の方だと言つた應接室へ入ると、そこはまるで壁と床とが無表情に、あるところにあるだけだと云つたやうな、殺風景な狹い場所であつた。面會に來る人もろくろくないと見えて、ひどく疵のついた木の机が、眞中にポカンと据ゑられてゐて、その上に置かれてある面會人名簿を、何の氣なくパラパラと繰つて見ても、その日附は飛び飛びであつた。

極く最近の日附に來た時、純一はそこに書かれてゐる一つの名に目をみはつた。

「西尾宏……西尾宏……これはあの西尾宏だらうか？」と純一は思はず呟いた。彼は全然同じ名前の別人かと思つた。あの自分達の友人である西尾宏――あの行くところと云へば劇場か、カフエか、待合かと云つたやうな、江添なんかは貧民扱ひにして、全然無視してしまつてゐる男が、どうしてこんなところにその名を書きとめてゐるか？　これは容易に解き難い謎であつた。奇異な氣持になつて、純一が待つてゐると、鈍い草履の音がバタリバタリと近づいて來て、入口をあけて、先刻の受付の男が、少しも氣のない樣子で、

「江添さんの部屋へ案内しますから、一緒に來て下さい、立つて歩かれるんだと、ここへ來るんだが……」と終りは呟くやうに言つた。

その男の樣子には、何事に對しても感じを失つたやうな、ダルな、そして何か冷淡なところしか見えなかつたのだが、今かうして訪問者を連れて廊下を歩いて行くのを見ると、何だかにはかに人心地ついたやうな活氣と、何か威張つてゐるやうな得意らしさとが見えた。それが奇異な感じを純一に起させた。

屋根つきのわたりの廊下の床は、粗末な板を並べたやうなものなので、歩くとミシミシ音がした。構内はひつそり

としてゐて、屋根の影がのんびりと砂利の上に落ちて、いかにも靜かで、ここに何百人からの人間がゐるのだと思はせるやうな生氣は少しも見られなかつた。そんな墓場のやうな靜けさが、少しく純一には氣味が惡かつた。

丁度、小學校の敎室みたやうな打ち續いた部屋の入口が、大抵開かれてゐたので、見るともなく見ると、荒い棒縞のお揃ひの號衣――猫も杓子もと云つたやうな同一の服裝で、一室に二十人位收容されたゐて、年齡相應、衰弱加減相應、出來るだけの手內職をしてゐる模樣であつた。然し、ずつと步いて行くと、すつかり病臥して、ただ天井の節穴をぢつと見まもつてゐるやうな多數の老人があつた。

西尾宏がどんな氣持でここを步いたらうと思ふと、純一には興味があつた。それにしても、何のために彼がここへ來たのだらう、果して彼が來たのだとすると、それは單に江添を見舞ふと云ふやうな、あたりまへの理由からではないと言つても差支はないのだ。

「ここです」と受付の男は、その一つの部屋へ入つて行つた。それについて入ると、これ迄見たやうな病人ばつかりの部屋で、ここでも同じ棒縞の號衣なので、江添がどの男だか、純一には一寸わからなかつたが、みんな頭をねかしてゐる中に、窓に近いところの寢臺で、此方に向いて、にこにこしてゐる顏が、それが江添忠治であつたことを純一は見出した。受付の男は、椅子を持つて來て、

「面會は二十分位に願ひたいもんですナ、何しても弱つてゐられますから、疲れますからね」と言つて、またバタリバタリと行つてしまつた。

「よく訪ねて來てくれましたね」と嬉しさうに江添忠治は言つた。彼の頭髮は――彼は髮の濃い男であつた――もうすつかりバラバラになつてゐたが、その顏は以前ほど水腫を持つてはゐなかつた。それだけ一層衰弱が總體的にはつきり見えて、その皮膚などはすつかり黃蒼く濁つてゐた。

「突然で吃驚されたでせう、もつと早くお見舞に來たかつたんですが、いろいろ忙しくつて失禮しました」

「いや、なに、お見舞なんて無用です。この頃はお蔭で、さして苦しくはないんです。シャバであくせく苦しんでゐた時にくらべると、反つて幸福に思つてるんです。今の生活の方が、僕に取つては、或る意味ぢや充實してゐるんです。かうして寢てゐても、觀察すべき事は十分にあるですからナ。みんなどんな樣子です？　文壇では今何が問題になつてゐます？　誰れか新進作家が出た事でせうナ。西尾君の文壇的地位は大したものらしいですナ、此間西尾君が訪ねてくれましてね……」と江添は欣然として語つた。

「いや、驚きましたよ。あの男がこんなところへ訪ねて來てくれるなんて、全く思ひもかけませんですからナ。用向はつまり、私のノオトの材料を、自分が書きたいから、ゆづつてくれと云ふ事でした。何でも方方からやいやいと賴まれるので、今ぢや先生材料缺乏だつて言ふんです。無理もありませんよ。ジャアナリズムの跋扈してゐる文壇は、一寸名前が出ると、寄つて集つて乾し上げてしまふんですからナ。然し、私もあんなに苦心して集めた、あの溫泉地や十二階下の材料が、西尾君によつて、日の目を見るやうになると思ふと、愉快でなりません。あれで西尾君が素敵な傑作を書いてくれると思ふと、全く愉快ですよ。僕は材料なんか、ちつとも惜しまないです。ただそれによつて、一つでも、日本文壇に眞にいい作品が提供されれば、滿足して瞑しますよ。つまり、私は自分の一身よりも藝術そのものを愛するんです、私心なく藝術を愛するんです。どんなにみじめな境涯になつても、藝術の事を思ふと、私の心は慰められるのです。立派な作品さへ出れば、誰れが書いたにしても、僕は喜びます。僕も丈夫になれば、この養老院を材料にして、非常にいい物が書ける自信があるんですが……いや、それもどうでもいいのです、誰れかが書いてくれれば喜んで話しますよ、一つあなたにそれをお話ししませうかナ……」

純一は江添に對する心からの敬意と親愛の情とを、十分に表白の出來る言葉が、どんなにか此際欲しかつたであら

う。誰れからも――とりわけ西尾宏からは、あんなに無視され、侮蔑されてゐた彼が、こんな廢頽と困憊とに陷つてゐるこの男が、こんな高い心境に達してゐると云ふ事が、抑も何を意味するか？　そして、華かな出版祝賀會に極度の榮譽を恣まにした西尾宏が、この不幸な廢人を訪ねて來て、そんな不面目な事を賴んだといふ事が、抑も何を意味するか？

「江添君」と純一は言つた、「僕は今日暇乞ひに來たんです、急に國へ歸るんです。また出て來ようとは思ひますが、都合によつて、どうなるか分りません。それで整理をしてゐると、君のノオトが出て來たから、持つて來たのです」

「それはそれは……」と江添は言つたが、その平たくなつて見える彼の顏には、別に表情もはつきりしなかつた。

「さうですかナ、然し出來得る限り上京して、今度こそ文壇のいい潮時を見つけて乘出すがいいですよ。人間は一度いい潮時を逸すると、次ぎの潮時を待つ迄には、餘程の年月を要しますよ。僕も草石先生にあんなに認められた手紙を頂いたあの時に、ぐつと乘り出してしまへばよかつたです。然し、そんな事はどうでもいいです。あの手紙だけで僕はいいです。僕に取つては、あの手紙は非常な慰めです、實際あの時には嬉しかつたもんです、一つあの手紙をお目にかけませう……」

彼はかう言つて、寢臺の蒲團の一隅から、小さな風呂敷包を取り出した。

「あア、あの手紙なら、僕もいつか見せて貰つた事がある……」

かう言つたものの、江添が喜んで見せたさうにしてゐるのを見ると、彼を失望させる氣にはなれなかつたので、彼が風呂敷の中の重要書類の束から取出した古手紙を受取つて開いた。草石先生と云へば、その沒後、一枚の短册でさへ幾十圓といふ値段であるから、此の手紙なんかは、今手離せば、隨分の金になる事は言ふ迄もないのだ。然るに、あんな窮迫してゐた彼が、この手紙だけはこんなにも大切に祕藏してゐたのかと思ふと、純一は江添の心根があはれ

でもあり、また、その氣位の高さも偲ばれて、それが一層いたましかつた。
疲れはしないかと純一は心配したけれど、江添は何もかもみな話してしまひたいと云ふ風に見えた。二人が話してゐる間、室ぢゆうの寢臺の老人達は、時々咳をしたり、その痩せた手を動かしたりする位で、一隻語もないのである。それが丁度、白い腹を返して魚が並んでゐるやうな感じがして、純一は薄氣味わるいやうな感じと、遣り場のないやうな憂鬱とを感ぜずにはゐられない。どの人間にも、その靑春と幸福とはあつたに相違ない、しかも今彼等に殘されてゐるものは、ただ敗殘と老耄とあるのみである。江添忠治は、この少しの動きもない環境に於て、いかなる觀察をその腦裡に蓄積しつつあるであらうか？　彼にとつては、こんな人達の上にも、確かにその藝術的感興を喚び起すものの缺乏を感じさせないものがあるに相違ない。時たま一匹の蠅が飛び込んで來て、一つの寢臺から一つの寢臺へと、丁度墓から墓へ飛び廻るそれのやうに、飛んで行くそんな小さな事でも、今の彼にとつては、尠からぬ驚異と慰藉とを感ぜしめるであらう。
純一は先刻から、江添の黃色い顏――やや生え上つた額、丸い鼻、これ等の衰退した容貌の中から、彼の盛時の面影に髣髴としてゐる一人の紳士を想ひ出してゐた。それは曾つて西尾宏の出版祝賀會に出席して、溫雅な演說をした、かの文壇の大家であつた。この江添忠治も、富と敎養とのよろしきを得たならば、決してこんな風にみじめな事にはならなかつたであらう。こんな氣の毒な失敗者とはならなかつたであらう。然し、名利を超越したものにとつて、この世の成敗が抑も何であらう？　確かに、江添自身は少しも自分をみじめだと悲しんでゐる風は見えない。寧ろ彼は、かう云ふ容易に人の來る事の出來ないところに來て、生活のための厭やな勞苦から全然免れて、その日その日を、彼の所謂藝術家の心境に悠遊しつつある事を、反つて非常な幸福だと思つてゐるやうに見える。彼は一切の名利名聞を棄てて、安心立命を得てゐるやうに見える。

「だが、おれの前途には戰ひが待つてゐる！　激動が待つてゐる！　颱風の中から、愛の呼び聲が自分を呼ぶ！」

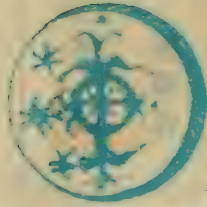
江添忠治に別れて、長い廊下のわたりに出ると、もうそこには日影はなく、雨のために白く曝れた板壁には、もう煙のやうな陰暗な黃昏の氣が漂つてゐた。

純一はそこに出て來た先刻の受付の男から、一册の雜誌を渡された。それはこの養老院の附屬してゐる養老院本院で發行してゐるもので、『九惠』といふ雜誌であつた。パラパラと開いて見ると、中には收容された人達の文藻——和歌や俳句が並んでゐた。寄附を募ると云ふ文句を見出した純一は、若干の金を受付の男に渡して、靜かに外に出た。

電車通りまで步いて行くと、もう電燈のともつてゐるこの場末の町の空一面は灰紅くなつて、夕日の光に、遠く連る電車通りの片側の店の屋根が、半分黃色く照らし出されてゐた。この黃昏の黃色い光は、非常にやはらかに、非常に物悲しく見えた。

——『相寄る魂』第三卷了——

生田春月全集

第四巻

昭和五年十二月五日印刷
昭和五年十二月十三日發行

編輯者 生田花世
同 生田博孝
發行者 佐藤義亮

東京市牛込區矢來町七十一番地
發行所 新潮社

電話牛込 八〇五番 八〇六番 八〇七番 八〇八番 八〇九番
振替東京一七四二

富士印刷株式會社
印刷者 佐々木俊一
製本者 植木瀧藏

全十巻目次